

井川定庵集解

法然上人傳全集

# 法然上人傳全集目次

前篇 本傳……………一

第一集 勅傳……………一

一、法然上人行狀繪圖(勅傳)……………三

二、黑谷上人繪詞拔書(近衛本)……………三九

三、法然上人繪詞卷第一……………三五

四、法然上人傳記(九卷傳)……………三九

第二集 傳法繪……………四〇

一、本朝祖師傳記繪詞(筑後本)……………四七

二、法然上人傳法繪流通 (國華本) .....	五〇五
三、法然上人傳法繪下 (高田本) .....	五二三
四、法然 聖人繪 (弘願本) .....	五七
五、法然上人傳繪詞 (琳阿本) .....	五三三
六、法然 上人傳 (増上寺本) .....	五五
七、拾遺古徳傳繪 .....	五九
八、法然 上人傳 (十卷傳) .....	六〇
九、知 恩 傳 .....	七五

### 第三集 雜 と 抄

一、源空聖人私日記 .....	七九
二、法然上人傳記 (醜翻本) .....	七三
三、黒谷源空上人傳 (十六門記) .....	七九
四、法然上人秘傳 .....	八八

五、正源明義抄	八五
六、法然上人祕傳遠流記	九〇
七、法然上人惠月影	九元
八、史料と抄錄	六六
玉葉(九六) 明月記(九七) 三長記(九八) 皇代略記(九九) 皇代曆	
(九五) 仁和寺御日次記(九五) 立川寺年代記(九六) 皇帝紀抄(九七) 百	
練抄(九八) 七箇條制誠連署(九九) 愚管抄(九九) 念佛無間地獄鈔	
(九五) 教行信證(九六) 摧邪輪(九七) 古今著聞集(九八) 沙石集(九九)	
平家物語(九六) 私聚百因緣集(九七) 元亨釋書(九八) 淨土法門源流章	
(九六) 獅子伏象論(九七) 淨土十勝節箋論(九八)	
九、明義進行集	九四
一〇、知恩講私記	一〇三
一一、圓光大師略傳	一〇元



## 序

「われたとひ死罪に行はるとも此のことは言はずばあるべからず」

と法然上人は罪に問はるゝ時、しづかに弟子に告げられた。思想の革命期に於て、苦難にあたつての熱血の言葉である。

今、迅速変転の現代、法然上人の伝記こそ心に深く読まらるべき時である。

「世間の譏嫌を憚りて経釈の素意をかくすべきや」

と、上人の述べられるところにも、左右顧阿し、動揺やむときなき現代人を誠める聖者の声がある。

法然上人の行実、そのまゝに迷へる人間弘済の教であると共に、今の世にあつては暗夜の草原をわたり行く、ともがらにとつて彼方の丘なる、ともし火の如く自らを導く光である。

法然上人の伝記は今も遺るもの多く、世に著聞するものさへ十数種に及ぶ。この点、我が国の諸宗祖のいづれにも勝ると言はれてゐる。

それのみならず、上人の専修念仏の唱道は、その時代の人々の心に強くも響き、当代人にして、その日その日に親しく目にも見、耳に聞くところを書きつけた日記、記録の類の少なからず存するのがある。このことまた、他の宗祖に類ひを見ないところであつた。

当代の和歌の上に第一人を以て自らも任じた藤原定家は、関白九条兼実が法然上人に帰依し遁世のことあるを聞

いて「此等の事、皆以て物念ぶつごんに似たり」とし、眼前の転変に驚きを寄せてゐる。権中納言三条長兼の日記には「源空は仏法の怨敵也」として南都の衆徒が騒擾を敢へてしたことが詳細にしろされてゐる。

まことに上人自らも語られしごとく、「信誘同縁」のさまに讃嘆と誹謗とが、その時代に交錯してゐたのであつた。さらにまた上人の門下、偉材が多く、教説の上にも諸流派を起し、いづれも正統として上人を鑽仰し、或は遅れて宗祖の行状を結集したことがあるために、遺芳の所伝にも自ら参差が来たことのあるのも、また法然上人の伝記の一特徴となすべきである。

これらのことは今日、上人の伝記がひろく集められ、その全容を仰ぎ遺徳を宣揚せんことを望む心が、しきりにあつたところである。

本書の編者、知恩院長老井川定巖僧正は、はやく京都帝国大学に入り史学を専攻し、後、京都の祖山にながく在りて「知恩院史」の編纂にあたり、これを完成し、宗祖大師の芳躅を景仰するところ深くあつた。このころよりして法然上人伝の研鑽に心を傾けられてゐた。これよりさき、近江と神戸とに於いて弘願本上人絵伝の発見があり、続いて諸絵伝本の考覈などに力を注ぎ、更に京都帝国大学在勤の間、同大学に寄託中の近衛元公爵家文書の多年に亘る調査によつて蘊蓄を豊かにし、永享年間書写の上人行状絵伝の抄録本の考究などが行はれたのであつた。

かくして本書の老成なる編輯は前後三十年に余る苦辛と、それによつて、いよ／＼高められた祖恩嘆仰の結実とも見られるのである。

なほまた、本書の編述は偏へにこれ、吉水の法流を波む仏徒の宗祖鑽仰の素願に發するものではあるが、また、歴史研究の学徒の広い学問の視野の上に立つてゐるものがある。宗祖大師の行伝がその早く筆録せられた醇素なも

のから、後に成立する精妙、浩瀚なるものに至るまで、餘すところなく輯められてある。その載するところもたゞ浄土宗の鎮西、西山等の門流に限ることなく、真宗系統に屬する拾遺古徳伝などにも亘つてゐる。

本書は、人の求むるところに随つて必ずや与ふるもの多いであらう。

世態は今なほ交転をつゞけてゐる。日本のみならず広い世界は迷蒙の境にあつて嘗ての大師出世の時のごとくに、新たなる光を望み見てゐる。この時にあたり、法然上人の全集がひろく國の内外に布かれ、洽く世の見聞に到らんことを希ふのである。

昭和二十七年七月

田直二

## 例言

- 一、本文の仮名は便宜上すべて平仮名に直した。原文の片仮名なるものは解説で明かにする。
- 一、仮名遣ひの誤り、誤字とは原著者の筆解と思はるゝものは原形を存する意味に於て其儘とし、後世の誤写、若しくは印刷上の誤りと認めらるゝもののみ訂正しておいた。
- 一、振り仮名は特別の読み方以外は省略した。
- 一、句読点と濁点とは読み易いやうに適当に施した。
- 一、印刷所の都合で第一集、第二集以外に現代当用漢字を随分利用してゐる。
- 一、本伝の原典所蔵者、或は出拠、または参照本の極めて要点だけを各集内扉の裏頁に標示し、詳細は解説篇に譲ることにした。
- 一、法然上人行状絵図の見出しの下に（勅伝）と添記したのは一般の略称に倣つたのと便宜の爲めであるが、また（九卷伝）、（琳阿本）の如きは寧ろ本名より、この略称の方がよく知られてゐるし又、類同の本名を他と簡別するにも役立つからである。

前  
篇  
第  
一  
集  
勅  
傳

出 據

一、法然上人行狀繪圖(勅修御傳)……………四八卷

原 本 【重要文化財】

京都市 知恩院藏

(日本繪卷物集成卷十五・十六 大正新校法然上人行狀繪圖 參照)

二、黒谷上人繪詞拔書(法然上人繪詞・近衛家本)……………二卷

原 本 文安四年十月廿五日書寫

京都市 陽明文庫藏

三、法然上人繪詞卷第一(九卷傳の前に付すもの)……………殘缺一卷

流布本 (淨土宗全書卷十七 參照)

四、法然上人傳記(九卷傳)……………九卷

流布本 (淨土宗全書卷十七 參照)

## 法然上人行狀繪圖 第一

夫以我本師釋迦如來は、あまねく流浪三界の迷徒をすくはむがために、ふかく平等一子の悲願をおこしますすによりて忽に無勝莊嚴の化をかくして、かたじけなく娑婆濁惡の國に入給しよりこのかた、非生に生を現じて無憂樹の花をふくみ、非滅に滅をとなへて、堅固林の風をいたましむ。在世八十箇年、慈雲ひとしく群生におほひ、滅後二千餘廻、法水なを三國にながる。教門しなことに、利益これまち／＼なり。そのなかに聖道の一門は穢土にして自力をはげまし、濁世にありて得道を期す。但おそらくは、とき澆季にをよびて二空の月くもりやすく、こゝろ塵縁にはせて三惡のほのをまぬかれがたし。煩惱具足の凡夫、順次に輪廻のさを出ぬべきは、たゞこれ淨土の一門のみなり。これにつきて、諸家の解釋蘭菊美をほしきまゝにすといへども、唐朝の善導和尚、彌陀の化身として、ひとり本願の深意をあらはし、我朝の法然上人、勢至の應現として、もはら稱名の要行をひろめ給ふ。和漢國ことなれども化導一致にして、男女貴賤信心を得やすく、紫雲異香往生の瑞すこぶるしげし、念佛の弘通こゝに尤さかむなりとす。しかるに上人遷化のち、星霜やゝつもれり。教誡のことば利益のあと、人やうやくこれをそらんぜず。もししるして後代にとどめずば、たれか賢を見てひとしからむことをおもひ、出離の要路ある事をしらむ。これによりて

ひろく前聞をとぶらひ、あまねく舊記をかんがへ、まことをえらび、あやまりをたゞして、粗始終の行狀を勸するところなり。をろかなる人のさとりやすく、見むものゝ信をすゝめむがために、數軸の畫圖にあらはして、萬代の明鑒にそなふ。往生をこひねがはむ輩、たれかこのころざしをよみせざらむ

抑上人は、美作國久米の南條稻岡庄の人なり、父は久米の押領使漆の時國母は秦氏なり。子なきことをなげきて、夫婦こゝろをひとつにして佛神に祈申に、秦氏夢に剃刀をのむとみてすなはち懷妊す。時國がいはく、汝がはらめるところ、さだめてこれ男子にして、一朝の戒師たるべしと。秦氏そのころ柔和にして身に苦痛なし。かたく酒肉五辛をたちて、三寶に歸するこゝろ深かりけり

### 第一圖

つゝに崇徳院の御宇、長承二年四月七日午の正中に、秦氏なやむ事なくして男子をうむ。時にあたりて紫雲天にそびく、館のうち家の西に、もとふたまたにしてすゑしげく、たかき棕の木あり。白幡二流とびきたりて、その木ずゑにかゝれり。鈴鐸天にひゞき、文彩日にかゞやく。七日を経て天にのぼりてさりぬ。見聞の聳奇異のおもひをなさずといふことなし。これより彼木を、兩幡の棕の木となづく。星霜かさなりて、かたふきたふれにたれど、異香つねに薫じ奇瑞たゆることなし。人これをあがめて、佛閣をたて、誕生寺と號し、影堂をつくりて念佛を修せしむ

昔應神天皇御誕生の時、八の幡くだる。正見正語等の八正道に住したまふしるしなりといへり。いま上人出胎の瑞、ことの儀あひおなじ。さだめてふかきこゝろあるべし

## 第二 圖

所生の小兒、字を勢至と號す。竹馬に鞭をあぐるよはひよりその性かしくくして成人のごとし。やゝもすれば、にしの壁にむかひゐるくせあり。天台大師童稚の行狀にたがはずなん侍りける

## 第三 圖

かの時國は、先祖をたづぬるに、仁明天皇の御後西三條右大臣光公の後胤、式部大郎源の年、陽明門にして藏人兼高を殺す。其科によりて美作國に配流せらる。こゝに當國久米の押領使神戸の大漆の元國がむすめに嫁して男子をむましむ。元國男子なかりければ、かの外孫もちて子としてその跡をつがしむる時、源の姓をあらためて漆うらの盛行と號す。盛行が子重俊、重俊が子國弘、國弘が子時國なり。これによりてかの時國いさゝか本姓に慢ずる心ありて、當庄稻岡の預所明石の源内武者定明伯耆守源長明が嫡男堀川院御在位の時の瀬口也をあなづりて、執務にしたがはず、面謁せざりければ、定明ふかく遺恨して、保延七年の春時國を夜討にす。この子ときに九歳也。にげかくれてものゝひまより見給ふに、定明庭にありて、箭をはげたてりければ、小矢もちてこれをいる。定明が目のあひだにたちにけり、この疵かくれなくて、事あらはれぬべかりければ、時國が親類のあだを報ぜん事ををそれ

て定明逐電してながく當庄にいらす。それよりこれを小矢兒こやちとなづく、見聞の諸人感歎せずといふことなし

## 第四圖

時國ふかき疵をかうぶりて死門にのぞむとき、九歳の小兒にむかひていはく、汝さらに會稽の耻をおもひ、敵人をうらむる事なかれ、これ偏に先世の宿業也。もし遺恨をむすばゞ、そのあだ世々につきがたかるべし。しかしはやく俗をのがれいゑを出で我菩提をとぶらひ、みづからが解脱を求にはといひて端坐して西にむかひ、合掌して佛を念じ眠がごとくして息絶にけり

## 第五圖

## 法然上人行狀繪圖 第二

定明逐電のち、隱居の心しづかにして已造の罪をくひ、當來の苦をかなしみ念佛をこたらずして往生の望をとぐ。其子孫みな上人の餘流をうけ淨土の一行をむねとせり。小兒たゞ人にあらず、豈怨敵をうらむる心あらんや。定明疵を被るによりて、跡をかくし往生を遂、子孫又淨土門に入。權化の善巧なるべし、迷情あへてあやしみをなす事なかれ

## 第一圖

當國に菩提寺といふ山寺あり。かの寺の院主觀覺得業と云けるは、もと延曆寺の學徒なりけり。大業の望を達せざることをうらみて、南都にうつり、法相を學して所存をとぐ。ひさしの得業とぞ申ける。秦氏が弟なりければ小兒の叔（うぢ）なるうへ、父遺言の事ありければ、童子彼室にいりぬ。學問の性ながるゝ水よりもすみやかにして一をきゝて十をさとる。きくところのこと憶持して、更にわするゝことなし

## 第二 圖

觀覺小兒の器量を見るに、いかにもたゞ人にはあらずおぼえければ、いたづらに邊鄙の塵に混ぜん事をしみて、はやく台嶺の雲にをくらむことをぞ支度しける。しかるべき事にやありけん。小兒そのおもむきをきゝて、舊里にとゞまることろなく、花落をいそぐ思ひのみあり。觀覺よろこびて此ちこを相具して、母の所にゆきてことの上しをかたる。兒童母儀をこしらへていはく、うけがたき人身をうけ、あひがたき佛教にあふ、眼のまへの無常を見て、夢の中の榮耀をいとふべし。就中亡父の遺言、耳の底にとゞまりて、心のうちにわすれず。はやく四明にのぼりて、すみやかに一乘をまなぶべし。但母よにいまさん程は、晨昏の禮をいたし、水菽の孝をつとむべしといへども、有爲をいとひ無爲にいるは、眞實の報恩なりといへり、一旦の離別をかなしみ、永日の悲歎をのこし給事なかれと再三なぐさめ申。母堂ことほりにをれて承諾の詞をのぶといへども、袖にあまるか

なしみの涙、小兒のくろかみをうるほす。有爲のならひしのびがたく、浮生のわかれまどひやすくして、かくぞおもひつゞけゝる

かたみとてはかなきをやのとゞめてし、このわかれさへまたいかにせん

さてしもあるべきならねば、叡岳西塔の北谷持寶坊の源光がもとにつかはす。觀覺が狀云進上大聖文殊像一體と。これ智慧のすぐれたる事をしめす心なりけり

## 第三圖

童子十五歳近衛院御宇久安三年春二月十三日に、千重の霞をわけて九禁の雲に入る。つくりみちにして法性寺殿忠通公于時攝政の御出にまいるあひたてまつる。小兒馬よりをりて道のかたはらに侍に、御車をとゞめられて、いづくの人ぞと御尋ありければ、おくりの僧ことの上しを申あぐ。御禮儀ありてすぎさせ給ふ。供奉の人々存外のおもひをなす。のちに仰られけるは、路次にあふ所の小童、眼より光をはなつ。いかにもたゞものにあらざることをしりぬ。これによりて禮をなしき、とぞ仰られける。月輪殿の御歸依あさからざりけるも、彼御物語を、御耳の底にとゞめられけるゆへにやありけむ。とおぼつかなし

## 第四圖

## 法然上人行狀繪圖 第三

童子入浴の、ち、まづ觀覺得業が狀を、持寶房につかはす。源光觀覺が狀を披覽して、文殊の像をたづぬるに、たゞ小兒のみ上洛せるよし使者申ければ、源光はやく兒童の聰明なる事をしりぬ。すなはち兒のむかへにつかはしければ、同十五日に登山す

## 第一 圖

獨木かけはしあやうく、九花いろめつらし、持寶房にいたり給ぬ。試にまづ四教義をさづくるに鑑をさして、不審をなす。うたがふところ、みな圓宗のふるき論義なりけり。まことにたゞ人にあらずとぞ申あへりける

## 第二 圖

この兒の器量ともがらにすぎて、名譽ありしかば、源光われはこれ魯鈍の淺才なり。碩學につけて、圓宗の奥義をきはめしめむといひて、久安三年四月八日この兒を相具して、功德院肥後阿闍梨皇圓のもとにゆきて入室せしむ。彼皇圓は、栗田の關白四代の後、參河權守重兼が嫡男少納言資隆朝臣の長兄、楳生の皇覺法橋の弟子、當時の明匠、一山の雄才なり。閤梨少生の聰敏なることをききて、おどろきていはく、去夜の夢に滿月室に入と見る。いまこの法器に、あふべき前兆なりけりとぞ。悅申されける

## 第三 圖

同年十一月八日、華髮をそり法衣を着し、戒壇院にして、大乘戒をうけ給にけり

#### 第四圖

ある時、すでに出家の本意をとげ侍ぬ。いまにきては跡を林藪にのがれむとおもふよし、師範の閣梨に申されければ、たとひ隱遁の志ありとも、まづ六十卷をよみてのち、本意を遂べきよし、閣梨いさめ給ければ、われ閑居をねがふ事は、永く名利の望をやめて、しづかに佛法を修學せんためなり。この仰まことにしかなりとて、生年十六歳の春、はじめて本書をひらく、三箇年をへて、三大部をわたりたまひぬ

#### 第五圖

惠解天然にして、秀逸のきこえあり。四教五時の廢立鏡をかけ、三觀一心の妙理、玉をみがく、所立の義勢、殆師のをしへにこえたり、閣梨いよく感歎して、學道をつとめ大業をとげて、圓宗の棟梁となり給へと、よりよくこしらへ申されけれども、更に承諾の詞なし。なをこれ名利の學業なることをいとひ、たちまちに師席を辭して、久安六年九月十二日、生年十八歳にして、西塔黒谷の慈眼房叡空の廬にいたりぬ。幼稚のむかしより成人のいまに至まで、父の遺言わすれがたくしてとこしなへに隱遁の心ふかきよしをのべ給に、少年にしてはやく出離の心をおこせり、まことにこれ法然道理のひじりなりと隨喜して、法然房と號し、實名は源光の上の字と叡空の下の字をとりて

源空とぞつけられける。かの叡空上人は大原の良忍上人の附屬圓頓戒相承の正統なり。瑜伽祕密の法にあきらかにして、一山これをゆるし、四海これをたうとびけり

## 第六圖

### 法然 上人行狀繪圖 第四

上人黒谷に蟄居のゝちは、ひとへに名利をすて、一向に出要をもとむるところ切なり。これによりていづれの道よりか、このたびたしかに、生死をはなるべきといふことをあきらめむために、一切經を披閱すること數遍にをよび、自他宗の章疏まなこにあてずといふことなし。惠解天然にしてその義理を通達す。あるとき天台智者の本意をさぐり、圓頓一實の戒體を談じ給に、慈眼房は心をもて戒體とすといひ、上人は性無作の假色をもて、戒體とすとたてたまふ。立破再三にをよび、問答多時をうつすとき、慈眼房腹立して、木枕をもてうたれければ、上人師の前をたゝれにけり。慈眼房思惟すること數尅のゝち、上人の部屋に來臨して、御房の申さるゝむねは、はや天台大師の本意一實圓戒の至極なりけりとぞ申されける。佛法にわたくしなきこと、あはれにはんべり、かゝりければ上人をもて軌範として師かへりて弟子となり給にけり

## 第一圖

保元々々上人二十四のとし、叡空上人にいとまをこひて嵯峨の清涼寺に七日參籠のことありき。求法の一事を祈請のためなりけり。この寺の本尊釋迦善逝は、西天の雲をいで、東夏の霞をわけて三國につたはりたまへる靈像なれば、とりわき懇志をはこびたまひけるも、ことはりにぞおぼえ侍る。

## 第二 圖

上人その性俊にして大卷の文なれども、三遍これを見給に、文くからず義あきらかなり。諸教の義理をあきらめ、八宗の大意をうかゞひえて、かの宗この先達にあひて、その自解をのべ給に、面々に印可し、各々に稱美せずといふことなし。清涼寺の參籠七日滿じければ、それより南都へくだり、法相宗の碩學藏俊僧都贈僧正の房にいたりて、修行者のさまにて、對面し申さんと申されたりけり。大ゆかにおはしけるを僧都いかゞおもはれけん、あかり障子をあけてうちへ請じいれたてまつりて對面し法談ときをうつされけり。宗義につきて不審をあげられけるに、僧都返答にをよばざる事どもありけり。上人こゝろみに獨學の推義をのべ給ければ、僧都感歎してはいはく、貴房はたゞ人にあらず、おそらくは大權の化現歟。むかしの論主にあひたてまつるとも、これにはすぐべからずとおぼゆるほどなり。智惠深遠なること、言語道斷なりとて、二字をたてまつり、一期のあひだ毎年に供養をのぶること、をこたりなかりけるとなん。

### 第三 圖

醍醐に三論宗の先達あり。權律師寛雅これなり。かしこにゆきて所存をのべ給に、律師すべても  
のいはず。うちにたちいりて、文櫃十餘合をとりいだして、予が法門附屬するに人なし。きみすで  
にこの法門に達し給へり。ことごとく祕書を附屬したてまつるとてこれを進ず。稱美讚嘆のことば  
かたはらいたきほどなり。進士入道阿性房等、御ともして、この事を見聞して、奇特のおもひをな  
しけり

### 第四 圖

仁和寺に華嚴宗の名匠あり。大納言法橋慶雅と號す。仁和寺の岡といふ所に居住せるゆへに、岡  
の法橋とぞ申ける。醍醐にもかよひけるにや、醍醐の法橋ともいへり。かの法橋は、上人の弟子阿  
性房のしる人なりければ、上人華嚴宗の不審をたづねとはれんために、阿性房をあひぐして、むか  
ひたまへるに、法橋まづ左右なく申いたすやうは、弘法大師の十住心は、華嚴宗によりてつくり  
給へり。このむねを御室に申ところに、興あることなり。はやく勘<sup>かた</sup>申べきよし、おほせをかうふる  
あひだ、このほどかむがへ侍なりと申とき、初對面なればさてもあるべけれども、學問のならひは  
黙止がたくおもはれけるによりて上人の給けるは、なにしにかは華嚴宗にはより侍べき、大日經の  
住心品の心をもて、つくられたるにてこそ侍れ、第六の他縁大乘心は法相宗のこゝろなり。第七の

覺心不生心は、三論宗也。第八の一道無爲心は、天台宗なり。第九の極無自性心は、華嚴宗なり。第十の祕密莊嚴心は、眞言宗なりとて、はじめ異生羴羊心より、をはり祕密莊嚴心まで、をの／＼偈を誦して、一々にその道理を釋しのべたまひて、淺深をたて、勝劣を判ずることをは、諸宗をの難をくはへ、不受し申なり。天台宗に難申やうはなど、くはしく釋しのべられ、又華嚴宗の自解の樣をこまかに申のべ給に、法橋これをきゝて阿性房の縁に侍をよびて、これはきゝたまふか、これかやうに心えてんに、往生し損じてんやと感嘆して、われこの宗を相承すといへども、かくのごとく分明ならず。上人自解の法門をきくに、下愚處々の不審をひらく、他宗推度の智惠、自宗相傳の義理にこえ給へりとて、隨喜感嘆はなはだし。かくのごとくして、たがひに法談數尅の／＼ち、この宗の血脈にいり侍はやと。上人のたまへば、慶雅が上にやと。法橋申さるゝあひだ、いかゞさることは侍べき。華嚴宗をば、ことさら傳受したてまつらんと、存ずるなりと申されければ、血脈ならびに華嚴宗の書籍、少々わたしたてまつりぬ。さてかの法橋最後には上人を招請して、戒をうけ二字をたてまつる。戒の布施には、圓宗文類といふ、二十餘卷の文をとりいだして、慶雅はこのほかは、もちたるもの侍らず、上人もこどものをば、なにゝかはせさせ給べきとて、黒谷へぞ送進しける。上人のたまひけるは、よき學生になりぬれば、かくのごとく、歸すべきことには歸するなり。この法橋は華嚴宗にとりては、よき名匠なり。辨曉法印も慶雅法橋の弟子なりとぞ、おほせら

れける

第五圖

上人諸宗に通達し給へること、人口あまねきうへ、慶雅法橋御室の御前にて、自門他門おほくの學生にあひ侍つれども、この上人かやうにも申僧こそ侍らねと、稱美し申けるを、きこしめされて、御室より上人招請せられ、天台宗を學せらるべきよし、おほせられければ、天台宗はむかしはかたのごとく傳受し侍しかども、いまは但念佛になりて、天台宗は廢亡し侍うへ、山門には澄憲、三井には道顯など申、名匠たち侍り、かの人々にめしとはるべきか、おのづからかへりき、侍らぬも、そのはゞかり侍よしを、申給しかば、みなうけたまはりきたることなり。色題その詮侍らずとて、かさねてしきりに仰られけれども、なをかたく辭退し申給へば、さらば念佛のことを學せらるべし。そのついでに少々談義侍べしなどおほせられけれども、自然に延引して、日月をくられるに、後白河法皇最後の御時、上人を御善知識にめされて、まいる給けるとき、御室も御參會ありけるに、そのことおほせられいだして、このあひだ住京のついでに、素懷をとげばや、いかゞ侍べきとおほせられければ、かやうのおりふしは物忽にも侍り、またきとめさるゝ事も侍らん時は、中間に、もの申さし侍らんこともあしく侍れば、しづかに參上つかまつるべしとて、そのついでもむなしくやみにき。其のちいく程なくて、御室もうせさせ給にしかば、つるにその節をとげられず

といへども、懇切の御こゝろざしをつくされしも、上人諸宗に達したまへるゆへなりき

## 第六圖

## 法然上人行狀繪圖 第五

上人のたまはく、學問は、しめてみたつるは、きはめて大事なり、師の説を傳習はやすきなり。しかるに我は諸宗みなみづから章疏を見て心えたり。戒律にも中の川少將の上人儉蘭又といふ、名目ばかりぞきゝつたへたる、さらではみな見いだしたるなり。法相宗も臆俊にあふといへども、法相を學せずかの人は、ゝかりをなしてをしへず、名目ひとつぞきゝとりたる。故慈眼房も分明ならず小乗戒の事は非學生なり、わづかに理觀ばかりなり。普通によき學生といふも、大乘の戒律にをきては、予がごとく沙汰したるものはすくなきなり。當世にひろく書を披見したることは、たれも覺ず、書を見るに、これはその事を詮にはいふよと、みることのありかたきことにて侍に、われは書をととりて、一見をくはうるに、その事を釋したる書よなとみる徳の侍也。詮はまづ篇目を見て、大意をとるなりと。又のたまはく、自他宗の學者、宗々所立の義を、各別にこゝろえずして、自宗の義に違するをはみなひがごとと心えたるは、いはれなきことなり。宗々みなをのゝつたつるところの法門、各別なるうへは、諸宗の法門一同なるべからず、みな自宗の義に違すべき條は、勿論なり

とぞおほせられける

第一 圖

建仁二年九月十九日談議のとき上人かたりてのたまはく、弘法大師の十住心論は、義釋によりてつくり給へるに、義釋に違することおほし。かの義釋は善無畏三藏の説を、一行阿闍梨記せられたるなり。一行はいとまなき人にて未再治にてやみにしを、のちに再治の本おほし。其中に弘法大師再治の本もある也。義釋には極無自性心に、華嚴般若等の不思議の境界を攝すところあるを、弘法大師の再治の本には般若をばすて、たゞ華嚴を攝すとかゝれたり。又十住心には、華嚴宗ぞと釋せられたり。十住心といふは、異生羝羊心、愚童持齋心、嬰童無畏心、唯蘊無我心、拔業因種心、他緣大乘心、覺心不生心、一道無爲心、極無自性心、祕密莊嚴心なり。始の異生羝羊心は、三惡道なり、この中に修羅を攝す。第二は人道也、このなかに、もろくの儒教の仁義禮智信等を攝するなり。第三は天道なり、これに老莊の教を攝す。第六は法相宗。第七は三論宗。第八は天台宗。第九は華嚴宗。第十は眞言宗なり。はじめの一をのぞきて、餘の九種の住心には、外典内典の種々の諸教、みなそのなかに攝せり。しかれば弘法大師の御心によらば、内外の典籍みなこれを學すべきか。これによりて、御室も多聞廣學をこのみ、御沙汰あるかとおぼゆるなり。たゞしこの十住心論の義に大なる難あり。義釋にはあるひは唯經を攝すといひ、あるひは唯論を攝すともいへるを、一

宗にとりなして、華嚴宗に攝す法華宗に攝すなど、ひきなされたるは、ひがごとくおぼゆるなり。もしその宗に攝して勝劣を判ぜば、たがひに是非あり。その宗論にをきてはむかしよりいまだ、こときれざるものなり。法華宗は華嚴宗よりもあさしといはゞ、すでに法華宗のこゝろに違せり。いかでかをして天台宗とはいふべき、たゞ華嚴宗のこゝろばかりにてこそはあらめ、宗々たがひに淺深をあらそふ、よそにてたれか定判せん。おほよそ一宗のならひ一代聖教にをきて淺深を判する、つねのことなり。しかれば一切經はおなじく釋迦一佛の所説なれども、宗々の所學にしたがひて、淺深勝劣不同なれば、いづれの宗の一切經といふべし。天台宗の一切經あり。華嚴宗の一切經あり。乃至法相三論にも、をのく一切經あるべし。天台宗の一切經のなかには、法華をすぐれたりとするがゆへに、爾前の諸經に相對して十勝を立たり。華嚴宗の一切經には、華嚴をもちてすぐれたりとす。三論には諸大乘經顯道無異とはいへども、般若をもちて至極とす。法相には解深密經をもちて眞實とす。かくのごとくをのく所解不同なるを、をさへて宗々を十住心にあて、淺深をさだめらるゝ條、そのいひなきことなり。諸宗のならひ、たゞ經ばかりをこそ、淺深をも勝劣をも立たることにてあれ。いはんや善無畏の義釋はすでに經ばかりに約せり。又義釋には、華嚴般若種々不思議の境界を攝すといへるを、十住心論には唯華嚴にかぎりあやまりて、その宗までを攝して、般若をば覺心不生心に攝すること、又もちて違せり。かくのごときの義をもちて、ひそかに難勢をく

はへたてまつるほどに、いまは二十餘年にもやなりぬらん源平の亂よりさき、嗟峨に住したりしころ、夢に見るやう。請用して他行したりけるそのあとに、弘法大師よりきとまいらせたまへとて御使の候けると云をきゝて、心におもふやう、内々難じ申ことの、きこへたるよなどおもへども、さあらんにつけてもと存じて、すなはち大師のところへ參ず。五間ばかりなる家の、板敷もなくへだてもなくて、唯内に、よほうにぬりぬぐらしたる壁の、くちもなきのみあり。大師はこのうちに、おはしますとおぼゆ。まづ外にて、こはづくろひをしたれば、その壁のうちより、こなたへとおほせらるゝこゑあり。その御こゑにつきて、いりてかべのうちをみれば、さらにその戸なし、かべのくづれたるところのみあり、そのくづれよりくゞりいれば、大師壁のきはおはしまして、すなはち胸をあはせていただきあふ。大師の御顔は予が左の肩にをき給。かくて前々難破することゝもを、一々に會釋せしめ給ふ。これをきけども、なを驚動せず。それはと申て、かさねてその義を、難じたてまつらんとするとおぼしくて、夢さめぬ。のちにこれを案ずるに、難じ申義、みな大師の御心にあひかなへるか、ひしといただきあひたてまつりたることは、御意にかなひたるが、みゆるなるべし。げにもよく難ぜられたりとおぼしめせばこそ、夢にもさまざまに會釋し給つらぬ。凡は後學畏べしといひて、學生はかならずしも、先達なればといふことはなきなり。かの如來滅後五百年に、五百の羅漢あつまりて、婆娑論をつくりしに、九百年に世親いで、俱舍論をつくりて、さきの義

を破し給き。義の是非を論せんことは、あながちに上古にもおそるまじきものそとそ、おほせられける。

## 第二 圖

上人は、もと天台の眞言をならひ給へり。しかるを中の川の阿闍梨實範、ふかく上人の法器を感じて、許可灌頂をさづけ、宗の大事、のこりなくこれをつたふ。かの實範は、東寺の流、中院の阿闍梨教眞灌頂の弟子、かねて勸修寺の僧正範俊を師とす。たゞ事相教相に達するのみならず、他宗の法門またくからざりけり。しかるに上人を歸依のあまり、後には二字をたてまつり鑑眞和尚相傳の戒をうく。上人は圓頓の戒法を宗とし給へりき。しかるに圓戒をさしをきて、かの相傳の戒をうけられける。さだめてふかきこゝろ侍けんかし。

## 第三 圖

上人智惠第一のほまれちまたにみち、多聞廣學のきこゑ世にあまねし。おほよそ我朝にわたれる聖教傳記まなこにあてずといふことなし。しかれば本國の明師觀覺も二字をたてまつり、黒谷の尊師叡空も軌範とし給き。たゞ教内の宗旨に達するのみにあらず、又教外の佛心、をぎろをさぐる。宗門は先達なきゆへにこれを決せずと、つねにの給けるとなん。圓頓戒談義のとき、成覺房幸西たづねていはく、この戒は諸法の至極をもて戒體とす。しかるに山王院の大師、諸法の至極を禪とす

との給へり。もし、からば禪門と、この戒體と合すやいなやと。上人決し給はく、これは教内の理法なり、かれは修心の教外なり、なにをもてか合すとせん。得禪の人この戒をとかば、いよいよ正理にかなふべし、禪人教をとけば教文禪にしたがふ、教人禪をとけば、禪門教にしたがふ。をよそ眞言止觀をもて、禪を推べきにあらず。いはんや法相三論をや、いかにいはんや自餘の小乗の宗をやと。さらにこれ教者のことばにあらず、まことに繩みじかくしては、深泉にいたりたく、翹よはくしては、大虛にかけることなし。智あさく心つたなくして、宗門に達することあらんや。されば禪の宗旨を論ぜられたる、上人自筆の書いまにあり、末學うたがふことなかれ

#### 第四 圖

あるとき上人月輪殿にして、山僧と參會の事侍しに、かの僧淨土宗を立給なるは、いづれの文によりて、立給ぞやとたづぬるとき、善導の觀經疏の附屬の文なりと答給に、重いはく、宗義をたつる程のことに、なんぞたゞ一文によるべきやと。上人微笑して、物もの給はざりけり。かの僧山に歸てのち、寶地房法印證眞にこのことをかたりて、法然房すべて返答にをよばずと申けるを、法印申されけるは、法然房の物いはれざるは、不足言に處するゆへなり。かの上人は、天台宗の達者たるうへ、あまさへ諸宗にわたりて、あまねくこれは習學して、智惠深遠なる事、つねの人にこえたり。返答かなはずして、物いはずとおもふ僻見、さらにをこすべからずとぞ申されける。かの法印

は、つねに上人に親近して法門を談ぜしゆへに、智慧の分際をしりて、申されけるにこそ、ことに戒の法門は上人に相承の人なり。かの法印堅義の時は、惠光房の永辨法印を師とせられけるに、元品の無明は妙覺智斷、三惑は同時斷の義を立べきよしさづけ給けるに、證眞は一代聖教を見に、三惑は異時斷、元品の能治は等覺智也。此旨を立べきよし申されければ、その心なるべしと、永辨法印ゆるされけるゆへに、等覺智斷の義を立す。澄憲法印題者にてしらべ給けるに堅者五千餘卷の經教をひらきたるに、いまだ妙覺智斷の文を見ずと立するに、見聞の大衆同音に、博覽を感ずる聲甚し。その時澄憲法印、堅者すでに智劍をふるふ。題者あにさびかねをぬかざらんや、といふ名句を申されけり。弱年の昔猶かくのごとし、いはんや積學の後をや。一切經を披覽すること、五遍なりしかども、惠心院の僧都の高覽に、同せんをはばかりて、三返のよしを披露せられけるとかや。晝夜に地藏菩薩に物がたりし、又おぼつかなきことあれば、中堂にまいりて藥師佛にたづねたてまつり、十禪師に詣して尋申に、かならず授られけり。常のことばには、我師はとをくは大聖世尊、ちかくは天台妙樂とて、末師をばもちゐられざりけり。往生傳をつくりて、我身をかきいれられけるとかや。時の人地藏の化身とぞ申ける。しかるに彼法印、上人を智慧深遠の人なりと申されけるは本地の智慧といひ、垂迹の廣才といひ、たがひに知たまへるゆへなるべし、餘人の稱美よりも氣味ありてぞおぼえ侍る。

## 第五 圖

上人の老後に竹林房の靜嚴法印の弟子きたりて、堅義の才學にそなへんために、天台宗の法門をたづね申けるに、くはしく深奥をさづけられにけり。かの人のちに申けるは、老耄のうへ念佛にひまなくして、聖教を見ざるよしは申されしかども、文理のあきらかなること、當時の勸學にこえたまへり、たゞ人にあらずと。そのころ山門に傾學はやしをなしき、しかるに數輩の明匠をさしをきて隱遁の上人に宗の大事をたづね申ける。その達し給へるほど、あらはれてぞおぼえ侍る。上人かたりてのたまはく、われ聖教を見ざる日なし、木曾の冠者、花洛に亂入のとき、たゞ一日聖教を見ざりきと。のちには念佛のいとまをおしみて、稱名の外は他事なかりけり。後學よろしくそのあとをまなぶべきにや

## 第六 圖

### 法然上人行狀畫圖 第六

上人聖道諸宗の教門にあきらかなりしかば、法相三論の碩徳、面々にその義解を感じ、天台花嚴の明匠、一々にかの宏才をほむ。しかれどもなを出離の道にわづらひて、身心やすからず、順次解脫の要路をしらんために、一切經を、ひらき見たまふこと五遍なり。一代の教迹につきて、つらつ

ら思惟し給に、かれもかたく、これもかたし。しかるに惠心の往生要集、もはら善導和尚の釋義をもて指南とせり。これにつきてひらき見給に、かの釋には、亂想の凡夫、稱名の行によりて、順次に淨土に、生すべきむねを判じて、凡夫の出離を、たやすくすゝめられたり。藏經披覽のたびに、これをうかぶといへども、とりわき見給こと三遍、つるに一心專念彌陀名號、行住坐臥不問時節久近念々不捨者、是名正定之業、順彼佛願故の文にいたりて、末世の凡夫彌陀の名號を稱せば、かの佛の願に乗じて、たしかに往生をうべかりけりといふことはりをおもひさだめ給ぬ。これによりて承安五年の春、生年四十三たちどころに餘行をすて、一向に念佛に歸し給ひにけり

## 第一圖

あるとき上人往生の業には、稱名にすぎたる行、あるべからずと申さるゝを、慈眼房は、觀佛すぐれたるよしをの給ければ、稱名は、本願の行なるゆへに、まさるべきよしをたて申たまふに、慈眼房又先師良忍上人も、觀佛すぐれたりこそおほせられしか、との給けるに、上人、良忍上人もさきこそむまれ給たれ、と申されけるとき、慈眼房腹立たまひければ、善導和尚も、上來雖說定散兩門之益、望佛本願意在衆生、一向專稱彌陀佛名、と釋したまへり、稱名すぐれたりといふことあきらかなり、聖教をば、よくよく御覽給はでとぞ申されける

## 第二圖

上人一向專修の身となり給にしかば、つるに四明の巖洞をいで、西山の廣谷といふところに、居をしめ給き。いくほどなくて、東山吉水のほとりに、しづかなる地ありけるに、かの廣谷のいほりを、わたして、うつりすみ給。たづねいたるものあれば、淨土の法をのべ、念佛の行をすゝめらる。化導日にしたがひて、さかりに、念佛に歸するもの、雲霞のごとし。そのうち賀茂の河原屋、小松殿、勝尾寺、大谷など、その居あらたまるといへども、勸化をこたることなし。つるにほまれ一朝にみち、益四海にあまねし。これ彌陀の一教、わがくに、縁ふかく、念佛の勝行、末法に相應するゆへなるべし。大谷は上人往生の地なり、かの跡いまにあり、東西三丈餘、南北十丈ばかり、このうちにたてられけん、坊舎いくほどのかまへにかあらんとみえたり。その節儉のほども、おもひやられて、あはれに、たとくぞ侍る。いまの御影堂の跡これなり

### 第三 圖

或時上人おほせられていはく、出離の志、ふかゝりしあひだ、諸の教法を信じて、諸の行業を修す。おほよそ佛教おほしといへども、所詮戒定慧の三學をばすぎず。所謂小乗の戒定慧、大乘の戒定慧、顯教の戒定慧、密教の戒定慧也。しかるにわがこの身は、戒行にをいて一戒をもたもたず、禪定にをいて、一もこれをえず。人師釋して、尸羅清淨ならざれば三昧現前せずといへり。又凡夫の心は、物にしたがひてうつりやすし、たとへば猿猴の枝につたふがごとし、まことに散亂して、

動じやすく、一心しづまりがたし。無漏の正智、なにゝよりてかおこらんや。若無漏の智劍なくばいかでか、惡業煩惱のきづなをたゝんや。惡業煩惱のきづなをたゝずば、なんぞ生死繫縛の身を、解脱することをえんや。かなしきかな、かなしきかな、いかゞせん、いかゞせむ。こゝに我等とときはすでに戒定慧の三學の器にあらず。この三學のほか、我心に相應する法門ありや、我身に堪たる修行やあると、よろづの智者にもとめ、諸の學者に、とふらひしに、をしふるに人もなく、しめす輩もなし。然間なげきゝ經藏にいり、かなしみゝ聖教にむかひて、手自ひらき見しに善導和尚の觀經の疏の、一心專念彌陀名號、行住坐臥不問時節、久近念々不捨者、是名正定之業、順彼佛願故。といふ文を見得てのち、我等がごとくの、無智の身は偏にこの文をあふぎ、專このことばりをたのみて、念々不捨の稱名を修して、決定往生の業因に備べし、たゞ善導の遺教を信するのみならず、又あつく彌陀の弘誓に順ぜり、順彼佛願故の文ふかく魂にそみ、心にとゞめたるなり。惠心の先徳の、往生要集をひらくに、往生之業念佛爲本といひ、又かの人の妙行業記の文にも、往生之業念佛爲先といへり。覺超僧都、惠心の僧都に、といての給はく、所行の念佛は、これ事を行すとやせん、これ理を行すとやせんと。惠心の僧都、こたへての給はく、こゝろ萬境にさへぎる、こゝをもて、我たゞ稱名を行するなり。往生の業には、稱名尤たれり、これによりて、一生中の念佛その數を勘たるに、二十俱胝遍なりとの給へり。然則源空は大唐の善導和尚の、をしへにしたが

ひ、本朝の恵心の先徳の、すゝめにまかせて、稱名念佛のつとめ長日六萬遍なり。死期やうやく、ちかづくによりて又一萬遍をくはへて、長日七萬遍の行者なりとぞ、おほせられける

#### 第四 圖

上人の念佛七萬遍になされてのちは晝夜に餘事をまじへられざりけり。されば、そのうち人のまゐりて、法門をたづね申けるには、きゝたまふかと、おぼしくては、念佛のこゑ、すこしひきく、なり給ふばかりにてぞありける。一向に念佛を、さしをきたまふこと、なかりけるとなん

#### 第五 圖

上人或時かたりてのたまはく、われ淨土宗をたつる心は、凡夫の報土に、むまるゝことを、しめさんがためなり。もし天台によれば、凡夫淨土に、むまるゝことを、ゆるすに似たれども、淨土を判ずる事あさし。もし法相によれば、淨土を判ずる事ふかしといへども、凡夫の往生をゆるさず。諸宗の所談、ことなりといへども、すべて、凡夫報土にむまるゝことを、ゆるさゝるゆへに、善導の釋義によりて、淨土宗をたつるとき、すなはち凡夫報土にむまるゝ事あらはるゝなり。こゝに人おほく誹謗してはいはく、かならず宗義を立せずとも、念佛往生をすゝむべし。いま宗義をたつる事は、たゞこれ勝他のためなるべし。我等凡夫むまるゝ事をえば、應身應土なりとも足ぬべし、なんぞ強に報身報土の義をたつるやと。この義一往ことはりなるに似たれども、再往をいへば、その義

をしらざるがゆへなり。もし別の宗を立せずば、凡夫報土に生ずる義もかくれ、本願の不思議も、あらはれがたきなり。しかれば、善導和尚の釋義にまかせて、かたく報身報土の義を立す。これまたく勝他のためにあらずとぞ、おほせられる

## 第六 圖

上人播磨の信寂房に、おほせられるは、こゝに 宣旨の二つ侍をとりたがへて、鎮西の 宣旨をは、坂東へくだし、坂東の 宣旨をは、鎮西へくだしたらんには、人もちゐてんやとの給に。信寂房しばらく案じて 宣旨にても候へ、とりかへたらんをば、いかゞもちい侍べき。と申ければ、御房は道理をしれる人かな。やがてさぞ 帝王の 宣旨とは、釋迦の遺教なり、 宣旨二ありといふは、正像末の三時の教なり、聖道門の修行は、正像の時の教なるがゆへに、上根上智のともがらにあらざれば證しがたし。たとへば西國の 宣旨のごとし。淨土門の修行は、末法濁亂の時の教なるがゆへに、下根下智のともがらを器とす、これ與州の 宣旨のごとし。しかれば、三時相應の 宣旨、これを取りたがふまじきなり。大原にして、聖道淨土の論談ありしに法門は牛角の論なりしかども、機根くらべには、源空かちたりき。聖道門は、ふかしといへども、時すぎぬれば、いまの機にかなはず、淨土門はあさきに似たれども、當根にかなひやすしと、いひしとき末法萬年、餘經悉滅、彌陀一教、利物偏増の道理におれて、人みな信伏しきとぞ、おほせられる

## 第七圖

震旦に、淨土の法門をのぶる人師おほしといへども、上人唐宋二代の、高僧傳の中より、曇鸞、道綽、善導、懷感、少康の五師をぬきいで、一宗の相承をたて給へり。其後俊乘房重源、入唐のとき、上人仰られていはく、唐土に五祖の影像あり、かならずこれをわたすべしと。これによりて渡唐の後あまねく、たづねもとむるに、上人の仰たがはず、はたして五祖を一鋪に圖する、影像を得たり。重源いよく、上人の内鑿冷然なることをしる。かの當麻寺の曼荼羅は、彌陀如來化尼となりて、大炊天皇の御宇、天平寶字七年にをりあらはし給へる靈像なり。序正三方の縁のさかひ、日觀三障の雲のありさま、人さらにわきまへがたかりしを、のちに文徳天皇の御宇、天安二年に、もろこしよりわたれる、善導大師の御釋の、觀經疏の文を見てこそ、人不審をば、ひらき侍しが、天平寶字七年より、天安二年にいたるまでは、九十六年なり。そのかみ吾朝にて、をられたる曼荼羅の、はるかの後にわたれる、觀經の疏の文に、符合せるをば、不思議とこそ申傳て侍れ。いま上人さきだちて淨土の宗義を、ひらきたまひ、のちに重源入唐の時、かの影像をわたすべきよしを、命ぜられ、わたすところの影像、上人の仰にたがはざること、豈奇特にあらずや。されば道俗貴賤かの五祖の眞影を拜して、いよく上人の徳に歸し、ますく念佛の信を、ふかくしけり。當時、二尊院の經藏に、安置するは、かの重源、將來の眞影なり

## 第八圖

## 法然上人行狀繪圖 第七

上人たゞ諸宗の教門に、あきらかなるのみにあらず、修行おほくその證を得給き。そのかみ四明黒谷にして、法花三昧をおこなひ給しとき、普賢白象にのりて、まのあたり道場に現じ給ふ。又上人ある時、叡空上人ならびに西仙房と、ともにおこなひたまひけるに。山王影向して、納受のかたちをあらはし給けり、これ末代の奇特なり

## 第一圖

上人黒谷にして花嚴經を講じ給けるに、あをき小くちなは、机のうへにありけるを、法蓮坊信空にとりてすつべきよし、おほせられければ、かの法蓮房、かぎりなく、くちなはに、をつる人なりけれども、師の命そむきがたきによりて、出文机の明障子を、あけまうけて、ちりとりにはきいれて、なげすてゝ、障子をたてゝけり。さてかへりて見れば、くちなは、なをもとのところにあるけり。これを見るに、遍身にあせいでゝ、おそろしかりけり。上人見給て、などゝりてはすてられぬぞと、仰られければ、法蓮房しかじかところへ申さるゝに、上人黙然として物もの給はざりけり。其夜法蓮房の夢に、大龍かたちを現じて、我はこれ花嚴經を、守護するところの龍神なり、おそろ

る事なかれ、といふとおもひて、ゆめさめにけり、むかしこの經龍宮にありて、人間に流布せず、龍樹菩薩、龍宮にゆきて、これをひらき見て、人間にかへりて、これをひろめ給き。その、ち覺賢三藏、震旦にして、安帝義熙十四年三月十日より、揚州謝司空寺に、護淨花嚴法堂をたて、花嚴經を譯し給しとき、堂のまへの蓮花池より、毎日に青衣なる二人の童子、あしたにいで、ちりをはらひ、すみをすり、くるれば、いけの底へなん、かへり入ける。經を譯し、をはりてのちは、見えずなりにけり。この經ひさしく龍宮にありしゆへに、龍神うやまひて守護をくはへ侍けるにこそ。上人の披講まこといたりて、龍神を感せしめたまひける。ゆゝしくぞ侍ける

## 第二圖

上西門院ふかく上人に歸しましたして、念佛の御志あさからざりけり。或時上人を請じ申されて七箇日のあひだ説戒あり。回戒の奥旨をのべ給に、一のくちなは、からがきの上に七日のあひだ、はたらかずして聽聞の氣色也。見る人あやしみおもふほどに、結願の日にあたりて、かのくちなは死せり。そのかしらの中より、一の蝶いで、そらにのぼると見る人もあり。天人のかたちにて、のぼると見る人もありけり。昔惠表比丘武當山にして、無量義經を講讀せしに、こゑをきく青雀歡喜苑に生ぜり。かの先蹤をおもふに、この小蛇も、大乘の結縁によりて天上にむまれ侍けるにや

## 第三圖

上人祕密の窓にいり、觀念の床に坐し給しに、あるときは蓮花あらはれ、ある時は羯磨を見、あるときは寶珠を拜す。觀心明了にして、瑞相を眼前にあらはし給ふことおほかりけり

## 第四圖

上人ある夜夢見らく、一の大山あり、その峯きはめてたかし。南北長遠にして西方にむかへり。山のふもとに大河あり。碧水北より出て、波浪南にながる。河原眇々として邊際なく、林樹茫茫として限數をしらず。山の腹にのぼりて、はるかに西方を見たまへば、地よりかみ五丈ばかりあがりて空中に一聚の紫雲あり。この雲とびきたりて、上人の所にいたる。希有の思をなし給ところ、この紫雲の中より、無量の光を出す。光のなかより孔雀鸚鵡等の、百寶色の鳥、とびいで、よもに散じ、又河濱に遊戲す。身より光をはなちて照耀きはまりなし。其後衆鳥とびのぼりて、もとのごとく紫雲のなかにいりぬ。この紫雲又北にむかひて山河をかくせり。かしこに往生人あるかと、思惟し給ほどに、又須臾にかへりきたりて、上人のまへに住す。やうやくひろごりて一天下におほふ。雲の中より一人の僧出で、上人の所にきたり住す。そのさま腰より下は、金色にして、こしよりかみは、墨染なり。上人合掌低頭して申給はく、これ誰人にましますぞやと。僧答給はく、我は是善導なりと。なにのために、來給ぞやと申給に、汝專修念佛をひろむること、貴きがゆへにきたれるなり。との給とみて夢さめぬ。畫工乘臺におほせて、ゆめに見るところを圖せしむ。世間に流

布して、夢の善導といへるこれなり。その面像、のちに唐朝よりわたれる、影像に、たがはざりけり。上人の化導、和尚の尊意にかなへること、あきらけし。しかれば、上人の勸進によりて、稱名念佛を信じ、往生をとぐるもの、一州にみち、四海にあまねし。前兆のむなしからざる、たれの人か、信受せざらん

## 第五圖

上人專修正行としかさね、一心專念こうつもり給しかば、つゝに口稱三昧を發し給き。生年六十  
六建久九年正月七日の別時念佛のあひだ、はじめには、まづ明相あらはれ、次に水想影現し、のちに瑠璃の地すこしき現前す。同二月に寶地、寶池、寶樓を見たまふ。それよりのち連々に勝相あり  
或時は左の眼より光をいだす。眼に瑠璃あり、かたち瑠璃のつぼのごとし。つぼにあかき花あり、  
寶瓶のごとし。或時ははるかに西方を見やり給に、寶樹つらなりて、高下心にしたがひ、或時は座  
下寶地となり、或時は佛の面像現じ、あるときは三尊大身を現じ、或時は勢至來現し給。すなはち  
畫工に命じて、これをうつしとゞめらる。或時は寶鳥、琴笛等の種々の、こゑをきく。くはしきむ  
ね、御自筆の三昧發得の記にみへたり。かの記、上人存日のあひだは披露なし。勢觀房遺跡を相承  
のゝち、これを披見せられけり。高野の明遍僧都は、かの記をひらき見て、隨喜の涙をながされけ  
るとなん

## 第六圖

## 法然上人行狀繪圖 第八

上人三昧發得のちは、暗夜に燈燭なしといへども、眼より光をはなちて、聖教をひらき、室の内外を見給。法蓮房も、まのあたりこれを拜し、隆寛律師も、ことに此事を信仰せられけり。あるとき秉燭の程に、上人のどかに聖教を披覽したまふをとのしければ、正信房、いまだ燈明など、たてまつるとも、覺ざりつるにと、おぼつかなくて、ひそかに座下を伺に、左右の御目のすみより、光をはなちて文の面を照して見給。そのひかりのあきらかなる事、ともしびにすぎたり。いみじくたうときこと、かぎりなし。かやうの内證をば、ふかく隱密する事にて侍にと思て、ぬきあしゝてまかりいでぬ。又ある時、更たけ夜しづかにして、深窓に人なし、上人ひとり念佛し給。御聲勇猛なりければ、よなよな老骨をはげまし、おこたりなき御つとめ、いたはしくも、貴も覺て、もし御要もや、いまずらんとて、正信房まいりて、やりどを、ひきあけて、見たてまつれば、身光赫奕として坐給へる、たゞみ二帖がうへに満り、あきらかなること、暮山に望て、夕陽を見がごとし、身の毛もよだつばかりなり。たうとしといふもおろかなり。心づきなくや、おぼすらん。さればとてやがてまかり出むことも、中々なり。進退わづらふところに、ことのやう、みえぬとや思給けむ、

上人たれぞと問給。湛空と答申されければ、はやして各をも、か様になしたてまつらばやなとぞ、仰けられける。慈恩むかし玄奘の門下にありて、眼より光をはなちて、よる聖教をひらきしかば、泗州大師、上座なりしかども、なを其徳に信伏して、あふぎて師範とし給き。いま邊州にして、未代たりといへども、奇特まことに、上古に恥ざるをや

### 第一 圖

あるとき上人念佛しておはしけるに、勢至菩薩來現し給事ありけり。そのたけ一丈餘なり、畫工に命じて、其相をうつしとゞめられ、ながく本尊とあふぎ、申されけり

### 第二 圖

上人あからさまに、草庵をたちいで、かへり給へけるに、彌陀の三尊、繪像にあらず、木像にあらず、垣をはなれ、板敷にも天井にも、つかずして、おはしましけり。そのちは拜見し給ふこと、つねの事なりけり

### 第三 圖

ところどころに別時念佛を修し、不斷の稱名をつとむること。みなもと、上人の在世より、おこれり。そのなかに、上人元久二年正月一日より、靈山寺にして三七日の別時念佛をはじめ給ふに、燈なくて光明あり。第五夜にいたりて、行道するに、勢至菩薩、おなじく烈にたちて、行道し給け

り。法蓮房夢のごとくに、これを拜す。上人に、このよしを申に、さる事侍らんと答たまふ。餘人は更に拜せず

#### 第四圖

同年四月五日、上人月輪殿に、まいり給て、數尅御法談ありけり。退出のとき、禪閣庭上にくづれをりさせ給て、上人を禮拜し、御ひたいを地につけて、やゝひさしくありて、おきさせ給へり。御涙にむせびて、仰られていはく、上人地をはなれて、虚空に蓮花をふみ、うしろに頭光現じて、出給つるをば見ずやと。右京權大夫入道法名中納言阿闍梨尋玄號本蓮房二人御前に候ける。みな見たてまつらざるよしを申。池の橋をわたり給ひけるほどに、頭光現じけるによりて、かの橋をば頭光の橋とぞ、申ける。もとより、御歸依ふかゝりけるに、この後はいよく佛のごとくにぞ、うやまひたてまつられける

#### 第五圖

ある人、不睡名字上人の念珠を給はりて、よるひる名號をとなふ。ある時あからさまにたけくぎに、かけたたりけるに、一室照耀する事ありけり。その光をたゞし見るに上人恩賜の念珠よりいでたり。珠ごとに歴々たり。なをし暗夜に、星を見るがごとし。奇異の事なりといへり

#### 第六圖

上人の弟子勝法房は、繪をかく仁なりけるが、上人の眞影を、書たてまつりて、其銘を所望しけるに、上人これを見給ひて、鏡二面を、左右の手にもち、水鏡を、まへにをかれて、頂の前後を見合られ、たがふところえは胡粉をぬりて、なをしつけられてのち、これこそ似たれとて、勝法房に賜はせけり。銘の事は、返答に及ばれざりけるを、勝法房後日に又參て申出たりければ、上人の御まへに侍ける紙に

我本因地以念

佛心、入無生忍、

今於此界攝念

佛人、歸於淨土

十二月十一日

勝法御房

源空

とかきて、授られければ、是を彼眞影に押て歸敬しけり。これは首楞嚴經の勢至の圓通の文なり。上人は勢至の應現たりといふ事、世舉てこれを稱す。しかるに、おほくの文の中に勢至の御詞を、自贊に用られ侍るまことに奇特の事也。いま彼眞影を拜たてまつるに、胡粉を塗てなをされたる所多し。これ末代の龜鏡たるによりて、彼御自筆の本を寫て、此繪に加置ところ也。又或人、上人の

眞影を寫て、其銘を申けるにも、この文を書て賜けり。彼正本つたはりて、いまにありとなん申侍る。又讚州生福寺に、すみ給し時は、勢至菩薩の像を、自作して、法然本地身、大勢至菩薩、爲度衆生故、顯置此道場等置文に載られける。委事は、彼配所の卷に、しるすもの也。勢至の垂迹たる條、その證據かくのごとし。尤仰信するにたれり

## 第七 圖

諸人感夢の事、おほきなかに、或人は、上人蓮花のなかにして、念佛し給と見る。あるひとは、天童上人を圍遶して、管絃遊戲すとみる。あるは又、洛中みな鬪諍堅固なれども、たゞ上人の住所ひとり無爲なり。これすなはち念佛するゆへなりと見る。或は嗟峨の釋迦如來、つげての給はく、當時法然房といふ人の、ひらきたる往生の道妙にして、多くのひと、みなそのみちより往生すべしと仰らると見る。されば上人勸化のうち、都鄙に往生をとく人おほし。紫雲音樂こゝにもみえ、かしこにも聞ゆ、夢のつげ、むなしからざる事をしりぬ、極樂にのぞみをかけむともがら、たれか上人のをしへをあふがざらむ

## 第八 圖

## 法然上人行狀繪圖 第九

上人道心うちに薰じ、行業ほかにあらはる、かみ王公より、しも黎元にいたるまで、その徳に歸せずといふことなかりき。後白河法皇、河東押小路の仙洞にて、御如法經を修しますことありき、上人をもて御先達とせらる。文治四年八月十四日、前方便をはじめらる。御經衆は、法皇、妙音院の入道相國師長公源空上人、ならびに門弟行賢大徳、山門には良宴法印、行智律師、仙雲律師、覺兼阿闍梨、重圓大徳、園城寺には道顯僧都、眞賢阿闍梨、玄修阿闍梨、圓隆阿闍梨、圓玄阿闍梨等なり。去十日、日吉社、臨幸ありし時、衆徒、執當澄雲法印をもて、申入けるは、東寺の僧、今度の御經衆に、めし入らるべきよし、そのきこえあり、慈覺大師始行の法則なり、他門の僧しかるべからず。又或上人めし入らるべきよし風聞。これはあながちに、子細を申べからずと云これによりて、東寺の僧はめされず。上人は勅喚ありて、御先達をつとめらる。上人藤次の第一たるうへ、先達たり、一座たるべきよしおほせらる。上人辭申さるといへども、勅定しきりなるによりて第一座に着す。正面の東西に座をしく、東の一座に上人、西の一座に法皇、上人のつきに、入道相國着し給、良宴法印以下、官次にまかせて列座す。行基菩薩は世俗の法によりて、波羅門僧正のしもに着し給き。この例になぞらへば、良宴法印、上座たるべしといへども、別勅にて、上人一座に着せらる。上人禮盤にのぼりて啓白、其後錫杖を誦し、懺法をはじめたまふ。前方便の間は、毎日三時懺法なり、同廿日の後夜の時より正懺悔をはじめらる。後夜の調聲は上人、晨朝の調聲は法皇、御

つとめあり。堂莊嚴、美をつくされ、作法又殿重也。法皇御靈夢の事ましましけり。子細御願文中納言衆に見えたり  
光卿草之

## 第一 圖

九月四日御料紙をむかへらる。件の料紙は觀性法橋の進するところなり。かの法橋、慈鎮和尚干時法印同宿のあひだ、御料紙安置の所は和尚の住房三條白川なり。鳥羽院の第七宮覺快親王の舊跡にてぞありける。良宴法印以下十一人の經衆は、かの所へむかふ。宿老、のこりとゞまる儀になぞらへて、法皇、上人、相國禪門、道場にまうけさせ給ふ。料紙を銅の筒におさめ、御輿に入たてまつりて、むかへたてまつる。南の、ひがくしのしたに案をたて、御輿をかきすへたてまつる。良宴法印以下の經衆、外に候して伽陀を誦す。正面の、明障子をあけられて、法皇伽陀を誦しますますに、上人、入道相國、おなじく助音申さる。料紙を道場に安置の、ち、行道、合殺あり、この儀はさだまれる法式にあらず、上人これを申をこなはれけり

## 第二 圖

同八日寫經の水をむかへらる。下藹の僧衆等、横川にのぼりて、慈覺大師のおこなひ給し、根本の水をくみて、銅の瓶にいれて持參す。同十一日御筆立なり。慈鎮和尚、觀性法橋は御經衆にあらずといへども、もとより如法經中たるによりて寫經の時參ぜらる。和尚は入道相國のしもに着し、

觀性法橋は、仙雲律師のしもに座す。上人禮盤にのぼりて啓白、下座のち行道、行道をはりて、伽庵を誦す、其後十六人着座して、同時に筆をとり、書寫をはじめらる

### 第三 圖

同十二日巳尅に、御書寫ことおへしかば、すなはち十種供養の儀あり。伶人の上達部、透渡殿すひわたのに着す。地下の呂人、日隱の西の腋に座して、沙陁調の調子をふく。正面の庭上に、赤地の錦の地鋪をしきて、その上に机二脚をたて、十種供養の具を安ず。天童二人、舞童十六人東西よりすゝみ出て、供具をとりて南の階下に參じて傳供をなす。衆僧正面の左右にたちて傳供す。このあひだ十天樂を奏す、御導師澄憲法印なり。傳供のときは制禁かたくして參詣の道俗、やり水の北にのぞまずといへども、説法の時は勅許ありて、聽聞の緇素、群をなす。辨説玉をはく、貴賤みな涙をながす、説法のおもむき、前々に超過せり、ことに叡感あるよし、權大納言兼雅卿をもて仰下さる。導師下座の時、千秋樂を奏す。入道相國、唱歌、中御門大納言兼家卿助音、凡今日の儀式、萬代の美談なり、六十の御賀を、こなはれず、自然にこの事にあるかのよし時の人申あへり

### 第四 圖

同十三日御經奉納のために、首楞嚴院に臨幸あり。長吏圓良法印の沙汰として、水飲に御所をまうけ、供御ならびに御行水を用意す。法皇、鳥居の岡より御步行、まつ四季講堂に入御、そのち

如法堂の中門の外に、天童以下供具をさゝげて、左右にたつ。樂人法界房の北の砌に候して、樂を奏す。中門のうちより、御淨履をたてまつりて、如法堂に入御、中門より御堂にいたるまで、蓮道をしく、西の戸より御經を入たてまつりて、正面の南の庇に安ず。御經衆、南の簀子に候す。行智律師、御經をとり出したてまつる。法皇うけとらせおはしまして長吏圓良法印にわたしたまはず、このあひだ伽陀を誦す。御導師圓能法印なり于時法橋、説法のうち中門のほかにして、御布施を給ふ。次に十天樂を奏。さて法界房に渡御のうち、宗明樂を奏し伽陀を誦す、御導師又圓能法印なり。啓白下座のうち、中堂に臨幸あり

## 第五圖

中堂より還御、食堂にして、御裝束をあらためらる。このあひだ、衆徒庭上に群參して、延年種種の藝をほどこす、奉行人定長卿をもて、御願無爲の條、ひとへにこれ衆徒祈念のいたすところなり。叡感はなはだしきよし、澄雲法印におほせくださる。澄雲庭におりて、勅定のおもむきを衆徒におほす、そのうち、ゆうべにおよびければ、すなはち還御あり。亥尅に押小路殿に着御、本道場にして懺法をおこなはる、これを歡喜懺法と號す。抑々慈覺大師の門徒餘流、山門、園城の碩徳高僧、その數おほかるなかに、隱遁の上人を、めしうだして、御先達とせられけること、しかしながら、佛徳のいたり、御歸依のあまりなり

第六圖

法然上人行狀畫圖 第十

高倉院御在位のとき、承安五年の春、勅請ありしかば、主上に一乘圓戒をさづけたてまつらる。卿相頂戴し宮人稽首す、清和御門、貞觀年中に、慈覺大師を紫宸に請じたてまつられ、天皇、皇后ともに、圓戒をうけましましき。上人かの九代の嫡嗣として、法流たゞ一器につたはりき。はるかいにしへのあとををこしたまひぬるこそいみじく侍れ

第一圖

後白河法皇、勅請ありければ、上人法住寺の御所に、參じたまひて、一乘圓戒をさづけ申されけり。山門、園城の碩徳をめされて、番々に往生要集を講じ、おの／＼所存の義を、のべさせられけるに、上人おほせにしたがひて、披講し給けるに、往生極樂の教行は濁世末代の目足なり、道俗貴賤たれか歸せざらむものと、よみあげ給より、はじめてきこしめさるゝように、御きもにそみて、たうとく、御感涙はなはだしかりけり。御信仰のあまり、右京權大夫隆信朝臣におほせて、上人の眞影を圖して、蓮華王院の寶藏におさめらる。先代にも、その例まれなる事とぞ申あへける

第二圖

後白河法皇ひとへに上人の勸化に歸しましたし、御信仰他にことなりしかば百萬遍の御苦行、二百餘ヶ度まで、功をつみ、比類なき御事にてぞましましたしける。建久二年正月五日より、御惱ありけるに、日にしたがひておもらせをはしましければ、御善知識に參ぜらるべきよし、仰下さるゝによりて、二月廿六日に、上人參じたまひて、御戒を授たてまつられ、御往生の儀式をさだめ申さる。

念佛往生の道は、日ごろきこしめしをかれけるうへ、かさねて申入らるゝむね、ねむごろなりしかば、いよく御信心ふかくして、御念佛をこたらせ給はず、御臨終ちかづかせ給ければ、同三月十日戌刻に、御佛を渡たてまつられ、十三日寅刻御臨終正念して、稱名相續し、御端坐ねふるがごとくして、往生の素懷をとげさせ給き。御年六十六なり、誠御宿縁のいたりあわれにぞおぼへ侍

### 第三 圖

法皇崩御の後、かの御菩提の御ために、建久三年秋のころ、大和前司親盛入道法名、見佛、八坂の引導寺にして、心阿彌陀佛調聲し、住蓮、安樂、見佛等のたぐひ助音して、六時禮讃を修し、七日念佛す、結願の時、種々の捧物を取りいでけるを、上人不受の氣をはしまして、念佛は身づからのためにつとめなり。法皇の御菩提に廻向したてまつるとも、布施以外の事なり、ゆめくあるべからずとて、いましめ給ける、これ六時禮讃苦行のはじめなり

### 第四 圖

後白河の法皇の十三年の御遠忌に當て、土御門院、元久元年三月に、御佛事を修せられけるに、上人蓮華王院にして、淨土の三部經を書寫せられ、能聲をゑらびて六時禮讚を勤行して、ねんごろに御菩提をぞ訪申されける

又大和入道見佛もおなじく、法皇の御菩提をいのり申さむために、いづれの行法をか修べきと思惟するに、法皇見佛が夢に、我菩提をば如法に訪べきよしを示されけり。則見佛此由を、上人に申ければ、上人淨土の三部經を、如法に書寫すべき次第、法華の如法經になぞらへて法則を出さる。所謂かの記云

#### 淨土三部經次第

一、御料紙事、紙曾かうそを植て千日是を行へ、其間は念佛禮讚を用べし、若かくのごとくをこなへる料紙なくば市の料紙用ふべし

一、堂莊嚴事 如常

一、前方便七ヶ日事、沐浴、潔齋、淨衣等、常のごとし

但絹綿の類は用否人の意にあるべし

一、入道場次第、門前の灑水、并、香呂、花告、香象等常のごとし、次に無言行道三反、奉請、合殺等、常のごとし。次に諸衆寶座の前に列立して惣禮の伽陀を誦べし。其詞云

歸命本師釋迦佛 十方世界諸如來

願受施主衆生請 不捨慈悲入道場

南無十方三世一切諸佛、哀感納受、入此道場

本國彌陀諸聖衆 平等俱來坐道場

道場聖衆實難逢 衆等頂禮彌陀尊

南無極樂世界、諸尊聖衆、慈悲護念、證明功德

次に彌陀を讚歎したてまつるべし

弘誓多門四十八 偏標念佛最爲親

人能念佛佛還念 專心想佛佛知人

南無極樂化主彌陀如來、命終決定、往生極樂

次に經を讚歎すべし

念念思聞淨土教 文文句句誓當勤

憶想長時流浪久 專心聽法入真門

南無淨土三部、甚深妙典、命終決定、往生極樂

次に禮讚、日没の時より是を始べし、諸衆着座、導師登禮盤、禮讚の後、高聲念佛三百反、但

時の早晚によるべし、禮讚の時刻は、日没申時、初夜戌時、半夜子時、後夜寅時、晨朝辰時、日中午時、なるべし

次に佛經を讚歎すべし、伽陀、其詞先のごとし。但開白の時は念佛以後の讚嘆を略べし、又開白以後は惣禮の伽陀を略べし。次に例時の作法、常のごとし、但日没一時を用べし。次に讀經は雙卷觀經なるべし、轉讀の多少、時の早晚に隨べし。次出堂

後々の時、これになぞらへて知べし、前方便、七ヶ日の間、日別かくのごとくなるべし

一、寫經七ヶ日事、沐浴、潔齋、入道場、禮讚、念佛、讚嘆、讀經等の次第、前方便のごとし。一事も違すべからず。筆立の次第、初日、晨朝の禮讚以後、啓白有べし、其器量を選べし、分經、并墨筆等以下の諸事、常のごとし、日別の書寫、禮讚已後、多少時によるべし、但七ヶ日の間に其功を終べき也、日別解説、日中の禮讚以後なるべし。日々の次第、是になぞらへて知べし、七ヶ日の間の儀式、かくのごとし

次に奉納の次第、常のごとし、佛經讚嘆、先のごとし、但讚嘆の多少、時宜によるべし、奉納路次の間の合殺常のごとし

上人記録の法則かくのごとし、追福のために、是等の善根を修する事、このときよりはじまれるとなむ、申つたへ侍る。されば其後三部經を如法に書寫する事、世におほく聞へ侍り

第五圖

後鳥羽院、度々 勅請ありて圓戒を御傳受、上西門院、修明門院、同じく御受戒ありき。かかりしかば、三公、公卿、かうべをかたぶけ、一朝あふぎて、傳戒の師とせずといふ事なかりき

第六圖

法然上人行狀繪圖 第十一

諸人の歸依あさからざりしなかに、九條關白殿下 兼實公號後法性寺殿 又號月輪殿 信仰他にことに崇重比類なかりき。二月十九日法性寺殿の御忌日に御佛事ありけるに傳供の時僧俗座をわかちてたちならべり。

今日はことにねんごろなる佛事也、上人も傳供に立給べしと、殿下おほせ事ありければ、松殿基母公まことにさ候べしと申給に、上人は隱遁の身たるうへ凡僧にておはするに、慈鎮和尚于時僧正受戒の師範たるに恕せられて上人を座上にひき申されければ、菩提山の僧正僧正おなじく上座をゆづりたてまつりたまふ。上人兩僧正の上に立て、松殿の俗の一座にておはしましけるにむかひて僧の一座なりけり、道徳のいたりいみじき事にも侍かな

第一圖

月輪殿をつくられけるに、例もなき屋を、一字さしつを下させられけり。殿下の御所おほく見候

へども、かかる屋いまだ見候はずと、奉行の三位範季卿申ければ、思食様ありとて、いそがせられければ、まづ造たててけり。何事の御料にかとおもふ程に、はや上人の御息所なりけり。老者にてをはしませば、まづここにてやすめたてまつりて、のちに御對面あらむためにてぞ有ける。御歸依のあまり、これまでの御沙汰におよびければ、たぐひなく有がたき事にぞ、時の人申あへける

## 第二 圖

ある時上人月輪殿へ參じ給へるに、殿下御はだしにておりむかはせ給へば、聖覺法印、三井の大納言僧都覺心、おなじくおりむかひ恐々せられけり。上人僧都をあやしげに見たまふ、聖覺あれは大納言僧都御房候と申さるれば、僧都とりあへず、覺心となのり申されき。意は大納言も僧都も世におほければ、實名にてそれとしられたてまつらむとなり、殿下かやうにせさせたまへば、まして卿相雲客のおりさはがるゝ事ことはり也

## 第三 圖

建久八年上人いさゝかなやみ給事有けり。殿下ふかく御歎ありける程に、いく程なくて、平愈し給にけり。上人同九年正月一月より草庵にとちこもりて別請におもむき給はざりければ、藤右衛門尉重經を御使として、淨土の法門、年來教誠を承るといへども、心腑におさめがたし、要文をしるし給はりて、かつは面談になずらへかつはのちの御かたみにもそなへ侍らむと仰られければ、安樂

房外記入道を執筆として、選擇集を選せられけるに、第三章書寫のとき、予もし筆作の器にたらずば、かくのごとくの會座に參ぜざらましと申けるをき、給て、この僧慚慢の心ふかくして惡道に墮しなむとて、これをしりぞけられにけり。その後は眞觀房感西にぞかゝせられける。此書を選進せられてのち、同年五月一日上人の夢の中に、善導和尚來應して、汝專修念佛を弘通するゆへに、ことさらにきたれるなりとしめしたまふ。此書冥慮にかなへる事しりぬべし、ふかく信受するにたれり

## 第四 圖

殿下の御歸依あさからずして、上人參たまふごとに殿下おりむかはせ給へば、公卿殿上人のおりさはがるゝ事を、上人うるさき事におもひたまひて、九條殿へまいり給はざらむために、房籠りとて別請におもむき給はず、いづかたへもありき給はざりけり。殿下しきりに御歎ありて、たとひ房籠なりとも、身に違例などの侍らむ時は、來給なんやと仰られければ、さやう御時は子細におよび侍らずと申されければ、せめても請申されむとては常に御違例とぞ號せられける。此上は辭申に所なくして參給けるを見て、門弟正行房心中に、あわれ房籠とてよの所へはましますさずして、九條殿へのみまいり給事しかしながら檀越をへつらひたまふところ、人はそしり申さむずれ、しかるべからぬわざかなとおもひてねたる夢に、上人汝はわが九條殿へまいる事をそしりおもふなと仰らるゝ

に、いかでかさる事候べきと申は、汝はさおもふ也。九條殿と我とは先生に因縁あり、餘人に准ずべからず、宿習かぎりある事をしらずして、誘する心をおこさば、定て罪をうべきなりと仰らるゝと見る。さめてのち上人にこのよしをかたり申ければ、さてぞかし、先生に因縁ある事なりとぞの給ける。御歸依他にことなるほど、まことにたゞ事にあらずおぼえ侍る

## 第五圖

殿下ひとへに念佛門に入給にしのちは、浮生の榮耀をかるくして、往生淨土の御いとなみ他事なかりき。つゝに建仁二年正月二十八日、月輪殿にして御素懷法名 圓證をとげらる。上人を和尚として圓戒を受持し、御歸依ますますふかゝりけり

## 第六圖

# 法然上人行狀繪圖 第十二

大炊御門左大臣經宗公所勞の時、或人の方便にて上人を知識に請じ申されけり。念佛往生の事日ごろいと沙汰におよばぬ人にて、左右なく勸進の事中々あしさまなるべかりければ、上人のはかりごとにて、屏風をへだてゝ、ある僧となにとなく法門ををほせられけるに、天竺震旦我朝まで佛法のつたはれる次第など、ゆゝしく仰られたてゝ、念佛往生の末代相應の法なる事などこまかに宣説

し給ふに、左府これをきゝ給て、信仰の心をこり給にければ、一すぢにその勸化にしたがひ、歸敬他にことなりき。生年七十一、文治五年二月十三日出家をとげられにけり。法名金剛覺爲、寛平法皇御名之由、在茂申間命終之後改法性覺所勞次第に危急のあひだ、同廿七日より上人參住して念佛をすゝめ申さる。翌日辰尅臨終正念にして往生をとげ給にけり。上人の心ばせ、まことにかしこくぞ侍ける

## 第一 圖

花山院左大臣兼雅公は、ふかく上人に歸したまひて、鎮西庄園の土貢をわかつて毎年に施入せられけり。我は院内よりほかは車たてることなし、しかれども法然上人の庵室に車たてたらむは、なにかくるしかるべきとて、つねにわたりたまひて、圓頓戒をうけ念佛の法門を談ぜられけり。生年五十四正治二年七月十四日に出家をとげ、同十六日に往生を遂られけるとなむ

## 第二 圖

右京權大夫隆信朝臣は、ふかく上人に歸し、餘佛餘行をさしをきて、たゞ彌陀の一尊をあがめ、ひとへに念佛の一行をつとむ。つるに上人にしたがひて、建仁元年に出家をとげ法名を戒心と號、一向專念の外他事なかりけり。生年六十四の春所勞危急にをよぶ。上人きゝ給て、住蓮安樂二人の門弟をつかはして知識とせられけり。すでにをはりにのぞむに、二人の僧を左右にをきて、病者と知識と同音に念佛し、來迎の讚をとなへ、端坐合掌して往生をとぐ。元久元年二月廿二日なり、紫

雲音樂以下の奇瑞一にあらず。のちに正信房かの墓所にむかひて念佛したまふに異香なをうせず、日本往生傳にしるし入られけるとなむ

### 第三 圖

卿二品の弟民部卿範光は、後鳥羽院の寵臣なり。ひとへに上人に歸して稱名のほか他事なかりけり。生年五十四の春承元元年三月十五日に出家をとげ、法名を靜心と號、病惱火急のよしきこしめされければ、しのびて 御幸ありけり。後生の事いかゞおもひさだめ侍と御たづねありければ、今度の往生決定して更疑所候はず。其故は、去夜の夢に一人の高僧來、誰人にましますぞ、と問に、我はこれ源空也、唐にして善導となづけ、此土にしては源空という、此界に來て衆生をみちびく事已三箇度也、今汝に命終の期をしめさむがために來臨す、明後日午尅その期なるべしとのたまふと見て夢さめ侍ぬ、已冥のつげにあづかれり、往生空かるべからざるよしを存と申、是を聞食されて深く隨喜有けり。件日時すこしもたがはず、正念に安住し稱名相續して往生をとぐ、不思議の事なりけり

### 第四 圖

大宮の内府實宗公は、歸敬の心さし他にことにおはせしかば、つねに上人に謁して念佛往生のみちをあきらめ、ついに上人を和尙として建永元年十一月二十七日出家をとげ、專心のつとめおこたり

たまはず、上人の入滅をかなしみて初七日の諷誦をさゝげられき、生年六十七建曆二年十二月八日正念たがはず、念佛相續して往生をとげられにけり

## 第五 圖

野宮左大臣公繼公は師弟の契あさからざるによりて、興福寺の衆徒上人の念佛興行をそねみ申て、奏聞にをよびし時は、上人ならびに弟子、權大納言公繼公を遠流せらるべきよし申狀をさゝぐといへども、更其心ざしをあらためず、專修のつとめおこたる事なくして、生年五十三嘉祿三年正月廿三日に職を辭し、同卅日種々の奇瑞をあらはして往生をとげ、いまに末代の美談となり給へり。すべて月卿雲客のなかに、化導に歸する人おほく侍しかども、しげきによりてのせず

## 第六 圖

## 法然上人行狀繪圖 第十三

聖護院の無品親王靜惠御違例のとき、醫療術をつくさるといへども、しるしなかりければ、門徒の上總宰相僧正行舜、大貳僧正公胤以下の人々、信讀の全般若經を轉讀して、祈禱をいたさる。この人々はみな、佛家の鸞鳳、僧中の龍象なりき。しかれども、すでにあやうくをはしましければ、この人々をさしをかれて上人を招請せられしに、御使二度まではかたく辭退してまいりたまはず。

第三度の御使に、宰相律師實昌といふ人來臨して、理をまげて一度まいりたまひて、念佛の事申きかせまいらせたまへとて、ひきたつる様にせしかば、まことに往生しますべき人にもや御坐らんとて、やがて律師の車にのり具してまいりたまひぬ。親王御對面ありて、いかゞしてこのたび生死はなれ侍るべき。後生たすけたまへと仰られければ、上人臨終の行儀を談申され、彌陀本願のおもむきをのべ給に、親王感涙しきりにくだりたまひ、歸敬の掌をぞあはせられける。上人はやがてかへり給にければ、次の日御往生ありけるに、最後に念佛一萬五千反申させたまひて、念佛ともにも、御息とゞまりたまひにけり。諸人隨喜の掌をあはせ、上人の徳をぞほめ申ける。實昌律師、のちに御往生のやうを上人にかたり申ければ、上人もよろこび申されけり

## 第一 圖

延曆寺東塔、竹林房の靜嚴法印、吉水の禪房にいたりていかゞして此たび生死をはなれ候べきとの給ければ、源空こそたづね申たく侍れとこたへ申けるに、法印又決擇門はさる事にて、出離の道にをきては、智徳いたり道心ふかくましますせば、さだめて安立の義候らんと申さるれば、源空は彌陀本願に乗じて、極樂の往生を期する外は、またくしることなしと。法印申さるゝ様、所存もかくのごとし、美言をうけ給て、愚案をかたくせんがためにたづね申所也。但妄念のきおひをこり侍るをば、いかがし候べきと。上人のたまはく、是煩惱の所爲なれば、凡夫のちから及べからず。只本

願をたのみて名號を唱れば、佛の願力に乗じて往生を得としれり。法印信心決定し、疑念忽にとけぬ。往生更にうたがひなしとて、退出し給けり

## 第二 圖

上人清水寺にして、説戒のつるでに、罪惡の凡夫なれども、本願をたのみて念佛すれば、往生うたがひなきむね、ねむごろにすゝめ給ければ、寺家の大勸進沙彌印藏、ふかく本願を信じ、ひとへに念佛に歸す。是によりて文治四年五月十五日、瀧山寺を道場として、不斷常行念佛三昧をはじめしに、能信といへる僧、香爐をとりて、開白發願して行導するに、願主印藏寺僧等、ならびに、比丘比丘尼そのかずをしらず結縁しけり。其行いまに退轉なし。阿彌陀堂常行念佛と號する是なり。抑清水寺の靈像は、極樂淨土には一生補處の薩埵、娑婆穢國には、施無畏者の大士なり。仁和寺入道親王の御夢想に觀音身づからのたまはく、清水寺の瀧は過去にもこれありき。現在にも是あり。未來にも又是あるべし。是すなはち大日如來の鍔字の智水なりとて一首を詠じたまふ

清水の瀧へまいればをのづから現世あんをむ往生極樂

としめし給ければ、大威儀師俊縁を御使として、寺家へ仰をくられけるとかや。まことに其たのみふかゝるべきもの也。上人の勸化によりて、此みぎりにして不斷念佛をはじめけるも、よしある事にや侍らん

### 第三 圖

南都興福寺の古年童は、上人清水寺にて説戒のとき、念佛をすゝめ給をきゝて、歸敬渴仰のあまり、やがて發心出家して松苑寺のほとりに、いほりをむすびて念佛しけるが、つるに靈瑞を感じ、高聲念佛して往生をとぐ。能信といふ僧、如法經のかうぞをうへながら、往生人に縁をむすばむために、棺のさきの火の役をつとめてかへるに異香ころものうへに薫ず。人々奇特のおもひをなし、信心をますものおほかりけり

### 第四 圖

建仁二年三月十六日、上人かたりてのたまはく、慈眼房は受戒の師範なるうへ、同宿して衣食の二事、一向このひじりの扶持なりき。然て法門をことごとく習たる事はなし。法門の義は、水火のごとく相違して、常論談せしなり。此聖と源空とは、南北に房をならべて住したりしに、或時聖の居給へる房のまへをすぐるに、聖見給て、あの御房やとよび給へば、とまりて縁にゐて候と申に大乗實智おこさで、淨土往生してんやとの給に、往生し候なんと答申とき、なにゝさは見えたるぞとの給あひだ、往生要集に見えて候と申に、往生要集のうちを見給たるぞとの給間、いざ誰かうちを見ざるやらんと申たれば、聖腹立て、枕をもてなげうち打給へば、やはらにげて我房のかたへまかりたれば、をふておはして、はゝきのゑをもちて肩をうちなどし給き。又のちに文をもてをはし

て、これはいかにいふことぞとの給を心のうちに無益なり。事のいでくれば、いまは物申さじとかひをおこして、いざいか候らんと申たれば、又腹立て、それらかやうなる人を同宿したるは、かやう事をもいひあはせんれうにてこそあれとの給き。かやうにして、常にいさかひはせしかども最後には、覺悟房といひし聖に二字をかゝせて、かへりて弟子になりて、房舍聖教の讓文をも、もとは讓渡とかゝれたりしを取返して、進上とかきなをしてたびて、生々世々にたがひに、師弟とならむ料に申ぞとの給き。眞言の師範なりし相模阿闍梨重宴も、最後には受戒の弟子になりて、戒をうけ給き。正しく三部の灌頂を授給し、丹後の迎接房もかへりて弟子となりて、顯宗の法門、ならびに淨土の法門をば、源空にならひて、終に往生を遂にき。當時の院主僧都圓長は、重宴阿闍梨の眞言の弟子なれば、源空には同朋なり。しかるに、かの圓長眞言の教相を、重宴阿闍梨にとひければ、心には覺れども、我は非學生にてえいひゝらかぬぞとよ、法然房にとひていはせて申さむと重宴の給ければ、圓長も後には弟子になりてものならはむといひて、やがて受戒して師弟の振舞にてありき。最初の師範なりし美作の觀覺得業も弟子になりて、源空を戒師として受戒し給き。多くの師範みな弟子となり給しなかに、當時の碩學どもの慈眼房の受戒の弟子ならぬはなきに、其師の慈眼房の、かへりて弟子になりたまひたる事は不思議の事とこそおぼゆれなど、さまざまかたりたまへば、きく人みな隨喜し、ふしぎの事なりとぞ申あひける

第五圖

左衛門の志さくはん 藤原宗貞ならびに妻室惟宗の氏女、夫婦心をひとつにして堂舎建立の發願をなし、雲居寺の北ひむがしのつらに其地をしめ、建仁元年四月十九日に上棟、同二年春の比其功すでに終にけり。本尊は阿彌陀の像、脇士は觀音地藏を安置したてまつる。同年秋のころ、上人吉水の御房より、雲居寺の勝應彌陀院へ百日參詣し給しとき、願主宗貞門前に蹲居して、堂舎建立の旨趣をのべ、御供養あるべきよしをのぞみ申ければ、上人堂内に入給て、佛像安置の體を御覽せられ、この堂は源空が供養すべき堂にあらずとて出られにけり。願主其ころを得ずして周章するところに、或人申云、上人は勢至菩薩の垂跡にましますといふ事人口あまねし。しかるに脇士に勢至菩薩のましまさざる事、上人の御慮に違するかと申ければ、いそぎ又勢至菩薩を造立し、もとの地藏をば異所にわたしたてまつり、其跡に勢至菩薩をすへたてまつりて後、上人また雲居寺御參詣のとき、建仁二年八月晦日、かさねて案内を申ところに、相違なく供養をとげられにけり。別御啓白なし。ただ念佛千遍をとなへたまひ、やがて不斷念佛を始行せられ、寺號を引接寺とつけらる。この堂いまだあり。勢至菩薩のうしろにすへたてまつる地藏これなり

第六圖

法然上人行狀畫圖 第十四

天台座主權僧正顯眞、いまだ大僧都におはせしとき、承安三年生年四十三にして、官職を辭し菩提をもとめて、大原に籠居、春秋四箇年にをよぶところに、安元二年七月八日建春門院崩御のあひだ、かの御菩提のために、法住寺に新法華堂をたてられ、七々の御忌をむかへて、同八月廿五日に行法をはじめられしに、その先達に、叡山法華堂の一和尚正覺房眞惠をめされしかば、勅定にしたがひしとき、大原の僧都かの闕をのぞみて、聊宿願の事侍り、しばらく入衆あるべからざるよし、堂中にふれをくりてのち、同九月一日子刻に登山し、則參堂して一衆に列し、藹次にまかせて、三床の二和尚に著し、丑刻一時つとめられてのち、一床の一和尚につきたまひぬ。其後は禪光房顯明を代官として、三大師天台傳教慈覺の御忌日、以下大小の課役等みな新入のごとく勤仕せられぬ。又四季の懺法の初夜の時には、かならず參堂したまひき。是則出離の道、たやすからざる事をなげきて、名利の學道をのがれ籠居すといへども、決定出離の直路、思案いまだ一決せず。晝夜にこの事のみなげくところに、十二禪衆の闕をきくとき、かの半行半座の行法は、天台大師御筆の法華經を本尊として、傳教大師弘仁三年七月に草創したまへる要行なり。これ生死解脱の直路なるべしとおもひよりたまひて、十二禪衆に列し給にけり。毎日毎時のつとめに、懺法一卷をくはへ修する事は、かの僧都はじめをかれしかば、一衆同心してその行いまにをこたらず

其後八ヶ年の歳暦をすぎて、壽永二年九月に、日吉の御幸のとき、座主明雲の賞をゆづりて、法印に叙せらるといへども、かたく松門をとち、ひそかに蓬屋に居してことにしたがはず。たゞ生死のいでがたき事をのみなげく。おなじ法流をくめるよしみをもちて、つねに永辨法印と、出離の道をかたりあはせ給に、かくのごときの事は、法然上人に御尋あるべきよしを、永辨申けるにつきて相模房といふものを使者として、登山の便宜にかならず音信せしめ給へ、申承べき事侍よし、仰られたりければ、上人坂本へ渡り給てかくと申されけり。法印おはしましあひて對面し、このたびいかゞして、生死をはなれ侍るべきとの給に、上人いかにも御はからひにはすぐべからずと。法印申されけるは、先達にましませば、さだめて思さだめ給つるむねあるらむ、しめし給へとなりとの給へば、上人自身のためには、いさゝかおもひさためたるむね候。たゞはやく極樂の往生を遂候べしと申されければ、法印順次の往生とげがたきゆへに、このたづねをいたす。いかゞしてこのたび、たやすく往生をとぐべきや。との給ふとき、上人答給はく、成佛はかたしといへども、往生は得やすし。道綽善導の心によれば、佛の願力を強縁として、亂想の凡夫淨土に往生すと、其後たがひに言説なくして、上人かへり給てのち、法印の給けるは、法然房は智惠深遠なれども、いさゝか偏執の失ありと。上人この事をかへりきゝ給て、わが知ざる事には、かならず疑心をおこす事なり、との給けるを、法印かへりきゝ給て、まことに然なり。われ顯密教文に稽古をつむといへども、しか

しながら、名利のためにして、淨土を心ざさざるゆへに、道綽善導の釋義をうかゞはず、法然房に  
あらずば、たれかゝくのごとくのことばをいだすべきやとて、このことばにはちて、百日の間大原  
に籠居して、淨土の章疏を披閱し給てのち、すでに淨土の法門をこそ見立侍にたれ、來臨して談ぜ  
しめ給へと仰られたりければ、文治二年秋のころ、上人大原へ渡り給ふ。東大寺の大勸進俊乘房重  
源、いまだ出離の道をおもひさためざりけるをあはれみ給て、このよしをつげ仰られたりければ、  
弟子三十餘人を相具して大原にむかふ。勝林院の丈六堂に會合す。上人の方には、重源以下の弟子  
どもそのかずあつまれり。法印の方には、門徒以下の碩學ならびに大原の聖たち坐しつらなれり。  
山門の衆徒をはじめて見聞の人おほかりけり。論談往復する事、一日一夜なり。上人法相、三論、  
花嚴、法華、眞言、佛心等の諸宗にわたりて、凡夫の初心より佛果の極位にいたるまで、修行の方  
軌、得度の相貌つぶさにのべ給て、これらの法みな義理ふかく利益すぐれたり。機法相應せば、得  
脱くびすをめぐらすべからず。たゞし源空ごときの頑愚のたぐひは更にその器にあらざるゆへに、  
さとりがたくまどひやすし。しかるあいだ源空發心の後、聖道門の諸宗につきて、ひろく出離の道  
をとぶらふに、かれもかたくこれもかたし。是則世くだり人をろかにして、機教あひそむくゆへな  
り。しかるを善導の釋義、三部の妙典のころ、彌陀の願力を強縁とするゆへに、有智無智を論ぜ  
ず、持戒、破戒をえらばず。無漏無生の國にむまれて、ながく不退を證する事、たゞこれ淨土の一

門、念佛の一行なりとて、法藏の因行より、彌陀の果徳にいたるまで、理をきはめ詞をつくしをはりて、たゞしこれ涯分の自證をのぶるばかりなり。またく上機の解行をさまたげむとはあらずとの給ければ、法印よりはじめて満座の衆、みな信伏しにけり。かたちを見れば、源空上人、まことには彌陀如來の應現かとぞ感歎しあへりける。法印香爐をとり高聲念佛をはじめ行導したまふに、大衆みな同音に、念佛を修する事、三日三夜、こゑ山谷にみち、ひゞき林野をうごかす。信をおこし縁をむすぶ人おほかりき

## 第二 圖

法印道心うちにもよをして、出離の要路をもとめられけるに、上人の諷諫を得給てのちは、たちどころに餘行をさしをきて、一向專修の行者となり給にければ、自身の出離、ひとへに念佛往生を期したもふのみにあらず、あまさへ又他人をすゝめられき。姨の禪尼をすゝめむために、念佛勸進の消息をつかはさる。世間に流布して、顯眞の消息と號するこれなり。そのことばにはく、われ佛を念ずれば、佛われをてらし給。光明われをてらせば、罪障きえずといふ事なし。藥王樹にふるゝものは、毒なれどもくすりとなる。光りをかぶらんもの、たれか罪障のこりあらむ。かくばかりやすき行を、無數劫のあひだおもひよらざりけるかなしさよ。時すぎたる智慧禪定を修せむよりも利益現在なる光明名號を稱念すべし。一行即一切行なれば念佛の一行に諸行ことごとくをさまり、

一念即無量念なれば、一稱彌陀なに不足かあらむ。法界宮にいらんとおもはゞ、極樂の東門よりいれ。法身の體を證せむとおもはゞ、彌陀の名號をとなふべし。道綽は講説をすて、一向に念佛になり、善導は雜行をきらひて專修をすむ。占留の林にいりぬれば、餘の香をかゞず、淨名の室にいりぬれば、功德の香のみかぐ。この山にいらむ人は、たゞ念佛の香のみかぎ、念佛のこゑをのみきくことになし候はゞや取除。文治二年十二月廿九日、護摩堂の尼御前へと云云。法印專修の身となり、念佛を行とし給し事、この消息にあきらかなり。又十二人の衆をさだめをきて、文治三年正月十五日より、勝林院に不斷念佛をはじめおこなはれしに、法印は十二人の隨一にて、戌刻をぞつとめ給ける。開白の夜は十二人皆參じ行道して、同音の念佛を修するに、毘沙門天王列にたち給へりけるを、法印まのあたり拜したまひて、良忍上人の融通念佛には、鞍馬寺の毘沙門天王くみしたまひ、あまさへ諸天善神をすゝめ入たまひけることもおもひあはせられ、いよく信心をましたうとくおぼへければ、念佛守護のために、毘沙門天王を當堂に、安置せられけり

### 第三 圖

法印一の大願をたてゝいはく、この寺に五坊をたてゝ一向稱名を相續して、餘行をまじへつとめじと、その願むなしからず、つゝに文治三年十月にはたされにけり。池上の阿闍梨皇慶の舊跡、乙護法守護の靈地に五坊をたて、楞嚴院安樂の谷をうつして、新安樂と號し、性智房、鏡智房、妙智

房、佛智房、勝智房とぞつけられける。その行法いまに退轉せずとなむ。かのとき大佛の上人俊乘房、又一の意樂ををこして、わが國の道俗、炎魔王宮にひざまつきて、名字をとはれんとき、佛號をとなへしめむために、阿彌陀佛名をつくべしとて、みづから南無阿彌陀佛とぞ號せられける。これ我朝の阿彌陀佛名のはじめなり

#### 第四圖

其後三千の衆徒をして舉申によりて、文治六年三月七日、天台座主に補せらるといへども、かたく辭申給しを、勅使大原へむかひて、宣命をくだして座主職をさづけらる。つゝにめし出されて、同五月廿四日、最勝講の證議をつとめ、同二十八日權僧正に拜任す。治山三箇年のあひだ、内論義二ケ度、寂光大師の御廟の番論義、傳教大師の御廟淨土院の番論義など、とりおこなはれ、もはら吾山の佛法の絶たるをつぎ、すたれたるをおこされしかども、かたはらにはなを、稱名の行業おこたらずして、法華堂の初夜の行法には高聲念佛千反をくわへ修せられき。その行いまに退轉なし。日來の腫物のいたはり、にはかに増氣して、淨土院の番論義の夜、建久三年十一月十四日寅刻、東塔圓融房にして、正念たがはず念佛相續し、往生の素懷をとげ給き。遺言のむねありければ、則大原にをくりたてまつりぬ。近古の高僧山門の英傑なり。しかしながら上人の訓導によりて、出要をおもひさだめられき。心あらむ人、たれかそのあとをこひねがはざらん。僧正つねにの給けるは、

一向專念の身となりて、顯密の行業をさしをきははじめは、よにこゝろぼそかりしなりとぞ、申されける

## 第五圖

## 法然上人行狀繪圖 第十五

慈鎮和尚號吉水僧正  
慈圓

は法性寺殿忠通公の御息、青蓮院の覺快法親王  
第七宮の附弟、山門の鑰鍵秘教の

棟梁として三昧の一流秘決をつくし奥義をきはめ、山務四ヶ度興隆むかしにこえ、名望世にすぐれ給へり。しかれども、宿習の開發し給けるにや、しきりに世間の榮耀をいとひふかく出離の要道をたづね、隱遁のこゝろざしあさからずして、より／＼籠居のいとまを申されけるに、敢て勅許なかりければ、その本意をとげられずといへども、あるときしばらく西山の善峯寺に籠居して、心閑につとめおこなはれけるに、いつしか勅使ひまなくして、つるに召出され給にけり。その後は隱居のすまひもかなはざりければ、つねに上人に御對面ありて、底下の凡夫開悟得達の要義を談ぜられけるに、上人諸宗の大綱をあげて、一々の義理をつくさるゝに、みなこれ上代上機のためのをしへにして、末代下根のたぐひをよびがたし。淨土の宗旨稱名の本願のみぞ、苦海の船師愛河の橋梁にて愚鈍下智の當機にあひかなへるとて、聖道淨土の奥義をのべられければ、和尚隨喜の御心ねんごろ

にして、一乘圓頓の戒をうけ、散心稱名の行をぞ崇重せられける

## 第一 圖

本願の旨趣をとぶらひ、極樂の往生をのぞみましくけるあまりにや、建仁元年九月二十二日ヨリ七ヶ日のおひだ、日吉聖眞子の拜殿にて、實圓、實全、仁慶、良尋已下二十餘人の門弟をともなひて、かつは本地彌陀の内證に資し、かつは垂跡明神の外用をかざらんがために、慈覺大師の古風をしたひ、西方懺法をぞをこなはれける。六時の時ごとに、高聲念佛千反までとなへ給しに、偏執我慢の大衆、さためて違亂をなす事やあらんと人おもひあへりけるに、七ヶ日のおひだ、そこばくの大衆群集すといへども、みな貴敬のたなごゝろを合はせて、誹謗のくちびるをうごかさず。信心無貳のまへには、魔障たよりをえざるにやと、見聞の諸人不思議の思をなし、たとまずといふ事なかりけり

## 第二 圖

四天王寺の別當に補任せられし時は、大僧正行慶寺務のとき、顛倒して後、としひさしくなりにし繪堂を新造して、漢家本朝の往生傳をえらび、尊智法眼におほせて、九品往生人を畫圖にあらはし、入道相國頼實公以下九人の秀才をすゝめて、和歌を詠じて、九品面々の行狀を稱嘆し、菅宰相千時爲長卿をして、四韻の周詩を賦せしめ、權大納言教家卿、色紙形をぞ清書せられける。所謂大藏卿

上品上生 智覺禪師 新修往生傳

九品蓮臺其最上 杭州智覺獨當機

詞花永馥神棲賦 宿鳥不驚寂定衣

直詣西方生死斷 不經陰府古今稀

炎王常拜畫圖像 蘇息高僧面見歸

九のしなかみなきはなの

うてなにもころものうらに

とりやすむらん 入道太相國頼實公

上品中生 尼善慧 戒珠集

賢劫如來放大光 善哉善惠往西方

六旬有限新泉路 三昧無人舊道場

池上蓮粧生八葉 俗間花色恥餘香

眼前兼得佛靈告 九品妙臺第二望

ふるさとにのこるはちすは

あるしにてやとるひとよに

はなそひらくる 前攝政殿下道家公

上品下生 侍從所監藤原忠季 後拾遺往生傳

我朝朝請大夫士 二世清祈一念深

勁節先彰同雪竹 善根高挺屬雲林

三年十月黃昏淚 上品下生金刹心

夢裏乘蓮西去速 客塵自是不能侵

みしゆめのやどをうつゝに

さとりきてきのふの花に

つゆそひらくる 權大納言基家

中品上生 大原沙彌 戒珠傳

大原貧侶臨河畔 欲畫彌陀功獨遲

尊像未成沙暖處 浮生易滅雨來時

夜夢縱告出離道 老淚不堪憶子悲

中品上生今所示 至于舊友各相思

ゆふたちにもづもまさこの

河なみやちすのなかの

うへのしらつゆ 前太政大臣公經公

中品中生 少將義孝 保胤往生傳有夢告

天延之比無常理 子葉落風槐體家

故苑露消空暗淚 荒原煙盡只春霞

羽林昔有雙棲鳥 夢路今攀一詠花

極樂界中詩上趣 品生所指足相加

しのはすよなにあふるさとの

むめかかもかさなる中の

はなのやとりに 右大將實氏

中品下生 沙門智縁 戒珠傳

昔在人間雖放逸 歸眞季積智縁功

髮花落飭罷秋鶴 羽獵發心禮世雄

晝夜三時三品觀 桑榆一幕一期終

九蓮第六託生趣 迹盡向西結大夢

すてやらて子をおもふしかの

しるへよりかりのやまぢは

いとひいてにき 正三位家隆

下品上生 釋法敬 戒珠傳

當初法敬有遺約 身後不忘靈告專

音樂聞天遷化曉 光明入夢十三季

善哉一子出家力 遂是雙觀得道緣

昔寺維那修善積 宜昇下品上生蓮

たちかへるゆめのたぐちに

をしへをくうてなのはなの

すえのうはつゆ 從二位民部卿定家

下品中生 覺眞阿闍梨 續本朝往生傳

尋鞍馬寺久棲遲 祈請炎王有所思

陽茂闍梨從入夢 西方覺藥不生疑

九生蓮位上中下 萬部花文讀誦持

以第八門當此品 來緣定熟命終時

をしへいるゝみちはかすかの

さとの月さとればゝるの

ひかりなりけり 入道從三位保季

下品下生 釋惠進 新修往生傳

釋惠進貧無所蓄 檀施之物誰應侵

欲飛鵝眼雲勞眼 不憶臬心還有心

百部花文今已滿 八旬榆景遂西沉

善哉下品下生位 從在世間素意深

こゝのしなねかふはちすの

すゑのいとをみださてかへる

よるのしらなみ 正四位下範宗朝臣

色紙形記銘云

貞應三年甲申始自去冬三春孟夏之間、以繪師法眼尊智守本樣依傳文圖繪既訖、今於西面、更畫作九品往生之人、殊勸進一乘淨土之業、表裏共不交他筆、尊智圖之、以詩詞形其心、詩

句九品同令、菅大符卿爲長卿作之、和歌丞相以下、廣勸九人各詠一首、復當南北裏、同畫四天像、此堂大僧正行慶寺務之間顛倒之後、以聖靈院禮堂東廂爲其所、今新建立于舊跡、彰興隆之本意也。

別當前大僧正法印大和尚位慈圓記之

これ、ひろく諸人の心をすゝめて、欣求のおもひをはげますためなり。まことにこの行狀を見て、たれの人か穢惡充滿のさかみをいとひ、淨土不退の砌をこひねがはざらむ。自證の得脱のみにあらず、化他の御こゝろざしふかゝりける。ありがたくたとくも侍るかな

日吉の社に、百日參籠し給て、後生菩提をいのり申されける念誦のひまに、百首の歌を詠じ給けるをくに

わがたのむなゝの社のゆふたすき

かけても六のみちにかへすな

人を見るもわが身をみるもこはいかに

なむあみだぶつあみだぶつ

とぞかきつけ給ける。往生の望ふかくして、欣求の心をはげまされけるに、稱名の薰修日あさく、光陰の運轉時うつりぬとやおぼしめされけむ、ある時詠じ給けるは

極樂にまたわかこゝろゆきつかず

ひつしのあゆみしばしとゞまれ

浮生を軽くしおもひを淨刹にかけ給事、ひとへに上人諷諫のゆへなりければ、歸敬他にことにして上人遷化の時は哀傷にたえず、最初の引接を待よし、中陰の作善に諷誦文をさゞげられ、報恩謝徳の儀ねんごろなりけり。されば御臨終の後、或人の夢に示されけるは、さしも功勞せし顯密の稽古は、物の要にもたゞず、時々せし空觀と稱名念佛ばかりぞ、後世の資糧とはなるとぞ仰られける

### 第三 圖

月輪の禪閣の御息、妙香院の僧正良快は、慈鎮和尚の附法として、大師正嫡の跡をうけ、顯密兼學の宗匠なりき。しかれども宿縁のうちにもよほされけるにや、上人の勸化に歸したまひ、厭離穢土の思ふかく、欣求淨土の願ねんごろなりしかば、ひとへに彌陀の本願を信じて、念佛を行じ給ひ、淺近念佛の抄を記して無智の輩をすゞめらる。彼序の言には、夫以本覺眞如の月、無明戲論の雲にかくれ、常住佛性の蓮、生死妄染の泥に埋しよりこのかた、或は燒熱大燒熱の炎にむせびて、多百千劫塵數の諸佛の出世をもすぎ、或は紅蓮大紅蓮の水にとぢられて無量億生恒沙の如來の化導にもゝれたり。或は餓鬼域に入て一萬五千歳、飢饉のうれへしのびがたく、或は畜生道に墮して三十四億類、殘害のくるしみいくそばくぞ。たまたま人中の生を受といへども、餘州にありて佛法をさか

ず、まれに天上の報を感ずといへども、化樂にほこりて淨業を修する事なし。而に今南瞻部洲佛法流布の國にむまれて、西方淨刹欣求指南の教を得たり。このたび出離の直道に赴ずば、いづれの時にか菩提の正路に向べき。就中一生涯のさだまりなき事夢のごとし。幻のごとし。五盛陰の待ことある、且とやせん暮とやせむ。しかるに、煩惱内にもよほし、惡縁外にひきて、このことほりにおどろく輩すくなく、その勤をいたすたぐひまれなり。頓死またくわかきによらず、重病かならずしも老を待ことなし。誰かさだめん今日その日にあらずとは。争しらん我身その類にあらずとは。無常のつげ忽にきたり、有爲のすがたながかくれぬれば、一善の蓄もなきによりて、三途の底に墮しぬ。過去漫々の流轉すでにかくのごとし、未來永々の輪廻又然べし。いそぎて出離の要術を求めよ。更に生死の妄報に着することなかれ。爰に彌陀の念佛は、諸教所讚多在彌陀、大恩教主すでにこの佛を稱讚したまふ。彌陀一致利物偏増、末代の我等最かの國を欣べし。誠に是末代相應の要法凡夫易行の直道なる者歟。この故に初心の行者のために念佛の簡要をしるして、分て七段として、もて九品を期す<sup>已上</sup>取證とぞかゝれたる

#### 第四圖

### 法然上人行狀畫圖 第十六

高野の僧都明遍は少納言通憲の子なり。長門法印敏覺が嫡弟として、三論の奥旨をきはめ、才名世にゆるされたりしかども、名利をいとふ心ふかくして、本寺のまじはりをおのます。つゝに三七のとし交衆をのがれ、公請を辭し、光明山に居をしめて、諸行をすてず、萬善をいとはず、ひろく出離の要路をたづね、あまねく顯密の勤行をいたされけり。時の人明遍は當時無雙の碩學なり。轉任遅々のゆえに籠居する歟のよし、をのくおしみあひければ、生年四十五の時、小僧都を宣下せられけれども、かたく辭して勅喚にしたがはず、隱遁のおもひいよいよ切にして、建久六年五十四歳にてながく光明山をすて、跡を高野山にかくし、出離のつとめますますねんごろなり。有智の道心者、ちかくはこの人なり

## 第一 圖

僧都上人所造の選擇集を披覽して、この書のおもむき、いさゝか偏執なるところありけりとおもひて、寝られたる夜の夢に、天王寺の西門に、病者かずもしらずなやみふせるを、一人の聖の鉢にかゆをいれて匙をもちて病人の口ごとにいるゝありけり。誰人にかあらんとゝふに、かたはらなる人こたへて、法然上人なりといふと見てさめぬ。僧都おもはく、われ選擇集を偏執の文なりと思つるを、いましめらるゝゆめなるべし。この上人は機をしり時をしりたる聖にておはしけり。病人の様は、はじめには柑子かき橋梨子柿などのたぐひを食すれども、のちにはそれもとゞまりぬれば、わづ

かにおもゆをもちて、のどをうるをすばかりに、命を。かくこの書に一向に念佛をすゝめられたるこれにたがはず。五濁濫漫の世には、佛法の利益次第に減ず。このごろはあまりに代くだりて、我等がありさま、たとへば重病のものごとし。三論法相の柑子橘かうじもくはれず、眞言止觀の梨子柿もくはれねば、念佛三昧のおもゆにて、生死をいづべきなりけりとて、忽に顯密の諸行をさしをきて專修念佛の門にいり、その名を空阿彌陀佛とぞ號せられける。とりわき天王寺とみられけるも、由緒なきにあらず。この寺は極樂甫處の觀音大士、聖徳太子とむまれて、佛法をこの國にひろめ給し最初の伽藍なり。欽明天皇の御ために、七日の念佛をつとめたまひ、命長七年二月十三日黒木の臣を御使として、善光寺の如來へ御書を進らる。その御ことばには、名號七日稱揚已、以斯爲報廣ニヤ大恩、仰願ウケガハ本師彌陀尊、助我濟度、常護念と侍けるに、如來の御返報には、一日稱揚無恩留、何況ニヤ七日大功徳、我待衆生、心無間、汝能濟度豈不護、とぞあそばされける。御表書には上宮救世大聖の御返事と侍けり。この御消息にこそこの國は念佛三昧の有縁なる事もあらはれにけれ。かの鳥居の額にも、釋迦如來、轉法輪所、當極樂土、東門中心、とぞかゝれて侍る。わが國に生をうけん人は尤もこの念佛門に、歸すべきものなり

## 第二 圖

上人天王寺におはしけるととき、僧都善光寺參詣の事ありけるが、たづね參せられて、まつ使にて

案内し給ふに、上人客殿にしまふけて、これへと仰らる。僧都さしいりて、いまだ居なをらぬほどに、このたびいかゞして、生死をはなれ候べきと申されければ、南無阿彌陀佛と唱へて、往生をとぐるにはしかずとこそ存候へと申されければ、僧都申さるゝやう、たれもさは見をよびて侍り、ただし念佛のとき心の散亂し、妄念のおこり候をば、いかゞし候べきと。上人のたまはく、欲界の散地に生をうくるもの、心あに散亂せざらんや。煩惱具足の凡夫、いかでか妄念をとゞむべき、その條は源空もちからをよび候はず。心はちりみだれ、妄念はきをひおこるといへども、口に名號をとなへば、彌陀の願力に乗じて、決定往生すべしと申されければ、これうけ給候はむために、まいりて候つるなりとて僧都やがて退出し給にければ、初對面の人、一言も世間の禮儀の詞なくして退出せられぬることよとて、人々たうとびあひけり。上人うちへいり給て、心をしづめ、妄念おこさずして、念佛せんとおもはんは、むまれつきの目鼻をとりはなちて、念佛せんとおもはんがごとし。あなことごとしとぞ仰られる

## 第三 圖

その後は、僧都ふかく上人に歸し、專修の行をこたりなかりけるが、念珠をはやくゝりて、數遍おほき事をば、不實のきはまりなりとて、おほきに不受せられけるに、あるとき修行者一人きたりて、毎日の念佛は、いかほどをか所作とさだむべく候らんとたづね申けるに、御房はいくら程を申

さるゝぞと、かへしとはれければ、毎日百萬反を申よしを答ふるに、例の不實のものよとて、返答にも及ばずして、うちへいられにければ、修行者も歸にけり。僧都ちとまどろみ給へる夢に、貴くなる僧きたりてつげての給はく、毎日百萬遍の行者を、いひさまたげぬる事、はなはだしかるべからずとて、もてのほかなる景色にて、われはこれ善導なりと仰らると見ておどろきぬ。遍身にあせながれ、胸さはぎて心のをきどころなきまでかなしくおぼえて、時刻いくほどをへざりければ、かの修行者をよびかへして、このよしをかたり、前非をくゐんために、人を方々にわかちつかはしてはせられ、高野中をたづねさせらるゝに、つゐに行かたをしらずなりにけり。僧都申されけるは日來はやぐりの數反を不受する事、佛意にそむけるゆへに、化人のつけしめされけるなり。實の修行者にはあらざりけりとて、其後はみづからも、つねに百萬反の數遍をぞせられける。僧都の夢想をもちてこれを思に、上人數反をすゝめ給へる事、あに和尚の尊意にかなはざらんや、たゝあふぎて信をとるべし。をろかなる心をもちて、これをあざける事なかれ

#### 第四圖

僧都ひとへに上人の勸化を仰信し、ふた心なかりければ、上人の滅後にはかの遺骨を一期のあひだ頸にかけて、のちには高野の大將法印貞曉  
鎌倉右幕下息相傳せられけり。籠山三十年のあひだ、朝には自誓戒、舍利講、夕には臨終の行儀を修し、惣じて六時の同音念佛、日々夜々にをこたる事なし。

他のためには、人のゝぞみにしたがひて、顯密の法門を談ぜられけれども、自行には一向稱名のほか他事をまじへず。長齋持戒にして草庵をいづることなし。練行としふりて、薰修日あらたなり。さても穢土の縁つきて、西土の望ちかづきけるにや、貞應三年四月上旬のころより、いさゝか風痲にをかされ、寢食例に違しければ、門弟等をの結番して看病をいたし念佛のこゑやむ時なし。病にしづむといへども、法門談儀日ごろにかはらず、日をふるまゝに、經論の明文を誦して、念佛いよいよ強盛なり。つゐに六月十六日子刻頭北面西にして、念佛相續し、禪定に入がごとく、いきたえ給にけり。生年八十三なり。みる人隨喜の感涙をながし、きく人在世の徳行をぞしたひける

## 第五圖

## 法然上人行狀繪圖 第十七

安居院の法印聖覺は、入道少納言通憲の孫子、法印大僧都澄憲の眞弟なり。叡山竹林房の法印靜嚴を師とす、論說二道をかねて、智辨人にすぐれたりき。しかるに宿習のいたりやありけん、ふかく上人の化導に歸して、淨土往生の口決をうく。大和前司親盛入道、御往生の後疑をたれの人にか決すべきと、上人にとひたてまつりけるに、聖覺法印わが心をしれりとの給へり。淨土の法門にをきて所存をのこされざる事しりぬべし。さればかの法印一巻の書を制作して、ひろく念佛をす

すむ。世間に流布して唯信抄と號するこれなり。かの書に云、罪ふかくばいよいよ極樂をねがふべし、不簡破戒罪根深といへり。善すくなくばますます彌陀を念すべし、三念五念佛來迎といへり。むなしく身を卑下し心を怯弱して、佛智不思議智を疑事なかれ。たとへば人たかき岸のしたにありて、のぼる事あたはざらん、ちからつよき人岸の上に有て綱をおろして、この綱にとりつかせてわれ岸の上に引登せむといはんに、ひく人のちからをうたがひ、綱のよはからん事をあやぶみて、手をおさめてこれをとらずば、更に岸の上にのぼるべからず。偏にその言にしたがひて、掌をのべてこれをとらんには、即のぼる事を得べし、佛力をうたがひ、願力をたのまざる人は、菩提の岸にのぼる事かたし。只信心の手をのべて、誓願の綱をとるべし。電光朝露の命、芭蕉泡沫の身、わづかに一世の勤修をもて忽に五趣の古郷をはなれんとす。豈ゆるく諸行を兼んや。諸佛菩薩の結縁は隨心供佛の朝を期べし。大小經典の義理は、百法明門の暮を待べし。已上略抄とぞ侍める。この法印ふかく上人の勸化を信敬のあみだ、處々にして説法のたびごとには、彌陀の本願を讚嘆し、念佛の機能をほめ申されけるを、上人きゝ給て、これひとへに善導の御方便、機感純熟の折節也。然べき名僧專修念佛の義を信じて、所々にして講釋せば、念佛の弘通何事か加之哉と。悦仰られて、法印のもとへ申つかはされけるは、法華經の中には定まりて、阿彌陀經を副供養せらるゝなれば、いかなる所にて、機嫌さまであしからざらん所にては、阿彌陀經につきて四十八願の様を釋しのべられ候

べきよし、くはしく授られけるとなん

第一 圖

元久二年八月に、上人瘡病をわづらひ給事ありけり。月輪殿きこしめしおどろきて、醫師をめされ、種種の療方をつくさるといへども、治術かなはざりしかば、とりわき冥助をあふがれ、御祈請あらんために、託摩の法印證賀におほせて、善導和尚の眞影を圖繪せられ、後京極殿その銘をかゝせ給て、安居院の法印聖覺于時に、御導師參勤すべきよし仰らるゝに、法印申けるは、聖覺も瘡病の事候が、明日はおこり日にて候へども、貴命のがれがたきうへ、師範の恩を報ぜんために參勤すべく候。ただし早旦に御佛事をはじめらるべしとて、翌日拂曉に小松殿へ參じて、辰時より説法をはじめて、未尅に結願す。その説法の大底は、大師釋尊なを衆生に同じ給ときは、つねに病惱をうけ、療治をもちるたまふ。いはんや凡夫血肉の身、いかでかその愁なからん。しかれども、淺智愚鈍の衆生はこのことほりをしらず、さだめて疑心をなさんか。上人の化導すでに佛意にかなふゆへに、まのあたり、往生をとぐるものそのかずをしらず。しかれば諸佛菩薩諸天龍神、いかでか衆生の不信をなげかざらん。四天大王佛法をまほり給はゞ、かならずわが大師上人の病惱をいやし給へと。ねんごろに申のべ給ければ、善導の御影の御前に、異香しきりに薫じ、上人も聖覺もともに瘡病おちにけり。聖覺自嘆じて、先師法印は炎旱の御祈禱に大内にして唱導をつとめ、當座に雨をふ

らして名譽をほどこしき、聖覺か身にはこの事第一の高名なりとぞ申されける。まことに末代の奇特、そのころの口遊にてぞありける

## 第二 圖

法印ひとへに上人の勸化を信伏して、念佛往生の口傳相承、そのかくれなく名譽ありしかば、承久三年のころ、但馬宮雅成親王念佛往生に條々の不審をたて、時の名譽ある先達に御尋ありけり。この法印その專一なり。かの請文云、御念佛のあひだの御用心は、一切の功德善根のなかに、念佛最上候。十惡五逆なりといへども、罪障まったくその障とならず、一稱一念のちから決定して往生せしむべきよし、眞實堅固に御信受候べきなり。聊も猶豫の儀ゆめゆめ候べからず。或は身の懈怠不淨にはゞかり、或は心の散亂妄念におそれて、往生極樂に不定のおもひをなすは、極たるひが事にて候、佛意にそむくべく候なり。日々の御所作更に不淨を憚思食べからず候。念佛の本意はたゞ常念を要とし候。行住坐臥時處諸縁を簡はず候。但毎月一日歟、殊御精進潔齋にて御念佛候べき也。その外日々の御所作は、たゞ御手水ばかりにて候べき也已上取詮。又嘉祿二年のころ、後鳥羽院遠所の御所より、西林院の僧正承圓に仰下されける御書にも、散心念佛の事一定出離しぬべく候はんやう、明禪聖覺などにくはしく尋さぐりて、最上の至要をしるし申さるべきよし、仰下されければ、法印こまかにしるし申されけるとなむ

## 第三 圖

上人の第三年の御忌にあたりて、御追善のために、建保二年正月に、法印眞如堂にして、七ヶ日のあひだ道俗をあつめて、融通念佛をすゝめられけるに、往生の要樞安心起行のやう、上人勸化のむねこまごまとのべたまひて、これもし我大師法然上人の仰られぬことを申さば、當寺の本尊御照罰候へと、誓言再三に及でのち、もしなを不審あらん人は、鎮西の聖光房にたづねとはるべしと申されければ、聽衆のなかに一人の隱遁の僧ありけるが、草庵にかへらずして、すぐに筑後國にくだりて、聖光房に謁し、法流をつたへ門弟となり、九州弘通の法將とぞなりにける。敬蓮社といへるこれなり。法印追福の心ざしあらはれて、諸人の隨喜はなはだしくぞありける。

## 第四 圖

かの法印一山の明匠四海の導師として、公家の勅喚諸亭の招請ひまなかりしかども、西土往生の心ざしふかく、稱名念佛の行をこたりなくして、つるに文曆二年三月五日生年六十九にて、端座合掌し、念佛數百遍をとなへ、往生の素懷をとげられける、まことにかしこくたうとくぞ侍る。

## 第五 圖

上野國の國府に明圓と云ふ僧侍りき。遊行聖の念佛申てとほりけるをとゞめをきて、道場をかまへ念佛を興行しける程に、或夜のゆめに、貴僧きたりて告云、念佛申ものは、かならず極樂に往生

する也、敢て疑事なかれ。末代惡世の衆生の出離解脱の道、念佛にすぎたるはなし、我は吾朝の大導師聖覺といふもの也、法然上人の教によりて、彌陀の本願を信じ念佛を行じて、極樂に往生したる也とて、一期の行狀、往生の次第こまかにかたり給て、いまこの道場の念佛に結縁せんがために常にこの道場にあるなり。但十一月には本所に法談の事あるによりて、結縁のために必本所にかへるべし。法談以後は又このところにかへりて、念佛に結縁すべき也との給へり。夢さめて後、不思議の思をなし、聖覺といへる人はいづれの所の人ぞ。我朝の大導師とは何事ぞとたづぬるに、しりたりといふものなかりければ、明圓鎌倉へのぼりて、日光の別當僧正の房にいたりて尋申に、聖覺法印といへるは、京都の安居院といふ所に侍りき。天下の大導師、名譽の能説なりしかば、しらぬ人はなしと仰られければ、やがて上洛して、安居院の舊跡をたづね、嫡弟憲實法印に夢の次第をかたるに、在世の行狀といひ、往生の次第といひ、一事として違する事なし。就中十一月一日より天台大師講を始行して、二十四日までは毎日の講經終日の論談也。しかるに十一月には本所に法談あり、結縁のために必本所に歸べきよし示さるゝ事、この講演の砌に影向の條疑なしとて、憲實法印感涙をぞながされける。明圓は聖覺法印の墳墓にまうでゝ、夢の中の勸化をよるこび、歡喜の涙をながし、二心なき專修の行者になりければ、本國にかへりては、自行化他のつとめ念佛の外他事なかりけり。其後は安居院の墓詣となづけて、毎年に上洛してかの墳墓にぞまうでける。一期のあ

ひだ念佛をこたる事なくして瑞相をあらはし、端坐合唱して、數百遍の念佛をとなへ、殊勝の往生を遂にけり。子息明心幼稚の程は、明圓が、後家の尼、年ごとに安居院の墓詣をしけるが、明心成人の後は、年ごとに明心上洛しけり。明心又兼日に往生の時日をさして、いすにのぼりて念佛數百遍をとなへ、端坐合掌して往生の素懷を遂にければ、其後は明心が子息明觀、每年上洛して墓詣をぞしける。この念佛衆は聖覺の舊跡を、念佛の本所と仰崇しけるによりて、或年明觀上洛の時、憲實法印の嫡弟憲基法印にのぞみ申様、この念佛盡未來際退轉すべからざるよし、僧衆の中に御下知を下さるべきよし申けるによりて、彌陀本願の念佛は、濁世末代の出離解脱の要法なるいはれ、盡未來際退轉すべからざるよし、懇懃に書下されければ、御下知の旨にまかせて、ひとへに本願をあふぎ、念佛退轉あるまじきよし、僧衆等請文をさゝげ、念佛いよいよねんごろなりければ、國中の貴賤歸敬の掌をあはせ、結縁のおもひふかし。天竺震旦我朝三國のあひだに、多の人師念佛の勸化をいたすといへども、いまだ夢の中の勸化をきかず、この法印の勸化、まことにめづらしく貴も侍かな

## 第六圖

## 法然上人行狀畫圖 第十八

上人製作の選擇集は、月輪殿の仰によりて、えらび進せらるゝところ也。念佛往生の龜鏡たり。その簡要少々しるし侍べし。かの集の第一段云、道綽禪師聖道淨土の二門をたて、聖道門をすて淨土に歸する文。問云、一切衆生皆佛性あり、遠劫よりこのかたおほくの佛にあふべし、なにによりてかいまにいたるまで、なをみづから生死に輪廻して、火宅を出ざるやと。答云、二種の勝法をえて生死をはらはざるによりて、こゝをもちて火宅をいでず。何ものをか二とする。一にはいはく聖道。二にはいはく淨土なり。その聖道の一種は、いまの時に證しがたし。一には大聖をさるゝと遙遠なるによる、二には理ふかくさと微なるによる、この故に大集月藏經云、わが末法の時の中の億々の衆生、行をおこし道を修とも、いまだ一人としてうるものあらじ、當今はこれ末法五濁惡世なり、ただ淨土の一門のみありて、通入すべきみちなり。この故に大經云、もし衆生ありてたとひ一生惡をつくるとも、命終の時にのぞみて、十念相續してわが名字を稱せむに、若むまれずば正覺をとらじ、又一切衆生すべてみづからはからず。もし大乘によらば眞如實相第一義空、かつていまだ心にをかす。もし小乘を論せば、見諦修道に修入し、乃至那含羅漢五下を斷じ五上をのぞくこと、道俗をとふ事なくいまだ其分あらず。たとひ人天の果報あれども、みな五戒十善のためによくこの報をまねく。然にたもちうるものはなはだまれ也。もし起惡造罪を論せば、なんぞ暴風駛雨にことならん。ここをもて諸佛の大慈すゝめて淨土に歸せしめ給ふ。たとひ一形惡をつくれども

たゞよく意をかけて、專精につねによく念佛すれば、一切の諸障自然に消除してさだめて往生する事をう。何ぞ思量せずしてすべて去心なきや。私云、淨土宗の學者、まづすべからく此旨をしるべし。たとひさきより聖道門を學せる人なりといふとも、淨土門にをきて、その心ざしあらんものはずべからく聖道をすて、淨土に歸すべし。例せばかの曇鸞法師は、四論の講説をすて、一向に淨土に歸し、道綽禪師は、涅槃の廣業をさしをきて、ひとへに西方の行をひろめしがごとし。上古の賢哲なをもちてかくのごとし。末代の愚魯むしろこれにしたがはざらんや

同第三段云、彌陀如來餘行をもちて往生の本願とせず、たゞ念佛をもちて往生の本願とする文といひて無量壽經上の本願の文已下をひけり。私詞云、問云、あまねく諸願に約して麤惡をえらびすて、善妙をえらびとる事その理しかるべし。なんのゆへぞ、第十八の願に一切の諸行をえらびすて、たゞひとへに念佛の一行をえらびとりて、往生の本願とするや。答云、聖意はかりがたしたや、すく解するにあたはず、しかりといへどもいまこころみにこの義をもちてこれを解せん。一には勝劣の義、二には難易の義也。初に勝劣といふは、念佛はこれすぐれ、餘行は劣なり。ゆへいかんとなれば、名號はこれ萬德の歸する所也。しかればすなはち彌陀一佛のあらゆる四智三身十力四無畏等の一切の内證の功德、相好光明說法利生等の一切の外用の功德、みなことごとく阿彌陀佛の名號の中に攝在せり。かるがゆへに名號の功德もともすぐれたりとす。餘行はしからず、をのをの一隅

をまもる、ここをもちて劣とす。たとへば世間の屋舎のごとし、その屋舎の名字の中に棟梁椽柱等の一切の家具を攝す、棟梁等の一々の名字の中には一切を攝することあたはず。これをもてしりぬべし。しかればすなはち名號の功德は、餘の一切の功德にすぐれたり。かるがゆへに劣をすて、勝をとりてもちて本願とするか。次に難易の義といふは念佛は修しやすく、諸行は修しがたし、略抄かるがゆへにしりぬ。念佛はやすきがゆへに一切に通ず。諸行はかたきがゆへに諸機に通ぜず。然則一切衆生をして、平等に往生せしめむがために、難をすて、易をとりて本願とするか。若しそれ造像起塔をもちて本願とせば、貧窮困乏のたぐひはさだめて往生ののぞみをたたん。しかるを富貴のものはすくなく、貧賤のものはなはだおほし、もし智恵高才をもちて本願とせば、愚鈍下智のものは定めて往生ののぞみをたゝん。しかるに智恵のものはすくなく、愚痴のものはなはだおほし。多聞多見をもちて本願とせば、小聞小見の輩はさだめて往生の望をたゝむ。しかるを多聞のものはすくなく小聞のものはなはだおほし。若し持戒持律をもちて本願とせば、破戒無戒の人は、さだめて往生ののぞみをたゝん。しかるを持戒のものはすくなく、破戒のものは甚だ多し。自餘の諸行これに准じてしるべし、まさにしるべし、上の諸行等をもちて本願とせば、往生をうるものはすくなく、往生せざるものはおほからん。然則彌陀如來法藏比丘のむかし平等の慈悲にもよほされて、あまねく一切を攝せんがために、造像起塔等の諸行をもちて往生の本願とせず、たゞ稱名念佛

の一行をもちてその本願とする也。乃至問曰、一切の菩薩その願をたつといへども、あるひはずでに成就せるもあり、又いまだ成就せざるもあり。いぶかし法藏菩薩の四十八願は、すでに成就せりとやせん、はたいまだ成就せずとやせん。答曰、法藏の誓願は一々に成就し給へり。いかむとなれば、極樂界の中にすでに三惡趣なし、まさにしるべしこれすなはち無三惡趣の願を成就し給へるなり。なにをもちてかしのことをうるとならば、すなはち願成就の文、又地獄餓鬼畜生諸難の趣なしといへるこれなり。又彼國の人天、命をはりてのち三惡趣にかへることなし、まさにしるべし、これすなはち不更惡趣の願を成就せるなり。何をもちてかしのことをうるとならば、すなはち願成就の文に、又彼の菩薩乃至成佛まで惡趣にかへらずといへるこれなり。又極樂の人天、すでに一人として三十二相を具せざるものあることなし。まさにしるべしこれすなはち具三十二相の願を成就せるなり。何をもちてかしのことをうるとならば、すなはち願成就の文に彼國にむまるゝもの、みなことごとく三十二相を具すといへる是也。かくのごとくはじめ無三惡趣の願より、をはり得三法忍の願にいたるまで、一々の誓願みなもて成就し給へり。第十八の念佛往生の願あにひとりもて成就せざらんや。然則念佛の人皆もて往生す。何をもちてかしのことをうるとならば、すなはち念佛往生の願成就の文に、もろもろ衆生ありてその名號をきゝて信心歡喜して、乃至一念至心に廻向してかの國にむまれんと願すればすなはち往生することを得て、不退轉に住すといへる是也。おほよそ四十

八願をもて淨土を莊嚴せり。花池寶閣願力にあらずといふことなし、何ぞ其中にをいて、ひとり念佛往生の願を疑惑すべきや。しかのみならず一々の願のをはりに、もししからずば正覺をとらじといへり。しかるに阿彌陀佛成佛してよりこのかた、いまにをきて十劫なり。成佛のちかひすでもて成就し給へり。まさにしるべし一々の願むなくまうくべからず。故に善導の給はく、彼佛いま現に世にましまして成佛し給へり。まさにしるべし本誓重願むなしからずといふ事。衆生稱念すればかならず往生をう。ヒ上それすみやかに生死をはなれんとおもはゞ、二種の勝法の中に、しばらく聖道門をさしをきて、えらびて淨土門にいれ、淨土門に入らんとおもはゞ、正雜二行の中にしばらくもろもろの雜行をなげすて、えらびて正行に歸すべし。正行を修せんと思はゞ、正助二業の中に猶助業をかたはらにして、えらびて正定をもはらにすべし。正定の業といふは、すなはちこれ佛の御名を稱するなり。名を稱すればかならずむまるゝことをう。佛の本願によるがゆへにと。しづかにおもんみれば善導の觀經の疏は、これ西方の指南行者の目足なり、しかればすなはち西方の行人、かならずすべからく珍敬すべし。就中に毎夜の夢の中に僧ありて玄義を指授せり。僧といふはをそらくはこれ彌陀の應現なり。しからばいふべし、この疏は彌陀の傳説なりと。いかにいはんや大唐相傳していはく善導はこれ彌陀の化身なりと。しからばいふべしこの文はこれ彌陀の直説なりと。すでにうつさんとおもはんものは、もはら經法のごとくせよといへり。このことばまことな

るかな、あふぎて本地をたづぬれば四十八願の法王なり。十劫正覺のとなへ念佛にたのみあり。ふして垂迹をとふらへば専修念佛の導師なり。三昧正受のことば往生にうたがひなし、本迹ことなりといへども化導これ一なり。こゝに貧道むかし、この典を披閱して粗素意をさとれり、たちどころに餘行をとめてこゝに念佛に歸す。それよりこのかた今日にいたるまで、自行化他たゞ念佛をこゝとす。然間まれに津をとふものには、しめすに西方の通津を以てし。たまたま行をたづぬるものには、をしふるに念佛の別行をもてす。これを信するものはおほく、信せざるものはすくなし。

巴上略抄 念佛を事とし往生をこひねがはん人、あにこの書をいるかせにすべけんや

## 第一 圖

同製作の往生大要抄に云、至誠心といは、眞實の心なり。その眞實といは、身にふるまひくちにいひ心に思はん事、みな人めをかざる事なく、まことをあらはすなり。しかるを人つねに勇猛強盛の心ををこすを至誠心と申は、この釋の心にはたがふなり

又云、よはき三心具足したらん人は、くらゐこそさがらんずれ、なほ往生はうたがふべからざる也

又云、外相の善惡をばかへり見ず、世間の謗譽をばわきまへず、内心に穢土をいとひ淨土をもねがひ、惡をもととめ善をも修して、まめやかに佛の意にかなはん事を思を眞實とは申也

又云、加様に申せば、ひとへにこの世の人めはいかにもありなんとて、人のそしりをもかへり見ず、ほかをかざらねばとて、心のまゝにふるまふがよきと申にてはなき也。はうにまかせてふるまへば、放逸とてわるき事にてある也。時にのぞみたる機嫌戒のためばかりに、いさゝか人めをつゝむかたは、わざともさこそあるべけれ

又云、機嫌戒となづけて、やがて虚假になる事もありぬべし。これをかまへてよくよく心えわくべし

又云、この義を心えわかぬ人にこそあむめれ。佛の本願をばうたがはねども、我心のわろければ往生かなはじと申あひたるが、やがて本願をうたがふにて侍る也。さやうに申たちなば、いか程までか佛の本願にかなふべしとかしり侍べき。それをわきまへざらんにとりては心のわろさはつきせぬ事にてこそあらんずれば、いまは往生してんと思たつよはあるまじ。佛の御ちからをばいかほどかするそ、これにすぎて佛の願をうたがふことはいかゞあるべき

又云、たゞ心の善惡をもかへりみず。つみの輕重をもわきまへず、心に往生せんと思て、くちに南無阿彌陀佛となへば、こゑにつきて決定往生の思をなすべし、その決定心によりて、すなはち往生の業はさだまるなり

又云、かく心えぬればやすきなり。往生は不定におもへばやがて不定になり、定と思へば、やが

て一定する事也

又云、深信といは、かの佛の本願はいかなる罪人をもすてず、たゞ名號をとふる一聲までに、決定して往生すとふかくたのみて、すこしのうたがひもなきを申也

又云、つみをもすて給はねば、心にまかせてつくらんもくるしかるまじ、一念にも往生すなれば念佛はおほく申さずともありなんと、あしく心うる人のいできて、つみをばゆるし、念佛をばせいするやうに申なすが、返々もあさましく候也。あくをすゝめ善をとゞむる佛法はいかゞあるべき

## 第二 圖

上人大經を釋給とき、四十八願の中の第卅五の女人往生の願の意をのべての給はく、上の念佛往生の願は男女をきはらず、今別にこの願あるそのこゝろいかん。つらつらこの事を案ずるに、女人はさはりおもし。別して女人に約せずば、すなはち疑心を生ずべし。そのゆへは、女人はとがおもしろ、大梵高臺の閣にもへだてられて、梵衆梵輔の雲をのぞむことなく、帝釋柔軟の床にもくだされて、三十三天の花をもてあそぶ事なし。六天魔王の位四種輪王の跡、のぞみなかくたえてかけをささず、生死有漏の果報、無常生滅のつたなき身とだにならず、いかにいはんや佛のくらゐをや。諸經論の中にきはられ、在々所々に擯出せられて、三途八難にあらずば赴べきかたなく、六趣四生にあらずは受べきかたちなし。この日本には靈地靈驗砌にはみなことごとくきはれたり。比叡山は

傳教大師の建立、大師みづから結界して谷をさかみ峯をかぎりて、女人の形をいれざれば一乘峯たかくして五障の雲たなびく事なく、一味谷ふかくして三従の水ながるゝ事なし。高野山は弘法大師結界の峯、眞言上乘繁昌の地也。三密の月輪あまねくてらすといへども、女人非器のやみをばてらさず。五瓶の智水ひとしくなるといへども、女人垢穢のあかをばすゝがず。聖武天皇の御願、十六丈金銅の舍那、はるかにこれを拜見すといへども、なほ扉の内にはいれられず。天智天皇の建立五丈石像の彌勒あふぎてこれを禮拜すれども、なを壇の上には障あり、乃至金峯の雲のうへ、醍醐の霞のそこ、女人更にかけをさゝず。悲哉兩足ありといへどもものぼらざる法の峰あり。ふまざる佛の庭あり。耻哉兩眼あきらかなりといへども、見ざる靈地あり。拜せざる靈像あり。この穢土の瓦礫荆棘の山、泥木素像の佛だにも障あり。いかにはんや衆寶合成の淨土萬德究竟の佛をや。これによりて往生そのうたがひあるべし。かるがゆへに此理をかゝみて別にこの願あり。善導和尚この願を釋しての給はく、彌陀の大願力によるがゆへに、女人佛の名號を稱すれば、命終のとき女身を轉じ男子となる事を得。彌陀御手をさづけ、菩薩身をたすけて、寶花のうへに坐し、佛にしたがひて往生し、佛の大會にいりて無生を證悟す。一切の女人、もし彌陀の名願力によらずば千劫萬劫恒沙等の劫にも、つるに女身を轉ずることを得べからずといへり。是則女人の苦をぬき女人の樂をあ

たふる、慈悲の誓願利生なり

已上見三千大經釋一  
取要抄之

ある時尋常なる尼女房ども、吉水の御房へまいりて罪ふかき女人も、念佛だにも申せば、極樂へまいり候なるは、まことに候やらんと申ければ、上人大經の釋の心をねむごろに申のべられて、第十八の願のうへにうたがひをたゝむがために、とりわき女人往生の願をたて給へる事まことにたのもしかたじけなきよしを仰られければ、歡喜の涙をながし、みな念佛門にいりにけるとなむ

## 第三圖

## 法然上人行狀繪圖 第十九

月輪の禪閣の御歸依あさからざりしかば、北政所も、おなじく御信伏ありて、念佛往生の事を御たづねありける。御返事云、かしこまりて申上候。さては御念佛申させおはしまし候なるこそ、よにうれしく候へ。まことに往生の行は念佛が目出事にて候也。そのゆへは念佛は彌陀の本願の行なればなり。餘の行はそれ眞言止觀のたかき行なりといへども彌陀の本願にあらず。又念佛は釋迦の付屬の行なり。餘行はまことに定散兩門の目出たき行なりといへども、釋尊これを付屬し給はず。又念佛は六方の諸佛の證誠の行なり。餘の行はたとひ顯密事理のやむごとなき行なりと申せども諸佛これを證誠し給はず。このゆへにやうくの行おほく候へども、往生のみちにはひとへに念佛すぐれたる事にて候也。しかるに往生のみちとうとき人の申やうは、餘の眞言止觀の行にたへざるひ

とのやすきまゝのつとめにてこそ念佛はあれと申はきはめたるひがごとにて候。そのゆへは彌陀の本願にあらざる餘行をきらひすて、又釋尊付屬にあらざる行をばゑらびとゞめ、又諸佛の證誠にあらざる行をばやめおさめて、いまはたゞ彌陀の本願にまかせ、釋尊の付屬により、諸佛の證誠にしたがひて、をろかなるわたくしのはからひをやめて、これらのゆへつよき念佛の行をつとめて往生をばいのるべしと申にて候也。されば恵心僧都の往生要集に、往生の業念佛を本とすと申たるこの心なり。いまはたゞ餘行をとゞめて一向に念佛にならせ給べし。念佛にとりても、一向專修の念佛なり。其むね三昧發得の善導の觀經疏に見えたり。又雙卷經に一向專念無量壽佛といへり。一向の言は二向三向に對して、ひとへに餘の行をゑらびてきらひのぞく心なり。御いのりのれうにも念佛がめでたく候。往生要集にも餘行の中に念佛すぐれたるよし見えたり。又傳教大師の七難消滅の法にも念佛をつとむべしと見えて候。おほよそ現世後生の御つとめなにごとかこれにすぎ候べきや。いまはたゞ一向專修の但念佛者にならせおはしますべく候。已上略抄これによりて、專修念佛の御ころざし、ふた心なかりけるとなん

## 第一 圖

阿波介といふ陰陽師、上人に給仕して念佛するありけり。或時上人かの俗をさして、あの阿波介が申念佛と源空が申念佛と、いづれかまさると聖光房にたづね仰られるに、心中にわきまふるむ

ねありといへども、御ことばをうけ給はりて、たしかに所存を治定せんがために、いかでかさすがに御念佛にはひとしく候べきと申されたりければ、上人ゆゝしく御氣色かはりて、されば日來淨土の法門とてはなにごとをきかれけるぞ。あの阿波介も佛たすけ給へとおもひて南無阿彌陀佛と申す源空も佛たすけ給へとおもひて南無阿彌陀佛とこそ申せ。更に差別なきなりと仰られければ、もとより存ずることなれども、宗義の肝心いまさらなるやうに、たうとくおぼえて感涙をもよをしきとぞかたり給ける。二念珠をしいだしたるは、この阿波介にてなむ侍なる。かの阿波介百八の念珠を二連もちて念佛しけるに、そのゆへを人たづねければ、弟子ひまなく上下すれば、その緒つかれやすし。一連にては念佛を申し、一連にては數をとりて、つもるところの數を弟子にとれば、緒やすまりてつかれざるなりと申ければ、上人きゝ給てなに事もわが心にそみぬる事には才覺がいであるなり。阿波介きはめて性鈍に、その心をろかなれども、往生の一大事心にそみぬるゆへに、かゝる事をも案じ出けるなり。まことにこれたくみなりとぞほめおほせられける

## 第二 圖

上人かたりての給はく、淨土の法門を學する住山者ありき。示云われすでにこの教の主旨を得たり。しかれども信心いまだおこらず。いかにしてか信心おこすべきとなげきあはせしにつきて、三寶に祈請すべきよし教訓をくはへて侍しかば、かの僧はるかに程へてきたりていはく。御をしへに

したがひて祈請をいたし侍しあひだ、あるとき東大寺に詣たりしに、おりふし棟木をあぐる日にておびたゞしき大物の材木ども、いかにしてひきあぐべしともおぼえぬを轆轤をかまへてこれをあぐるに、大木をめぐと中にまきあげられてとぶがごとし。あなふしぎと見る程に、おもふところにおとしすへにき。これを見て良匠のはかりごとなをかくのごとし。いかにいはんや彌陀如來の善巧方便をやとおもひしおりに、疑網たちどころにたえて信心決定せり。これしかしながら、日頃祈請のしるしなりとかたりき。其のち兩三年をへてなむ。種々の靈瑞を現じて往生をとげける。受教と發心とは各別なるゆへに、習學するには發心せざれども、境界の縁を見て信心をおこしけるなり。人なみくくに、淨土の法をきき念佛の行をたつとも、信心いまだおこらざらむ人は、たゞねむごろに心をかけてつねに思惟し、また三寶にいのり申べきなりとぞ仰られける。

### 第三 圖

尼聖如房は、ふかく上人の化導に歸し、ひとへに念佛を修す。所勞の事ありけるが、臨終ちかづきて、いま一度上人を見たてまつらばやと申ければ、このよしを上人に申に、おりふし別行の程なりければ御文にてこまかに仰つかはされけり。かの狀云、聖如房の御事こそ返々あさましく候へ。乃至たゞ例ならぬ御事、大事になどうけ給はり候はむだにも、いま一度は見まいらせたく、をはりまでの御念佛の事おぼつかなくこそ思まいらせ候べきに、まして心にかけて、つねに御たづね候ら

むこそ、まことにあはれにも心ぐるしくおもひまいらせ候へ。左右なくうけ給候まゝにまいり候て、見まいらせたく候へども、おもひきりてしばしいでありき候はで念佛申候はゞやと、思はじめたる事の候を、やうにこそよる事にて候へ、これをば退してもまいるべきにて候に、又思候へば、詮じてはこの世の見參、とてもかくても候なん。かばねを執するまどひにもなり候ぬべし。たれともとまりはつべき身にても候はず。我も人もたゞをくれさきだつかはりめばかりにてこそ候へ。そのたえまを思候も、又いつまでかとさだめなきうへに、たとひひさしと申とも、ゆめまぼろしい程かは候べきなれば、たゞかまへて、おなじ佛の國にまいりあひて、蓮のうへにて、この世のいぶせさも、ともに過去の因縁をもかたり、たがひに、未來の化導をもたすけむ事こそ、返々も詮にて候べきと。はじめより申をき候しが、返々も、本願をとりつめまいらせて、一念もうたがふ御心なく、一聲も南無阿みだぶと申せば、我身は、たとひいかにつみふかくとも、佛の願力によりて、一定往生するぞとおぼしめして、よくよく、一すぢに念佛の候べき也。我等が往生は、ゆめ／＼、我身のよきあしきにより候まじ、ひとへに、佛の御力ばかりにて候べき也。我ちからにては、いかに、めでたくたうとき人と申とも、末法のこのごろ、たゞちに、淨土にむまるるほどの事は、ありがたくぞ候べき。又、佛の御ちからにて候はむには、いかに罪ふかく、をろかにつたなき身なりとも、それにはより候まじ。たゞ佛の願力を、信じ信ぜぬにそより候べき。乃至さて往生はせさせお

はしますまじきやうにのみ、申きかする人々の候らむこそ、返々あさましく心ぐるしく候へ。いかなる智者、めでたき人、おほせらるゝともそれになをどろかせおはしまし候ぞ。をのくのみにちはめでたくたうとき人なりとも、さとりあらず行ことなる人の申候事は、往生浄土のためには、中ゆゝしき退縁悪知識とも、申候ぬべき事どもにて候。たゞ凡夫のはからひをば、きゝいれさせおはしますで一すぢに佛の御ちかひをたのみまいらせさせおはしますべく候。さとりことなる人の、往生をいひさまたげむによりて、一念もうたがふ心あるべからずと、いふことは、善導和尚のよくよくこまかに仰られたる事にて候也。乃至中々あらぬすぢなる人はあしく候なん。たゞいかならむ人にて、尼女房なりとも、つねに御まへに候はん人に念佛申させて、きかせおはしまして、御心ひとつをつよくおぼしめして、一向に凡夫の善知識をおぼしめして、佛を善知識にたのみまいらせさせ給べく候。乃至かやうに念佛を、かきこもりて申候はむなど思候も、ひとへに我身ひとつのためとのみは、もとより思候はず。おりしもこの御事をかくうけ給候ぬれば、いまよりは一念ものこさず、ことごとくその往生の御たすけになさんと廻向しまいらせ候はむずれば、かまへてくおぼしめすさまに、とげさせまいらせ候はゞやとこそは、ふかく念じまいらせ候へ。もしこの心ざしまことならば、いかでか御たすけにもならで候べき。たのみおぼしめさるべきにて候。おほかたは申いで候しひとことばに、御心をとゞめさせおはします事も、この世ひとつの事にて候はじ

と。さきの世もゆかしくあはれにこそ、思しらるゝ事にて候へば、うけ給候ごとく、このたびまことにさきだゝせおはしますにても、又おもはずにさきだちまいらせ候事になるさだめなさにて候とも、つるに一佛淨土にまいりあひまいらせ候はむ事、うたがひなくおぼえ候。ゆめまぼろしのこの世にて、いま一度など思申候事はとてもかくても候なん。これをば一すぢにおぼしめしてゝいとゞもふかくねがふ御心をもまし、御念佛をもはげませおはしまして、かしこにてまたむとおぼしめすべく候。乃至もしむげによはくならせおはしましたる御事にて候はゞ、これは事ながく候べく候。えうをとりにて、つたへまいらせさせおはしますべく候。うけ給候まゝになにとなくあはれにおぼえて、をしかへし又申候なり。已上略抄この御文の趣をふかく心にそめて念佛をこたらずして、つるにめでたき往生をとげにけるとなむ

## 第 四 圖

仁和寺にすみける尼、上人にまいりて申やう、みづから千部の法華經をよむべきよし、宿願の事ありて七百部はすでによみをはれり。しかるにとしすでにたけ侍ぬ。のこりの功いかにしてをへ侍べしともおぼえ侍らずと、なげき申ければ、としよりたまへる御身には、めでたく七百部まではよみ給へるものかな。のこりをば、一向念佛になされ候べしとて、念佛の機能をとききかせられければ、其のちは法華經の讀誦をとめて、一向專稱してとし月をへて、すでに往生をとげにけり。丹

後國志樂の庄に彌勒寺といふ山寺の一和尚なりける僧の、むかしは天台山の學徒、のちには遁世して、上人の弟子となりて一向に念佛して、五條の坊門富小路にすみけるが、ひるねしける夢に、そらに紫雲そびけり。なかに一人の尼あり。まことに心よげにうちゑみて、われは法然上人のをしへによりて念佛して、只今すでに極樂へ往生し候ぬるぞ。これは仁和寺に候つる尼なりと申と見て夢さめぬ。やがて上人のおはしましける九條なる所へ參て妄想にてや候らん、かゝるゆめを見て候と申ければ、上人うち案じたまひてさる人あるらむとてやがて仁和寺へ使をつかはされんとするに、日くれにければ、次のあしたつかはさる。便宜のよしにてなに事か候とたづぬべしとおほせられければ、つかひかのところへむかひてたづね申に。かの尼公は。昨日午刻にはや往生し候ぬとぞ答申ける。あはれにたうとき事にてぞありける

## 第五 圖

### 法然 上人行狀畫圖 第二十

河内國に天野の四郎とて、強盜の張本なるものありけり。人をころし財をかすむるを業として世をわたりけるが、としたけて後、上人の化導に歸し、出家して教阿彌陀佛と號しけり。つねに上人の御もとに參して教訓をかぶりけるが、或時夜半ばかりに上人おきゐたまひて、ひそかに念佛し給

かとおぼしき事ありけり。教阿彌陀佛うちしはぶきたりければ、上人やがてふし給ぬ。ねいり給へるさまにてその夜もあけにけり。教阿彌陀佛、心のうちにいと心えぬわざかなとおもひけれども、たづね申におよばでやみにけり。程へてのち又參たるに、上人は持佛堂におはしませば、教阿彌陀佛はおほゆかに候して申けるは、無縁のものにて在京かなひがたく侍れば、相模國河村と申ところに、あひしりたるものゝ侍をたのみてまかりくだり侍り、としたけ侍ぬれば、又見參に入らむこともかたく候。もとより無智の者にて侍れば、甚深の法門をうけ給候とても、その甲斐あるべしとも覺侍らず。たゞ詮をとりて決定往生仕ぬべき御一言をうけ給はりて、生涯の御かたみにそなへ侍らむと。上人の給はく、まづ念佛には甚深の義といふことなし。念佛申ものはかならず往生すとしるばかり也。いかなる智者學生なりとも、宗にあかさざらむ義をば、いかでかつくりいだしていふべき。ゆめく甚深の義あるらむとゆかしく思はるべからず。念佛はやすき行なれば申人はおほけれども、往生するものゝすくなきは、決定往生の故實をしらぬゆへなり。去月に又人もなくて御房と源空とただ二人ありしに、夜半ばかりにしひやかに起居て念佛せしをば、御房はきかれけるかと仰らるれば、寢耳にさやらむと承候きと申ければ、それこそやがて決定往生の念佛よ。虚假とて、かざる心にて申念佛が往生はせぬなり。決定往生せんとおもはば、かざる心なくして、まことの心にて申べし。いふにかひなきおさなきもの、もしは畜生などにむかひては、かざる心はなけれども

朋同行はいふにをよばず。その外つねになれ見る、妻子眷屬なれども、東西を辨ほどの者になりぬればそれがために、かならずかざる心はおこるなり。人のなかにすまむには、その心なき凡夫はあるべからず。すべて親しきも疎も貴も賤も、人にすぎたる往生のあだはなし。それがためにかざる心をおこして、順次の往生をとげざればなり。さりとして獨居もかなはず、いかゞして人目をかざる心なくして、まことの心にて念佛すべきといふに、つねに人にまじりて、しづまる心もなく、かざる心もあらんものは、夜さしふけて、見人もなく、聞人もなからむ時、しのびやかに起居て、百反にても千反にても、多少ところにまかせて申さん念佛のみぞ、かざる心もなければ佛意に相應して決定往生はとぐべき。この心を得なばかならずしも夜にはかざるべからず。朝にても晝にても暮にても、人のきくはばかりなからむ所にて、つねにはかくのごとく申べし。所詮決定往生をねがふ、まことの念佛申さむずるかざらぬ心ねは、たとへば盗人ありて、人の財を思かけて、ぬすまむともふ心は底にふかけれども、面はさりげなき様にもてなして、かまへてあやしげなる色を、人に見えじとおもはむがごとし。そのぬすみ心は、人またくしらねば、すこしもかざらぬ心なり。決定往生せむする心も又かくのごとし。人おほくあつまり居たらむなかにても、念佛申いろを人に見せずして、心にわするまじきなり。その時の念佛は、佛よりほかはたれかこれをしるべき。佛しらせ給はゞ往生なむぞ疑はむと仰られければ、教阿彌陀佛申さく、決定往生の法門こそ心得候ぬれ。す

にさとりきはめ侍り。この仰をうけ給ざらましかばこのたびの往生はあぶなく候はまし、但この仰のごとくにては、人のまへにて念珠をくり、口をはたらかす事は、あるまじく候やらんと。上人の給はくそれ又僻韻ひがこんなり。念佛の本意は常念を詮とす。されば念々相續せよとこそすゝめられたれ。たとへば世間の人を見るにおなじ人なれども豪憶あひわかれて、憶病の者になりぬれば、身のためくるしかるまじき、聊のいかりをもぢおそれて逃かくる。豪の者になりぬれば、命をうしなふべきこはき敵の、しかも逃かくれなばたすかるべきなれども、すこしもおそれず、ひとしがりもせざるがごとし。これがやうに、眞偽の二類あり。地體いつはり性にして、かざる心あるものは、身のために要なき聊の事をもかならずいつはりかざるなり。もとよりまことの心ありて虚言せぬものは聊の慵飾しては、身のためおほきにその益あるべき事なれども、身の利益をばかへりみず、底にまことありてすこしもかざる心なし。これみな本性にうけてむまれたるところなり。そのまことの心のものゝ、往生せんとおもひて念佛に歸したらんは、いかなる所いかなる人のまへにて申すとも、すこしもかざる心あるまじければ、これ眞實心の念佛にして、決定往生すべきなり。なんぞこれをいましめむ。又地體はいつはり性にして、世間さまにつけては、いささか不實の事もありしかども知識にあひて發心して、往生せんとおもふ心ふかくなりぬれば、念々相續せんとおもひて、いかなる所いかなる人のまへにても、無想到ひた申に申さむもの、これ又眞實心の念佛なれば決定往生す

べきなり。またく制の限にあらず。いまいふところは、三心のなかに一心もかけぬれば、往生せずと釋給へるに、三心のなかの眞實心、人ことに發がたければ、その眞實心を發べきやうをいふばかりなり。さればとて、たゞのとき念佛を申そとはいかがすゝむべきと。又教阿彌陀佛申さく、さきに仰の侍つるやうに、夜念佛申さすにはかならず起居候べきか、又念珠袈裟をとり侍べきかと。上人の給はく念佛の行は行住坐臥をきはぬ事なれば、ふして申さんとも居て申さんとも、心にまかせ時によるべし。念珠をとり袈裟をかくる事も、又折により體にしたがふべし。たゞ詮ずるところ威儀はいかにもあれ、このたびかまへて往生せんとおもひて、まことしく念佛申さむのみぞ大切なると仰られければ、教阿彌陀佛、歡喜踊躍し合掌禮拜して、罷出にけり。翌日に法蓮房信空のもとへゆきて暇ごひけるに、昨日上人の授給へる決定往生の義とて申いだして、このたびの往生は、すこしも疑なきよしよろこび申て、東國へ下向しにけり。其後上人の御まへにて、法蓮房この事を申いだして、さることの侍けるにやと申されければ、その事なり。さる舊盜人と聞置て侍しほどに、對機說法して侍き。一定心得たりげにこそ見えしかとぞ仰られける。教阿、かの河村にくだりてすみ侍けるが、所勞つきて終焉にのぞむに、同行にかたりていはく、わが往生は決定なり。これすなはちふかく上人のをしへを信ずるゆへなり。往生のやうかならず上人に參じて申べしと遺言して、正念たがはず合掌みだるゝ事なく、高聲念佛數十反となへてをはりにけり。同行やがて上落して遺

言の次第くはしく上人に申ければ、よく心えたりとみえしが、相違せざりける、あはれなる事なりとぞ仰られける

第一 圖

沙彌隨蓮住四條萬里小路は、上人配所におもむき給し時、御とも申て歸依あさからざりき。上人これをあはれみて、念佛往生の道を開示し給に、ふかく信受してふた心なく念佛しけり。上人往生の後、建保二年のころ、いかに念佛すとも、學問して三心をしらざらむには、往生すべからずと申ものありければ、隨蓮申さく、故上人は、念佛は様なきをやうとす。たゞひらに佛語を信じて念佛すれば往生するなりとて、またく三心のことをも仰られざりきと。かの人かさねていはく、一切に心うましきものために、方便して仰られけるなり。上人御素意のおもむきはとて、經釋の文などゆゝしけに申きかせければまことにさもやあるらむと、いさゝか疑心をおこすことありけるに、ある夜のゆめに、法勝寺の西門より入て見れば池のなかにいろ／＼の蓮花さきみだれたり。西の廊のかたへありゆみよりて見れば、僧衆あまた列座して、淨土の法門を談ず。隨蓮さきはしにのぼりあがりてみれば、上人北座に南むきに坐したまへり。隨蓮見たてまつりてかしまるに、上人見たまひて、これへまいれとめしければ、まぢかくまいりぬ。隨蓮いまだことばをいださざるに、上人の給はく、汝がこのほど心になげきおもふこと、ゆめ／＼わづらふべからずと。隨蓮この事すべて人にも申さず

なにとしてしろしめしたるにかとおもひながら、上件のやうをくはしく申に、上人仰られていはくたとへばひが事をいふものありて、あの池の蓮花を蓮花にはあらず梅ぞ櫻ぞと、いはゞ信すべしやと。隨蓮申て云、現に蓮花にて候はむをば、いかに人申候ともいかでか信じ候べきと。上人の給はく、念佛の義も又かくのごとし、源空が汝に念佛して往生する事は決定して疑なしとをしへしを信たるは、蓮花を蓮花とおもはむのごとし。ふかく信じてとかくの沙汰に及ばず、たゞ念佛を申べきなり。あらぬ邪見の櫻梅の義をば、ゆめく信すべからず、と仰らると見てゆめさめぬ。隨蓮疑念のこりなく散にけり。念佛功つもり、臨終正念にして、往生の素懷をとげけるとなむ

抑上人あるところには三心のやうをくはしくをしへ、ある所には三心の沙汰詮なきよし仰られたり。これ人によるべき事なり。名號をとなふれば、かならず往生すとばかりまめやかにたのみてとなふれば、その人の心にをのづから三心もそなはりぬるを、中々三心とて事くしく申すほどにかへりて信心をみだることも侍なり。かゝらむ人のためには、三心の沙汰無益の事なるべし。もし日來はうたがひの心もあり三心具せぬ人も聖教を學すれば道理にをれて三心のおこる事もあればさやうならむ人のためには、三心の様をしらむも大切なるべきを、一向にこれを非せば、又そのとがあるべし。このすぢを心えなば、上人兩様の御勸進さらに相違を成すべからざるものなり

第二 二 圖

遠江國久野の作佛房といひし山臥は、役行者の跡をおひ、山林斗藪の行をたて、大峯を經歷し熊野參詣のあゆみをはこぶ事四十八箇度なり。たびごとに證誠權現の寶前にひざまづき、われさらに現世の果報をいならず、ねがはくば出離の要道をしめし給へとちかひけるに、四十八度滿する時當時京都に法然房といふひじりあり、ゆきて出離の道をたづぬべしとしめし給ければ、すなはち上洛して上人に謁したてまつり、念佛往生の教導にあづかり、一向專修の行者となりけり。本國にくだりては、みづから市にいで、染物などやうのものを賣買して命をつぐはかりごととしけり。もとより孤獨の身なれば同行もなく知識もなし、病をうけざれば、病惱のくるしみなく療治のわづらひなし。往生の期いたりて道場にいり、佛前にしてみづからかねをうち高聲念佛數尅にをよぶ。小法師朝飡をととのへて案内しけるに、しばらくとて、なを念佛のこゑしきりなり。念佛とゞまりてのち、また申おどろかすに、をともしせざりければ、ちかくよりて見るに、本尊にむかひ端座合掌す。そのかほゑめるがごとし。さるほどに紫雲におどろき異香をたづねて諸人雲集し來縁をむすぶ奇特のことなりけり。上人の勸化神慮にかなえることかくのごとし。抑熊野山證誠權現は、本地阿彌陀如來なり。いま神明とあらはれて、無福の衆生に福をあたえんとちかひ給へるも、せめて慈悲のあまりに貪欲ふかくして、ひとへに今生の榮耀に心をそめ、後生の苦患をわすれたる衆生の人身をうけたるかひなくして、ふたゝび惡道にかへるべきともがらを、すくはんがための濟度の方便な

るべし。されば當山にまうで、後世ぼたいをいのるひとは、ながれにさほさすがごとく、本願の正意にかなひて、かならず順次の往生をとぐなどぞ申つたへ侍る。九品の鳥居をたてられたるも、九品の淨土に引接の御本意を表すといえり。參詣の人、内には本地の本願をたのみ、外には垂迹の擁護をあふぎて、ただひとへに順次往生の心ざしをさきとし、侍るべきものをや

### 第三圖

## 法然上人行狀繪圖 第二十一

上人つねに仰られける御詞

上人の給はく。口傳なくして淨土の法門を見るは、往生の得分を見うしなふなり。其故は極樂の往生は上は天親龍樹をすゝめ、下は末世の凡夫十惡五逆の罪人まですすめ給へり。しかるをわが身は最下の罪人にて、善人をすゝめ給へる文を見て、卑下の心をこして、往生を不定におもひて、順次の往生を得ざる也。しかれば善人をすゝめ給へるところをば善人の分と見、惡人をすゝめたまへるところをば我分とみて得分にする也。かくのごとく見さだめぬれば、決定往生の信心かたまりて、本願に乗じて順次の往生をとぐるなり

又云、念佛申にはまたく別の様なし。たゞ申せば極樂へむまると知て、心をいたして申せばまい

る也

又云、南無阿彌陀佛といふは、別したる事には思べからず。阿彌陀ほとけ我をたすけ給へといふことばと心えて、心にはあみだほとけ、たすけ給へとおもひて、口には南無阿彌陀佛と唱るを、三心具足の名號と申也

又云、罪は十惡五逆のもの、なをむまると信じて小罪をもをかさじと思へし。罪人をむまる、いかにいはんや善人をや。行は一念十念むなしからずと信じて無間に修すべし。一念なをむまる、いかにいはんや多念をや

又云、一念十念に往生をすといへばとて、念佛を疎想到申すは、信が行をさまたぐるなり。念々不捨者といへばとて、一念を不定におもふは、行が信をさまたぐるなり。信をば一念にむまると信じ、行をば一形にはげむべし。又一念を不定におもふは、念々の念佛ごとに不信の念佛になる也。其故は、あみだ佛は、一念に一度の往生をあてをき給へる願なれば念ごとに往生の業となるなり

又云、煩惱のうすくあつきをもかへりみず、罪障のかるきをも沙汰せず、たゞ口に南無阿彌陀佛と唱へて、聲につきて決定往生のおもひをなすべし

又云、縦餘事をいとなんとも、念佛を申し／＼これをするおもひをなせ。餘事をしし念佛すとは思べからず

又云、往生をねがひ、極樂にまいらん事を、まめやかに思入たる人の氣色は、世の中をひとくねり、恨たる色にて常にはある也

又云、人の命は食事の時、むせて死する事もあるなり。南無阿みだ佛とかみて、南無阿み陀佛とのみ入べきなり

又云、法爾の道理といふ事あり。ほのをはそらにのぼり、水はくだりさまにながる。菓子のかかに、すぎ物ありあまき物あり。これらはみな法爾の道理なり。阿彌陀佛の本願は、名號をもて罪惡の衆生をみちびかんとちかひ給たれば、たゞ一向に念佛だにも申せば、佛の來迎は法爾の道理にてうたがひなし

又云、善導の釋を拜見するに、源空が目には、三心も南無阿彌陀佛、五念も南無阿彌陀佛、四修も南無阿彌陀佛なり

又云、弘願といへるは 如く大經説一切善惡凡夫得生者、莫不皆乘阿彌陀佛大願業力爲増上縁と善導釋し給へり。予がごときの不堪の身は、ひとへにたゞ弘願をたのんなり

又云、我はこれ烏帽子もきざる男也。十惡の法然房、愚痴の法然房の念佛して往生せんと云也

又云、學生骨になりて、念佛やうしなはんずらむ

又云、本願の念佛には、ひとりだちをせさせて、すけをさゝぬなり。すけといふは、智慧をもす

けにさし、持戒をもすけにさし、道心をもすけにさし、慈悲をもすけにさす也。善人は善人ながら念佛し、悪人は悪人ながら念佛して、たゞむまれつきのまゝにて念佛する人を、念佛にすけさゝぬとはいふなり。さりながら悪をあらため、善人となりて念佛せん人は、佛の御心に叶べし。かなはぬ物ゆへに、とあらんかからんと思ひて、決定心おこらぬ人は、往生不定の人なるべし

又云、佛告阿難汝好持是語持是語者、卽是持無量壽佛名といへり。名號をきくといふとも信ぜずば、きかざるがごとし、たとひ信ずといふとも、となへずば、信ぜざるがごとし。たゞつねに念佛すべきなり

又云、近來の行人觀法をなす事なかれ。佛像を觀ずとも運慶康慶がつくりたる佛ほどだにも、觀じあらはすべからず。極樂の莊嚴を觀ずとも、櫻梅桃李の華菓ほども、觀じあらはさん事かたかるべし。たゞ彼佛今現在世成佛、當知本誓重願不虛、衆生稱念必得往生の釋を信じて、ふかく本願をたのみて一向に名號を唱べし。名號をとなふれば、三心をのづから具足するなり

又云、往生の業成就は、臨終平生にわたるべし。本願の文簡別せざるゆへなり。惠心の心も、平生にわたると見えたり

又云、他力本願に乗ずるに二あり。乘ぜざるに二あり。乘ぜざるに二といふは、一には罪をつくる時乘ぜず。其故は、かくのごとく罪をつくれれば、念佛申とも往生不定なりとおもふ時に乘ぜず。

二には道心のおこる時乗せず。其故は、おなじく念佛申とも、かくのごとく道心ありて申さんずる念佛にてこそ往生はせんずれ、無道心にては念佛すともかなふべからずと。道心をさきとして、本願につきにおもふ時乗せざるなり。次に本願に乗ずるに二の様といふは、一には罪つくる時乗ずるなり。其故は、かくのごとく罪をつくれれば、決定して地獄におつべし。しかるに本願の名號をとなふれば、決定往生せん事のうれしさよとよろこぶ時に乗ずる也。二には道心おこる時乗ずるなり。其故は、この道心にて往生すべからず。これ程の道心は、無始よりこのかたおこれども、いまだ生死をはなれず。故に道心の有無を論ぜず、造罪の輕重をいはず、たゞ本願の稱名を念々相續せんちからによりてぞ、往生は遂べきとおもふ時に、他力本願に乗ずるなり。

又云、せこにこめたる鹿も、ともに目をかけずして、人かげにかへらず、むかひたる方へ、おもひきりて、まひらににぐれば、いくへ人あれども、かならずにげらるゝなり。その定に他力をふかく信じて、萬事をしらず、往生をとげんと思べき也

又云、稱名の時に心に思べきやうは、人の膝などをひきはたらかしてや、たすけ給へと云定なるべし

又云、七日七夜心無間といふは、明日の大事をかゝじと今日はげむがごとくすべし

又云、人の手より物をえんずるに、すでに得たらんと、いまだ得ざるといづれか勝べき。源空は

すでに得たる心地にて念佛は申なり

又云、往生は一定と思へば一定なり。不定と思へば不定なり

又云、念佛申さんもの十人あらんに、たとひ九人は臨終あしくて往生せずとも、我一人は決定して往生すべしとおもふべし

又云、一丈のほりをこえんと思はん人は、一丈五尺をこえんとはげむべし。往生を期せん人は、決定の信をとりてあひはげむべきなり

また云、いければ念佛の功つもあり、しなば浄土へまいりなん。とてもかくても、此身には思ひわづらふ事ぞなきと思ぬれば、死生ともにわづらひなし

あるとき上人、あはれこのたびしおせばやなど仰られけるを、乗願房うけ給て、上人だにもかやうに不定げなるおほせの候はんには、その餘の人はいかゞし候べきと申ければ、上人うちわらひたまひて、まさしく蓮臺にのらんまでは、いかでかこのおもひはたえ候べきとぞのたまひける

或人上人の申させたまふ御念佛は、念々ごとに佛の御こゝろにかなひ候らんなど申けるを、いかなればと上人かへしとはれければ、智者にてをはしませば、名號の功德をもくはしくしろしめし、本願のやうをもあきらかに御心得あるゆへにと申けるとき、汝本願を信ずる事まだしかりけり。彌陀如來の本願の名號は、木こり草かり、なつみ水くむたぐひごときのものゝ、内外ともにかけて、

一文不通なるがとなふれば、かならずむまると信じて、眞實にねがひて、常に念佛申を最上の機とす。もし智慧をもちて生死をはなるべくば、源空いかでかゝの聖道門をすてゝ、この淨土門に趣べきや。聖道門の修行は、智慧をきはめて生死をはなれ、淨土門の修行は、愚痴にかへりて極樂にむまるとしるべしとぞおほせられける

又人々後世の事申けるつゝに、往生は魚食せぬものこそすれといふ人あり。あるひは魚食するものこそすれといふ人あり。とかく論じけるを、上人きゝたまひて、魚くふもの往生せんには、鵜ぞせんずる。魚くはぬものせんには、猿ぞせんずる。くふにもよらず。くはぬにもよらず。たゞ念佛申もの往生はするとぞ、源空はしりたるとぞ仰られける

上人御往生の後、三井寺の住心房の夢のうちにとはれても、念佛はまたく風情もなし。たゞ申よりほかの事なしと、上人答給ける

## 第一 圖

又一紙にのせての給はく、末代の衆生を、往生極樂の機にあてゝみるに、行すくなしとても疑べからず。一念十念に足ぬべし。罪人なりとても疑べからず。罪根ふかきをもきはじとの給へり。時くだれりとても疑べからず。法滅以後の衆生猶もて往生すべし。況近來をや。我身わろしとても疑べからず。自身は是煩惱具足せる凡夫なりとの給へり。十方に淨土おほけれど西方を願は、十惡

五逆の衆生の生るゝ故也。諸佛のなかに彌陀に歸したてまつるは、三念五念にいたるまでみづから來迎し給故也。諸行のなかに念佛を用るは、彼の佛の本願なる故也。いま彌陀の本願に乗じて往生しなむに、願として成ぜずといふ事あるべからず。本願に乗ずる事は信心のふかきによるべし。受がたき人身をうけて、あひがたき本願にあひて、おこしがたき道心を發して、離がたき輪廻の里をはなれて、生がたき淨土に往生せむ事、悦の中のよろこびなり。罪は十惡五逆の者も生ずと信じて少罪をも犯さじと思べし。罪人猶生る、況や善人乎。行は一念十念猶むなしからずと信じて、無間に修すべし。一念猶生る、況多念哉。阿彌陀佛は不取正覺の言を成就して、現に彼國にませば、定で命終の時は來迎し給はん。釋尊は善哉我教にしたがひて、生死を離と知見し給ひ、六方の諸佛は悦哉我證誠を信じて、不退の淨土に生と悦給らん。天に仰地に臥して悦べし。このたび彌陀の本願にあふ事を、行住坐臥にも報ずべし。かの佛の恩徳を、憑てもたのむべきは乃至十念の詞、信じても猶信すべきは必得往生の文也と。此書世間に流布す。上人の小消息といへるこれなり

## 第二 圖

上人、念佛の行者の、心得べき様ををしへ給へる事あり。所謂われは阿みだをこそたのみたれ、念佛をこそ信じたれとて諸佛菩薩の悲願をかるしめたてまつり。法華般若等の目出たき經どもを、わろくおもひ、そしる事ゆめく有べからず。阿彌陀佛を信じたればとて、よろづの佛をそしり、

もろくの聖教をうたがひそしりたらんずるは、信心のひがみたるにてあるべき也。信心たゞしからずば、阿みだ佛の御心に叶まじければ、念佛すとも彌陀の悲願にもれん事は一定也。又罪をつくらじとつゝしみてよからんとするは彌陀の本願をかるしむるにてこそあれ。又念佛を多く申さんとて、日々に數遍のかずをつむは、他力をうたがふにてこそあれなどいふ事の多くきこゆる加やうのひが事ゆめくもちあるべからず。いづれのところにか、阿彌陀佛は罪つくれとすゝめ給たる。これひとへに我身に惡をもとゞめえず。罪をのみつくりたるまゝに、かゝるゆくゑもなき虚言をたくみいだして、ものもしらぬ男女の輩をすかしほらかして、罪業をすゝめ煩惱をおこさしむる事、しかしながらこれ天魔のたぐひ也、外道のしわざ也。往生極樂のあだかたき也と思へし。又念佛の數を多く申ものをば、自力をはげむといふ事、これ又ものも覺へず、淺猿しき僻事也。たゞ一念二念をとなふとも、自力の心ならん人は自力の念佛とすべし。千遍萬遍をとなへ、百日千日よるひるはげみつとむとも、ひとへに願力をたのみ他力をあふぎたらん人の念佛は、聲々念々しかしながら他力の念佛にてあるべし。されば三心をおこしたる人の念佛は日々夜々時々尅々に唱れども、しかしながら願力をあふぎ他力をたのみたる心にて、唱居たれば、かけてもふれても、自力の念佛とはいふべからず。また三心と申事はその子細をしりたる人の念佛に三心具足せん事は左右に及ばず。つや／＼三心の名をだにもしらぬ無智の輩の念佛には、いかでか三心具し候べきと申す人も候やら

ん。これは返々ひが事にて候也。たとひ三心の名をだにもしらぬ無智の者なれども、彌陀のちかひをたのみたてまつりて、すこしもうたがふ心なくして、この名號を唱れば、この心が即三心具足の心にてあるなり。されば只ひらに信じてだにも念佛すれば、三心はをのづから具する也。さればこそ、よに淺猿しき一文不通の輩のなかにも、一すぢに念佛するものは臨終正念にして目出たき往生をばすれ。これ現證あらたなる事也。露ちりも疑ふべからず。中々よくもしらぬ三心沙汰してあしさまに心得たる人々は、臨終も思やうならぬ事おほし。それにて誰くも心得べき也

又ときく別時の念佛を修して、心をも身をもはげまし、とこのへすむべき也。日々に六萬遍七萬遍を唱へば、さても足りぬべき事にてあれども、人の心ざまは、いたく目なれ耳なれぬれば、いらくらすむ心すくなく、あけくれは忽々として心閑ならぬ様にてのみ、疎略になりゆく也。その心をすめんためには、ときく別時の念佛を修すべき也。しかれば善導和尚もねんごろにはげまし、惠心の先徳もくはしくをしへられたり。道場をもひきつくるひ、花香をも備たてまつらん事、たごちからのたへたらんにしたかふべし。また我身をもことにきよめて道場に入て、或は三時或は六時などに念佛すべし。もし同行などあまたあらん時は、かはるくいりて不斷念佛にも修すべし。加やうの事はをくやうにしたがひてはからふべし。善導和尚は、月の一日より八日にいたるまで、或は八日より十五日にいたるまで、或は十五日より廿三日にいたるまで、或は廿三日

より晦日にいたるまでと仰られたり。面々指合ざらん時をはからひて七日の別時を常に修すべし。ゆめ／＼する事どもをいふものにすかされて、不善の心あるべからず。又いかにも／＼臨終正念に安住して、目には阿みだほとけをおがみ、口には彌陀の名號を唱へ、心には聖衆の來迎を待たてまつるべし。としごろ日ごろいみじく念佛の功を積たりとも、臨終に悪縁にもあひ、最後にあしき心もおこりて、念佛の心行をも退しぬるものならば、順次の往生しはづして、一生二生なりとも、三生四生なりとも、生死のながれにしたがひて出離の道にとこほらん事は、まめやかに心うく、口惜き事ぞかし。されば善導和尚の御すゝめには、願弟子等、臨命終時心不顛倒、心不錯亂、心不<sub>レ</sub>失念、身心無<sub>レ</sub>諸苦痛、身心快樂、如<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>禪定、聖衆現前、乘<sub>レ</sub>佛本願、上品往生阿彌陀佛國と、ねんごろに發願せよとの給へり。いよ／＼臨終の正念をばいのりもし、ねがふべき事也。臨終の正念をいるのは、彌陀の本願をたのまぬものぞなんど申人は、善導にはいかほどまさりたる學生ぞと思へし。あなあさまし。おそろし／＼。又念佛は常にをこたらぬが、一定往生する事にてある也。善導すゝめての給はく。一發心已後、誓畢此生無有退轉、唯以淨土爲期。又云、一心專念彌陀名號、行住坐臥、不問<sub>レ</sub>時節久近、念々不捨者、是名<sub>レ</sub>正定之業、順<sub>レ</sub>彼佛願、故文といへり。かやうにすゝめまし／＼たる事は、あまた多けれども、ことごとくにかきのせがたし。憑べし仰べし。ふかく信べし、更に疑事なかれ。又まことしく念佛を行じて、げに／＼しき念佛者になりぬれば、よ

ろづの人を見るに、みなわが心にはおとりて、淺猿しくわろければ、我身のよきまゝに我はゆゝしき念佛者にてあるものかな。誰々にも勝たりと思也。この心をばよくくつゝしむべき事也。世もひろく、人も多ければ、山のをく林のなかにこもりゐて、人にもしられぬ念佛者の、貴く目出きさすがに多くあるを、わがきかずしらぬにてこそあれ。さればわれほどの念佛者よもあらじと、おもふ僻事也。この思は大懦弱にてあれば、即三心もかくる也。またそれをたよりとして、魔縁のきたりて往生を妨ぐる也。これ我身のいみじくて罪業をも滅し。極樂へもまいる事ならばこそあらめ。ひとへに阿みだ佛の願力にて、煩惱をものぞき罪業をもけして、かたじけなく手づから身づから、極樂へむかへとりて歸らせまします事也。我ちからにて往生する事ならばこそ、われかしこしといふ慢心をばおこさめ。懦弱の心だにもおこりぬれば、心行かならずあやまる故に、たちどころに阿彌陀ほとけの願にそむきぬるものにて、彌陀も諸佛も護念し給はず。さるまゝには惡鬼のためにもなやまさるゝ也。返々もつゝしみて、懦弱の心をおこすべからず。あなかしこくと。ねんごろにをしへをき給へり。ふかく上人教誡の詞を信じて、敢て本願にほこるおもひなく、往生の前途を遂べきもの也

或人名<sup>不註</sup>上人の勸化に歸してのち、安心起行のやう、こまかにたづね申けるにつきて、しるしつかはされける狀云、御返事こまかにうけたまはり候ぬ。かやうに申事の一分御さとりをそへ往生の御心さしもよくなり候ぬべからむには、おそれをもかへりみ候べき事にて候はず。いくたびにても申たくこそ候へ。まことにわが身のいやしく、わが心のつたなきをかへりみず。たれくもみな人の彌陀のちかひをたのみて、決定往生のみちにおもむかんとこそおもふ事にて候へども、人の心さまさまにて、ただひとすぢに、ゆめまぼろしのうき世は、かりのたのしみさかへをのみもとめて、すべてのちの世をしらぬ人も候。又のちをおそるべき事を思しりて、つとめおこなふ人につきてもかれこれに心をうつして、ひとすぢに一行をたのまぬ人も候。又いづれの行にても、もとよりころざしはじめおもひそめつるをば、いかなることはりをきけどもとの執心をあらためぬ人も候。又今日はいみじく信をおこして、一すぢにおもひつきぬと見るほどに、のちにはうちすつる人も候かくのみ候て、まことしく淨土の一門にいりて、念佛の一行をもはらにする人もありがたく候事は我身ひとつのなげきとこそは人しれず思候へども、法によりて人によらぬ理を、うしなはぬほどの人もありがたき世にて候にや。をのづからすゝめこゝろみ候にも、われからあなづらはしさに、申いづる事も、すてむざるにやと、思しらるゝ事のみにて候事の心うくかなしく候て、このゆへはいまひときは、とく淨土にむまれて、さとりをひらきてのちに、いそぎこの世界にかへりきたりて神

通方便をもて結縁の人をも無縁のものをも、讃をも謗をも、みなことごとく念佛にすゝめられて、淨土へむかへんと、ちかひをおこしてのみこそ、當時の心をもなぐさむる事にて候に、このおほせにぞ、わが心ざしもしるしある心地して、あまりにうれしく候へばその儀にて候はば、おなじくはまめやかに、げにぐしく、御沙汰候て、ゆくするもあやうからず。往生もたのもしきほどに、思食さだめさせ給べく候。詮じては、人のはからひ申べき事にて候はず。よくよく案じて御覽候へ。この事にすぎたる御大事何事は候べき。この世の名聞利養は、なか／＼申ならぶるにもいま／＼しく候。やがて昨日今日まなこにさへぎり耳にみちたるはかなさにて候めれば、事あたらしく申たつるにも及候はず。たゞ返々御心をしづめて思食はからふべく候。さきには聖道淨土の二門を心えわかちて淨土一門にいらせましますべき由を候き。いまは淨土門につきて行ずべきやうを申べし。淨土に往生せむとおもはん人は、安心起行と申て、心と行と相應すべき也。その心といふは、觀無量壽經にときて、もし衆生あて、わが國にむまれんとおもはんものは、三種の心をおこしてすなはち往生す。なにをか三とする。一には至誠心、二には深心、三には廻向發願心なり。三心を具せるものは、かならずかの國に生といへり。善導和尚この三心を釋していはく、はじめに至誠心、至といは、眞なり、誠といは、實なり。一切衆生の身口意業に、修するところの解行、かならず眞實心のなかになすべきことをあかさむとおもふ。ほかには賢善精進の相を現じ、うちに虚假をいだく事

をえざれ。内外明闇をえらばずかならず眞實をもちぬよ。かるがゆへに至誠心となづくといへり。この釋の心は、至誠心といは眞實心なり。その眞實といは身にふるまひ口にいひ心におもはむ事、みなまことの心を具すべきなり。すなはちうちむなく、ほかをかざる心なきをいふなり。このころは、うき世をそむきて、まことのみちにおもむくとおぼしき人々の中に、おほく用意すべき心ばへにて候なり。われも人も、いふばかりなきゆめの世を執するころのふかゝりしなごりにてほど／＼につけて、名聞利養わづかにふりすてたるばかりを、かたくいみじき事にして、今世さまにも心のたけのうるさきにとりなして、さとりあさき世間の人の、心をばしらず、たうとかりいみじかるを、これこそは本意なれところざしたる心にて、みやこのほとりをかきはなれて、かすかなる住所をたづぬるまでも、心のしづまらんためをつぎになして、本尊道場の莊嚴まがきのうちに花のこだちなむどの、心ぼそくものあはれならん事がらを、人に見えきかれん事をのみ執するほどに、つゆの事も人のそしりにならん事あらじと、おもひいとなむ心よりほかにおもひまじふる事なし。かやうなるころにのみなして佛のちかひをたのみ往生をねがはんといふ事は、思われず沙汰もせぬ事のやがて至誠心かけて、往生せぬ心ばへにて候なり。又かく申候へば、ひとへに今世の面目をば、いかにてもありなん。人のそしりをかへりみぬがよきぞと、申儀にては候はず。人目をかへりみる事は候へども、それをのみおもひいれて、往生のさはりになるかたをば、かへり見ぬやう

にひきなされ候はん事の、返々おろかにくちおしく候へば、御身にあたりても、御心えさせまいらせんがために申候なり。この心につきて四句の不同あるべし。一には外相はたうとげにて内心は貴からぬあり。二には外相も内心もともに貴からぬ人あり。三には外相はたうとげもなくして内心はたうとき人あり。四には内外ともに貴とき人あり。此四人がなかに、さきの二人は、いまきらふところの至誠心かけたる人なり。これを虚假の人となづくべし。のちの二人は至誠心具したる人なり。これを眞實の行者となづくべし。されば詮ずるところはたゞ内心にまことの心をおこして、外相をばよくもあしくも、とてもかくてもあるべきかとおほえ候なり。おほかたこの世をいとむ事も、極樂をねがはん事も、人目ばかりをおもはで、まことの心をおこすべきにて候也。これを至誠心と申なり。二に深心といは、善導の釋にいはく、深心といは、すなはちこれふかく信ずる心なり。これに二種あり。一には決定して、ふかくわが身は煩惱具足せる罪惡生死の凡夫なり。善根薄少にして、曠劫よりこのかたつねに流轉して、出離の縁なしと、信ずべし。二にはふかくかの阿彌陀佛の四十八願をもて、衆生を攝取し給、すなはち名號を稱すること、下十聲にいたるまで、かの願に乗じて、さだめて往生する事をうと信じて、乃至一念もうたがふ事なきがゆへに深心となづく。又深心といふは、決定して心をたて、佛敎にしたがひて修行して、ながく疑心をのぞくなり。一切の別解別行、異學異見異執のために、退失傾動せられざれといへり。この釋の心は、はじめにはわが

身のほどを信じ、後には佛の願を信ずるなり。そのゆへはもしはじめの信心をあげずして、のちの信心を釋し給はゞ、もろくの往生をねがはん人、たとひ本願の名號をばとなふとも、みづから心に貪慾瞋恚煩惱をもおこし、身に十惡破戒等の罪惡をもつくりたる事あらば、みだりに自身をかるしめて、身のほどをかへりみて、本願を疑ひ候はまし、いまこの本願に十聲一聲までに往生すといふは、おほろけの人にはあらじなどそ、おぼえ候はまし。しかるを善導和尚、未來の衆生の、このうたがひをおこさむ事をかゞみて、この二の信をあげて、我等がいまだ煩惱をも斷ぜず、罪業をもつくる凡夫なれども、ふかく彌陀の本願を信じて念佛すれば、一聲にいたるまで、決定して往生するよしを釋し給へる、この釋のことに心にそみていみじくおぼへ候なり。まことにかくだにも、釋し給はざらましかば、往生は不定にぞおぼえ候はましと、あやうくおぼえ候。さればこの儀を心えわかぬ人やらむ。わがこゝろのわろければ、往生はかなはずとこそは申あひて候めれ。そのうたがひのやがて往生せぬ心にて候けるものを、たゞ心の善惡をもかへりみず、つみのかろきおもきをもさたせず、心に往生せんとおもひて口に南無阿彌陀佛となへては、こえにつきて決定往生のおもひをなすべし。その決定心によりてすなはち往生の業はさだまるなり。かく心えねば、往生は不定なり。往生は不定とおもへばやがて不定なり、一定と思へば一定する事にて候なり。されば詮はふかく信ずる心と申候は、南無阿彌陀佛と申ば、その佛のちかひにて、いかなる身をもきはらず一定

むかへ給ぞと、ふかくたのみて、いかなるとがをもかへりみず、うたがふ心のすこしもなきを申候なり。又別解別行の人にやぶられざれと申は、さとりことに、行ことならむ人のいはん事につきて念佛をもすて、往生をうたがふ事なかれと申候也。乃至たとへ佛きたりて光をはなち舌をいだして煩惱罪惡の凡夫、念佛して決定往生すといふ事はひが事ぞ、信ずべからずといふとも、それによりて、一念も疑心あるべからず、そのゆへは一切の佛はみな同心に衆生をみちびき給なり。まづ阿彌陀如來願をおこしてのたまはく、われ佛にならん、十方の衆生、わが國にむまれんとねがひて、わが名號をとなふる事、下十聲にいたるまで我願力に乗じて、もしむまれずといはぶ、正覺をとらじとちかひ給ふ。その願成就して、すでに佛になりたまへり。しかるを、釋迦佛のこの世界にいて、この佛の本願をとき給へり。又六方にをの恆河沙數の佛ましくて、一々に舌をのべて三千大千世界におほひ、無虛妄の舌相を現じて、釋迦佛の彌陀の本願をほめて、一切衆生をすゝめてかの佛の名號を唱れば、さだめて往生すとき給へるは、決定してうたがひなき事なり。一切衆生みなこの事を信ずべしと證誠し給へり。かくのごとく一切の佛、一佛ものこらず同心に一切の凡夫念佛して、決定往生すべきむねを、あるひは願をたて、あるひはその願をとき、あるひはその説を證し、すゝめ給へり。このうへまたいかなる佛のきたりて、往生すべからずとは、いへるぞといふことはりの候ぞかし。このゆへに、佛きたりての給ともおどろくべからずと申なり。佛なをしかな

り、いはむや菩薩をや。いはむや緣覺をや。いはんや凡夫をやと心えつれば、ひとたびこの念佛往生の法門をきゝて、信をおこしてのちには、いかなる人とかく申とも、疑心あるべからずとこそはおぼえ候へ。これを深心と申候なり。三に廻向發願心といふは、善導の釋に云、過去および今生の身口意業に、修するところの、世出世の善根、および他の一切の凡聖の、身口意業に修するところの、世出世の善根を隨喜して、この自他所修の善根をもて、ことごとくみな眞實の深信の心の中に廻向して、かの國に生まれんと願するなり。また廻向發願といふは、かならず決定の眞實心の中に廻向して、むまるゝ事をうる思をなせ、この心ふかく信じて、なをし金剛のごとくにして、異學異見、別解別行の人のために、動亂破壊せられざれといへり。この釋の心は、まづわが身につきて、さきの世、をよび今生に、身にも口にも、つくりたらむ功德を、みなことごとく極樂に廻向して、往生をねがふ也。次にはわが身の事にも、人の事にも、この世の果報をもいのり、またおなじのちの世の事なりとも極樂ならぬ餘の淨土に生まれんと、もしは都率に生まれんと、もしは人中天上に生まれんともねがひ、かくのごとくかれにも、これにもことなる事に廻向する事なくして一向極樂に往生せんと廻向すべきなり。もしこの理をおもひさだめざらんさきにこの世の事をもいのり、あらぬ餘のかたへも廻向したる功德どもを、みな取りかへして、いまはことごとく往生の業になさんと廻向すべきなり。又一切の善をみな極樂に廻向すべしと申せばとて、念佛一門に歸して

一向に念佛を申さむ人のことさらに餘の功德をつくりあつめて、廻向せよと申には候はず。たゞすぎぬるかたにつくりおきたらん功德をも、もしまたこれよりのちなりとも、をのづからたよりにしたかひて、念佛のほか餘の善を修する事あらむをも、しかしながら往生の業に廻向すべしと申事にて候なり。この心金剛のごとくにして、別解別行の人にやぶられざれと申候は、さきに申つるやうに、異解の人におしへられて、かれこれに廻向する事なかれと申候也。金剛はやぶれぬものにて候なれば、たとへにとりて、この心のやぶられざらん事も金剛のごとくなれと申候。これを廻向發願心とは申候なり。三心のあり様、おろく申ひらき候ぬ。この三心を具してかならず往生するなり。もし一心もかけぬれば、往生する事をえずと。善導釋し給たれば、往生をねがはん人は、もとこの三心を具足すべきなり。乃至これを安心とはなづけて候なり。次に起行といふは、この申ひらき候心ばへにて一向に念佛を申させおはしますべきに候。またこと行にて候とも、極樂にかたどりて候はん行を、かれこれに心をかけずしてつとめ行すべきにて候なり。おほよそ極樂にむまれ候べき行には、阿彌陀佛の本願にも、釋迦佛の説教にも、善導の解釋にも、諸師の料簡にも、念佛をもて本躰とする事にて候なり。そのほかの行は、とりわきたれくもすゝめ給事候はず。さは候へども、いづれもく聖教をならひ、何事にもおもひあてがひていのり申に、みなことくく、そのなかだちとならずといふ事の候はねば、念佛いかにもく信じたくおもはざらん人は、また心のひ

第一 圖

かむにしたがひて、いづれの行にてもつとめむにしたがひて、極樂に廻向せよと申候也以上取證

またある人、往生の用心につきて、おぼつかなきことを百四十五ヶ條までしるして、たづね申たりけるに上人の御返事ありき。少々これをしるす

一、心を一にして、こゝろよくなをり候はずとも、何事ををこなひ候はずとも、念佛ばかりにても淨土へはまいり候べきか。答、心のみだるゝはこれ凡夫のならひにてちからをよばぬ事にて候。たゞ心をひとつにして、よく御念佛せさせたまはゞ、その罪を滅して、往生せさせ給べきなり。その妄念よりもをもき罪も、念佛だにもし候へばうせ候なり

一、日所作は、かならずかずをさだめ候はずとも、よまれんにしたがひてよみ念佛も申候べきか。答、かずをさだめ候はねば懈怠になり候へば、數をさだめ候がよき事にて候

一、にらき、ひる、鹿をくひて、香うせ候はずとも、常に念佛は申候べきやらん。答、念佛はなにもさはらぬ事にて候

一、念佛をば、日所々に、いくらばかりあてゝか申候べき。答、念佛のかずは、一萬遍をはじめにて二萬三萬五萬六萬、乃至十萬まで申候なり。このなかに御こゝろにまかせて、おぼしめし候はん程を、申させおはしますべし

一、五色の糸は、佛にはひだりにと仰候き。わが手にはいづれのかたにて、いかゞひき候べき。答、左右の手にてひかせ給べし

一、時し候は、功德にて候やらん、かならずすべき事にて候やらん。答、ときは功德うる事にて候也。六齋の御時ぞ、さも候ぬべき。また御大事にて御病などもおこらせおはしましぬべく候はゞさなくとも、たゞ御念佛だにも、よくく候はゞ、それにて生死をはなれ、浄土に往生せさせおはしまさんずる事は、これによるべく候

一、かならず佛を見、いとをひかへ候はずとも、われ申さずとも、人の申さん念佛をきゝて死候はば浄土には往生し候べきやらん。答、かならずいとをひくと云事候はず。佛にむかひまいらせねども、念佛だにもすれば往生し候なり。またきゝてもし候。それはよくく信心ふかくての事にて候

一、ながく生死をはなれ、三界にむまれじと、おもひ候に、極樂の衆生となりても、その縁つきぬれば、この世にむまると申は、まことに候か。たとひ國王ともなり、天上にもむまれよ、たゞ三界をわかれんとおもひ候にいかにつとめをこなひてか、かへり候はざるべき。答、これもろもろのみが事にて候。極樂へひとたびむまれ候ぬれば、ながくこの世にかへる事候はず。みなほとけになる事にて候也。たゞし人をみちびかんためには、ことさらにかへる事も候。されども生死

にめぐる人にては随はず。三界をはなれ、極樂に往生するには、念佛にすぎたる事は候はぬ也。  
よくく御念佛候べき也

一、歌よむは罪にて候か。答、あながちに得候はじ、但罪ともす、功德ともなる

一、酒のむはつみにて候か。答、まことには、のむべくもなければども、この世のならひ

一、錫杖はかならず誦すべきか。答、さなくとも、そのいとまに念佛一遍も申べし、尼法師こそ、  
ありくとき虫のために誦候へ

一、臨終に、善知識にあひ候はずとも、日ごろの念佛にて往生はし候べきか。答、善知識にあはずとも、臨終おもふ様ならずとも、念佛申さば往生すべし

一、心に妄念のいかにも思はれ候はいかゞし候べき。答、たゞよくく念佛を申させたまへ

一、ねてもさめても、口あらはで、念佛申候はんはいかが候べき。答、くるしからず

一、六齋に、にら、ひる、いかに。答、めさざらんはよく候

一、毎日の所作に、六萬十萬の數遍を、念珠をくりて申候はんと、二萬三萬を念珠をたしかに一つ申候はむと、いづれかよく候べき。答、凡夫のならひ、二萬三萬をあつとも、如法にはかなひがたからん。たゞ數遍のおほからんにはすぐべからず。名號を相續せんためなり。かならずしもかずを要するにはあらず、たゞ常に念佛せんがためなり。かずをさだめぬは懈怠の因縁なれば

數遍をすゝむるにて候

一、魚鳥くひて、いかけして、經はよみ候べきか。答、いかけしてよむ本體にて候。せでよむは、功德と罪と共に候。但いかけせども、よまぬよりはよむはよく候

一、所作かきてしいれ、かねてかゝむずるを、まづし候、いかに。答、しいるゝはくるしからず、かねては懈怠なり

一、破戒の僧、愚痴の僧、供養せんも功德にて候か。答、破戒の僧愚痴の僧を、す名の世には、佛のごとくたとむべきにて候也、この御使に申候ぬ、きこめし候へ  
此御詞は、上人のまさしき御手なり、阿彌陀經のうらにをしたり

第二 圖

法然上人行狀繪圖 第二十三

或人、往生の用心につきて、條々の不審を尋申たりけるに、上人の御返事云

一、毎日の御所作、六萬遍、めでたく候、うたがひの心だにも候はねば、十念一念も、往生はし候へども、多く申候へば、上品にむまれ候。釋にも、上品花臺見慈主、到者皆因念佛多と候へば

一、宿善によりて往生すべしと人の申候らん、ひが事にては候はず。かりそめのこの世の果報だに

も、さきの世の罪功德によりて、よくもあしくもむまるゝ事にて候へば、まして往生程の大事、かならず宿善によるべしと、聖教にも候やらん。たゞし念佛往生は、宿善のなきにもより候はぬやらん。父母をころし、佛身よりちをあやしたるほどの罪人も臨終に十念申て往生すと、觀經にも見へて候。しかるに宿善あつき善人は、をしへ候はねども、惡にをそれ、佛道に心すゝむ事にて候へば、五逆などは、いかにもいかにもつくるまじき事にて候なり。それに五逆の罪人、念佛十念にて往生をとげ候時に、宿善のなきにもより候まじく候。されば經に、若人造多罪、得聞六字名、火車自然去、華臺即來迎、極重惡人、無他方便、唯稱念佛、得生極樂、若有重業障、無生淨土因、乘彌陀願力、必生安樂國。この文の心は、もし五逆をつくれりとも、彌陀の六字の名をきかば、火の車自然にさりて蓮臺きたりてむかふべし。又きはめておもき罪人の、他の方便なからむも彌陀をとなへたてまつらば、極樂にむまるべし。またもしおもきさはりありて、淨土にむまるべき因なくとも彌陀の願力にのりなば安樂國にむまるべしと候へばたのもしく候。又善導の釋には、曠劫よりこのかた六道に輪廻して、出離の縁なからん。常没の衆生をむかへんがために阿彌陀佛は佛になりたまへりと候。その常没の衆生と申候は、恒河のそこにしづみたるいき物の身おほきにながくして、その河にはゝかりて、えはたらかず、つねにしづみたるに、惡世の凡夫をばたとへられて候。又凡夫と申二の文字をば、狂醉のごとしと弘法大師釋したまへり。げにも

凡夫の心はものぐるみ、さけにゑいたるがごとくして、善惡につけておもひさだめたる事なし。一時に煩惱もゝたびまじはりて、善惡みだれやすければ、いづれの行なりとも、わがちからにては行じがたし。しかるに生死をはなれ。佛道にいるには、菩提心ををこし、煩惱をつくして、三祇百劫難行苦行してこそ、佛にはなるべきにて候に、五濁の凡夫わがちからにては、願行そなはる事かなひがたくて、六道四生にめぐり候なり。彌陀如來このことをかなしみ思食て、法藏菩薩と申しゝいにしへ、我らが行じがたき僧祇の苦行を兆載永劫があひだ、功をつみ徳をかさねて、阿彌陀ほとけになりたまへり。一佛にそなへ給へる、四智三身十力無畏等の一切の内證の功德、相好光明說法利生等の外用の功德、さま／＼なるを、三字の名字のなかにおさめいれて、この名號を、十聲一聲までも、となへんものを、かならずむかへん。もしむかへずば、われ佛にならじと、ちかひ給へるに、かの佛いま現に世にましまして、佛になりたまへり。名號をとなへん衆生往生うたがふべからずと、善導もおほせられて候也。この様をふかく信じて、念佛おこたらず申て、往生うたがはぬ人を、他力信じたるとは申候也。世間の事にも他力は候ぞかし。足なえ腰るたるものゝ、とをき道をあゆまむとおもはんに、かなはねば船車にのりてやすくゆく事、これ我ちからにあらず。乗物のちからなれば他力也。あさましき惡世の凡夫の、諂曲の心にてかまへつくりたるのりものにだにも、かゝる他力あり。まして五劫のあひだ、思食さだめたる、本願他力

のふねいかだに乗なば、生死の海をわたらん事、うたがひ思食べからず。しかのみならず。やまひをいやす草木、くろがねをとる磁石、不思議の用力也。麝香はかうばしき用あり。さいの角は水をよせぬちからあり。これみな心なき草木、ちかひをおこさぬけだものなれども、もとより不思議の用力はかくのみこそ候へ。まして佛法不思議の用力ましまさざらむや。されば念佛は一聲に、八十億劫の罪を滅する用あり。彌陀は、惡業深重のものを來迎し給ちからましますと思食とりて宿善のありなしも沙汰せず、罪のふかきあさきもかへりみず、たゞ名號となふるものゝ生するぞと信じ思食べく候。すべて破戒も持戒も貧窮も福人も上下の人をきはらず、たゞ我名號をだに念ぜば、石かわらを變じて金となさんがごとし、來迎せんと御約束候也。法照禪師の、五會法事讃にも、彼佛因中立弘誓、聞名念我惣來迎、不簡貧窮將富貴、不簡下智與高才、不簡多聞持淨戒、不簡破戒罪根深、但使廻心多念佛、能令瓦礫變成金。たゞ御ずゝをくらせおはしまして、御舌をだにもはたらかされず候はんは、懈怠にて候べし。たゞし、善導の、三緣の中の親縁を釋したまふに、衆生ほとけを禮すれば、佛これをみたまふ。衆生佛をとなふれば、佛これをきゝたまふ。衆生ほとけを念ずれば、佛も衆生を念じたまふ。かるがゆへに阿彌陀佛の三業と、行者の三業と、かれこれひとつになりて、佛も衆生も、おや子のごとくなるゆへに、親縁となづく候れば、御手にずゝをもたせたまひて候はば、佛これを御覽候べし、御心に念佛申すぞかしと思食

候はゞ、佛も行者を念じ給へし。されば佛に見えまいらせ、念ぜられまいらす、御身にてわた  
らせたまひ候はんずる也。さは候へども、つねに御舌のはたらくべきにて候也。三業相應のため  
にて候べし。三業とは、身と口と意とを申候也。しかも佛の本願の稱名なるがゆへに、こゑを本  
體とは思食べきにて候。さて我耳にきこゆる程申候は、高聲の念佛のうちにて候也

一、御無言目出たく候。たゞし無言ならで申念佛は功德すくなしと思食なばあしく候。念佛をば金  
にたとへたる事にて候。金は火にやくにもいろまさり、水にいるゝにも損せず候。かやうに念佛  
は妄念のおこる時申候へどもけがれず。ものを申まするにもまぎれ候はず。そのよしを御心えな  
がら、御念佛の程は、こと事まぜずして、いますこし念佛のかずをそえむと、おぼしめさんは、  
さんて候。もし思食わすれて、ふと物など仰候て、あなあさまし、いまはこの念佛、むなしくな  
りぬと、思食す御事は、ゆめく候まじく候。いかやうにて申候とも往生の業にて候べく候

一、百萬遍の事。佛の願にては候はねども、小阿彌陀經に、若一日若二日乃至七日、念佛申人極樂  
に生ずると、とかれて候へば、七日念佛申べきにて候。その七日の程のかずは、百萬遍にあたり  
候よし、人師釋し候時に、百萬遍は七日申べきにて候へども、たえ候はざらん人は、八日九日な  
どにも申され候へかし。さればとて百萬遍申さざらん人の、むまるまじきにては候はず。一念十  
念にても、むまれ候なり。一念十念にても、むまれ候ほどの念佛とおもひ候うれしさに百萬遍の

功德を、かさぬるにて候也

一、七分全得の事。仰のまゝに申げに候。さてこそ逆修はすることにて候へ。さ候へば後の世をとふらひぬべき人の候はん人も、それをたのまずして、われとはげみて念佛申て、いそぎ極樂へまゐりて、五通三明をさとりて、六道四生の衆生を利益し、父母師長の生所をたづねて、心のまゝにむかへとらんと、思べきにて候也。また當時日ごとの御念佛をも、かつく廻向しまいらせられ候べし。なき人のために念佛を廻向し候へば、阿彌陀ほとけ光をはなちて、地獄餓鬼畜生をしてらし給候へば、この三惡道にしづみて苦をうくるもの、そのくるしみやすまりて、命をはりてのち、解脱すべきにて候。大經云。若在三途勤苦之處、見此光明、皆得休息、無復苦惱、壽終之後皆蒙解脱

一、本願のうたがはしき事もなし。極樂のねがはしからぬにてはなけれども、往生一定とおもひやられて、とくまいりたきこゝろの、あさゆふはしみしみともおぼえずと仰候こと、まことによからぬ御ことにて候。淨土の法門をきけども、きかざるがごとくなるは、このたび三惡道よりいでて、罪いまだつきざるもの也と、經にもとかれて候。又此世をいとふ御心のうすくわたらせ給にて候。そのゆへは、西國へくだらむともおもはぬ人に、船をとらせて候はんに、ふねの水にうかぶ事なしとはうたがひ候はねども、當時さしているまじければ、いたくうれしくも候まじきぞか

し。さてかたきの城などにこめられて候はんが、からくしてにげてまかり候はむみちに、おほきなる河海などの候て、わたるべきやうもなからむおり、おやのもとより、船をまうけてむかへにたびたらむは、さしあたりて、いかばかりかうれしく候べき。これがやうに、貪瞋煩惱のかたきにしばられて、三界の焚籠にこめられたる我等を、彌陀悲母の御ころざしふかくして、名號の利劔をもちて、生死のきづなをきり、本願の要船を苦海の波にうかべて、かの岸につけたまふべしと、おもひ候はんうれしさは、歡喜のなみだたもとをしぼり、渴仰のおもひきもにそむべきに候。身の毛もいよだつほどに思べきにて候を、のさに思食候はむは、ほゐなく候へども、それもことはりにて候。罪つくる事こそ、をしへ候はねども、心にもそみておぼえ候へ、そのゆへは無始よりこのかた、六趣にめぐりし時も、かたちはかはれども、心はかはらずしていろ／＼さまさまに、つくりならひて候へば、今もうる／＼しからず、やすくはつくられ候へ。念佛申て往生せばやおもふ事は、このたびはじめてわづかに聞得たる事にて候へば、きとは信ぜられ候はぬ也。そのうへ、人の心は頓機漸機とて、ふたしなに候也。頓機はきゝてやがてさとるころにて候。漸機はやう／＼さとる心にて候也。ものもうでなどをし候に、足はやき人は、一時にまいりつくところへ、あしおそきものは日くらしにもかなはぬ様には候へども、まいる心だにも候へばつるにはとげ候やうに、ねがふ御ころだにわたらせ給候はと、とし月をかさねても、御信心も

ふかくならせおはしますべきにて候

一、日ころ念佛申せども、臨終に善知識にあはずは往生しがたし、またやまひ大事にて心みだれば往生しがたしと申候らんは、さもいはれて候へども、善導の御心にては、極樂へまいらむところざして、おほくもすくなくも、念佛申さむ人の、命つきん時は、阿彌陀佛、聖衆とともにきたりて、むかへ給べしと候へば、日ころだにも御念佛候はゞ、御臨終に善知識候はずとも、佛はむかへさせたまふべきにて候。又善知識のちからにて、往生すると申候事は、觀經の下三品の事にて候。下品下生の人などこそ、日ころ念佛も申候はず、往生のころも候はぬ逆罪の人の、臨終にはじめて善知識にあひて、十念具足して往生するにて候へ。日ごろより他力の願力をたのみ、思惟の名號をとなへて極樂へまいらむとおもひ候はん人は、善知識のちから候はずとも、佛は來迎したまふべきにて候。又かろきやまひをせむといのり候はむ事も、ころかしこくは候へどもやまひもせでしぬる人も、うるはしく、おはる時には斷末摩のくるしみとて、八萬の塵勞門より無量のやまひ身をせめ候事、百千のほこつるぎにて、身をきりさくがごとし。さればまなこなきがごとくして、見むとおもふものをもみず。舌の根すくみて、いはんと思こともいはれず候也。これは人間の、八苦のうちの死苦にて候へば、本願信じて、往生ねがひ候はむ行者も、この苦はのがれずして、悶絶し候とも、いきのたえむ時は、阿彌陀ほとけのちからにて、正念になりて往

生をし候べし。臨終はかみすぢきるが程の事にて候へば、よそにて凡夫さだめがたく候。たゞ佛と行者とのこゝろにてしるべく候也。そのうへ三種の愛心おこり候ぬれば、魔縁たよりをえて、正念をうしなひ候也。この愛心をば、善知識のちからばかりにては、のぞきがたく候。阿彌陀ほとけの御ちからにて、のぞかせたまふべく候。諸邪業繫無能碍者。たのもしく思食べく候。又後世者とおぼしき人の申げに候は、まづ正念に住して、念佛申さん時に、佛來迎したまふべしと、申げに候へども、小阿彌陀經には、與諸聖衆、現在其前、是人終時、心不顛倒、即得往生、阿彌陀佛、極樂國土と候へば、人の命おはらんずる時阿彌陀ほとけ聖衆とともに、目のまへにきたり給たらむを、まづ見まいらせてのちに心は顛倒せずして、極樂にむまるべしとこそ心えて候へ。さればかろき病をせばやと、いのらせ給はむいとまにて、いま一遍もやまひなき時、念佛を申て臨終には阿彌陀ほとけの來迎にあづかりて、三種の愛心をのぞき、正念になされまいらせて、極樂にむまれむと思食べく候。さればとて、いたづらに候ぬべからん、善知識にもむかはで、おはらむと思食べきにては候はず。先徳たちのおしへにも、臨終の時に、あみだ佛を西のかべに安置しまいらせて、病者そのまへに西むきにふして、善知識に、念佛をすゝめられよとこそ候へ。それこそあらまほしき事にて候へ。たゞし人の死の縁は、かねておもふにもかなひ候はず。俄に大ちみちにておはる事も候。又大小便利のところにてしぬる人も候。前業のがれがたくて、太刀か

たなにて命をうしなひ、火にやけ、水におぼれて、いのちをほろぼすたぐひ多候へば、さやうにてしに候とも、日ごろ念佛申て、極樂へまいる心だにも候人ならば、いきのたえむ時に、彌陀觀音勢至きたりて、むかへ給べしと信じ、思食べきにて候也。往生要集にも、時處諸縁を論せず、臨終に往生をもとめねがふに、その便宜をえたる事、念佛にはしかずと候へば、たのもしく候

一、所作おほくあてがひて、かゝむよりは、すくなく申さむ、一念もむまるなればと仰候事、まことにさも候なむ。たゞし禮讚の中には十聲一聲定得往生、乃至一念無有疑心と釋せられて候へども、疏の文には、念々不捨者、是名正定之業と候へば、十聲一聲にむまると信じて、念々にわするゝ事なく、となふべきにて候。又彌陀名號相續念とも釋せられて候。さればあひついで念ずべきにて候。一食のあひだに三度ばかりおもひいでむは、よき相續にて候。常にだに思食いでさせ給候はゞ、十萬六萬申させ給候はずとも、相續にて候ぬべけれども、人の心は、當時みる事、きく事に、うつるものにて候へば、なにとなく、御まぎれのうちには、思食いでん事かたく候ぬべく候。御所作おほくあてゝ、つねにずゝをもたせ給候はゞ、思食いで候ぬと覺候。たとひことさよりはありて、かゝせおはしまして候とも、あさましや、かきつる事よと思食候はゞ、御心にかけられ候はんずるぞかし。とてもかくても、御わすれ候はずば、相續にて候べし。またかけて候はん御所作を、次の日申入れ候はむ事さも候なん。それもあす申入れ候はんずればとて、御

ゆだん候はんはあしく候。せめての事にてこそ候へ、御心得あるべく候

一、魚鳥に七ヶ日のいみの候なる事、さもや候らん。え見及ばず候。地體はいきとしいけるものは過去のちゝはゝにて候なれば、くふべき事にては候はず。また臨終には、さけ魚鳥きにらひるなどは、いまれたる事にて候へば、病などかぎりになりては、くふべきものにては候はねども、當時きとしぬばかりは候はぬ病の、月日つもり、苦痛もしのびがたく候はんには、ゆるされ候なむと覺候。御身おだしくて、念佛申さんと思食て御療治候べし。命をしむは往生のさはりにて候。病ばかりをば、療治はゆるされ候なんとおぼえ候

## 第一 圖

鎮西より上洛せる修行者、上人の庵室に參じて、いまだ見參にいらざるさきに、御弟子に對して稱名のとき、佛の相好に心をかくることは、いかゞ候べきとたづね申ければ、めでたくこそ待らめと申けるを、上人道場にてきゝ給けるが、あかり障子をあげ給て、源空はしからず、たゞ若我成佛十方衆生、稱我名號、下至十聲、若不生者、不取正覺、彼佛今現、在世成佛、當知本誓、重願不虛衆生稱念、必得往生と、おもふばかりなり。我等が分にていかに觀ずとも更に如説の觀にあらず。たゞふかく本願をたのみて、口に名號をとなふるのみ。假令ならざる行なりとぞ、仰られける

## 第二 圖

## 法然上人行狀繪圖 第二十四

上人の給はく。阿彌陀經は、ただ念佛往生ばかりを説とは心得べからず。文に隱顯ありといへども、廣畧義をもて心得れば四十八願をことごとく説給へる經也。舍利弗、如我今者、讚嘆阿彌陀佛不可思議功德といへる、阿彌陀ほとけの功德は、即四十八願也。念佛往生をとくは、その中の第十八の願をさす也。又この經に、一日七日といへるを、只一日七日に限ると意得るは僻事なり。善導和尚、觀經の疏に、上品上生の一日七日を釋給に、從具此功德以下、正明修行時節延促、上盡一形。下至一日一時念等、或從一念十念、至一時一日一形、大意者、一發心已後、誓畢此生、無有退轉、唯以淨土爲期と、判給へり。この釋をもて准知するに阿彌陀經の一日七日も、又如此意得べき也。この釋に三の意あり。一には多より少に至り。二には少より多に至り、三には大意は一發心已後、退轉なしといへるなり。初の二は要にあらず。後の一その要也。所詮は往生の心を發してのち、命終まで退せざる、これを大意とするなり。凡この阿彌陀經は、我朝に都鄙處々に多く流布せり。法華經と、最勝王經とは、諸宗の學徒、兼學すべきよし、桓武天皇の御時、宜旨を下されて、定置れしかば、演說者として、法華を解説する師は多くなりたりけれども、暗誦する人なかりければ法花を暗誦すべきよし、かさねて、宜旨を下されけるのち、持經者多くいできたれり。法花は加樣

に、宣下によりてこそ、流布せられたれ。阿彌陀經は、其沙汰なけれども、自然に流布して、處々の道場に、みな例時とて、毎日にかならず阿彌陀經をよみ、一切の諸僧、阿彌陀經をよまずと、いふ事なし。これひとへに淨土教有縁のいたすところなり。事のおこりをたづぬれば、叡山の常行堂より出たり。彼常行堂の念佛は、慈覺大師、渡唐のとき將來し給へる勤行なりとぞおほせられける

## 第一 圖

上人の給はく、諸宗の祖師は、みな極樂に生じ給へり。所謂眞言の祖師、龍樹菩薩、天台の祖師南岳、智者、章安、妙樂、三論の祖師、僧叡、花嚴の祖師、智儼、法相宗には、懷感禪師、我宗をすて、淨土宗に入る。天親菩薩は、法相宗の祖師也。往生論を作て、極樂をすゝむ。達摩宗の祖師、智覺禪師は、上品上生の往生人也。其外非名僧のなかに、往生人これおほし。あぐるいとまあらすと

## 第二 圖

或時、聖光房、法力房、安樂房、侍けるに、安樂房上人に尋申云、我等ごときの輩、かたく十重をもたもたず。常に妄念をおこし、又勇猛精進ならずして、我身の善惡をかへりみず、たゞ彌陀の本願を仰て、決定往生の思をなし侍るは往生し侍べしやと。上人の給はく、其條勿論也。所詮決定心を生ぜば、往生すべき人なり。煩惱罪惡等の、往生を障不障をば、凡夫の心にては、覺知すべ

からずといへども、本願に相應する程の念佛申たらむには、それを障碍して、往生をさまたぐる罪はあるべからず。往生は念佛の信否によるべし。更に罪惡の有無にはよるべからざるなり。すでに凡夫の往生をゆるす、なむぞ妄念の有無をきらうべきやと仰らるゝに、安樂房又云、虛假の物は往生せずと申すは何様に心得べきぞや。上人の給はく、虛假といふはことさらに結構する輩なり。好まずして、自然に虛假ならむは往生の障にあらず。念佛の信心を發たらむ人は、必定して往生すべし。更に疑べからず。善導の釋を能々意得べきなり。善導おはしまさざらましかば、我等いかでかこのたび生死を離べきやと、仰られて、落涙し給あひだ、聖光房、法力房、安樂房、みなともに涙ををさへて信心をましけり。其時聖光房、我は一切に往生を疑はずと申されければ、上人又の給はく、貴房達は少々の罪過ありとも、争往生を遂ざらむや。但外人には意得ていひきかすべき也。強盛心をおこさず、落涙するに及ばずとも、念佛だにも申さば往生すべき也。見思塵沙無明の煩惱が、よろづの障礙をばなす也。念佛の一行はこの煩惱にもさへられず、往生をとげ、十地究竟する也。他宗には、實教にも權教にも、密教にも顯教にも、十地究竟することは、漸頓を論ぜず、極たる大事なり。しかるにたゞ念佛の一行に依て往生をとげ、十地願行自然に成就することは、誠に甚深殊勝の事也とぞ仰られける

### 第三 圖

元久二年正月廿一日、尋常なる尼女房たち、あまた上人の御坊へまいりて戒をも受たてまつり、念佛往生の様をも承らむと申ければ、上人まつ戒をさづけられ、其後浄土の法門をのべ給に、まつ聖道浄土の二門をわけ、聖道難行の様を仰らるるに、殊に天台宗に對して釋し給ひ、四種三昧の難行なる事をのべ給て、南岳大師入滅のきざみ、諸の弟子につげての給はく、汝等方等般若四種三昧にをいて、身命をかへりみず修行すべくは、われ十年世にありて、汝等を供給すべしとの給に、苦行かなひかたきによりて、弟子等返答に及ばざりしかば、大師入滅し給き。師すでに入滅せんとし給へるが、しばらくも存命せむとの給はむをば、いかなる妄語をもかまへて師の命を惜まむためには、修行してんとこそ、申しつべけれども始終かなふべからざるあひだ、返答せずしてやみにしかば、師すなはち入滅し給へり。何況當時の我等をや。傳教大師、弟子達に、四種三昧を一つつあてて、修行せさせらるゝ事侍りき。慈覺大師は、常座三昧にあたりて修行し給けるに、常座難行なりとて、あらためて常行三昧となると申せり。かくのごときの修行は上古より修しがたき事顯然也。何況當世の凡夫哉とて、聖道門の難行なる事、浄土門の修しやすきやう、こまゝと仰られて、所詮末代の佛法修行、その證をうる事、只念佛の一行なり。是則彌陀の本願に順ずるが故也と。の給ければ、信心まことをいたし、低頭合掌して歸りけり

法性寺左京大夫信實朝臣の、伯母なりける女房の、尋申けるにつきて、上人の御返事云、念佛の行者の存候べき様は、後世をおそれ、往生をねがひて念佛すれば、をはる時かならず來迎せさせ給よしを存じて、念佛申より外の事候はず。三心と申候も、ふさねて申時はたゞ一の願心にて候也。そのねがふ心の、いつはらずかざらぬ方をば、至誠心と申候。この心のまことにて、念佛すれば臨終に來迎すといふ事を、一念もうたがはぬ方を、深心とは申候。このうへわが身もかの土へ生まれんとおもひ、行業をも往生のためとむくるを廻向心とは申候也。このゆへにねがふ心いつはらずして、げに往生せんとおもひ候へば、をのづから、三心は具足する事にて候也。抑中品下生に、來迎の候はぬことはあるまじければ、とかれぬにては候はず。九品往生に、各みなあるべき事の、畧せられてなき事も候也。善導の御心は、三心も品々にわたりて、あるべしと見えて候。品ごとにおほくの事候へども、三心と來迎とは、かならずあるべきにて候也。往生をねがはん行者は、かならず三心をおこすべきにて候へば、上品上生に是をときて、餘の品々をも、是になぞらへて、しるべしと見えて候。又我等戒品のふねいかだもやぶれたれば、生死の大海を、渡べき縁も候はず。智慧の光もくもりて、生死のやみをてらしがたければ、聖道の得道にももれたるわれらがために、ほどとし給、他力と申候は、第十九の來迎の願にて候へば、文に見えず候とも、かならず來迎はあるべきにて候也。ゆめ／＼御うたがひ候べからず。あなかしこ／＼ 源空

## 第五圖

伊豆國、走湯山に、妙眞といふ尼ありき、法華の持者、眞言の行人なりき。事のたよりありて上洛のとき、上人の教化にあづかりて後、ながく餘行をすて、ひとへに念佛を行す。其功つもりてつねに化佛を見たてまつる。更に餘人にかたらず。た、同行の尼一人これをしめす。あるとき不注年月明日の申刻に往生すべしといふ。更にやまひなし、時刻たがはず翌日申時に端坐合掌し高聲念佛して、往生をとぐ。妓樂天にきこへ。異香室にみちて、奇瑞耳目をおどろかしける

## 第六圖

## 法然上人行狀繪圖 第二十五

勸化上都にさかりにして、道徳邊鄙にをよびしかば、鎌倉の二品禪尼、金剛戒歸依もともふかくして、蓮上房尊覺をつかひとして、念佛往生の事たづね申されたりければ、かの御返事云、御文くはしくうけたまはり候ぬ。さては念佛の功徳をば、佛も説つくしがたしとの給へり。又智惠第一の舍利弗、多聞第一の阿難も、念佛の功徳はしりがたしとの給し、廣大の善根にて候へば、まして源空なむど、申つくすべしともおぼへ候はず。彌陀のむかしちかひ給し本願は、あまねく一切衆生のためなれば、有智無智、有才無才、善人悪人、持戒破戒、たときいやしき、おとこおんなもへだて

ず、もしは佛の在世の衆生、もしは佛の滅後の衆生、もしは釋迦の末法萬年ののち、三寶みなうせてのちの衆生までも、たゞ念佛ばかりこそ、現當のいのりになり候めれ。このゆへに、きたりて往生の道をたづね候人には、有智無智を申さず、一すちに專修念佛をすゝめ候なり。ましてさように專修念佛申とゞめなんとつかまつる人は、佛法のまなこしゐて解脱をうしなへり、闡提の輩なり。いかに申候とも、御變改候べからず。強に信ぜざらむ人を、御すゝめ候べからず。佛もかなひ給はざる事なり

一、異解の人の、餘の善根を修せむに御助成ありて、思食べきやうは、我はこれ一向專修にて、決定往生すべき身なり。他人のとをき道を、わがちかき道に結縁せさせむとおぼしめさば、專修をさまたげ候はず

一、この世のいのりに、念佛のほか、佛にも神にも申し、經をよみかき、佛をつくらむは、專修をさふる行にては候べからず

一、念佛を申候事は、やう／＼の義候へども、たゞ六字をとなふるなかに、一切の行はおさまり候なり。心には本願をたのみ、口には名號をとなへ、手には念珠をとるばかりなり。常に心をかくるが、きはめたる決定往生の業にて候也。念佛の行は、もとより行住坐臥時處諸縁をきはらず、身口の不淨をきはぬ行にて、易行往生と申候也。たゞし心をきよくして申を、第一の行と申候

なり。人をもさやうに御すゝめ候べし。ゆめ／＼この御心はいよ／＼つよくならせ給候べし

一、念佛の行を信ぜざらん人にあひて、御物語候はざれ。いかにいはんや宗論候べからず。強ちに異解異學の人を見て、これあなづりそしる事候べからず。いよ／＼おもき罪人になさむこと不便に候べし。極樂をねがひ念佛を申さむ人をば、塵刹のほかなりとも、父母の慈悲におとらず思食べきなり。今生の財寶ともしからむ人をば、ちからをくはへさせ給ふべし。もしすこしも念佛に心をかけ候はん人をばいよ／＼御すゝめ候べし。これも彌陀如來の本願のみやづかひと思食候べし。震旦日本の聖教をとりあつめて、このあみだひらき見かんがへ候に、念佛を信ぜぬ人は、先生におもき罪をつくりて地獄にひさしくありて、又地獄へかへるべき人なり。返々專修念佛を、現當のいのりとは申候べきなり。一々の詞、これ經論にて候なり。御うちの人には、九品の業を人にしたがひてたえぬべきほどに御すゝめ候べし。あなかしこ／＼  
已上  
略抄

## 第一 圖

上野國の御家人、大胡の小四郎隆義、在京の時、吉水の禪室に參じて、上人の勸化にあづかり、ふかく念佛を信受しけるが、下國の後、なを不審なる事侍りて、上人給仕の弟子澁屋の七郎入道遍がもとへたづね申たりけるを、道遍、上人に申入て、おほせをつたへて、三心以下の事、こまかに申つかはしけり。隆義が子息、大胡の大郎實秀、かの消息を相傳し、父のあとをおいて稱名の行

をこたりなかりけるが、念佛の安心不審なる事侍りて、小屋原の蓮性を使者として、上人にたづね申たりければ、眞觀房を執筆としてかきつかはされける狀云、御文こまかにうけたまはり候ぬ。はるかなるほどに、念佛の事きこしめさむがために、わざとつかいをあけさせ給て候。御念佛のころざしのほど返々もあはれに候。さてはたづねおほせられて候念佛の事は、往生極樂のためには、いづれの行といふとも、念佛にすぎたる事は候はぬなり。そのゆへは念佛はこれ彌陀の本願の行なるがゆへなり。本願といふは阿彌陀佛のいまだ佛にならせ給はざりしむかし法藏菩薩と申しいにしへ、佛の國土をきよめ、衆生を成就せむがために、世自在王如來と申佛の御まへにして、四十八願をおこし給しその中に、一切衆生の往生のために、一の願をおこし給へり。これを念佛往生の本願と申なり。則無量壽經の上卷にいはいはく、設我得佛、十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺、已上善導和尚この願を釋しての給はく、若我成佛、十方衆生、稱我名號、下至十聲、若不生者、不取正覺、彼佛今現在世成佛、當知本誓重願不虛、衆生稱念、必得往生已上念佛といふは、佛の法身を憶念するにもあらず、佛の相好を觀念するにもあらず。たゞ心をいたしてもはら阿彌陀佛の名號を稱念する、これを念佛とは申なり。かるがゆへに稱我名號といふ也。ねんぶつのほかの一切の行は、これ彌陀の本願にあらざるがゆへに、たとひ目出たき行なりといへども、念佛にはをよばざるなり。おほかた其國にむまれんとおもはんものは、その佛のちかひにしたがふべ

きなり。されば彌陀の淨土にむまれんとおもはむものは、彌陀の誓願にしたがふべきなり。本願の念佛と、本願にあらざる餘行と、さらにたくらぶべからず。かるがゆへに往生極樂のためには、念佛の行にすぎたるは候はずと申なり。往生にあらざるみちには、餘行又つかさどるかたあり。しかるに衆生の生死をはなるゝみち、佛のをしへさまゝに多候へども、このごろ人の生死をはなれ、三界をいづる道は、たゞ極樂に往生し候ばかりなり。このむね聖教のおほきなることはりなり。次に極樂に往生するに、その行やうゝに多候へども、我等が往生せむ事、念佛にあらざれば、かなひがたく候也。そのゆへは、念佛は佛の本願なるがゆへに、願力にすがりて往生する事はやすし。されば詮ずるところ、極樂にあらざれば、生死をはなるべからず。念佛にあらざれば、極樂へむまるべからざるものなり。ふかくこのむねを信ぜさせ給て、一すぢに極樂をねがひ、一すぢに念佛して、このたびかならず生死をはなれんとおぼしめすべきなり。又一々の願のをはりに、もししからずば、正覺をとらじとちかひ給へり。しかるに阿彌陀佛、ほとけになり給てよりこのかた、すでに十劫をへ給へり。まさにしるべし誓願むなしからず。しかれば衆生の稱念するもの一人もむなしからず、往生する事をう、もししからずば、誰か佛になり給へる事を信ずべき。三寶滅盡のときなりといへども、一念すればなを往生す。五逆深重の人なりといへども、十念すれば往生す。いかにいはむや三寶の世にむまれて、五逆をつくらざる我等、彌陀の名號をとなへんに、往生うたがふべからず、

いまこの願にあへる事はまことにこれおぼろげの縁にあらず。よく／＼よろこびおぼしめすべし。たとひ又あふといへども、もし信ぜざれば、あはざるがごとし。いまふかくこの願を信ぜさせ給へり。往生うたがひ思食べからず。かならず／＼ふた心なく、よく／＼御念佛候て、このたび生死をはなれ、極樂にむまれさせ給べし。又觀無量壽經には、一々光明遍照、十方世界、念佛衆生、攝取不捨已上、これは光明たゞ念佛の衆生をてらして、よの一切の行をば、てらさずといふなり。ただしよの行をしても、極樂をねがはば、佛の光てらして攝取し給べし。いかゞ、たゞ念佛のものばかりをゑらびて、てらし給へるや。善導和尚釋しての給はく、彌陀身色如金山、相好光明照十方、唯有念佛蒙光攝、當知本願最爲強已上、念佛はこれ彌陀の本願の行なるがゆへに成佛の光明、かへりて本地の誓願をてらし給也。餘行はこれ本願にあらざるがゆへに、彌陀の光明、きらひててらしたまはざるなり。いま極樂をもとめむ人は、本願の念佛を行じて、攝取の光にてらされんと思食べし。これにつけても、念佛大切に候、よく／＼申させ給べし。又釋迦如來この經の中に、定散のもろ／＼の行をときをはりてのちに、まさしく阿難に付屬し給ときは、かみにとくところの散善の三福業、定善の十三觀をば付屬せずして、たゞ念佛の一行を付屬し給へり。經には、佛告阿難、汝好持是語、持是語者、卽是持無量壽佛名已上、善導和尚この文を釋しての給はく、從佛告阿難、汝好持是語、已下、正明付屬彌陀名號、流通於後代、上來雖說定散兩門之益、望佛本願、意

在衆生、一向專稱彌陀佛名已上この定散のもろくの行は、彌陀の本願にあらざるがゆへに、釋迦來の、往生の行を付屬し給に、よの定善散善をば付屬せずして、念佛はこれ彌陀の本願なるがゆへにまさしくゑらびて、本願の行を付屬し給へるなり。いま釋迦のをしへにしたがひて、往生をもとむるもの、付屬の念佛を修して、釋迦の御心になふべし。これにつけても、又よく御念佛候て佛の付屬にかなはせ給べし。又六方恒沙の諸佛舌をのべて、三千世界におほひて、もはらただ彌陀の名號をとなへて往生すといふはこれ眞實なりと、證誠し給なり。これ又念佛は彌陀の本願なるがゆへに、六方恒沙の諸佛、これを證誠し給。餘の行は本願にあらざるがゆへに、六方恒沙の諸佛證誠し給はず。これにつけても、よく御念佛候て、彌陀の本願、釋迦の付屬、六方の諸佛の護念をふかくかうぶらせ給べし。彌陀の本願、釋迦の付屬、六方の諸佛の護念、一々にむなしからず。このゆへに念佛の行は、諸行にすぐれたるなり。又善導和尚は彌陀の化身なり。淨土の祖師おほしといへども、たゞひとへに善導による。往生の行おほしといへども、おほきにわかちて二とし給へり。一には專修いはゆる念佛也。二には雜修いはゆる一切のもろくの行なり。上にいふところの定散等これなり。往生禮讚云、若能如上、念々相續、畢命爲期者、十即十生、百即百生已上專修と雜行との得失なり。得といふは往生する事をう、いはく、念佛するものは、十すなはち十人ながら往生し、百はすなはち百人ながら往生すといふこれなり。失といふは、いはく、往生の益を

うしなへるなり。雜行のものは、百人が中にまれに一二人往生する事をえて、そのほかは生ぜず。千人が中に、まれに三五人むまれて、その餘はむまれず。專修のものは、みなむまるゝ事をうるはなにのゆへぞ、阿彌陀佛の本願に相應せるがゆへなり。釋迦如來のをしへに隨順せるがゆへなり。雜業のものは、むまるゝ事すくなきはなにゆへぞ、彌陀の本願にたがへるゆへなり。釋迦のをしへにしたがはざるゆへなり。念佛して、淨土をもとむるものは、二尊の御心にふかくかなへり。雜修をして、淨土をもとむるものは、二佛の御心にそむけり。善導和尚二行の得失を判せる事、これのみにあらず。觀經の疏と申ふみの中に、おほく得失をあげたり。しげきがゆへにいださず。これをもてしるべし。おほよそこの念佛はそれるものは地獄におちて五劫苦をうくる事はまりなし。信ずるものは、淨土にむまれて、永劫の樂をうくる事はまりなし。なをくいよく信心をふかくして、ふた心なく、念佛せさせ給へし。くはしき事、御ふみにつくしがたく候。この御つかひ申候べし。正月廿八日源空已上 實秀この消息を恭敬頂戴して、一向に念佛す。寛元四年往生の時、異香をかき、音樂をきくものおほかりき。實秀が妻室、又ふかくこの消息のをしへを信受して、稱名の行をこたりなく、つゝに奇瑞をあらはし、往生の素懷を遂るとなむ

## 第二 圖

武藏國那珂郡の住人彌次郎入道不註實名は、上人の教誡をかうぶりて一向專修の行人となりけり。

たまはるところの御消息を秘藏して、出離の指南になむそなへ侍ける。かならずしも數反をさだめず、おもひいでたるかとおぼしくては、つねに西にむかひて高聲にぞとなへける。病惱のとき、八月廿九日不詳年に近隣なる僧蓮臺房きたりとぶらひければ、この所勞は日ごろねがふところなり。明後日來臨し給へ、申べき事侍ると申けり。その日又まかれるに、明後日辰時に、極樂にむまるべしと申あひだ、いかにして、さはしりたまへるぞとへば、その事なり。夢に墨染のころも着したる僧、青白二莖の蓮化をもちてきたれりつるが、白蓮華をわれにさづけて、これは汝が分なり。この青蓮華は、新田の太郎が分なりと仰られつるに、白蓮華のうへに又こえありて、九月三日の辰時に往生すべしと、いふとみてさめぬるなりといふ。ことのやうたとくおぼへて、三日又ゆきむかふに、病者のいはく、往生すでにちかづけり。よくきたり給へり。四十九日のあひだは、こゝに住して念佛したまふべし。御房はわが善知識なり。年來秘藏のもの、附屬したてまつるべしとて、上人より給ところの御消息ならびに和字にしるせる、念佛安心の書等これをわたす。そののちあひとも晨朝の禮讚を行するに、光舒救毘沙の句にいたりて、禮讚をとめて、念佛三遍となへて、端坐合掌して、いきたえにけり。四十九日の夜蓮臺房ゆめにみるやう。かの禪門か、持佛堂かとおぼしき堂あり。まへに池などありて、あるべかしく見ゆるに、さしりて拜すれば、金色の阿彌陀如來壇のうへに立給へり。堂の下には念佛するこゑありけり。承仕などいふばかりなるものさしいで、

このころは閻浮提なり。たゞいまこの池のなかに、蓮花生ずべし。これを見るべしといふころに應じて、白蓮花出生す。念佛のころにしたがひて、蓮花忽にひらく、この花のうへに、亡者の禪門墨染の衣をきて坐せり。時に微風この花をふくに、風にしたがひてなびきたる。禪門蓮花よりおりてかたりていはく、われ極樂の下身下生に生ぜり。たゞいま上品にすゝむなりといふとみて、夢さめにけり

### 第三圖

## 法然上人行狀繪圖 第二十六

武藏國の御家人、猪俣黨に甘糟の太郎忠綱といふもの侍き。ふかく上人に歸し、念佛の行おこたりなかりけり。しかるに山門の堂衆等獨歩のあまり衆徒を忽緒し、日吉八王子の社壇を城廓として悪行をたくみしかば武士をさしつかはしてせめられしとき、忠綱 勅に應じて建久三年十一月十五日、かの城廓にむかふに、まづ上人に參じて申やう、我等ごとくの罪人なりとも、本願をたのみて念佛せば、往生うたがひなきむね、日來御をしへをうけたまはりて、ふかくそのむねを存ずといへども、それは病の床にふして、のどかに臨終せむ時の事なり。武士のならひ進退こゝろにまかせざれば、山門の堂衆を追罰のために 勅命によりて、たゞいま八王子の城へむかひ侍る。忠綱武勇の

家にむまれて、弓箭の道にたづさはる。すゝみては父祖の遺塵をうしなはず、しりぞきては子孫の後榮をのこさむがために、敵をふせぎ身をすてば、悪心熾盛にして願念發起しがたし。もし今生のかりなるいはれをおもひて、往生のはげむべきことはりをわすれずば、かへりて敵のためにとりにせられなむ。ながく臆病の名をとめて忽に譜代の跡をうしなひつべし。いづれをすて、いづれをとるべしといふ事、愚意わかまへがたし。弓箭の家業をもすてず、往生の素意をもとぐる道侍らば、ねがはくは御一言をうけ給はらんと申ければ、上人おほせらるゝ様、彌陀の本願は機の善悪をいはず行の多少を論ぜず。身の淨不淨をえらばす、時處諸縁をきはざれば、死の縁によるべからず。罪人は罪人ながら、名號をとなへて往生す、これ本願の不思議なり。弓箭の家にむまれたる人ととひ軍陣にたゝかひ命をうしなふとも、念佛せば本願に乗じ來迎にあづからむ事ゆめく疑べからずと。こまかにさづけ給ければ、不審ひらけ侍りぬ。さては忠綱が往生は、今日一定なるべしとよろこび申けり。上人の御袈裟を給はりてよろひのしたにかけ、それよりやがて八王子の城へむかひ、命をすてゝ戦けるに、大刀をうちをりてければ、ふかき疵ををかうふりにけり。いまはかうとみえけるに、大刀をすてゝ合掌し、高聲念佛して、敵のために身をまかせけり。紫雲戰場にたれおほひて、異香をかぐ人おほかりけり。北嶺に紫雲たなびくよし人申ければ、上人きゝたまひて、あはれ甘糟が往生しつるよとぞおほせられける。甘糟くににとゝめをく妻室のゆめに、極樂の往生を

遂ぬるよしをしめしければ、夢の告にをどろきて。國より飛脚をたてけるに、この事を告て京よりくだりける。つかみにゆきあひて田舎の夢の告、戦場の往生のやう、たがひにかたりけり。まことに不思議の事にてぞありける。戦場に命をすて、往生の前途をとげ、父祖が名をもあげ、本願の深意をもあらはせる事、しかしながらこれ上人勸化の故なりき

## 第一 圖

宇津宮の彌三郎頼綱、家子郎從濟々として武藏野をすぎけるに、熊谷の入道ゆきあひていふやういみじく大勢にておはするものかな。但いかにおほくとも、無常の刹鬼はふせぎがたくや侍らん。彌陀如來の本願にて、念佛するものをば、惡道におとさずむかへとり給へば、一人當千のつはものにもなをまさりたるは、これ念佛なり。かまへて念佛し給へと申けるがきもにそみておぼへける。のち念佛往生に心をかけて、大番勤仕のために、上落したりけるついでに、承元二年十一月八日、上人の勝尾の草庵にたづね參じて念佛往生の法御教訓をかうふるとき、上來雖説、定散兩門之益、望佛本願、意在衆生、一向專稱、彌陀佛名の文をふたたび誦したまひて、往生せうせじは、わど、の心ぞ、一向に念佛せば往生疑ひなしとの給ける。御ことば耳にとまりて、おぼへけるのち一向專修の行者になりけり。上人御往生の後はふかく善惠房をたのみ申けるが、結縁のために、四帖の疏の文字よみばかりをうけ、ついに出家して實信房蓮生と號し、西山に草庵をしめ、一向專念の

ほか他事なかりき、仁治二年十一月廿二日、天はれ風しづかなる夜、蓮生ゆめ見らく、深山幽谷の北に一の庵室あり。蓮生この中に侍り、小山めぐりかさなり、左右の峰たかくそびえたり。なを北の山を見るに、三尺ばかりの彌陀の立像、虚空に影向したまふ。いづれのところより、きたりましますにかと、疑をなすところに、虚空にこゑありて、佛來臨の方は、善光寺なりとこたふ。佛やうやくちかづきたまひ光明赫奕として、白玉のかざりまことに妙なり、このとき蓮生高聲に念佛し、右の手をもて、佛の左の御手をにぎりたてまつるに、はじめて木像の來現としり、又年來安置の本尊なりとさとりぬ。夢さめてのちは、いよいよ信心をふかくして、念佛のいさみをなし、行住坐臥の四威儀、たゞ稱名のほか他事をわする。正元々年十一月上旬の比よりいさゝか病惱の事侍けるが同十二日、端坐合掌念佛相續し、瑞相あらはれて、往生の素懷をとげるとなむ

## 第二 圖

上野國の御家人齒田の太郎成家は、秀郷の將軍九代の孫、齒田の次郎成基が嫡男なり。武勇の道にたづさはりて、弓馬の藝をたしなみ、射獮を事として、罪惡をほしきまゝにす。爰正治二年の秋大番勤仕のために上洛の時、上人の念佛弘通化導さかりにして、貴賤あゆみをはこぶよし傳聞て宿縁のもよをしけるにや、かの庵室へ參じたりけるに、上人罪惡生死の凡夫、彌陀の本願に乗じて極樂に往生するいはれ、世上の無常をいとひ、淨土の不退をねがふべきおもむき、ねむごころに教化し

給に、信心胸にみち渴仰肝に銘じければ、やがてそのとしの十月十一日、生年廿八歳にて出家す。法名を智明とぞつけ給へりける。常隨給仕六ヶ年ののち、元久二年に本國に下向して、家子郎從廿餘人を教導して、おなじく出家せさせて同行として、酒長の御厨小倉の村に庵室をむすびて、一心に彌陀を念じ、三業を西方にはこびけり。世の人たうとびて、小倉の上人とぞ申ける。庵室の西一町餘をへだて、一間四面の御堂を建立して御堂の妻戸に、庵室の戸をあけあはせて、佛前の燈明を攝取の光明とおもひて、常に光明遍照の文をとなへ、發露啼泣しけり。具縛の凡夫なりとも、本願をたのみて念佛せば、往生うたがひあるべからざるむね、上人しめし給けるを、ふかく心府におさめて、行住坐臥に念佛をこたる事なし。おほよそ念佛のほか他事をまじへざりけり。念佛せざるものをば、はぢしめいとひければ、かの室にのぞむ道俗尊卑、念佛せぬはなかりけり。あるとし元日の祝言に、下僧一人に心をあはせて、庭前にすゝみいで、たからかに物申さむといはせて、西方淨土より、御參をそく侍り、いそぎ御參あるべしと、阿彌陀佛の御使なりと申させて、歡喜のあまり客殿へ請じ入て丁寧にもてなし、種々の引出物をぞ給はせける。そののちはとしごとの事にて元日にはこのわざをなん結構しけり。かの山里には鹿おほかりければ、作毛をまたくせむために、かのところの人民等、田畠にかきをしまはしてふせぎけるを、あはれみなげきて、上田三町をつくりたてさせて、鹿田となづけて、鹿のくひものにあてけるにも、田歌と云事には、念佛をなん唱さ

せける。寶治二年九月十五日いさゝか違例の氣あり、舍弟淡路守俊基をまねきよせて、我身は老病あひをかして、すでに終焉にのぞめり、今生の對面今日ばかりなり。汝罪惡深重の人なり。かならず念佛して、おなじく安養の淨刹に參會せしむべし。たとひ鹿鳥を食すとも、念佛をばかみませて申すべし、たとひ敵にむかひて弓をひくとも、念佛をすつる事なかれと、さまざまに教訓しけり。俊基還向ののち、僧衆あいともに別時の念佛を修して翌日十六日戌尅に、端座合掌して、光明遍照の文を誦し、高聲念佛一時ばかりとなへて、禪定に入がごとくにて、いき絶にけり。生年七十五なり、于時紫雲屋上にたなびき、音楽雲外にきこえて、持佛堂庵室のあひだに光明充滿し、室の内外に異香薫ず。遠近の道俗男女これを見聞す。平生のむかしより攝取の光明に心をよせけるに、はたしてかの光明を感得しける、不思議にたうとくも侍かな

## 第三 圖

西明寺の禪門、若冠の時は、つねに念佛の安心など、小倉の草庵へぞたづねられける。愛寛元のところ、使を進して申をくりけるは、年來念佛の行者として、西方をねがふ心ねんごろなり。栗の木とは、西の木とかけり、西方の行人として、むつまじくおぼえ侍れば、多年これを所持すといへども、老體いまにきては、行歩にあたはず。その要なきにいたり。君西土に心をはこびまします、この杖をさづけたてまつるにたへたり。これをもちゐて、淨土にまいらしめ給べしとて、栗の木の

杖をくり進じたりければ、返狀のをくに

おいらくのゆくすゑかねておもふには

つくづくうれしにしの木の杖

とぞかきをくられける。禪門其後はかの勸化を信じてつねに西土の託生を心につねに彌陀の引接をぞたのまれける。されば弘長二年のころ上人の孫弟敬西房法蓮房弟子關東下向のとき、上人の傳を進たりけるに、數日披覽の後、上人の德行をたうとみて、念佛の安心をたづねられければ、往生の故實勤行の文などをかきてたてまつりけり。禪門自筆の返狀云、故實ならびに勤行の文給候ぬ。よくよく見覺候て、往生の心をすゝむべく候云々取陞つゝに翌年弘長三十一月廿二日辰尅、臨終正念端座合掌して、往生をとげらる。同十二月十五日、諷方の入道蓮佛、教西房に送遺狀云、西明寺殿御往生の事、中々不及申目出き次第にて候。十一月二日亥時に、唐ころもめしてけさかけて西方にあみだほとけをかけまいらせて、ゐすにのぼらせ給て、御いぎすこしもみだれず合掌して御往生候也。御いたはりとして候しかども、すこしも御苦痛候はず。然べき御往生の因縁にて候けりと覺候。御臨終ちかくなり候て、かたじけなき仰をかふりて候き。あみだほとけの御ちからにて、淨土へまいりたらば、むかへうするぞと仰の候しかば、日ごろ不足なくかうぶりて候し御恩には、百倍千倍してたのもしくありがたく覺候て、歎のなかにもうれしく候。故入道どの、仰に蓮佛地獄におとさぬや

うに教訓候へと、仰候けるよしうけ給候へば、念佛往生の次第、便宜にかならずこまかに仰給べく候云々取詮抑かの禪門武將の賢哲、榮の指南として、若冠のそのかみより、最後のをはりまで、上人勸化の風をうけ、西土往生の望をとげられるに蓮佛を極樂に引導すべきよしまで、病中にちぎり給けむ、あはれにかしこくぞ覺侍る

## 第四圖

## 法然上人行狀畫圖 第二十七

武藏國の御家人、熊谷の次郎直實は、平家追討のとき、所々の合戦に忠をいたし、名をあげしかば、武勇の道ならびなかりき。しかるに宿善のうちにもよをしけるにや、幕下將軍をうらみ申事ありて、心ををこし、出家して、蓮生と申けるが、聖覺法印の房にたづねゆきて、後生菩提の事をたづね申けるに、さやうの事は法然上人に、たづね申べしと申されければ、上人の御庵室に參じにけり。罪の輕重をいはず、たゞ念佛だにも申せば往生するなり、別の様なしとの給をきゝて、さめくゝと泣ければ、けしからずと思たまひてものもの給はず、しばらくありて、なに事に泣給ぞと仰られければ、手足をもきり命をもすてゝぞ、後生はたすからむずるとぞうけ給はらむずらんと、存ずるところに、たゞ念佛だにも申せば往生はするぞと、やすくと仰をかふり侍れば、あまりにうれし

くて、なかれ侍るよしをぞ申ける。まことに後世を恐たるものと見えければ、無智の罪人の念佛申て往生する事、本願の正意なりとて、念佛の安心こまかにさづけ給ければ、ふた心なき専修の行者にて、ひさしく上人につかへたてまつりけり。或時上人月輪殿へ參じ給けるに、この入道推參して御共にまいりけるを、とゞめばやと思食されけれども、さるくせものなれば、中々あしかりぬと思食て、仰らるゝむねなかりければ、月輪殿までまいりて、くつぬぎに候して、縁に手うちかけ、よりかゝりて侍けるが、御談儀のこゑのかすかにきこえければ、この入道申けるは、あはれ穢土ほどに口おしき所あらじ。極樂にはかゝる差別はあるまじきものを、談儀の御こゑもきこえばこそと。しかりこゑに高聲に申けるを、禪定殿下きこしめして、こはなにもものぞと仰られければ、熊谷の入道とて武藏國よりまかりのぼりたるくせものゝ候が、推參に共をして候と覺候と、上人申給ければやさしくたゞめせとて、御使を出されてめされけるに、一言の色題にも及ばずやがてめしにしたがひて、ちかくおほゆかに祇候して聽聞仕けり。往生極樂は當來の果報なをとをし、忽に堂上をゆるされ、今上の花報を感じぬる事、本願の念佛を行ぜずば、争此式に及べきと、耳目をどろきてぞ見えける

## 第一 圖

蓮生念佛往生の信心決定してのちは、ひとへに上品上生の往生をのぞみ、われもし上品上生の往

生を遂まじくば、下八品にはむかへられまいらせじといふ。かたき願をおこして、發願の旨趣をのべ偈をむすびて、みづからこれをかきつく。かの狀云、元久元年五月十三日、鳥羽なる所にて、上品上生の來迎の阿彌陀ほとけの御まへにて、蓮生願をおこして申さく、極樂にうまれたらんには、身の樂の程は、下品下生なりとも限なし、然而天台の御釋に、下之八品不可來生と仰られたり。おなじくは一切の有縁の衆生、一人ものこさず來迎せん、無縁の衆生までも、おもひをかけてとふらはむがために、蓮生上品上生にうまれん、さらぬ程ならば、下八品にはうまるまじ。かく願をおこして後に、又云、惠心の僧都すら、下品の上生をねがひ給たり、何況末代の衆生、上品上生する者は一人もあらじと、ひじりの御房の仰ごとあるをきゝながら、かゝる願をおこしはてゝいはく末代に上品上生する者あるまじきに、しかもよろづ不當なる蓮生、いかで上品上生にはうまるべきぞ、さなくば下八品にはむまれじとぐわんじたればとて、あみだほとけもし迎給はずば、第一に彌陀の本願やぶれ給なんず、次に彌陀の慈悲かけ給なんず、次に彌陀の願成就の文やぶれ給なんず、次に釋迦の觀無量壽經の、十惡の一念往生、五逆の十念往生、又阿彌陀經の、もしは一日もしは七日の念佛往生、又六方恒沙の諸佛の證誠、又善導和尚の下至十聲一聲等定得往生の釋、又なによりも、觀經の上品上生の三心具足の往生、それを善導の釋の具足三心必得往生也、若少一心即不得生、又專修のものは、千は千ながらの釋、ことごとくこれら、佛の願といひ佛の言といひ、善導の釋とい

ひ、もしれんせいを迎給はずば、みなやぶれておのゝ妄語のつみ得たまひなんず。いかでか大聖の金言むなしかるべきや。又光明遍照十方世界の文、又此界一人念佛名の文この金言どもむなしからじ、いよゝこれらの文をもて、疑なき也とおもふ。一切の有縁の輩即ちちかへりてむかへんとて、願をおこして上品上生ならずば、むかへられまいらせじといふ、かたき願をおこしたるか、よくひが事ならんちやう、五逆の者ばかりはあらじ、しかればいかなりとも迎給はぬ事あらじ、これを疑はぬ心は三心具足したり。上品上生に生るべき決定心發したり、その疑煩惱斷じたり。そのさとりをひらいたり。善導又天台、この事をみるものは上品上生にむまる、又衆生の苦をぬく事を得又無生忍をさとり、又極樂に所願したがひてむまるとの給へり

下八品の往生 われすてゝしかもねがはず

かの國土にいたりをはて すなはちかへり來事あたはざればなり

かさねてこふ我願において 或は信じ或は信ぜざらんもの

ねがはくは信と謗とを因として みなまさに淨土にむまるべし

于時元久元年五月十三日午時に、偈の文をむすびて、蓮生いま願をおこす。熊谷の入道としは六十七なり、京の鳥羽にて上品上生の迎への曼陀羅の御まへにてこれをかく  
己上  
取證 又和字の偈の文を、隆寛律師漢字にかきなさける

下八品往生

我捨而不願

致彼國土已

卽不能還來

重乞於我願

或信或不信

願信謗爲因

皆當生淨土

又蓮生自筆の夢の記云、上品上生にむまるべしといふ夢たびん見たり。そばの人もみて告たり。善導はゆめを見てさとりて、觀經の疏は作給へり。惠心又往生要集、ゆめを見て記し給へり。又珍海決定往生の集、ゆめをみて記し給へり。法華經に四安樂の行者の、夢の中の八相を記し給へり。しかるにれんせい五月十三日にこの願をおこして、同廿二日の夜、阿みだ佛に申さく、蓮生がおこして候願成就すべくは、疑まじからん御示現たべ、又叶まじくば叶まじと示現たべ、となたさまにも、うたがふまじからん示現たべと申てねたる夜の、すなはち夢に見るやう金色の蓮の花のくきはなかくてゑだもなくて、そろ／＼としてたゞ一本たちたるに、そのめぐりに、人十人ばかり居まいりてあるに、蓮生申ことぞ、こと人は、一人もあれが上には、のぼりゑじ、蓮生一人は、一定のぼるべき也といひはつれば、いかにしてのぼりたりともおぼえずして、その蓮の花の上へのぼりて、端坐して居たりと見はつれば夢さめ畢ぬ。又願をおこす。この願まことなるべくは、臨終にゆゝしからん人々耳目おどろくばかりの瑞相を、まづ現じて、もろ／＼の人に、彌陀の本願見うらやませ

給へと、おこしたり。故に上品上生の往生、いよく疑なき也。又同年六月廿三日の夢、をなじ心也已上取詮

蓮生自筆の發願の文夢記等は、みな和字なりといへども、よみにくきによりて少々漢字になす

## 第二 圖

蓮生行住坐臥不背西方の文を、ふかく信じけるにや、あからさまにも、西を背にせざりければ、京より關東へ下ける時も、鞍をさかさまにをかけて馬にもさかさまにのりて、口をひかせけるとなん。されば蓮生

淨土にもがうのものとや沙汰すらん

西にむかひてうしろみせねば

と詠じける。上人も、信心堅固なる念佛の行者のためしには、常におもひ出給て、坂東の阿みだほとけとぞ仰られける。しかれどもその性たたくして、なを犯人をば、或はむまふねをかつけ、或はほだしをうち、或はしぼり、或は筒をかけなどして、いましめをきけり、よに心えぬわざにてぞありける。下國の後不審なる事ともを、状をもてたづね申ければ、上人の御返事云、よろこびてうけ給候ぬ、まことに其後おぼつかなく候つるにうれしく仰られて候、但念佛の文かきてまいらせ候、念佛の行はかの佛の本願の行にて候、持戒誦經誦呪理觀等の行はかの佛の本願にあらぬをこなひに

て候へば、極樂をねがはん人は、まずかならず本願の念佛の行をつとめてのうへに、もしことをこなひをも念佛にしくは候はむと思候はゞさもつかまつり候。又たゞ本願の念佛ばかりにても候へし、善導和尚は阿彌陀佛の化身にておはしましたし候へば、それこそは、一定にて候へと申候に候、孝養の行も佛の本願にあらず、たへんにしたがひて、つとめさせおはしますべく候。又あかがねの阿字の事も錫杖の事も、佛の本願にあらぬつとめにて候、とてもかくても候なん。又迎接の曼荼羅は大切におはしましたし候。それもつぎの事に候、たゞ念佛を、三萬もしくは五萬もしくは六萬、一心に申させおはしましたし候はむぞ、決定往生のをこなひにては候、こと善根は、念佛のいとまあらばの事に候六萬反をだに、一心に申させ給はゞ、そのほかには、何事をかは、せさせおはしますべき、まめやかに一心に、三萬五萬念佛をつとめさせ給はゞ、少少戒行やふれさせおはしましたし候とも、往生はそれにより候まじき事に候。但このなかに、孝養の行は佛の本願にては候はねども、八十九にておはしましたし候なり、あひかまへて、ことしなんとは、まちまいらせさせおはしますせかしと覺候。ただひとりたのみまいらせて、おはしましたし候なるに、かならずくまちなまいらせおはしますべく候なり

五月二日 源空 武藏國熊谷入道殿御返事 已上取證

第三 圖

蓮生が往生うたがひあるまじきよし、或は佛の告をかうぶり、或は不思議の奇瑞どもの侍けるを

上人に申入ける事、かくれなかりければ、月輪の禪定殿下、きこしめされて、上人に尋申されける御文云、熊谷の入道、往生をとげずといへども、不思議の奇瑞等、ひとつにあらざるよし、天下にあまねくかたらひうたふ事もし實ならば、最後に告仰らるべきところに、今まで無音候尤不審也。彌陀利物、末法偏増の證、たゞかくのごときの事にあるか隨喜感涙、たとへをとるに物なし。この事を告給ざる條、もしこれ一向欣求にあらざるよし、御疑のあるか、ねがふ心ざしの、あさゝふかさ、たゞ阿彌陀如來の知見に、まかせたてまつるものなり。但宿障深重のゆへに、至誠心こそ術なく候へ、信仰欣求の條はこのごろ假名新發等のなかには、あながちに恐思給べからざるものか、いかん／＼、來六七日のあひだかならず見參をとげむとおもふ、申合へき事等ある故也。敬白四月一日法然御坊已上取詮禮紙云、かの入道のまいらする狀正文を給て、一見を加へんとおもふ。轉寫の本の文字たゞしからずして、よまれざるところあり、比較すべきものなり、事の次第殆たぐひすくなし、正しく往生をとげたらんには超過畢ぬ、貴べし信べし、凡左右にあたはざるもの也、宿善のいたり、申てあまりあり。その子息の會釋又以珍重、一一の事、皆以不思議の境界なり、なを感涙禁じがたきか承及にしたがひて馳申ところ也。御返報の趣、その草あらば一見の心ざしありいかな已上取詮上人熊谷入道に、つかはされける御返事云、この條こそ、とかく申に及ばず目出度候へ、往生せさせ給たらんには、すぐれて覺候。死期しりて往生する人々は、入道殿にかぎらず多候。かやう

に耳目おどろかす事は、末代にはよも候はじ、むかしも道禪禪師ばかりこそ、おはしまし候へ、返も申ばかりなく候、但何事につけても、佛道には魔事と申事のゆゝしき大事にて候也、よく御用心候べきなり。加様に不思議をしめすにつけても、たよりを同事も候ぬべき也、目出度候にしたがひて、いたはしく覺させ給て、加様に申候也。よくよく御つゝしみ候て、佛にもいのりまいらせ給べく候。いつか御のぼり候べき、かまへてく、のぼらせおはしませかし。京の人々おほやうは、みな信じて念佛をもいますこしいさみあひて候、これにつけても、いよくすゝませ給べく候あしさまに思食すべからず、なをなを目出候。あなかしこく 四月三日 源空 熊谷人道教已上取詮

## 第 四 圖

建永元年八月に、蓮生は明年二月八日、往生すべし、申ところもし不審あらん人は、きたりて見べきよし、武藏國村岡の市に札を立させけり。つたへきくともがら、遠近をわかず、熊谷が宿所へ群集する事、いく千萬といふ事をしらす。すでに其日になりければ蓮生未明に、沐浴して、禮盤にのぼりて高聲念佛體をせむる事、たとへをとるにもなし。諸人目をすますところに、しばらくありて念佛をとゞめ、目をひらきて今日の往生を延引せり、來九月四日、かならず本意を遂べし、その日來臨あるべしと申ければ、群集の輩あざけりをなしてかへりぬ。妻子眷屬、面目なきわざなりと歎ければ、彌陀如來の御告によりて、來九月をちぎるところなり、またくわたくしのはからひ

にあらずとぞ申ける。さる程に、光陰程なくうつりて、春夏もすぎにけり。八月のすえにいさゝかなやむ事ありけるが、九月一日、そらに音楽をきゝてのち、更に苦痛なく、身心安樂なり。四日の後夜に沐浴して、やうやく臨終の用意をなす。諸人また群集する事、さかりなる市のごとし。すでに巳刻にいたるに、上人彌陀來迎の三尊、化佛菩薩の形像を、一鋪に圖繪せられて、祕藏し給けるを、蓮生洛陽より、武州へ下けるとき、給はりたりけるを懸たてまつりて、端坐合掌し、高聲念佛熾盛にして、念佛とともに息とゞまるとき口よりひかりをはなつ、ながさ五六寸ばかりなり。紫雲鬘鬘として音楽髣髴たり、異香芬郁し、大地震動す。奇瑞連綿として五日の卯時にいたる。翌日子刻に入棺のとき、又異香音楽等の瑞さきのごとし、卯時にいたりて、紫雲にしよりきたりて、家の上にとゞまる事、一時あまりありて、西をさしてさりぬ。これらの瑞相等、遺言にまかせて、聖覺法印のもとへ、しるしをくりけり。往生の靈異すこぶる比類まれなる事になん侍ければ、まことに上品上生の往生、うたがひなしとぞ申あひける

## 第五圖

### 法然上人行狀畫圖 第二十八

武藏國の御家人、津の戸の三郎爲守は、生年十八歳にして、治承四年八月に、幕下將軍于時石兵衛佐

橋の合戦のとき、武藏國より馳まいりてのち、安房國へ越給しにも、おなじく、あひしたがひ、處處の合戦に、忠をいたし名をあげずといふことなし。建久六年二月東大寺供養のために、幕下上洛の事ありき。爲守生年三十三にて、供奉したりけるが、三月四日入洛し、同廿一日上人の庵室にまゐりて、合戦度々のつみを懺悔し、念佛往生の道をうけたまはりてのちは、但信稱名の行者となりければ、本國にくだりても、をこたりなかりけるに、ある人熊谷の入道津戸の三郎は無智のものにて、餘行かなひがたければこそ、念佛ばかりをばすゝめ給らぬ、有智の人には、かならずしも念佛にはかぎるべからずと申けるを、爲守つたえきゝて、上人にたづね申けるついでに、條々の不審を申しれり。上人の御返事云

一、熊谷の入道、津戸の三郎は、無智のものなればこそ但念佛をばすゝめたれ。有智の人には、かならずしも念佛にはかぎるべからずと申よし、きこえてさふるふらむ。極たるひが事に候。そのゆへは、念佛の行は、もとより有智無智にかぎらず彌陀のむかしちかひ給し本願も、あまねく一切衆生のためなり。無智のためには念佛を願じ、有智のためには餘の深き行を願じ給ことなし。十方衆生の句にひろく有智無智、有罪無罪、善人悪人、持戒破戒、かしこきもいやしきも及至みなこもれるなり。されば往生のみちをとたづね候人には、有智無智を論ぜず、みな念佛の行ばかりを申候也。しかるにそら事をかまへて、さやうに念佛を申とゝめむとするものはさきよに念

佛三昧淨土の法門をきかず、のちの世にまた三惡道へかへるべきものゝしかるべくて、さやうの事をばたくみ申ことにて候なり。そのよし聖教に見えて候。見有修行起、嗔毒方便破壞競生、怨如、此生盲闇提聾、毀滅頓教、永沈淪、超過大地微塵劫、未可得離三途身と申たるなり。此文の心は、淨土をねがひ、念佛を行ずるものを見ては、いかりをおこし、毒心をふくみて、はかりごとをめぐらし、やう／＼の方便をなして念佛の行をやぶりてあらそひてあだをなし、これをとどめむとするなり。かくのごときのは、むまれてより、このかた佛法の眼しゐて佛の種をうしなへる闡提のともがらなり。みだの名號をとなへて、ながき生死をたちまちにきりて、常住の極樂に往生すといふ、頓教の御のりをそしりほろぼして、この罪によりて、三惡道にしづみて、大地微塵劫をすぐとも、ながく三惡道の身を、はなるべからずといへるなり。さればさようにそら事をたくみて申候らん人をばかへりてあはれむべきなり。さほどのものゝ申さむによりて、念佛にうたがひをなし不信をおこさんものは、いふにたらぬ程の事にてこそは候はぬ。おほかた彌陀に縁あさく往生に時いたらぬものは、きけども信ぜず。をこなふをみてはらをたて、いかりをふくみて、さまたげむとすることにて候なり。その心をえていかに人申とも、御心ばかりはゆるがせ給べからず。あながちに信ぜさらむは、佛猶ちからをよび給まじ。いかにいはむや凡夫のちから及候まじき事なり。かゝる不信の衆生を利益せむとおもはむにつけても、とく極樂へまいり

て、さとりをひらきて生死にかへりて、誹謗不信のものをもわたして、一切衆生、あまねく利益せんとおもふべき事にて候也

一、念佛を申させ給はむには、心をつねにかけて口にわすれずとなふるが、めでたきことにて候なり。たとひ身もきたなく、口もきたなくとも、心をきよくして、申させ給はむ事、返々神妙候。ひまなくさように申させ給らむこそ、返々めでたく候へ。いかならむときなりとも、わすれずして申させ給はむ、往生の業に、かならずなり候はむずる也。いかなる時にも、申されざらむをこそ、ねんじて申さばやおもひ候べきに、申されんをねんじて、申させ給はぬことはいかでか候べき。たゞいかなるをりもきはらず、申させ給べし

一、あらぬ行、ことさとの人にむかひて、いたくしめておほせらるゝこと候まじ。異解異學の人をみては、これを恭敬して、かるしめあなづる事なかれと申たることにて候也。阿彌陀佛に縁なく、極樂淨土にちぎりすくなからん人の、信もおこらず。ねがはしくもなからんには、ちからをよばずたゞ心にまかせて、いかなるをこなひをもして、後生たすかりて、三惡道をはなるゝことを人の心にしたがひてすゝめ候べきなり。又ちりばかりも、かなひぬべからん人には、阿彌陀佛をすゝめ、極樂をねがはすべきにて候ぞ。いかに申すとも、このよの人の、念佛にあらでは、極樂にむまれて、生死をはなるゝ事は候まじきなり。もしはそしり、もしは信ぜざらむものをば、

こはからでこしらふべきにて候なり。取上この御返事を給てのちはいよ／＼念佛の外他事なかりけるを見うらやみて、専修念佛の行人、かの國中に三十餘人までになりければ、此よしを上人へ申いれけるに、上人御返事云、専修念佛の人は、よにありがたく候に、その一國に三十餘人まで候らんこそ、まめやかにあはれに候へ。京邊などの、つねにきゝならひ、かたはらをもみならひ候ぬべき所にて候にだにも、おもひきりて専修念佛する人は、ありがたきことにて候。道綽禪師の平州と申候所こそ、一向念佛の地にては候しが。専修念佛三十餘人はよにありがたく覺候。これひとへに御ちから、又熊谷の入道などのゆへにてこそ候なれ。それも時のいたりて、往生すべき人の、多候べきゆへにこそ候らめ。縁なきことは、わざと人のすゝめ候にだにも、かなはぬことにて候へば、まして子細もしらせ給はぬ人などの、仰られむによるべき事にて候はぬに、もとより機縁純熟して、時いたりたることにて候へばこそ、さほど専修の人なむどは候らめと、をしはかられ候。念佛往生の誓願は、平等の慈悲に住して發給たる事なれば、人をきらふことはさふらはぬなり。佛の御心は、慈悲をもて體とする事にて候なり。されば觀無量壽經には、佛心といふは、大慈悲これなりととかれて候。善導和尚この文をうけて、此平等の慈悲をもてば、あまねく一切を攝すと釋し給へり。一切の言ひろくして、もるゝ人候べからず。されば念佛往生の願は、これ彌陀如來の本地の誓願なり。餘の種々の行は、本地のちかひにあらず。釋迦も世に出

給事は、彌陀の本願をとかむと思食御心にて候へども、衆生の機縁にしたがひ給ふ日は、餘の種類の行をも説たまふはこれ隨機ののりなり。佛のみづからの御心のそこには候はず。されば念佛は彌陀にも利生の本願、釋迦にも出世の本懷なり。餘の種々の行には似ず候也已上取詮 この仰をうけたまはりしのは、ますくいさみをなし念佛の外他事なかりき

第一 圖

津戸の三郎、上人の門弟淨勝房、唯願房等の僧衆、少々申くだして、念佛の先達として、不斷念佛をはじめおこなひけるを、爲守聖道の諸宗を謗じ、專修念佛を興するよし、元久二年の秋のころ、征夷將軍右大臣實朝公に、あらぬさまに、讒し申ものありて、召尋らるべきよし、きこえければ、爲守おどろきて、もしさる事あらば、いかゞ申上候べき。難答の詞、假令の様を假名眞名に、くはしくし給べきむね、飛脚をもて、上人に申入たりければ、上人御返事云、念佛のこと、いまだくはしく、ならはせ給はぬことにて候へば、專修雜修の間のこと、くわしき沙汰候はずとも、召とはれさふらはゞ、法門の委事はしり候はず、御京上の時うけたまはりわたりて、聖のもとへまかり候て、後世の事をば、いかゞし候べき、在家のものなどの、後生たすかり候ぬべきことは、なに事か、候らんと、問候ひしかば、ひじりの申候しやうは、生死をはなるゝみちは、やうく多候へども、そのなかに極樂に往生する、これ佛の衆生をすゝめて、生死をいださせ給ふ一の道なり。し

るに極樂に往生する行、又やうやうに多候へども、そのなかに念佛は、これ、彌陀の一切衆生のために、みづからちかひ給たりし、本願の行なれば、往生の業にとりては、念佛にしくはなし。往生せむとおもはゞ、念佛をこそは、せめと申候き。何況、又在家のもの、法門をもしらず、智慧もなからんものは、念佛の外には、なにことをして、往生すべしと、いふことなし。わがをさなくより、法門をならひたるものにてあるだにも、念佛よりほかに、又なにごとをして、往生すべしともおぼへねば、たゞ念佛ばかりをして、彌陀の本願をたのみて、往生せむとおもひてあるなり。まして在家の者などは、なにことかあなむと、申候しかば、ふかくそのよしを、たのみ候て、念佛をつかまつり候なり。又、この念佛を申ことは、たゞ、わが心より、彌陀本願の行なりと、さとりて、申事にもあらず。唐のよに、善導和尚と申候し人の、往生の行業にをいては、專修雜修と申、二の行をわかちて、すゝめ給へるなり。專修といふは、念佛也。雜修といふは、念佛の外の行なり。專修のものは、百人は、百人ながら往生し、雜修の者は、千人の中に、わづかに一二人あり、といへるなり。唐土に又信中と申もの、このむねをしるして、專修淨業文といふ文をつくりて、唐土の諸人をすゝめたり。專修につるて五種の專修正行といふことあり。この五種の正行について又正助二行をわかつてり。正業といふは、五種の中の第四の念佛なり。助業といふはそのほかの四の行なり。いま決定して淨土に往生せんと思はゞ、專雜二種のなかには、專修のおしへによりて、一向に念佛

すべし。正助二業の中には正業のすゝめによりて、ふた心なくたゞ第四の稱名念佛をすべしと申候しかば、くはしきむね、ふかき心をばしり候はず、さては念佛はめでたき事にこそあむなれと信じて、申候ばかりに候。件の善導和尚と申人は、うぢある人にはさふらはず、阿彌陀佛の化身にてをしまし候なれば、おしへすゝめさせ給はん事、よもひがごとにては候はじとふかく信じまいらせて、念佛はつかまつり候なり。そのつくらせ給て候なる文ども多候なれども、文字もしり候はぬものにて候へば、たゞ心ばかりを聞候て、後生やたすかり候。往生やし候とて、申候程に、ちかきものとも見うらやみ候て、少々申ものども候也と、これらほどに申させ給べし。なか／＼くはしく申させ給はゞ、あやまちもありなんどして、あしき事もこそ候へ、やう／＼に難答をしるしてと候へども、時にのぞみてはいかなる詞どもか候はんずらむに、かきてまいらせて候はんむもあしくさふらひぬべく候。たゞよく／＼御はからひ候て、早晚よきやうにこそ、はからはせ給はめ。又念佛申すべからずと仰られて候とも、往生に心ざしあらむ人はそれにより候まし。念佛いよく／＼申せと仰られ候とも道心なからむものは、それにより候まじ。とかくにつけて、いたく思食事候まじ。いかならむにつけてもこのたび往生しなんと、人をばしらず、御身にかきりては思食べし。殿は道理ふかくしりて、ひが事はおはしまさぬことにて候と申あひて候へば、これらほどに聞食さんに、念佛ひが事にてありけり。いまはな申そと仰らる事はよも候はじ。さらざらん人は、いかに申ともおも

ふとも、無益の事にてこそ候はんずれ已上取證しかるに翌年四月廿五日に、信濃前司于時山城民部大夫行光が奉行にて、くださるゝ御教書云。津戸郷内建立念佛所、令居住一向專修輩之由、所聞食也。彼宗之子細爲有御尋、爲宗之輩一兩人、早可被召進之狀依仰執達如件。云云仍同月廿八日に、淨勝房、唯願房等の念佛者をあひ具して法花堂のまへの、二棟の御所と號する、南向の廣廂に參候す。重々の御たづねにつきて、津戸三郎は、上人御返事の趣を、そらにうかべて用意したる事なれば、とゞこほりなく申いれけるに、淨勝房等の念佛者は、年來所學の道なれば、法藏比丘因位のむかしより、彌陀如來成佛のいまにいたるまで、凡夫往生のみちくらからず述申ければ、面々に立申むねことごとく聞食ひらかれけるによりて、專修の行においては、しさいあるべからず。もとのごとくつとめ行べきよし、仰出されしのちはいよく念佛の行をこたりなかりしかば、建保七年正月、右府薨逝のとき、二品禪尼の御はからひととして、かの御骨をこのところにわたしたてまつられければひとへにかの御菩提をそ、とぶらひ申ける

## 第二 圖

爲守ふかく上人の勸化を信じ、ひとへに極樂の往生をねがひて、ふた心なく念佛しけるが、おなじくは出家の本意をとげばやと思けるに、關東の免許なかりければ、在俗のかたちながら、法名をつき、戒をうけ、袈裟をたもつべきよし、上人にのぞみ申入れれば、その心ざしをあはれみて、寛

印供奉のかゝれたる、戒本十重禁の次第、ならびに上人抄記の、三聚淨戒のむねなどをしるしくだされ、又袈裟をつかはし、尊願といふ法名をくだされにけり。此御返事を給はりてのちは、偏に出家のおもひをなして念佛す。又そののち上人所持の念珠を所望しける御返事には、これ程に思食事は、此世ひとつのことにはあらず。さきのよのふかきちぎりとははれに候。かまへて極樂にこのたびまいりあはせ給べし。つねにもちて候ずゝまいらせ候。御念佛おこたらず、せさせおはしますべしと。云云取置又ある時の御文には、このたびかまへて往生しなむと思食さるべく候。うけがたき人身すでにうけたりあひかたき念佛往生の法門にあひたり。娑婆をいとふ心あり。極樂をねがふ心まじりたり。彌陀の本願ふかし。往生は御心にあるべきなり。ゆめく御念佛おこたらず決定往生のよしを存せさせ給べし。云云 これらの御文どもを、にしきの袋にいれて、身をはなたざりけり。しかるべき事にや、建保七年正月、右丞相實朝公薨逝のとき、免許をかふりて出家をとげ、上人よりしるしくだされける法名をつきて、尊願とぞ申ける。上人往生ののちは、日にしたがひて極樂のこひしく、年をおひて穢土のいとはしく覺けるまゝには、此御文をとりいだし拜見しては、とくむかへさせ給へと申けれど、むなく歳月を送けるあみだ、上人の門弟淨勝房以下の僧衆をもて、仁治三年十月廿八日より、三七日の如法念佛をはじめ、十一月十八日結願の夜半に、道場にして高聲念佛しみづから腹をきりて、五臟六腑をとりいだし練大口につゝみて、しのびてうしろの河にすて

させにけり。夜陰の事なれば人更にこれをしらず。そのち衆にむかひて、かやうに出家籠居して大臣殿の御ぼだいをとぶらひ申につけても、主君の御なごりも、こひしくましますうへ、上人も極樂にかならずまいりあへと仰の侍しに、いままで往生せずして、穢土のすまるかた／＼無益也。釋尊も八十の御入滅、上人も八十の御往生、尊願又滿八十なり。第十八は念佛往生の願なり。今日又十八日なり。如法念佛の結願にあたりて、今日往生したらむは、殊勝の事なるべしなと申ければ、かゝる用意とはおもひもよらず。只あらましの詞と心得て、まことにめでたくこそ候はめと返答しけるに、その夜もあけ、十九日にもなりぬ。敢て苦痛なし只今臨終すべき心ちもなかりければ、子息の民部大夫守朝をよびて、きりたるはらをひきあけて、まるきもといふものゝのこりて、臨終ののぶるとおぼゆるなり。よりて見よと申ける時ぞ、はじめて入しりにける。心さむきの程に、まるきものあるよしを申ければ手をいれてひききりてなげすて、これがのこれる故に、臨終はのぶるなるべしとぞ申ける。人々おどろきあはてければ、娑婆のいとほしく、極樂のねがはしき心ざし日にしたがひていやまさりなれば、いま一日もとくまいりたくて、かくはからひぬるよしを、かきとどき申ければ、まことに願往生の心ざしの熾盛なるありさま、みる人みな涙をながさぬはなし。すこしきのいたみもなく念佛しけるが、七日までのびければ、うがいの水のかよふゆへなるべしとて、うがいをとゝめて、塗香を用けるが、氣力も更におとろへず。程なく疵も愈へにける、のちには時

時行水を用けるとかや。正月一日にもなりにければ、死せずしては、往生すべきみちなきゆへに、尊願は正月一日の祝には、臨終の儀式をならして、としひさしくなれり。日來のあらましたがはずして、今日往生すべき故に延引しけるとよろこびて、しきりに念佛しけれども、その日もすぎ次の日も又くれぬ。只今臨終すべき心ちもなかりければ、上人の御文を又とりいだして、往生ののちは思出べきなり。かならず極樂にまいりあへと自筆の御文にのせられながら、いそぎまいらむと心をつくし侍に、をそくむかへさせ給ことの心うく侍よし、連日になげき申けるが、正月十三日の夜のゆめに來十五日午尅に迎べきよし、上人きたりてつけ給とみる。さめてこれをかたり歡喜のみだをながしけり。件の日になりしかば、上人より給たる袈裟をかけ、念珠もちて西にむかひ端坐合掌して、高聲念佛數百反をとなへ、午の正中に、念佛とともに息たえぬ。紫雲空にそびき、異香室にみつ。茶毘の庭にいたるまで、そのにほひなをきえざりけり。腹をきりて後水漿をたちて、五十七日氣力つねのごとくして、いたむ所なく、つるに往生をとげにける不思議の事なり。抑いまのするところの自害往生、水漿をたちてのち、五十餘日をふるごと、殆信をとりがたしといへども、かの子孫、上人の御消息、ならびに念珠袈裟等を相傳して、披露する事世もてかくれなし。たゞこれ尊願が不思議の奇特をのこするばかりなり。餘人さらにこのみ行せよとはあらず。凡上代上機の事はしばらくこれをさしをく、末代當世の行者は機根よはきゆへに、たとひ思たつものありとも

その期にのぞみてもし後悔の一念もおこりぬべし。しからばなにの詮かあらん。上人もいけらば念佛の功つもり、しなば往生うたがはず、とてもかくても、此身にはおもひわづらふ事ぞなきと心得て、ねんごろに念佛して、畢命を期とせよとこそ、禪勝房にはさづけられけれ。鎮西の聖光房も、自善往生、燒身往生、入水往生、斷食往生等の事、末代には斟酌すべしと、いましめをかれけるとかや。ゆめ／＼このみ行すべからず、ふかく上人の勸化を信じて、念々相續、畢命爲期の行を、つとむべきものなり

### 第三圖

## 法然上人行狀畫圖 第二十九

比叡山西塔の南谷に、鐘下房の少輔とて、聰敏の住侶ありけり。弟子の兒にをくれて、眼前の無常におどろき、交衆ものうくおぼえければ、三十六のとし遁世して、上人の弟子となり、成覺房辛酉と號しけるが、淨土の法門をもとならへる天台宗にひきいれて、迹門の彌陀、本門の彌陀といふことをたて、十劫正覺といへるは迹門の彌陀と。本門の彌陀は無始本覺の如來なるかゆへに。我等所具の佛性と、またく差異なし。この謂をきく一念にことたりぬ。多念の遍數、はなはだ無益なりと云て、一念義といふ事を自立しけるを、上人、此義善導和尚の御心にそむけり。はなはだしか

るべからざるよし、制しおほせられけるを、承引せずして、なをこの義を興しければ、わが弟子にあらずとて、擧出せられにけり

## 第一 圖

兵部卿三位基親卿、ふかく上人勸進のむねを信じて、毎日五萬遍の數遍、をこたりなかりけるを成覺房一念義をたて、彼卿の數遍を難じければ、重々問答して成覺房の義ならびに所存をしるして、上人に尋申されける狀云、念佛數遍、ならびに本願を信するやう、基親の愚案かくのごとく候難者いはれなく覺候。此折紙に御存知のむね御自筆をもて、かき給はるべく候。難者にやぶらるべからざるがゆへなり。別解別行のひとにて候はゞ、みゝにもいるべからず候に、御弟子等の説に候へば、不審をなし候也。又念佛者は、女犯ははかるべからずと申あひだ在家は勿論也、出家はこはく本願を信ずとて、出家のひとの女にちかづき候條、いはれなくさふらふか、善導はめをあげて、女人を見るべからずとこそ候めれ、この事あらく仰をかふるべく候。基親は、只ひらに本願を信じて、念佛を申候也。料簡も才學も候はざるゆへなり云云取詮彼註進の狀云

## 基親取信本願之様

雙卷經上云、設我得佛、十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺。文 同  
下云、聞其名字、信心歡喜、乃至一念、至心廻向、願生彼國、即得往生、住不退轉。文 往生禮讚

云、今信知彌陀本弘誓願、及稱名號、下至十聲一聲等、定得往生、乃至一念、無有疑心。文

觀經疏云、一者決定深信、自身現是罪惡、生死凡夫、曠劫已來、常沒常流轉、無有出離之緣、二者決定深信、彼阿彌陀佛、四十八願、攝受衆生、無疑無慮、乘彼願力、定得往生。文 此等の文を案じ候て、基親罪惡生死の凡夫なりといへども、一向に本願を信じて、名號をとなへ候、毎日に五萬遍なり。決定ほとけの本願に乗じて、上品に往生すべきよし、ふかく存知し候也。このほかへちの料簡なく候。しかるにあるひと本願を信ずる人は一念なり。しかれば五萬反無益なり。これ本願を信ぜざるなりと申。基親答曰、念佛一聲のほか百遍乃至萬遍は、本願を信せずといふ文候やと。難者云、自力にて往生はかなひがたし、たゞ信をなしてのちは、念佛のかず無益なりと申。基親又申云、自力往生とは他の雜行等をもて、願すと申さばこそは、自力とは申候はめ。したがひて善導の疏云、上盡百年、下至一日七日、一心專念、彌陀名號、定得往生、必無疑と候めるは、百年念佛すべしとこそは候へ。又上人の御房七萬遍をとなへしめまします、基親御弟子の一分たり。よてかすおほくとなへんと存候なり。ほとけの恩を報ずるなり。禮讚云、不相續念、報彼佛恩故、心生輕慢、雖作業行、常與名利相應故、人我自覆、不親同行善知識故、樂近雜緣、自障々他往生正行故云云佛恩を報ずとも、念佛の數遍おほく申べしと、見えたりと申 云云

第 二 圖

上人御返事云、仰旨謹奉候畢。御信をとらしめ給やう、折紙具に拜見候に一分も愚意の所存にたがはず候。ふかく隨喜したてまつり候なり。近來一念の外の數遍無益なりと申義出來候、勿論不足言の事に候。文釋をはなれて義を申人すでに證を得候歟、如何尤も不審候。またふかく本願を信ずるもの、破戒もかへり見るべからざるよしのこと、これ又とはせ給にも不可及事歟。附佛法の外道ほかにもとむべからず。凡は近來念佛の天魔きおひきたりて、かくのごときの狂言いできたり候歟。なをく左右にあたはず候

云云  
取捨

### 第三 圖

成覺房弟子等、越後國にして、一念義をたてけるを、上人弟子光明房といふひじり、多念の行者なりけるが心えぬ事におもひて、かの所述の法門をしるして、上人にうたへ申しければ、御返事云、一念往生の義、京中にも粗流布する所也。凡言語道斷のこと也。まことにほとく御問に不可及歟。所詮雙卷經の下に、乃至一念、信心歡喜といひ。又善導和尚は、上盡一形、下至十聲一聲等、定得往生、乃至一念、無有疑心、といへる。此等の文を、あしく了簡するともから、大邪見に住して申候ところなり。乃至といふ、下至といへる、みな上盡一形をかねたることばなり。しかるをちかごろ愚癡無智の輩、おほくひとへに十念一念なりと執して、上盡一形を廢する條、無慚無愧の事也。まことに十念一念までもほとけの大悲本願、なをかならず引接し給ふ、無上の功德なりと

信じて一期不退に行ずべき也。文證多しといへどもこれをいだすにおよばず。いふにたらざる事也。こゝにかの邪見の人、この難をかうぶりて答ていはく、わがいふところも、信を一念にとりて念ずべきなり。しかりとて又念ずべからずとはいはすと、これまた詞は尋常なるに似たりといへども心は邪見をはなれず、しかるゆへは、決定の信をもて一念してのちは、又念せずといふとも、十惡五逆なを障をなさず。いはんや餘の小罪をやと信すべきなりといふ。此おもひに任せむものは、たとひおほく念ずといふとも、阿彌陀佛の御心にかなはんや。いづれの經論人師の説ぞや。これひとへに、懈怠無道心、不當不善のたぐひの、ほしきまゝに悪をつくらむとおもひて申いだせる事也をよそかくのごときの人は、附佛法の外道なり。師子のなかの虫なり。又うたがふらくは、天魔波旬のために、精氣をうばはるゝともがらの、もろくの往生のひとをさまたげんとする歟。尤あやしむべし。ふかくおそるべきものなり。毎事筆端につくしがたし 謹言 已上  
取詮

#### 第 四 圖

光明房の狀につきて、上人、一念義停止の起請文をさだめらる。かの狀云、當世念佛門におもむく行人等のなかに、おほく無智誑惑のともがらあり。いまだ一宗の癡立しらず、一法の名目にをよばず、心に道心なく、身に利養をもとむ。これによりて恣に妄語をかまへて諸人を迷亂す。ひとへにこれを渡世の計として、またく來生の罪をかへり見ず。かたましく一念の偽法をひろめて、無行

のとかを謝し、あまさへ無念の新義をたて、なを一稱の小行をうしなふ。微善なりといへども善根をいいてあとをけづり、重罪なりといへども、罪障をいいていよく勢をます。刹那五欲の樂をうけむがために、永劫三途の業をおそれず。人を教示していはく、彌陀の願をたのむものは、五逆を憚ることなし、こゝろにまかせてこれをつくれ。袈裟を着べからず。よろしく直垂をきるべし。姪肉を斷ずべからず。恣に鹿鳥を食べし。云云弘法大師、異生羝羊心を釋して云、たゞ姪食をおもふことかの羝羊のごとし。云云このともからたゞ弊欲にふけること、ひとへにかの類歟。十住心のなかの三惡道の心なり。たれかこれをあはれまざらんや。たゞ餘教を妨のみにあらず、かへりて念佛の行を失ふ。懈怠無慚の業をすゝめて捨戒還俗の義をしめす。この本朝には外道なし、これすにて天魔のかまへなり。佛法を破滅し、世人を惑亂す。妄語をかまへていはく、然上人の七萬遍の念佛は、たゞこれ外の方便なり。内に實義あり、人いまだこれをしらず。所謂こゝろに彌陀の願をしれば、身かならず極樂に往生す。淨土の業こゝに満足しぬ。このうへになんぞ一遍なりといふともかさねて名號を唱ふべきや。かの上人の禪房にをいて、門人等二十人ありて、祕義を談ずるところに、淺智の類は、性鈍にしていまださとらず、利根のともがらわづかに五人この深法を得たり。われその一人なり。かの上人の己心中の奧義なり。容易これをさづけず、器をえらびて、傳授せしむべし云云。風聞の説もし實ならば、皆以虚言なり。迷者をあはれまむがために今誓言をたつ。貧道

もしこれを祕して、いつはりてこのむねをのべ、不實のことをしるさば、十方の三寶、まさに知見をたれ、毎日七萬遍の念佛むなくその利益をうしなはむ。圓頓行者のはじめより實相を緣する、六度萬行を修して無生忍にいたる。いづれの法か、行なくして證をうるや。乞願はこの疑網に墮せむたぐひ、邪見の稠林をきりて、正直の心地をみがき、將來の鐵城をのがれて、終焉の金臺に墮せるべし。胡國程遠し、思を雁札に通ず。北陸境はるかなり。心を像教にひらくべし。山川雲かさなりて、一面を千萬里の月にへだつれとも、化導緣あつくして、膝を一佛土の風にちかづけん。子細端多し、毛舉にあたはざる而已 承元三年六月十九日 沙門源空云云取證

## 第五圖

### 法然上人行狀畫圖 第三十

上人の師範、功德院の肥後阿闍梨皇圓は、叡山杉生法橋皇覺の弟子にて、顯密の碩才なりき。しかるにつらく思惟すらく、自身の機分をはかるに、このたびたやすく生死を出べからず、もしたびたび生をあらためば、隔生即忘して、さだめて佛法をわするべし。今たましく人身をうくといへども、恨らくは二佛の中間にして、なほ生死に輪廻せんことを。しかし長命の報を得て、慈尊の出世にあはむには、命ながきもの、蛇にすぎたるはなし、我かならず、大蛇の身をうくべし。但大海

は金翅鳥の恐あり、池にすまむとおもひて、遠江國笠原庄に、さくらの池といふ池を、かの所の領家に申うけて、放文をとり、命終のとき、水をこひ掌の中に入れてをはりにけり。其後雨ふらず風ふかざるに彼の池にはかに水まさり、大なみたちて池中のちりもくず悉はらひあぐ、諸人耳目ををどるかすよしかの所より領家にしるし申たりければ、その日時をかうかへらるゝに、彼闍梨命終の日にてぞ有ける。當時にいたるまで、しづかなる夜は池に振鈴の音きこゆなどぞ申つたへ侍る。末代にはかゝるためし、ありがたくや侍るらん。上人の給けるは、智慧ありて、生死の出がたきことをしり、道心ありて慈尊にあはん事をねがふといへども、よしなき畜趣の生を感ぜること、しかしながら淨土の法門をしらざるゆへなり。源空そのかみ此法をたづねえたらましかば、信不信をかへりみずさづけ申なまし。極樂に往生ののちは十方の國土心に任て經行し、一切の諸佛、おもひにしたがひて供養す。何ぞ必しもひさしく穢土に處することをねがはんや。彼闍梨はるかに後佛の出世を期していたづらにいけにすみ給はんこと、いたはしきわざなりとぞ仰られける

## 第一 圖

妙覺寺に淨心房とてさかしきひじりありき。道心ふかきよしにて、寺門を出ず、念佛を行ずるありさま常の人にこえたり、歸依する人雲霞のごとし。五十ばかりにて他界しけるに、臨終散々なりけり。人々これをあやしみて、妙覺寺の上人だにも往生せず、いはんや餘人をやと申あひけるを、

上人聞給て、いざしらず、虚假の行者にてやありつらむと、仰られけり。其後四十九日の佛事に、上人を請じたてまつりて唱導とす。日來の所化どもあつまりて種々の捧物をさゞげゝるなかに、常隨の弟子衣箱を取出て、これは先師年來の所持物なり、ことさらとて御布施にたてまつれり。件の箱には布の衣袴の尋常なると、布の七帖の袈裟、ならひに十二門の戒儀をふかくをさめたりけり。上人仰られけるは、日來源空が申つることばたがはさりけり。このひじりゆゝしき虚假の人なりけり。この所持物をみるに徳たけて人にたうとがられて、戒師にならむとおもふ心にておこなひけるなりとの給ければ、人みな不審をひらきけり

## 第一 圖

治承四年十二月二十八日、本三位中將重衡卿、父平相國の命によりて、南都をせめしとき、東大寺に火かゝりしかば、大伽藍忽に灰燼と成にき。其後元暦元年二月七日、一谷の合戦に、彼中將いけどられて、都へのぼりて、大路をわたされ、さまざまのことありき。後生菩提の事を申あはせむために、其請ありければ、上人おはして對面し給て、戒などさづけ申されて、念佛のことくわしく教導ありけり。このたび生ながらとられたりけるは、いま一度上人の見參に入べきゆへにて侍りけるとて、かぎりなくよろこび申されけり。受戒の布施とおぼしくて雙紙笥をとり出て、上人の前にさしをきて申されけるは、御要たるべき物には侍らねども御目ちかき所にをかせ給て、かつは重衡

が餘波とも御覽し、且は思食出候はんたびには、とりわき御廻向あるべきよしを申さるゝ、上人そのころざしを感じて、うけとりて出給にけり

## 第三圖

東大寺造営のために、大勸進のひじりの沙汰侍けるに、上人其撰にあたり給にければ、右大辨行隆朝臣を御使にて大勸進職たるべきよし、法皇後白河の御氣色ありけるに、上人申されけるは、山門の交衆をのがれて、林泉の幽栖をしめ侍ことは、しづかに佛道を修し、ひとへに念佛を行ぜんがためなり。もし勸進の職に居せば、劇務萬端にして素意もはらそむくべきよしを、かたく辭申されけり。行隆朝臣その心ざしの堅固なるをみて、ことのよしを奏しければ、もし門徒の中に、器量の仁あらば、擧申べきよしかさねて仰下されけるによりて、醍醐の俊乘房重源を擧申さる、つゝに大勸進の職に補せられにけり

俊乘房、伊勢大神宮にまいりて、この願もし成就すべくば、その瑞相をしめし給へと祈請しけるに、三七日のあかつきうちまどろめるに、唐裝束したる貴女、方寸の玉をさづけ給ふとおもひて、さめてみれば、彼玉うつゝに袖のうへにあり。重源これをおほきによるこび珍祕す。其後天下響のごとくに應じて、財寶ころにまかせければ、ほどなく金銅の本尊ものごとくみがきあらはしたてまつりにけり。重衡卿の上人に進ずるところの鏡を結縁のためとて送つかはしければ、佛を

鑄たてまつる爐のなかに入るに、飛出でつゐにわきあはざりけり。不思議の事とぞ申あひける。大佛殿の正面の柱にうちつけて侍は、彼の鏡にてなむ侍なる

#### 第四圖

壽永元曆のころ、源平のみだれによりて、命を都鄙にうしなふもの、其數をしらず。こゝに俊乘房、無縁の慈悲をたれて、かの後世のくるしみを救はんために、興福寺東大寺より始て、道俗貴賤をすゝめて、七日の大念佛を修しけるに、そのころまでは、人いまだ念佛のいみじき事をしらずして、すゝめになふものすくなかりければ、俊乘房このことを敷て、人の信をすゝめむがために、建久二年のころ、上人を請じたてまつりて、大佛殿のいまだ半作なりける軒のしたにて、入唐の時わたしたてまつれる、觀經の曼陀羅、ならびに淨土五祖の影を供養し、又淨土の三部經を講ぜさせたてまつりけるに、南都三論法相の碩學おほくあつまりけるなかに、大衆二百餘人をののはだに腹巻を着して、高座のきはにみゐて、自宗の義を問かけて、訛謬あらば耻辱をあたへむと、支度したりけるが、上人まづ三論法相の深義をのべ、次に淨土一宗の祕蹟をこまやかに釋し給て、未代の凡夫の出離の要法は、口稱念佛にしくはなし。もし念佛をそしらんともがらは、無間地獄におちて、八萬大劫苦を受べきよし、觀佛經の説にまかせて、説給ければ、二百餘人の大衆よりはじめて隨喜渴仰きはまりなし。東大寺の一和尚觀明房の已講理眞、ことに涙にむせびて、八句のよはひま

でもてる事は、ひとへに此事をきかむためなりとぞよろこび申ける。さてそのつるでに、天台圓頓の十戒を解説し給に、吾山は大乗戒、この寺は小乗戒とのべ給ければ大衆存外の氣色どもなりけれども、當時の古老の中に兼日に靈夢をしめすことありけるをさきだちて披露しけるによりて、斟酌しけるにや、衆徒おのく口をとどて、別のことなかりけり

第五圖

上人やまとうたを事とし給はざりけれども、我國の風俗にしたがひて、法門によせては、ときくおもひをのべられるにや、あるひは門弟のなかにしるしをけるを申つたへ、あるひはてづからかきつけ給へるを没後に披露しける

春

さへられぬひかりもあるををしなへて

へたてかほなるあさかすみかな

夏

われはたゞほとけにいつかあふひくさ

こころのつまにかけぬ日そなき

秋

あみだ佛にそむる心のいろにいては

あきのこすゑのたくひならまし

冬

ゆきのうちに佛のみなをとふれは

つもれるつみそやかてきえぬる

逢<sub>レ</sub>佛法<sub>ニ</sub>捨<sub>レ</sub>身命<sub>ニ</sub>といへることを

かりそめの色のゆかりのこひにたに

あふには身をもをしみやはする

勝尾寺にて

しはのとにあけくれかゝるしらくもを

いつむらさきの色にみなさん

此歌入  
玉葉集

極樂往生の行業には餘の行をさしをきてたゞ

本願の念佛をつとむべしといふことを

あみだ佛といふよりほかは津のくにの

なにはのこともあしかりぬへし

極樂へつとめてはやくいてたゞば

身のおはりにはまいりつきなん

あみた佛と心はにしにうつせみの

もぬけはてたるこゑそすゝしき

光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨のこゝろを

月かけのいたらぬさとはなけれども

なかむる人のこゝろにそすむ 此歌入續千載集

三心の中の至誠心のこゝろを

往生はよにやすけれとみなひとの

まことの心なくてこそせね

睡眠の時十念を唱へしといふ事を

あみた佛と十こゑとなへてまところまむ

ながきねふりになりもこそすれ

上人てづからかきつけ給へりける

ちとせふるこまつのもとをすみかにて

無量壽佛のむかへをそまつ

おほつかなたれかいひけむこまつとは

雲をさゝふるたかまつの枝

いけのみつ人のこゝろにたりけり

にこりすむことさためなけれは

むまれてはまつおもひ出んふるさとに

ちぎりしものふかきまことを

此歌入新千城集

阿彌陀佛と申はかりをつとめにて

浄土の莊嚴見るそうれしき

元久二年十二月八日

源

空

## 法然上人行狀畫圖 第卅一

上人の勸化、一朝にみち四海にをよぶ。しかるに門弟のなかに専修に名をかり本願に事をよせて放逸のわざをなすものおほかりけり。これによりて。南都北嶺の衆徒念佛の興行をとゞめ、上人の化導を障礙せむとす。土御門院の御宇門徒のあやまりを師範におほせて、蜂起するよしきこえしか

ども、なにとなくてやみにしほどに、元久元年の冬のころ、山門大講堂の庭に三塔會合して、專修念佛を停止すべきよし、座主大僧正眞性に訴申けり

第一 圖

上人この事を聞給て、すゝみては衆徒の鬱陶をやすめ、しりぞきては弟子の僻見をいましめむために、上人の門徒をあつめて、七箇條の事をしるし起請をなし、宿老たるともがら八十餘人をゑらびて連署せしめ、ながく後證にそなへ、すなはち座主僧正に進ぜらる。件起請文云

あまねく予が門人念佛の上人につぐ

一、いまだ一句の文義をうかゞはずして眞言止觀を破し餘の佛菩薩を謗することを停止すべき事

一、無智の身もちて有智の人に對し、別解別行の輩にあひて、このみて評論をいたす事を停止すべき事

一、別解別行の人に對して、愚癡偏執の心もちて、本業を棄置せよと稱して、あながちこれをきらひわらふ事を停止すべき事

一、念佛門にをきては戒行なしと號して、もはら姪酒食肉をすゝめ、たまたま律義をまもるをば雜行人となづけて、彌陀の本願を憑ものは、造惡をおそるゝことなかれといふ事を停止すべきこと

一、いまだ是非をわきまへざる癡人、聖教をはなれ、師説をそむきて、ほしきまゝに私の義をのべ

みだりに諍論をくはだて、智者にわらはれ、愚人を迷亂する事を停止すべし

一、愚鈍の身もちて、ことに唱導をこのみ、正法をしらず種々の邪法をときて、無智の道俗を教化する事を停止すべし事

一、みづから佛教にあらざる邪法をときて、いつはりて師範の説と號することを停止すべし事

元久元年<sup>甲子</sup>十一月七日沙門源空在判

信空	感聖	尊西	證空
源智	行西	聖蓮	見佛
道亘	導西	寂西	宗慶
西縁	親蓮	幸西	住蓮
西意	佛心	源蓮	源雲
欣西	生阿	安照	如進
導空	昌西	道也	遵西
義蓮	安蓮	導源	澄阿
念西	行首	尊淨	歸西
行空	道感	西觀	尊成

禪忍	學西	玄耀	澄西
大阿	西住	實光	覺妙
西入	圓智	導衆	尊佛
蓮惠	源海	安西	教芳
詣西	祥圓	辨西	空仁
示蓮	念生	尊蓮	尊忍
業西	仰善	忍西	住阿
鏡西	仙空	惟西	好西
祥寂	戒心	顯願	佛眞
西尊	良信	禪空	善蓮
蓮生	阿日	靜西	度阿
成願	覺信	自阿	願西

連署の交名かくのごとし。執筆右大辨行隆息法蓮房信空也

又座主に進ぜらるゝ起請文云、近日の風聞にいはく、源空偏に念佛の教をすゝめて、餘の教法をそしる。諸宗これによりて凌夷し、諸行これによりて滅亡す。云云この旨を傳聞に、心神驚怖す。

つるに絳山門にきこえ議衆徒に及て、炳誠を加べきよし貫首へ送られ畢。此條一には衆勤をおそれ一には衆恩をよるこぶ。おそるゝところは、貧道の身もちて、忽に山洛のいきどをりにをよぶ。

喜ところは、謗法の名をけして、ながく花夷の謗をとゝめん。もし衆徒の糺斷にあらずば、争貧道の愁歎をやすめんや。凡彌陀の本願云、唯除五逆誹謗正法と。念佛をすゝめむ輩、むしろ正法をそしらんや。僻説もちて弘通し、虚誕もちて披露せば、尤糺斷あるべし、尤炳誠あるべし。のぞむところなり。ねがふところなり。此等の子細、先年沙汰の時起請を進了。其後いまだ變せず、かさねて陳ずるにあたはずといへども、嚴誡すでに重疊の間、誓狀又再三にをよぶ。上件の子細、一事一言、虚言もちて會釋をまうけば、毎日七萬遍の念佛、むなしく其利をうしなひ、三途に墮在して、現當二世の依身つねに重苦にしづみてながく楚毒を受了。伏乞當寺の諸尊、満山の護法。證明知見したまへ 源空敬白取證

元久元年十一月七日

源 空

## 第 二 圖

月輪殿この事を歎給て、座主大僧正に進ぜらるゝ御消息云、念佛弘通の問事。源空上人の起請消息等山門に披露の後動靜如何。尤不審。如風聞者、餘行をとゝむべきよし、勸進の條不可然云云此條にをきては、善導の意此旨をのぶるに似たり。然而旨趣甚深也。行者おもふべし。抑諸宗成立

の法、をのく自解を專にして餘教をなんともせず、弘行の常の習、先徳の故實也。これを異域にとぶらへば、月氏にはすなはち護法清辨空有の諍論、震旦には又慈恩妙樂權實の立破、是れ我國に尋れば、弘仁の聖代に戒律大小のあらそひありき。天曆の御宇に諸法淺深の談あり、八宗きおひて定準とし、三國傳て軌範とす。しかれども、あらかじめ末世の邪亂をかゝみて、諸宗の對論をとゞめられてよりこのかた、宗論ながく跡をけづり、佛法これがために安全なり。就中淨土の一宗にきては、古來の行者偏に無染無著の淨心を凝して、專修專念の一行に住す。他宗に對て執論をこのまず、餘教に比て是非を判ぜず、獨出離をねがひ、かならず往生をとぐる直道なり、但弘教嘆法のならひ、聊又其心なきにあらざるか。所謂源信僧都、往生要集の中に三重の問答をいだして十念の勝業をほむ。念佛の至要なる事この釋に結成せり。禪林の永觀、徳惠心にをよばずといへども、行淨業をつげり、撰ところの拾因其心また一なり。普賢觀音の悲願をかむがへ、勝如教信が先蹤をひきて、念佛の餘行にすぐれたることを證す。彼時諸宗の輩惠學林をなし禪定水をたゝふ。しかりといへども、惠心をもとがめず、永觀をも罰せず、諸教も滅することなく念佛もさまざまなかりき。是則世すなほに人なをかりしゆへ也。しかるに今代澆季にをよび、時鬪諍に屬して、能破所破とも偏執よりおこり、正論非論みな喧嘩にをよぶ。三毒うちに催し、四魔ほかにあらはるゝがいたすところなり。爰小僧幼年の昔より、衰暮の今にいたるまで、自行おろそかなりといへども本願を憑

み、罪業おもしろいへども往生をねがふ。うまず、おこたらずして四十餘廻の星霜をくくり、彌もとめ、いよくすゝみて、數百萬遍の佛號をとなふ。頃年よりこのかた、病せまり命あやうし、歸泉ちかきにあり。淨土の教迹、此時にあたりて滅亡しなんとす。これを見これを見て、いかでかたへ、いかでかしのばん。三尺の秋の霜肝をさき、一寸の赤焰むねをこがす。天にあふぎて嗚咽し。地をたゞきて愁悶す。何況上人小僧にをきて、出家の戒師たり。念佛の先達たり。罪なくして濫刑をまねき、つとめありて重科に處せば、法のため身命を惜べからず。小僧かはりて罪をうくべし。もて師範のとがをつくのはんとおもふ。もて淨土の教をまもらんと思ふまゝのみ。死罪死罪敬白取證

十一月十三日 專修念佛沙門圓證

前大僧正御房

上人誓文にをよび、禪閣會通をまうけたまひければ、衆徒の訴訟とゞまりにけり

### 第三 圖

其後興福寺の鬱陶猶やまず。同二年九月に蜂起をなし、白疏をさゝぐ。彼状のごとくは、上人ならびに弟子權大納言公繼卿を重科に處せらるべきよし訴申。これにつきて同十二月廿九日、宣旨を下されて云、頃年源空上人都鄙にあまねく念佛をすゝむ。道俗おほく教化におもむく。而今彼門弟の中に、邪執の輩名を專修にかるをもちて、咎を破戒にかへり見ず。是偏門弟の淺智よりおこりて

かへりて源空が本懐にそむく、偏執を禁遏の制に守といふとも、刑罰を誘諭の輩にくはふることなかれと云取詮 君臣の歸依あさからざりしかば、たゞ門徒の邪説を制して、とがを上人にかげられざりけり

## 第 四 圖

## 法然上人行狀繪圖 第卅二

專修念佛の事、南都北嶺の鬱陶につきて、上人のべ申さるゝるむね、その謂あるかのよし謳歌し衆徒のいきどほりも、次第にゆるくなりしかば、上人惣じては生死をいとひ佛道に入べきいはれ、別しては無智の道俗男女の念佛するによりて、諸宗のさまたげとなるべからざるむね、聖覺法印に筆をとらしめ、旨趣をのべられける狀云、それ流浪三界のうち、いづれのさかひにおもむきてか釋尊の出世にあはざりし、輪廻四生のあひだにいづれの生をうけてか如來の説法をきかざりし、華嚴開講のむしろにもまじはらず、般若演説の座にもつらならず、鷲峰説法にはにもぞまず、鶴林涅槃のみぎりにもいたらず。われ舍衛の三億の家にやゝどりけむ、しらず地獄八熱のそこにやすみけむ、はづべしく、かなしむべしく。まさにいま多生曠劫をへても、むまれがたき人界にむまれて、無量億劫をゝくりてもあひかたき念佛にあへり。釋尊の在世にあわざる事はかなしみなりと

いへども、教法流布の世にあふ事を得たるは、これよろこび也。たとへば目しゐたるかめの、うき木のあなにあへるがごとし。わが朝に佛法の流布せし事も、欽明天皇あめのしたをしろしめして十三年みづのえさるのとし冬十月一日、はじめて佛法わたり給ひし。それよりさきには、如來の教法も流布せざりしかば、菩提の覺路いまだきかず。こゝにわれらいかなる宿縁にこたへ、いかなる善業によりてか、佛法流布の時に生まれて、生死解脱のみちをきく事を怠たる。しかるをいまあひがたくしてあふ事を得たり、いたづらにあかしくらしてやみなんこそかなしけれ。あるいは金谷の花をもてあそびて、遅々たる春をむなしくゝらし、あるいは南樓に月をあざけりて、縵々たる秋の夜を、いたづらにあかず。あるいは千里の雲にはせて、山のかせぎをとりてとしをゝくり。あるいは萬里のなみにうかみて、うみのいろくづをとりて日をかさね、あるいは嚴寒にこほりをしのぎて世路をわたり、あるいは炎天にあせをのごひて利養をもとめ、あるいは妻子眷屬に纏はれて恩愛のきづなきりがたし、あるいは執敵怨類にあひて瞋恚のほむらやむ事なし。惣じてかくのごとくして晝夜朝暮行住座臥、時としてやむ事なし。たゞほしきまゝにあくまで三途八難の業をかさぬ。しかればある文には、一人一日中八億四千念、念々中所作皆是三途業といへり。かくのごとくして昨日もいたづらにくれぬ、今日も又むなしくあけぬ。いまいくたびかくらしいくたびかあかさんとする。それあしたにひらくる榮花はゆふへの風にちりやすく、ゆうべにむすぶ命露はあしたの日にぎえや

すし。これをしらずしてつねにさかえん事をおもひ、これをさとらずしてあらん事をおもふ。しかるあいだ無常の風ひとたびふけば、有爲のつゆながくきえぬれば、これを曠野にすて、これをとをき山にをくる。かばねはついにこけのしたにうづもれ、たましるはひとりたびのそらにまよふ。妻子眷屬は家にあれどもともなはず、七珍萬寶はくらにみてれども益もなし、たゞ身にしたがふものは後悔の涙也。ついに閻魔の廳にいたりぬれば、つみの淺深をさだめ業の輕重をかんがへらる。法王罪人にとひていはく、なんぢ佛法流布の世にむまれて、なんぞ修業せずしていたづらに歸りきたるや。その時にはわれらいかにこたえんとする、すみやかに出要をもとめて、むなしく歸る事なかれ

そもく一代諸教のうち、顯宗密宗、大乘小乘、權教實教、論家、部八宗にわかれ、義萬差につらなりであるいは萬法皆空の宗をとき、あるいは諸法實相の心をあかし、あるいは五性各別の義をたて、あるいは悉有佛性の理を談じ、宗々に究竟至極の義をあらそひ各々に甚深正義の宗を論ず。みなこれ經論の實語也、如來の金言也。あるいは機をととのへてこれをとき、あるいは時をかどみてこれををしへ給へり。いづれかあさくいづれかふかき、ともに是非をわきまへがたし。かれも教これも教、たがひに偏執をいだく事なかれ。説のごとく修行せば、みなことごとく生死を過度すべし、法のごとく修行せば、ともにおなじく菩提を證得すべし。修せずしていたづらに是非を論ず、たとへば目しゐたる人の、いろの淺深を論じ、みゝしゐたる人の、こえの好惡をいはんがごとし。

たゞすべからく修行すべし、いづれも生死解脱のみち也。しかるにいまかれを學する人はこれをそねみ、これを誦する人はかれをそしる。愚鈍のものこれがためにまどひやすく、淺才の身これがためにわきまへがたし。たま／＼一法におもむきて功をつまんとすれば、すなはち諸宗のあらそひたがひにきたる。ひろく諸教にわたりて義を談ぜんとおもへば、一期のいのちくれやすし。かの蓬萊方丈瀛州といふなる三の山にこそ不死のくすりはありときけ。かれを服してまれ、いのちをのべて漸々に習はばやと思へども、たづぬべきかたもおぼへず。もろこしに秦皇漢武ときこえし御門、これをきゝて、たづねにつかはしたりしかども、童男忭女、ふねのうちにしてとし月をゝくりき。彭祖が七百歳の法、むかしがたりにていまの時につたるがたし。曇鸞法師と申しし人こそ佛法のそこをきわめたりし人の、いのちはあしたを期しがたしとて、佛法をならはむがために、長生の仙の法をばつたへ給ひけれ。時に菩提流支と申三藏まし／＼き。曇鸞かの三藏の御まへにまうでて申給やうは、佛法の中に長生不死の法、この土の仙經にすぎたるありやと／＼ひ給ければ、三藏地につわきをはきての給はく、この方にはいづくんそと／＼長生の法あらん、たとひ長年を得てしばらくしなすとも、つゝるに三有に輪廻すとの給て、すなはち觀無量壽經をさづけて大仙の法也。これにより修行すれば、さらに生死を解脱すべしとの給き。曇鸞これをつたへて仙法をたちまちに火にやきてこれをすつ。觀無量壽經によりて淨土の行をしるし給き。その／＼ち曇鸞道綽善導懷感少康にいたる

まで、このながれをつたへ給えり。そのみちをおもひて、いのちをのべて大仙の法をとらんとおもふに、又道綽禪師の安樂集にも、聖道淨土の二門をたて給ふはこの心なり。その聖道門といふは穢土にして煩惱を斷じて菩提にいたる也、淨土門といふは、淨土にむまれてかしくにして、煩惱を斷じて菩提にいたる也。いまこの淨土宗につゐてこれをいへば、又觀經にあかすところの業因一にあらず。三福九品十三定善、その行しなじなにかれて、その業まぢくにつらなれり。まづ定善十三觀といふは、日想、水想、地想、寶樹、寶池、寶樓、花座、像想、眞身、觀音、勢至、普觀、雜觀これ也。つきに散善九品といふは、一には孝養父母、奉事師長、慈心不殺、修十善業、二には受持三歸、具足衆戒、不犯威儀、三には發菩提心、深信因果、讀誦大乘、勸進行者也、九品はかの三福の業を開してその業因にあつ、つぶさには觀經に見えたり。總じてこれをいへば、定散二善の中にもれたる往生の行はあるべからず。これによりてあるいはいづれにもあれ、たゞ有縁の行におもむきて功をかさねて、心にひかん法によりて行をはげまば、みなことごとく往生をとぐべし。さらうたがひをなす事なかれ。いましばらく自法につきてこれをいはず、まさにいま定善の觀門はかすかにつらなりて十三あり、散善の業因はまぢく／＼にわかれて九品あり。その定善の門にいらんとすれば、すなはち意馬あれて六塵の境にはず、かの散善の門にのぞまむとすれば、又心猿あそむで十惡のえだにうつる。かれをしづめんとすれども得ず、これをとゞめんとすれどもあたはず。いま

下三品の業因を見れば、十惡五逆の衆生、臨終に善知識にあひて、一聲十聲阿彌陀佛の名號をとなへて往生すとゝかれたり、これなんぞわれらが分にあらざらんや。かの釋の雄俊といひし人は、七度還俗の惡人也。いのちをはりてのち、獄卒閻魔の廳庭にゐてゆきて、南閻浮提第一の惡人、七度還俗の雄俊、ゐてまいりてはんべりと申ければ、雄俊申ていはく、われ在生の時、觀無量壽經をみしかば、五逆の罪人阿彌陀ほとけの名號を、となへて極樂に往生すと、まさしくとかれたり。われ七度還俗すといへども、いまだ五逆をばつくらず、善報すくなしといへども念佛十聲にすぎたり。雄俊もし地獄におちば、三界の諸佛妄語のつみにおち給べしと高聲にさげびしかば、法王は理におれて、たまのかぶりをかたふけてこれをおがみ、彌陀はちかひによりて金蓮にのせてむかへ給き。いはんや七度還俗にをよばざらんをや、いはんや一形念佛せんをや、男女貴賤行住座臥をえらばず時處諸縁を論せず、これを修するにかたからず、乃至臨終に往生を願求するにそのたよりをえたりと。楞嚴の先徳のかきをき給へる、まことなるかなや、又善導和尙、この觀經を釋しての給はく、娑婆の化主、その請によるがゆへに、ひろく淨土の要門をひらき、安樂の能人、別意の弘願をあらわす。その要門といは、すなはちこの觀經の定散二門これ也。定はすなはちおもひをやめてもて心をこらし、散はすなはち惡を廢して善を修す。この二行をめぐらして往生をもとめねがふ也。弘願といは大經にとくがごとし、一切善惡の凡夫のむまるゝことをうるもの、みな阿彌陀佛の大願業力

に乗じて、増上縁とせずといふことなし。又ほとけの密意弘深にして、教文さとりがたし、三賢十聖も、はかりてうかゞふところにあらず。いはんやわれ信外の輕毛也、さらに旨趣をしらんや。あふいでおもんみれば、釋迦はこの方にして發遣し、彌陀はかの國より來迎し給ふ、こゝにやり、かしこによばふ、あにさらざるべけんやといへり。しかれば定善散善弘願の三門をたて給へり。その弘願といは、大經云、設我得佛、十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺、唯除五逆、誹謗正法といへり、善導釋しての給はく、若我成佛、十方衆生、稱我名號、下至十聲、若不生者、不取正覺、彼佛今現、在世成佛、當知本誓、重願不虛、衆生稱念、必得往生云云。觀經の定散兩門をときをはりて、佛告阿難、汝好持是語々々々者、卽是、持無量壽佛名云云。これすなはちさきの弘願の心也。又おなじき經の眞身觀には、彌陀身色如金山、相好光明照十方、唯有念佛蒙光攝、當地本願最爲強云云。又これさきの弘願のゆへなり。阿彌陀經にはく、不可以少善根、福德因縁、得生彼國、若善男子善女人、聞說阿彌陀佛、執持名號、若一日若二日、乃至七日、一心不亂、其人命終時、心不顛倒、卽得往生云云。つぎの文に、六方にをのをの恒河沙の佛ましまして、廣長舌相を出して、あまねく三千大千世界におほひて、誠實の事也信ぜよと證誠し給へり。これ又さきの弘願のゆへ也。又般舟三昧經にはく、跋陀和菩薩阿彌陀にとひていはく、いかなる法を行じてか、かのくにゝむまるべきと、阿彌陀ほとけの給はく、わがくにに來生せんとおもはんものは

つねに我名を念じてやすむことなかれ、かくのごとくして、わかくに、來生する事をうとの給へり  
これ又弘願のむねを、ほとけみづからの給へり。又五臺山の大聖竹林寺の記には、法照禪師、  
清涼山にのぼりて大聖竹林寺にいたる。こゝに二人の童子あり、一人をば善財といひ、一人をば難  
陀といふ、この二人の童子法照禪師をみちびきて寺のうちにいれて、漸々に講堂にいたりてみれば  
普賢菩薩、無數の眷屬に圍繞せられて座し給へり。文殊師利は一萬の菩薩に圍繞せられて座し給へ  
り。法照禮してとひたてまつりていはく、末法の凡夫はいづれの法をか修すべき。文殊師利こたへ  
ての給はく、なんぢすでに念佛せよ、いままさしくこれ時也と。法照又とひて申さく、まさになづ  
れをか念すべきと。文殊又のたまはく、この世界をすぎて、西方に阿彌陀佛まします、かのほとけ  
まさに願ふかかります、なんぢまさに念すべしと。大聖文殊、法照禪師にまのあたりの給ひし事  
也。すべてひろくこれをいへば、諸教にあまねく修せしめたる法門也、つぶさにあぐるにいとま  
あらず、しかるをこのごろ念佛のよにひろまりたるによりて、佛法うせなんとすと。諸宗の學者難破  
をいたすによりて、人おほく念佛の行を廢すときこゆ、いまだ心えずはんべり。佛法はこれ萬年也  
うしなはんとおもふとも、佛法擁護の諸天善神まもり給ゆへに人のちからにてはからふべからず。  
かの守屋の大臣が佛法を破滅せんとせしかども、法命いまだつきずして、いまにつたはるがごとし  
いはんや無智の道俗、在家の男女のちからにて、念佛を行ずるによりて、法相三論も隱没し、天台

華嚴も廢する事、なしかはあるべき。念佛を行ぜずしてゐたらば、このともがらは一宗をも興隆すべきかは、たゞいたづらに念佛の業を廢したるばかりにて、またくそれ諸宗のをぎろをもさくるべからず。しかればこれおほきなる損にあらずや、諸宗のふかきながれをくむ、南都北京の學者、兩部の大法をつたへたる、本寺本山の禪徒百千萬の念佛世にひるまりたりとも、本宗をあらたむべきにあらず、又佛法うせなんとすとて念佛を廢せば、念佛はこれ佛法にあらずや。たとへば虎狼の害をにげて、師子にむかひてはしらむがごとし。餘行を謗じ念佛を謗せん、おなじくこれ逆罪也。とらおほかみに害せられん、師子に害せられむ、ともにかならず死すべし、これをも謗すべからず、かれをもそねむべからず、ともにみな佛法也。たがひに偏執することなかれ。像法決疑經にいはいく三學の行人たがひに毀謗して、地獄にいること、ときやのごとしといへり。又大論にいはいく、自法愛染するゆへに、他人の法を毀訾すれば持戒の行人も、地獄の苦をまぬかれずといへり。又善導和尚の給はく

世尊說法時將了 愍懃付屬彌陀名

五濁増時多疑謗 道俗相簡不用聞

見有修行起瞋毒 方便破壞競生怨

如此生盲闍提輩 毀滅頓教永沈淪

超過大地微塵劫 未可得離三途身

といへり。念佛を修せんものは餘行をそしるべからず、そしらばすなはち彌陀の悲願にそむくべきゆへ也。餘行を修せん者も念佛をそしるべからず、又諸佛の本誓にたがふがゆへなり。しかるをいま眞言止觀の窓のまへには、念佛の行をそしる、一向專念の床のうゑには、諸餘の行をそしる。ともに我々偏執の心をもて義理をたて、たがひにをの是非のおもひに任して會釋をなす、あにこれ正義にかなはむや、みなともに佛意にそむけり。つぎに又難者のいはく、今來の念佛者わたくしの義をたて、惡業をおそるゝは彌陀の本願を信せざる也、數遍をかざるは一念の往生をうたがふ也。行業をいへば一念十念にたりぬべし、かるがゆへに數遍をつむべからず、惡業をいへば四重五逆をむまるゝ故に諸惡をはゝかるべからずといへり。この義またくしかるべからず。釋尊の說法にも見えず、善導の釋にもあらず、もしかくのごとく存ぜんものは惣じては諸佛の御心にたがふべし。別しては彌陀の本願にかなふべからず、その五逆十惡の衆生の一念十念によりて、かのくに往生すといふはこれ觀經のあきらかなる文也。たゞし五逆をつくりて十念をとなへよ、十惡をおかして一念を申せとすゝむるにあらず。それ十重をたちて十念をとなへよ、四十八輕をまもりて四十八願をたのむは心にふかくこひねがふところ也。おほよそいづれの行をもはらにすとも、心に戒行をたちて、浮囊をまもるがごとくにし、身の威儀に油鉢をかたふけずば、行として成就せずと

いふ事なし、願として圓滿せずといふことなし。しかるをわれらあるいは四重ををかし、あるひは十悪を行ず。かれもおかしこれも行ず、一人としてまことの戒行を具したる者はなし。諸惡莫作、諸善奉行は、三世の諸佛の通戒也。善を修するものは善趣の報を得、惡を行ずる者は惡道の果を感ずといふ。この因果の道理を、きけどもきかざるがごとし、はじめていふにあたはず。しかれども分にしたがひて惡業をとゞめよ。緣にふれて念佛を行じ、往生を期すべし。惡人をすてられずば、善人をむぞきはむ、つみをおそるゝは本願をうたがふと、この宗にまったく存せざるところ也。つぎに一念十念によりて、かのくに往生すといふは、釋尊の金言也、觀經のあきらかなる文也。善導和尚の釋にいはいく下至十聲等、定得往生、乃至一念無有疑心、故名深心といへり。又いはく行住座臥、不問時節久近、念々不捨者是名正定之業、順彼佛願故といへり。しかれば信を一念にむまるととりて、行をば一形はげむべしとすゝむる也。彌陀の本願を信じて念佛の功をつもり、運心としひさしくば、なんぞ願力を信ぜずといふべきや。すべて薄地の凡夫、彌陀の淨土にむまれん事、他力にあらざらばみな道たえたるべき事也。おほよそ十方世界の諸佛善逝、穢土の衆生を引導せんがために、穢土にして正覺をとなへ、淨土にして正覺をなりて、しかも穢土の衆生を引導せんといふ願をたて給へり。その穢土にして正覺をとなふれば、隨類應同の相をしめすがゆへに、いのちながからずしてとく涅槃にいりぬれば、報佛報土にして地上の大菩薩の所居也。未斷惑の凡夫は、たゞち

にむまるゝ事あたはず。しかるをいま淨土を莊嚴し、佛道を修行するは、凡位はもと造惡不善のともがら也。輪轉きはまりなからんを引導し、破戒淺智のやからの、出難の期なからんを、あはれまんがため也。もしその三賢を證じ、十地をきわめたる、久行の聖人深位の菩薩の六度萬行を具足し諸波羅密を修行してむまるゝといはゞ、これ大悲の本意にあらず。この修因感果のことほりを、大慈大悲の御心のうちに思惟して、年序をそらにつもりて星霜五劫にをよべり。しかるに善巧方便をめぐらして思惟し給へり。しかもわれ別願をもて淨土に居して、薄地底下の衆生を引導すべし。その衆生の業力によりてむまるゝといはゞかたかるべし。われすべからくは衆生のために、永劫の修行をゝくり、僧祇の苦行をめぐらして、萬行萬善の果徳圓滿し、自覺覺他の覺行窮滿して、その成就せんところの、萬徳無漏の一切の功徳をもて、わが名號として衆生にとなへしめん。衆生もしこれにをいて信をいたして稱念せば、わが願にこたへてむまるゝ事をうべし、名號をとなへばむまるべき別願をおこして、その願成就せば佛になるべきがゆへ也。この願もし満足せずは、永劫をふともわれ正覺をとらじ。たゞし未來惡世の衆生憍慢懈怠にして、これにをいて、信をおこす事かたかるべし。一佛二佛のとき給はんに、おそらくはうたがふ心をなさむ事を、ねがはくはわれ十方の諸佛にことごとくこの願を稱揚せられたてまつらんとちかひて、第十七の願に、設我得佛、十方世界無量諸佛、不悉咨嗟、稱我名者、不取正覺とたて給ひて、つぎに第十八願の、乃至十念、若不生者

不取正覺とたて給へり。そのむね無量の諸佛に稱揚せられたてまつらんとたて給へり、願成就するゆへに、六方にをの／＼恒河沙のほとけましまして、廣長の舌相を出して、あまねく三千大千世界におほひて、みなおなじくこの事をまことなりと證誠し給へり。善導これを釋しての給はく、もしこの證によりてむまるゝ事を得ずば、六方の諸佛ののべ給えるした口よりいでをはりてのち、つるに口にかえりいらずして、自然にやぶれみだれんとの給へり。これを信ぜらん者は、すなはち十方恒沙の諸佛の御したをやぶる也。よくよく信ずべし。一佛二佛の御したをやぶらんだにもあり、いかにいはんや十方恒沙の諸佛をや。大地微塵劫を超過すとも、いまだ三途の身をはなるべからずとの給へり。彌陀の四十八願といは、無三惡趣、乃至念佛往生等の願これ也。すべて四十八願のなかに、いづれの願か、一として成就し給はぬ願あるべき。願ごとに不取正覺とちかひて、いますでに正覺をなり給へる故也。然を無三惡趣の願を信ぜずして、かの國に惡道ありといふ者はなし。不更惡趣の願を信ぜずして、かのくにの衆生のちをはりてのち、又惡道にかへるといふ者はなし。悉皆金色の願を信ぜずして、かのくにの衆生は、金色なるもあり、白色なるもありといふ者はなし。無有好醜の願を信ぜずして、かのくにの衆生は、かたちよきもあり、わるきもありといふ者はなし。乃至天眼天耳、光明壽命、をよび得三法忍の願にいたるまで、これにをいてうたがひをなす者はいまだはんべらず。たと第十八の願にをいて、念佛往生の願ひとつを信ぜざる也、この願をうたがは

ば、餘の願をも信ずべからず、餘の願を信ぜば、この一願をうたがふべけんや。法藏比丘、いまだほとけになり給はずといはゞ、これ謗法になりなむかし。もし又なり給へりといはゞ、いかゞこの願をうたがふべきや。四十八願の彌陀善逝は、正覺を十劫にとなへ給へり、六方恒沙の諸佛如來は舌相を三千世界にのべ給へり、たれかこれを信ぜざるべきや。善導この信を釋しての給はく、化佛報佛、若一若多、乃至十方に遍して、ひかりをかゞやかし、したをはきて、あまねく十方におほひて、この事虛妄なりとの給はんにも、畢竟して一念疑殆の心をおこさじとの給へり。しかるをいま行者たち、異學異見のためにたやすくこれをやぶらる。いかにいはんや報佛化佛のの給はんをや。そもくこの行をすてば、いづれのをこなひにか、おもむき給べき、智惠なければ聖教をひらくにまなこくらし、財寶なければ布施を行するにちからなし。むかし波羅奈國に太子ありき、大施太子と申き。貧人をあはれみて、くらをひらきて、もろくのたからを出してあたへ給に、たからはつくれども、まづしき者はつくべからず。こゝに太子うみのなかに如意寶珠ありときく、海にゆきてもとめて、まづしきみにたからをあたへんとちかひて、龍宮にゆき給に、龍王おどろきあやしみておぼろげの人にはあらずといひて、みづからむかひて、たからのゆかにすへたてまつり、はるかにきたり給へる心ざし、何事をもとめ給そとへば、太子の給はく、閻浮提の人、まづしくてくるしむ事おほし、王のもとりのなかの、寶珠をこはんがためにきたる也との給へば、王のいはく、し

からば七日ここにとゞまりて、わが供養をうけ給へ、そののちたからをたてまつらんといふ。太子七日をへてたまをえ給ぬ、龍神そこよりをくりたてまつる、すなはち本國のきしにいたりぬ。こゝにもろくの龍神なげきていはくこのたまは海中のたから也。なをとり返してぞ、よかるべきとさだむ、海神人になりて、太子の御まへにきたりていはく、君世にまれなるたまをえ給へり、とくわれにみせ給へといふ、太子、これをみせ給に、うばひとりてうみへいりぬ。太子なげきてちかひていはく、なむぢもしたまを返さずんば、うみをくみほさむといふ。海神いでゝわらひていはく、なんぢはもとをろかなる人かな、そらの日をばおとしもしてん、はやきせをばとゞめもしてん、うみのみづをばつくすべからずといふ。太子の給はく恩愛のたへがたきをも、なをとゞめむとおもふ生死のつくしがたきをも、なをつくさむと思、いはんやうみの水おほしといふともかぎりあり、もしこの世にくみつくさずば、世々をへてもかならずくみつくさんとちかひて貝のからをとりて、うみの水をくむ、ちかひの心まことなるがゆへに、もろくの天人ことごとくきたりて、あまのはごろものそでにつつみて、鐵圍山のほかにくみをく太子一度二度かいのからをもてくみ給に、海水十分が八分はうせぬ。龍王さわぎあはて、わがすみかむなしくなりなんとすとわびて、たまを返したてまつる。太子これをとりてみやこに歸て、もろもろのたからをふらして、閻浮提のうちいたからをふらさざるところなし、くるしきをしのぎて退せざりしかば、これを精進波羅密といふ。むかし

の太子は萬里のなみをしのぎて、龍王の如意寶珠を得給へり。いまのわれらは二河の水火をわけて彌陀本願の寶珠を得たり。かれは龍神のくみしがためにうばはれ、これは異學異見のためにうばはる。かれは貝のからをもて大海をくみしかば、六欲四禪の諸天來ておなじくくみき。これは信の手をもて疑謗の難をくまば、六方恒沙の諸佛きたりてくみし給べし。かれは大海の水やうやくつきしかば、龍宮のいらかあらはれて、如意寶珠を返しとりき。これは疑難のなみことごとくつきなば謗家のいらかあらはれて、本願の寶珠を返しとるべし。かれは返し取て、閻浮提にして、貧窮のたみをあはれみ、これは返しとりて、極樂にむまれて、薄地のともがらをみちびくべし。ねがはくはもろもろの行者、彌陀本願の寶珠を、いまだうばひとられざらん者はふかく信心のそこにおさめよ。もしすなはちとられたらんものは、すみやかに深信の手をもて、疑謗のなみをくめ、たからをすて、手をむなしくして歸事なかれ。いかなる彌陀か、十念の悲願をおこして、十方の衆生を攝取し給ふ。いかなるわれらか、六字の名號をとなへて、三輩の往生をとげざらん。永劫の修行は、これたれがためぞ、功を未來の衆生にゆづり給ふ、超世の悲願は、又なんの料ぞ、心ざしを末法のわれらにをくり給ふ。われらもし往生とぐべからずば、ほとけあに正覺をなり給べしや、われら又往生をとげましや、われらが往生はほとけの正覺により、ほとけの正覺はわれらが往生による、若不生者のちかひ、これをもてしり、不取正覺のことば、かぎりあるをや 云

## 圖 畫

## 法然上人行狀畫圖 第三十三

かくて南都北嶺の訴訟次第にとゞまり、專修念佛の興行無爲にすぐるところに、翌年建永元年十月九日、後鳥羽院、熊野山の臨幸ありき。そのころ上人の門徒、住蓮安樂等のともがら、東山鹿谷にして別時念佛をはじめ、六時禮讃をつとむ、さだまれるふし拍子なく、をの／＼哀歎悲喜の音曲をなすさま、めづらしくたうとかりければ、聽衆おほくあつまりて、發心する人もあまたきこえしなかに、御所の御留守の女房出家の事ありける程に 還幸ののち、あしさまに讒し申人やありけん。おほきに逆鱗ありて、翌年建永二年二月九日、住蓮安樂を庭上にめされて、罪科せらるゝとき、安樂、見有修行起瞋毒、方便破壊競生怨、如此生盲闍提輩、毀滅頓教永沈淪、超過大地微塵劫未可得離三途身、の文を誦しけるに、逆鱗いよいよさかりにして、官人秀能におほせて、六條川原にして安樂を死罪におこなはるゝ時、奉行の官人にいとまをこひ、ひとり日没の禮讃を行するに、紫雲そらにみちければ、諸人あやしみをなすところに、安樂申けるは、念佛數百遍のゝち、十念を唱へんをまちてきるべし。合掌みだれずして、右にふさは、本意をとげぬと知べしといひて、高聲念佛數百反のゝち、十念みちける時きられけるに、いひつるにたがはず、合掌みだれずして右にふ

しにけり。見聞の諸人隨喜の涙をながし、念佛に歸する人おほかりけり

第一 圖

罪惡生死のたぐひ、愚痴暗鈍のともがら、しかしながら上人の化導によりて、ひとへに彌陀の本願をたのむところに、天魔やきをひけん、安樂死刑にをよびてのちも逆鱗なをやまずして、かさねて弟子のとがを師匠にをよぼされ、度縁をめし、俗名をくだされて、遠流の科にさだめらる。藤井元彦云かの 宣下の狀云

太政官符 土左國司

流人藤井の元彦

使左衛門の府生清原の武次 從二人

門部二人 從各一人

右流人元彦を領送のために、くだんらの人をさして發遣くだむのごとし。國よろしく承知して、例によりてこれをおこなへ。路次の國、またよろしく食濟具馬三疋をたまふべし。符到奉行

建永二年二月二十八日 右大史中原朝臣判

左少辨藤原朝臣

追捕の檢非違使は、宗府生久經、領送使は、左衛門の府生武次なり。上人の勸化をあふぐ貴賤、往

生の素懷をのぞむ道俗、なげきかなしむ事、たとへをとるにもなし

## 第二 圖

門弟等なげきあへるなかに、法蓮房申されけるは、住蓮安樂はすでに罪科せられぬ。上人の流罪はたゞ一向專修興行の故云云、しかるに老邁の御身、遠遠の海波におもむきましますば、御命安全ならじ、我等恩顔を拜し嚴旨をうけ給ことあるべからず。又師匠流刑の罪にふしたまはゞ、のこりとどまる門弟面目あらむや。かつは 勅命なり、一向專修の興行をとゞむべきよしを 奏したまひて内々御化導有べくや侍らんと申されけるに、一座の門弟おほくこの義に同じけるに、上人の給はく流刑さらにうらみとすべからず、そのゆへは、齡すでに八旬にせまりぬ、たとひ師弟おなじみやことに住すとも、娑婆の離別ちかきにあるべし。たとひ山海をへだつとも、淨土の再會なむぞうたがはん。又いとふといへども存するは人の身なり。おしむといへども死するは人のいのちなり。なんぞかならずしもところによらんや。しかのみならず念佛の興行、洛陽にしてとしひさし、邊鄙におもむきて、田夫野人をすゝめん事季來の本意なり。しかれども時いたらずして、素意いまだはたさずいま事の縁によりて、季來の本意をとげん事、すこぶる朝恩ともいふべし。この法の弘通は、人たとゝめむとすとも、法さらにとゞまるべからず。諸佛濟度のちかひふかく、冥衆護持の約ねんごろなり。しかればなんぞ世間の機嫌をはゞかりて經釋の素意をかくすべきや。たゞしいたむところは

源空が興する淨土の法門は、濁世末代の衆生の決定出離の要道なるがゆへに、常隨守護の神祇冥道さだめて無運の障難をとがめ給はむか、命あらむともから因果のむなしからざる事をおもひあはずべし。因縁つきずば、なんぞ又今生の再會なからむやとぞおほせられける。また一人の弟子に對して、一向專修の義をのべ給に、御弟子西阿彌陀佛推參して、かくのごとくの御義ゆめく有べからず候、をのく御返事を申給べからずと申ければ、上人の給はく、汝經釋の文をみずやと、西阿申さく、經釋の文はしかりといへども、世間の機嫌を存するばかりなりと。上人又の給はく、われたとひ死刑にをこなはるとも、この事ははずばあるべからずと、至誠のいろもとも切なり。見たてまつる人、みな涙をぞおとしける

### 第三 圖

官人小松谷の御房にむかひて、いそぎ配所へうつり給べきよしを賣申ければ、ついにみやこをいでたまふ。月輪殿御餘波ををしみて、法性寺の小御堂に一夜とどめたてまつられけり。禪定殿下は忠仁公十一代の後胤、累代攝録の臣として、朝家の憲政、詩歌の才幹、君これをゆるし、世これをあふぎたてまつる。榮花重職の豪家にあそび給といへども、ひとへに順次往生の御のぞみふかゝりけり、御出家の後は、數年上人を屈請して、出離の要道をたづね淨土の法門を談じたまふ。上人の頭光をまのあたり拜見し給しのちは、一向に生身の佛のおもひをなし給き。しかるをはからざるに

勅勘をかふりたまふよしを、きこしめすより、御なげきをざりならず。去季建永元年三月七日、後の京極殿、にはかにかくれさせ給き。御としわづかに三十八にぞなり給ける。これにつきていよいよ今生の事をおぼしめして、ひとすぢに後生菩提の御いとなみなり。上人につねに御對面ありて、生死無常のことはりをもきこしめされ、往生淨土の御つとめ功をかさねつゝ、聊御心をもなぐさめ給けるに、上人左遷の罪にあたり給ぬる事、いかなる宿業にて、かゝることを見きくらんとて、勅勘をかふりたまへる上人は御歎いとなかりけるに、禪閣の御悲あさからざりけり、見たてまつる人も、心のをきどころなき程なり。この事を申とゞめざる事、いきて世にあるかひなけれども御勘氣のはしめなり、左右なく申さんもその恐ふかし。連々に御氣色をうかがひて、勅免を申をこなふべしとぞ、おほせられける

## 第四 圖

## 法然上人行狀繪圖 第三十四

三月十六日に、花洛をいで、夷境におもむき給に、信濃國の御家人、角張の成阿彌陀佛、力者の棟梁として最後の御ともなりとて御輿をかく。おなじさまにしたがひたてまつる僧六十餘人なり。をよそ上人の一期の威儀は、馬車輿などにのり給はず、金剛草履にて歩行し給き。しかれども老邁

のうへ、長途たやすからざるによりて乗輿ありけるにこそ。御なごりををしみ、前後左右にはしりたがふ人、幾千萬といふ事をしらず。貴賤のかなしむこゑちまたにみち、道俗のしたふなみだ地をうるをす。かれらをいさめ給けることばには、驛路はこれ大聖のゆく所なり。漢家には一行阿闍梨日域には役優婆塞、謫居は又權化のすむ所なり。震旦には白樂天、吾朝には菅丞相なり。在纏出纏みな火宅なり、眞諦俗諦しかしなから水驛なりとぞおほせられける。さて禪定殿下、土左國まではあまりにはるかなる程なり、わが知行の國なればとて讃岐國へぞうつしたてまつられける。御なごりやるかたなくおぼしめされけるにや、禪閣御消息を送られけるに

ふりすてゝゆくはわかれのはしなれど

ふみわたすべきことをしぞおもふ

と侍ければ、上人御返事

露の身はこゝかしこにてきえぬとも

こゝろはおなじ花のうてなぞ

## 第一 圖

鳥羽のみなみの門より、川船にのりてくだりたまふ

## 第二 圖

攝津國經の島につき給にけり。かのしまは、平相國、安元の寶曆に、一千部の法華經を石の面に書寫して、漫々たる波の底にしづむ、薛々たる魚鱗をすくはむがために、村里の男女、老少そのかずおほくあつまりて、上人に結縁したてまつりけり

## 第三圖

播磨國高砂の浦につき給に、人おほく結縁しけるなかに、七旬あまりの老翁、六十あまりの老女夫婦なりけるが申けるは、わが身はこの浦のあま人なり。おさなくよりすなどりを業とし、あしたゆふべに、いろくづの命をたちて、世をわたるはかりごとゝす。ものゝ命をころすものは、地獄におちてくるしみたえがたく侍なるに、いかがしてこれをまぬかれ侍るべき、たすけさせ給へとて、手をあはせてなきけり。上人あはれみて、汝がごとくなるものも、南無阿彌陀佛となふれば、佛の悲願に乗じて淨土に往生すべきむねねんごろにおしへ給ければ、二人ともに涙にむせびつゝよるこびけり。上人に仰を、うけたまはりてのちは、ひるは浦にいでて、手にすなどりする事やまざりけれども、口には名號をとなへ、よるは家にかへりて、二人ともにこゑをあげて終夜念佛する事、あたりの人もおどろくばかりなりけり。つるに臨終正念にして、往生をとげにけるよしつたへきゝ給て、機類萬品なれども、念佛すれば往生する現證なりとぞ、おほせられける

## 第四圖

同國室の泊につき給に、小船一艘ちかづきたる、これ遊女がふねなりけり。遊女申さく上人の御船のよしうけたまはりて推參し侍なり。世をわたる道まちくなり。いかなるつみありてか、かゝる身となり侍らむ。この罪業おもき身、いかにしてかのちの世たすかり候べきと申ければ、上人あはれみでの給はく、げにもさやうにて世をわたり給らん罪障まことにかろからざれば、酬報またはかりがたし、もしかゝらずして、世をわたり給ぬべきはかりごとあらば、すみやかにそのわざをすて給べし。もし餘のはかりごともなく、又身命をかへりみざるほどの道心いまだおこりたまはずばたゞそのまゝにて、もはら念佛すべし。彌陀如來は、さやうなる罪人のためにこそ、弘誓をもたてたまへる事にて侍れ、たゞふかく本願をたのみて、あへて卑下する事なかれ、本願をたのみて念佛せば、往生うたがひあるまじきよし、ねんごろにをしへ給ければ、遊女隨喜の涙をながしけり。のちに上人の給けるは、この遊女信心堅固なり。さだめて往生をとぐべしと。歸洛のときこゝにてたづね給ければ、上人の御教訓をうけたまはりてのちは、このあたりちかき山里にすみて、一すぢに念佛し侍しが、いくほどなくて臨終正念にして往生をとげ侍きと、人申ければ、しつらんしつらんとぞおほせられける

第五圖

## 法然上人行狀繪圖 第三十五

三月廿六日、讃岐國塩飽の地頭、駿河權守高階保遠入道西忍が館につき給にけり。西忍去夜のゆめに、満月輪のひかり赫奕たる、たもとにやどると見て、あやしみおもひけるに、上人入御ありければ、この事なりけりと思ひあはせけり。藥湯をまふけ、美膳をとゝのへ、さまざまにもてなしたてまつる。上人、念佛往生の道こまかにさづけ給けり。なかにも不輕大士の、杖木瓦石をしのびて四衆の縁をむすび給ひしがごとく、いかなるはかり事をめぐらしても、人をすゝめて念佛せしめたまへ、あへて人のためには侍らぬぞと、かへすがへす附屬し給ければ、ふかくおほせのむねをまもるべきよしをぞ申ける。そののちは自行化他、念佛のほか他事なかりけり

## 第一 圖

讃岐國子松庄におちつき給にけり。當庄の内生福寺といふ寺に住して、無常のことほりをとき、念佛の行をすゝめ給ければ、當國近國の男女貴賤、化導にしたがふもの市のごとし、或は邪見放逸の事業をあらため、或は自力難行の執情をすてゝ、念佛に歸し往生をとぐるものおほかりけり。邊土の利益を思へば、朝恩なりとよろこび給けるも、まことにことはりにぞおぼえ侍る。かの寺の本尊、もとは阿彌陀の一尊にておはしましけるを、在國のあひだ、脇士をつくりはべられけるうち、

勢至をば上人みづからつくり給て、法然本地身、大勢至菩薩、爲度衆生故、顯置此道場、我每天影向、擁護歸依衆、必引導極樂。若我此願念、不令成就者、永不取正覺とぞかきをかれける。勢至の化身として、みづからその體をあらはしなりのり申されける。まことにいみじくたうとき事にてぞ侍ける

## 第二 圖

上人左遷ののち、月輪の禪閣、朝暮の御なげきあさからず、日來の御不食いよ／＼おもらせ給て大漸の期ちかづかせ給ふ。藤中納言光親卿をめして仰をかれけるは、法然上人年來歸依のいたり、さだめて存知あるらん。今度の勅勘を申ゆるさずして、謫所へうつられぬる事、いきて世にある甲斐なきに似たり。しかれども嚴旨ゆるからず、左右なく申さんことをそれおぼゆるゆへに、後日を期してすぐるところに、すでに終焉にのぞめり。今生のうらみこの事であり。我他界におもむくといふとも、連々に御氣色をうかゞひて恩免を申をこなはるべしと、かきくどき仰られければ、光親卿、仰のむね更に如在を存べからざるよし申て、涙をながされけり。同四月五日、御臨終正念にして、念佛數十遍、禪定にいるがごとくして、往生をとげさせ給ぬ。御とし五十八なり。上人左遷ののち、いく程なくてこの御事きこへけり。御あはれ、をしはかるべし。後の京極殿はさきだゝせ給ぬ。その御子東山の禪閣、家督にて御あとをうけつがせ給き。月輪殿御歸依の餘慶をうけ、おな

じく上人の勸化を御信仰ありけり。ことに六方恒沙の諸佛の證誠をたうとみて、阿彌陀經十萬卷、摺寫の大願をおこし、かた木を異朝にひらかせられて摺寫の弘通をひろくせらる。かの經おほく吾朝に流布せり。發願の志趣經の奥にのせらる。かの狀云、十萬の寫功によりて、萬徳の尊容を禮し彌陀の說法をきゝて普賢の願海にいり、隨類の形を化現して、舊土の徒を慈愍し、あまねく長夜のねふりをおどろかして、ひとしく覺悟の曉にいたらしめむ。衆生無始の身、宴坐たゞ眼にあり。塵點劫數の業こゝろをしづむるに念をいせず、哀哉この筆舌、はじめてこの言語をかたらむ事、ねがはくは紫金の毫光、白骨の微功をてらし給へとなり。于時文曆第二歳乙未仲春第二日、從一位藤原朝臣道家敬白云云。發願のむね自他をかね、異朝にをよぼして、その願をはたされける御こゝろざしまことにたうとくも侍かな

## 第三 圖

上人流刑のよし、遠近にきこえしかば、津戸三郎爲守ふかくこれをなげきて、遼遠のさかひなりといへども、武藏國より讚岐國へ書狀を進ずるとき上人の御返事云、七月十四日の御消息、八月廿一日見候ぬ。はるかかさかひにかやうに仰られて候御こゝろざし、申つくすべからず候。まことにしかるべき事にて、かやうに候、とかく申ばかりなく候、但今生の事はこれにつけてもわれも人もおもひしるべき事に候、いとひてもいとほむと思食べく候、けふあすともしり候はぬ身に、かゝる

めを見候、心うき事にて候へども、さればこそ穢土のならひにては候へ。たゞとくとく往生をせばやとこそ思候へ、たれもこれを、遺恨の事などはゆめにも思食べからず候。しかるべき身の宿報と申、又穢悪充滿のさかひこれにはじめぬ事にて候へば、なに事につけても、たゞいそぎいそぎ往生をしてむと思べきことに候云云。御ふみのおもむき、よにあはれにぞおぼえ侍る

#### 第四 圖

直聖房といふ僧ありき。上人の弟子となりて、一向専念の行を修す。あるとき熊野山へまいりたりけるに、上人の配流せられ給よしをきゝて、いそぎ下向せむとしけるに、にはかに重病をうけて下向かなはざりければ、ねんごろに權現にいのり申けるに、かの僧のゆめに、臨終すでにちかつけり、下向しかるべからずと、しめし給ひければ、法然上人の御事、あまりにおぼつかなく候へばはやく下向してうけたまはりたく候と申ければ、かの上人は勢至菩薩の化現なり。不審すべからずとかさねてしめしおほせらるとみて夢さめぬ、其後いくほどをへずして、臨終正念にして、往生をとげにけり

#### 第五 圖

上人在國のあひだ、國中靈驗の地、巡禮し給ふなかに、善通寺といふてらは、弘法大師、父のためにたてられたるてらなりけり。この寺の記文に、ひとたびもまうでなん人は、かならず一佛淨土

のともたるべしとあり。このたびのおもいでこの事なりとぞ、よろこび仰られける

## 第六圖

## 法然上人行狀畫圖 第卅六

月輪殿のおほせをかるゝ趣をもて、光親卿たびく申入らるといへども、叡慮なを心よからず。しかるに上皇御夢想の御事ありけるうへ、中山の相國頼實公 殿親の善知識たりし因縁をわすれず、上人流刑の事をなげきたまひて、念佛興行の事、さだめて佛意にそむかざらむか、門弟のあやまりをもちて、とがを師範にをよぼされ、罪科せらるゝ事冥鑑はかりがたきよししきりにいさめ申給ければ、おりしも最勝四天王院供養に、大赦ををこなはれけるに、その御沙汰のありて、同年十月二十改元五年十二月八日 勅免の 宣旨をくだされけり。かの狀云

太政官符 土左國司

流人藤井元彦

右正三位、行權中納言、兼右衛門督、藤原朝臣隆衡宣奉 勅、件の人は、二月二十八日事につみして、かの國に配流、しかるをおもふところあるによりて、ことにめしかへさしむ。但よろしく畿の内に居住して、洛中に往還する事なかるべし。者ていはは國よろしく承知して宣によりてこれをおこなへ

符到奉行

承元元年十二月八日

左大史小槻宿禰

權右中辨藤原朝臣

勅免のよし都鄙にきこへしかば、京都の門弟は再會をよろこび、邊鄙の士民は餘波をおしむ。よろこびとなげきと、あひなかばにぞ侍りける

第一 圖

上人勅免にあづかり給て、國をいでゝのぼり給ふに、攝津國押部といふ所に、しばし逗留したまふ。老少男女をすゝめて、念佛門にいれ給事、かずをしらざりけり

第二 圖

恩免ありといへども、なを洛中の往還をゆるされざりしかば、攝津國勝尾寺にしばらくすみたまふ。このてらは善仲善算の古跡、勝如上人往生の地なり。上人西の谷に草庵をむすびてすみ給けり。おりふし恒例の引聲の念佛ありけるに、僧衆の法服破壊してみぐるしかりければ、弟子法蓮房をもて、京都の檀那におほせられて、裝束十五具調して施入せらる。寺僧よろこびて臨時に七日の念佛を勤行しけり。かの庵室いまにあり。その室にいればおのづから異香をかぐことなども侍とて、あゆみをはこぶ人おほくぞ侍るなる

## 第三 圖

當寺に一切經ましまさるよしをき、給て、上人所持の一切經論一藏を、施入し給ければ、住侶隨喜悅豫して、老若七十餘人、はなをちらし香をたき幡をさゝげ蓋をさして、むかへたてまつる。

この經論開題供養のために、聖覺法印を招請せられければ、貴命をうけ、再會をよろこびて、唱導をつとめられけり。かの表白云、夫八萬の法藏は、八萬の衆類をみちびき、一實眞如は、一向專稱をあらはす。かの大聖世尊の自説して南無佛と唱へたまひし、その名をあらはさざれども、意は彌陀の名號なり。又上宮太子の誕生して南無佛と唱たまひし、その體をさざざれども、こゝろざしは極樂の教主なり。しかるに慈覺大師の念佛傳燈は、經文をひきて寶池の波に和すれども、劣機の行にあたはず。諸師所立の念佛三昧は、佛境を縁じて心地の塵をはらへども、下根のつとめにあたはず、惠心僧都の要集には、三道をつくりて一心のものはまよひぬべし。永觀律師の十因には、十門をひらきて一篇にはつかず、空也上人の高聲念佛は、聞名の益をあまねくすれども、名號の徳をあらはさず。良忍上人の融通念佛は、神祇冥道をすゝむれども、凡夫のゝぞみはうとし。爰我大師法主上人、行年四十三より念佛門にいりてあまねくすゝめ、易行道をしめしてひろくおしへたまふに、天子のいつくしき、玉の冠を西にかたふけ、月卿のかしこき、金の笏を東にたゞしくす。皇后のこひたる韋提夫人のあとををひ、傾城のことんなき五百士女の上ををひをまなぶ。しかるあひだ

とめるはおごりでもてあそび、まづしきはなげきてともとす。農夫がすきをふむ、念佛をもて田うたとし、織女がいとをひく、念佛をもてたてぬきとす。鈴をならす驛路には、念佛をとなへて鳥をとり、ふなばたをたゞく海上には、念佛を唱へて魚をつる。雪月花を見る人は、西樓に目をかけ、琴詩酒をもてあそぶともからは、西の枝の梨子ををる。これみな彌陀をあがめざるをば瓊瑾とし、珠數をくらざるをば耻辱とす。こゝをもて花族英才なりといへども、念佛せざるをばおとしめ、乞囚非人なりといへども念佛するをばもてなす。故に八功德水の波のうへには、念佛のはちす池にみち、三尊來迎の掌のうちには紫臺をさしをくにひまなし。しかれば我等が念佛せざるは、かの池の荒癡なり。我等が欣求せざるは、その國の衰弊なり。國のにぎはひ佛のたのしみ、念佛をもてもとし、人のねがひわがのぞみ、念佛をもてさきとす。仍當座の愚昧、公請につかへてかへる夜は、念佛をとなへて枕とし、私宅をいでゝわしる日は、極樂を念じて車をはす。これ上人の教誡なり。過去の宿善にあらずやとて、鼻をかみ壁をむせび、舌をまきてとゞこほるあひだ、法主なみだをながし、聽衆そでをしぼらすといふことなし

#### 第 四 圖

勝尾寺の隠居もすでに四箇年になりぬ。花洛の往還なをゆるされざりしに、建曆元年夏のころ、上皇八幡宮に御幸ありしとき、一人の倡妓横云、星災に親疎なく、只善人にくみす。王者の徳失に

よりにて國土の治亂あり。われ南海の邊邑に訪へき事ありて日々に往反す。苦哉苦哉、近代 君くら  
く臣まがりて、政にごり人うれふ。王城の鎮守、百王の宗廟、連々に評定の事あり。天下逆亂し率  
士荒廢せん。さだめて後悔あらむ歟と。還御の後近臣等 奏申さく、倡妓が託宣たゞ事にあらざら  
んか、おほよそ妖は徳にかたず。仁よく邪を却く。國土をおさむるはかりごと、徳政にはしかず。  
妖孽をしりぞくる術、佛法に歸するにあり。專修念佛停廢、法然房配流、尤宥御計あるべきをやと  
勅答あきらかならざるに、同年七月のころ 上皇御夢想の御事ましましき。蓮花王院に御參ありけ  
るに、衲衣を着せる高僧ちかづき參して 奏云、法然房は 故法皇ならびに高倉の 先帝の圓戒の  
御師範なり。徳賢聖にひとしく、益當今にあまねく 君大聖の權化をもて還俗配流の罪に處す。咎  
五逆におなじ苦報おそれざらむやと。この事おどろきおぼしめされて、藤中納言光親卿に、ひそか  
に御夢想の次第を仰下さる。彼卿かりをえて、はやくこの上人の花洛の往還をゆるさるべきむね、  
頻に 奏申ければ、同十一月十七日、彼卿の奉行として、花洛に還歸あるべきよし、烏頭變毛の  
宣下をかうふり給ぬ。則同廿日上人歸洛し給ければ、一山徳をしたひ、満寺なごりをおしみて、萬  
仞の霞よりいで、九重の雲にぞをくりたてまつりける

其後いくばくの歳月をへず、わづかに十箇年の間に、承久の逆亂おこりて、天下のみだれにをよ  
びし、倡妓が託宣いま思あはせられ侍り。又上人左遷の時、門弟等歎かなしみければ、源空が興す

る淨土の法門は、濁世末代の出要なり。釋尊に特留此經のちかひふかく、諸佛に攝受護念のちからおほきにましませば、この法の弘通は人はとゞめむとすとも、法さらにとゞまるべからず。但いたむところは、念佛守護の神祇冥道、さだめて無道の障礙をとがめ給はんか。のちにかならずおもひあはすべしとの給ける事、かの託宣にたがはず、まことに不思議にぞ覺侍る

#### 第五 圖

慈鎮和尚の御沙汰として大谷の禪房に居住せしめたまふ。むかし釋尊上天の雲よりくだり給しかば、人天大會まづ拜見たてまつらむ事をあらそひき。いま上人南海の波をさかのぼり給へば、道俗男女さきにお供養をのべん事をいとなむ。群參のともがら、其夜のうちに一千餘人ときこえき。幽閑の地をしめ給といへども、日々參詣の人連綿としてたへざりけり

#### 第六 圖

### 法然上人行狀繪圖 第卅七

建曆二年正月二日より、上人日來不食の所勞増氣し給へり。すべてこの三四年よりこのかたは、耳目朦昧にして色を見、聲をき、給事ともに分明ならず。しかるをいま大漸の期ちかつきて、二根明利なる事むかしにたがはず。みる人隨喜し不思議のおもひをなす。二日以後は、更に餘言をまじ

へず。ひとへに往生の事を談じ、高聲の念佛たへずして、睡眠の時にも舌口とこしなへにうごく。同三日、ある弟子、今度の御往生は、決定歎とたづね申に、われもと極樂にありし身なれば、さだめてかへりゆくべしとのたまふ。又法蓮房申さく、古來の先徳みなその遺跡あり。しかるにいま精舎一字も建立なし。御入滅の後、いづくをもてか御遺跡とすべきやと。上人答給はく、あとを一廟にしむれば遺法あまねからず。予が遺跡は諸州に遍満すべし。ゆへいかむとなれば、念佛の興行は愚老一期の勸化なり。されば念佛を修せんところは、貴賤を論ぜず、海人漁人がとまやまでも、みなこれ予が遺跡なるべしとぞおほせられける

## 第一 圖

十一日の辰時に、上人をき居給て、高聲念佛し給。きく人みな涙をながす。弟子等につげてのたまはく、高聲に念佛すべし、彌陀佛のきたり給へるなり。このみなをとなふれば、一人としても往生せずといふ事なすとて、念佛の功德をほめ給ことあだかもむかしのごとし。觀音勢至菩薩聖衆現じてまします。おがみたてまつるやとの給へば、弟子等おがみたてまつらずと申。これをき、給ていよく念佛すべしとすゝめ給

## 第二 圖

同日の巳時に、弟子等三尺の彌陀の像をむかへたてまつりて、病床のみぎにたてまつりて、

この佛おがみましますやと申に、上人ゆびにてそらをさして、このほとけのほかにもたまたま佛ましますおがむやいなやとおほせられて、すなはちかたりての給はく、おほよそこの十餘年よりこのかた、念佛功つもりて、極樂の莊嚴をよび佛菩薩の眞身をおがみたてまつる事つねの事なり。しかれどもとしごろは秘していはず。いま最後にのぞめり、かるがゆへにしめすところなりと。また弟子等、佛の御手に五色のいとをつけて、とりましますとすゝめ申せば、上人のたまはく、かやうの事はこれつねの人の儀式なり。わが身にをきては、いまだかならずしもしからずとて、ついにとり給はず

### 第三 圖

廿日の巳時に、坊のうへに紫雲そびく。中に圓形の雲あり。その色五色にして圖繪の佛の圓光のごとし。路次往反の人處々にしてこれを見る。弟子等申さく、このうへに紫雲あり。御往生のちかづき給へるか。上人の給はく、あはれなるかなや、わが往生は一切衆生のためなり。念佛の信をとらしめむがために瑞相現するなりと。又おなじき日の未の時にいたりて、空をみあげて、目しばらくもまじろぎたまはざる事五六反ばかりなり。看病の人々あやしみて、佛の來給へるかとたづね申せば、然なりとこたえ給。又廿四日の午時に、紫雲おほきにたなびく。西山の水の尾の峰に、すみやくともがら、十餘人これをみて來てつけ申。廣隆寺より下向しける禪尼も、途中にしてこれを見て、たづねきたりてこのよしを申す、見聞の諸人隨喜せずといふ事なし

## 第四 圖

廿三日よりは、上人の御念佛あるひは半時、あるひは一時、高聲念佛不退なり。廿四日の酉尅より、廿五日の巳時にいたるまでは、高聲體をせめて無間なり。弟子五六人、かはるがはる助音するに、助音は窮屈すといへども、老邁病惱の身をこたり給はず、未曾有の事なり。群集の道俗、感涙をもよをさずといふ事なし。二十五日の午尅よりは、念佛の御こえやうやくかすかにして、高聲はときくまじはる。まさしく臨終にのぞみ給とき、慈覺大師の九條の袈裟をかけ、頭北面西にして光明遍照、十方世界、念佛衆生、攝取不捨の文をとなへて、ねぶるがごとくして息たへたまひぬ。音聲とゞまりてのち、なを唇舌をうごかし給事十餘反ばかりなり。面色ことにあざやかに、形容をゆるに似たり。建曆二年正月廿五日午の正中なり。春秋八十にみち給。釋尊の入滅におなじ。壽算のひとしきのみにあらず。支干又ともに壬申なり。豈奇特にあらずや。惠燈すでにきへ、佛日また没しぬ。貴賤の哀傷する事、考妣を喪するがごとし

## 第五 圖

武藏の御家人、桑原左衛門入道不知實名と申けるもの、上人の化導をつたへきゝて、吉水の御房へたづねまいりて、念佛往生の道をしへられたてまつりてのちは但信稱名の行者となりければ、歸國のおもひをやめ、祇園の西の大門の北のつらに居をしめて、つねに上人の禪室に參じて不審を決

し、念佛をこたりなかりけるが、無始よりこのかた、常没流轉して、出離その期をしらぬ身の、忽に他力に乗じて往生をとげ、ながく生死のきづなをきらむ事ひとへにこれ上人御教誡のゆへなりとて、報恩のために眞影をうつしとゞめたてまつりけり。そのこゝろざしを感じて、上人みづからこれを開眼したまふ。上人御往生の後は、ひとへに生身のおもひをなして朝夕に歸依渴仰す。かの入道ついに種々の奇瑞をあらはし、往生の素懷をとげにけり。年來同宿の尼本國へかへりくだるとき件の眞影を知恩院へ送たてまつる。當時御影堂におはします木像これなり

## 第六圖

### 法然上人行狀畫圖 第卅八

參議兼隆卿、七八年のさきにゆめみらく、人ありておほきなる雙紙を披見す。これを見れば、諸人往生をしるせり。もし法然上人の往生をしるところやあると、みもてゆくに、はるかのおくに上人臨終の時は、光明遍照、十方世界、念佛衆生、攝取不捨の文を誦して、往生し給べしとしるせり。ゆめさめてのち人にかたらず。いまの往生の相に符合のあひだ、信仰のよし申をくる。又上人往生の前後に、諸人の瑞夢これおほし。四條京極の薄師眞清は、正月十九日の夜ゆめに、東山の法然上人の禪房のうへに、紫雲そびけり。人ありてこれは往生の雲なりといふと見る。次の日巳時に

紫雲かの坊のうへにおほへり。處々にこれを見る、ゆめと符合す。弟子念阿彌陀佛は、同廿三日の夜、上人往生の紫雲、ならびにしろきひかり虚空にみち、異香をかぐと見る。三條小川の、倍從信賢が後家の養女、ならびに仁和寺の、比丘尼西妙は廿四日の夜、明日午時に往生し給べしとみて、おどろききたりて終焉にあふ。花菫の准後の侍女、參河局は廿四日の夜のゆめに、上人の住房を見れば、四方に錦の帳をたれたり。色々あざやかにして、けぶりまたみちみり。よく／＼これを見れば、けぶりにはあらず、すなはち紫雲なり。上人すでに往生し給へるかとおぼえてさめぬ。花山院の右大臣家の青侍江内、ならびに八幡の住人、右馬允時廣が子息金剛丸は、同夜に上人往生の儀をみて、廿五日の早旦に人々にかたる。天王寺の松殿法印辨尊は廿五日午尅に、脇息によりかゝりて休息し給へるゆめに、上人往生の時、車の輪のごとくなる、八輻輪の八方のさきごとに、雑色の幡をかけて、東より西へゆくに、金色のみかり四方をてらし、天地にみち／＼て、日光映蔽せらるゝと見たまふ。一切經の谷の袈裟王丸は、廿五日の夜、童子玉の幡をさして、千萬の僧衆香爐をとり上人を圍遶して、西にゆき給とみる。門弟隆寛律師は、初七日にあたりて、一晝夜の念佛をつとむるに、一人の僧きたりて、上人は、や往生傳にいり給へりとなつくとみる。すべて諸人の夢想おほしといへども、しげきによりて、つぶさにしるさず

上人の住坊のひむがしの岸のうへに、西はれたる勝地あり。ある人これを相傳して、自身の墓所とさだめをきけるを、上人入洛のち去年十二月、かの領主上人に寄進す。券契等おなじく寄進狀にあひそへてたてまつりければ、源空にゆづりたふは、これ三寶に廻向せらるゝなり。佛うけ給へとて、火中になげ入られぬ。しかるにいま上人往生のとき、この地に廟堂をたて、石の唐櫃をかまへてをさめをきたてまつる。この地の事を、かねて夢に見けるともがらおほかりけれども、なにとおもひいるゝ事なくてすぎにけるが、いま上人の墓所となるとき、不思議のおもひをなして、面々にゆめをしるしをくれり。かの地の北の庵室に寄宿せる禪尼、先年の夢に、天童この地を行道すと見る。又かの房主、去年十一月十五日の夜のゆめに、この地に青蓮花ひらけて、金色の光かゞやくとみる。又隣家の清信女、同月の夢に、この地に色々の蓮華ひらけて、おのゝ光をはなち、妙香を熏ずとみる。清水寺の住僧、同月九日の夜の夢に、夜叉神等群集して、この地をひき、石をたゝむと見る。別當入道惟方卿の娘或説には孫云々栗田口の禪尼、上人往生の後、二月十三日の夜の夢に、上人の墳墓にまいりたれば、八幡の寶殿なり。御戸をあけたるに、御正體まします。傍なる人その御正體をさして、これこそ法然上人よといふをききて、信心おこり、身の毛いよだち、あせながると見る。又一人の女人、同三月十四日の夜の夢に、上人の廟堂にまいりたれば、庭に色々の蓮華あり。一人の僧ありて、いまだひらけざる蓮花一莖をあたへて、この地に詣せむものには、この蓮華一莖

をあたふべし。これ往生人のかずにいるべきしるしなり。この事あまねく人にしめすべしとのたまふ。掌をあはせてこれをうくとおもひてゆめさめぬ。この夢におどるきて、かの墳墓にたづねまいるに、地景といひ廟堂といひ、事の儀すこしも夢にたがはざりければ信心あさからずして、このよしを披露するにまことをいたし、あゆみをはこぶもの、忌月をむかへて貴賤いちをなし、亡日をまちて上下そでをつらねけり。當時知恩院といへるこれなり

## 第二 圖

四條堀河に、材木を賣買して世をわたるものありけり。その名を堀河の太郎入道といふ。ふかく上人に歸し念佛を信じて、上人往生のときは、廟堂の柱をぞたてまつりける。しかるに上人の中陰に、ある日の午刻ばかりに老翁一人上人の墳墓にたづねきたりていはく、我はこれ西山の樵夫なりすぎぬる寅時のゆめに、一人の僧きたりてつづけての給はく、法然上人の墓所堂の柱、奉加せる入道たゞいま極樂に生ず。ゆきて結縁すべしと、これによりてたづね參ずるよしを申。おきななのつげによりて、僧衆等ゆきてたづぬるに、かの太郎入道は、所勞によりてこの程、東石藏御林寺の東なる所に移住せりと申あひだをのゝかの所へゆきてたづぬるに、さる事侍り。事の縁ありてこれに侍つるが、上人つねにかたはらにましまして、臨終のちがづくよしをしめし、念佛をすゝめ給なりとて、よろこび侍つるが、すぎぬるあかつき、すでに往生をとげ侍ぬると申す。たづねいたる僧衆、なら

びに老翁、ゆめの告のたがはざる事を感じ、上人に繫屬結縁のむなしからざる事をよろこびて、をのをのなみだをぞおとしける

第三圖

法然上人行狀畫圖 第卅九

上人臨終のとき遺言のむねあり。孝養のために精舎建立のいとなみを、なすことなかれ。心ざしあらば、をのく群集せず、念佛して恩を報ずべし。もし群集あれば鬪諍の因縁なりとの給へり。しかれども法蓮房、世間の風儀に順じて、念佛のほかの、七日七日の佛事を修すべきよし申されければ、諸人これにしたがふ

初七日 導師信蓮房

檀那大宮入道内大臣實宗公 かの諷誦の文云、夫以先師在生のむかし、弟子朝をのがれしゆふべ一心の精誠をこらして、十重の禁戒をうく。かるがゆへに濟度を彼岸にたのみ、敬て諷誦をこの砌に修す。小善根をきらふ事なかれ。かならず大因縁たらむ、仍蓮臺の妙果をかざらむがために、はやく籍鐘の逸韻をたゞく眞名をもて假名にうつす  
以下これにおなじ

第一圖

二七日 導師求佛房

檀那別當入道孫某甲

第二 圖

三七日 導師住眞房

檀那正信房湛空

誦經物、唐朝王羲之摺本、一紙面十二行八十餘字書之

にしへよしゆくべき道のしるべせよ

むかしもとりのあとはありけり

第三 圖

四七日 導師法蓮房

檀那良清かの諷誦の文云

先師末法萬年のはじめにあたりて、彌陀一教のすぐれたることをひろむ。智惠劍をひきさぐ。莫耶のほこさきときにあらず。戒行珠をみかく摩尼のひかり明をならふ。抑尊靈逝川にさきだちて四七日、遠人來迎の雲をのぞむ。新墳について兩三度、遺弟酷烈の氣をかく。誠諦の言をおもひて、菩提の願をこふといへども、掲焉の旨意敬もて伏膺す

第四 圖

五七日 導師權律師隆寛

檀那勢觀房源智かの諷誦の文云

彩雲軒をおほふ、ちかく見、とをく見て來集す。異香室にみつ。我きゝ人ききて嗟嘆す

第五 圖

六七日 導師法印聖覺

檀那慈鎮和尚 かの諷誦の文云

佛子、上人存日のあひだ、しばし法文を談じ、常に唱導にもちふ。結縁のおもひあさからず。濟度の願ふかきかごとし。これによりて、今六七の忌辰にあたりて、いさゝか三敬の諷誦を修す。法衣をさゝげて往生の家にをくる。解脱の衣これなり。法食をまうけて化城の門にほどこす。禪悅の食これなり。然則聖靈は、かの平生の願にこたえて、かならず上品の蓮臺に生じ、佛子は眞實の思によりて、はやく最初の引接をえむ

第六 圖

七七日 導師三井僧正公胤

檀那法蓮房信空かの諷誦の文云

先師廿五歳のむかし、弟子十二歳のとき、かたじけなくも師資のの契約をむすび、ひさしく五十の年序をつめり、一旦生死をへだつ。九廻の腸たえなんとす。北嶺黒谷の草庵に宿せしより、東都白河の禪房にうつりにいたるまで、其間撫育の恩といひ、提撕の志といひ、報謝の思昊天きはまりなし。こゝをもて彌陀迎接一驅の形像をあらはし、胎藏金剛兩部の種子を安ず。又妙法花經八軸を摺寫し、金光明經一部を書寫して、もちて開眼し、もちて開題す。一心の懇志三寶知見し給へ

三井の僧正、ねんごろに導師をのみぞ申されけるあひだ、おもひのほかなる心地しけるほどに、道師として種々の捧物を隨身せられたりけり。子細おぼつかなかりけるに、説法るとき佛經の讚嘆をはりてのち、つぶさに淨土決疑抄をやく因縁をのべていはく、今日の唱導にすゝみ參する事は、ひとへに上人誹謗の重罪を懺悔せむためなり。上人面談のついでに條々の僻事をなをされ、又我宗の大事三箇條、上人のをしへをもちて、これを決す。門弟と稱するにたれり。上人一言の智辨をききて、下愚三卷の謬書をやくといへども、先非をかなしむ涙をさへがたく、後悔をいたすおもひきえがたし。これによりて隨分の嚙嚙をさゝげて廟堂に詣し、懇懃の懺悔をこらして寶前にひざまづく。弟子まことをいたす。亡魂こゝろざしをおさめ給へとて、落涙せられければ聽衆感嘆のこえ、ひゞきをなし、諸人隨喜のなみだ袖をしぼりけり

## 法然上人行狀畫圖 第四十

上人かたりての給はく、われ一向專念の義をたつるに、人おほく謗じていはく、たとひ諸行を修すといふともまたく念佛往生のさはりとなるべからず。何ぞあながちに一向專念の義をたつるや。これ偏執の義なりと、かくのごとくの難をいたすは、この宗のいはれをしらざるゆへなり。經には一向專念無量壽佛といひ、釋には一向專念彌陀佛名と判ぜり。經釋をはなれてわたくしにこの義をたてば、誠にせむるところのがれがたし。此難をいたさんとおもはば、先釋尊を謗じ、次に善導を謗すべし。そのとがまたくわが身のうへにあらずとぞ、おほせられける。一向專修の義を破する人あほかりしなかに、齒城寺の長吏、大貳僧正公胤、いまだ大僧都なりし時、上人を誹謗して、公胤が見たらん文を法然房の見ぬはありとも、法然房の見たるらん事の、公胤が見ぬはよもあらじと自嘆して、淨土決疑抄三卷を記して選擇集を破す。則學佛房を使者として、上人の室にをくらるととき、上人かの使にむかひて、これをひらき見給に、上卷のはじめに法花に即往安樂の文あり。觀經に讀誦大乘の句あり。讀誦、極樂に往生するに何のさまたげかあらん。しかるに讀誦大乘の業を癡して、たゞ念佛ばかりを付屬すといふ。これおほきなるあやまりなりといへり。この文を見たまひて、おほりを見ず。さしをきてのたまはく、この僧都これほどの人とおもはざりつ。無下の事なり

けり。一宗をたつとき、かれは癡立のむねを存ずらんとおもはるべし。しかるに法花をもて觀經往生の行にいれらるゝ事、宗義の癡立をわするゝに似たり。もしよき學生ならば、觀經はこれ爾前の教なり。かのなかに法花を攝すべからずとぞ難ぜらるべき。今の淨土宗の心は觀經前後の諸大乘經をとりてみなことごとく往生の行のなかに攝す。なんぞ法華ひとりもれんや。あまねく攝する心は念佛に對してこれを癡せんためなりとの給ければ、使歸てこのよしをかたるに、僧都口をとどて、言説なかりけり。あるとき宜秋門の女院中宮にて、一品の宮を御懷妊の時、上人は御戒の師にめされ、公胤は御導師に參じたまひて參會し給事侍き。御受戒はてゝ、上人退出せんとし給に、預きたりてしばし候はせ給へ、見參に入侍らんと。大貳の僧都御房申せと候と申あひだ、暫祇候し給に、御經供養はてゝ、僧都きたりて、上人には念佛の事をぞ尋申べけれども、まづ大要なるにつきて侍なり。東大寺の戒の、四分律にて侍る事は、如何なるいはれにて侍ぞと申さるゝあひだ、東大寺の戒の、四分律にてあるべき道理を具に釋したまひたりしかば僧都かへりて、勘て見給けるに、上人申さるゝむね、すこしもたがはざりければ、次の日又參會の時、昨日仰られ侍し事ども、誠にさ候けりとて、僧都以外に上人を歸敬したまひ、淨土の法門を談じ、かねて餘事にわたる。玄暉をくゑんくると、僧都の申されければ、その宗の人の申侍しは、くゑんうむとこそ申侍しか、暉とかきてこそ、くるとはよみ侍れ、暉とかきては、うむとこそよみ侍れと上人直申されき。惣じてかくの

ごときのあやまりども七ヶ條まで直されたりしかば、僧都退出のゝち、弟子にかたられけるは、今日法然房に對面して、七ヶ條の僻事を直されたり。常に見參せば、さいかくはつき侍なん。たつるところの淨土の法門、聖意に違すべからず。あふぎて信べし。かの上人の義をそしる、これおほきなるとがなりとて、則製作の決疑抄三卷をやかれにけり。誠博覽のいたり、ゆゝしかりけりとぞ、ほめ申されける。かの僧正は、顯密の達者にて、智行兼備せり。稱美の詞、信をとるにたれるものなり。上人の中陰の唱導をのぞみつとめて、かさねて前非を懺悔せられき。ひとへに上人の勸化に歸し、念佛の行おこたりなくして、建保四年潤六月廿日、春秋七十二、禪林寺のほとりにして、往生をとげられしに、洛中洛外、紫雲を見、瑞相をきゝて、群集結縁の道俗かずをしらず。寺門の碩徳顯密の宗匠なりき。しかれども善をきゝてうつりやすく、非をあらため信を生じて、つるに往生の素懷をとげられにき。末學偏執のおもひ、むしろ古賢のあとにはぢざらんや

## 第一 圖

梅尾の明惠上人高辨 摧邪輪三卷を記して選擇集を破す。上人の門徒こぞりて難をくはへしによりて、かさねて莊嚴記といへる一卷の書をつくりて、その難を救すといへども、義理不相應のあひだ此書をつくられてのち、いよいよ名譽をおとされけり。入道民部卿長房卿は、もとより明惠上人に歸したる人なりければ、かの邪輪を信じて、高野明遍僧都に見せたてまつらんとし給ける時、僧都

なに文ぞと尋申されけるに、選擇集を破したる文なりと申されければ、我は念佛者なり。念佛を破したらん文をば、手にもとるべからず、目にも見るべからずとて、返し給にけり。かの禪門も、のちには選擇のいみじき事を聞ひらきて、かへりて選擇に歸して、いづれの文か、邪輪なるらんと申されけるとなむ。其後仁和寺の昇蓮房、かの邪輪をもちて、明遍僧都に見せたてまつるに、僧都申されけるは、凡立破のみちは、まづ所破の義を、よくよく心得てこそ、破するならひなるに、選擇集の趣を、つやく心えずして破せられたるゆへに、その破さらにあたらざる也。その中に、異學異見をもて、群賊にたとふるを破せられたるも、これ善導の觀經の疏の文なり。またく法然房のとがにあらず。おほかた生死をはなれると思ふ程の人の、これまで罵詈誶せられたる事も、心得がたしとの給へり。かの僧都は論議決擇のみち、日本第一のほまれありき。ある時貞慶己講、解説上  
人地也澄憲法印、明遍僧都、會合して、われら一族、三人いざ宗論し侍らんと申されけるに、澄憲法印筆をとりて、三論に明遍あり。敵のつるぎをとりて敵を害す。法相に貞慶あり。寸をとへば寸をこたふ、宗論さらにかなふべからずとぞかゝれたりける。すべて一期の間論義につまらずとぞ申つたへ侍る。その評判無下には侍らじかし、さればかの明惠上人、菅宰相爲長卿のもとへおはしたりけるに、摧邪輪の事を申いだしたりければ、さる事侍しかども、ひが事なりけりとおもひなりて、いまは後悔し侍なりと、申されけるとなむ

## 第二 圖

禪林寺の大納言僧都靜遍は、池の大納言頼盛卿の息、弘法大師の門人なり。はじめは醍醐の座主勝愆僧正を師として小野の流をうけ、のちには仁和寺の上乗院の法印仁隆にあひて、廣澤の流をつたへて、事相教相、拔群のほまれありき。浄土門にいれる濫觴を、みづからかたり申されけるは、世こそぞりて選擇集に歸し、念佛門にいるものおほくきこえし程に、嫉妬の心をおこして選擇集を破し、念佛往生の道をふさがむと思ひて、破文かくべき料紙までとゝのへて、選擇集をひき見るところに、日ごろの所案おほきに相違す。末代惡世の凡夫の出離生死のみちは、ひとへに稱名の行にありけりと見さだめにしかば、かへりてこの書を賞翫して、自行の指南にそなふるよしをぞ申されける。日來嫉妬の心を生じ給ける事をくひかなしみて、大谷の墳墓にまふでて、なくく悔謝していはく、今日よりは上人を師とし、念佛を行とすべし。聖靈照覽をたれて、先非をゆるし給へとぞ、くどき申されける。其後綱班を辭し、みづから心圓房と號して、一向念佛せられき。あまさへ續選擇をつくりて、上人の義道を助成し、一偈をむすびていはく、一期所案極、永捨世道理、唯稱阿彌陀、語嘿常持念と、又法照禪師の五會法事讚の、彼佛因中立弘誓、聞名念我惣來迎といへる、七言八句の文を誦して、浄土宗の肝心、この文なりとぞ、つねは申されける。つゝに貞應三年四月廿日、本意のごとく往生をとげられにけり、月氏には天親菩薩はじめに小乗を信じて、五百部の論をつく

りて大乘を破せしかども、後に改悔の心をおこし、大乘に歸せしかば、大乘五百部の論をつくりてかへりてこれをほめき。震旦には宋の張丞相いまだ、秀才たりし時、ふかく佛法をそねみて、破法論をつくらむと沈吟せしとき、何氏方便をめぐらして、邪見の説どもをよく／＼見て破すべきなりとて、維摩經三卷をあたへしかば、この經を披閱して、ふかく改悔の心をおこし、護法論をつくりて、かへりて佛敎をたすけき。震旦日域ことなれども、捨邪歸正のあと、むかしもかくこそ侍けれ

## 第三圖

## 法然上人行狀畫圖 第四十一

毘沙門堂の法印明禪は、參議成頼卿の息、顯宗は檀那の嫡流智海法印の面受、密宗は法曼院の正統仙雲法印にうく。顯密の棟梁、山門の英傑なり。しかれども、道心うちにもよをし隠遁のおもひふかゝりき。初發心の因縁をかたり申されけるは、最勝講の聽衆に參たりしとき、緇素貴賤、けふをはれとのみ思あへり。夢幻泡影片時のさかへを、わすれざるものひとりもあらず。俗家には、大將の庭上のことから、大理の門外のふるまひ、僧中には證義者は上童をぐして別座をまうけ、攝録の息は隨身をしたがへて直廬に參ぜらる。かれこれの榮耀を見て、見聞のともがら、はしりまはるありさま、つくづくとおもへば、無常たちまちにいたりなば餘算いつまでとか期すべき。世上の忿

忙を見るにつきては、胸の中の觀念すみまざるまゝに、隱遁のおもひ、この時治定せりとぞ申されける。上人の念佛興行、大にそねみそしりて、つるに在世の勸化をきかず、籠居の心ざし思さだめて後も、出離の道いまだ一決せず。とかく思惟せられけるに、もちたる數珠われもおもひわくかたなくて、自然の手すさみにくられけるとき、有縁の法、易行の道、稱名にあるべきにこそと、その座にておもひそめられて、つるに籠居せられにけり。其後上人の弟子法蓮房に謁して、念佛の法門を談ず。上人所造の選擇集を送られけるを、披見のち淨土の宗義を得、稱名の功能をしる、信仰のあまり改悔の心をおこし、選擇集一本を寫とめて、雙紙の袖に、源空上人の選擇集は、末代念佛行者の目足なりと書付られ、あまさへ、又述懐の抄をしるして、上人の義をほめ申されけり。彼抄云、近來法然上人淨土宗を興し、專念の行をすゝめしかども、大にそねみ、大にそしりて、學するに及ばずして、むなしくすぎぬ。しかるに不慮のほかに、かの上人の門弟に向顔する事ありき。彼人のいはく、きかざるには、信も謗もともにあやまりあり。先師所造の書あり。これを見て、もしは信じ、もしは謗ずべしとて選擇集をおくれり。これを見るに、一遍は、なにもおもひわくかたなく、見をはりぬ。二遍には偏執のとかやまねくらんとおもひて、見をはりぬ。第三遍よりは、深旨ありと見なして、四五遍これを見るに、信をまして疑なし。乃至我朝に淨土をすゝめ、念佛をひろむる人おほしといへども、この上人は信謗ともにつねの人にこゑたり。そのゆへをたづぬるに

一向專念のすゝめよりをこれり。つねの人の心にたがへば、そしるにいはれあり。つねの人の義にこへたれば信ずるにいはれあり。この義を立せずば、あながちにそしるべからず。あながちに信ずべからず。むかしも今も、この義を立つる人なければ、失たるべくば人にすぐれたる失たるべし、徳たるべくば、ひとにすぐれたる徳たるべし。ゆめ／＼普通の義に准ずべからず。たゞしこのすゝめにしたがひて、往生する人、すでに四遠にあまねければ、徳とするにたれり。己上略抄とぞ、かゝれたる

## 第一 圖

かの法印は、天台の宗匠なりしかども選擇集を披覽の後は、ひとへに在世の誹謗をくひ、ふかく上人の勸化を信じて、こゝろを金池のなみによせ、いまはたゞ畢命を期とせんばかりなりとて、專修專念の行をこたりなく、念佛往生のいとなみ他事なかりしかば、そのきこへ都鄙にあまねく、往生をこひねがふ輩たづねいたらさうといふ事なかりき。承久三年のころ但馬宮より念佛往生の事御たづねありしには、要文をあつめて、こまかに注申されき。又散心念佛の事、後鳥羽院遠所の御所より西林院の僧正承圓につけて、仰下されける。嘉祿二年正月十五日の御書云、六廻の春を迎といへどもいまだ一身の愁をなくさめず。前世の惡業ちから及ところにあらず。しかるをむなく日月をくりて、出離の行を決せず。止觀弘決等を披見候にも、三諦圓融の義をしらずば、無始の惡業の

ぞきがたく候歟。自性空の理を心にかけてずば、散心念佛ばかりもいかゞと覺候、三部經の中に、雙觀經などは、佛智不思議智を信ぜざるものは、往生得がたきむね分明に候。實相の理を心に思候へき様如何。たとへば、一々の塵勞門を翻つれば、即それ八萬四千の諸三昧門なり。無明轉じて明となる。氷とけて水となるがごとくなり。虛妄分別するとき、煩惱も力をば得事なれば、自性むなしからむには、なに、つきてか煩惱もあるべきと、まことに一念を發して、衆生と有縁の佛なれば、阿彌陀をとりわきて念佛せんは、かたぐ六方諸佛の證誠もむなしからず。三諦相即の義も具足してよく候なんと覺候。都率の僧都覺超の、眞如觀と申事にも、眞如を思様とて候も別に煩べしとは見え候はぬは、あまりいふかひなき淺智のあまり、かくのごとく存候歟。降聖房などが申候しは、すこしも我等が分におもひよるべき事とは申さず候き。其間の子細不審無極候。實にも令申候分際、尾籠の事にて、出離もかくては不可叶候はんには、只散心念佛の行にて候べく候。いづれの様もきらふべからず候。一定出離しぬべく候はむ様、相構て可注給候。且如明禪にも被仰合て、委細可被仰候。今生の事、いまはこの外不可有他事候。來世さへに空しく成候ぬと、心浮覺候也。近日の上人などは、中々以外の新義ども多候て、難信受事にて候。聖覺などを被召寄候て、兩方を委細に尋さぐられ候て、最上の至要を可注給候。御邊には、散心念佛の義むねと申ものは不候やと覺候間、せめて兩方をも爲令聞給、聖覺をめさるべしとは申候也。なに事も、一方ばかりは惡し

き事にて候也。返々能く思惟して可示給候。今生の大望これにて候也已上。これにつきて、西林院の僧正、明禪法印につかはす狀云、遠所の御書これを進覽、この事愚闇の身たやすく御返事を申がたく候。たゞし、但信稱名を遮するにあらずといへども、理觀念佛は、無上菩提如在右手とこそは候へ、觀解に堪しめ御さば、目出こそは候はめ。所詮御所存の様を給て、進ずべく候。且は御書に見候歟。卑賤の類たりといふとも、なほ曩劫の宿善を知がたし。いはむや九五の尊たり。さだめて三界の故郷を出やすく御候歟。一文一句の知識最前級引の媒介に候歟。まことに大切の事候。かならず御存知の趣、色代覆藏なく注給て、進べく候也已上。明禪法印の返狀云、散心念佛、理觀を相兼られ候事、口稱三昧、觀解を罄かれば、いよく出離の媒たるべく候。但止觀等は、聖道門出離の一筋を示候。淨土門の散心念佛を遮するにあらず候。易行道必らず理觀を具べきにあらず候。惠心の釋その意に候歟。且は傳記の文、一紙かきいだして進上候。この條淨土宗の道綽善導等の人師の心、左右なき事にて候うへ、經教論家、ならびに天台妙樂等の釋までも違すべからず候。地體菩提心につきて、緣理四弘は勿論の事、菩提心をかならず具不具は人師の釋等不定候、惠心二釋いはむやその上の行、かならず理觀を具べきにあらず候歟。但念佛の外、餘行無益のよし、近來の聖人等多申候歟。この條はなはだ甘心なく候、泥洹の眞の法寶衆生種々の門より入と云云行者の根性區區にわかれ候。己心の高廣を觀して無窮の聖應をたゞく機縁、又なかるべきにあらず候。たとひ末

代たりといふとも、なむぞ射的の益なく候はんや。但且は本願に順じ、且は易行たり。散心念佛往生の業に足よし。出仕のむかしより、籠居のいまにいたるまで、その意變ぜず候。御使を立ながら所存の趣を申入候。御取捨あて申さるべきよし、洩申しめ給べく候已上取詮 法印注進の、惠心傳記の文云、往年に人ありてひそかに問云、和上智行世に等倫なし、所修の行法、なにをもちてか、宗とするや。答念佛を宗とす。又問、諸行の中には、理をもちて勝たりとす、念佛の時法身を觀せずやいなや。答只佛號をとなふ。又問、なんぞ理を觀ぜざる。答往生の業には、稱名足ぬべし。本意この念にあり、故に理を觀ぜず。但これを觀ぜんとおもはむにかたしとせず。われ理を觀ずるとき、心あきらかに通達して障礙ある事なし云云 僧正又重狀云、一紙の趣、ふかく肝に銘候。一代の聖教をのせらるゝといふとも、これにすぐべからず候歟。愚意の所存秋毫も違せず候間、信仰無極候。抑々彼へ進上の書札、細少を爲先候。文字も今すこしちゐさきやうに、御書寫ありて給べく候。御自筆、上覽のために宜るべき間申候也云云取詮 無觀の散心念佛、彌陀の本願にかなひ往生の業因たるむね、惠心の傳記、法印の存知、あきらかなり

## 第二 圖

法印風痾をかされ、病惱日月をくるといへども、稱名の行さらになをこたる事なし。病席にふして後、ある時にはかに涕泣せらるゝ事のありけるを、弟子おどろきてこれを尋申ければ、明禪聖

覺と手つかひて、人にいはるなる、無益の對揚かなと。としごろおもひしが、たゞいまふとおもひいでられたるなり。故郷の妄執をわすれざるは、淨刹の欣求のひまあるにこそと申されける。念々不捨の信力も、このことばにあらはれ、順彼佛願の正業も、たゞ一言にしられたり。紫雲たなびきて往生人の相ありとて、人おほく群集するよし。看病の人々申ければ、何條明禪が臨終に、紫雲の沙汰までをよばむぞ。たゞ正念みだれずして、稱名をもちて息たえたらんにすぐべからずとて正信房を知識として、頭北面西にて、極重惡人、無他方便、唯稱彌陀、得生極樂の文をとなへ、念佛相續し、如入禪定にして、仁治三年五月二日午刻に往生をとげられけるとなむ。凡如來の出世には、大權の菩薩外道となり佛化をあざむきてかへりて威光をましき。上人濁世の良導たるによりて誹謗留難、しば／＼きおひおこりしかども、時機相應の運しからしめて、その宗つるに隱没せず、相傳いよくさかむなり。むかしをもちていまをおもふにかへりて信心をますにたれるものなり

## 第三 圖

## 法然上人行狀繪圖 第四十二

上人の歿後 順徳院の御宇 建保 後堀川院の御宇 貞應嘉祿 四條院の御宇 天福延應たび／＼一向專修停止の 勅をくださるゝ事ありしかども、嚴制すたれやすく、興行とゞまりかたくして、

遺弟の化導都鄙にあまねく、念佛のこゑ洋々として耳にみたり。これあに止住百歳の佛語むなしからずして、やうやく利物偏増の益をあらはすにあらざや、爰に上野國より登山し侍ける、並榎の堅者定照、ふかく上人念佛の弘通をそねみ申て、彈選擇といふ破文をつくりて、隆寛律師の庵にをくるに、律師又顯選擇といふ書をしるしてこれをこたふ。その詞には、汝が僻破のあたらざる事、たとへば暗天の飛礫のごとしとぞあざむかれて侍る。定照いよくいきどをりて、ことを山門にふれ衆徒の蜂起をすゝめ、貫首浄土寺僧正にうたへ、奏聞をへて、隆寛幸西等を、流刑せしめ、あまさへ上人の大谷の墳墓を破却して、死骸を鴨河にながすべきよし結構す

## 第一 圖

つるに 勅許ありしかば、嘉祿三年六月廿二日山門より所司專當をさしつかはして、廟堂を破却せむとす。こゝに六波羅の修理亮平時氏、禁制のために使者をさしつかはす。頓宮の内藤五郎兵衛尉盛政法師西佛、子息一人を相具してまかりむかふ。たとひ 勅許ありといふとも、武家にあひふれらるべし。左右なく狼籍をいたすことはなはだ自由也。すべからく苛法の悪行をとめて、穩便の沙汰をいたすべし。もし制法にかゝはらずば、法にまかすべきよし、禁遏のことばをつくすといへども、なを承引せず。廟墳をやぶり房舎をこぼちければ、醫王山王もきこしめせ、念佛守護の赤山大明神にかはりたてまつりて、魔縁うちはらひ侍らむ。いつはりて四明三千の使と號し、みだり

に四魔三障のむらがりきたるか。もとゞりは主君のためにそのかみきりにき。命は師範のためにただいま捨べし。あにはかりきや、戰場をもて、往生の門出とし、悪徒をもて、逆縁の知識とすべしとは、善悪不二のことはり、邪正一如のをきては、山門の使ならば、さだめてきゝ知るらん。自他もろともに、九品蓮臺の同行となり、怨親おなじく七重樹下の新賓たらん、といひて武威をふるひければ、使者退散して、その日はくれにけり

## 第二 圖

その夜法蓮房、覺阿彌陀佛等、妙香院の僧正良快月輪殿御息の禪室に參じて、この事しばらくしづまれりといふとも、山門のいきどをりをむなしからじ。はやく改葬すべきよしを申入るゝに、この儀もともよろしかるべしと仰られければ、やがてこよひ、人しづまりてのち、ひそかに御棺の石の横の蓋をひらくに、画像いけるがごとくして、異香芬馥せり、貴しなどいへはさらなり。おのおの隨喜の涙をぞながしける

## 第三 圖

西郊にわたしたてまつるに、路次の障難をゝそれて、宇津宮の彌三郎入道蓮生、塩屋の入道信生千葉の六郎大夫入道法阿、澁谷の七郎入道道遍、頓宮の兵衛入道西佛等、出家の身なりといへども法衣のうへに兵杖を帶して、御ともに參じければ、家子郎等などあひしたがひける程に、軍兵濟々

として前後にかこめり。遺弟以下御ともに參ずる人一千餘人、おのおの涙をながしかなしみをぞふくみけり

#### 第四圖

嵯峨にわたしをきたてまつりて在所を隱密すべきよし、おのおの佛前にちかひて退散しにけり。こゝに山徒本意をとげざる事をいきどをりて、なを遺骨のゆくゑをたづぬるよしきこえしかば、同廿八日の夜、しのびて廣隆寺の來迎房圓空がもとに、うつしをきたてまつりて、その歳もくれにけり

#### 第五圖

翌年安貞二年也正月廿五日の曉、更に西山の粟生野の、幸阿彌陀佛のもとに、わたしだてまつりて茶毘をなすに、紫雲そらにみち、異香もともはなはだし。諸人渴仰のおもひいよ／＼切なり。茶毘所の西にあたりて、もとはひとつ、するは三またなる松あり。紫雲かの松にかゝりて、みどりをかくすほどなりけり。紫雲の松となづけていまにあり、かの茶毘所のあとには堂をたて、御墓堂と號して念佛を修す。いまの光明寺これなり

#### 第六圖

遺骨をひろひ、寶瓶にをさめたてまつり。幸阿彌陀佛にあづけをきて、おの／＼退散しぬ。その

のち正信房のさたとして、かの芳骨をおさめたてまつらむために、二尊院の西の岸の上に雁塔をたて、貞永二年正月廿五日に、正信房御骨の御むかへに、粟生野の幸阿彌陀佛のもとに罷向ところに、幸阿彌陀佛は、御骨を庵室のぬりごめに、ふかくおさめをきたてまつりて、鎮西に下向しにけり。かぎをたづぬるに、ぬりごめをひらくべからざるむね、かたくいましめをきて、鎰をあづけをかれざるよし。留守のものこたえ申あひだ、仰天きはまりなし。相伴ところの門弟廿八人、面々に力をつくしをして戸をひらかむとするにかなはず、むなしく歸なんとする時、御在世ならば、湛空が參たるよし申いれんに、などか見參にいらでむなしく歸るべきと。なくくどき申されけるにぬりごめのくるゝなるやうにおぼえければ、門弟の中にちかく侍る信覺といふ僧に、いま一度戸をひきてみよと、正信房申されければ、信覺たちよりて戸をひらくに、相違なくあきにけり。嘆申おもむきを聞食入られけるにこそとて、歡喜の涙をながし、御骨をむかへたてまつりて、塔中にをさめたてまつりぬ。

## 第七圖

## 法然上人行狀繪圖 第四十三

上人の勸化、本願のむねに、かなふゆへに、かのおしへにしたがふもの、往生をとげたる事、在

世といひ、滅後といひ、都鄙のあひだ、そのかずをしらず。筆墨も、記しがたし。しかりといへども、法流をひろむる、遺弟より、慈訓をまもる、道俗にいたるまで、まのあたり、面受したてまつれるにかぎりて、舊記にのせ、口實にそなふるところ、あつめて、その行狀をしるす。けだし上人化導の徳とするにたれるゆへなり。白川の法蓮房信空又號稱辨は中納言顯時卿の孫、左大辨行隆朝臣の長男也。かの朝臣の室懷妊の時、父中納言顯時卿申されけるは、汝が妻室のうめらんところ、もし男子ならば、かならず我養子とすべしと、かの室家つきみちて、久安二年に男子を生ず。中納言これをよろこびて、乳母に酒肉五辛を禁ぜしめて、養そだてらる。保元二年十二歳のとし、黒染の布の衣袈裟を、くるまのなかにいれて、黒谷の叡空上人にをくりつかはす狀云、面謁の時令申候、小童登山候、剃髮着此法衣、不歷名利之學道、速授出離之要道云云。仍登山の翌日に出家して、熏修功つもりにければ、道德三塔にきこえ、名譽九重にをよぶ。二條院ことに御歸依をあつくしまし〜けり。叡空上人入滅の後は、源空上人に奉事して、大乘圓戒を相承し、又淨土の教門をならひ、念佛を修して、まのあたり白毫を拜す。このひじり、毘沙門堂の法印明禪に對面のことありけるに、法印たづね申さるゝこと、内外典にわたりて、いづれも分明にこたへ申されければ、所學の程ゆかしくおぼえて、いかなる明師達にか、あひ給へりしと〜ひ申されけるに、幼稚のむかしより、たゞ法然上人の教訓をかうぶれるほか、きけるところなきよし申されけり。このひとの才學の程をおも

ふに、師範上人の惠解の分、おもひやられて、いみじくおぼえ侍しと。法印のちにかたられけるとなむ。さればにや、法印但馬宮へ進ぜられける状にも、このひじりの事をば、内外博通し、智行兼備せり。念佛宗の先達、傍若無人といふべしとぞ、のせられて侍る。行年八十三、安貞二年九月九日、九條の袈裟をかけ、頭北面西にして、上人の遺骨をむねにをき、名號をとなへ、ねぶるがごとくして、往生をとげられにけり

## 第一 圖

西仙房心寂は、もと叡空上人の弟子なりけるが、のちには上人を師として、一向専修の行者となりけり、學生なるうへ、道心もふかゝりしかば、上人をろかならぬことにおもひ給へり。しかるを西仙房心中におもはく、同朋同行したしきあたりはことにふれてその難おほし。たれともしられざらんところにひとりゐて、しづかに念佛せんとおもひて、さるべき所やあると、たづねありきけるほどに、河内國讚良といふところに、あたりもにぎはひてみゆる家ありけり。そこなる人いたづぬれば、あの家主は、尼入道とて、この邊の長者なり。ありがたき善人にて、よろづの僧の、あつまる所なりと申けるをきゝて、かの家にゆきていふやう、しづかなるところにゐて、後世のつとめをせばやとおもひ侍れども、無縁のものにて、身命つきがたし。入道殿は善人にておはすなるに、あのはやしのかなかに、方丈のいほり一つくりて、なににてもめさむものをもよほし給なむや。その

うちにこもりゐて、しづかに念佛し侍らむ。たゞし僧を歸依してをきたればとて、心經一卷をもよませ、もしは消息一紙なりともかけなとの給ひて、これへよび、またあれへおはする事あるべからず。かたのごとく、命いけ給はむものをば、やまはやしの鳥けだものにほどこそとおもひ給へと。この入道もいさゝか見るところありけるにや、いかにも御房の仰られんにしたかふべし。ゆめ／＼心をたがへたてまつるべからずと。こたへければさらばそのころまいらんと、ちきりおきて京へかへりのぼりて、所持の聖教どもをば、ひとにわかちとらせて、たゞ水瓶ばかりを身にしたがへつゝ上人の草庵に參じ隠居の所存をのべ、今生の見參は只今ばかりなり。再會は極樂を期し侍べしとていでにけり。上人つねはいかやうにか、すみなしたるらんと給ける程に、三年といふにこのひと出來れり。上人おどろきて、あれはいかにとの給へば、西仙房申様、その事に候。はじめの年ばかりは、世縁俗念の、心をみだる事もさふらはで、よく候しかども、こぞのはるより徒然の心いできて、いとひし朋同行、したしき境界までもこひしく、徒然にたえぬまゝには、ありし聖教をひらき見たらばなぐさみてましなど、ひとにとらせし事さへ後悔せられ、剩はては、時非時をつたふる小童などにむかひて、なにとなきそゞろ事を申て、心をなぐさめなどして、いよ／＼つれ／＼のみ、強盛になり侍りしかば、故郷をおもふ心はおほく、極樂をねごふ心はすくなし。心をしづめて念佛申さむためにこそ、こゝにはきたりしが、つれ／＼をねむじ故郷をこふる心と、たゞかはんために

はあらざりき。されば假名の阿蘭若すみ／＼てをはりには、なにの身にかはなるべき。無益のすまひかなとおもひて入道にはかくとも申さでにげのぼりて候なりと申ければ、智者にも學生にもよらず道心なきものはこの心はなき事なりと、上人返々隨喜し給けり。さて姉小路、白川菟殿の辻子といふ所に、妹の尼公の侍ける、いほりのうしろに、ひさしをさして、身ひとつおさむるほどに、わらをもちてゆひまはして、そのうちにこもりゐて、かみの衣を着し、食時便利のほかは、一向に念佛す。小土器六をならべて、香をもり火をけさず、とりうつしとりうつして、念佛しけり。ひとにも對面せず、生涯は別時なりけり。ついに元久元年の冬、臨終正念にして、端坐合掌し高聲念佛すること數遍、念佛のこえにていきたえぬ。そのあたり五六町のうち、異香芬馥す、室のうち、三年までかうばしかりけるとなむ。東山延年寺のうゑの山に葬す。着するところのかみの衣、異香はなはだし、たづねいたるひと、面々にわかちとりけり。終焉のとき、貴賤男女はしりあつまりて、結縁しけるなかに、大番の武士、千葉の六郎太夫胤頼これを見て、たちまちに發心出家す。上人給仕の弟子法阿彌陀佛これなり

## 第二 圖

嵯峨の正信房湛空は、徳大寺の左大臣 實能公の孫、法眼圓實の眞弟大納言律師公全これなり。瑜伽の壇のうへには、四曼不離のはなぶさをもてあそび、觀念の窓のうちには、五相成身の月をすま

して、三密の法將、四明の智徳たるべき器用なりければ、實全僧正の附弟にぞたのまれける。されども浮生の名利をいとふ心ねんごろに、菩提の直路をねがふ心ざしふかゝりければ、つるに聖道門を捨て、上人の弟子となり、ひとすぢに淨土門にぞいり給ける。まのあたり上人の眼光を拜して後は信仰ことにふかし。圓戒をつたえて天下の和尚たりき。稽古を事とせず、小學の單修をこのみて、學問選擇集にはすぐべからずとぞ申されける。年たけ齡かたぶくまゝに、道心いよく堅固にして、專修功つもあり、行徳あらはれければ、世こぞりてこれをたうとびき。毘沙門堂の法印明禪最後の知識には、このひとをぞもちゐられける。嵯峨の二尊院は、上人草庵をむすびてかよひ給し地なり。その跡をかうばしくして居をこゝにしめ、寺院を興隆し、楞嚴雲林兩院の法則をうつして、廿五三昧を勤行し、上人の墳墓をたて、もはらかの遺徳をぞ戀慕し給ける。上人遷謫のときも、配所までもなはれけるが、御かたみのためにとて、船のうちにて、上人の眞影をはりたてまつられける。船のうちのはり御影とて、當時二尊院の塔にましますこれなり。生年七十八、建長五年五月の比より、所勞の事おはしけるが、同七月廿七日、念佛數百遍、ねぶるがごとくしてをはり給にけり。

### 第三 圖

播磨國朝日山の信寂房は、上人面授の弟子なり、明惠上人、摧邪輪といふ文をつくりて、選擇集

を破せられたるを、この人破文をつくりて、難者の非をあらはせり。一々の義、立破分明なる中に  
瑜伽莊嚴等の論を引て難じ、香象清涼等の釋をあげて、破せられたるところの答にいはく、かれは  
菩薩の解行をあかす、これは凡夫の往生をのぶ、難行易行その心ことに自力他力そのむね別なり。  
經論の所説、いづれも誠諦也といへども、すでに時處對機利益各別なり。五性各別の義をもて一切  
皆成の旨を難ぜむに、天台の學者これを信伏せむや。いま萬行成佛の論をもちて念佛往生の義を難  
ぜむに、淨土の行人これを依用せむや<sup>上</sup>。又念佛宗をたてむと思はゞ諸師によるべし。また一師に  
よらば宗義を立べからずと、難せられたるところをこたふるにいはく、もし諸師によりて一宗をた  
つべくは、密宗の學者顯宗の祖師により、顯宗の學者、密宗の祖師によるべし。もし、からずば、  
この難きたるべからず。難者もし天台眞言の祖師によらば、花嚴はすなはち天台眞言の方便となる  
べし。いかゞ宗義をたてん。一宗のうちにおきて先徳おほしといへども、一師の釋義をもちて、指  
南とする時は、またく相違の師をもちめる事なし<sup>上</sup>凡この人、内外典にあきらかなりき。されば  
にや毘沙門堂の法印明禪は、上人の没後に選擇集をひらき見て、かの義を服膺のあまり、一卷の書  
に所存のむねをしるして、落書の體にて信寂房の鳥部野の草庵にをくられけるとなむ。世に述懷抄  
といへるこれなり。このひじり、法門の大綱、選擇集を本として、かの義にたがへる事、一言も申  
されざりけり。あながちに練若のすまるをこのみ、しゐて俗塵をいとはれざりけり。遠江國横路と

いふ所に侍ける、西蓮といふ僧上洛して、邊士の利生をすゝめ申によりて、寛元々年の秋のころ、花洛をいで、かのくに、下向。おなじき二年正月癰瘡を發す。門弟等療治をすゝめ申といへども、つるにこれをゆるさず。やうやく危急におよぶあひだ、食事をとゞめ、二月廿一日より、門弟におほせて、別時念佛を修せしむ。こゝに苦痛ことくくくにやみ、瘡平復することもとのごとし。人奇特の思をなす。高聲念佛時々勇猛なり、三月二日の夜半より、こゑ漸くよはれり。卯のはじめにいたりて、門弟をして、かねをならして、高聲に念佛せしめて、かのこえにつけて、念佛すること百餘遍、こゑとどまりて後、唇舌をうごかすこと七八遍、すなはちいきたえにけるとなん

#### 第四 圖

醍醐の乘願房宗源號竹谷は上人につかへ、法義をうくる事多年、しかるにふかく隱遁をこのみ、道念をかくして、醫師のよしをなのり。また音律のことなどをぞ、ひとにはかたられける。しかれどもその徳かくれなくして、ある貴女御歸依ふかゝりけるが、ある時沈の念珠を拜領せられたりけるを、自愛して、この念珠にて、晝夜に念佛せられけるに、いまだこの人の事をもしらざりける。修行者一人、雲居寺に通夜したりけるが、うちまどろめるに、堂のまへに、山臥いくらといふかずもしらずあつまりて、いひしろふ事をきけば、いかゞして醍醐の乘願房の出離を障すべきといふに一人の山臥、かの沈の念珠の由來をかたりて、この念珠をたよりとして、出離をさまたくべしとい

ふとおもひて、夢さめぬ。ことさまあやしくおぼえて、傍なる人にたづぬるに、さる人ありといひければ、かの庵室にたづねゆきて、ゆめの虚實をしらんがために、まづそこなるひとに、かの念珠の由来をたづぬるに、たがはざりければ、修行者奇特の思をなして、見參にいたるべきよしを案内するに、いれて對面ありけり。修行者とかくの事もいはずはしりよりて、もち給へる念珠をうばひとりて、火中になげいれにけり。乘願房おどろきてことの心をたづねらるゝに、修行者夢の次第をくはしくかたりて、かしこまり申ければ、いみじくよろこばれけり。まことしく生死をいでぬべき人をば、魔界きをひて障碍の方便をなすこと、をそるべき事にぞ侍める。ある時人とひていはく悪を行ぜし程、往生淨土の業はおぼえ候はね。かくても往生とげ侍なむやと。答云みな人のならひ也。猛利熾盛の心なけれども、つねにわすれず相續して行ずれば、往生する也。されば俱舎の性相にも由重惑淨心、及是恒所造といひてつねになす事、定業を成すといふことあるなりとぞ申されける。またあるときはいく、世間の人の意に相叶たる、太刀かたなを儲つれば、夜枕にもたて、そばにもおきたるは、なにとなくつねに心にもかけて、さぐりもてあそぶ也。その定に、念佛眞實に信じたるものは、いみじきこととおもひて、信力内に發したるゆへに、名號のいさみて、鎮にこれにうちかゝりたるやうに、申さるべきなり云云。このひじり、もとは眞言師悉曇師にて、仁和寺にすまれけるが、のちには天台宗を稽古せられけれども、この兩宗にて、順次に生死をいづべしともおぼえ

ずとて、上人の弟子になり、遁世して、醍醐の菩提寺のおく、樹下の谷といふところに、隱居多年の後、清水の竹谷といふ所へうつりすまれけるが、建長三年七月三日戌刻に、生年八十四にて往生し給ふ

## 第五 圖

### 法然 上人行狀繪圖 第四十四

長樂寺の律師隆寛

又號三無我  
稱三片空一

は、栗田の關白五代の後胤少納言資隆の三男なり。範源法印の附法

として、慈鎮和尚の門弟につらなりき。天台の法燈をかゝげ、叡山の領袖たりといへども、しかるべき宿善やもよをしけむ、浮生の名利をいとひ、安養の往生をねがひて、つねに上人の禪室に參じしきりに出離の要道をたづね申されき。はじめにはいとうちとけ給はざりけれども、往生の志ふかきよし、ねむごろに述給ければ、上人おほきにおどろきて、當時聖道門の有職にて、大僧正御房慈鎮和尚に、貴重せられたまふ御身の、これほどに思われ給ける事、返々もありがたくこそ思たまふれとて淨土の法門ねむごろにさづけ給けり。毎日阿彌陀經四十八卷をよみ、念佛三萬五千遍をとなふ。のちには六萬遍なり。或時阿彌陀經、轉讀の事を上人にたづね申されけるに、源空も毎日に阿彌陀經三卷をよみき。一卷は吳音、一卷は唐音、一卷は訓なりき。しかるをいまは一向稱名の外他事なき

よし仰られければ、四十八卷の讀誦をとめて、毎日八萬四千遍の稱名をぞ、つとめられける

若我成佛 十方衆生 稱我名號 下至十聲

若不生者 不取正覺 彼佛今現 在成佛

當知本誓 重願不虛 衆生稱念 必得往生

往生の肝心この文にあるべし。文字又四十八、まさしく本願のかずにあたれり、さだめてふかき心

あるべしとて、常の詞には、衆生稱念といふ。われ豈その人にあらざらんや。必得往生といへり。

ひとりなんぞかの迎にもれんとて感涙はなはだしかりき。抑山門諸堂のつとめは、衆徒のいろひな

く、堂衆の沙汰なりしに、かの堂衆等、寺用をむさぼり、獨歩のあまり、衆徒を忽緒し、あまさへ

八王子の社壇を城壕として、悪行をたくみしかば、建久三年冬のころ、官兵をさしつかはされ、堂

衆をしりぞけられしのは、諸堂の安居以下、みな衆徒の沙汰にてつとめけるに、根本中堂の安居

の結願に、導師の沙汰ありしとき、隆寛その器量たるよし、衆議をふるところに、法然房の弟子と

なり、専修念佛を行とするうへは、吾山の唱導しかるべからざるむね、嗷々の沙汰にをよびしかど

も、披群の名譽、傍若無人なりしかば、異儀の衆徒をなだめ、つるに招請せられけるに、大師草創

のはじめより、末代繁昌のいまにいたるまで、辨説たまをはきたまひければ、衆徒感歎のこゑひ

きをなし、諸人隨喜の涙たもとをうるをす。賞翫のあまり、律師いまだ凡僧なりけるに、東西の坂

を乘興すべしとぞゆるされにける

## 第一 圖

上人小松殿の御堂におはしましけるとき、元久元年三月十四日に、律師參給けるに、上人後戸に出むかひ給て、ふところより一卷の書をとりにだして、これは月輪殿の仰によりてゑらび進ずるところの選擇集なり、のするところの要文要義は、善導和尚淨土宗をたてたまふ肝心なり。はやく書寫して披覽すべし、もし不審あらばたづね問べきなり。源空存生のあひだは、祕して他見に及べからず。死後の流行は、何事かあらんやとの給ければ、貴命をうけて、いそぎ功をへんがために、わかちて尊性昇蓮等に助筆せさせて、これを書寫して、本をば返上せられけり。しづかにこれを披見して、いよく信仰のまことをいたす

## 第二 圖

並榎の堅者定昭が凶害によりて、山門にうたへ、奏聞にをよびて、上人の門徒、國々へ配流せられしに、律師その專一として、配所さだまるよし、きこえければ、先師上人すでに念佛の事によりて、遷謫にをよび給し上は、予その跡を、はむ事、尤も本意なりとて、長樂寺の來迎房にして、最後の別時とて、七日の如法念佛をつとめられけるに、結願の日にあたりて、異香室内に薫じ蓮華一蓮白蓮庭上に生じ、瑞花そらよりふりくだりければ、現身往生の人なりとぞ、たうとびあひける、まこと

に不思議の事なりけり。

第三 圖

律師をば森の入道西阿うけ給はりて東關へうつしたてまつる。嘉祿三年七月五日進發す。配所は奥州とさだめられけるを、森の入道ふかく律師に歸したてまつりて、かの祕計にて、代官に門弟實成房を配所へつかはし、律師をば西阿が住所、相模國飯山へ相具したてまつる。八月一日鎌倉をたち給けり。律師飯山へうつり給しのちは、森の入道、尊崇いよくふかく、歸敬他事なかりき。しかるに、同年仲冬、風痾にはかにをかす。病床に筆をとりて、身の一期の事をしるされけり。これを羈中吟となづく。そのことばにはく、我きく、達磨和尚は、配所のくさむらに跡をのこし、慈恩大師は、穢土のいほりに名をとくむ。ひとりとは佛心宗の根源、ひとりとは法相宗の高祖なり。大國なをしかり、いはんや邊州をや。上古又かくのごとし、いはむや末代をや。苦界やすからず、浮生ゆめのごとし、たゞ聖衆の來迎をのぞむ、更に有爲の遷變をいたまずとて、一首を詠じたまふ

みなをよぶこゑすむやどにいる月は

雲もかすみもさへはこそあらめ

同十二月十三日

同月廿日改元  
安貞元年也

申時にいたりて、律師の給けるは、往生のときすでにいたれり。予が義

の邪正をも、一向專修の往生の手本をも、たゞいまあらはすべきなりとて、彌陀の三尊にむかひ、

五色の糸を手につけ、端座合掌して、高聲念佛二百餘遍のち、彌陀身色如金山、相好光明照十方、唯有念佛蒙光接、當知本願最爲強の文を唱たまふ。門弟正智、唯願等、おなじくこれをとなへて、臨終の一念は、百年の業にすぐれたりと申ければ、すこしるみをふくみ、本尊を瞻仰し、高聲に念佛し禪定に入がごとくして、をはりをとりましたまひぬ。春秋八十なり、彩雲軒をめぐり異香室にみたり、音樂を聞て、きたりて臨終にあふ人これおほし。在世のあひだの奇瑞、臨終のきざみの靈異しげきによりてのせず

#### 第四圖

律師鎌倉をたちて、飯山へくだり給しとき、武州刺史朝直朝臣、廿二歳時相模の四郎と申けるが、御靈のまへにをいつきて、事のよしを申されしに、律師、輿をかきすへさせて、對面したまふ。朝直朝臣、身は武家にむまれたりといへども、心は佛道にかけたり。ねがはくは家業をすてずして、生死をはなるべき道を、をしへ給へと申されければ、律師の給はく、年少の御身、武家のうつはものとして、この御尋にをよぶこと、宿善の内にもよをすなるべし。凡佛教多門なれども、聖道淨土の二門をいでず。しかるに聖道門は、有智持戒の人にあらずば、これを修行すべからず。淨土門は極惡最下の機のために、極善最上の法をさづけられたれば、有智無智をえらばず、在家出家をきはす、彌陀他力の本願を信ずれば、往生うたがひなし。就中末法に入て七百餘歳、時期相應の修行

は、たゞ念佛の一門なり。されば飛錫禪師は、末法にのぞみて、餘行をもちて生死をいとふは、陸地に船をこぐがごとし。他力をたのみて、往生をねがふは、水上に船をうかぶるがごとしと、の給へり。しかれば名號本願の船にのりて、彌陀如來を船師とし、釋迦發遣の順風にほをあげば、罪障の雲もしづまり、妄執の波もたゞずして一念須臾のあひだに、極樂世界七寶池のみぎはにとつかむ事、百即百生さらに疑なし。この安心たがひ給はずば、たとひ戰場に命をすつとも、往生さはりあるべからずとの給ければ、朝直朝臣、たちまちに眞實の信心をおこして、毎日六萬遍の念佛は、一期退轉すべからずと、誓約せられけるが、三十餘年稱名の薰修をつみて、まのあたり本尊のつげをかうぶり、かねて往生の時をしり、生年五十九歳、文永元年五月一日、出家をとげ、同三日亥刻、高聲念佛四百餘遍、體をせめ、念佛のいきにてをはり給にけり。これひとへに律師一言の勸化による。まことにたうとくぞおぼえ侍る。凡この律師、道心純熟し、練行功つもりて、三昧を發せらけるにや、先師上人の三昧發得して、極樂の依正を拜したまひける事を、人申けるときは、隆寛も、時々は見え候と申されけるが、あしくいひつとおもはれたる氣色にて、一定風氣にて見え候と覺候とぞ申されける。この律師の儀を、多念義となづく、又は長樂寺義ともいへり。長樂寺の惣門のうち、居をしめられける故なり。承久三年のころ、但馬宮より念佛往生の事御尋ありければ、三箇條の篇目たてゝ、くはしくしるし申されけり。かの宮の御夢想には、法然上人隆寛律師は、たがひ

に師弟となりて、ともに行化をたすく、淨土にては、律師は師範上人は弟子、娑婆にては、上人は師範律師は弟子なりとぞ、御覽せられける

## 第五 圖

遊蓮房圓照は、入道少納言通憲の子、信濃守是憲これなり。生年廿一歳にして發心出家す。はじめは法花經をそらにおぼえて讀誦しけるが、のちには上人の弟子となりて一向に念佛す。道心堅固に厭離の心ふかき行者にて、いつとなくうちなみだぐみて、ものおもひすがたにてぞ見えける。一鋪半の淨土の變相を圖して頸にかけ、とゞまりやすむ所ごとにこれをかけて念佛す。最後の所勞の時、安居院の聖覺法印のもとへ、消息をつかはしけり。其狀云、後世のつとめには、なに事をかせむずるとひと申候はゞ、一向に念佛申せと御勸進あるべく候。智者にておはしませば、世間の人さだめてたづね申候はむずらんとて、申候也云云。法印申されけるは、おぼろげならでは、さやうの事申べくもなかりしひとの、もし證をえたることのあるやらむとおぼつかなくて、たづね申さんとおもひしを、やがてうせられにし、遺恨のことなり云云。舍兄修禪院の僧正信憲、ひとにかたられけるは、三寸の火舎に一匣の香をもちて、その香のもえはつるまで合掌して、毎日三時高聲に念佛することひさしくなりぬ。そのあひだ靈證をえたること、たび／＼なり云云。聖覺法印申されける事、思合られ侍り、西山の善峰にてをはりをとる、名號をとなふること九遍、上人すゝめて、いま

一遍とおほせられければ、高聲念佛一遍して、やがていきたえにけり。上人つねには、淨土の法門と、遊蓮房とにあへるこそ、人界の生をうけたる、思出にては侍れとぞおほせられける。厭離穢土の心もふかく、欣求淨土の行も、まことありける故にやと、ありがたくたうとくぞおぼえ侍る

## 第六圖

## 法然上人行狀繪圖 第四十五

勢觀房源智は、備中守師盛朝臣の子、小松の内府重盛公の孫なり。平家逆亂の後、よのはゞかりありて、母儀これをかくしもてりけるを、建久六年、生年十三歳のとき上人に進ず。上人これを慈鎮和尚に進ぜられけり。かの門室に參じて出家をとげおはりぬ。いく程なくて上人の禪室に歸參、常隨給仕首尾十八箇年、上人憐愍覆護他にことにして、淨土の法門を教示し、圓頓戒このひとをもちて附屬とし給ふ。これによりて道具本尊房舍聖教、のこる所なくこれを相承せられき。上人終焉の期ちかづき給て、勢觀房、念佛の安心年來御教誠にあづかるといへども、なを御自筆に肝要の御所存、一ふであそばされて、給はりて、のちの御かたみにそなへ侍らんと申されたりければ、御筆をそめられける狀云、もろこし我朝に、もろくの智者たちのさたし申さるゝ、觀念の念にもあらず、又學問して、念佛の心をさとりなどして申念佛にもあらず。たゞ往生極樂のためには、南無阿

彌陀佛と申て、うたがひなく、往生するぞとおもひとりて申ほかには、別の子細さふらはず。たゞし三心四修など申ことの候は決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞと、おもふうちにもり候なりこのほかおくふかきことを存せば、二尊のあはれみにはづれ、本願にもれ候べし。念佛を信ぜむひとは、たとひ一代の法よく／＼學せりとも、一文不知の愚鈍の身になして、あま入道の無智のともがらに同して、智者のふるまいをせずして、一向に念佛すべし。云云 まさしき御自筆の書なり、まことに末代の龜鏡にたれるものか。上人の一枚消息となづけて、世に流布するこれなり。上人御入滅の後は、賀茂のほとり、さゝき野といふところにすみ給けり。その由來は、上人の御病中にいくよりともなく、車をよする事ありけり。貴女くるまよりおりて上人に謁したまふ、おりふし看病の僧衆、あるいはあからさまにたちいで、あるいは休息しなどしてたゞ、勢觀房一人障子のほかにてきゝ給ければ、女房のこゑにて、いましばしとこそおもひたまふるに、御往生ちかづきて侍らんこそ無下に心ばそく侍れ、さても念佛の法門など、御のちには、たれにか申おかれ侍らむと申さるれば、上人こたへ給はく、源空が所存は選擇集にのせ侍り、これにたがはず申さむものぞ源空が義をつたへるにて侍べきと云云。そのゝちしばし御ものがたりありてかへり給ふ。その氣色たゞびととおぼえざりけり。さる程に僧衆など、かへりまいれりければ勢觀房、ありつるくるまのゆくゑおぼつかなくおぼえて、をいつきて見いれむとし給ふに、河原へ車をやりいだして、きたをさしてゆ

くが、かきつけやうに見えずなりにけり。あやしき事かぎりなし。かへりて上人に、客人の貴女たれひとにか侍らんと、たづね申されければあれこそ韋提希夫人よ、賀茂の邊におはしますなりと仰せられけり。この事末代にはまことしからぬ程におぼゆるかたも侍れども、ちかく解脱上人明恵上人なども、かやうの奇特おほく侍けり。この上人はいますこし宿老にて、行徳もたけ三昧をも發得せられて侍れば、權化のよしをあらはし給はむ事、おどろくにたらず。勢觀房まのあたり、この不思議を感じせられるゆへに、上人遷化の後、社壇ちかく居をしめて、つねに參詣をなんせられる。勢觀房一期の行狀は、たゞ隱遁をこのみ自行を本とす、をのすから法談などはじめられても所化五六人よりおほくなれば、魔縁きをひなむ、ことごとくして、とゞめられなどぞしける。生年五十六、曆仁元年十二月十二日、頭北面西にして、念佛二百餘遍、最後には陀佛の二字ばかりきこえて、息絶給にけり。功德院賀茂神宮堂也の廊にておはり給ふに、佛前より異香薫じて臨終所にいたる、そのひとすぢのにはひ、數日きえざりけり

## 第一 圖

遠江國蓮華寺の禪勝房は、天台宗を習學しけるが、自身の器をはかるに、この教によりて、順次に生死をいでん事、いかにもありがたくおぼえければ、熊谷の入道、念佛往生のむねをならひたるよしをきゝて、かの所にたづねゆきぬ。禪門ほゞ教訓をくはへてのち、くはしき事は、わが師法然

上人にたづね申さるべしとて、擧状をあたえければ、上洛して吉水の御房にまいりて、無智の罪人の極樂淨土に往生する事の候なるを、うけ給はらむと申ければ、上人仰られるは、その極樂のあるじにておはします阿彌陀佛こそ、なに事もしらぬ罪人どもの、諸佛菩薩にも捨はてられ、十方の淨土にも門をさゝれたるともがらを、やす／＼とたすけすくはむといふ願をおこして、十方世界の衆生を來迎したまふ佛よ、かしこくぞおもひより給ける。心をしづめてよく／＼きかるべし。唐土より日本國に、わたりたる一切經は、五千餘卷あり。そのなかに雙卷無量壽經、觀無量壽經、小阿彌陀經、これを淨土の三部經となづけて、往生極樂のやうをときたまへる經なり。むかし法藏比丘と申し、入道、四十八の願をたて、極樂淨土を建立して、一切衆生を、平等に往生せさせんれうに、われ佛になりたらむ時の名を、稱念せん衆生を、來迎せむといふ願をおこして、眞實に往生せんとて、念佛申衆生をむかへをきて、佛になし給なり。四十八願のなかの第十八願これなりとて本願のむなしからざるいはれ、念佛して往生すべきおもむき、こまかにさづけられけり。上人給仕の御弟子のなかに、信心堅固のほまれありき

このひじり、不審なる事どもをたづね申けるにつきて上人御返答の條々

一、自力他力と申事はいかやうにか心得待べきと。上人のたまはく、源空は、いふかひなき邊國の士民なり。またく鼻殿すべき器にあらねども、上よりめされしかば二度まで殿上へまいりたりき

これしかしながら上の御ちからなり。この定に、極重惡人、無他方便の凡夫は、かつて報身報土の極樂世界へ、まいるべき器にあらねども、阿彌陀佛の御ちからなれば稱名の本願にこたへて、來迎にあづからん事なにの不審があるべき。わが身の罪をもく、無智の者なれば、いかが往生をとげむやと疑べからず。さやうに疑がはむものは、いまだ佛の願をしらざるものなり。かくのごときの罪人をすくはむための本願なり。この名號を唱ながら、ゆめ／＼疑事あるべからず。十方衆生の願のなかには、有智無智、有罪無罪、善人惡人、持戒破戒、男子女子、乃至三寶滅盡の、後の百歳のあひだの衆生までも、もるゝ事なし。かの三寶滅盡の時の衆生は命のながきは十歳なり。戒定惠の三學、その名をだにもきかずといへり。これらの衆生までも、念佛せば來迎に預べしと知ながら、わが身すてらるべしといふ事をば、いかゞ心得出べきや。たゞし極樂のねがはれず、念佛の申されざらむばかりは、往生のさはりとなるべし。念佛にももうき人は、無量のたからを失べき人なり。念佛にいさみある人は、無邊のさとりをひろくべき人なり。相構て願往生の心にて念佛を相續すべきなり。我ちからにてはおもひよるまじき罪人の、念佛するゆへに本願に乗じて極樂へまいるを、他力の願とも超世の願ともいふなり。案内をしらざる人は機をうたがひて往生せざるなり。道心者智者などの念佛こそ、往生はし給らぬ。あけくれ罪をのみつくり、一文字をだにもしらざらむものは、念佛申とても、往生不定なりと疑ものは、本願には善惡の機を

かねて、おこし給へりといふ事をしらぬ人なり。先世の業によりてむまれたる身をば、今生の中にあらためなをす事なし。女人の男子とならんとおもへども、今生の中にはかなはざるがごとし念佛の機はたゞむまれつきのまゝにて念佛をば申なり。智者は智者にて申てむまれ、愚者は愚者にて申てむまれ、道心ある人も申てむまれ、道心なき人も申てむまる。乃至富貴のものも貧賤のものも、慈悲あるものも、慈悲なきものも、欲ふかきものも、腹あしきものも、本願の不思議にて念佛だにも申せばいづれもみな往生するなり。念佛の一願に萬機をおさめておこし給へる本願なり。たゞござかしく機の沙汰をばせずして、ねむごろに念佛だにも申せばみなことごとく往生するなり。念佛往生の義を、かたくふかく申さん人をばつやく本願をしらざる人と心得べし。源空が身も、檢校別當どもがくらひにてぞ往生はせんずる。もとの法然房にてはえし候はじ。としごろ習たる智慧は、往生のためには要にも立べからず。されども習たるしには、かくのごとく知たるは、はかりなき事なり。淨土一宗の、諸宗にこへ、念佛一行の、諸行にすぐれたりといふ事は、萬機を攝するかたをいふなり。理觀、菩提心、讀誦大乘、眞言、止觀等、いづれも佛法の、をろかにましますにはあらず。みな生死滅度の法なれども、末代になりぬれば、ちから及ばず。行者の不法なるによりて、機がよばぬなり。時をいへば、末法萬年のうち、人壽十歳につゞまり、罪をいへば、十惡五逆の罪人なり。老少男女のともがら、一念のたぐひにいたるまで

みなこれ攝取不捨のちかひにこもれるなり。このゆへに諸宗にこへ、諸行にすぐれたりとは申なり

一、臨終の一念は、百年の業にすぐれたりと申候は、平生のうちには、臨終の一念ほどの念佛は申いだすまじく候やらんと。上人の給はく、具三心者必生彼國と、かゝれたれば、三心具足の念佛は、百年の業にすぐれたる臨終の一念とおなじ事なり。必文字のあるゆへに

一、念佛の行者毎日の所作に、こゑをたへざるもあり。又心に念じて數をとる人もあり。いづれを本とすべく候やらむと。上人のたまはく、口にとなへ心に念ずる、おなじ名號なれば、いづれもみな往生の業となるべし。ただし、佛の本願は稱名と立給がゆへに、こゑにいだすべきなり。經には、令聲不絕具足十念とゞき、釋には稱我名號下至十聲と判じ給へり。わが耳にきこゆるほどを、高聲念佛とするなり。但機嫌をしらず、高聲すべきにはあらず。地體はこゑにいださむとおもふべきなり

一、餘佛餘經につきて、結緣助成せん事は、雜行となるべく候やらむと。上人のたまはく、決定往生の信をとりて、佛の本願に乗じてむうへには、他の善根に結緣助成せん事、またく雜行となるべからず。往生の助業となるべきなり。善導の釋のなかに、すでに他の善根を隨喜し、自他の善根をもて、淨土に廻向すと判じ給へり、この釋をもて知べきなり

一、持戒のものゝ念佛の數遍すくなきと、破戒のものゝ念佛の數反のおほきと、往生の後の位の淺いかゞ候べきと。上人坐し給へる疊をさしての給はく、たゞみのあるにつきてやぶれたると、やぶれざるとをば、論ずべきなり。疊なくば、いかゞやぶれたると、やぶれざるとをば論ずべきや。そのやうに末法のなかには持戒もなく、破戒もなし。たゞ名字の比丘のみあり。傳教大師の末法燈明記に、そのむねあきらかなり。このうへは持戒破戒の沙汰あるべからず。かくのごとくの凡夫のために、おこしたまふ本願なれば、たゞいそぎてもいそぎても、名號を稱すべし

一、後生をば彌陀の本願をたのみ申さば往生うたがひなし。現世をば、いかゞはからひ候べきと。上人の給はく、現世をすぐべきやうは、念佛の申されんかたによりてすぐべし、念佛のさはりになりぬべからん事をばいとひすつべし。一所にて申されずば、修行して申べし。修行して申されずば一所に住して申すべし。ひじりて申されずば在家になりて申べし。在家にて申されずば遁世して申べし。ひとりこもり居て申されずば、同行と共行して申べし、共行して申されずば、一人こもり居て申べし。衣食かなはずして申されずば、他人にたすけられて申べし。他人のたすけにて申されずば、自力にて申べし。妻子も從類も、自身たすけられて、念佛申さんためなり。念佛のさはりになるべくば、ゆめくもつべからず。所知所領も、念佛の助業ならば大切なり。妨げならはもつべからず。惣じてこれをいはゞ、自身安穩にして、念佛往生をとげむがためには、な

に事もみな念佛の助業なり。三途にかへるべきことをする身をだにも、捨てなければかへりみはぐくむぞかし。まして往生すべき念佛申さむ身をば、いかにもはぐくみもてなすべし。念佛の助業ならずして、今生のために身を貪求するは、三惡道の業となる。往生極樂のために自身を貪求するは、往生の助業となるなりとぞ仰られける。巴上  
取證

本願のうたがひもなく、往生のおもひも治定せられにければ、上人の座下を辭し、下向の暇を申ける時、上人京つとせんとて、聖道門の修行は、智慧をきはめて生死をはなれ、淨土門の修行は、愚痴にかへりて極樂にむまると、心得べしとぞ仰られける。さて本國にかへりては、ふかくその徳をかくして、番匠を藝能として、世をわたるはかり事となむせられけるを、隆寛律師、配所におもむかれし時、當國みつけの國府といふ所に、逗留せられたりけるに、近隣の地頭ども、結縁のためにきたり、あつまれるに、さても、この國に、蓮花寺といふ所に、禪勝房と申ひじりや侍ると、たづねらるゝに、そこにはさるべきひじり更におぼえ侍らず、番匠にて禪勝と申ものこそ侍れと申に、いかにもあやしく侍り、状をつかはしてたづね心み侍らんとて、ふみをかきてつかはされたりければ、これをひらきみて、とりあへずはしりきたれり。律師庭におりむかひて、手とりてひきのぼせ、たがひになみだをながして、往事をかたられけり。日來あなづりおもひつる武士ども、目もあやにみけり。律師申されけるは、いかに故上人の仰には、禪勝房は、身ひとり往生すべきものにて

はなきなりとこそ仰られしに、無下にさ様に、むなくすごし給はん事、うたてきわぎなりとい  
さめ申されければ、おほせまことにいはれたる事なりとてわかれ給ふ。律師よになごりをしげに見  
をくられけり。律師の弟子どもはるかにをくりて、たま／＼あひたてまつれるしに、なに事に  
ても、御一言をかうぶらんと申ければ、しばしものものはざりけるが、たちかへりて、かまへて  
おの／＼念佛つねに申くせづきで、往生し給へとぞの給ける。其後は國中の貴賤、たうとみあがめ  
ければ、番匠にてもえおはせず。念佛の化導もひろくぞ侍ける

このひじりの申されけるは、淨土宗の學門の所詮は、往生極樂はやすき事と、心得るまでが大事  
なる也。やすしと心得つれば、やすかるべき事也。しかるに近代の學生の異義まち／＼なるは、聖  
教甚深なれば、邪正辨がたし。但上人の仰には、さしもの事はなかりきとぞの給ける。さて或人に  
往生をばいか程にか思定られて侍るとはれければ、左のこぶしを、右のこぶしにてうたむに、う  
ちはづすまじきほどにおぼえ候と、申けるをき／＼給て、あなあぶなやと申されければ、さればそれ  
にすぎては、なにと思さだめられ侍らんと申ければ、生あるものゝ、死に歸せんずる程に、一定と  
思なり。わがこぶしにて、わがこぶしをうたんは、をのづからはづるゝ事もあらんずるぞかしとぞ  
申されける。廿九のとしより、一向稱名のほか、更に他のつとめなかりき。生年八十五歳、正嘉二  
年の九月より、すこしき病惱の事あり。死期にさきだつ事五六日、上人を拜したてまつる、十月三

日の戌尅に、蓮華のふるなり。人びとこれをみよとつけ、又たゞいま迎接の儀式ありとしめし、寅刻のはじめにいたりて、観音勢至すでにきたり給へりとて、おき居て端坐合掌し、高聲念佛三反してをはりをとる、正嘉二年十月四日寅刻なり

## 第二 圖

俊乗房重源は、上の醍醐の禪徒にて、眞言の薰修ふかゝりけるが、上人の徳に歸して往生をねがひ、師資の禮をあつくせられけり。大原の座主上人と法談の時も、門弟三十餘人を相率して、その座に攝せられき。治承の逆亂に、南都東大寺焼失のあひだ、このひじりをもちて、大勸進の職に補せらる。すでに造營をくはだつるころ、工の器用をえらばんために、ある番匠をめして、屋をつくらむとおもふに、たる木のしたに木舞をうたん事、いかがあるべきとゞひ給ふに、番匠さるやづくり、いまだ見及候はずと申けるを、おもふやうあり。たゞつくれといはれければ、あるまじき事しいでて、傍輩にわらはれんこといとよしなきわざに侍りと申す。あまたの番匠みなさやうにのみ申けるなかに、一人領狀するあり。かゝる屋、日ごろもつくりたる事侍りやととひ給に、さることは侍らねども、なにともおしへ給はんまゝにこそ、つくり心み侍らめと申ければ、その時、まことにそのまゝにつくらんとはあらず。たゞ心のほどをしらむためにいひつるなりとて、すなはちかれを大工として東大寺をば、つくりたてられけるとなん。おほかたよろづにはかりごとかしこきひと

なりければ、そのころのことわざにて、支度第一俊乗房とぞ人申ける。備前周防、兩國を給はりて造營の功をおへ、建久六年三月十二日、供養をとげられる。天子行幸ありき。鎌倉の右幕下、結縁のために上落。都鄙群をなして、嚴重の法會なりけり。十一間二階の大佛殿、金銅十丈八尺の盧舎那如來、同時につくりたて、みがきいだされけん。おぼろげの心をきてにて、かなふべき事にあらず。されば建久三年十一月、當寺かさねて供養の御願文六角中納言親經卿の草也于時參議にも、たゞびとにあらざるよしのせられて侍り。上人の勸化にしたがひて、念佛を信仰のあまり、かの故山上の醍醐に無常臨時念佛をすゝめて、末代の恒規とし、そのほか七箇所に、不斷念佛を興隆せられき。東大寺の念佛堂高野山の新別所等これなり。そのつとめ、いまにたえずとなんうけ給はる。このひじり若年のむかし、天狗にとられて、ある所へをはしたりけるを、これはゆくすゑに、おほきなる利益をなさむずる人なり。すみやかにゆるすべしと、かたへの天狗制し申けるによりて、ゆるされにけるよし申つたへて侍り、その詞たがはざりける。不思議の事なり。建久六年六月六日、東大寺にして、おはりをとられにけるとなむ

### 第三 圖

## 法然上人行狀繪圖 第四十六

鎮西の聖光房辨長又號辨阿は、筑前國加月庄の人なり。生年十四歳より、天台宗を學す。廿二歳壽永二年の春、延曆寺にのぼりて、東塔南谷觀叡法橋の室にいる。のちには寶地房法印證眞につかへて一宗の祕蹟をうけ、四明の奥義をきはむ。廿九歳、建久元年に故郷にかへりて、一寺山の學頭に補す。三十二のとし、世間の無常をさとりて、無上道心をおこし、今生の名利をすて、身のうち資糧をもとむ。建久八年吉水の禪室に參ず。時に上人六十五、辨阿三十六なり。ひそかにおもはく、上人の智辨ふかしといふとも、なむぞわが所解にすぎむやと、こゝろみに淨土門の樞樞をたゞく。上人答へての給はく、なんぢは天台の學者なれば、すべからく三重の念佛を分別してきかしまむ。一には摩訶止觀にあかす念佛、二には往生要集にすゝむる念佛、三には善導の立給へる念佛なりとて、くはしくこれをのべ給ふ。文義廣博にして智解深遠なり。崑崙のいたゞきをあふぐがごとし。蓬瀛のそこをのぞむにゝたり。ひつじより、ねの時にいたるまで、演說數尅にをよぶ、これをきくに、高峯の心やみ、渴仰の思ふかし、まことに凡夫解脱の直路は、淨土の一門、念佛の要行にしかざりけりと信解して、ながく上人に、師事て、暫も座下をさらず。ひさしく一宗を習學して、つぶさに庭訓をうけられけり。翌年建久九年の春、上人選擇集を聖光房にさづけらる。これ月輪殿の仰によりて撰る所なり。いまだ披露に及ばずといへども、汝は法器なり。傳持にたへたり。はやく此書をうつして、末代にひろむべしと仰られければ、かたじけなく頂戴してうけぬ。我大師釋尊

は、たゞ法然上人なりとぞ、たとび申されける。同年八月に、上人の嚴命をうけて、豫州に下て念佛をすゝむ。その化にしたがふものかずをしらず。又建久十年二月に歸洛して上人に奉仕す。それより元久元年七月にいたるまで六ケ年、寸陰をきおひて、釋文を研覈し、一宗の深奥をきはむること、みづをうつはものうつつすがごとし

## 第一 圖

ついに學なり功をへて、元久元年八月上旬、吉水の禪室を辭して、鎮西の舊里にかへり、淨土一宗を興するに、利益四遠にあまねし。こゝにある學者、上人の門弟と號して云、淨土甚深の祕義は天台圓融の法門におなじ。これ此宗の最底なり。又密々の口傳あり。金剛寶戒これなり。善導の雜行を制して、專修をすゝめ給は、暫初心の行人のためなり。さらに實義にあらず。これすなはち上人の相傳なりと云云。此眞僞をあきらめむがために、元久二年三月、門弟度脫房をつかひとして、書狀を上人に進するに、件の兩條くはしくこれをかきのせて、むかし座下に侍りしに、漢家の先賢、淨土の法門を釋する。その義蘭菊なれども、善導の御心は、彌陀の本願の專修正行、これ往生極樂の正路、この宗の元意なるよし。つねに仰をうけ給はりき。いまだかくのごときのことをきかず。これ機なを熟せざるゆへに、御教訓を蒙らざるか。はやく一家の狼籍をとゞめ、末代の念佛を印持せむがために、御在世のときは是非を決斷し、御證判を給はりて、專修の一行をたてむと思ふ。

取意  
略抄

こゝに上人てづから筆をそめて、彼狀に勘付せられて云、已上二ヶ條、以外僻事也。源空全以如是事不申候。以釋迦彌陀爲證。更々如然僻事所不申候也。云云 上人自筆の誓文、末代念佛の龜鏡なり。彼書いま々さしく世にあり。たれかこれをうたがはむ。この相傳の義、すこぶる信受するにたれる者歟

## 第二 圖

此ひじり、安貞二年の冬、肥後國往生院にして、四十八日の別時念佛を修せられしとき、後昆の異義をいましめむがために、一卷の書を製す。これを末代念佛授手印となづく。上人相傳の義勢、つぶさにかの書にのせたり。著述ことをへてのち、善導大師、まのあたり、道場に影現し給ふことありけり。これすなはち、のぶるところの法門の證明なるべし。ひじりこれを拜して、われすでに證を得たりとて、感涙をながされけり。又筑後國高良山のふもとに一の精舎あり。厨寺と號す。丈六の彌陀の像を安置す。聖光房かの道場にして、一千日如法念佛を修し給ふに、八百日にをよむで高良山の大衆僉議していはく、當山はこれ眞言止觀の學地也。此山のふもとにして專修念佛の勤行しかるべからず。かの砌に發向して、念佛衆を追出すべしと、衆儀ことをへにければ、をのく明曉を期す。念佛衆この事をきゝて、すみやかに退出すべきよしを申すに、ひじりの給はく、汝等はよろしく心にまかすべし。我はさらにいづべからずと、此うへはみな退出の思をやめて、惡徒のき

たるをまつ程に、おもひのほかに一山の衆、色々の供物をさゝげてきたりていはく、きのふ念佛停癡の悪計をなすに、今夜、靈夢を感じることあり。赫奕たる光明、にしよりきたりて此道場をてらす、あやしみたづぬるところに、かたはらに人ありていはく、聖光上人念佛を行するゆへに、かのほとけひかりをはなちて、つねにこのみぎりをてらすなりと、諸人の夢一同なり。これによりてみな前非を改悔して、慚謝のために群參すと云云。それよりのちは、一山歸依をなし四輩信心をましけるとぞ。

### 第三 圖

筑後國山本の郷に、一寺を建立して、善導寺と號す。のちにはあらためて光明寺となづく、此寺にして、上人相承の法門を住持し、念佛往生の解行を弘通すること、一生ををふるまで、片時も癡することなし。このひじり、淨土門にいりしよりのちは、毎日に六卷の阿彌陀經、六時の禮讚ときをたがへず。又六萬反の稱名をこたることなし。初夜のつとめをはりて、一時ばかりぞまどろまれける。そののちはおきあつゝ、あくるまで高聲念佛たゆむことなかりけり。つねの述懐には、人ごとに関居の所をば、高野粉河と申あへども、我身には、あか月のねぎめのとこにしかずとぞおもふと。また安心起行の要は、念死念佛にありとて、つねのことわざには、出るいき、出るいきをまたず。いるいき、出るいきをまたず。たすけ給へ阿彌陀ほとけ、南無阿彌陀佛とぞ申されける。嘉禎

三年十月より病惱、同四年正月十五日ひつじの尅門弟をあつめて、來迎の讃を誦し念佛せしむ。聽聞のあひだ、隨喜のなみだをながしていはく、極樂の聖衆は、天にみちく給へりと、聞く人奇特の思をなす。同廿三日たつの尅、化佛來現し給ふよし門弟にしめす。同二月廿七日うしるとき、異香しきりに薫ず。同廿九日未尅、七條の袈裟を着し、頭北面西にして、五色のはたをひかへ、平生の發願にまかせて、一字三禮の自筆の阿彌陀經を、合掌の母指にさしはさみて、念佛すること一時ばかり、最後にはことに高聲にとなへて、光明遍照とて、いまだつぎの句にいたらざるにねぶるがごとくして寂に歸す。春秋七十七、夏禰六十四也。命終の時にあたりて、五色の雲天にそびき、又紫雲なゝめにいほりをおほふ。道俗群集して、あまねくこれをみる。又入滅の翌日より、上妻の天福寺聖の舊居の本房のうへに紫雲たなびくこと三ケ日、村里に見る人おほし。又臨終のきざみも、とをくより、紫雲におとろきて來て、入滅にあふともからあり、又草野が郎等なりけるものゆめに、當寺に迎講あり。ひじり、手に金字の阿彌陀經をもち給へりと見てさめぬ。すなはち往生のよしをききて、はせきたりて入滅の儀を拜するにさらにゆめの所見にたがはずとて、ふかく隨喜しけり。しかのみならず、平生の祥瑞、終焉の靈異、そのかずはなはだおほし。あるひはまのあたり和尚を拜し、あるひはあらたに彌陀を見たてまつり、或は極樂の依正目のまへに現じ、或は釋尊の光明身のうへをてらす。又門弟敬蓮社は、ゆめに、師はこれ善導の再誕なりと見、ある人は、彌陀の垂迹な

りを見る。かくのごときの奇瑞、そのかずありといへども、しげきによりてのせず

#### 第四圖

かの製作の念佛往生修行門云、世の中の念佛者、故上人の御流とは申あひて侍れども、上人の御義にはなかりしことどもを、申込みり侍こそ、不便の次第に侍れ。故上人、辨阿にをしへ給しは、善導の御心は、淨土へまいらむと思はん人は、かならず三心具足して、念佛を申べきなり。一に至誠心と云は、まことしく往生せんとおもひとりて、念佛を申也。二に深心と云は、我身は罪惡生死の凡夫なり。しかるに彌陀の本願のかたじけなきによりて、この念佛より外に、我身のたすかるべきことなしと、かたく信ずるを申也。三に廻向發願心と云は、たゞひとすぢに極樂にまいらむずるための、念佛なりと思をいふ也。これぞ法然上人より、習つたえたてまつりたる三心にて侍る。この外またく別のやうなき也。故上人の仰られ候しは、在家のいとまなからむひとは一萬二萬などをも申べし。僧尼なむどゝて、さまをかへたらんしるしには、三萬六萬などを申べし。いかにもおほく申すにすぎたる法門はあるべからず。詮ずるところ、此念佛は決定往生の行なりと信をとりぬれば、自然に三心を具足して、往生するぞと、やすくと仰られ侍しなり。もしこれならぬことを、ならいたりといひ、仰られぬことを、仰られたりと申侍らば、三世の諸佛、十方の菩薩、ことにはたのみたてまつる所の、釋迦彌陀、觀音勢至、善導聖靈、念佛守護の梵天帝釋等の、御あはれみな

くして、現世後世、かなはぬ身となり侍らむ。己上略抄 上人口決の次第、誓言嚴重なり。そのうへ此ひじりすでに奇瑞をあらはして、往生をとげられぬ。得益法門にかなふ。所述たれか信受せざらむ。されば勢觀房は、先師念佛の義道をたがへず申人は、鎮西の聖光房なりとぞ申されける。かのひじり嘉禎三年九月二十一日、聖光房に送られける狀云、相互不見參候て、年月多積候、于今存命、今一度見參今生難有覺候、哀候者歟、抑先師念佛之義末流濁亂、義道不似昔、不可說候、御邊一人正義傳持之由承及候、返々本懷候、喜悅無極思給候、必遂往生本望、可期引導值遇緣候者也、以便宜捧愚札、御報何日拜見哉、他事短筆難盡候、云云其後文永の比、聖光房附法の弟子、然阿彌陀佛と、勢觀房の附弟蓮寂房と、東山赤築地にて、四十八日の談義をはじめし時、然阿彌陀佛をよみくちとして、兩流を校合せられけるに、一として違するところなかりければ、蓮寂房の云、日比勢觀房の申されしことは、いまずでに符合しぬ。予が門弟にをきては、鎮西の相傳をもて、我義とすべし。さらに別流をたつべからずと、これによりて、かの勢觀房の門流は、みな鎮西の義に依附して、別流をたてずとぞうけたまはる。その外安居院の聖覺法印、二尊院の正信房なども、わが義のあやまらぬ證誠には、聖光房をこそ申されけれ。當世筑紫義と號するは、かの聖光房の流にて侍るとなむ

## 法然上人行狀畫圖 第四十七

西山の善惠房證空は、入道加賀權守親季朝臣法名證玄の子なり。久我の内府通親公の猶子として、生年十四歳の時、元服せしめむとせられるに、童子さらうへなはず。父母あやしみて、一條堀川の橋占をとひけるに、一人の僧、眞觀清淨親、廣大智惠觀、悲觀及慈觀、常願常瞻仰と、なへて、東より西へゆくありけり。宿善のうちにもよをすなりけりとて、出家をゆるさんとするとき、師範の沙汰のありけるをきゝて、童子のいはく、法然上人の弟子とならむと、これによりて、建久元年上人の室に入、やがて出家せさせられて、解脱房と號す。たゞし笠置の解脱上人と同名なるによりて、これをあらためて善惠房とつけられき。その性俊逸にして、一遍見聞するに、通達せずといふ事なし。上人にしたがひたてまつりて、淨土の法門を稟承する事、首尾廿三年自十四歲至卅六歲なり。稽古に心をいれて、善導の觀經の疏を、あけくれ見られける程に、三部まで見やぶられけるとぞ、申傳侍る

### 第一圖

このひじりの意巧にて人の心得やすからむために、自力根性の人にむかひては、白木の念佛といふ事をつねに申されにけり。その言にいはく、自力の人は、念佛をいろどるなり。或は大乗のさと

りをもて色どり、或はふかき領解をもていろどり、或は戒をもていろどり、或は身心をととのふをもて色どらんと思なり。定散のいろどりある念佛をば、しおほせたり、往じやううたがひなしとよるこび、いろどりなき念佛をば、往生はえせぬとなげくなり。なげくも、よろこぶも、自力の迷なり。大經の法滅百歳の念佛、觀經の下三品の念佛はなにのいろどりもなき、白木の念佛也。本願の女の中の至心信樂を、稱我名號と釋給へるも、白木になりかへる心也。所謂觀經の下品下生の機は佛法世俗の二種の善根なき無善の凡夫なるゆへに、なにの色どり一もなし。況や死苦にせめられて忙然となる上は、三業ともに正體なき機なり。一期は惡人なる故に、平生の行の、さりともとたのむべきもなし。臨終には死苦にせめらるゝ故に、止惡修善の心も、大小權實のさとりも、かつて心にをかす、起立塔像の善も、この位にはかなふべからず。捨家棄欲の心も、このときはおこりがたし。まことに極重惡人なり。更に他の方便ある事なし。もし他力の領解もやある、名號の不思議をもや、念じつべきと、をしふれども、苦にせめられて、次第に失念するあひだ轉教口稱して、汝若不能念者、應稱無量壽佛といふとき、意業は忙然となりながら、十聲佛を稱すれば、聲々に八十億劫の罪を滅して、見金蓮花、猶如日輪の益にあづかる也。この位には機の道心もなく、定散の色どり一もなし。たゞ知識のをしへにしたがふばかりにて、別のさかしき心もなく、白木にとなへて往生する也。たとへば、をさなきものゝ手をとりにて、物をかゝせんがごとし。あに小兒の高名な

らんや。下々品の念佛も、又かくのごとし。たゞ知識と彌陀との御心にて、わづかに口にとなへて往生をとぐるなり。彌陀の本願は、わきて五逆深重の人のために、難行苦行せし願行なる故に、失念の位の白木の念佛に、佛の五劫兆載の願行つづまりいりて、無窮の生死を一念につゞめて、僧祇の苦行を一聲に成ずる也。又大經の、三寶滅盡の時の念佛も、白木の念佛なり。その故は、大小乘の經律論、みな龍宮におさまり、三寶ことごとく滅しなむ、閻浮提には、冥々たる衆生の、惡の外には善といふ名だにも、更にあるべからず。戒行ををしへたる律も滅しなば、いづれの教によりてか、止惡修善の心もあるべき。菩提心をとける經もしさきだちて滅せば、いづれの經によりてか、菩提心をもおこすべき。このことはりを、しれる人も世になければ、ならひて知べき道もなし。故に定散の色どりは、みなうせはてたる、白木の念佛、六字の名號ばかり、世には住すべきなり。そのとき聞て一念せん者、みなまさに往生すべしとゞけり。この機の一念十念して往生するは、佛法のほかなる人の、たゞ白木の名號の力にて、往生すべきなり。しかるに、當時は大小經論もさかりなれば、かの時の衆生には、事の外にまされる機なりと、いふ人もあれども、下根の我等は、三寶滅盡の時の人にかはる事なく、世は猶佛法流布の世なれども、身はひとり、三學無分の機なり。大小の經論あれども、つとめ學せむと思ふ心ざしもなし。かゝる無道心の機は、佛法にあへる甲斐もなき身なり。三寶滅盡の世ならば、力およばぬかたもあるべし。佛法流布の世に生ながら、戒をも

たもたず、定恵をも修行せざるにこそ機のつたなく、道心なき程もあらはれぬれ。かゝるをろかなる身ながら、南無阿彌陀佛と唱ところに、佛の願力ことごとく圓滿する故に、こゝが白木の念佛のかたじけなきにはあるなり。機においては、安心も起行も、まことすくなく、前念も、後念も、みなをろかなり。妄想顛倒の迷は、日ををうてふかく、ねてもさめても、悪業煩惱にのみ、ほだされ居たる身の中よりいづる念佛は、いと煩惱にかはるべしともおぼえぬうへ、定散の色どり、一もなき稱名なれども、前念の名號に、諸佛の満足を攝する故に、心水泥濁にそまず、無上功德を生ずるなり。中々に心をそへず、申せば生と信じて、ほれぐと南無阿彌陀佛とゝなるが、本願の念佛にてはあるなり。これを白木の念佛とは、いふなりとぞの給ける。已上見于門弟記錄念佛の行は、機の淨穢をいはず、罪の輕重によらず、貴もいやしきも、智者も愚者も、申せば皆往生する行なるを、自力根性の人は、定散の色どりを指南として、採色なき念佛をば、往生せぬいたづらものぞと思へる事しかるべからず。自力根性をすてゝ、他力門にむかへとなり。さればとて、大乘のさとりある人、ふかき領解のある人、戒をたもてる人などの申念佛は、わろしとはあらず、よくくこの分別をわきまふべきものなり

## 第二 圖

津の戸の三郎入道尊願、不審なる事をば、上人往生の後は、善恵房にたづね申けり。しかるに文

曆の比、關東の念佛者の中に、善惠房の義とて、心えぬ事どもを、披露しけるにつけて、かの入道善惠房にたづね申ける狀云、念佛往生の間事、彌陀の本願にまかせ、善導和尚の御釋、故上人の御房の御すゝめによりて、上百年にいたり、下一日七日十聲一聲にいたるまで、念佛往生は、決定のよしをうけ給て、往生をねがひ候所に、仰の候とて、當時關東の學生の中に、無智にては、つとめたりとも、臨終しづかにをはりたりとも、往生したりとは思べからず。又學問したらむものは、たとひ臨終のとき、いかなる狂亂をし、くるい顛倒したりとも、決定往生なりと申候。この事御房中に、いかやうに思食たりといふ事、慥の便宜のとき仰らるべく候。加様に申せば尊願が、そへなき事を申とぞ、おぼしめしぬべき事にて候へとも、學問せぬ人の、なげき申あひだ申候云云 同年九月三日、善惠房の返狀云、學問せざるひら信じの念佛は、往生すべからざるよし、この邊に申ときこへ候らん、極たるひが事に候也。ひらに信じて學問せざるも、又文につきて學するも、をちつく所はたゞおなじく、南無阿彌陀佛にて、往生すべき事にてこそ候へ、乃至或はひらに願力を信じて、わが心にたりぬとおもひて、念佛する人も候。或は本願を信するうへに、いよいよことはりをあきらめむために、學問する人も候。意樂おなじからずといへども、往生はまたくことならず。しかるを學問する人は、學せざるをそしり、學せざる人は學問するひとをそしる事、あひたがひにきはめたるひが事也。たゞ所詮は、法藏菩薩の、乃至十念のちかひにこたえて、衆生稱念せば、かならず

むまるべきことはりのきはまりて、すでに阿彌陀佛になりて、善惡の凡夫をもらさず、接し給へる故に、釋迦もこれをとき、諸佛の證誠もむなしからざる事をたのみて御念佛候はゞ、更く御往生うたがひなく候。このむねをこそ、ふかく存ずる事にて候へば、人にも申きかせ、身にも存じ候へ己上又同年十月十二日の狀云、無智の人は往生せず。臨終正念にて命終すとも往生とは定べからず取詮學生はたとひ臨終狂亂すとも、なをこれ往生也といふ事、返々ひが事にて候也。無智の人往生せずといはゞ、彌陀の本願すでに機をきらふになる、その理しかるべからず。他力本願を信せば、有智無智みな往生すべし。信心をおこして後には、學不學は人の心にしたかふべき也。本願を信ずる人正念に住せんうへは、なむぞ往生せずといふべきや。又學生は臨終狂亂すとも、往生と定べしといふ事、經釋の中に、その文惣じて見及候はず。道理また然べからず。凡往生極樂におきては、もはら本願を信ずるによる。またく學生によらず。また無智によらざる也。信心もしおこらば、有智も無智も臨終はかならず正念に住すべし。なむぞ學生にいたりて正念をすてむや。もし學生なりとも臨終狂亂せんは、もとより信心なき故也。但下品下生の、此人苦逼、不違念佛等の文に、異義を成するともから候歟。この文の心は、たゞ死苦の失念なり。またく狂亂顛倒の相にあらず。されば釋には臨終正念、金花來應也といへり。たとひ病死の苦痛ありとも、念佛の行おこたらずば、かならず正念といふべき也。苦痛とその體大にことなるゆへに候。かくのごときの荒説、御信用あるべか

らず。たゞ一向本願をたのみて、御念佛おこたらず候はむ事、本意たるべく候也。已上 取證 これらみな  
自筆判形の状等なり。龜鏡とするにたれり。仰でこれを信ずべし。加之九條の入道將軍の御尋につ  
きて、善惠房しるし申されける状云、三心具足の念佛は、佛の願に相應する故に、かならず攝取の  
利益をかうぶる。この攝取の故を釋するに、親縁近縁増上縁の三の心あり。一に親縁といふは、こ  
の鈍根無智の機をもらさず、攝取すべきいはれより、正覺を成じ給ふ。無碍光の體なる故に、かの  
佛の三業の功德我等が煩惱惡業の、三業にへだつるところなし。故に稱すればきゝ給ひ、禮すれば  
見給ひ、念ずればしり給といへり。是即行者の心の、善惡をかへりみず、たのむ心ふかくなりぬれ  
ば、決定往生すべき稱名ときゝ給ひ、決定往生すべき禮拜と見給ひ、決定往生すべき憶念としり給  
ふ也。されば彼此三業不相捨離と釋給へり。二に近縁といふは、したしき道理きはまりぬれば、我  
等が身口意業を、佛のしり給のみにあらず、又佛の三業をしるべきいはれあるゆへに、みんなとおも  
へばすなはちみえ給也。もしは夢のうち、乃至臨終にあらはれ給ふ。みなこの心也。三に増上縁と  
いふは、かみの二縁の他力にて、成ずるいはれをあらはす也。衆生稱念、即除多劫罪、命欲終時、  
佛與聖衆、自來迎接、諸邪業繫、無能碍者、故名増上縁と釋給へる。衆生稱念、即除多劫罪は、か  
みの親縁の體、他力縁にて成ずるところを、釋しあらはす詞也。命欲終時、佛與聖衆、乃至無碍者  
といへるは、近縁の見佛、他力にて成ずべき道理を、釋しあらはす詞也。故にこの縁は、他力の體

をあらはすを詮とす。かくのごとく心得れば、親縁によりて稱念すれば、無量劫のつみ滅する道理あるをもて、行者の心これにもよをされて、悪をおそれ、悪をとらむる、この心いよくおこたらず、又近縁によりて、凡夫のつたなき眼に報佛をみる大善根きはまりぬれば、この功力にもよをされて、已作の善には、ふかく隨喜の心をおこし、未作の善においては、修習のおもひ増進するが故に、増上縁といふ也。然則三心具足する故に、歸命の心をこる、これを南無といひ、三縁そなはれば、無碍光の體、我等が罪惡の身に、へだつるところなき功德を、阿彌陀佛といふ也。故に南無阿彌陀佛と稱する、この六字の名號に、一代の佛教の本意も、ことごとくにおさまり、十方三世の化物もかしながらそなはるが故に、念々不捨者、是名正定之業、順彼佛願故といはれて、南無阿彌陀佛のほかにも、又餘事なきなり。爰以釋には、自餘衆行、雖名是善、若比念佛者、全非比按也、是故諸經中、處々廣讚念佛功能、如無量壽經四十八願中、唯明專念彌陀名號得生、又如彌陀經中、一日七日、專念彌陀名號得生、又十方恒沙諸佛、證誠不虛也、又此經定散文中、唯標專念名號得生、此例非一也、廣顯念佛三昧竟と判給へり。かくのごとく、三心三縁、重々に分別すれば、あやまるところなくして、この愚惡の凡夫、直に報土の往生をとぐる也。しかるにこの惡人へだてずといふ、一分の道理をとりて、惡は憚べからずといふ邪見をおこし、惡苦しからずといふ僻見あり。これをのれが惡のとらめがたきによりて、枉ていまの教の所談を稱する事、太もてしか

るべからず。垢障の機のうちへに、南無阿彌陀佛の行成ずといへども、先世の罪愆、臨終までつきずして、苦にせめらるといへども、其心みだれずば往生をとぐるゆへに、觀經の下品下生をは、此人苦逼、不違念佛、善友告言、汝若不能念者、應稱無量壽佛と説給へり。この文に付ておのれが惡のとゞめがたきによりて、臨終狂亂すべきゆへに、狂亂すとも往生すといふ輩あるか。是則みづからあやまるのみにあらず。又他をあやまつ、そのとがはなはだふかし。この品の人の往生をば、ことさら臨終正念、金花來應と釋する也。苦は先世の因にむくひたる果報のすがた也。狂亂は當來の果をあらはす、惡業のかたち也。なんぞ因果を分別して、かくのごときの説をいたすやと記給へり。念佛相續し、臨終正念をもて、往生の指南とすべしといふ事、消息といひ、記文といひ、このひじりの存意あきらかなり。しかるに當世かの門流と號するなかに、多念を功勞すべからず、臨終を沙汰すべからずといふ人も侍にや。この義すでにかの消息記録等に違するうへは、これまたく善惠房の義にあらず、末學の今案なり。ながれのにごれるをきゝて、みなもとのすめるを、うたがふ事なかれ

### 第三 圖

このひじりはまことに恭敬修を專にして、不淨のときは四十八度など手をぞ洗ける。毎月十五日には、かならず、廿五三昧を行じて、見聞の亡者をとぶらひ、有縁無縁をいはず、早世の人あれ

ばこれをわすれず、忌日にはかならず阿彌陀經をよみ念佛して、ねんごろに廻向し、談義のおはりにも、同音の阿彌陀經、念佛さだまれる式なり。毎日に淨土の三部經を讀誦し、名號六萬反をとなへて、半夜に及まで睡眠せず。曉更には法門を暗誦して、佛號をとなへ給事、おこたりなかりき。天福二年九月十四日の夜、沙門源弘ゆめみらく、善惠房は十一面觀音の化身也。かの門徒はかならず十一面觀音の像を、一寸八分につくりて、安置すべしと、委旨在 夢記このひじり、西山の善峰寺より信州善光寺にいたるまで、十一箇の大伽藍を建立して、あるいは曼荼羅を安じ、或は不斷念佛をはじめをく、みなこれ供料供米修理の足をつけてをかる。これまたく勸進奉加をなさず、諸人の供養物をなげて、このいとなみをなす。興隆の次第、まことにたゞ人にあらずとぞ、申あへりける。寶治元年十月の比より、日來の不食増氣して、身心やすからずといへども、端居して、日々に法門を宣説する事、平生のごとし。同十一月廿二日、往生の期ちかづけるよし、門弟夢想の告を感じ、いそぎ師の前に參じて、かたり申さむとして、いまだ言をいださざるに、終焉ちかきにあるよしをのたまひて往生淨土の已證をのべ、觀佛念佛の兩宗を談ず。廿三日は、清淨の内衣を着し、大衣をかけて、定散兩門の義をさづけ。廿四日は、天台大師講をこなひ、廿五日は、他人の請によりて、佛を讚嘆し、又自行のためにとて、本尊を稱揚し給。法則日來にたがはず、讚嘆の法門は、玄義分序題門の大意也。二十六日は、大衣を着し、大衆と同音に、阿彌陀經を讀誦し給。其後又已證の法門

などのべおはりて、本尊の御前にして、念佛二百餘遍、西にむかひ端坐合掌し、ねぶるがごとくして息たえぬ。時年七十一、寶治元年十一月二十六日、午の正中なり。一條の宰相于時中將能清の室家當日の巳時の夢に、善惠房雲に乗じて、西をさしてさり給と見て、ゆめさめて後、未尅にいたりて、往生のよしをきく、このほか奇特一にあらずといへども、しげきによりてのせず

#### 第四圖

### 法然上人行狀畫圖 第四十八

法性寺の空阿彌陀佛は、いづれの所の人といふ事をしらず。延曆寺の住侶なりけるが、叡山を辭して、聚洛にいづ。上人にあひたてまつりて、一向專念の行者となりて、經をもよまず、禮讃をも行ぜず、稱名のほか、さらに他のつとめなく、在所をさだめず、別の寢所なし。沐浴便利のほか、衣をぬがず、行徳あらはれて、ひとこれをたうとむ、つねには四十八人の能聲をととのへて、一日七日の念佛を勤行す。所々の道場いたらざるところなし。極樂の七重寶樹の風のひゞきをこひ、八功徳池のなみのおとをおもひて、風鈴を愛して、とこしなへに、つゝみもちて、いたる所ごとに、かならずこれをかけられけり。心あらむ人愛翫するにたれるものをや

つねのことばには、如來尊號甚分明、十方世界布流行、但有稱名皆得往、觀音勢至自來迎の文を

誦して、戲乎南無極樂世界といひて、なみだをぞおとされける。これ多念念佛の根本なり。念佛の時のをかりごとには此界一人念佛名、西方便有一蓮生、但使一生常不退、此花還到此間迎、娑婆に念佛つとむれば、淨土に蓮ぞ生ずなる、一生つねに退せねば、このはなかへりてむかふなり。一世の勤修は須臾の程、衆事をなげすてねがふべし。ねがはゞかならずむまれなむ、ゆめゆめをこたる事なかれ。光明遍照、十方世界、念佛衆生、攝取不捨とぞ、となへられける。念佛のあひだに文讀をいろへ誦すること、みなもとこの人よりはじまれり

## 第一 圖

このひじり所勞のとき、日來の安心を印治決定せむがために、上人にたづね申されけるにつきてかの御返事云、凡夫の生死をいづる事は、往生淨土にはしかず。往生の業おほしといへども、稱名念佛にはしかず。稱名往生は、これかのほとけの本願の行なり。故に善導和尚の給はく、若我成佛十方衆生、稱我名號、下至十聲、若不生者、不取正覺、彼佛今現、在世成佛、當知本誓、重願不虛衆生稱念、必得往生。巴上 故に稱名往生は、これ彌陀の本願なり。念佛のとき、この觀をなすべし本願あやまり給はず。かならず引接をたれ給へと。このほかには、別の觀行いるべからず。又往生要集の臨終の行儀にいはく、この念をなすべし、如來の本誓は一毫もあやまり給事なし、ねがはくは佛決定して、我を引接し給へ、南無阿彌陀佛、あるひは漸々に略をとりて念すべし、ねがはくは

佛かならず引接し給へ、南無阿彌陀佛。已上 臨終の觀念をとるにこれにすぐべからず。又正念のとき稱名の功を積候ぬれば、たとひ臨終に稱名念佛せずといふとも、往生つかまつるよし、群疑論に見えて候也、云云取詮四天王寺の西門内外の念佛は、このひじり、奏聞をへてはじめをき給へり。この御書もすなはちかの寺にぞ安置せられける

## 第二 圖

上人のつねの仰には、源空は智徳をもて人を化するなを不足なり、法性寺の空阿彌陀佛は、愚癡なれども、念佛の大先達として、あまねく化導ひろし。我もし人身うけば、大愚癡の身となり、念佛勤行の人たらむとぞ仰られける。空阿彌陀佛は、上人をほとけのごとくに崇敬し申されしかば、右京權大夫隆信の子、左京大夫信實朝臣に、上人の眞影をかゝしめ、一期のあひだ、本尊とあふぎ申されき。當時知恩院に安置する、繪像の眞影すなはちこれなり

## 第三 圖

毎年正月一日より、七箇日の別行を勤修し給けるが、安貞二年の正月には七日例のごとく結願して、いま七日修すべきよし、同行等に談じければ、をのく命にしたがふ。二七日結願の念佛を、臨終の念佛として、十五日の朝、ねぶるがごとくにて往生す。別時をのべらるゝこと、七日さきだちて、死期をしられけるゆへなり。種々の瑞相靈異一にあらず。高野山寶幢院に、寛泉房といへる

たうとき上人ありき。彼舍弟、天王寺に住しけるが、あるとき天狗になやまるゝ事ありけり。かの天狗は、天王寺第一の唱導、念佛勸進のひじり、東門の阿闍梨なりけり。託していはく、われはこれ東門の阿闍梨也。邪見をおこすゆへに、この異道に墮せり。われ在生の時おもひき。我はこれ智者也。空阿彌陀佛は愚人なり。我手の小指をもて、猶彼人に比べからずと。しかるに彼空阿彌陀佛は、如説に修行して、すでに輪廻をまぬがれて、はやく往生を得たり。我はこの邪見によりて、惡道に墮し、なお生死にとゞまる、後悔千萬、うらやましきことかぎりなしとて、さめゝとぞなきける

## 第四 圖

往生院の念佛房又號念佛阿彌陀佛は、叡山の住侶、天台の學者なりき。しかるに上人の勸化によりて、淨土の出離をもとめ、たちまちに名利の學道をやめて、ふかく隱遁の風味をこひねがはれけり。あるとき忽然と往生に疑心おこりて、無常いまま到來せば、生死いかゞせまし。あはれ上人の御在世ならば、ときをうつさず參決してましものをと、かなしみなげきて、ね給へる夜のゆめに、上人空中に現じたまひて、彼佛今現在世成佛といへば、すゝむるぞかし。衆生稱念必得往生、なにうたがひかあるとおほせらるゝを承て、やがてゆめのうちに、感涙せきあへず、なくゝおどろきにけり。それより疑殆ながくたえて、往生のおもひ決定せられにけり。承久三年、嵯峨の清涼寺釋迦堂是也 回祿

の事侍しを、このひじり、知識をとなへて程なく造營ををへ、翌年二月廿三日、供養をとげられにき。かの西隣の往生院も、このひじりの草創なり。居をこの所にしめられしかば、ちかき程にて、毎日に清涼寺にまうでられけるが、建長三年十月晦日、入堂して寺僧にあひて、けふばかりぞ、この御堂へもまいり侍らんずると申されけるを、なにともいと心えざりけるほどに、同十一月三日、殊勝の瑞相ありて、往生の素懐をとげられにけり。生年九十五なり。身もなやむ事なくて、けふをかざりと申されけん、かねて死期をしられたるほどもあらはれて、不思議にたうとくぞおぼゆる

## 第五 圖

眞觀房進士入道  
これなりは、十九歳にてはじめて上人の門室にいる。師としつかへて、法要を咨詢すること、おほくのとしなり。選擇を草せられけるにも、このひとを執筆とせられけり。また外記の大逆修をいとなみ、上人を請じたてまつりて、唱導とす。上人、一日をゆづりて、眞觀房につとめさせられき。器用無下にはあらざりけり。しかるを上人にさきだちて、正治二年潤二月六日、生年四十八にて往生をとぐ。上人念佛をすゝめ給けるが、我をすてゝおはすることよとて、なみだをぞおとし給ける

## 第六 圖

石垣の金光房は、上人稱美の言を思ふに、浄土の法門闡奥にいたれる事しりぬべし。嘉祿三年上

人の門弟を國々へつかはされし時、陸奥國に下向、つゐにかしこにて入滅のあひだ、かの行狀、ひろく世にきこえざるによりてくはしくこれをしるさず

## 第七圖

上人の門弟、そのかず侍しなかに、宿老のよにしられたるをえらびて、その行狀をしるしをはりぬ。このほか法本房行空、成覺房幸西は、ともに一念義をたて、上人の命にそむきしによりて、門徒を擯出せられき。覺明房長西は、上人没後に、出雲路の住心房に依止し、諸行本願のむねを執して、選擇集に違背す。この三人随分名譽の仁たりといへども、上人の冥慮はかりがたきによりて門弟の列にのせざるところなり、見ん人あやしむ事なかれ

## 法然上人繪詞（外題）

黒谷上人繪詞拔書 法然上人 源空實名也

夫以れば我本師釋迦如來は普流浪三界の迷徒を救はんが爲に、深く平等一子の悲願を發坐しますに依て忽に無勝莊嚴の化を隠て恭く娑婆濁惡の國に入給より以來非生に生を現して無憂樹の花咲を含み非滅に滅を唱て堅固林の風心を痛しむ。在世八十箇年慈雲等く群生に覆ひ滅後二千餘廻、法水猶三國に流る。教門しな殊に利益逾也。其中に聖道の一門は穢土にして自力を勵まし濁世に有て得道を期す。但恐は時滯季に及て二空の月陰安く心塵縁に馳て三惡の焰免難し。煩惱具足の凡夫順次に輪廻の里を出ぬべきは只是淨土の一門のみ也諸家の解釋蘭菊にして華を恣にすと雖ども、唐朝の善導和尚彌陀の化身として獨り本願の深意を顯はし、我朝の法然上人勢至の應現として専ら稱名の要行を弘め

給ふ。和漢國異れども化導一致にして男女貴賤信心を得安く、紫雲異香往生の瑞顯る繁し。念佛の弘通爰に尤盛也とす。然に上人遷化の後星霜稍積れり、教誠の語利益の跡人漸此を暗んぜず。若注して後代に留すば誰か賢を見て等からん事を思ひ、出離の要路在る事を知ん。依之廣く先聞を問らひ普く舊記を勘へ實を擇びあやまりを糺して粗始終の行狀を録する所也。愚なる人の覺り安く見ん者の信を勸んが爲に數軸の繪圖に顯して萬代の明鑑に備ふ。往生を冀はん輩誰か此志を好まざらん

一 抑上人は美作國久米の南條稻岡の庄人也。父は久米押領使漆の時國、母は秦氏也。子なき事を歎て夫婦心を一にして佛神に祈申に秦氏夢に剃刀を吞と見て則懷妊す。時國が云汝妊める所定て是男子にして一朝の戒師たるべしと。秦氏其心柔和にして身に苦痛なし。堅く酒肉五辛を斷て三寶に歸する心深かりけり。遂に崇徳院の御宇長承二年四月七日午正中に

秦氏惱事なくして男子を産む

一 所生の小兒<sup>アキナ</sup>字を勢至と號す。竹馬に鞭を擧齡より其性質して成人の如し。動は西の壁に向居る癖あり天台大師重稚の行狀にたかはずなん侍り

一 上人或山僧と參會の事侍けるに、彼僧の云、淨土宗を立給ふなるは何の文に依て立給ふやと尋ぬる時善導の觀經疏の附屬の文なりと答給

一 一心專念彌陀名號行住坐臥不問時節久近念々不捨者是名正定之業順彼佛願故の文に至て末世の凡夫彌陀の名號を稱念せば彼佛の願に乗じて慥かに往生を得べかりけりと云理を思定給ぬ。此に依て承安五年の春生年四十三、立ろに餘行を捨て一向に念佛に歸し給にけり

一 三重の念佛分別して聞しめん。一には摩訶止觀に明す念佛、二には往生要集に勸る念佛、三には善導の立給へる念佛也とて、委此を演給ふ。文義廣博にして智解深遠也。崑崙<sup>コシレイ</sup>の頂を仰が如し。蓬瀛<sup>ホウエイ</sup>の底を望

に似たり

一 故上人辨阿に教給しは、善導の御心は淨土へ參らんと思ん人は必三心を具して念佛を申べき也。一に至誠心と云は實に往生せんと思取て念佛を申也。二に深心と云は我身は罪惡生死の凡夫也、然に彌陀の本願の忝に依て此念佛より外に我身の助かるべき事なしと堅信するを申也。三に廻向發願心と云は只一筋に極樂に參らんずる爲の念佛也と思を云也。是ぞ法然上人に習傳奉る三心にて侍る。此外に全別の様なき也。又故上人の仰られ候しは、在家の暇なからん人は一萬二萬なども申べし、僧尼などゝてさまをもかへたらん驗には三萬六萬などを申べし。いかにも多申に過たる法門は有べからず。詮する所、此念佛は決定往生の行也と信を取ぬれば自然に三心は具足して往生するぞと、やすくと仰られ侍し也若是習はぬ事を習たりと云ひ、仰られぬ事を仰られたりと申侍らば三世の諸佛十方菩薩殊には憑奉所の

釋迦彌陀觀音勢至善導聖靈念佛守護梵天帝釋等の御  
哀なくして現世後世かなはぬ身と成侍ん。上人口決  
の次第誓言嚴重也。其上此聖、既に奇瑞を顯はして  
往生を遂られぬ。得益法門に契カタマフ。所述誰か信受せざ  
らん

一 天王寺と申者、極樂補處の觀音大士聖德太子と生  
て佛法を此國に弘給し最初の伽藍也。欽明天皇の御  
爲に七日の念佛を勤め給ひ、善光寺の如來へ御書を  
進ぜらる其御書

名號稱揚七日已此斯爲報廣大恩、仰願本師彌陀尊  
助、我濟度常護念命長七年丙申二月十三日と侍りける  
に、如來の御返事

一念稱揚無恩留、何況七日大功德我待衆生心無間  
汝能濟度豈不護シテ 二月十三日 善光

第二度の御消息 第三度 以上略之

此御消息こそ此國は念佛三昧の有縁なる事も顯にけ  
る。彼の鳥居の額にも釋迦如來轉法輪所當極樂土東

門中心とぞかゝれて侍る。我國に生を受ん人は尤も  
此念佛門に歸べき者也

一 僧都指入て未の直ぬ程に、此度いかゞして生死を  
離候べきと申されければ、南無阿彌陀佛と唱て往生  
を遂にはしかずとこそ存候へと申されければ、僧都  
誰もさは見及て侍り、但念佛の時心の散亂妄念の起  
候をばいかゞし候べきと。上人宣はく、欲界散地に  
生を受者、心豈散亂せざらんや。煩惱具足の凡夫争  
か妄念を留べき。其條は源空も力及候はず。心は散  
亂れ妄念は競發と雖ども、口に名號を唱へば彌陀の  
願力に乗じて決定往生すべしと仰られければ、是承  
り候はん爲に參じて候つるとて僧都聽て退出し給け  
り。初對面の人一言世間の禮儀の詞無して退出せら  
れぬる事よとて人々貴けり。上人内へ入給て心を靜  
め妄念を發す無、念佛せんと思んは生付の目鼻を取  
捨てゝ念佛せんと思はんが如し。あなことくしと  
ぞ仰られける

一 菌城寺長吏大貳僧正公胤、上人を誹謗して公胤が見たらん文を法然房のみぬは有とも法然房の見たらん事を公胤がみぬはよも有じと自嘆して、淨土決疑抄三卷を記して選擇集を破す。學佛房を使者として上人の室に送る時、上人彼使に對て是を披見し給に上卷の始に法花に即往安樂の文あり觀經に讀誦大乘の句あり、讀誦極樂に往生するに何の妨か有ん。然に讀誦大乘を廢して只念佛許を付屬すと云、是大なる誤也と云り。此文を見給て終をみず、閑て給はく此僧都是程の人と思はざりつ。無下の事也。一宗を立とき、かれは廢立の旨を存すらんと思はるべし。然に法花經を以て觀經往生の行に入らるゝ事、宗義の廢立を忘に似たり。若よき學生ならば觀經は是れ爾前の教也。彼中に法華を攝すべからずとぞ離らるべき。今淨土宗の心は觀經前後の諸大乘經を取て皆悉往生の行の中に攝す。何ぞ法花ひとり漏や。普く攝る心は念佛に對して是を廢んが爲也と宣給ければ

使歸て此由を語に、僧都口を閉て言説なかりけり

一 余事に亘る玄暉をくゑんくゑんと僧都の申されければ其宗の人の申侍しはくゑんうんとこそ申侍しが、暉ツキと書てこそくゑんとはよみ侍れ、暉と書てはうんとこそよみ侍れと、直申されき。惣じて如此誤共七ヶ條にて直れしかば僧都退出の後、弟子等に語れけるは、今日法然房對面して七ヶ條の僻事を直たり。常に見參せば才學は付侍なん。立所の淨土法門聖意に違べからず。仰て信すべし。彼の上人の義を謗するは大なる過也とて則製作の決疑抄三卷を燒にけり

一 上人終焉の期近付給。一筆の狀云、もろこし我朝に諸の智者達沙汰し申さるゝ觀念の念にも非ず。又學問をして念の心を悟て申念佛にも非ず。只往生極樂の爲には南無阿彌陀佛と申て疑なく、往生するぞと思取て申外に別の子細候はず。但三心四條なんど申事は皆決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞと思の中に籠候也。此外に奥深き事を存は二尊の御慈に

はづれ本願に漏候べし。念佛を信ん人は縦ひ一代の法を能々學すとも一文不知の愚鈍の身なして尼入道の無智の輩に同じて智者の振舞をせずして只一向に念佛すべしと。云々正しき御自筆の書也

一 上人の病中に何くともなく車を寄る事有り。貴女車よりおりて上人に謁給ふ。折節(採節)たゞ勢觀房一人障子の外にてきゝ給ければ、女房の首にて今しばしとこそ思給に御往生の近付侍らんこそ無下に心細侍れさても念佛の法門御後には誰にか申置侍らんと申さるれば、上人、源空所存は選擇集に載侍り。此に違はず申さん者ぞ源空が義を傳たるにて侍べきと。云々其後しばし御物語ありて返給。其氣色直人と覺ざりけり。去程に勢觀房車の行末イマ覺えなく覺て見入とし給に、河原へ車を遣出て北を指て行か、かきけす様にみえぬなりけり。怪事限なし。歸て上人に客人の貴女誰人にかおはすらんと尋申されければ、あれこそ韋提希夫人よ、賀茂の邊におはしますと仰られ

けり。勢觀房親り此不思議を感じせられける。故に上人遷化の後、社壇近く居を下して常に參詣をなんせられける

一 日來の安心を印治せんが爲に上人に尋申されけるに就て、御返事に云、凡夫の生死を出る事往生淨土にはしかず。往生の業多と雖ども稱名念佛しかず。稱名往生は是彼佛の本願の行也。故に善導和尙の給く、若我成佛十方衆生稱我名號下至十聲若不生者不取正覺、彼佛今現在世成佛當知本誓重願不虛、衆生稱念必得往生。故に稱名往生は是彌陀本願也。念佛の時此觀をなすべし。本願證絶は必ず引接を垂給へと。此外には別の觀行入べからず

一 天台座主權僧正顯眞之事也。文治二年の秋の比上人太原(トウ)へ渡り給ふ。東大寺の大勸進俊乘房重嚴(フナ)、未出離の道を思定めざりけるを慈給て、此由を上人より告仰られければ、弟子卅餘人を相具して大原に向ふ。勝林院の丈六堂に會合す。上人の方には重嚴以

下の弟子共、其數集れり。法印の方には門徒以下並に太原の聖達坐列れり。山門の衆徒を始として見門（見門）の人多りけり。論談往復する事一日一夜也。上人法相三論華嚴法華眞言佛心等の諸宗に渡りて、凡夫の初心より佛果の極位に至まで修行の方軌、得度の相貌具に演給て、此等の法皆義理深く利益勝たり。機法相應せば得脱踵をめぐらすべからず。但源空如きの頑愚の類は更に其器に非ず。故に覺難く惑安し。然間源空發心の後、聖道門の諸宗に付て廣く出離の道を訪に、彼も難く此も難し。是則世下人愚にして機教相背ける故也。然を善導の釋義、三部の妙典の心彌陀の願力を強縁とする故に、有智無智を論ぜず持戒破戒を簡ばず、無漏無生の國に生て永く不退を證する事、只是淨土の一門念佛の一行也とて、法藏の因行より彌陀の果徳に至まで理を竟、詞を盡し畢て但是自身涯分を演計也。至上機の解行を妨とには非ずと宣給ければ、法印より始て滿座の衆皆信伏しに

けり。形を見れば源空上人、實には彌陀如來の應現歟とぞ感歎しける

一 受教と發心とは各別なる故に習學するには發心せざれども境界の縁を見て信心を發しける也。人なみなみに淨土の法を聞き念佛の行を立とも、信心未だ發らざらん人は、只慙に心を懸て常に思惟し、又三寶に祈り申べき也とぞ仰せられける

一 虛假とてかざる心にて申す念佛が往生せぬ也。決定往生せんと思はゞ飾心無して實の心にて申べし。朋（よ）同行は云に及ばず、其外常に馴見る妻子眷屬なれども東西を辨る程の者に成ぬれば、それが爲に必歸心は發也。人の中に住んには其心なき凡夫は有べからず。惣親きも疎きも貴も賤も人に過たる往生の怨はなし。其が爲に歸心を發して順次の往生を遂ざれば也。只常に人交て靜る心も無、歸心も有らん者は夜さし深て見人も無、聞人も無ん時、忍やかに起居て百反にても千反にても多少心に任て申さん念佛の

みぞ飭心なければ佛意に相應して決定往生は遂べき此心をなば必しも夜には限べからず。只人聞憚無らん所にて常に如此申べし。所詮決定往生願ふ實の念佛申さんする飭らぬ心根は、譬ば盗人有て人の寶を思懸て盗んと思心は底に深れども、面にはさりげなき様に持成て、構恠なる色を人にもえじと思んが如し。其盗み心は人全しらねば、少も飭らぬ心也。決定往生せんずる心も又如此。人多集り居らん中にも念佛申す色を人にみせずして、心にわするまじきなり。其時の念佛、佛より外は誰か此を知べき。佛知せ給はゞ往生何疑はん

一 眞偽の二疑あり。地躰偽性にして飭心有者要なき聊の事をも必ず偽り飭也。元より實の心有て虚言せぬ者は、聊の矯飭して身の爲、大に其益有べき事なれども身の利養をば願ず。底に實有て少しも飭心なし。是皆本性に受而生たる所也

以上 上巻畢

一、上人たゞ諸宗の教門に明なるのみに非ず。修行多く其證を得給き。其上四明黒谷にして、法華三昧を行給時、普賢白象に乗て親り道場に現給。又上人或時寂空上人並に西仙房と共に行給けるに、山王影向して納受の形を顯し給けり。是末代の奇特也

一、上人黒谷にして花嚴經講給けるに、青き地机の上には有けるを法蓮房信空に取て捨べきよし、仰られければ法蓮房限なく虵に畏人なりけれども、師の命背き難に依て、出文机の明障子をあげ備て、塵取に掃入て投捨て、障子を立てけり。歸てみれば虵猶元の所に有けり。此をみるに遍身に汗出て畏かりけり。上人見給、など取ては捨られぬぞと仰られければ、然々と答。上人默然として物もの給ざりけり。其夜法蓮房夢に大龍形を現し、我は是花嚴經を守護する所の龍神也。をそるゝ事物と云と思て夢覺にけり。昔此經龍宮有て人間に流布せず。龍樹菩薩龍宮に行

て此を披き見て人間還て此を弘給き。其後覺賢三藏震旦にして安帝義熙十四年三月十日より楊州謝司定寺に、護淨花嚴法堂を建て、花嚴經を譯し給時、堂の前の蓮花池より毎日に青衣なる二人の童子朝に出塵を拂ひ墨を磨り、暮れば池の底へなん入ける。經を譯し畢て後は見す成にけり。此經久龍宮に在故に龍神敬、守護を加へ侍けるにこそ。上人披講實至て龍神を感ぜしめ給ける。ゆゝしくぞ侍る

一 上西門院深上人に歸御て、念佛御心淺らざりけり或時上人を請申されて七日説戒在き。圓戒の奥旨を演給に一つの地唐垣の上に七日間はたらかず而聽聞氣色在り。見人恠思程に結願の日に當、彼虵死せり其頂の中より一つの蝶出て空に昇と見人もあり。天人の形にて昇とみる人もありけり。昔惠表比丘武常山にして無量義經を講讀せしに、音を聞青雀歡喜苑に生ぜり。彼先蹤さきを思に此小虵も大乘結縁に依て天上に生れ侍にや

一 上人秘密の窓に入り觀念の床に坐給しに、或時は蓮花顯れ或時は羯磨を見、或は寶珠を拜す。觀心明了にして瑞相を眼前に顯給事多かりけり

一 別當入道惟方卿娘粟田口の禪尼は上人往生の後、二月十三日の夜の夢に、上人の墳墓に參たれば八幡の寶殿なり。御戸を開くるに御正躰御ます。傍なる人其御正躰を指て是こそ法然上人よと云を聞て信心發り、身毛いよたち汚流アタるとみる

一 或時秉燭の程に上人のどかに聖教を披覽し給音のしければ、正信房未燈など奉とも覺ざりつるにと覺束無て、密かに座下を伺に、左右の御目のすみより光を放て文の面を照らし給ふ。其光明なる事、燈に過たり。いみじく貴こと限なし。かやうの内證をば深く隱密大事にて侍んと思て拔足をして罷出ぬ也

一 上人仰られけるは、其極樂の主じにて御す阿彌陀佛こそ、何事も知ぬ罪人共の、諸佛菩薩にも捨はてられ十方淨土にも門を指れたる輩をやすくと助濟

はんと云願を發て、十方世界の衆生を來迎給ふ佛よ心を靜めて能々聞るべし。唐土より日本に渡たる一切經は五千餘卷あり。其中に雙卷無量壽經、觀無量壽經、小阿彌陀經也。昔法藏比丘と申し、入道、四十八願を建て極樂淨土を建立し、一切衆生を平等に往生せしめん。其に我佛に成たらん時の名を稱念せし衆生を來迎せんと云ふ願を發て、眞實に往生せんと思て念佛申衆生を、迎置て佛に成給也。四十八願の中の第十八願の願是也とて、本願虛からざる謂れ念佛して往生すべき趣、細かに授られけり。此聖不審事共を尋申に付て上人御返事條々

一 念佛の機は只生付の儘申也。智者は智者にて申て生れ、愚者は愚者にて申て生れ、道心有人も申て生道心無人も申て生。乃至富貴者貧賤者も慈悲有者慈悲無者も、欲深者腹惡者も本願の不思議にて念佛だにも申せば、何も皆往生する也。念佛の一願に萬機を攝て發給へる本願なり。只こさかしく機の沙汰を

せずして一向に念佛だにも申せば皆悉往生する也。

されば念佛往生の義を深も難も申さん人をば、つやつや本願の理をしらざる人也と心得べき也。淨土一宗の諸宗に超へ、念佛の一行の諸行に勝たりと云事は萬機を攝する方を云也。理觀菩提心讚誦大乘眞言止觀等、何も佛法の疎にましますには非。皆生死滅度の法なれども末代に成ぬれば力及ばず。行者の不法なるに依て機が及ばぬ也。念佛門に至ては時を云へば末法萬年の後、人壽十歳に促り、罪をいへば十惡五逆の罪人也。老少男女の輩一念十念の類に至まで皆是攝取不捨の誓に籠也。此故に諸宗に超、諸行にすぐれたりとは申也

一 何にも念佛の申れん方に依て過べし。念佛の障に成ぬべからん事をば厭捨べし。一所にてなくば修行して申べし。修行して申されずは一所にて申べし。聖て申れずは在家に成て申べし。獨籠居して申されずは同行と共に行じて申べし。衣食叶はずして申さ

れずは他人に助られて申べし。妻子も從類も自身を助けられて念佛申さん爲なり。念佛の障りに成ぬべからん事は努々なすべからず

一 聖道門は深しと雖ども時過ぬれば今の機に叶はず淨土門は浅しに似たれども當根に叶安と、云し時き末法萬年餘經悉滅彌陀一教利物偏増の道理に折て人皆信伏しき

一 毗沙門堂の法印明禪は參議成頼卿の息、顯宗は檀那院の嫡流智海法印の面受、密宗は法曼院の正統仙雲法印に受く。顯密の棟梁山門の英傑なり。然ども道心内に催し隱遁の思深かりき。初發心の因縁を語申されけるは、最勝講の聽衆に參じたりしに緇素貴賤今日を晴とのみ思敢り。夢幻泡影うぶ片時の榮を忘ざる者一人も非ず。俗家には大將の庭上の事から大妻の門外の振舞、僧中には證義者は上童を具して別座を備け、攝録の息は隨身を隨へて直廬に參ぜらる。彼此の榮耀をみて見聞の輩走廻れる有様、つくづく

と思へば無常忽に至なば餘算いつまでとか期せん。世上の忿忙を見に付て胸中の觀念澄増る儘に、隱遁の思此時治定せりとぞ申されける。彼法印は天台の宗匠なりしかども選擇槩を見て後は、偏に上人の勸化を信じて心を金池の波に寄せ、今は只畢命を期とせし許也とて專修專念の行、懈なく念佛往生の營、他事なかりき

一 上人宣ふ、自他宗の學者宗々所立の義を各別に心得ずして、自宗の義に異するを皆僻事ヒキと心得たるは謂れなき事也。宗々皆各立る所の法門各別なる上は諸宗の法門一同なるべからず、皆自宗の義に違すべき條は勿論の事也とぞ仰られける

一 又云、口傳無して淨土の法門をみるは往生の得分をみ失也。其故は極樂の往生は上は天親龍樹を勧め下は末世の凡夫十惡五逆の罪人まで勸給へり。然を我身は最下の罪人にて善人を勸給へる文をみて卑下ヒキの心を發して往生を不定に思て順次の往生を得ざる

也。然れば善人を勸給へる所をば善人の分とみ、悪人を勸給へる所をば我分として得分にする也。如此見定ぬれば決定往生の信心堅まりて本願に乗じて順次の往生を遂也

一 又云、他力本願に乗るに二あり。乗ぜざるに二あり。先乗ざるに二と云は一には罪を作時乗ぜず。其故は如此罪作は念佛申とも往生不定也と思時乗ぜず二には道心の發時乗ぜず。其故は同く念佛を申とも如此道心有て申さん念佛にてこそ往生はせんずれ、無道心にては念佛すとも叶ふべからずと。道心を先として本願を次に思時乗ぜざる也。次に本願に乗ずるに二の様と云は、一には罪を作時乗ずる也。其故は如此罪を造れば決定して地獄に墮すべし。然ども本願の名號を唱れば決定して往生せん事のうれしさよと悦時、乗ずる也。二には道心の發時に乗ずる也其故は此道心にて往生すべきに非ず、是程の道心は無始より已來た發れども、未生死を離れず、故道心

の有無を論ぜず造罪の輕重を云はず、只本願の稱名を念々相續せん力に依てぞ往生は遂べきと思時に、他力本願に乗ずる也

一 又云、念佛申には全別様なし。只申せば極樂へ生と知て心を至、申ば參也

一 又云、南無阿彌陀佛と云は、別たる事には思べからず、阿彌陀佛け我を助給へと云語と心得て、心には阿彌陀佛助給へと思て口には南無阿彌陀佛と唱を三心具足の念佛と申也

一 又云、縱餘事を營とも念佛を申く此をする思をなせ、餘事をし、念佛すとは思べからず

一 又云、名號を聞と云とも信ぜずば聞ざるが如し。縱信すと云とも唱へずば信ぜざるが如し。只常に念佛すべし

一 又云、せこにこめたる鹿も友に目をかけずして、人かけにかへらず向たる方へ、思切てまひらににぐれば、いくら人あれども必にげらる。其定に他力を

深信して萬事を知らず、往生を遂と思べき也

一 上人の念佛七萬遍に成給て後は、晝夜に餘事を雜へ給はざりけり。されば其後人の參て法門尋申けるには、聞給かと覺しくは念佛の御聲の少しひまき成給許にてぞ有ける。一向に念佛閑給事なかりけるとなん

一 又上人宣はく、阿彌陀經は只念佛往生許を説給とは心得べからず。文に隱顯有と雖ども、廣略義を以て心得れば四十八願を悉説給へる經なり。舍利弗如我今者讚嘆阿彌陀佛不可思議功德と云り。阿彌陀佛の功德は即四十八願也。念佛往生を説は其中の第十八願を(以下缺)

一 所詮決定心を生ぜば往生すべき也。私案、決定心を生ぜずば往生すべからざる也。煩惱罪惡等の往生をさへ障ざるをば、凡夫の心としては覺知すべからずといへども、本願に相應する程の念佛申たらんには、其を障碍として往生を妨る罪は有べからず。往

生は念佛の信否に依べし。更罪惡の有無には依べからず

一 見思塵沙無明の煩惱が、萬づの障碍をばする也。念佛の一行は此等の煩惱にも障られず、往生を遂、十地究竟する也。他宗には實教にも權教にも密教にも顯教にも十地究竟する事は漸頓だんじゆんを論ぜず極たる大事也。然に只念佛の一行に依て往生を遂、十地の願行自然に成就する事は誠に甚深殊勝の事也とぞ宣ける

一 淨土の法門を演給に、先聖道淨土の二門を分、聖道難行の謂れを仰らるゝに、殊に天台宗に對して釋給に、四種三昧の難行なる事をの給て、南岳大師入滅の刻み、諸の弟子に告て云はく、汝等方等般若四種三昧に於、身命を願す行すべくは、我れ十年世に有て汝等を供給すべしの給に、苦行叶難に依て、弟子等返答に及ばざりしかば、大師入滅し給き。師既に入滅せんとし給へるが、暫も存命せんと給はん

をば、何なる妄語を構ても師の命を惜ん爲には修行してんところ申つべけれども、始終叶べからざる故に返答せずして止にしかば、師則入滅し給き。何況當時の我等をや。傳教大師弟子達に四種三昧を一つづゝ當て修行せさせらるゝ事付き。慈覺大師は常坐三昧に當て修行し給けるに常坐難行也とて改て常行三昧と成と申せり。如此の修行は上古より修し難事顯然也。何況、當世の凡夫をやとて聖道門の難行なる事、淨土門の修易き様、こまゝと仰られて所證末代の佛法、修行其證をうる事只念佛の一行也。是則彌陀の本願に順するが故也と宣ければ信心實を至しけり

り

一 或時上人天台智者の本意を探り、圓頓一實の戒躰を談給に、慈眼房は心を以て戒躰とすと云ひ、上人は性無作の假色を以て戒躰とすと立給ふ。其後慈眼房上人の義に歸渡せられけるとなん

一 上人弘法大師の御作十住心論を難御條々多かりけり。或時弘法夢中、此難を會釋し給事有ければ、上人云く、此夢告を案るに、難中義皆以て大師の御心に相契あはへるなるべし。凡は後學長へしとて、學生は必しも先達なればと云事はなき也。彼如來滅後五百年に五百の羅漢集て婆娑論を造れりしに、九百年に世親出で俱舍論を造て先の義を破し給き。義の是非を論ん事は、強に上古にも畏まじきとぞ

一 元久元年八月に上人癡病を煩給事有けり。月輪殿安居院法印聖覺御導師にて冥助を仰がれ御祈請有けり。其說法大底は、大師釋尊猶衆生に同給は、常に病惱を受、療治を用給。況凡夫血肉の身争か其愁な

かみや。然ども淺智愚鈍の衆生は此理を知らず、定て疑心をなさんか。上人の化導既佛意に契ふ故に、親く往生を遂る者其數を知らず。然ば諸佛菩薩諸天龍神争、衆生の不信を歎ざらん。四天王佛法を守給はば、必我大師上人の病惱を癒し給へと、苦ろに宣られければ、本尊善導の御影の御前に異香頻に薫じ、上人も聖覺も共に瘳病落にけり。實に末代の奇特、其比の口遊にてぞ在りける

月繪殿

一 禪定殿下は忠仁公十一代の後胤、累代攝録の臣として朝家の憲政詩歌の才幹、君是を許し世此を仰ぎ奉る。榮花重職の豪家に遊び給と云へども、偏に順次往生の御望深かりけり。去年建永元年三月七日後の京極殿俄に隠れさせ給き。御歳僅かに卅八にぞ成給ける。此につけても彌今生の事を思食し捨て一筋に後生菩提の御營許也

一 上人左遷の後、月輪の禪閣朝暮の御敬淺からず。日來の御不食彌よ重らせ給。大漸の期近付給ふ。藤

中納言光親卿を召て仰置れけるは、法然上人年來歸依の至、定て存知有ん。今度の勅勘を申免さずして諺所へ遷られぬる事、生て世に在甲斐無に似り。然而嚴旨緩ゆるからず。左右なく申ん事恐れ覺る故に後日を期して過所に、既終焉に臨り。今生の恨、只此事にあり。我他界に趣と云ども、連々に御氣色を伺ひて恩免を申行るべしと。昔クダキ口説仰れければ、光親卿仰の旨更如在を存べからざる由、申て涙を流しけり

一 恩免有と云ども、猶洛中の往還を許されざりしか

ば、攝津國勝尾寺に暫住給。勝尾寺の隠居も既四ヶ年に成りぬ。花洛の往還猶許されざりしに建曆元年後鳥羽院の夏比、上皇 八幡宮に御幸ありし時、一人の倡妓

撲云、星災に親疎なし、只善人に與与す。王者の徳失によりて國土の治亂あり。我南海の邊邑に訪べき事有て日々に往反す。苦哉、近代君闇臣曲て政濁り人患。王城の鎮守、百王の宗廟運々に評定の事あり。天下逆亂率土荒廢せん。定て後悔あらんかと。

還御して後、近臣等奏申さく、倡妓が詫宣只事に非

ざらんか。凡天は徳に勝ず、仁よく邪を却。國土を

治る計、徳政にはしかず。天璽テグサを却る術佛法に歸す

るにあり。專修念佛停廢、法然房配流、尤有して御

計有べきをやと。勅答猶明ならざるに、同年七月の

比、上皇御夢想の御事御しき。蓮花王院に御參有け

るに、衲衣ソウイを着せる高僧近付參して奏云、法然房は

故法皇並高倉の先帝の圓戒の御師範也。徳は賢聖に

等しく益マククワコシ當今に普し。君大聖の權化を以て還俗配流

の罪に處す、咎五逆に同じ、苦報恐れざらんやと。

此事驚き思食て藤中納言光親卿に密に御夢想の次第

を仰下さる。彼卿折をえて早く此上人の花洛の往還

を許さるべき旨、頻に奏申されければ、同十一月十

七日彼卿の奉行として花洛に還歸シヤキあるべき由、烏頭

變毛シヤウモウの宣下を被り給ぬ

一 其後幾くの歲月を経ず僅に十ヶ年の間に、承久の

逆亂發て天下の亂に及き。倡妓が詫宣今思合せられ

侍り

一 上人の没後、順徳院の御宇建保、後堀河院御宇貞

應嘉祿、四條院御宇中天福延應、度々一向專修停止

の勅を下さるゝ事有しかども、殿制廢れ安く興行止

難くして、遺弟ウイテイの化導都鄙に普く、念佛の聲洋洋と

して耳に滿り。是豈止住百歳の佛語虛からずして、

漸利物偏増の益を顯に非や

一 爰に上野國より登山侍ける並榎堅者定昭、深上人

念佛弘通を瘡ウサみ、彈選擇と云破文を造て隆寛律師の

庵に送。律師又、顯選擇と云書を注して此を答。其

詞云、汝が僻破の當らざる事、譬は暗天の飛礫ヒヤクの如

とぞ欺かれて侍る

一 豈はかりきや。戰場を以て往生の門出とし、惡徒

を以逆縁の知識とすべしとは。善惡不二の理、邪正

一如の掟ては、山門の使ならば定て聞知らん。自他

諸共に九品蓮臺の同行となり、怨親同く七重寶樹の

新賓たらんと云て、武威を振ひければ使者退散して

其日は暮けり

自の機分を出離に不能と知て佛力を憑故也

以上 下卷

一 上人云、念佛には甚深の義と云事無。只念佛申者は必往生すと知許也。何なる智者學生なりと云とも宗に明させらん義をば争か作出ては云べき云々

(奥書)  
本云

一 又云、稱名念佛は様なきを以様とす。身の振舞、

永享九丁巳年八月日於江州金勝寺書寫之畢

右筆 玉泉坊覺泉

一 又云、人の手より物を得んに、既に得たらんと、

持主 正玉

未をさらんと何か勝たるべき。源空はずでにえたる心地にて念佛を申也と云々

皆 文安四年十月廿五日書寫之了

一 四修 無間修 無餘修 愍重修 恭敬修 三心

至誠心 深心 廻向發願心

一 五種正行 讀誦正行 觀察 禮拜 稱名 讚歎供

養

一 又云、自然具足の三心と云事在、穴賢くことごとしく三心の沙汰を申べからすと云々

一 又云、自力と者望道門也、自の三學の力を憑て出離を求る故也。他力と者淨土門也、淨土を求人皆

# 法然上人傳記

## 法然上人繪詞卷第一

夫以、我本師釋迦如來はあまねく流轉三界の迷徒をすくはんがために、ふかく平等一子の悲願をおこしますすによりて、たちまちに無勝莊嚴の土をすてて、忝婆娑濁世の國に出て給しよりこのかた非生に生を現じ給ふゆへに、則無憂樹の本に華ひらけ、非滅に滅をとなへ給ふがゆへに、終に雙樹林の間に風いたむ。在世八十箇年、化導雲のごとく霞の如し。滅後二千餘廻、衆生恩をしたひ徳をしたふ。但し八萬の教法まち／＼なりといへども、大小の機根しなじなりといへども、みなこれ穢土にして自力を上げまし濁世にありて得道を期す。たゞこれ聖道難行の教にしていまだ淨土易往にあづからず。爰漢家には善導和尚彌陀の化身として本願の名號をひろめ、我朝には法然上人、勢至の來現として他力の往生をすゝめ給へ

り。然者則濁世の導師として但信稱名の行をさづけ、如來の使者として出離解脱の教をのぶ。時機相應して順次の往生をとげ、感應道交して揭焉の引接にあづかるともがら道俗貴賤をえらばず、男女老少をいはす、平生の濟度といひ、夢の後の巨益といひ、目に見へ耳に滿たり。聞ても信を生ぜず。あひながら行ぜざらん者は、ひとへに宿業の拙き事をはづべし。何ぞ古賢の事にあづからんや。然に今上人の遷化すでに一百年に及べり。星霜をのづからあひへだたる。遺弟の弘通又四五家にわかれたり。蘭菊をの／＼美をほしきまゝにす。然間没後の義銚、たがひにまち／＼にして、在世の行狀心おなじくしてしるしをかる。これによりて或者古老の口傳をとぶらひ、或者諸家の記録をたづねて見をよび聞及ぶ所かれをしるし、これをおこさむともふ心ざしありといふとも、只おもむく巨海の滴水をくみ、九牛が一毛をしるす。おろかなる者のさとりやすからむため。見聞んものゝ信をすすめんために、數

軸の畫圖にあらはし萬代の明鑿にそなふ。念佛の行者として誰人か信受せざらむ

一 上人誕生事

二 變竹馬遊覽事

此兒、襁褓の中より出で、やうやく竹馬にむちうつて遊ぶ、其名を勢至丸と號す。二歳の時、出生の日時にあたりて初言に南無阿彌陀佛と唱ふ。聞人耳をおどろかす。四五歳より後はその心成人のごとし。性甚聰敏にして聞所も忘れず。又もすれば西の壁に向ふくせあり。月氏には釋迦大師、初言に南無佛と唱へ給ひ、日

域には上宮太子初言に南無佛と唱へ給ふ。震旦の智者大師は生をうけてより以來、常に西方にむかへり。今此小兒、三國の奇瑞を一身に周備せり。見聞の人は是を美談とし往還の輩これをあやしますといふ事なし

三 夜討の事

保延七年の春の比、時國夜討のために殺害せらる。其敵は伯耆守源長明が嫡男、武者所定明也。人呼で明石

の源内武者といふ。堀河院御在位の時の瀧口也。殺害の造立は定明、稻岡庄の領所として執務年月をふるといへども、時國廳官としてこれを蔑如にして面謁せざる遺恨なり。時に勢至丸、九歳にして其難をのがれて是を見給ふに、敵は定明也と見給て小矢を以て暗所よりこれを射る。あやまたず定明が目の間に射たてり。此疵をしるしとしてあらはるべき事疑なきによりて、彼定明逐電して歸りいらす。これによりて小矢兒と名付、見聞の諸人感嘆せずといふ事なし

四 臨終の事

時國。深く疵をかうぶりて今はかぎり成ければ、九歳成勢至丸をよびて云、我は此疵にて身まかりなるとす。但いさゝかも敵をうらむる事なかれ、是前世の報也、更に一世の事にあらず。獨り此遺恨を思はゞ互に殘害をまねくべし、報酬念々にたへず、輪廻生々につくべからず。凡生有ものは死をいたむ。我此疵を痛、人またいたまざらんや。我此命をおしむ、人豈おしま

さらんや。心をおこして人の腹におけば、我をもて他の心をしりぬべし。昔教主釋尊も、頭痛背痛とのたまふ。曠劫の殺罪、佛果になほ餘殃あり。一念の怨心聖賢其障礙を恐る。今生の妄縁を捨て、將來の宿報をつぐ事なかれ。梵王の四等を行する、慈心を最とす。世尊の十重をときたまふ、殺生を初に禁しむ。汝あなかしこ、法師になりて、學問して、爺おぢの恩徳を報じ、衆生の依怙とならんと思ふべしといひをはりて、心をたゞしくして、西方に向て高聲念佛して、ねむるがごとくに息たえにけり

#### 五 登善提寺事

當國善提寺の院主、觀覺得業は、秦氏の弟也。小矢兒には叔父なり。此兒、父にをくれて後は偏に親子の如し。愛好して弟子とす。同年の冬、善提寺へのぼせけり。はじめて佛敎をさづくるに、性甚岐キ疑にして、きく所の事憶持して更にわすれず

#### 六 爲登山母乞暇事

觀覺、同朋に語て云、此兒の器重を見るに、常のともがらに類せず。何ぞ徒に邊國にあらんやとて、久安三年丁卯年十五歳の春、延曆寺へぞのぼせける。其時、此兒母に暇をこひて云、母、獨身におはします。我、一子たり。然朝夕に給仕して、父の形見とも見え奉るべけれども、登山して佛法修行して、二親をみちびき奉らんと思ふ。今の別をなげき給ふ事なかれ。流轉三界中、恩愛不能斷、乘恩入無爲、眞實報恩者と承れば、今日より後は戀悲み恨み思召べからず。參河守大江定基は、出家して大唐へ渡り侍し時、老母にゆるされを蒙りてこそ、彼國にして圓通大師の謚號を蒙り、本朝に聖衆來迎の佳什を傳へしか。ゆめゆめ惜思召べからずなど、かきくどき念比にのたまふ。母ことはりにをれて、縁縁なる髪をかきなでて、泪計ぞ、頂にそゝぎける。今思合すれば、祕密灌頂とかやにぞ。ものはいはずして、頂に水をそゝぐなると申は、ケ様の事にや侍らん。母思のあまりにくちささみける歌

かたみとてはかなき親のとどめてし

子のわかれさへまたいかにせん

此理りを觀覺こそ申さまほしく侍つるを、こまごまとありくしく、仰こと侍ぬれば、それにつけても、かしくぞ御學問のよし、思ひより侍ける。昔晋の肇公幼くして師匠の法華經翻譯のとき、人天交接のことは書わづらひ給ける。さかしら思合られて哀にこそ侍れ母、生る子にをしへらると。悉達太子、母のために摩耶經を説き給けるも、思なすらへつべし。小兒辯説をふるにつき、老母承諾するに似たれども、有爲の習忍び難く、浮世のわかれ迷ひやすく、昔の釋尊は衆生利益のために、十九にして父の王に忍びて城をこえて檀特山にこもり給き。今の小童は、佛法習學のために、十五歳にして母儀をこしらへて家を出比叡山にのぼる

七 參會法性寺殿御出事

此兒、入洛の時、久安三年二月十三日、つくり路にて時の關白法性寺殿の御出に參り合奉りて、傍なる小河

に打寄給けるを、御車よりいかなるおさなきものにかと、御尋ありければ、兒のをくり侍ける僧、美作國より學問のため、比叡山にまかりのぼる小童に侍よし申ければ、御車をかけはづさせ、ちかく御覽じて、能々學問せらるべし。學生になり給はゞ、師匠にたのみ思召べきよし、念比に御契有けり。いな小童に對してこの禮は心得ぬ事哉と、上下の供奉人思ける程に、彼小童、眼より光を放てり。たゞ人にあらざる間、此禮をいたせりと、後に仰られけり。實に不思議にこそ

八 登西塔北谷持法房事

(以下缺)

## 法然上人傳記卷第一 上并序

老の眠たちまちにおどろきやすく、春の夢むなしく夜をのこすに、つらく往事をかへり見れば舊友ことごとくゆきて、法跡わづかに存す。累代の口傳みみのそこにとまりて、ひとり師子の芳訓を案すれば千行の涙さいぎりておつ、これを後昆にしめして、はひまふにそなへんとおもふ。あふげばいよくたかく、きればいよくかたし。いはんとするに、ことの葉たえ、記せんとするに筆およばず。いまこゝろみに畫圖のゑんをかりて、むかしを見ること、いまのごとくならんとおもふ。且は勸學のまなこをやしなひ、かつは信誦ともに第一義に歸するゑんとならん。あゝおんを報じ徳を謝するおしへは、内外の典籍同じく是をすすむ、たれかしたがはざらん。しかるに我本師釋尊、諸佛のいまだすくはざる所五濁増盛の時をゑらび、十方の淨

土に擯棄せられたる、逆惡の衆生のために、十惡の山邪見の林に入給しよりこのかた、正法一千餘廻をおくりて、漢の明帝の代にはじめて東漸す。代々の三藏、宗々の諸祖、淨土をたて、衆生をすゝむるに、おほくは地前地上の聖人をその機とす。花嚴に元曉といふ人正爲凡夫傍爲聖人の談をなせども、いまだひとへに罪惡の凡夫のためには釋せず。たゞ我に高祖光明寺の善導大師のみましく、證明如來說法、十六觀法、但爲常沒衆生、不干大小聖也と定判したまへり。さればこの經王の義趣をのぶる。諸家六十有餘におよべりといへども、今家の妙解、神僧の指受せしにはしかず。よて自他宗の辨鋒、言下に舌をまき、歸伏せずといふことなし。そのよの化導、僧傳にのするところ絶倫のほまれ、ひとり我高祖にかぎる物か。つたへ聞彼遺文は、仁明、文徳の御代にあたりて、慈覺智證兩大師の將來として興隆さかむなりき。叡岳のいたゞきには常行三昧堂の花首をみがきて、清和の時、明時の達者、

誦經念佛の曲韻をつたへて朝野遠近尊崇におよぶ。結構國家にみちて、行儀都鄙にあまねくして萬代の證跡たり。傳弘時いたりてとほく經道滅盡の後榮をかざる又恵心先徳に三卷の要集ありて嘉名を漢土の月にあげ證相を異朝の風になびかしき。しかはあれど稱名正行のかたはらに、しばらくの廣弘の苦心をあげて、諸行助念の方法をすすむ。しかるにわれら身兼濟にたらず行助業に闕て、やゝもすれば局分をなすに似たり。ここに同山源空上人と申人あり。彌陀本願の稱名は正業決定の行體なれば、助縁をまたずして願行具足し、專修不亂の一念は無生の大悟にかなふと決判し給へり。これにて他宗の高徳、梵風をあふぎ、諸家の雲谷、疑滯を散す。都鄙同じく歸して草のなびくがごとし。道俗ともに專意なれば百即百生の證、たなごころをさす。極惡最下をもて當機とし、極善最上をもて正業とす。醍醐の妙藥。たれかしめすところぞや。印土には釋尊出世の本懷たり。漢家には善導大師の證誠たり。

我朝には恵心の先徳の開板たり。源空上人の決釋也。まさにいまあひよりもことにあをく、一入再入のいろいろも、なをふかき。義祖上人のおんを報せんがために、諸方の傳記をひらき、古老の直説につゐて、かづかづこれを記す。もし過滅あらば後昆刪補をくわへよ多言をいとふことなかれ

上人誕生事

抑如來滅後二千八十年、日本の人皇七十五代崇徳院の御宇長承二年癸丑四月七日午正中に上人誕生し給へり。生所は美作國久米の南條いなをかのきたの庄よこ板社なりちゝは久米の押領使漆間の時國、母は秦氏なり。上人本姓は右大臣源の光より六代の孫、式部太郎源の年、陽明門にして内藏人兼高を殺害せし罪によりて、美作國に配流せられき。爰に當國の押領使神護太夫元國といひし男、實子なきによりて源の年を養子として、彼職をゆづる。年が子息、外祖元國があとをつたへ漆間の盛行と號す、其子國弘なり、其三男時國也。孝子な

き事を變て佛神に祈誓す。長承元年七月十四日夜半の夢に月輪をいだくと見る。つまの夢にかみそりをのむと見る。たがひにかたり、たがひに合す。月輪と見るは明了の智者をまふべき相なり。剃刀と見るは天下の戒師を生ずべき相なり。其後身あんおんにしてすこの苦惱なく不覺にして男子を平産す。此時紫雲、天にをゝひ、しろき幡二流下て庭上の椋木にかゝる。やうらく露をたれ金銀光を映す。見聞たなころをあはせ、希奇の瑞相にをどろく。この椋木をふたはたの木となづけて、いまにところのあがめとす

(此間に繪あり平産の體を描く)

時國夜討にあひ小矢兒敵を討給事

(此段詞かけて證紙のみあり。又繪あり、夜討の體也)

菩提寺にいたりて觀覺得業に師とし仕る事

(此間詞かけて證紙のみあり、繪あり)

童子上洛事

觀覺案じていはく、このちごつねづねのともがらにあ

らず、おしきかな。いたづらに邊國にとどめむこととて久安三年<sup>丁卯</sup>生年十五の春、延曆寺へのぼせけるに、この兒母にいとまをこひて云、母獨身におはします。

我一子也。朝夕に給仕して父のかたみとも見えたてまつるべけれども、さしても、たが御ためも後世のつともならず。いまは登山して佛法を修學し、二親をみちびきたてまつらんとおもふ。いまのわかれをなげき思給事なかれ。流轉三界中、恩愛不能斷、棄恩入無爲眞實報恩者とうけ給はれば、けふより後、戀し、悲しみ、恨みおぼしめすべからず。つたへきく。大江定基は出家して唐へわたりし時、老母にゆるされをかふどりてこそ、彼國にして圓通大師の謚號をかふどりゆめ／＼おしみおぼしめすべからずと。かきくどきねんごろにいひければ、はくもことほりにおれて、みどりなるかみをかきなで、涙をぞかうべにそぎけるおもひあはせらるゝ事あり。祕密灌頂とかやにぞ。物をばいはずして、いたゞきに五瓶の智水をそそぐとは

申ことあんなれ。母おもひのあまりに

かたみとてはかなきをやのとどめてし

このわかれさへまたいかゞせん

童兒入洛事

この兒、入洛の時、久安三年二月十三日、つくりみちにて、時の關白法性寺殿の御出にまいりあひて、かたはらの小河にうちよりけるを、御車よりあのおさなき物、馬にのせながら具してまいれと。仰くだされけるにつきて御隨身ども具參す。御車をかけはづし御合掌ありて、いかなるちごぞと、御たづねありければ、美作國より比叡の山に學問のためにまかりのぼると申。殿下の仰にさる事あるらん。かまへて學問よくせらるべし。師匠にたのみたてまつるべしと、ねんごろに御契ありけり。上下の御ともの人、これほどのみなちごに、過分の御禮儀何事ぞやと思あひけるに、後に仰のありけるはかのちごたゞ人にあらず。頂のうへにうつくしき天蓋ありき。ちかくて見しには眼精に金光あ

りつと。これをうけ給はる人々いかでか感じ申ざらん御覽じとゞめらるゝ御めと申、見へたてまつる人と申あらかたじけなやゝとぞ申あへる

法然上人傳記卷第一下

登西塔北谷持法房事

久安三年三月十五日に登山す。かの叔父の觀覺は、もとは山門の住侶也けるが、隨分の修學者にて、成業の望をなしけるに、思ひの外に流轉しける恨によりて南都にうつりけるが、學道の望をとげて、ほどなく得業になりて、久しくの得業とぞ申ける。然共猶本山の舊執ありけるにや、此兒をば延曆寺西塔北谷持法房の源光法師がもとへぞのほせける。彼時觀覺得業が狀に、進上 大聖文殊の像一體とかける間、源光此消息を披閱して、文殊の像を相尋るに、文殊の像は見へずして小兒來れり。源光先日の夢に文殊を拜す。今の消息に符合せり。文殊の像とは此兒の器量をほめたる詞也と

心得て、即書を授に流るゝ水よりも速か也

### 入皇圓阿闍梨室の事

この兒の器量等倫にこえ、ほどなく拔羣の名譽有ければ、源光が云、我はこれ魯鈍の淺才也。すべからく碩學に付て圓宗の奥義をきはむべしとて、同年四月八日功德院の阿闍梨皇圓に入室せしむ。闍梨手をうちて云去夜の夢に満月室に入と見る。少生又俊利也。たゞ人にあらずといひて、法門をならはしむ。彼闍梨は粟田の關白四代の後、三河の權の守重兼が嫡子、少納言資隆の朝臣の兄、隆寛律師の伯父、皇覺法橋の弟子、時にとりての名匠なり

### 遂出家受戒學六十卷事

同年の仲冬に出家受戒す。或時師に申て云、すでに出家の本意を遂侍る。今におきては、跡を林藪にのがれんと。闍梨の云、たとひ遁世の志ありとも、まづ六十卷をよみわたして後、その本意を遂べしとの給へば、我いま閑居をねがふ事は、ながく名利の望をやめて、

心靜に佛法を修學せんが爲也。此仰尤本意也とて、十六歳の春より、十八歳の秋に至るまで三ヶ年の光陰をふるに、六十卷の淵源をきはむ。五時四教の廢立、惠日をかゞやかす事、ほとく師範にこえ、三觀一心の妙理、祖風をつたふる事ふかく佛意にかなへり

### 入叡空上人室事

此新發意、日に隨て智辨無窮なる間、闍梨いよいよ感歎して云、まげて講説をつとめ、速に大業をとけて、佛家の樞樞として、圓宗の棟梁にそなはり給へと。度度懇にすゝむれども、更に承諾の詞なくして、なを隠遁の色ふかゝりければ、然ば黒谷に住して慈眼房を師とせよ。かの慈眼房叡空は、眞言と大乘律におきては當時たぐむすくなき英髦也といひて、庚午久安六年十八歳の九月十二日に初めて闍梨相具して黒谷の叡空上人の室に至る。上人發心の由來をとひ給ふに、親父夜討の爲に世を早せしより、其遺言片時も忘ざる次第、具にかきくどき給ひければ、委きゝて隨喜して云、少年

にして早く出離の心を發せり、誠にこれ法然道理のひじりとて、法然をもて房號とす。いみなは源空。これ則初の師の源光の初の字と。後の師の叡空の後の字をとれるなり

法花修行時白象出現事

黒谷に住してより後は、叡空上人に隨て密と戒とをならひ、其後一切經論、飢をしのびて日々にひらき、自他宗の章疏眠を忘れてよなくに見る。其外古今の傳記日記、和漢の祕書祕傳、手に取、眼にあてずといふ事なし。諸宗に渡りて修行せられけるに、法花三昧修行の時は白象道場に現す。上人唯獨これを拜す。餘人は見ざる所也

眞言修行時觀成就事

眞言の教門に入て、道場觀をこらし給に、忽に五相成身の觀行を成就し給ふ事、言語のおよぶ所にあらず

暗夜得光明事

暗夜に經論を見給ふに、燈なければども光明室の内を照

してひるのごとし。法弟信空上人同じくそのひかりを見る

花嚴經披覽の時青龍出現事

花嚴經披覽の時、青龍机のうへにわだかまれり。法弟信空上人とりて捨べきよし仰られけるに、信空上人はもとより她におちける間、師の命にしたがはんとすれば、たえがたく恐し。もださんとすれば、其命背がたし。進退きはまりけれども、をづくちりとりへのせて、あかり障子の外に捨て歸りて見るに、又本のごとくありければ、いかにとりてはすてぬかと、上人被仰けるを、取てすて、候へば、又本の定に候よしをぞ申されける。猶とりて捨よとや、仰られずらんと、肝を消す所に、其後は仰らるゝ旨なし。信空上人、其夜の夢に大龍すがたを現じて、我はこれ花嚴經を守護する龍神也。おそるゝ事なかれと

藏俊僧都寛雅法印對面事

久壽三年 四月二十七日改 生年廿四の春、求法の爲に修  
元保元元年也

行し給ふとて、先嗟峨の釋迦堂に七日參籠して後、南都へ下て藏俊僧都にあひて、法相宗の法門の自解の義をのぶるに、藏俊是をきゝて手を打て云、我等が師資相承せる、いまだ此義を存ぜず。上人はたゞ人にあらず。佛陀の境界也とて、かへりて師範と請して、一期の間供養をのぶ。中川少將の上人にあひて鑑真和尚の戒をうく。大納言法印寛雅にあひて、三論を決し給ふに、寛雅涙を流して寶藏をさづけ、あまさへ二字してかの宗の血脈に我名の上に上人の名をかき給ふ。慶雅法橋に、花嚴を談じ給事、又々如此

#### 紫雲覆日本國事

法相三論の碩徳、面々に其義解を感じ、天台花嚴の明匠、一々にかの宏才をほむ。寂空上人をはじめとして四人の師範歸りて弟子となる。時の人の諺に云、智惠第一法然房と、然ども出離の道にわづらひて身心安からず。報恩藏をひらきて出離生死の爲、衆生濟度の爲に、一切經をひらき見給ふ事五遍也。披覽する所に一

代聖教を思惟し給ふに、彼も難く是もかたし。誠にこれ顯密事理の行業は、利智精進の器のみ甌べしといへども、愚鈍下智の機根は、生死解脱の道を失へり。然に恵心の往生要集を開見給ふに、此集には偏に善導和尚の釋義をもて指南とせり。善導の疏には亂想の凡夫稱名の行によりて、順次に淨土に生べき旨を判じて、凡夫の出離をたやすくすゝめられたり。とりわきひらき見んと思ひて、別して見る事三遍、前後合て八遍、或詞に一心專念彌陀名號行住坐臥不問時節久近念々不捨者是名正定之業願彼佛願故の文にいたりて、忽に本願の正意、稱名にあり。是に過たる善惡凡夫の出離の肝心なしと見立給て、我すでに此道理を得たり。自身の出離におきては思定つ。他の爲に此法をひろめんとおもふ所存の義、佛意に叶や不叶やと、思ひわづらひて、まどろみ給へる夢に、紫雲たなびきて日本國に覆雲の中より無量の光を出す。光の中より百寶色の鳥とびきたりてみちみり。又高山あり。けんそにして西

方にむかへり。長河あり、洪汗として邊畔なし。蜂のうへには紫雲そびき。河原には孔雀鸚鵡等の衆鳥あそぶ。雲の中に僧あり。上は墨染、下は金色にて、半金色の衣服なり。上人問ての給はく、これは誰にかあると仰られければ、答ての給はく、我はこれ善導なり。汝専修念佛の法をひろむる故に、證とならんが爲に來れる也と。又天台の菩薩大乘戒は釋迦如來より十九代法義相承、上人の一身にあり。此故に王后以下、海内の貴賤、受戒の師範として尊重他に異也。母の剃刀をのむ夢、すでに符合せり。又紫雲の日本國に覆夢たがふことなし。上人の化導に隨て、稱名念佛を信ずるもの、一州にみちふさがれり。實夢かくのごとし。信じて疑事なかれ。思ふべし上人の勸を信じて背ざらんものは、定めてかの紫雲に乗じて、順次に極樂淨土に住生せんことを。彌陀如來、稱名を本願とたて給へる上には、往生の業におきては、稱名にすぐるゝ行あるべからずと、上人たて給ふ時、師範寂空上人、觀佛はず

ぐれ稱名はおとれる也との給ふを、上人、なほ念佛勝たる義をたて給ふに、寂空上人腹立して、こぶしをにぎりて上人のせなかをうちて、先師良忍上人もさきにごそ生れ給ひたれと、上人申されける時、寂空上人彌腹をたて、脊ぬぎにおりて、あしだを取りて又うち給へば、聖教をよくく御覽候はでとぞ、申されける哀なりし事也

#### 寂空上人臨終之事

寂空上人臨終の時、讓狀をば書て、上人に聖教往來等を讓りて、をはり給にけるが、良久しくありて、よみがへりて、讓狀をこひかへして、進上の言をくわへて書なをしてゆづられけり。定めて冥途の沙汰の侍りけるかとぞ申あひけり

### 法然上人傳記卷第二上

#### 住吉水念佛弘通事

高倉院御宇、承安五年の春上人四十三、黒谷をいで、

吉水に住し給ふ。其より以來、淨土の法を談じ、念佛の行をひろめ、普く萬人を勧め給ふに、化導に隨て念佛を行するもの、たとへば衆星の北辰に歸し、萬流の東海に宗するが如し。まれに道を問者には、しめすに西方を教へ、適行をたづぬる人には、授るに念佛をもてす。破戒罪根の出離、爰に已に極まり、愚癡淺識の往生いま初てあらはる。宜哉や、我本因地以念佛心、入無生忍今於此界、接念佛人歸於淨土。上人此化導をたれ給はずば、我等が得度、更に誰の人をかたのまん是則念佛往生の法をもて、順次の出離を勧め給ふ事は、近くは二尊の御本意にかなひ、遠は十方の證誠を期す專修專念のおしへは、在世の内に五畿七道にみち、一心一向のすゝめは現世の間に六十餘州にあまねし。上人つねに人々にむかひて唱へ給へる文云、佛告阿難、汝好持是語者即是持無量壽佛名と。上人かた利給へる詞には、名號をきくといふとも、信ぜずば聞ざるが如し。たとへ信すと云とも、唱へずば信ぜざるが如し。

只つねに念佛すべしとぞ仰られける。抑天台山は、桓武天皇の御願、傳教大師の草創、鎮護國家の道場、顯密薰修の垂跡なり。大師灌頂の相承、化度利生の方便は申不及、千觀、惠心、僧賀、寬印等の道心者おのの本宗をなげすて、一向に念佛の一門をひろめ、今法然上人、顯密權實の教釋を聞て、偏に本願稱名の出要を勧め給ふにいたるまで、おほくは叡山の月より出て樂邦の風をのぞみ給へる。此化導を聞及ばん人、誰か稱名の行に倦で、願往生の志をゆるくせんや

#### 高倉天皇御受戒事

同年の春、高倉の天皇、上人を大内に召されて、一心の妙戒を受させたまふ。階下の卿相、簾中の貴女、共に、戒徳を貴ひ、同く戒香に熏ぜずといふ事なし

#### 後白河法皇說戒往生要集御聽聞事

後白河法皇、上人を召請せられ、法住寺殿にて說戒ならびに往生要集を談せしめたまふに、往生極樂の教行は、濁世末代の目足なり。道俗貴賤たれか歸せざらん

者と侍るより、御心肝に銘じて、今始めてきこしめさるる様に御感涙甚し。仍左京の權の大夫隆信の朝臣に仰て眞影を鬪せしめ、末代の爲に蓮花王院の寶藏にぞ納られける。仁和寺の法親王より、御師範のよしにてめさるといへども、隱遁の身にをそれて、かたく辭し申されけり。しかれども八條院、殷福門院、宣陽門院、七條の院、准后宮よりはじめ奉て、大臣諸卿、戒文の受者、念佛の歸依、天下にみちみてり

## 於上西門院說戒時她生天事

上西門院にして上人七日說戒し給ひけるに、からかきのうへに、一の她わかまされり。更にはたらかずして聽聞の氣色あり。結願の日に當て、此她忽に死にけり其頭二つにわれにけり。中より蝶のごとくなるもの飛いずと見る人もあり。或は天人の如して昇上と見る人もありけり。昔遠行する聖ありけり。日くれにたれば野中に塚穴のありけるとままりて、終夜阿毗曇を論じけるに、樹の上に五百の蝙蝠あり。此聽聞の功德に

よいて、すみやかに五百の應眞となりき。いま此一すちの她、七日受戒の功力にこたへて、雲を分て上ぬるにやと、人々驚喜す。かれは上代なるうへ、大國也。これは末代にして小國也。しかれども佛教の靈驗は、大國にもよらず、小國にもよらず。開法の得益は上代ともいはず、末代ともいはず。若上人の徳あらすば、いかでか下凡の信をすゝめん。希代の美談なりとぞ、時の人申侍ける

## 皇圓阿闍梨事

功德院阿闍梨皇圓、自身の分際を計、たやすく此度生死を出べからず。若度々生をかへば隔生即忘のゆへに定めて佛法をわすれんか。不如、長命の報をうけて慈尊の出世に逢奉らんとて、命長き者を勘るに、鬼神よりも、她道はまされりとして、她にならんと誓て、死期の時、水をこひて掌に入て終にけり。其後、皇圓阿闍梨、花山院太政大臣忠雅公の御許へまいりて、聊申入べき事侍りて參たるよし、申入ける間、彼闍梨は

已に逝去の人也。いかでかこゝに來るべきや。人たがへにこそとて、尋させられけるに、功德院の肥後の阿闍梨皇圓と申ものにて侍るよし重て申ける間、不審のあまりに出向て、對向せられけるに、皇圓阿闍梨の條無疑あひだ、抑御逝去の由承り侍は、ひが事にやと仰られければ、闍梨の申さく、逝去は勿論也。それに付て聊所望の事有てまいり侍り。其故は、適人身を受といへども、二佛の中間にさへ生て、猶生死に輪廻せん事の悲しく侍れば、長命の報を感じて慈尊の出世を待奉らんが爲に、誓て虵身をうくる所に、大海は中天の恐あり。池にすまんとすれば主なき所なし。遠江國笠原の庄は御領なり。彼庄に櫻の池といふ池あり。申あづかりて居所と定て、閑に慈尊の出世を待奉らんが爲にまいりて侍るよし申ければ、子細に不及。その心に有べしと。御返事を承りて、たつとみるほどにやがて見えす成ぬ。ふしぎの事也と口遊する所に、幾程の日數をへずして、笠原の庄よりしるし申けるは、櫻の

池に雨くたらすして、俄に洪水出で、風ふかすして忽に大浪たちて、池の中の塵悉くはらひあぐ。諸人耳目を驚すよし申入る。其日時を勘るに彼闍梨領家へまいりて、此池を申請て、罷出ける時日也。誠にふしぎの事也。委事は彼家の記にあり。智惠あるが故に、生死の出がたき事をしり、道心あるが故に、佛の出世にあはむ事をねがふ。然といへども、いまだ淨土の法門をしらざるが故に、如此の意樂に住する也。我其時此法門を尋得たらましかば、信不信はしらず、申侍なまし極樂に往生の後は、十方の國土に心にまかせて經行し一切の諸佛を、おもひにしたがひて供養す。何ぞかならずしも穢土に久く處する事をねがはんや。彼闍梨遙に慈尊三會の曉を期して、五十六億七千萬歳の間、此池に任給はん事を、上人恆に悲み給き。當時に至るまでも、靜なる夜は振鈴の音きこゆるとぞ申傳へ侍ける上人悲みのあまりに彼所へ下て、池の邊にのぞみて、稱名念誦懇にして廻向せられけり。一子平等の慈悲は

薩埵の本誓也といへども、累日斗薨の懇念は、凡夫の所爲にあらざらんをや

## 重衡卿の事

治承四年庚子十二月廿八日、平家の本三位中將重衡卿、

父太政入道の命によりて南都をせめし時、東大寺に火をかけしかば、大伽藍忽に灰燼となりき。其後、元暦元年二月七日、一谷の合戦の時、本三位の中將いけどられて都へのぼりて、大路をわたされてさんぐの事共のありし時、法然上人を招請して、後生菩提の事を申合られしに、上人、中將のおはする所へ、さし入て見給へば、さしもはなやかにきよげに見え給し人の其ともおぼえず、やせおとろへて装束は紺村この直垂小袴に、折烏帽子、ひきたてたるをき給へり。目もあてられぬありさまなれば、上人心よはくも、涙のうかひけるを、かくては、あしかりなむと、思しづめて、さらぬ様にもてなして對面あり。三位中將なくく申されけるは、今度生ながらとられけるは、今一度上人

に見參に入べき故に侍ける。重衡必しも大佛殿を燒奉らんといふ所存は候はず。故入道の命そむき難によりて、南都へむかひ侍し時、いかなるものかしつらん。近邊の房舎に火をかけ侍しに、時しも風はげしくして大伽藍を灰燼となし奉し事は、力及ざる次第也。重衡發心せぬ事なればとは存すれども、時の大將軍にて侍しうへは、責一身に歸する事にて侍るなれば、重衡一人が、罪業につもりて、無間の重苦はうたがひあらじと存知せり。一門の人々多く侍しに、重衡一人いけどられて、こゝかしこに耻をさらすも、併其むくひとこそおぼへ侍れ。かくて命終せば火血刀の苦果、敢てうたがひなし。出家こそ心ざす所なれども、ゆるされなければ力及ぼす。只本どりをつけながら、戒をうけ候はん事いかゞ侍べき。かゝる悪人の助かりぬべき方法侍らば、示給へと。うちくとき申されければ、上人涙をながして、且く物もの給はず。良久ありての給ひけるは、誠に御出家こそ功德廣大なれども、徇ゆるされ

なくば、四部の弟子なれば、御髮をつけながらも、戒を持せ給はん事、子細有べからずとて、戒を授たてまつりて、粗存知の旨を説たまふ。難受人身をうけながら、むなしく三途に歸り給はんことは、かなしみても猶餘あり。敬ても又つくべからず。然に穢土を厭、淨土を欣ひ、悪心をして、善心を發し給はん事は、三世の諸佛も定めて隨喜し給ふべし。其にとりて出離の道まぢまぢなりといへども、末法濁亂の機には、稱名をもて勝たりとす。罪業深重の輩も愚癡闇鈍の族も、唱ればむなしからざるは、彌陀の本願也。罪ふかければとて卑下し給べからず。十惡五逆も廻心すれば往生し一念十念も心をいたせば來迎す。經には四重五逆諸衆生、一聞名號必引接と説き。釋には忽遇往生善知識、急勸專稱彼佛名と判ぜり。たとひ無間の重罪なりといふとも、稱名の功德にはかつべからず。利劍卽是彌陀號、たもてば魔縁ちかづかず。一聲稱念罪皆除。唱へば罪業のこりなし。罪障を消滅して極樂往生をとげん

こと、他力本願にしくはなし。御榮果むかしも今もためしなき御身也。然共有爲のさかひのかなしきは、いまだ生をかへざるに、かゝるうき目を御らんするうへは、穢土はうたてき所ぞとうれへ思召捨て、ふかく彌陀の本願をたのみましまさば、御往生疑有べからず。これ全く源空の私の詞にあらず。彌陀因位の悲願、或は釋尊成道の時、説をき給へる經教也。一念も疑心なく、一心に稱名をたしむみ給ふべきよし、こま／＼と教化し給へば、中將掌を合て、なく／＼聽聞して、冥より冥に入心ちにて侍つるに、此仰を承るこそ、さりとともと懇もしく侍れと悦で、いかにして都にてむつび給し人の許に、双紙筒を取わすれ給事の有けるを、入御の御事もやとて送り遣しけり。折節うれしく覺て、中將自取出て、御戒の布施とおぼしくて、上人の御まへにさしをきて申されけるは、御用たる物には侍ねども、人にはかならず形見と申事あり。重衡が餘波とも御らんじ思召ば、いつも不退の御念佛なれば、御目に

かゝり候はん度には、とり分、重衡が爲と、御廻向有べきよしを申されければ、心ざし感じて、上人懐申して出られけり

## 俊乘房大勸進事

東大寺造營の爲に大勸進の聖の沙汰ありけるに、法然房源空其仁にあたりと、人々すゝめ申によりて、勸進聖たるべきむね、後白河法皇より、右大辨行隆朝臣を勅使として、仰下されるに、上人申されけるは、源空山門の交衆をとゞめ、公請を辭し申事は、しづかに修行して順次に生死を離れんが爲也。若し大勸進の職におらば、念劇ひまなくして、行業すたれぬべしとかたく子細を申されければ、行隆朝臣、其堅固のころさしを見て即奏聞する所に、然らば器量の仁を擧申さるべしと。重て仰下される時、上人、俊乘房重源をよびよせて院宣の趣をのべ給ふに、重源左右なく領狀す。よて擧し申されければ、大勸進の職に補任せられけり。重源もし此大勸進成就したらば、一定の權者

かなとそ、上人の給ひける。重源は伊勢大神宮にまいりて、この願成就すべくば、其瑞相をしめし給へと祈請しけるに、三七日にあたりける五更の天に、唐裝束したる貴女の、御手より方寸の玉をたまわると、示現をかうぶりて、夢さめてのち、これを見るに、夢に見る所の玉、袖の上であり。重源悦で頭にかげられけり其後、すゝめざるに、綾羅錦織、錢貨米穀、心にまかせければ、程なく金銅の本尊を、本のごとく鑄たてまつりけるに、御戒の布施に、上人に奉りける本三位中將の双紙宮の鏡を、かの孝養のためとして、上人より俊乘房へ送りつかはしければ、金銅の本尊を鑄奉りける爐の中へ入給ひけるに、おどりかへりて、わきあはさりけるを、三度まで入れけれども、爐の中よりふきいだして、遂にたまらざりければ、且は中將の罪障懺悔のため、且は未來の不審をひらかん爲に、件の鏡は大佛殿の正面、ヒツシヤ坤の柱にうちつけられき。炎魔大王の淨波梨の鏡は、罪業のかけをうかべ、目連尊者の所

持の鏡は、三世の事をてらす。百練の鏡は、ひかりも世にこへ、うつれる影もあざやか也。今此重衡卿の鏡は、たゞ罪業のかげばかりにや、うつらんと。身のけたつばかりぞおぼえける

## 法然上人傳記卷第二下

於清水寺說戒念佛勸進事

後鳥羽院御宇、建久元年庚戌秋、清水寺にて上人說戒の時、念佛をすゝめ給ひければ、寺家の大勸進、沙彌印藏、瀧山寺を道場として不斷常行念佛三昧を初ける。能信といへる僧、香爐をとりて開白發願して行道をはじめ。願主印藏、寺僧等、ならびに比丘比丘尼其數をしらず。抑清水寺の靈像は、極樂淨土には一生補處の薩埵、娑婆國には施無畏者の大士なり。仁和寺の入道親王の御夢想に、清水寺の瀧は過去にも是有き。現世にも是有。未來にも又これあるべし。是則、大日如來の鏡びづ字の智水也とて、一首を詠じ給ふ

清水の瀧へまればおのづから

現世あんをん往生ごくらく

と示し給ければ、大威儀師俊縁を御使として、寺家へおほせ送られけるとかや。まことにその憑み深かるべきもの也

古年童出家往生事

清水寺にて上人說戒の時、念佛すゝめ給ひけるに、南都興福寺の古年童、發心出家して則瀧山寺の念佛衆にまじはりけるが、松蒙寺の邊に、庵室を結びて高聲念佛して往生をとぐ。能信、如法經のかうぞをうへながら、往生人の縁をむすぶ。棺の前の火の役をつとめて歸るに、異香衣のうへに薫ず、人々奇特のおもひをなせり

顯眞座主上人論談事

天台座主權僧正顯眞、いまだ大僧都なりし時、承安三年癸巳生年四十三にして官職を辭して、大原に籠居十箇年の春秋を送て後、壽永二年九月に、日吉の行幸の時

座主明雲賞をゆづりて法印に叙せらるといへども、かたく松門を閉て敢て事にしたがはず。只生死の難き事のみなげく。其後、衆徒推て擧申によりて文治六年<sup>庚戌</sup>三月七日、天台座主に補せらるといへども、承諾せざるあひだ、勅使大原へむかひて宣命を下て座主職を授くる。遂に召出されて同五月廿四日最勝講の證義をつとめ、同廿八日權僧正に任ず。然て、やゝもすれば尙隱遁の思ひふかくして、常には永辦法印と出離解脫の法門をのみ談ぜられけるに、或時、永辦法印かくのごときの事は、法然上人にくわしく御尋あるべきよしを申ければ、座主上人に對面ありて今度いかでか生死を解脫し侍るべきとの給ふに、上人いかやうにも御計には過べからずと。座主又申されけるは、誠に然也但し先達にましますば、思定給へる旨あらばしめし給へと也との給へば、其時、自身の爲には聊思定たる旨侍り。たゞはやく極樂の往生をとげんと也。座主又申さるゝ様、順次の往生遂がたきによりてしゐてたづね

侍り。いかゞたやすく往生をとげんや。上人こたへ給はく、成佛は難しといへども往生は得やすし。道練、善導のころによらば、佛の願力を仰て強縁とするゆへに罪惡の凡夫、淨土に生ずと云云。其後更に言説なくして上人歸りたまひて後に、法然房は智惠深遠也といへども、聊偏執の咎ありと、座主の仰られけるを、上人歸りきゝ給ひて、我しらぬ事を云には、必疑心をおこす也との給ひければ、座主又この事を聞て誠に然也。我顯密の教に稽古を積といへども、併これ名利のためにして、淨土を心に欣ぬ故に、道練、善導の釋義をうかゞはず。法然房にあらすば、誰の人か如此いはんや。耻べしゝとて、百日の間大原に籠居して淨土の章疏を見立給てのち、儀を立てて上人に示て云、我粗淨土の法門を見立たり。來臨せし給へ、靜に談じ申さんと。爰に上人、東大寺の大勸進俊乘房重源は、いまだ出離の道を思定ざるがゆへに此よしを示す。則弟子三十餘人を相具して大原にむかふ。勝林院の丈六堂

に集會す。上人方には重源已下、次第に坐す。座主の方には山門の碩徳、并大原の上人達坐す。山門久住の碩學には、永辦法印、智海法印、靜嚴法印、淨然法印證眞僧都、覺什僧都、仙基律師等也。大原の上人には本性房湛敷、來迎院の明定房蓮慶、勝林院の清淨房等也。此外山門の衆徒、雲霞のごとく集て見聞す。各蓄杖を支度して上人の所立若邪義ならば、卽降伏すべき由也。面々に諸宗に立入て深義を論談し侍けるに、上人、天台眞言花嚴法相三論等の顯密に付て、凡夫の初心より佛果の極位に至るまで、修行の方軌、機法の相貌、具に述説之後、是等の深法みな義理巧妙にして利益最勝也。機法相應せば、得益種をめぐらすべからず取證如反掌の金言まこと也。全く疑所なし。但源空がごとき頑魯の類ひは更に其器にあらず。然開源空發心の後、聖道門の諸宗に付てひろく出離の道をとぶらふに、彼も難く是も難し。是則代下り人おろかにして機教相背ける故也。此外有智無智を論ぜず、持戒破戒を

選ばず、時機相應して順次に生死を離べき要法は、只これ淨土の一門、念佛の一行也とて、一日一夜の間、法藏比丘の昔より彌陀如來のいまに至るまで、本願の趣、往生の道にくらからず、理を極め詞をつくして但これ涯分の自證をのぶる也。全く其法器の受用をさまたげんとにはあらずとの給ければ、座主より初て滿座の衆みな信伏して、一人として疑なし。碩徳達褒美して云、形を見れば源空上人、まことには彌陀如來の應垂歎と。隨喜のあまりに、座主みづから香爐を取て行道し、高聲念佛を唱へ給に顯密の明匠まことをこらして異口同音に三口三夜ひまもなし。信男信女三百餘人參禮の聽衆數を知らず。座主、則一の願を發して云、此砌に五の坊を立て一向專修の行を修して、稱名の外餘行をまじへじと、其行は今に退轉なし。重源上人、同く淨土の法を信じ、念佛の行を立て、又一の願を發して云、我國の道俗、閻魔の廳に跪かん時、其名を問れば佛號を我唱へんが爲に、あみだ佛名をつげんとて

まづ我名をば南無阿彌陀佛といはんといへり。我朝の  
あみだ佛の名、是より始れり。其より此かた、洛中の  
貴賤、邊土の道俗、處々の道場に念佛を勧ざる所なし  
座主は上人勸化の後は稱名の行をこたらずして、治山  
三箇年を経て建久三年十一月十四日寅刻、東塔南谷圓  
融房にして稱名の聲たえず、禪定に入が如して往生を  
遂らる。これ併上人の化導によるもの也。末代の高僧  
本山の賢哲也。諸宗の碩徳とぞりて上人に歸して順禮  
し、諸の道俗いよいよ念佛をもて口遊とす。座主此門  
に尋入て後、妹の禪尼をすゝめられんが爲に、念佛勸  
進の消息をかゝる。世間に流布する顯眞の消息といへ  
る是なり

## 六時禮讚事

建久三年の秋のころ、後白河法皇の御菩提の御爲に、  
大和の守親盛入道見佛、八坂の引導寺にして禮讚の先  
達に心阿彌陀佛、調聲して安樂、住蓮、見佛等助音し  
て、七日念佛す。其結願に種々の捧物を取り出し侍りけ

れば、上人存の外なる氣色にて、の給ひけるは、念佛  
は自行の勤也、法皇の御菩提に廻向し奉る所に布施み  
ぐるしき次第也と、いましめ給けり。これ六時禮讚の  
はじめなり

## 善導御影事

上人、五祖類聚傳といふ書を造て、震旦國の念佛の祖  
師、曇鸞、道綽、善導、懷感、少康等の五祖の徳をあ  
らはし給へり。しかるを其後俊乘房重源、初めて大唐  
より渡す所の五祖の眞影一鋪に類聚せり。上人所造の  
類聚傳に符合せる事、先に織願給へる當麻寺の曼陀羅  
の縁の文、のちにわたれる觀經の疏の文に違ざるに同  
じ。不思議の奇特なりければ、道俗男女貴賤上下、彼  
眞影を拜たてまつりて念佛の歸依彌ふかし

## 東大寺棟木事

或時、上人談ての曰イハレ、中比一人の住山者、内々淨土  
の法門を學するありき。源空がもとへ來て、我既に此  
教の主旨を得たり。然て信心いまだ開發せず。いかな

る方軌を修してか、信心を發し侍るべきと、歎きあわせし間、三寶に祈請すべきよしを教訓し侍る。しかも其後他事を忘れて祈請をいたす。或時東大寺へ參て念誦する折しも、棟をあぐる日なりければ、情これを見て信心開發しぬ。匠の計略にあらずよりは、彼大物いかでか棟の上に居すべき。凡夫のはかりごとをかくのごとし。何況、彌陀如來の善巧不思議の力にて、極惡深重の衆生を報土にむかへとり給こと、ゆめ／＼疑べからず。佛に引接の願あり、我に往生の志あり、なごぞ往生を遂ざらんや。一度この道理を得て後、二度その疑殆をおこす事なし。是則祈願の感得する故也と語侍き。其後三ヶ年を経て、種々の靈瑞を現じて往生を遂ぎ。受教と發心とは各別なるがゆへに、習學するには發心せざれども、境界の縁を見て心をおこせり。人なみ／＼に淨土の法をきき、念佛の行をたつとも、信心いまだ發らざらん人は、たゞ懇に心にかけて、常に思惟し、又三寶に祈申べきなり

#### 淨土曼陀羅事

俊乘房、觀經の曼陀羅、並に淨土の五祖の影を大唐よりわたし奉りて、建久二年のころ、大佛殿にして上人を唱導にて談話の時、南都の三論、法相の碩學等、數を盡して集ける。二百餘人の大衆、各したに腹巻を著して高座のきはにのみ居て、自宗等をとひかけて、こたえんに糺纏あらば、耻辱あたふべきよしを僉議して用意をなす所に、上人、三論法相の深義をとゞこほりなくのべ給てのち、末代の凡夫出離の要法、口稱念佛にしくはなし。念佛をそしらん輩は地獄に墮すべきよしを解説し給ひければ、二百餘人の大衆より初めて隨喜渴仰きはまりなし。さて其次に天台十戒を解説し給ふ。我山は大乗戒、此寺は小乗戒との給ひければ、大衆存の外の氣色ども也けれども、當寺の古老の中に、兼日に靈夢をしめす事ありけり。件の次第、さき立て披露しければ、衆徒各口を閉て、別の事なかりけり。説法はて、油藏へ入給ひけるに、惡僧一人、上人に立

むかひて、抑念佛誹謗の者、地獄に落べしとは、いづれの經にとかれ侍るやらんと申ける間、上人、大佛頂經これなりと分明に答給ければ、彼僧手を合て後生助けさせ給へとて、則御ともして油藏へ入奉る

聖護院宮事

聖護院の無品親王靜惠御惱の時、門徒の高僧等、大般若經を轉讀し奉りて各祈請申せども、御平愈ましまさざりければ、上人を招請せられ御臨終の次第どもたづね仰られて、いかゞして此たび生死を離べき、後生助給へと仰られければ、上人御返事には、往生極樂の御願、御念佛にしかず。佛説ての給はく、光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨と。其後御念佛おこたらずして御臨終正念にしてをはらせ給ひけり。大般若經轉讀の人々は

僧正行舜相 僧正公胤大 僧正覺實左大 法印顯惠中納言  
 法眼圓豪大納言 法印公雅相 法印道嚴 法印信觀  
 の三人の法印は障子の中に、其形白をみす。後に交

名を見てこれをしるしなす所也

法然上人傳記卷第三上

津戸消息事

天神五代の後胤、文章博士菅原孝標、常陸守に任じて下國の時、武藏國の惣追捕使、秩父權守平重綱が娘に嫁して一子を生ず。其名を津戸二郎爲廣といふ。外祖父重綱が撫育をかふりて、譜代の跡をつぎ、武勇の道を傳へき。其三男津戸三郎菅原爲守生年十八歳にして治承四年八月に、右大將家于時 石橋の時、武州より馳まいる。房州へ越給し時も同じく参向せしかば、處處の合戦に忠をいたし、重々の御感に預しより以來、關東家人の名を得て、武藏國御家人と號す。東大寺供養の爲に建久六年二月に、幕下御上洛の時は生年三十三歳、供奉したりけるが、三月四日入洛、同廿一日法然上人へ參て合戦度々の罪障を懺悔して、念佛往生の道をうけ給て後は、在京の間も常にまいりて、下向の

後も、更に他の門を望みます。但信稱名の行者と成て、念佛の行おこたらざりけるを、人ありて熊谷入道、津戸三郎は無智の者なればこそ、餘行叶難によりて、念佛ばかりをすゝめられたれ。有智の人には、必しも念佛には限べからずと申ければ、津戸三郎、其子細を上人にたづね申ける時、此事にも限らず。條々の不審を尋申けるに付て、同年九月十八日、上人の御返事、證をとりてこれをのせば

一、熊谷入道、津戸三郎は、無智の者なればこそ、但念佛をばすゝめたれ。有智の人には必しも念佛にはかぎるべからずと申由、聞え候らん。極めたるひが事に候。其故は、念佛の行は、本より有智無智にかぎらず彌陀の昔誓玉ひし本願も、あまねく一切衆生の爲也。無智の爲には念佛を願とし、有智の爲には餘のふかき行を願とし給事なし。十方衆生の爲に、廣く有智無智有罪無罪の善人悪人、持戒破戒、貴も賤も、男子も女人も、若は佛の代の衆生をも、若は佛の滅し給ひて後

のこの比の衆生、もしくは釋迦の末法萬年の後、三寶うせての折の衆生までも、みなこもるなり。又善導和尚、彌陀の化身として専修念佛をすゝめ給へるも、廣く一切衆生の爲に、すゝめて無智の人にも限る事は候はず。廣き彌陀の願を憑み、あまねき善導の勧めをひろめんもの、いかでか無智の人に限て、有智の人をへだてんや。若然ば彌陀の本願にもそむき、善導の御心にも不可叶。されば此邊にまうできて、往生の道をとひたづねん人には、有智無智を論ぜず。皆念佛の行ばかりを申候也。然にそゞろ事をかまへて、さやうに念佛を申とめんとする者は、先の世に念佛三昧淨土の法門をきかず。後世に又三惡道へ歸るべきものゝ、しかるべくして、さやうの事をば巧申事にて候也。其よし聖教にみな見えて候也

見有修行起瞋毒 方便破墮競生怨

如此生盲聞提鞞 毀滅頓教永沈淪

超過大地微塵劫 未可得離三途身 云云

此文の心は淨土をねがひ念佛を行する者を見て、瞋りをおこし、毒心を含で、はかり事をめぐらし、様々の方便をなして、念佛の行をやぶりて、あらそひてあだをなし、これをとゞめんとする也。如此人は、生てよりこのかた、佛法の眼しひて、佛の種をうしなへる闍提のともがらなり。彌陀の名號を唱て永き生死を忽にきりて、常住の極樂に往生すといふ。頓教の御法を、そしりほろぼして、此罪によりて惡道に沈みて、大地微塵劫を過とも、永く三惡道の身を離るゝことをうべからずといへるなり。さればさやうにそらごとをたくみて申候はん人をば、歸てあはれむべきなり。さほどのものゝ申さんによりて、念佛に疑をなし、不信をゝこさん者は、いふにたらぬほどの事にてこそは候はめ大かた彌陀に縁淺く、往生に時いたらぬものは、きけども信ぜず。おこなふを見ては腹をたて、いかりをふくみて、さまたげんとする事にて候也。其心を得て、いかに人申とも、御心計はゆるがせ給べからず。強に

信ぜざらんは、佛なを力および給まじ。何況や、凡夫のちから及候まじき事なり。かゝる不信の衆生の爲に慈悲をおこし、利益せんと思はんに付ても、とく極樂にまいりて、悟をひらきて、生死に歸りて、誹謗不信の者をもわたして、一切衆生あまねく利益せむと思ふべき事にて候

一、一家の人々の善願に結縁助成せん事。念佛の行を妨る事をこそ、專修の行には制したる事にて候へ。人の或は堂をも造り、佛をも造り、經をもかき、僧をも供養せんには、力をくはへ、縁をもむすばんが念佛を妨、專修をさふる程の事にては候まじ

一、此世の祈に佛にも申さん事は、其もくるしく候まじ。後世の往生の爲には、念佛の外に、あらぬ行をするこそ、念佛を妨ればあしき事にては候へ。此世の爲にする事は、往生の爲には候はねば、神佛の祈、更に苦まじく候

一、念佛を申させ給はんには、こゝろを常にかけて、

口にわすれず唱が目出事にて候也。念佛の行は、尤も  
行住坐臥、時處諸縁を嫌はぬ行にて候へば、心を清く  
して、申させ給はん事、返々神妙にて候、ひまなくさ  
やうに申させ給はんこそ、返々目出度候へば、いかな  
らん所、いかなる時なりとも、忘れずして申させ給ひ  
て、往生の業には必なり候はんする也。其のよしを御  
心得有て、同じ心ならんには、教させ給べし。いかな  
る時にも、申されざらんをこそ、ねうじて申ばやと思  
候べきに、申されんをねうじて申させ給はぬ事は、い  
かでか候べき。但いかなる折にも、きはらず申させ給  
ふべし

一、御佛、仰にしたがひ、具に開眼して下しまいらせ  
候。阿彌陀の三尊造りてまいらせ候ける。返々神妙に  
候。佛像造りまいらせたるは、目出度功德にて候也  
一、念佛の行、強に信ぜざらん人に論じあひ、又あら  
ぬ行、こと悟の人に向て、いたくしゐて仰らるゝ事候  
まじ。恭敬して、かるしめあなづる事なかれと申たる

事にて候なり。同心に極樂をねがひ、念佛を申さん人  
には、たとひ塵刹の外の人なりとも、同行の思をなし  
て、一佛淨土に生れんとおもふべきにて候なり。阿彌  
陀佛に縁なく、極樂淨土に契りすくなく候はん人の、  
信もおこらず願はしくもなく候はんには力不及。只心  
に任せて、いかなるおこなひをもして、後生助りて三  
惡道を離るる事を人の心にしたがひて、すゝめ候べき  
也。又さは候へどもちりばかりも、かなひぬべからん  
人には、阿彌陀を勧め極樂をねがはすべきにて候。い  
かに申とも、此世の人の念佛にあらでは、極樂に生て  
生死を離る事候まじき也。此外の事を人の心に隨ては  
からふべく候也。何様にも物をあらそふ事は、ゆめゆ  
め候まじ。若はそしり、もしは信ぜざらん者をば、久  
く地獄にありて、又地獄へ歸るべきものと能々心得て  
こはがらずしてこしらふべきにて候。又よもとは思ま  
いらせ候へども、いかなる人申とも、念佛の御心なん  
ど、たぢろぎ思召事あるまじ。たとひ千佛世に出で、

親あたりおしへさせ給ふとも、これは釋迦、彌陀より初て恆河沙の佛の證誠をさせ給ふことなればと思食て志を金剛よりも固くして、此たび必ず阿彌陀佛の御前へまいりなんと思召べく候也。如此の事かたはしを申さんに御心得ありて、我爲人のために可行給。穴賢

津戸三郎殿御返事云々

鎌倉の二位家より、條々尋申されけるにつきて、上人御返事の趣、此狀に違せざる間、しげきによりてこれをのせず。但彼狀の中云、念佛を申事、様々の儀候へ共、只六字を唱るばかりに、一切はおさまり候也。心には本願を憑み、口には名號を唱へ、手には數珠をとりにて、常には心にかくるが、極たる決定往生の業にて候也。念佛は、もとより行住坐臥、時處諸緣をゑらばず、身口の不淨をきはぬ行にて候へば、易行往生と申傳へて候也。只淨土を心にかくれば、心淨の行にて候也。但其中にも、身心を清くして申を第一の行と申候也。又娑婆世界の人の、餘の淨土を欣候はん事は、

弓なくして天の鳥をとり、足なくして木ずへの花をおらんとせんがごとし。必ず專修念佛は、現當の祈と成候なり。これも經文にて候也云々

又後年に津戸三郎がもとへつかはされたる上人の御返事に、專修念佛の人は、世にあり難き事にて候は、其一國に三十餘人まで候はんこそ、まめやかにあはれに候へ。京邊なんどの常にきゝならひかたはらをも見ならひ候ぬべき所にて候に、今にも思ひきりて、專修念佛する人は、難有事にてこそ候に、道禪禪師の並州と申所こそ、一向念佛の地にて候に、專修念佛三十餘人は世に難有覺候。偏に御力、又熊谷入道などの計にこそ候なれ。それも時の至りて往生すべき人の多候べき故にこそ候なれ。縁なき事はわざと人のすゝめ候にだにも、かなはぬ事にて候へば、まして子細をもしらせ給はぬ人などの、仰られんによるべき事にて候はぬに、本より機緣純熟して、時いたりたる事にて候へばこそ、さ程專修の人などは候らめと、おしはかり哀に

覺候。但無智の人にこそ機縁にしたがひて、念佛をば勸むる事にてあれども、申候なる事はもうくのひが事にて候。あみだ佛のむかしの御誓ひに、有智無智をもえらばず、持戒破戒をも嫌はず、佛前佛後の衆生をえらばず、在家出家の人をも嫌はず、念佛往生の誓願は、平等の慈悲に住して、發給たる事にて候へば、人を嫌ふ事は全く候はぬ也。佛の御心は慈悲をもて、體とする事にて候也。されば觀無量壽經には、佛心といふは大慈悲これ也と説て候也。善導和尚、此文をうけては此平等の慈悲をもて、あまねく一切を攝すと釋給へる也。一切の哀み廣くして、もるゝ人候べからず。釋迦のすゝめ給も、惡人善人智人愚人も、ひとしく念佛すれば往生とすゝめ給へる也。念佛往生の願は、これ彌陀如來の本地の誓願なり。餘の種々の行は、本地のちかひにあらず。これ釋迦如來の種々の機縁にしたがひて、様々の行を説せ給ひたる事にて候へば、釋迦も世に出給ふ心は、みだの本願をとかんと思召佛心に

て候へ共、衆生の機縁に隨給ふ日は、餘の種々の行をも説給は、これ隨機の法也。佛の自御心の底には候はず。されば念佛は彌陀にも利益の本願、釋迦にも出世の本懐也。餘の種々の行には似ず候也。されば無智の者なればといふべからずと也云々。念佛は彌陀利生の本願、釋迦出世の本懐也と云事明也。末世愚鈍の衆生はふかく上人教誡の旨を信じて、敢て別解別行の人を輕しむる事なかれ、只專修專念の行をはげむべき者也

#### 選擇集の事

建久八年<sup>丁巳</sup>上人六十五、不例の事御座ありけるを、月輪禪定殿下、以外に驚思召されけるを、聊平愈し給ひたりければ、清兵衛尉經重を御使として、御形見に淨土の要文をあつめて給べきよし被仰送けるに付て、選擇集をかゝれける時、安樂を執筆として、要文をあつめられしに、我若翰墨にたえたる身になからましかば豈此佛法棟梁の役を勤哉と申ける間、此僧憍慢のころふかくして、惡道に墮べしとて、これを退て進士入

道眞觀をもて執筆とせられけり。建久九年に功を終て上人存日の間は祕藏せらるべし、更に披露に不可及と禪定殿下仰られけるによりて、門弟に件集を授られし時は、或は此書をうつして末代に廣むべしといひ、或は源空存生の間は、披露に及べからずとて、只滅後の流行を心ざして、ふかく存日の披露を痛申されけるは偏に月輪殿の仰を憚申されける故也

## 善惠上人の事

西山善惠上人は、天曆聖主の御後、入道加賀の權守親季法名の息也。一門のよしみ深くして、幼稚の昔より久我内府通親公の猶子たりき。漸く元服の沙汰の侍りしに、童子ふかく菩提心に住して、偏に出家をのぞむ父母更に是をゆるされず。于時生母忍て、一條のもどり橋にて、橋占をとわれしに、一人の僧ありて、眞觀清淨觀、廣大智慧觀、悲觀及慈觀、常願常瞻仰と誦し東より西へ行。生母これをきくに落涙甚し。内府此由をきゝ給ひて、宿善の内に催す事を感じて、出家をゆ

るされし時、師範の沙汰侍しに、童子申さく、願は、法然上人の弟子たらん。不然は出家更に其詮なしと、仍建久元年、十四歳にして遂に上人の室に入、常隨給仕の弟子として、淨土の法門殘所なし。人の心得やすからん爲に、白木の念佛と云事を常に仰られき。自力の人は念佛をいろどる也。或は大乗の悟をもつていろどり、或はふかき領解をもていろどり、或は戒をもていろどり、或は身心を調るをもていろどらんとおもふ也。定散の色どりある念佛をば、しをほせたる、往生疑なしとよろこび、色どりのなき念佛をば、往生はえせぬと歎也。なげくも、よろこぶもともに自力の迷なり大經の法滅百歳の念佛、觀經の下三品の念佛は、何のいろどりもなき白木の念佛也。本願の文の中の至心信樂を稱我名號と釋し給へるも、白木になりかへる心也所習觀經の下品下生の機は、佛法世俗の二種の善根なき無善の凡夫なる故に、何のいろどりもなし。況、死苦に責られて、忙然と成上は、三業ともに正體なき機

也。一期は悪人なるゆへに、平生の行のさりととも惡むべきにもなし。臨終には死苦にせめられける故に、止惡修善の心も、大小權實の悟も、かつて心にをかず。起立塔造の善も、此儀には叶べからず。捨家棄欲の心も、此時はをこり難し。誠に極重の悪人也、更に他の方便ある事なし、若他力の領解もやある。名號の不思議をもや念じつべきと教れども、苦に責られて次第に失念する間、轉教口稱して、汝若不能念者、應稱無量壽佛と云時、意業忙然と成ながら、十聲佛を稱すれば聲々に八十億劫の罪を滅して、見金蓮花猶如日輪の益にあづかる也。此儀には機の道心一もなく、定散のいろどり一もなし。只知識の教に隨ふばかりにて、別のさかしき心もなく、白木に唱て往生する也。たとへば、をさなきものゝ手をとりにて、物をかゝせんがごとし。豈小兒の高名ならんや。下々品の念佛も又かくのごとし。只知識と彌陀との御心にて、纔に口に唱て往生を遂也。彌陀の本願はわきて五逆深重の人の爲に難

行苦行せし願行なる故に、失念の位の白木の念佛に佛の五劫兆載の願行つゞまりて、無窮の生死を一念につづめて、僧祇の苦行を一聲に成する也。又大經の三寶滅盡の時の念佛も、白木の念佛也。其故に大小乘の經律論、みな龍宮におさまる。三寶悉く滅しなん。閻浮提にはたゞ冥々たる衆生の、惡の外には善と云名だにも更にあるべからず。戒行を教たる律も滅しなば、何の處によりて、止惡修善の心もあるべき。菩提心を説ける經卷、先立て滅せばいづれの經によりてか菩提心をも發べき。此理を知れる人も世になければ、習て知べき道もなし。故に定散の色どりは、皆失はてたる白木の念佛、六字の名號ばかり、世には住すべき也。其時、きゝて一念せんもの皆當に往生すべしと説けり。此機の一念十念して往生は、佛法の外なる人の只白木の名號の力にて往生すべき也。然に當時は大小の經論も盛なれば、彼時の衆生には事の外にまれなる機也と云人もあれども、下根の我等は、三寶滅盡の時の人に

かはる事なし。世はなほ佛法流布の世なれども、身はひとり三學無分の機也。大小の經論あれ共、或は學せんとおもふものもなし。かゝる無道心の機は佛法にあえるかひもなき身也。三寶滅盡の世ならば、力及ばぬ方もあるべし。佛法流布の世に生れながら、戒をも不持、定惠をも修行せざるにこそ、機の拙く、道心なき程もあらはれぬれ。かゝる愚なる身ながら、南無阿彌陀佛と唱る所に、佛の願行悉く圓滿する故に、こゝが白木の念佛の忝にてはある也。機におひては安心も起行も、眞すぐなく、前念も後念も皆おろか也。妄想顛倒の惑は日を逐てふかく、寐も寤も、惡業煩惱にのみほだされて居たる身のうちより出る念佛は、いと煩惱にかはるべしとも覺ぬうへ、定散の色どり一もなき稱名なれども、前念の名號に、諸佛の實を接する故に、心水泥濁にそます、無上功德を生ずる也。中々に心をそへず申せば、生ると信じてほれくくと南無阿彌陀佛と唱が、本願の念佛にてはある也。これを白木の念佛

とは云なりとぞ仰られける。當世も自力根性の人は、念佛に付て、いろくの採色を加へ行を指南とする人又これあるが、是併上人弘通の正義をしらざる故也。善惠上人は本師上人の勸化をつぎ。化導年ふりて行年七十にして、寶治元年十一月廿六日午剋、種々の奇瑞をあらはして、端坐合掌念佛二百餘遍を唱て往生をせられき。當世西山門と號し、小坂義と稱するは、彼善惠上人の流也

## 月輪殿御不審事

或時月輪殿より條々の御不審を御書にのせて、上人に尋仰られければ、委請文にのせて申されけり。所謂一の御疑云、一度信心を起て更に疑心なくば、一念十念をもて決定往生の業として、其後稱名稱念せずといふとも、順次の往生更に不審有べからざるか。又信心決定の後は、四重五逆等の罪を犯と云とも、往生の障と成べからざるかと。上人の請文に云、たとひ決定往生の信心を起とも、其後、又稱念する事なく、ならびに

小罪なりとも、これを犯して後懺悔せずば、敢て往生を遂がたく候歟。何況、四重五逆等の重罪を犯候はんにおいては、往生するに及ばず、還て悪趣をのがれ難く候。近來諸宗の衆徒、都鄙の道俗喧嘩たえず候旨、此儀につき候歟。又一の御疑云、縦ひ深信をおこし、專稱を至すとも、重罪を犯して後、更に懺悔念佛せずば、順次の往生遂がたく候歟。上人請文に云、此義神妙に候。乃至一念無有疑心の釋は、上盡一形下至十聲等にて、決定往生すべしと信すべき文也。雖然一念の後又稱念せず。ならばに犯罪せば、なを決定往生と信すべきにあらず。如此信候は、一重深心に似たるといへども、還て邪見と成候歟。近來此邪見に住する輩多候也と。又一の御疑云、一生不退の念佛は、不慮に重罪を犯じて後、いまだ懺悔念佛せずして、命終せんものは、前の念佛の功によりて往生すべきか。將又犯罪の咎によりて往生すべからざる歟と。上人の請文云不慮の犯罪。その過頗輕と云とも、往生においては猶

不定に候。其故は已作の罪、懺悔を不用して善業を障すといふ事なく候故なりと。右の御書に、善惠上人をめさるゝよしをのせられる間、各々不審を答申されて後、請文の奥に、被召弟子の僧、善惠房は今明日の間に進べく候。愚意の所存、聊も違せざる者に候とのせられける上は、善惠上人の義更に本師上人の義に違すべからず。されば津戸入道は、上人御往生の後は、不審の事をば善惠上人に尋申けるに、彼返狀、全く上人勸化の詞に違せず。所謂文曆元年の比、關東の念佛者の中に、善惠上人の義とて、無智の者は念佛申とも不可往生、正念に住して臨終みだれすとも往生とは云べからず。又學生臨終の時、狂亂顛倒して終とも、決定往生といふべしと申ける間、善惠上人に尋申ける津戸入道の狀云、念佛往生の條の事、彌陀の本願に任也善導和尚の御釋、故上人の御坊の御勸によりて、上百年にいたり、下一日七十聲一聲に至まで、念佛往生は決定の由を承て、往生をねがひ候處に、當時の關東

の學生のおほせ候とて、無智にては勤めたりとも、臨終閑にておほりたり共、往生したりとは不可思、又學文したらんものは、たとひ臨終の時、いかなる狂亂をし、くるひ顛倒したりとも、決定往生也と候なる此事御房中に、いか様に思召たると云事、慥の便宜のとき可被仰候。かやうに申をば、尊願が合點なき事を申とぞ、思召ぬ事にて候へども、學問せぬ人の内々歎申候間申候也と云々。同年九月三日、善惠上人返狀云、阿性房のもとへの便につけて、御不審候ける様承候こそ存の外に候へ。其後、申披べきよし存候へ共、慥の便を不得候間、思ながら過候程に、御所勞とて阿性房下向せられ候便を悦で申候。學問せざるひら信じの念佛は、往生すべからざるよし、此邊に申と聞え候らん。極めたるひが事にて候也。本願の理をよく思入て、平に信じて學問せざるも、又文に付て學するも、落つく所は只同く南無阿彌陀佛にて往生すべきにてこそ候へたゞし平信じとて、本願のありさまをもしらず、善惡

の因果をも不辨、たゞ南無阿彌陀佛と申ばかりにて、往生すと心えたる輩、當世にたゞこれは一往は信するに似たりといへ共、悉く尋ればさして思入たる處なしふかく信する義候はざる也。是をばひら信じと申にも不及候也。加様の輩に向ては、本願のむなしからず、凡夫を攝するいはれ、一分にてもかまへて心えよと申きかせ候也。是が聞へ候やらん。正しく本願のむなしからざるを信たる上に、機に隨て或は平に願力を信じて、我心に立ぬと思ひて、念佛する人も候。或は本願を信する上に、彌理をあきらめん爲に、學問して思入人も候。意樂おなじからずといへども、往生は全く異なるはず候を、學問する人は學せざる人をそしり、學せざる人は學問する人をそしる事、相互に極たるひが事也。たゞ所詮は法藏ぼさつ、乃至十念のちかひにこたへて、衆生稱名稱念せば必ず生るべき理の極りて、已に阿彌陀佛に成て、善惡の凡夫をもらさず攝し給へる故に、釋迦も是をとき、諸佛の證誠もむなしからざる

事を憑て、御念佛候はゞ更に御往生疑なく候。此旨こそ、ふかく存する事にて候へば、人にも申聞かせ、身にも存候へ。見參にて申まほしく候へども、今は互にかなはぬ事にて候へば、あら／＼申候なり。阿性房はかやうの事も是にて聞なれ思入られたる事にて候へばたづねきかせ給べく候云々

又同年十月十二日に重て津戸人道に、遣はされたる善恵上人の状云、當時關東の學者の中に、或は無智の人は往生せず、臨終正念にして命終すとも往生とは不可定と云。或は學者たとひ臨終狂亂す共、猶これ往生也と云事、返々ひが事にて候也。若無智の人往生せずといはゞ彌陀の本願已に機を嫌になる。其理不可然。他力本願を信せば、有智無智みな往生すべし、信心を發して後は、學不學は人の心に隨ふべき也。然を其智あさくして、學を好む輩、人をそしり、おのれをほめんが爲に、如此の説をいたすか。また臨終正念なりとも往生を不可得と云事、本願を信する人、正念に住せん

上は何ぞ往生せずと云べき。本願を信ぜざるの輩の臨終正念は、實に往生と定がたし。不信の人の臨終をもて、信者をみだる條、無其謂候。又學生は臨終狂亂すとも、往生と定べしと云事、經文の中に其文惣じて見及候はず。又道理不可然。凡極樂におきては専本願を信するによる。又學生によらず、又無智によらざる也信心若發ば、有智無智も臨終は必ず正念に住すべし。何ぞ學生に至りて正念を捨てや。若學生なりとも、臨終狂亂せんは、是本より信心なき故也。但下品下生の、此人苦逼念佛等の文に異義を成する輩候歟。此文の心は只死苦の失念也。全狂亂顛倒の相にあらず。されば釋には臨終正念金花來應也といへり。たとひ病死の苦痛ありとも、念佛の行おこたらずば必ず正念と云へる義也。凡苦痛與顛倒。其體大に異成故に候。如此きの妄説不可有御信用、只一向本願を憑て御念佛不懈候事可爲本意候也云々。本師上人の義理は請文の旨にあらはれ、善恵上人の存意又いまの消息等に見えたり。善

惠上人已に自筆をそめ、判形をすえらる。末代の龜鑑也。仰て是を信すべし。然を善惠上人の門流と號する人々の中に、義理若本師上人の請文、善惠上人の消息に違する事あらば、全善惠上人の義にあらず。末流の私の今案なるべし。あなかしこ。末の濁れるをもて、源のすめるをけがす事なかれ

### 法然上人傳記卷第三下

#### 上人三昧發得事

上人行業年積、念佛功闕て建久九年正月より以來、極樂の莊嚴、化佛菩薩を拜給事常にあり。彼三昧發得の次第は、自筆にしるし置給へるを、存生の間に秘藏して人にしられず。没後にやうやく流布する處也。高野の僧都明遍通世後號空阿みだ佛披見して隨喜の涙をながされけり。彼自筆の記云、生年六十六、建久九年戊午正月朔日恒例の正月七日の念佛これを初めおこなふに、一日明相すこし現じて自然に甚明也。二日に水想觀自然に成

就す。都て七箇日の中に、地想觀の中に瑠璃の地いささかあらはる。二月四日の朝、瑠璃の地分明に現す。六日の後夜に瑠璃の宮殿現す。七日の朝重て又現す。正月一日より二月七日に至るまで三十三ヶ日の間、水想、寶地、寶樹、寶池、宮殿等の五觀現す。是則毎日七萬遍の念佛不退にこれを勤によりて見處也。二月廿五日より、あかき所にして目をひらけば、眼根より赤き袋を出生して瑠璃の壺をみる。是よりさきには、目を閉ればこれを見、目を開けばこれを失しに、其後、右の目より光明をはなつ、其光の端あかし。又眼に瑠璃あり、其形瑠璃の壺のごとし、瑠璃の壺にはあかき花あり、寶瓶のごとし。又日没の後に於て、四方を見れば方毎に青くあかき寶樹あり。其たかさ定なし。高下心にしたがひて、或は四五丈、或は二三丈也。九月廿二日朝に地想分明に現す。周圍七八段ばかり也。同廿三日後夜、及朝旦に又分明に現す。正治元年乙未八月時正七日の別時の間、淨土の依正しきりに現す。又左

右の眼より光をはなつ。心蓮房粗是を見て源空にかたる。源空嘆じておどろかず。同二年<sup>庚申</sup>二月、地想等の五觀、行住坐臥に心に隨て任運に現す。元久元年<sup>辛酉</sup>正月廿五日、西の持佛堂の勢至菩薩の御後に、丈六ばかりの御面三度現す。このぼさつは念佛をもて所證の法門とし給が故に、今念佛者の爲に其相を示現し給へる事、これ違疑すべからず。同廿八日、座所の下より初めて四方一段ばかり、青瑠璃の地となる。二月八日の後夜に、鳥の音、琴の音、笛の音をきく。其後は日にそひて、自在に種々の音聲をきく。同二年<sup>壬戌</sup>八月時正七日の別時の間、初日に地想觀現す。第二日の後夜晨朝に又分明に現す。第三日より第七日に至まで、地想寶樹、寶池、寶樓等、行住坐臥心にまかせて任運にこれを見る。十二月二十八日午時、持佛堂にして高昌の少將に對面の時、例のごとく念佛して阿彌陀佛の後の障子を見れば透徹て相好現す。其勢丈六の佛面のごとし。元久三年<sup>丙寅</sup>正月四日、念佛の間に三尊の相を現す

同五日、又三尊大身をあらはし給と注し給へり。實にこれ念佛三昧現前の相分明なるもの也。上人常に心に付て誦し給ける文に云、上來雖說定散兩門之益、望佛本願、意在衆生一向專稱彌陀佛名、かくのごとく心しづかに稱名念佛し給ふ時、忽に三昧發得して極樂の莊嚴及佛菩薩の眞身を拜し給ふ所也。又三昧發得の御歌には

あみだ佛と申ばかりをつとめてに

淨土の莊嚴見るぞうれしき

靈山寺念佛事

靈山寺にて、上人三七日不斷念佛の間、燈火なくして光明あり。第五の夜、各々行道し給に勢至ぼさつ同く列に立給へる事を信空上人夢のごとくに拜し奉りて、上人に此由を申に、さる事侍らんと答給ふ。餘人はさうらに拜する事なし。或時上人念佛してまじくけるに勢至菩薩來現し給へり。誠に淨土のちかひ、たのもしき哉。令離三途の説、これひとへに念佛三昧成就<sup>キチトク</sup>獲得

の證也。仍此聖容は、一丈六尺に示給けるを、白髮一鋪にうつしとどめ奉りて永き世の本尊にしたてまつるこれ眼前の降臨也。更に夢幻にあらず。若念佛者、當知此人、是人中芬陀利花、觀世音菩薩、大勢至菩薩、爲其勝友、當坐道場、生諸佛家の文たがふ事なし

阿彌陀佛三尊出現事

上人つねの居所をあからさまに立出で、歸り給たりければ、阿彌陀の三尊、繪像にも木像にも非ずして垣を離れて、板しきにもつかず、天井にもつかず現給ふ。無量壽佛化身無數、與觀世音大勢至、常來至此、行人之所の文も、いよゝゝその馮みふかきもの也

聖光上人事

鎮西の聖光房辨阿本名辨長山門の住侶也。證眞法印の門弟として天台宗の奥義を究しかども、三十三のとし、舍弟三明房阿闍梨の頓死せしをまのあたり見給て、眼前の無常におどろき、身の後の資糧を求て、忽に所學の法門をさしおき、極樂の往生を願ふ。建久八年五月に

初て上人へまいりて淨土の法門を學す。翌年建久九年に選擇を授くる。其詞には、われ月輪殿の請によりて撰所也。汝は法器の仁也。此書をうつして末代に廣むべしと。上人の室に入て後まづ豫州へ遣はれて、念佛を弘通す。鎮西に歸りて一寺を建立して、善導寺と號す。爰にある淨土宗の學者、法然上人より相承すと稱して、鏡像圓融の譬をあげ、金剛寶戒の名をもて、淨土宗の甚深の秘義とするよしを申間、元久二年三月に法然上人に尋申さるゝ聖光上人の狀云、淨土宗の小僧辨長、上人の御房法座前へ、誠惶誠恐謹言

二箇條疑問事

一 鏡像圓融疑問事

二 金剛寶戒疑問事

一、鏡像圓融疑問者、所謂或淨土宗學者、向天台宗學者相語云、天台宗與淨土宗、其義是一致也。所以天台宗以鏡像之譬顯圓融之法、淨土宗亦復如是。以此鏡像圓融之義爲淨土宗最底。是則淨土宗甚深義也。暫善

導和尚爲誘引初心之人。制止難行動。進專修。理實以鏡像圓融之譬得其心。爲後心之人天台淨土是則一同也云々。天台諸宗之人者、以鏡像圓融之譬用淨土宗最底者、以淨土宗不可立別宗、只以天台摩訶止觀等可立淨土宗。何故以天台宗之外可立淨土宗哉。又小僧辨長跪上人御房法座前。常雖蒙淨土教訓之條、於此義者未會聞也。但依機未熟不蒙此御教訓歟。何如況小僧、善導所造和國到來西方化導八卷文證之中、於鏡像圓融之文。更以未見之處云云。又自本依不存此御言不示此義給哉。又小僧辨長自幼稚之昔。稟天台之流。於鏡像圓融之法門者、或時口誦文證。或時心推義理。但於長大之今列淨土之座。承上人御房御義之時、異國漢朝之先賢先哲、於淨土法門各出義時、其義蘭菊也。但於其中善導禪師之御義、往生之甘露也。所謂分別專雜二行選擇正助二行、兼雜取專兼助志正。吾淨土宗尤爲元意。如此御教訓常蒙之於鏡像之義爲淨土宗旨之事。未蒙其仰。若爾者

且爲專修堅固且爲謗家對治蒙其分決之狀如件

二、金剛寶戒疑問者、或淨土宗學者云、付淨土宗有一戒品所謂金剛寶戒是也。於諸宗戒品是異也。各々口傳所傳之也。是吉水上人御房之傳也云云。小僧辨長救云、吉水上人御房御義全以不然。淨土宗者、只彌陀本願專修正行也。以此一行爲往生正路全以不兼餘行。何以於此宗令付金剛寶戒哉云云。以前二ヶ條。爲決斷弟子之疑問爲對治諸宗謗難、又爲停止一家狼藉又爲印持末代專修上人御房御在世之時、錄子細言上者也。早住哀愍慈悲之御心。決斷左右進退之是非、賜御證判停止彼狼藉之僻見欲立此專修之一行。子細言上如件

元久三月 日

沙門辨長 誠惶誠恐謹言

就之上人以自筆被勘付云、已上二ヶ條、以外僻事也源空全以如此事不申候。以釋迦彌陀爲證。更如然僻事所不申候也云云。上人の常の仰には、山の住侶なを契あるべし。況や辨阿甚深の同侶、後世菩提まで契

たりし人のありしが、源空が弟子となりて、八ヶ年受學せる也、と稱美せられる上に、淨土の法門において、所存をのこさず候條は明にいられたり。何況すでに誓文を被載畢。往生淨土の業因におきては、專修の行なるべしと云事仰で信すべし。聖光上人は、上人教訓の正義を傳へ、勸化更にあやまりなし。化導としふりて後、種々の奇瑞をあらはし、嘉禎四年閏二月二十九日未尅。年來の所願によりて、一字三禮の自筆書寫の阿彌陀經を持たながら端坐合掌し、稱名相續して最後光明遍照の一句をとなへ。眠がごとく往生し給き。抑勢觀上人は少内府の六男備中守師盛の息也。幼稚の昔より法然上人に内府奉りて、本尊聖教以下悉皆附屬にあづかり給ひし上は所立の法門において其疑なし。然を聖光房所立の法門と、源智相承の義立と全くたがはざりける歟。嘉禎三年九月廿一日に、聖光上人へ送られる狀に云、相互不見參候、年月多く積候。于今存命、今一度見參、今生に難有覺候、哀候者歟。抑

先師之念佛之義、末流濁亂、義道不似昔不可說に候。御邊一人正義傳持之由承及候。返々本懷候。喜悅無極思給候。必遂往生本望。奉待化導值遇緣候者也。以便宜捧愚狀、御報何之日拜見哉、他事短筆に難盡候、恐々謹言

九月二十一日

源智云云

其後、聖光上人附弟子然阿上人と、勢觀上人附法の弟子連寂上人と、東山赤築地にして四十八日の談義をはじめ、然阿上人を讀口として、兩流を校合せられしに一として違する所なき間、日來勢觀上人の申されし事符合せるによりて、予が門弟においては筑紫義に同すべし、更に別流を不可立、連寂上人約諾をなされし後は、勢觀上人の門流を不立者也。當世筑紫義と號するは、彼聖光上人の流也

天王寺西門事

高野の明遍僧都、上人所造の選擇集を見てよき文にて侍れ共、偏執なる邊ありと思ひて、寢たる夜の夢に天

王寺の西門に病者數もしらすなやみふせり。一人の聖ありて、鉢にかゆを入れて匙すぢをもちて病人の口ごとにいる。誰人ぞと問ば、或人答て法然上人也と云と見てさめぬ。僧都思はく、我選擇集を偏執の文とおもひつるを夢に示し給なるべし。此上人は機をしり時をしりたる聖にてまじくけり。病人の様は、始には柑子、橋梨子、柿ていの物を食すれども、後には其もとどまりぬ。うきくをもちて、のどをうるほすばかりに、命をひかへて侍也。この書に一向に念佛を勸られたるにたがはず。五濁濫漫の世には、佛の利益も次第に減す此比はあまりに代くだりて我等は重病の者のごとし。三論法相の柑子、橋もくはれず、眞言止觀の梨子、柿もくはれねば、念佛三昧のうきくにて、生死を出べき也とて、上人へ參て懺悔し、專修念佛に入給ふにけり。夢にとりわきて、天王寺と見られけるも、由緒なきにあらず。此寺は極樂補處の觀音大士、聖徳太子と生て、佛法を此國に弘め給へし最初の伽藍也。彼鳥居

の類にも釋迦如來、轉法輪所、當極樂土、東門中心とか、れけり。和國に生をうけむ人は此念佛門に歸すべきなり

#### 鎮西修行者以下問答事

鎮西より來れる修行者、上人に問奉りて曰、稱名の時心を佛の相好にかくる事は、いかゞ候べきと申けるを上人いまだ言説し給はざる先に、傍なる弟子、可然と申ければ、上人曰、源空は不然、若我成佛、十方衆生稱我名號、下至十聲、若不生者、不取正覺、彼佛今現在世成佛、當知本誓、重願不虛、衆生稱念、必得往生と思斗也。我等分齊をもて佛の相好を觀すとも、更に如説の觀にあらじ。ふかく本願を憑て只口に名號を唱ふばかり、縱令ならざる行也とのたまへり。内外博覽の上人なを如是、況淺智愚鈍の族をや。ゆめくさかしき心をもたずして、只稱名を可勤也。又或人問奉て云、人多く持齋を勤侍り。何様に存べく候やらんと。上人曰く、尼法師の食の作法は尤可然。但當世は機已

におとろへ、食又減ぜり。此分齋にて一食ならば心偏に食を思ひて念佛の心靜なるべからず。されば菩提心經には、食不<sub>レ</sub>妨<sub>レ</sub>菩提。心能<sub>レ</sub>妨<sub>レ</sub>菩提といへり。持齋全く往生の正業にあらず。只自身の分齋に隨て念佛に倦べからず。懈怠なきほどをあひはからひて、念佛を相續すべきなり。又或人問奉りて云、上人の申させ給御念佛は、念々ごとに佛の御意にかなひなど申けるを、いかなればと、上人返し問せ給ひければ、智者にておはしませば、名號の功德をも悉くしろしめし、本願の様をも明に御心得ある故にと申ける時。汝本願を信ずる事まだしかりけり、彌陀如來の本願の名號は、木こり草かり、なつみ水くむ類ごときの、内外共にかけて一文不通なるが、唱れば必生ると信じて眞實にねがひ常に念佛申を最上の機とす。若知恵をもつて生死を可離ば、源空いかでか彼聖道門を捨て、此淨土門に趣べきや。當知聖道門の修行は、智恵を究めて離生死淨土門の修行は、愚痴に歸りて生極樂。又或は天台宗の

人間奉て云、佛教多門にて生死を出る道一にあらず。其中聖道門は法花に須臾聞之即得究竟ともいひ、取證如反掌とも云へる一類頓悟の類は暫くこれを指置、教のおきてに付て、次位の階級を定め、修行の方軌を明らかにしたるには、十信萬劫の修行を送りて後、無生忍の位に叶と談ぜり。然を淨土門に十惡五逆つくる罪惡の凡夫なれども、知識の教をうけて、纔に一念十念の口稱念佛によりて忽に報土得生益を得。刹那の間にたやすく無生忍の位に叶といへる事、大に不審にて候。抑六字の名號にていかなる功力の候へば、萬行にこえてかゝる不思議の奇特をば備候やらんと。上人答給はく彌陀因位の時、一切衆生に代りて、兆載永劫の間、六度萬行、諸波羅蜜の一切の行を修して、其功德を悉く六字の名號に納られたる間、萬行萬善諸波羅蜜、三世十方の諸佛の功德の、六字の名號にもれたるはなし。故に是を極善最上の法とも名く。されば恵心僧都の、因行果徳、自利利他、内證外用、依報正報、恆沙塵數

無邊法門、十方三世、諸佛功德、皆悉攝在、六字之中是故稱名、功德無盡と判じ給へるは此心也。彌陀の本願に、此名號を唱へて極樂に生れんと願はん衆生をば聖衆とともに來て迎接すべし。此願若成就すまじくば衆生とともに地獄に墮とも佛にはならじと。四十八のちかひ事を立給ひしに、此願己に成就する故に、成佛し給て十劫以來也。故に極惡最下の罪人に、此名號を唱ふれば、萬行萬善の功德を得、因位の本願にこたえて迎接し給はん。故に本願不思議の力にて、須臾の間に報土に生て、刹那の程に無生の悟をひらかん事、なにの疑かあるべきや。一念に無上の功德を得る名號也更に一念十念の功少しとは不可思とぞ仰られける。惠心の正觀の記の中に云、當知阿彌陀名號三字には、具に備二千三百九十五卷大乘經、六百八十卷小乘經、五十五卷大乘律、四百四十一卷小乘律、五百五十卷大乘論、六百九十五卷小乘論、五百九十三卷賢聖集法門亦具金剛界一千四百五尊、胎藏界五百三尊、蘇悉地七十

三尊、故唱阿彌陀三字即唱五千三百十二卷一切聖教、阿彌陀經に執持名號、爲大善根其意在斯、長舌證誠。誰か不生信矣。又名號に萬法をおさむる事分明也。たれか此義を疑はんや。又或人問奉て云、毎日の所作に六萬十萬等の數遍を當て、しかも不法なると、二萬三萬を當て如法なると、いづれを正とすべく侍ん。上人の曰、凡夫の習ひ、二萬三萬の數遍をあつと云とも更に如法の義にあるべからず。只數遍の多からんにはしかじ。所詮心をして相續せしめ、只常念の爲也。數を定むるを要とするにあらず。數を定めざれば、懈怠の因縁なれば、數遍をすゝむる也と仰られけり。高野僧都明通は數遍は不實のきはまりとて、不受せられけるが、或時修行者一人來て、毎日の念佛は、いくらほどを所作と定め侍らんと尋申けるに、御房はいくら程申さるゝぞと返し問れければ、百萬遍を申由を答ける時例の不實の者よと思はれる間、返答に及ばずして内へ入られにけり。修行者も歸りけり。僧都ちとまどろ

み給ふに、毎日百萬遍の行者をいひ妨る事、然るべからずとて、以外に氣色あしくして我は是善導也と仰らるゝとみて驚きたれば、遍身に汗をながし、胸さわぎて身心おき所なく覺ければ、後、修行者を呼て懺悔せむ爲に手わけして山中を尋れども、見えず成にければ、時尅をも隔ず、たとひ下向すともいく程のぶべからずとて、使ども走立て追けれども、遂に見えざりければ、僧都申されけるは、日來はやくりの數遍を受する事、佛意にそむく間、告示されける也。實の修行者にはあらざりけりと、其後は百萬遍の數遍をせられけるが、手に念珠をまはすはおそしとて、木をもちて念珠をふりまわして數をとられければ、明遍のふりふり百萬遍とぞ人申ける。所詮上人も念佛相續の爲に數遍をすゝむる由、仰られけるうへは、仰で信をとるべし。及ばざる意樂をおこして數遍を難する事なかれ

## 法然上人傳記卷第四上

### 羅城門礎事

正治二年四月十二日、農夫羅城門の前の田耕作せし時礎の石を掘出す事有けり。此石に文字あり、農夫あやしみて人にかたる。月輪殿是をきこしめされて、成信孝範、爲長、宗業の四人の儒者を遣はして見せられけるに、三人一向に是をよます。孝範一人は年號計をよめり。各々歸參して此文更文道の事にあらず。佛法の事かと申けるに、春日中將を御使として、法然上人へ仰られければ、上人彼所へ向て是を見給ひて後、落涙甚し。しばらく有て、腰より檜木の骨の紙扇をとり出して、是をうつして持參せらる。彼文云、前代所傳皆是聖道、上人教法、未弘我朝者此宗旨也。大同二年中春十九日執筆、嵯峨帝國母云々。文の心を御尋ありけるに、上人のたまはく、大同年中には、淨土教門未本朝にわたらざりしかば、聖道門に對して淨土門を、未吾

朝にひろまらざるは此宗旨也とは云給へり。此國母は韋提希夫人の再誕也。不審候はずとぞ仰られける。此石は長六尺、廣四尺、文字八寸、古文の字也、宇治の寶藏にぞ納められける、まことに不思議にこそ

#### 淨土宗興行事

上人の談義の砌にて語て曰、我今淨土宗を立る意趣は凡夫の往生を示さんが爲也。若天台の教相によれば、凡夫往生をゆるすに似たりといへども、淨土を判する事至て淺薄也。若法相の教相によれば、淨土を判する事甚深也といへども、全く凡夫往生をゆるさず。諸宗門の所談異也といへども、惣て凡夫報土に生ずと云事をゆるさず。故に善導の釋義に依て淨土宗を興する時即凡夫報土に生るといふこと顯るゝ也。爰に人多く誹謗して云、必宗義を不立とも念佛往生を勸むべし、今宗を立こと、只是勝他の爲也と。若別の宗義をたてずば、何凡夫報土に生るゝ義をあらはさんや。若人來て念佛往生は、は何の教、何の宗、何の師の心ぞと問は

ば、天台にもあらず、法相にもあらず、三論にも非ず花嚴にもあらず、何の宗、何の教、何の師の意とか答へんや。是故に道綽、善導の意に依て、淨土宗を立、これ全く勝他の爲にあらずといふべしとぞ

#### 信寂房の事

播磨信寂房、上人へ参たりけるに、上人曰けるやう、入道こゝに宣旨の二侍るを、取ちがへて筑紫の宣旨をば坂東へ下し、坂東の宣旨をば鎮西へくだしたらんには、人用べきかと。信寂房且く案じて宣旨にて侍れども、たがへたらんをばいかゞ用べきと申ければ、御房は道理を知る人かな、やがてさぞ、帝王の宣旨とは釋迦の遺教也。宣旨二ありと云は正像末の三時の遺教也聖道門の修行は正像の時の教なるが故に、上根上智の輩にあらざれば用べからず、是を西國中國の宣旨とす淨土門の修行は末法濁亂の時教也。故に下根罪惡の輩を器とする也、是を奥州の宣旨とす。然則三時相應の宣旨、是を取たがへずば、教として何の行か成ぜざら

んや。大原にして聖道淨土の論談ありしに、法門は牛角の論なりしかども機根くらべには源空は勝たりき。聖道門は深といへども、時過ぬれば今の機に叶ず。淨土門は淺に似たりといへども、當根に叶易しといひし時、末法萬年、餘教悉滅、彌陀一教、利物偏増の道理にをれて人みな承諾し、念佛門に歸せり。然を今諸方の道俗を見聞するに、多く有名無實の行を面に立て、互に嫉妬の瓦礫荆棘みちふさがりて、眞實の白道さへたり。是豈悲の切なるにあらずや

## 教阿彌陀佛事

河内國に天野四郎とて大強盜の張本にて、人を殺し財をかすむるを業として世をわたる物ありける。歳漸に闌て後、上人の念佛弘通の趣を承て心を發し、出家して教阿みだ佛とて、左右なき念佛者に成て、常には上人へ參て念佛の法門を承けるが、或時上人へ參てけるに、人一人もなかりければ、今夜は御とき仕らんとて留ぬ。靜まりて後、夜半ばかりと覺る程に、上人やは

らおき居て如法しのびやかに息の下に念佛し給かとおぼしき事有けり。能々忍び給ふ氣色を知てつゝむとすれどかなはずして、教阿彌陀佛、しはぶきしたりければ、此僧にしらぬとおぼしたる氣色にて、上人打臥たまひて寢入たるよしにて其夜もあけぬ。教阿みだ佛は、此行法の様を聞ておぼつかなさ限なければ、上人は尋ね申さず。さて遙に程經て後又參れば、上人は持佛堂に御座して聲を聞給ひて教阿み陀佛か、何事ぞこれへと仰られければ、持佛堂の縁に參りて教阿み陀佛は淺間しく無縁のものにて侍る間、在京もなど叶がたく侍れば、相模國河村と申所に、相知たる者の侍る憑て罷侍べし。今は歳も罷よりて侍れば、又見參に入べしとも覺え侍らず。本より無智の者にて侍れば甚深の法門を承て候とも、其甲斐あるべし共覺候はず。只詮を取て決定往生仕べき様の御一言を蒙らんと申ければ。上人の曰、先念佛には甚深の義といふことなし。念佛申者はかならず往生すと知計也。いかなる智者學

生といふとも、宗にあらざらん甚深の義をば、争造出していふべきや。甚深の義あらんと云事、ゆめく疑思ふべからず。但念佛は易き行なれば、申人は多けれども、往生する者少きは、決定往生の故實をしらぬ故也。去月に又人もなくして御房と源空と只二人有しに夜半計に忍やかに起居て念佛せしをば、御房はきかれしなと仰られければ、寢耳にさやらんと承候きと申ければ、其こそ聽て決定往生の念佛よ。虚假とてかざる心にて申念佛は往生せぬ也。決定往生せんと思ふにはかざる心なくして誠の心にて申べし。いふにかひなきをさなきもの、もしは畜生などに向ては、かざる心はなけれども、朋同行はいふに及ばんか、其外常になれる妻子眷屬なればとも、東西辨る程の者に成ぬれば、其が爲にかならずかざる心は起る也。人の中にすまんには其心なき凡夫はあるべからず。すべて親も疎も賤も賤も、人に過たる往生の怨はなし。其が爲にかざる心を發して、順次の往生を遂ざれば也。さりとて獨居

も叶すいかゞして人目をかざる心なくして、誠の心にて念佛を申べきと云に、常に人に交てしづまる心もなく、かざる心もあらん者は、夜さしふけて見る人もなく、聞人もなからん時、忍やかに起居て百遍にても千遍にても多少心にまかせて申さん念佛のみぞ、かざる心もなければ、佛意に相應して決定往生は遂べき。此心を得なば、必しも夜にも不限、朝にても晝にても暮にても、人の聞ひまなからん所にて常には如此申べし所詮決定往生を欣。眞の念佛申さんずるかざらぬ心ねは、たとへば盗人有て、人の財を思かけてぬすまんと思ふ心は底に深けれども、面はさりげなき様にもてなし、構てあやしげなる色を、人に見えじと思はんがごとし。其盗心は人全くしらぬば、すこしもかざらぬ心也。決定往生せんずる心も又如此。人多くあつまり居たる中にて、念佛申色を人に見せずして、心に忘るまじき也。其時の念佛は佛ならでは、誰か是を知べき佛しらせ給はば、往生何ぞ疑はんと仰られければ、教

阿みだ佛申言、決定往生の法門こそ心得候ぬれ。既に悟りきはめ侍り。今聊の不審も侍らす。此仰を承さるましかば、此度の往生あやぶく候なまし。但此仰のごとくにては、人の前にて念珠をくり、口をはたらかす事は有まじくや候らんと。上人曰、其又僻事也。念佛者の本意は常念を證とす。されば念々相續せよとこそ勸られたれ。たとへば世間の人を見るに、同人なれども豪臆あひわかれて、臆病の人に成ぬれば、身の爲めくるしかるまじき聊のいかりをも、おちをそれてにげかへる。豪の者に成ぬれば、命を失ふべきこはきてきの、しかも逃かくれなば、助るべきなれ共、少も恐れず、一しざりもせざるがごとし。是が様に眞偽の二類あり。地體いつはり性にしてかざる心ある者は、身の爲に要なき聊の事をも、必ずいつはりかさる也。もとより眞の心ありて虚言せぬ者は、聊の矯飾して、身の爲に大きに其益有べき事なれども、身の利益をばかへり見ず。底に眞ありて少もかさる心なし。本性にかけ

て生れたる所也。その實の心の者の往生せんと思ひて念佛に歸したらんには、いか成所、いか成人の前にて申とも、すこしもかさる心あるまじければ、是眞實の念佛にして、決定往生すべき也。何ぞ是をいましめん又地體は偽性にして、世間さまに付ては、聊不實の事も有しかども、知識にあひて發心して往生せんとおもふ心深く成ぬれば、念々相續もせんと思ひて、いかなる所、いか成人の前にても、無想にひた申に申さん者は又眞實の念佛なれば、決定往生すべき也。全く制限にあらず。今云所は三心の中に一心も闕ぬれば、往生せずと釋し給へるに、三心の中の眞實心、人毎に發し難ければ、其眞實心を發べき様を云ばかり也。さればとて只の時念佛な申そとは、いかと勸むべきと。また教阿彌陀佛申て云、さきに仰の侍つる程に、夜念佛申さんには必ず起居侍べきか。又念珠袈裟をとり侍べきかと。上人曰、念佛の行は行住坐臥をきはぬ事なれば、ふして申さんとも居て申さんとも心にまかせ時

によるべし。念珠をとり、けさをかくる事も折によりて心に隨べし。只所詮威儀はいかにもあれ。此度構て往生せんと思ひて、實しく念佛申さんのみぞ大切なると仰られければ、教阿みだ佛、歡喜踊躍して、合掌禮拜して罷出にけり。翌日に法蓮房信空のもとへ行て、教阿彌陀佛こそ坂東の方に修行し侍れ。昨日上人授させ給へる決定往生の義とて申出して、今度の往生は少も疑なき由悅申て、その翌日東國へ下向しぬ。其後、上人御前にて、信空上人此事を申出して、さる事の侍けるやらんと申されければ、其事也。さる舊盜人と聞置たりし間、對機說法して侍りき。一定心得たりけるにこそ見えしかとぞ仰せられける。教阿彌陀佛は、坂東にくだりて、幾程もなく所勞つきて、最後の時、同行に語言、わが往生は決定也。是則上人の仰のすゑを信じて往生の故實を存知したる故也。往生の様必上人へ申せと遺言して正念に住し、念佛數十遍唱ておはりにけり。遺言にまかせてやがて、同行京へ上て往生

の様をくわしく上人に申ければ、よく心得たりと見えしが、相違せざりけりとして仰られけるは、今生には大惡黨の張本として、人を殺し財を奪を業として、人に過たる罪人なれば、先業の修因、又惡のきはまりなる事暗にしられたりける罪人なれ共、本願の念佛に歸しぬれば往生に障なし。況其餘の人をや。またく罪の輕重をいふべからず。只念佛を申べきなりとぞ

#### 女人往生願事

或時宮仕人かとおぼしくて、尋常なる尼女房達あまた友なひて、上人へまいりて罪ふかき我等ごときの五障の女人も念佛を申さば、極樂に往生すべきよし仰の候なるは、誠にて侍るやらん。明に承度よし申ければ、仰られけるは彌陀の大願をたのますより外は、女人更に往生の望を遂べからず。大願の忝事を能々きかるべし。女人は障重く罪深が故に、一切の所にはみな嫌たり。是則内に五障あり。外に三從あるが故也。五障といへるは、一には梵天王とならず、二には帝釋となら

す、三には魔王とならず、四には轉輪王とならず、五には佛身とならずといへり。既に大梵高臺の間に嫌はれて、梵衆、梵輔の雲をのぞむ事なく、帝釋柔軟の床にもくだされて、三十三天の花をもてあそぶ事なし。六天魔王位、四種輪王の跡、望なくたえて、影をさゝざれば、天上天下の賤き果報、無常生滅の拙き身にだにも成す。況諸佛の淨土おもひよるべからず。日本國にだにも、貴くやことなき靈地靈驗の砌には、皆々悉くきはれたり。所謂比叡山は傳教大師の建立、桓武天王の御願なり、大師自結界して、谷をさかひ峰を限て、女人の形を入られざれば、一乗の峰たかく顯て、五障の雲たなびく事なく、藥師醫王の靈像は、耳に聞きて目には見ず。大師結界の靈地は、遠くみて近くのみぞます。高野山は弘法大師結界の峯、眞言上乘繁昌の地也。三密の月輪遍く照といへども、女人非器のやみをば不照、五瓶の智水ひとしく流と云へども女人垢穢のあかをば灌がず。聖武天王の御願、十六丈金銅

の舍那の前には、遙にこれを拜見すといへ共、なを扉の内には入られず。天智天王の建立、五丈石像の彌勒のまへには仰て是を禮拜すれ共、なを壇の上には障りあり。金峰山の雲の上、醍醐の殿の底までも、女人更にかげをさゝす。悲哉、兩足ありといへども、登ざる峰あり、ふまさる佛の庭あり。恥哉、兩眼明かなりといへども、見ざる靈地有、拜せざる靈像あり。此穢土の瓦礫荆棘の山澤、泥木素像の佛にだにも、なを其障ある程の罪重き身なれば、諸經諸論の中にも嫌はれ、在々所々にも擯出せられて、三途八難にあらざるよりは趣くべき方もなく、六趣四生にあらざるよりは受べき形もなし。されば道宣は經を引て十方世界に女人ある所には必地獄ありと釋し給へり。如此三世諸佛にも捨はてられ、十方淨土にも門をさゝりたる罪惡の女人をば、只彌陀のみぞ助救はんといふ願を發給へる。誠に、憑しかるべき者なり。所謂四十八願の中の第十八の念佛往生の願に、十方衆生、至心信樂、欲生我國、

乃至十念、若不生者、不取正覺とちかひ給へば、一切善惡の男女皆是にもれたるはなければども、第三十五の願に別して女人往生の願を立給へり。是則女人は一切の事においてうたがひをなす間、十方衆生とちかひ給へども、罪ふかき女人はよも入じと疑て、念佛往生のやくにもれぬべきがゆへに、別して女人往生の願をば建給へる也。拙き穢土の境にだにも猶嫌はれて障重き女人なれども、本願をたのみて名號を唱へば、出過三界萬德究竟の報土に迎へとらんと願じたまへる廣大慈悲の忝なきは、申に詞をもつて述難き者也。善導和尚今の女人往生の願を釋し給へるには、彌陀の大願力に乗ずるが故に、女人佛の名號を稱すれば、命終の時、女身を轉じて男子と成事を得て、彌陀手を授け、菩薩身を扶て寶花のうへに座せしめ、佛にしたがひ奉て、往生して無生を悟とも釋し、又一切の女人、若彌陀の本願力によらずば、千劫萬劫恆沙劫を経て、速に女身を轉ずる事を得べからずとも釋し給へり。此度彌陀

の本願にすがりて極樂にまいらずしては、無量劫にも女人をば轉ずべからず。無始より以來女人の身を受たりき。今より後なを六道四生に輪廻せん間も、形をかへ質をあらたむといふことと有とも、なを女身をうけ、一切心にまかせざらんは悲かるべき事也。況女身を改ざるのみにも非ず、三途八難の底に沈て重苦をうけん事、後悔す共誰か是を救はん。今幸に彌陀の本願にあひ奉て、名號を唱斗の行によりて、最後臨終に男子の身となされまいらせて彌陀如來の御迎にあづかり、觀音、大勢至の金蓮に乗じ、無數化佛、無量の聖衆に圍繞せられ奉て須臾の間に無漏の報土に往生する時、三惑頓につき、二死永く除き、長夜こゝにあけ、覺月正に圓なり。四智圓明の春の花には三十二相の色あざやかにひらけ、三身即一の秋の空には八十種好の月清くすめる。位は妙覺高貴の位、四海灌頂の法王也。形は佛果圓滿の形、三點法性の聖容にして、無邊の快樂にほこらん事は、豈悦にあらずや。努々念佛に物うかる

べからず。惡道に墮て萬の苦をうけんよりは、やすき念佛を申て樂を得べき物なりとて、本願の貴く惡敷次第をかきくどきのたまひければ、其座に侍ける女房共皆泪をながして、念佛の門に入りけり。是を傳きかんな女人、寧念佛にいさみなからんや

## 作佛房往生の事

遠江國に作佛房といへる山臥侍りき。役行者の跡をおひ、山林斗藪の行を立て大峯を経歷すること敬ケ度、惣じて熊野參詣の歩をはこぶ事四十八度也。偏に後生の事を祈て會て現世の望なし。證誠殿に通夜して年來いのる處は只是後世菩提也。早出離の道を示し給へと祈請しけるに、當時京都に法然房と云ふ聖あり、行て出離の道を尋べしと示現を蒙て、即上落して上人に参りて、淨土の法門を學し、念佛往生の道を承定て後、本國に還て稱名の外他事なし。本より孤獨の身なれば同行もなし、知識もなし、病をうけざれば苦みなし。療治の煩なし、往生の期至ければ、道場に入て西に向

ひて自ら鐘をならし、高聲念佛數聲、端坐合掌して往生を遂ぎ。紫雲に驚き異香に付て諸人集來縁を結ぶ。希代の不思議、國中の口遊クテウビにてぞありける。抑熊野山證誠權現は本地阿彌陀如來也。神明と顯て無福の衆生に福をあたへんとちかひ給へるも。せめてもじひの餘に貪欲至盛にして偏に今生の榮耀にほだされながら、後生の苦患を忘れたる衆生の、人身を受たるしるしもなく、此たび本願にもれて尙惡道に歸るべき輩を救はんが爲の濟度の方便なれば、當山に参て後世菩提を祈る人は、流にさほさすがごとし。本願の正意に相叶故に一人としても順次に生死を出ざるはなし。されば當山に九品の鳥居を立られたるは、九品引接の御本意を顯さるゝ所也。然ば當山參詣の人は、内には本地の悲願をたのみ、外には垂跡の擁護を仰て、只偏に順次の往生の志を先とすべき也。凡は當山にも不限、神明の利生、和光の方便は、何も皆本地寂光の城より入重支門の里に出で、罪惡の凡夫に近づき、無漏の淨利に導ん

がため也。其中に天照大神は本朝諸神の父母也。生るをば生氣といひて五十日をいみ、死をば死氣といひて又五十日をいむ。死は生より来る。生は死の初なる故に、死生ともに同日敷を忌るゝは、流轉生死の有漏の里を厭すてゝ、不生不滅の無漏の都に尋入と也。本迹雖殊不思議一なれば、生死解脱の本意かはる事なし。されは漢家には佛法をひろめんが爲に、儒童、迦葉、定光三人の菩薩。孔子、老子、顔回と生て、先外典をもて人の心を和げ、後に佛法を流布せしかば、人皆是を信じき。我朝には和光明神、先跡を垂て人のあらし心を和けて、佛法を信する方便とし給へり。青き事は藍より出で、藍よりも青し。貴きことは佛より出で佛よりも貴は、只是和光明神の利益也。我朝の古徳みな寺を立給ひし時、必ず先鎮守を崇め、守護神を勧請する事は、和光の方便を離ては佛法立難き故也。吾國に生を受けん人は本地の深き利益を仰ぎ、和光の深き方便を信すべき者也。遠事は且くおく。承久逆亂の時、

諸國庄園おだしき所なかりしかば、あやしの賤男、賤女までも、みな家を捨て、佛寺の帳内にこもり、里を離て神社のつる垣のうちにあつまりき。尾張國あつ田の社に、國中上下羣集せし中に、或は昨日親におくれたるものもあり、或は今日子を生る者もあり。神宮宮人しきりに制止すれどもかなはざりしかば、大明神をおろし奉りて御託宣を仰べしとて、御神樂をまいらせ諸人同心に祈請せしに、一の禰宜に託して、我天より下て此國に跡をたるゝ事は、萬人をはぐくまんが爲也然に今天魔國を亂り、人民心を失へり。和光の擁護豈此時にあらずや。折にこそよれ、忌まじきぞと仰られしかば、諸人一同に聲をあげて渴仰の涙をながし、隨喜の袖をしぼりき。是全く後世の資糧にあらずといへども、時に當て擁護如此、何況後世菩提をいのらんにおきておや。されば今生をいのるよりも、後生を申を殊に明神納受し給ふ證據、少々是を出さば、昔園城寺山門の爲に焼拂はれて堂塔僧坊佛像經卷殘所なかりし

かば、寺僧も山野にまよひ靈地も礎の跡のみ残りし。或寺僧一人、新羅大明神へまゐりて通夜したりし夜の夢に、神殿御戸をひらきて御心地よげに見えさせ給ければ、此寺の佛法を守らむと御誓あり。寺門の滅亡いかばかりか御歎も深からんと存するに、何事にか御氣色怏然なるやと申ければ、誠に其歎き深しといへども此事によりて眞實道心を發せる寺僧一人ある事よるこばしき也。堂舎佛閣は財寶あらば作ぬべし。菩提心を起せる人は千萬人の中にも稀なるべしと仰らるゝと見て夢覺ぬ。後彼僧も纏て發心して實の道に入にき。山門の桓舞僧都と云ひし者、貧道無力を歎て山王に祈請せしに、其しるしなかりしかば、山王を悞奉て、離山して稻荷の社に祈請せし時、千石と云ふ札を、額におさせたもふと、夢に見て悦思ふ處に、後日の夢に日吉山王の御制止あれば、先の札を召返す也と示し給ふ間、夢の中に申けるは、我御斗こそましまさゞらめ。よ所の御恵をさへお障礙こそ心得がたく侍れと申時、

我は小神にて思ひもわかず。日吉は大神にて知らせ給ふ故に、桓舞は此度生死を離るべきもの也。若今生の榮花あらば、障と成て出離かたかるべき故に、申とも聞入ぬ也と仰の侍れば、取返すなりと仰られる時、夢の心地にも實に深き御慈悲の程の辱なく覺えければ夢覺て後やがて本山に歸りて、一筋に後生菩提を祈て遂に往生遂き。行基菩薩の御遺誠に、一世の榮花利養は多生輪廻の基也と書れたるも、思合られ侍り。後世を祈る、實の道に入を感應有事は何の神も皆同御心也其にとりて出離の道區々也と雖ども、末世相應の念佛を勸て往生を祈を、誠に神明の御本意とし給へり。其證據少々是をいさば、日吉山王の社頭に不斷念佛を初め置かるべきの由、保延三年八月廿三日の夜、東塔の慈門坊賢蓮が夢に示し給て聖眞子の社に不斷念佛を初め置て後、第三日の夜、横川の般若谷の玉泉坊、此念佛結縁の爲に、通夜して念佛を勤しに、行道の間立ながらちと睡眠せる夢に、神殿のみすをかゝげて、貴

僧の體に覺へて

ちはやふる玉のすだれをまきあげて

念佛のこゑを聞ぞうれしき

と示されける。御聲を通夜したる人兩三人、或はねぶりて夢の内には是をきく人もあり、或はふしながら現にこれを聞人もあり。互に是をかたりて神明の感應を喜び、渴仰の頭を傾ける。傳聞諸人我をとらじと念佛を勤めける。楞嚴院解脫谷の南光坊阿闍梨靜朝といひし者、この念佛を勤修せざる間、或時の夢に、社頭へ参りてみやめぐりしけるに、先大宮へ参りて其より聖眞子の社へまいりぬ。寶前の庭を見れば、鏡のごとく内外明にして、瑠璃の大地のごとし。是を見るに誠に心もいさ清く身も涼しき心地也。法施奉て後、氣比聖母の方へ過ゆかんとするに、神殿より高さ三尺斗の金色の貴僧出まし〜て、此前を行過る事叶べからず。罷歸れと仰らるゝ間、諸人皆通過候めり。靜朝に限て歸り候はん事は、欺入候由を申に、彼行過諸人は皆聖眞

子の不斷念佛を勤めたる者也。汝はいまだ、彼の念佛に結縁せず。早く罷歸れと示さるゝと見て夢さめぬ。應て懺悔を致し、殊に信心を深くして、在生の間懈怠なく念佛を勤き。勢多の尼と云ひしもの、賀茂の社にまいりたりけるに、神供を備へけるを見て、此神はことに何をかは好み侍らん。尋て参らせばやと、氏人に申ければ、とりわき何物を御好といふ事なし。只志によるべしと返答す。此尼其夜の夢に、賀茂の大明神、我このむものは念佛也。好物をたむくべくば、念佛を申べしと示し給ひければ、能き聲の念佛者をあつめて社頭にして七日の間、勇猛精進の念佛を勤修して法樂せり。中比往生をいのる者二人侍りき。八幡へ参て祈請しける様、二人意巧こと也。一人は念佛申て往生すべくば、念佛の法門にとりていかなる甚深の義を學して往生すべく候ぞ示し給へと祈。一人は念佛の外になを入ちて、甚深の法門を學して往生すべく候はん。然ばいかなる法門にて候。是を示し給へと祈りけり。

七日満する夜二人同ふしたる夢の中に

あらばやな又もあらばやをしゆべき

南無ととなふることの外には

と。二人ともに此告を蒙て夢覺て後是を語らんとしけるが、我うけ給はりつるやうを、互に書付て出さんといひて、別々に書て出せば、たゞ同歌にてぞ有ける。

念佛の法門にとりて、名號のほかに甚深の義をきかんと云、其義不可然。又餘の法門の甚深ならんをきかんと申も不可然候。往生の業には、只南無阿彌陀佛と唱ふる外には、又子細もあるまじきぞと示されける上には、名號を唱て往生をねがふを、神明の感應ありといふ事明か也。されば彼の御託宣には

我昔出家名法藏 得成報身住淨土

今來娑婆世界中 卽爲護念念佛人

とて、念佛の者をのみ守るぞとこそ仰られたり。佛の慈悲をたのむにも、神の和光を仰ぐにも、只念佛を唱て往生を願ふべき也

## 法然上人傳記卷第四下

熊谷入道往生事

武藏國の御家人熊谷次郎直實は、平家追討の時度々の合戦に忠をいたしき。中にも一谷の合戦に高名を極めしかば、武勇の名を一天にあげ、弓箭の徳を四海にながして、上なき武人也し事、人みなこれをしれり。しかるに發心時いたりけるにや。右大將家を恨み申事ありて、俄に出家して、法名を蓮生とぞ申ける。初めは伊豆國走湯山に參籠しけるが、上人の念佛弘通の次第を、京都より下れる尼公の語り申けるをきゝて、やがて上洛して、先澄憲法印のもとへ向ひて、見參に入べき由を申入て、對面を相待ほどの手ずさみに、刀をとぎけるを、なに事の料ぞと人申ければ、これへ參るは後生の事を尋申さん爲也。若腹をもきり命を捨て、後世は助からんずると承らば、やがて腹をも切らん料也とぞ申ける。法印此事を聞給ひて、さる高名の者なれ

ば、定めて存知あるらんとて、後生助かる道は法然房に可被尋申とて、使をそへて上人に引導せられければ、上人へまいり、後世の事を尋申けるに、念佛だにも申せば往生はする也、別の事なしと仰られけるをうけ給て、さめんくと泣ければ、けしからず思召て物をも仰られず。暫く有て後、何事に泣給ふと仰られければ、命をも捨て手足をも切てぞ、後生は助からんずらんと存する所に、たゞ念佛だにも申せば往生はするぞとやすくと仰をかふむり侍れば、餘にうれしくて泣れ侍るよしを申ける。一文不通のあら武者也といへ共誠に後世を恐れたる者と見えければ、無智の罪人の念佛申て往生する事、本願の正意なりとて、口稱念佛凡夫直往の要路なる由、常に示し給ひければ、二心なき専修の行者にてぞありける。もし命をも捨て後生助かれとならば、腹をきらん爲の用意に持たりける刀をば念佛申て往生すべき由を承り定めぬるうへはとて、上人に参らせければ、上人より津戸三郎に給て秘藏しけ

る。或時、上人月輪殿へ参られけるに、熊谷入道推参して御供にまいりけるを、とどめばやと思召けれどもさるくせ者なれば、中々あしかりぬと思食て、被仰旨なかりければ、月輪殿までまいりて、くつぬぎにありて、椽に手うちかけ、よりかゝりて侍けるが、御談義のこえの幽に聞えければ、此入道申けるは、あはれ穢土ほどの口惜所はあらじ、極樂にはかゝる差別あるまじき物を。談義の御聲もきこえばこそと、しかり聲に高聲に申けるを、禪定殿下きこしめして、なにもものぞと仰られければ、熊谷入道とて武藏國より罷のぼりたるくせ者の候が推参に共をして候とおぼえ候と、上人申されければ、やさしき者何かくるしかるべき。只めせとて御使を出されてめされけるに、一言の式代に及ず、やがてめに隨て同座を給はり、近々祇候して聽聞仕りけり。往生極樂は當來の果報なを遠し。忽ちに堂上をゆるされ、今生の果報を感じぬる事、本願念佛を行ぜずば争か此式に及べきと。耳目驚てぞ見えける

白地にも西を後ろにせざりければ、京より關東へ下ける時も、さかさまに馬には乗けるとかや。念々相續して畢命爲期の外、他事なかりけるが、建永元年八月に蓮西は、明年二月八日往生すべきなり。申所もし不審を殘さん人は、來臨して見知すべき由、武藏國村岡の市庭に札をたてける間、傳へきく輩遠近を分す、武藏相模、甲斐、信濃、越後、上野等の國々より、熊谷が宿所へ羣集する事いく千萬といふ事をしらす。既に其日に成ければ蓮西未明に沐浴して、禮盤にのぼりて高聲念佛、體をせむる事たとへん物なし。暫有て蓮西目を開て今日の往生は延引すべし。來九月四日必ず本意を遂べし。其日各來臨あるべきよしを示しければ、羣集の諸人そしりをなして歸りぬ。戀西が妻子眷屬等は人のあざけりをかなしき、蓮西が實なき事を欺ければ彌陀如來の御告によりて來九月を契る所也、全く蓮西が私に斗にあらず、九月の往生若なを延引せば、彌陀如來の御そら事なるべし、更に蓮西が不實には不可

成と、ことごとくしげにぞ申ける。さてひまゆく駒の足はやければ、九月四日にも成ぬ。後夜に沐浴して漸臨終の用意あり。諸人又羣集する事盛なる市をなす。蓮西洛陽より武州へ下ける時、來迎の彌陀の三尊、無數の化佛菩薩を、上人の意巧にてかゝせられて秘藏せられけるを、京つとに給たりけるを、臨終佛にかけ奉て禮盤にのぼり、端坐合掌して、高聲念佛熾盛にして、已尅に念佛と共にいきとまると、口より少光を放つながさ五六寸也。紫雲目をすまし、音樂耳を驚かす。異香室にみち大地震動せり、奇瑞一にあらず、諸人言語を絶す。翌日子刻に入棺、此時又異香音樂の瑞相先のごとし。同き卯の時にいたりて、紫雲西より來て家のうへにとまると、まる事一時餘りありて後、西の天をさしてのぼりぬ。是等の瑞相等遺言に任て、聖覺法印の許へ注し送り。本願稱名の不思議、諸佛證誠の誠言まことに言語の及所に非ず。貴といふもかへりておろかなるものか

## 禪勝房事

遠江國蓮花寺の禪勝房は、熊谷入道の勸により、吉水の御坊へ參て、無智の罪人の極樂淨土に往生する事の待るなるを承らんと申ければ、上人仰られるは、其極樂のあるじにておはします阿彌陀佛こそ、何事をもしらぬ罪人どもの、諸佛菩薩にも拾はて十方の淨土にも門をさゝれたる輩を、やすくと助救はんといふ願を發して、十方世界の衆生を來迎し給ふ佛に、かしこくぞ思ひより給ける。心を靜めてよく／＼きかるべし唐土より日本へ渡しまいらせたる一切經は五千餘卷あり。その中に往生極樂の爲にとて、双卷無量壽經、觀無量壽經、小阿彌陀經、これを淨土の三部經と名く。無量壽經には普法藏比丘と申入道、四十八願を發して極樂淨土を建立して、眞實に往生せんと思衆生を迎へおきて、遂には佛になさせ給ふ也。佛に成らんと思はん人は、先極樂を欣ふべき也。法藏比丘、一切衆生を平等に往生せさせんれうに、我佛に成たらん時の名號

を稱念せさせんと云願を發したまへる四十八願の中の第十八の願是也とて、本願の由來、念佛して往生すべき趣き悉く仰きかせられて後、一百餘日祇候して條々の不審を上人に尋申ける中に、一の疑に、三心の事を尋申ける。上人の給はく、三心を具する者は、必ず彼國に生と説給へり。此三心は本願の至心信樂欲生我國の文を成就する文也。然則念佛せん人は、此三心を具して念佛すべき也。一に至誠心と云は阿彌陀佛を懇奉る心なり。二に信樂と云は常に名號を唱て往生をうたがはぬ也。三に回向發願心と云は、往生して衆生を利益せんと思ふ心也。譬をもていはく、人有て一の太刀をもちたらんに、此太刀は御身の造り給へるか人とはい、我は手づつにて何事もせぬ者にて候。人のたまひて候也と答へば、人もまいらせたれ、わどのゝ爲には財かと又とへば、さ候と答ふ。太刀をまうくるは至誠心也。此太刀は大事の物なり。あだにせじと思は深心也。さてわれにもち物もきらんは、回向發願心也

しかのごとく本願にあふは至誠心也。名號を持って常に唱て、餘行の人にひやぶられざるは深心也。往生せんと思ふは回向心也。又女人に三心を心得ん時は、御前の袋を一つまうけてましまさんに、あけて見れば萬の財を入たり。袋まうくるは至誠心なり。此袋には大事の物を入たり。あだにせじとおもふは深心也。中にある物を取りだして要事につかふは回向心也。しかのごとく、本願にあふは袋を備たるがごとし。此名號の中には、阿彌陀佛の初發心より乃至佛にならせ給て六度萬行一切の功德を造あつめて、名號に納めて衆生に與へ給へる名號なれば、おろそかにせじとて、別解別行の人にもひやぶられずして南無阿彌陀佛と唱るは、不思議の本願なるによりて、かゝる罪人どもの淨土へ迎へられ、生死を離れずらんと思ひかためて、若し手はふさがらば敷をとらずとも、命終らんまで、口の常に唱るを深心と云也。又のやうはたとへば人の敵を持たらんに、敵はつは物なるを、我はよはくしてう

つに及ばざらんに、我敵にまさりたるつは物、我を憑まばうちてとらせんといはんに、悦で憑で宮仕をせば約束をたがへず、敵をうつ也。討ものを憑むは至誠心也。宮仕へするは深心也。敵を討は回向發願心也。しかのごとく我等衆生は、無始より已來惡業煩惱の敵にせめられて、六道四生を輪回して生死を離べきやうなきに阿彌陀佛の、我に歸し我を憑まば、煩惱の敵をうちてえさせんと御誓あれば、佛を憑み奉は至誠心也。名號を唱ておこたりなく、佛に宮仕へ奉るは深心也。最後臨終に來迎にあづかりて生死を離るゝは回向心也。三心具足するばかりやすき事はなしと。人には教へよとぞ仰られける。又一の疑に云、三心を具すべき次第を、加様に習まいらせ侍ぬれば、是の身には三心は具し侍べし。在家の人三心の文も知らず習候はで、只念佛ばかり申侍らんは、此三心は具すまじく侍やらんと上人曰、三心と云は、一向專修の念佛者に成る道を教へたる也。無智の罪人なりとも、一向專修の念佛者に

成ぬれば、皆ことごとく三心を具足して、往生せん事は決定也。故に習知りて一向専修に成人もあり。三心と云名だにも知され共、一向専修の念佛者に成人もあり。一向の佛の願を惡み奉るは至誠心也。ふかく信じて名號を唱て、念々相續して畢命を期として退轉なきは深心也。往生をねがふは回向發願心也。たとへば手づつなる者の、手きゝのしたる物を得たるが如し。衆生は手づつにて、萬の功德を造らされ共、阿彌陀佛、萬の功德を造り集て名號におさめて、衆生にあたへ給へるなり。又人の子は幼れ共、親の慈悲をもて萬の財を儲て子に護るが如し。三心の教文多けれども、如此心得るとぞ仰られける。又一の疑には、本願の一念は平生の機、臨終の機に通ずべくやらんと申ければ、上人曰、一念の願は命つゞまりて、二念には及ばざる機の爲也。上盡一形を釋し、念々不捨者は名正定之業とも判給へる。是則平生の機なり。本願にあふ遲速の不同あれば、上盡一形下至十聲と發し給へる也。必ず一

念を佛の本願と云ふべからず。一念十念の本願なれば強にはげますとも有なんと云人のあるは大なるあやまり也。設我得佛、十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺といへる本願の文の中には、平生の機あり、臨終の機あり。乃至は平生の機、十念は臨終の機なり。平生の機は乃至十年申て生れ、乃至一年申て生れ、乃至一月申て生れ、乃至一日申て生れ、乃至一時申てむまる。是みな壽命の長短、發心の遲速による也。此等はみな一たび發心して後、淨土まで申べき尋常の機なり。臨終の機といへるは、病せまり命一念十念につゞまりて後、知識の教によりて、初て本願にあへる機也。臨終のために發し給へる一念十念を平生に引上て、一念十念にも生れば、念佛はゆるけれども、往生不定には思べからずと申人は、ゆしきあやまり也。念々不捨者、是名正定之業、順彼佛願故の釋は、本願の中の乃至の機の、上盡一形に數返を勵みて、本願に相應すべき道理を釋しあらはし給へ

るなり。一念に往生たりぬと信じて、念佛懈怠ならん人は、信をもて行をさまざまにたげたる也。又數返の功德つみてこそ生るなれ、一念十念に生ずべからずといへる人は、行をもて信を妨ぐる也。然則信をば一念に生ると信じて、行をば一形に勵むべしとぞ仰られける。又一の疑に云、持戒のもの、念佛の數返の少候と、破戒の者の念佛の數返多く候と、往生の後、位の淺深いかゞ候べきと申ければ、所居の疊を指て曰、疊の有に付て破れたると、不破との論也。全く疊なくば如何ぞ。破たると破ざるとを論やあらん。その様に末法の中には持戒もなく、破戒もなし。只名字の比丘のみあり。傳教大師の末法燈明記に、悉く此旨をあかし給へる。其上に、持戒破戒の沙汰あるべからず。如是凡夫の爲に發す所の本願也。いそぎても〳〵名號を稱べしとぞ仰られける。又一の疑に云、念佛の行者毎日の所作に聲を絶えざる人もあり。又心に念じて數をとる人もあり。何を本とすべく候やらんと申ければ、口に唱へ心

に念する同名號なれば、いづれも〳〵みな往生の業となるべし。但佛の本願は稱名と立給へる故に、聲を出すべき也。經には令聲不絕具足十念と説、釋には稱我名號下至十聲と判じ給へり。我耳に聞るほどを高聲念佛とはする也。但譏嫌を知らず、高聲すべきにはあらず地體は聲に出さんと思ふべき也。又一の疑云、餘佛餘經に付て結緣助成せん事は雜行と成べく候やらんと申ければ、決定往生の信をとりて、佛の本願に乗じての上には、他の善根に結緣助成せん事、全く雜行と成べからず。往生の助業と成べき也。善導の釋の中に、己に他の善根を隨喜し、自他の善根をもて、淨土に回向すと判じ給へる。此釋をもて可知之とぞ被仰ける。又一の疑云、自力他力と申事は、何様にか心得侍るべきと申ければ、源空は云かひなき邊國の土民なり。昇殿すべき器にあらずといへども、君よりめされしかば二度まで殿上へまいりたりき。是全可參器量にはあらず、上の御斗也。此定に極重惡人、無他方便の凡夫は

會て報身報土の極樂世界へ可參器にはあらねども、阿彌陀佛の御力なれば、稱名の本願にこたえて來迎にあづからん事、何の不密か可有。我身の罪重無智の者なればいかゞ往生をとげんと不可疑。左様に疑はん物は、いまだ佛の願を知らざるもの也。如是の罪人を渡さんが爲に發す所の本願也。此名號を唱へながらゆめく疑ふ事あるべからず。十方衆生の願の中に、有智無智有罪無罪、善人悪人、持戒破戒、男子女人、乃至三寶滅盡の後の百歳の間の衆生までも、もるゝ事なし。彼三寶滅盡の念佛の衆生と、當時の汝等と是をならぶるに、當世の人は佛のごとく也。彼時の人は命長は十歲也。戒定惠の三學、其名をだにもきかずといへり。此等の衆生までも念佛すれば、來迎に預べしと知ながら我身捨らるべしと云事をば、いかゞ心得いたすべきや但し極樂のねがはれず、念佛の申されざらん斗は、往生のさはりと成べし。念佛に倦き人は、無量の寶を失べき人也。念佛にいさみある人は、無邊の悟を開くべ

き人也。相構て願往生の心にて念佛を相續すべき也。我力にては思よるまじき罪人の念佛するが故に、本願に乗じて極樂にまいるを他力の願とも超世の願共云也。案内を知らざる人は機を疑て往生せざる也。道心者智者などの念佛こそ往生はしたまふらめ、朝暮罪をのみ造て一文をだも知らん物は、念佛申とて、往生不定と疑ものは、本願には善惡の機を兼て發し給へりと知らぬ人也。念佛の機は、たゞ生れ付のまゝにて、申てむまるゝ也。先世の業によりて生れたる身をば、今生の中にはあらためなをさぬ也。女人の男子とならんとおもへ共、今生の中には不叶がごとし。只生れ付のまゝにて念佛をば申也。智者は智者にて申て生れ、愚者は愚者にて申て生れ、道心有人も申て生れ、道心なきも申て生れ、邪見に生れたる人も申て生る。富貴の物も、貧賤のものも、欲ふかきものも、腹あしきものも、慈悲あるものも、慈悲なきものも、本願の不思議にて念佛だにも申せば、みな往生する也。たとへば日の出

ぬれば、地の高低を嫌はず、みな照し。月の明なれば水の淺深をゑらばず、影を浮が如し。念佛の一願に萬機をおさめて發し給へる本願也。たゞこざかしく機の沙汰をせずして、念佛だにも申せば、皆悉く往生する也。さればこそ十方衆生と手ひろく願をば發し給へ。念佛の人は疾雨の如く極樂には生ると佛は説給へりと若し心をとゝのへ身を慎て、念佛して生るとならば、やは疾雨の如くは生るべき。又かゝる願なればとて、わざとふてかゝりて、わろかれとはあらず。本願の手ひろく不思議にまします様を申斗なり。念佛往生の義をかたくふかく申さん人をば、つや／＼本願をしらざる人と心得べし。源空が身も、檢校別當共が位にて往生はせんずる。本の法然房にてはゑも候はじ。年來習たる智慧は、往生の爲には用にもたゝず。され共習たるかひに、必ず如此知たるは無量の事也とぞ仰られける。又一の疑に云、臨終の一念は百年の業に勝たると申候事は、平生の中に臨終の一念ほどの念佛は申出

すまじきにて候やらんと。上人答給はく、具三心者必生彼國と説れたれば、三心具足の念佛は、百年の業に勝たる臨終の一念と同じ事也。必文字の有故にとぞ仰られける。又一の疑に云、八宗九宗の外に淨土宗を立る事、自由にまかせたる事かなと。餘宗の人の申候をば、いかゞ申候べきやと。上人曰、宗の名を立ること佛の説に非ず。自心さす所の經教に付て、存じたる義を悟極て、宗を判する事也。諸宗の習ひ皆以如是。今淨土の名を立る事は、淨土の正依に付て、往生極樂の義を悟極め給へる先達の宗の名を立給へる也。宗の起を知らざる愚者は、さやうの事を云也。抑淨土一宗の諸宗にこえ、念佛一行の諸行に勝たると云事は、萬機を攝する方を云也。理觀、菩提心、讀誦大乘、眞言止觀等はいづれも佛法のおろかにましますにはあらず皆生死濟度の法なれども、末代になりぬれば力不及、行人の不法なるによりて機は及ばぬ也。時をいへば末法萬年の後、人壽十歳に促り、罪をいへば十惡五逆の

罪人也。老少男女の輩、一念十念のたぐひに至るまで皆是擗取不捨の願にこもれる也。故に諸宗にこえ、諸行に勝れたりとは申也とぞ仰られける。又問奉て云、後生をば彌陀如來の本願を憑み奉て候へば、往生疑なく候。現世をばいかやうに思ひ存べく候らんと。上人答給はく、現世を過べきやうは、念佛の申されん方によりてすぐべし。念佛の妨に成ぬべからん事をば、いとひ捨つべし。一所にて申されずば修行して申べし。修行して申されずば、一所に住して可申。ひじりで申されずば、在家に成て申べし。在家にて申されずば、通世して可申。ひとり籠居て申されずば、同行と共に行じて申べし。共に行じて申されずば、一人籠居て可申。自力にて衣食不叶して申されずば、他力にて他人に助られて申べし。他人の助にて申されずば、自力にて可申。念佛の第一の助業米に過たるはなし。衣食住の三は念佛の助業也。能々たしなむべし。妻を儲くる事、自身助られて念佛申さん爲也。念佛の妨に成ぬべ

からんにはゆめ／＼もつべからず。從類眷屬も如是。所知所領を儲けん事も、惣じて念佛の助業ならば大切也。妨に成べくばゆめ／＼持べからず。すべて是をいはゞ、自身安穩にて念佛往生をとげんが爲には何事もみな念佛の助業也。三途に歸るべき事をする身をだにも難捨ければ、かへり見はぐくむぞかし。まして往生すべき念佛申さん身をば、いかにも／＼羽含もてなすべき也。かりそめにもいるかせにはすべからず。能々いたはるべき也。念佛の助業ならずして今生の爲に身を貪求するは、三惡道の業となる。往生極樂の爲に自身を貪求するは往生の助業となる也とぞ仰られける。禪勝房、種々の不審共承ひらきて後、暇申て明日は下向すべきよし申たりければ、京つとせんとて、明句を仰られけるは。聖道門の修行は、智恵をきはめて生死を離れ、淨土門の修行は、愚痴に歸へりて極樂に生ると心得べしとぞ。本國にかへりて偏に上人勸化の旨を信じ、二心なく念佛して、行年八十五歳、正嘉二年十

月四日寅の刻、念佛相續して種々の靈異を施し、端坐合掌して往生を遂られき

津戸三郎被召將軍御所事

征夷將軍鎌倉の右大臣實朝公の御時、元久二年秋の比津戸三郎爲守、念佛所を建立し一向專修を興行して、餘行をなんどもせざるよし將軍家に讒し申族あるに付て、御尋あるべき由内々其きこえ有しかば、かゝる珍事にこそあひ候はんずれ。被召尋時、申上べき次第を難答の言を調べて假名眞名にしるし給べきよし。飛脚を立て上人に申入けるに付て、十月十八日、上人御返事に云、念佛の事召問はれ候はんには、なじか委き事をば申させ給べき。げに人にもいまだ悉く習せ給はぬ事にて候へば、專修雜修の間は、悉き沙汰候はず共、召問れ候はゞ、法門の悉き事は知候はず。御上京の時うけ給りわたりて、聖の許へまかり候て、後世の事いかゞしつべき。在家の者などの後世助り候ぬべき事は何事か候はんと問候しかば、聖の申候しやうは、生死

を離るゝ道はやう／＼に多く候へども、其中に此比の人の生死をいづる道は、極樂に往生するより外には、こと道は叶ひがたきなり。是佛の衆生を勸めて生死を出させ給ふ一の道也。然に極樂に往生する行又やうやうに多く候へども、其中に念佛して往生するより外には、異行は叶難き事にてある也。其故は念佛は是彌陀の一切衆生の爲に、自ちかひ給ひたりし本願の行なれば往生の業にとりては、念佛にしく事はなし。されば往生せんと思はゞ、念佛をこそはせめと申候き。何況や、又在家の者の法門をも知らず。智慧もなからん者は、念佛の外には何事をして往生すべしと云事なし。我若少より法門を習たる物にて有だにも、念佛より外に又何事をして往生すべしとも覺ねば、只念佛計をして彌陀の本願を憑て、往生せんと思ひてある也。まして在家の者などの何事かあらんと申候しかば、ふかく其由を憑候て、念佛を仕なりと申させ給ふべし。又是念佛を申事は、たゞ我心より彌陀の本願の行なりと悟

りて申事にも非ず。唐の世に善導和尚と申候し人の、往生の行業においては專修雜修と申二の行をわかちて勸め給へる也。專修と云は念佛也。雜修と云ふは念佛の外の行也。專修の者は百人は百人ながら往生し、雜修の物は千人が中にわづかに一二人ある也といへるなり。唐土に又信中と申もの此旨をしるして、專修淨業文と云文を造りて、唐土の諸人をすゝめたり。其文は淨勝房などの許に候らん。それをもちてまいらせ給べし。又專修に付て五種の專修正行といふ事あり。此の五種の正行に付て、又正助二業をわかつてり。正業といふは五種の中の第四の念佛也。助業と云は其外の四の行なり。今決定して淨土に往生せんと思はゞ、專雜二修の中には專修の教によりて、一向に念佛すべし。正助二業の中には正業の勸によりて、二心なく只第四の稱名念佛を憑べしと申候しかば、悉しき旨ふかき心を知候はず。さては念佛の目出事にこそ、あんなれと信じて申候斗にて候。件の善導和尚と申人は氏ある人に

ても候はず。阿彌陀佛の化身にておはしまし候なれば教へ勸給はん事よもひが事にては候はじと。ふかく信じまいらせて念佛仕り候也。其造らせ給て候なる文ども多候なれ共、文字も知候ぬ者にて候へば、たゞ心ばかりをきゝ候て、後生やたすかり候。往生やし候とて申候ほどに、近きもの共見うらやみ候て、少々申者ども候なりと。是ほどに申させ給べし。中々悉く申させ給はゞ、あやまちもありなんとして、あしき事もこそ候へと思ひしは、いかゞ候べき。様々に難答を注してと候へ共、時に望てはいかなる詞共か候はんすらんに書てまいらせて候はんもあしく候ぬべく候。只よくよく御はからひ候て、早晚よきやうに御はからはせ給はめ。又念佛申すべからずと被仰て候とも、往生に志あらん人は其れにより候まじ。念佛彌申せと仰られ候共道心なからん者は其により候まじ。とかくにつけていたく思召事候まじ。いかならんにつけても、此度往生しなんと、人をば知らず御身にかぎりては思召べし。

わざとはる／＼と人上させ給ひて候こそ下人も不便に候へ。猶々示し聞れ候はん時に、是より百千申て候はん事は、時にもかなひ候まじければ、無益の事にてぞ候はんずる。はからひて能やうに早晩に隨て申させ給はんに、よもひが事は候はじ。まなかなにひろく書てまいらせ候はん事はもての外に廣文を造り候はんずる事にて候へば、俄にすべき事にも候はず。其は又中々あしき事にて候ぬべし。只いと子細は知候はず。是ほどに聞て申候也と申させ給はんには、心候はん人はさり共心得候なん。又道心なからん人は、いかに道理を百千萬あかすとも、よも心得候はじ。殿は道理ふかくして、ひが事おはしまさぬ事にて候と申あひて候へば、是ほどにきこしめさんに、念佛ひが事にてありけり。今はな申そと仰られむ事はよも候はじ。さらさらん人は、いかに申とも思とも、無益の事にて候はんずれ。何事も御文には盡し難候。あなかしこ／＼。然を翌年四月、信濃の前司行光于時山城民部大夫が奉行として下さ

れける御教書云

津戸郷内に建<sub>き</sub>立念佛所、令居住一向專修輩之由、所聞食<sub>二</sub>也。彼宗之子細爲有御尋爲宗之輩一兩人、早可被召進之狀、依仰執達如件。四月廿五日。午時散位刺奉津戸三郎殿云々。同狀禮紙云、來廿八日の申の刻、件の念佛者共をば參させ可給之由、御定候也云々。被仰下<sub>二</sub>之旨にまかせて、同廿八日申之尅に、淨勝坊、唯願坊此二人は上人の門弟也等の念佛者を相具して、法花堂の前の二棟の御所の南向の廣廂に參て、奉行人行光をもつて、子細を御尋ありけるに、津戸三郎は、上人の御返事の趣をそらにうかべて、用意したる事なれば、とこほりなく申入けるに、淨勝房等の念佛者は、年來所學の道なれば、法藏比丘の因位の願より、彌陀如來の成佛の今に至るまで、往生の道をくからず述申ければ、面々に立申旨委く被聞食拵けるによりて專修の行において子細あるべからず。如元勤可行由被仰出候ける後は、いよ／＼念佛の行懈りなかりければ、右大

臣家薨逝の時、彼御骨を二位家より此所に渡し奉られければ、二心なく偏に彼御菩提をぞとふらひ申ける

### 尼妙眞往生事

伊豆國走湯山に侍し尼妙眞は、専法花を讀誦し、兼ては祕密を修行せり。事の縁によりて上洛せし時、法然上人に参りて念佛往生の道を承て後は、忽に餘行をすて偏に念佛を行す。其功やゝたけて化佛を拜する事常にあり。只甚深の同行一人にかたる。餘人更に是をしらず。ある時明日申の尅に往生すべきよし同行に告ぐ翌日時尅にたがはず、端坐合掌高聲念佛して往生せり。妓樂天に聞え異香室にみたり。不思議の奇特、其比の口遊にてぞ有ける

## 法然上人傳記卷第五上

### 甘糟往生事

土御門院の御宇、建仁三年冬の比、山門の堂衆等獨歩

の餘、學生と權を争い衆徒に敵をなし、剩へ日吉八王子の社壇を城廓として悪行を巧しかば、追討の爲に官兵を差遣されし時、武藏國の御家人猪俣黨が甘糟太郎忠綱と云武者、彼官兵の内にて十一月十五日八王子へ向ひしに、まづ法然上人の御庵室へ参りて、彌陀本願の念佛は正しくは悪人の爲、傍には聖人の爲に發されたるよし、日來承侍りしかば、我等如きの罪人は其正機なりと心得侍ぬれば、本願を憑みて念佛申せば往生は疑有べからすと存じて侍れ共、病の床にふし長閑に臨終せむ時の事か。武士のならひ進退心にまかせざれば、山門の堂衆を追討の爲に勅命を蒙て、只今八王子の城へ向侍る。忠綱武勇の家に生れて弓矢の道にたづさはる、すゝみて父祖が遺囑を失はず、退ては子孫の後榮をのこさんが爲に、敵をふせぎ身をすてば、悪心熾盛にして願念發起しがたし。若又今世のかりなる謂を思ひ、往生のはげむべき理を忘れずば、居時も則禮なく勤時も則威なからん。かへりて敵の爲にとりこに

せられなば、永く臆病の名をとめて、忽に譜代の跡を失なひつべし。何を捨て何を取べしと云事、只迷暗に向へるがごとし。願は上人弓箭の家業をも捨ず、往生の素意をも遂る道侍らば、詮をとりて御一言を承り給ひ候はん」と申ければ、上人曰ひけるは、彌陀の本願は専ら罪人の爲なれば、罪人は罪人ながら名號を唱て往生す、是本願の不思議也。弓箭の家に生れたる人、たとひ戰場に命を失ふとも、念佛して終らば、本願に答て來迎に預り往生を遂ん事、ゆめ／＼疑ふべからずと仰られければ、不審ひらき侍りぬ。さては忠綱が往生は今日一定なるべしと悦て、上人の御袈裟を給て鎧の下にかけ、やがて其より八王子の城へ向ひけるに、彼社は東向なれば寄手は西向によせけるに、八王子權現の本地は彌陀左脇の弟子觀自在尊なり。幸に我西方に向へり、往生の便を得たる者か。權現すて給ふなど祈請して、命を捨て戦けるに、堂衆の中に一房中より十八人出たりける武者、みな手がら有たる豪の者也け

るが、甘糟太郎と云、重代の豪の武者の向なるに、おなじくは其仁を敵にうけて、高名もふかくも此時あらはずべしと支度しけるが、いまだ甘糟を見しらざる間名のらせて知らんとはかりごとにて、我と思はん敵は名のりてすゝめといひて、十八人の者どもしころをならべて木戸口より進出けるに、甘糟は折しも木戸口近くせめよせたりけるが、取もあへず武藏國の住人甘糟太郎忠綱といふ重代の豪の武者也。手にかけて名をあげよと名のりければ、十八人の者共は各支度したる事なれば、心を同じくして戦けるに、十二人は甘糟が手にかゝりてうたれぬ。甘糟は殘六人の手にかゝりてけるが、深手を負ける上、太刀は半より打おられぬ。今はかくと覺えければ、太刀を捨て甲をぬぎて、掌を合せ一心に彌陀を念じ高聲念佛して、敵の爲に命をまかせけるに、紫雲たなびき音楽聞えければ、遠近の人あやしますと云事なし。上人は椽に行道しておはしけるに、東坂に當て紫雲の見えければ、此靈雲こそあや

しけれ。一定甘糟が往生しつると覺ゆるとぞ仰られける。國に留をく妻子の許へ此由を告げ遣しけるに、臨終の夜妻の夢に往生したる由を示しければ、驚て使をのぼせけるに、京より下ける使に行あひて、戰場にての往生のありさま、田舎にての夢の告、互に不思議なりし事を談けり。本願の不思議といひながら、合戦の場に靈瑞を現じ、眼前の往生を遂ぬる事、眞に希代の奇特なりしかば、打手六人の輩、いかなれば甘糟は在俗の身たりながら、ふかく本願を信じて合戦の場に往生を遂るぞ。いかなる我らなれば頭を剃、衣を染ながら、在俗の身にも及ばざるらんと改悔をなし、心を發して、且は甘糟の後世をも弔、且は罪障懺悔の爲とて本坊へ不歸。やがてそれより出て諸國を修行して、靈佛靈社に歩を運びけるが、武藏國をとをりける時、或所にて供養を望けるに、法師は心うき者と思とれる事ありといひて、四壁の内へも入ざりければ、其故をとふに、これは山門の堂衆の爲に命を失へる甘糟が遺跡

也。法師に命を奪はれたる故に、法師は皆うとましましき也と、答ければ、我等こそ其人を失し敵なれ。我等一列の豪の武者十八人侍りしに。十二人は甘糟にうたれき。甘糟をば殘六人の手にかけてしに、忽に奇特をあらはし、眼前に往生を遂られしをみて發心せり。かゝる往生人を手にかけてつるを毒鼓の縁として後生を助かり又かの菩提をもとぶらひ奉らんが爲に、六人ともに發心して修行し侍し由を申ける時、うきも中々かたみなりけりとて、最後に甘糟に近きけるを、なつかしき事にしので、中陰の間留をきてもろともに孝養をぞ營ける。戰場にての往生のためし、上人に問答の次第、瑠璃王の先蹤、如來の教勅、思ひ合られ侍り。彌陀の本願は人を嫌はず所を選ばず、たゞ念佛すれば往生疑なき事明か也。我も人もふかく本願を憑み、稱名を專にすべし

#### 隆寛律師給選擇事

元久元年<sup>甲</sup>三月十四日、權律師隆寛小松殿へ参向の時

上人後戸に出むかひ給て、懷中より一卷の書をとりにだして律師に授給ふ。其言に云、これ月輪殿の仰によりてゑらび進する所の選擇集也。所載要文要義者、善導和尚淨土宗を立て給ふ肝心也。早く是を書寫して披見すべし。若不審あらば尋とふべき也。源空存生の間は秘して他見に及べからず。死後の流行は何事のあらんやとぞ仰られる。抑かの律師は苗裔をたづぬれば栗田の關白五代の後胤、少納言資隆の三男、稟承を訪へば楞嚴の先徳七代正統皇圓阿闍梨の附法也。慈鎮和尚の御門弟として天台の法燈をかゝげ、攝關數代の後胤を受けて詩歌の家塵をつぐ。朝家の重寶、叡山の領袖にて、僞慢の心も高く名利の思もふかくこそおはすべかりしに、宿善の催しけるにや、永く穢土をいとひ偏に淨土を念じて、常に上人に謁し、淨土の法門を尋申されしに、始はいと打とけ給ざりしかども、往生の志深き由を懇懇に申述給しかば、上人大きに驚て當時聖道の有識にて、大僧正の御房慈鎮和尚に貴重せられ給御身

の、是ほどに思入れ給ひける事、返くも忝とて淨土の法門殘所なく授られき。當世長樂寺義と號するは彼隆寛律師の流なり

## 山門蜂起事

元久元年十月の比、山門衆徒の蜂起、大講堂の庭に三塔會合して專修念佛を停止せらるべきよし、天台座主に訴へ申によりて、座主大僧正より上人に御尋あるに付て、上人起請文を進らる。その詞に云、近日風聞して云、源空偏に念佛の教門を勸めて自餘の教法を謗る事、諸宗是に依て陵夷し、諸行是によりて滅亡すと云云此旨を傳へ承に心神驚怖す。遂に事山門に聞え、議衆徒に及て炳誠を可加之由貫首に申送らる。此條は一には衆勦を恐れ、一には衆恩を喜ぶ。恐るゝ所は、貧道が身をもて忽に山洛のいきどほりに及ばん事を。悦ぶ所は謗法の名を消して、永く花夷の謗を止めん事を。若衆徒の糺斷にあらずば、いかでか貧道が愁歎を慰めんや。凡彌陀の本願に云、唯除五逆誹謗正法と。念佛

をすゝむる輩いかでか正法を謗ぜん。又惠心の要集には一實の道を聞いて普賢の願海に入と。淨土を欣たくひ豈妙法を捨んや。就中源空壯年の昔は、天台の教釋を披て三觀のとぼそにつらなる。衰老の今は善導の草疏を伺ひて九品の境にのぞむといへども舊執なを存す。

本心何忘れん。只冥鑿をたのみ、只衆察を仰ぐ。但老門遁世の輩、愚昧出家の類ひ、或は草廬に入て髪をそり、或は松門に臨て志をいふ。次に極樂をもつて所期とすべし。念佛をもて所行とすべきよし時々諷諫す。

是則齡衰て自餘の練行に能はず。性鈍にして聖道の研精に堪へざる間、しばらく難解難入の門を開て、試に易行易往の道を示すなり。佛智なを方便をまうけ給ふ凡愚あに斟酌なからんや。敢て教の是非を存するにあらず。機の堪否を思也。此條もし法滅の縁たるべくば向後は宜く停止に従ふべし。此外に僻説をもて弘通し虚誕をもて宣聞せば尤糺斷あるべし、尤炳誠あるべし願所也望む所也。此等の子細は、先年沙汰の時、起請

文を進じ畢ぬ。其後いまに變ぜず。重て陳するに能ず

といへども、嚴誠すでに重疊の間、誓文亦再三に及ぶ

上件の子細、一事一言、虚言をもて會釋をまうけば、

毎日七萬返の念佛むなく其利益を失て、三惡道に墮

在し、現當二世の依身常に重苦に沈て、永く楚毒をう

けん。伏乞、當寺の諸尊、滿山の護法、證明知見し給

へ 源空敬白

元久元年十一月三日 沙門源空 敬白云

その時の座主は 後白川院孫王眞性宮の大僧正也

#### 七箇條教誠事

上人の門弟と號する輩の中に、いまだ上人存知の深奥をしらす。いまだ淨土宗義の廢立を辨へざる類ひ、師説と稱して、雅意の謗法をいたし、無窮の臆説を吐によりて、己に山門の大訴に及間、同月の七日門人等とあつめ、制禁七ヶ條に及び、門人五十七人の連署をとりて、龜鏡にそなへ後證にたつ。所謂七ヶ條の起請に云、教誠念佛門輩七箇條起請。普告號予門人念佛上

人等

一可停止未窺一句文破眞言止觀、謗餘佛菩薩事

右至立破道者、學生所經也。非愚人之境界、加

之誹謗正法、既除彌陀願、其報當墮那落、豈非癡

闇之至哉

一可停止以無智身對有智人、遇別行輩好致諍論事

右論議者、是智者之有也。更非愚人之分、又諍論

之處、諸煩惱起、智者遠之自由旬也。況於一向念

佛行人乎

一可停止對別解別行人、以愚癡偏執心、稱可棄置本

業、強嫌嘖之事

右修道之習、各勤自行不遮、餘行西方要決云、別

解別行者、惣起敬心、若生輕慢、得罪無窮云云。何

背此制教哉。加之善導和尚大呵之。未知祖師之

誠、愚闇之甚也

一可停止於念佛門、號無戒行、專勸淫酒食肉、遵守律

儀者、嫌名雜行人、憑彌陀本願說、勿恐造惡事

右戒是佛法大事也。衆行雖區、同專之。是以善導

和尚、舉目不見女人、此行狀之趣、過本律制、淨業

類不順之者、惣失如來遺教、別背祖師舊跡、無所

據者歟

一可停止未辨是非癡人、離聖教背師說、恣述私義

妄企諍論、被咲智者迷亂愚人事

右無智大天、此朝再誕、猥述邪義、更以似九十五

種異道、尤可悲歎也

一可停止以癡鈍身、殊好唱導、不知正法說種種邪法、

致化無知道俗事

右無解作師、是梵網之制戒也。愚闇之類、欲顯

己才、以淨土教爲其藝能、貪名利望、擅越忒成、自

由之妄說、誑惑世間人、誑法之過殊重、寧非國賊

乎

一可停止自說非佛教、邪法爲正法、僞號師範說事

右各雖一人說、所積在貧道一身、汚彌陀教文、揚師

匠之惡名不善之甚、豈過之哉

以前七箇條教誠甄錄如斯。學一分教文弟子等者、頗知旨趣、年來之間、雖修念佛、隨順聖教、不逆人心、無驚世聽、因茲今三十箇年、無爲涉日月而至近來、此十ヶ年以後、無智不善之輩、時々到來、非畜失彌陀淨業、又汚穢釋迦遺法、不加炳誠乎。此七箇條之内、非法所行、巨細事多、具難注述、惣如此等之無方、慎不可犯。此上猶背制法輩、是非予門人、旣魔眷屬也。更不可來草庵。自今以後、各隨聞及、必可被觸之。餘人勿相伴若不、然者、是同意之人也。彼過如作者、不能嗔同法、恨師匠、自業自得、理只在己心而已。是故催四方行人集一堂告之、僅雖有風聞、慥不知誰人、失據于成敗、愁歎送年序、非可默止、先隨所力及、殫禁遏之計也。仍錄其趣、示門葉等之狀如件

元久元年十一月七日

沙門源空

署判之門人七十五人略之

上人若誦法をこのまば、禁遏豈かくのごときならんや。

彼正文すでに月輪殿に進じ置かる。誰か是を疑はん。罪惡生死の迷徒をすくひ、愚癡淺識の羣類を助けんが爲に、彌陀本願の念佛を弘通せりといへども、深諸教を貫び、敢て諸行をいるかせにせず。しかるを專修の詞に付て、當世もなを誦法の名をあぐる人まゝこれあるか、尤不便の次第也。よく上人存知の旨趣をさぐり一宗廢立の大綱をあきらめて、改悔をなし、後信をいたせ

月輪殿御消息被遺座主事

月輪禪定殿下、座主眞性大僧正へ送らるゝ自筆の御消息に云、念佛弘行の間の事、源空上人の起請文等、山門に披露の後、動靜如何、尤不審に候。抑風聞の如きは、上人淺深三重の過怠によりて、炳誠の僉議に及と云云。一には念佛を勸進する。惣じて然べからず。是則眞言止觀の深理に非ず、口稱念佛の權説をもて、更に往生を遂べからず故にと云云。此條においては、定て滿山の謳詞にあらず、若これ一兩の言敷。他の誦法

を咎とせんが爲に、自返て謗法をいたす、勿論と謂べし。二には念佛の行を殷破するあまり、經論を焚燒し、章疏をながし失ひ、或は又餘善をもては、三途の業と稱し、犯戒をもては九品の因とすと云云。これをきかん細素たれか驚歎せざらん。諸宗の學徒專躰陶するにたれり。但この條においては、ほとんど信をとり難し。既にこれ會昌天子、守屋大臣等の類歟、如此の説過半まことならずと云云。慥なる説に付て眞僞を決せられんに、敢て其隱不可有事、もし實ならば科斷亦かたしとせず。偏に浮説をもて、咎を上人にかけるゝ條、理盡の沙汰にあらざる歟。三にはかくのごときの逆罪に不及といへども、一向專修の行人、餘行を停止すべき由を勸進の條、なを然べからず云云。此條においては進退相半たり。善導の心此旨をのぶるに似たり。然て旨趣甚深也、行者思べし。いま上人の弘通はよく疏の意をさぐりて、すべて紕謬なし。しかるを門弟等の中に奥義をしらず、宗旨をさとらざる類、恣に妄言を

はき、猥に偏執をいたすよし聞えある歟。此事甚もて不可也とす。上人遮て是をいたむ。小僧いさめて是を禁ず。當時已に數輩の門徒をあつめて、七箇條の起請をなし、各連署を集めて永く證據にそなふ、上人もし謗法を好まば、禁遏豈かくのごときならんや。事ひろく人おほし、一時に禁止すべからず、根元既にたちぬ、我執の枝葉むしろ繁茂する事をゑんや。これをもてこれをいふに、三重の子細一としても過失なし、衆徒の躰憤何によりてか強盛ならんや。はやく満山の跛躁を停止して、來迎の音樂を庶幾すべき歟。抑諸宗成立の法、各自解を專にして餘行をなむともせず。弘行の常のならひ、先徳の故實也。これを異域にとぶらへば、月氏には即護法、清辨の空有の論談、震旦には亦慈恩、妙樂の權實の立破也。是を我國に尋るに、弘仁の聖代には戒律大小のあらそひあり。天曆の御宇には、諸宗淺深の談あり。八家きほひて定準をなし、三國つたへて軌範とす。然に末世の邪亂鑿て、諸宗の對論をとゞ

められしより以來、宗論ながく跡をけつり。私法それが爲に安全たり。就中淨土の二宗においては、古來の行者偏に無染無著の淨心をこらし、專修念佛の一行につきかへて、他宗に對して執論をこのまず。餘教に比して是非を判ぜず。獨り出離をねがひて、必ず往生の眞道を遂んと也。但弘教嘆法のならひ、敢て又その心なきにあらざる歟。所謂源信僧都の往生要集の中に、三重の問答をいだし、念佛の勝業を談ず。念佛の至要此釋に結成せり。禪林の永觀は、徳恵心に及ばずといへども、行淨業を續、撰所の十因、其意又一致也。普賢、觀音の悲願をかながへ、勝如、教信が先蹤を引て念佛の餘行に勝たる事を證せり。彼時の諸宗の徒、惠學林をなし、禪定水をたふふ。然といへ共惠心をとがめず、永觀をも罰せず、諸教も滅することなく、念佛も妨なし。是則世すなほに人うるはしき故也。而に今代澆季に及び、時鬪諍に屬して、能破所破ともに邪執よりおこり、正論非論みな喧嘩におよび、三毒内にも

よほし、四魔外にあらはるゝが所致也。又或人云、念佛もし弘通せられては、諸宗忽に滅盡すべし。爰以退妨すと云云。此事不可然。過分の逆類においては、實によりて禁斷せらるべし。全く淨土宗のいたむ所にあらず。末學の邪執にいたりては、上人嚴禁をくわへ、門徒已に服膺す。かれをいひこれをいひ、何ぞ佛法の破滅に及ばんや。凡顯密の修學は名利によりて研精す。是人間の定まれる法也。淨土の教法においては、名にあらず利にあらず。後世を思ふ人の外に誰か習學せんや。念佛の弘行によりて餘教滅盡の條戯言歟、狂説歟いまだ是非を不辨、若此沙汰熾盛ならば、念佛の行一時に失墜すべし。因果を辨へ患苦を悲まん人あに傷嗟せざらんや。あに悲涙せざらんや。爰に小僧幼年の昔より衰暮のいまに至るまで、自行おろそかなりといへども、本願を憑む心おこたらず罪業おもしろいへども往生をねがふに物うからずして、四十餘回の星霜を送る。彌もとめ、いよくすゝみて、數百萬返の佛號を

の爵訴とゞまりにけり

## 法然上人傳記卷第五下

### 頭光出現事

同二年<sup>乙</sup>四月五日、上人月輪殿に參じて念佛の法門御談義敷尅の後、退出し給し時、地の上よりたかく蓮華をふみてあゆみ、金色頭光赫奕として、形貌は大勢至菩薩也。禪定殿下庭上にくづれおりさせ給て、御額を地に付ておがみたまつらせ給へば上人也。門外まで見送り給ふに又大勢至也。涙千行萬行、敢て譬に物なし。暫ありて肅然としてをどろきおきさせ給ひて仰られて云、上人の頭上に金色の圓光顯現せり、希有の事おがみ奉るやと、時に御前に侍は戒心房<sup>右京權大夫 隆僧入道</sup> 本蓮房<sup>中納言阿闍梨尊玄</sup>二人也。ともに見奉らざるよし申、禪定殿下御歸依としふりたりといへども、此後は彌陀の思ひをなし奉らせ給ひけり

唱ふ。頃年よりこのかた、病せまり命もろくして黃泉近にあり。淨土の教迹此時にあたりて滅せんとす。是を見是をきゝて、争かたへ争かしのばん。三尺の秋の霜肝をさき、一寸の赤烟胸をこがす。天に仰ぎて嗚咽し、地を叩て愁悶す。何況上人、小僧において出家の戒師たり、念佛の先達たり、歸敬これふかし、尊崇尤切也。しかるを罪なくして濫刑をまねき、勤ありて重科に處せば、法の爲に身命を惜むべからず。小僧かはりて罪をうくべし、もて師範の咎をすくはんとおもふ。凡其佛道修行の人、自他共に罪業をかへりみるべし。然を強に俗諦隨事の假論を執して、いよく無明迷理の惑障に墮せんこと、いたましきかなや、悲しき哉や乞、學侶の心あらん。理に伏して執を變じ、法に倣して罪をなだめよ耳。死罪々々敬白

十一月十三日

專修念佛沙門圓證

大僧正御房へと云云

上人誓文におよび、殿下會通を設けられければ、衆徒

## 瘡病事

同年八月。北白川二階房にして、上人瘡病をし出し給て、小松殿へ歸り給ひぬ。門弟等或は念佛を申ておとし奉らんといふ人もあり。或は上人へ参りかゝる程の物には、我等が力は叶べからずと申人もあり。或は又結縁のためにまいる歎と云人もあり。禪定殿下此事を聞食しさはきて、種々に療治を加へらるといへ共叶はざりければ、禪定殿下われ案を廻らせり。善導の御影を圖繪し奉りて、聖覺を唱導として上人の前にて供養をとげ、淨土の法門を稱し、彌陀の本願を解説せしめん。隨喜の心を發して除病の効驗もありぬべしとて、訛摩法眼證賀に仰て、御影を圖繪せられ、後京極殿その銘をかゝしめ給ふ。聖覺法印于時僧都の許へ、御導師に參勤すべきよし仰られければ、聖覺も瘡病を仕侍る。明日は發日にあたり侍れども、且は師匠の報恩也。争か子細を申べきや。但早且に御佛事を初らるべしとて翌日拂曉に小松殿へ參入して、聖覺今日おこり日にて

候。何時斗におこらせ給ひ候やらんと申ければ、申の時斗に發り侍るなりと。上人曰、聖覺はまたとく發り候也。尤いそがるべしとて、巳時の初に説法をはじめて、申の終に結願せられるに、御導師本願の奥義をのべ、大師釋尊も衆生に同ずる時は、常に病惱をうけ療治に用給き、況や凡夫血肉の身いかでか其愁なからんや。雖然此道理を知らざる淺智愚鈍の衆生、定めて疑心をなし不信をいたさんか。善導和尚諸宗の教相によらずして、淨土宗を興して一向專修の行をたて、本願稱名の義をひろめ給事は、末代惡世の根機に相應して順次に生死を離るべき要法なるが故に、上人これを弘通し給ふに、化道既に佛意に叶て、まのあたり往生を遂るもの千萬なり。然ば諸佛菩薩諸天龍神、いかでか衆生の不信を歎かさらん。四天大王佛法を守護すべば、必ず我大師上人の病惱を愈し給へと、懇に申のべ給ひければ、善導の御影の御前に異香しきりに薫じ、上人も聖覺も共に瘡病おちにければ、故法印は雨をく

だして名をあぐ。聖覺が身には此事奇特也とぞ申されける。まことに末代の奇特、その比の口遊にぞ侍ける。抑靈魔等の或は結縁のため、或は開法のために、久修練行智徳高貴の人に託する事これ多し。昔三井の大阿闍梨の所勞と聞給て、恵心僧都とぶらひにわたり給ひたりければ、阿闍梨臥ながらの給く、病患衛なく候て行法すでに退轉し侍ぬ。かくて死侍らば一定地獄に落侍なんと、悲くこそ侍れと申されし時、されば地獄と云ふ所の侍歎と恵心僧都のたまひしかば、さてさは侍るぞかしと阿闍梨又の給ひければ、恵心は地獄なき義をたて、阿闍梨は地獄ある義をのぶ。おはりに病床に起居て、高聲に難詰會釋の間、やうやく兩三時に及に天井に聲ありて云、あなたうと、今は罷歸り侍なん。かゝる貴き事や承り侍るとて、まいりて侍し程に、さる事も候はで今まで侍りつるこそ恐れ存候へと云々。即阿闍梨の心地さはやかに成給ぬ。人これを怪ければ恵心僧都の仰られけるは、推するに、昔智行ありて貴

とかりける人の、魔道に落たるが、法文を聞て妄執をとらせん爲に學徳のもとして尋入て伺所に、今の義を聞て隨喜して去なりと云云。かれをもて是をおもふに今上人の病惱その義更に違べからず、きかん人ゆめゆめ疑事なかれ。但又古老の口傳には、上人門弟等の中に、本願に歸したる三心具足の念佛者は、瘧病如きの病を不可受と申けるを、一人の弟子ありて、たとひ三心具足の行者なりとも、業報限あらんものは、争かこれを受ざらんやと論じ申事の侍るを、上人障子をへだて、聞給ひけるが障子をあけて、念佛者瘧病すべからずといはゞ、さては源空が瘧病したらんは、いかゞあるべきと仰られけるが、翌日に瘧病を申し給へりといへり。業報限あればいかなる病をうくとも、其によつて念佛の信をばさますべからずと、末代の衆生の不審を除かん爲に、態と此病を受給へる事疑なし

## 明遍參小松殿事

高野の明遍僧都、善光寺參詣の次に、小松殿の坊に參

じて、上人に申云、末代悪世の罪惡の我等、彌陀の名號を稱して淨土に往生すべしと承候に、念佛の時心の散亂するをばいかゞし侍るべきやと。上人曰、欲界の散地に生をうくる者、心あに散亂せざらんや。其條は源空も不及方。但心は散亂すれども口に名號を稱すれば、佛の願力に乗じて往生疑なし。詮するところ、只念佛の功をつむべき也と。僧都悦で退出するうしろに上人の曰、あなことたかの御房や、生付の目鼻を取捨申事や侍ると

#### 大胡消息事

上野國の御家人、大胡太郎實秀在京の時、上人見參に入て、念佛往生の道をうけ給はりて後、國より不審を尋申ける時の御返事、詮をとりてこれをのせば、三心具足して往生すと申事は、誠に其名目ばかりを打聞時は、いかなる心を申やらんとことゞしく覺候ぬべけれ共、善導の御心にては心得やすく候也。習さたせざらん無智の人や、さとりなからん女人などの、え具足

せぬほどの心ばへにては候はぬ也。たゞまめやかに往生せんと思ひて念佛申さん人は、自然に具足しぬべきにて候也。一には至誠心、二には深心、三には回向發願心也。此三心を具するものは必ず彼國に生ると説れたり。初に至誠心と云は眞實の心なり、眞實と云は外には賢善精進の相を現じ、内には虚假をいだく事をえされと、善導和尚の釋し給へる。此釋の心は内にはおろかにして、外にはかしこき人と思はれんとふるまひ内には惡をつくり外には善人のよしを示し、内には懈怠の心を懷きて外には精進の相を現するを、眞實ならぬ心とは申也。外も内も有のまゝにてかざる心なきに至誠心と名付也。二に深心と云は、ふかく信する心也。何事をふかく信するぞと云は、先諸の煩惱を具足し多くの罪を作て、餘の善根なからん凡夫、阿彌陀佛の大悲本願を仰て名號を唱る事、若は百年にてもあれ、若は四五十年にてもあれ、乃至一二年にてもあれ、すべて往生せんと思ひ初たらん時よりして、最後臨終の時

に至るまで懈怠せず。若は七日一日十聲一聲に至るまで、多も少も稱名念佛の人、決定して往生すべしと信じて、一念も疑心なきを深心とは申也。然に往生をねがふ人、本願の名號持ながら、猶内に妄念の起るを恐れ、外に餘善の少によりても、偏に我身をかるしめて往生を不定に思はゞ、既に本願を疑なり。されば善導和尚は未來の行者の此疑をのこさんことをかゞ見て、其疑心を除て決定の心を勸めんが爲に、煩惱を具足し罪業を造り、善根少く智解なからん凡夫、十聲一聲までの念佛により、決定して往生すべき理をくわしく釋し給へり。たとひ多の佛空中に充滿して、光を放て舌を舒、造罪の凡夫念佛して往生すと云事はひが事也、信すべからずとの給ふ共、其によりて一念も驚き疑べからず。其故は阿彌陀佛いまだ佛に成給はざりしむかし、若我佛に成たらん時、十方の衆生、わが名號を唱る斗り上百年より下十聲一聲までにせむに若我國に生れずといはゞ、我佛にならじと誓ひ給たりしに、其願

むなしからずして佛に成て既に久しく成給へり。知べし其名號を唱ん人は、必ず往生すべしと云事を。又釋迦佛この娑婆世界に出世して、一切衆生の爲に、彼彌陀の本願を説て念佛往生を勸給へり。又六方恆沙の諸佛、各廣長の舌を出して、釋迦の念佛して往生すと説給ふは決定也。ふかく信じてすこしも疑心あるべからずと、そこばくの佛達の一佛ものこらず、一味同心に證誠し給へり。既に彌陀は其願を立給ふ。釋尊は其願のむなしからざる事を説すゝめ給ふ。六方恆沙の諸佛は其説の眞實なることを證誠し給へり。此外いづれの佛の、又これらの諸佛にたがひて、凡夫念佛して往生せずとはの給ふべきぞと云ことはりをもて、おほくの佛現じてのたまふとも、其に驚てさては念佛往生は叶まじき歎と、信心をやぶりに疑心すべからず。況や菩薩たちのたまはんをや。況や羅漢辟支佛等をやと釋し給て候也。何況、近來の凡夫のいひ妨げんをや。いかに目出度人申とも、善導和尚にまさりて往生の道を知

べからず。善導は又彌陀の化身なり。彼佛我本願をひらめて、あまねく一切衆生に知しめて、決定して往生せさせん料に、かりそめに凡夫の人と生れて、善導和尚と云れ給ふ也。いはゞ其教は佛説にてこそ候へ。垂迹の方にては現身に念佛三昧を得て、まのあたり淨土の莊嚴を見、たゞちに佛の教をうけ給ひて、の給へる言どもなり。本地を思ふにも、垂迹を尋るにも、旁以仰で信すべし。されば誰しも煩惱のこきうすきをかへり見ず、罪障のかるきおもきをも沙汰せず、只口に南無阿彌陀佛と唱ん聲に付て、決定往生の思をなすべし。其決定の心をやがて深心とは名付也。所詮、とにもかくにも念佛して往生すと云事を、ふかく信じて疑はぬを深心とは名付候也。三に廻向發願心と云は、我所修の行業を、一向に極樂に廻向して、往生を願ふ心也。如此の三心を具してかならず往生すべし。この心一もかけぬれば往生せずと、善導は釋し給へる也。たとひ眞實の心ありて聲をかざらず共、佛の本願を疑は、既

に深心かけたる念佛也。たとひ疑心なく共、外をかざり内にまことの心なくば、至誠心かけたる心なるべし。たとひ此二心を具してかざる心もなく疑心もなく共、極樂に生れんと思ふ心なくば、廻向發願心かけぬべし。三心を心得わかつ時は如此別々の様なれども、所詮は眞實の心を發て、ふかく本願を信じて、往生をねがふ心も三心具足の心とは申也。まことに是ほどの心だにも具せずしては、いかゞ往生極樂ほどの大事をばとげ給ふべきや。此心は申せば又やすき事にて候なり。かやうに心得しらねばとて、又もと具足せぬ心にては候はぬ也。其名をだにもしらぬ者も、此心得をば備つべく候。又よくしりたらん人の中にも、其まゝに具せぬ候ぬべき心ばへにて候也。さればこそいふにかひなき人ならぬものの中よりも、只ひらに念佛申ばかりにて往生したりといふ事は、昔より申傳て候へ。其らはみな知らねども、三心を具したる人にてありけると心得らるゝ事にて候也。又年來念佛申たる人

の臨終のわろき事の候は、先に申つる様に、うへ計をかざりて、たうとき念佛者など人にいはれんとのみ思て、下にはふかく本願をも信ぜず、まめやかに往生をもねがはぬ人にてこそは候はんと心得られ候也。されば此三心を具せざる故に、臨終もわろく往生もせぬ也としろしめすべき也。かく申候へばさては往生は大事のことにこそと思召事、ゆめ／＼候まじき也。一定往生すべしと思ひとらぬ心を、やがて深心かけて往生せぬ心とは申候へば、いよ／＼一定の往生とこそ思召べき事にて候へ。まめやかに往生の心さし有て、彌陀の本願を疑はずして、念佛申さん人は、臨終のわろき事は候まじき也。其故は佛の來迎し給ふ事は、もとより行者の臨終正念の爲にて候也。其を心得ぬ人は、みな我臨終正念にて念佛申たらん時、佛は迎給ふべしとのみ心得て候はゞ、佛の願をも信ぜず、經の文をもころえぬ人にて候也。稱讚淨土經には、佛慈悲をもて加へたすけて、心をしてみだらしめ給はずと説れて候へ

ば、たゞの時によく／＼申をきたる念佛によりて、臨終にかならず佛は來迎し給ふべし。佛の來現し給ふを見奉りて、行者正念に住すと申義にて候也。然に先の念佛をむなく思なして、臨終正念をのみ祈る人などの候は、ゆゑしき僻胤にて候也。されば佛の本願を信ぜむ人は、兼て臨終を疑ふ心有べからずとこそ覺へ候へ。たゞ當時申さん念佛を、彌も心をいたして申べきにて候。いつかは佛の本願にも臨終の時念佛申たらん人へのみ迎へんとはたて給ひて候。臨終の念佛ばかりにて往生すと申事、日來往生をもねがはず、念佛をも申さずして、偏に罪をのみ作たる悪人の、既に死なんとする時、初て善知識の勸にあひて念佛にて往生すとこそ、觀經にも説て候へ。もとよりの行者の沙汰をば強にすべき様は候はぬ也。佛の來迎一定ならば、臨終の正念も又一定と思召べき也。此大意をもて能々御心をとめて心得させ給べく候。又罪をつくりたる人だにも往生す。まして法花經うちよみて念佛申さんは、

何かくるしかるべきと人々申候らん事は、京邊にもさ様に申人々おほく候へば、實にさぞ候はん。されば諸宗の心にてこそ候らめ。よしあしを定め申べきに候はず。ひが事と申さば恐れある方多く候。但淨土宗の心善導の釋には往生の行に付て、大きに分て二とす。一には正行、二には雜行也。初に正行と云は、是にあまたの行あり。初に讀誦正行と云は、無量壽經、觀經、阿彌陀經等の三部經を讀誦する也。次に觀察正行と云は、彼國の依正二報のあり様を觀する也。次に禮拜正行と云は、阿彌陀佛を禮拜する也。次に稱名正行と云は、南無阿彌陀佛と唱る也。次に讚歎供養正行と云は、阿彌陀佛を讚歎し奉る也。これを五種の正行と名付、讚歎と供養とを二種の行とする時は、六種の正行とも申也。此正行に付てふさねて二とす。一には一心に專阿彌陀佛の名號を唱へ奉りて、立居起臥晝夜にわするゝ事なく、念々に捨ざるを正定の業と名づく。彼佛の本願に順するが故と申て、念佛をもて正しく定たる往

生の業と立て、若禮誦等によるをば、助業とすと申て念佛の外の禮拜や、讀誦やなどをば念佛を助る業と申て候也。此正定業と助業とを除て、其外の諸の業は皆雜行と名付。布施、持戒、忍辱、精進等の六度萬行も法花經をもよみ、眞言をも行ひ、かくのごとくの諸の行をば、皆悉雜行と名付。先の正行を修するをば專修の行者といふ。後の雜行を修するをば、雜行の行者と申て候也。此二行の得失を判するに、先の正行を修するには、心常に彼國に親近して憶念ひまなし。後の雜行を行するには、心常に間斷す。廻向して生る事を得べしといへども、すべて疎雜の行と名付といひて、極樂にうとき行といへり。又專修の者は十人は十人ながら生れ、百人は百人ながら生る。何をもての故に。外の雜縁なくして、正念を得るがゆへに、彌陀の本願とあひ叶ゆへに、釋迦の教に順するがゆへに、雜行者百人が中に一二人生れ、千人が中に四五人生る。何をもての故に雜縁亂動して正念を失がゆへに、彌陀の本

願と相應せざるがゆへに、釋迦の教に順がはざるが故に、係念相續せざるが故に、憶念間斷するが故に、自も往生の業をさへ他の往生をもさふるが故になんと釋せられて候めれば、善導和尚をふかく信じて、淨土宗に入らん人は、一向に正行を修すべしと申事にてこそ候へ。其上は善導の教をそむき餘行を加へんとおもはん人は、をのく習たる様こそ候らめ。其をよしあしとはいかゞ申候べき。善導の勧め給へる行どもをきながら、つとめ給はぬ行を少にても加べき様なしと申事にてこそ候へ。勧め給へる正行ばかりだにも猶ものうき身にて、いまだすゝめ給はぬ難行をくはへん事は、まことしからぬ方も候ぞかし。又罪を造る人だにも念佛申て往生す。まして善なれば法花經などをよまぬは何かくるしからんなど申候はむこそ、無下にはしたなく覺候へ。往生を助はこそ、いみじくも候はめ。妨にならぬ計をいみじき事とて、加へ行はん事は、何か詮にて候べきなれば、悪をば佛の御心に造とやすゝめ給

ふ。構てとめよとこそ誡め給へ共、凡夫のならひ當時のまどひに引れて、悪を作は力及ばぬ事にてこそ候へ。誠に悪をつくる人の様にしかるべくて、經をもよみたく、餘行の加へたからん事は力及ばず。但法花經などをよまん事を、一言なりとも惡造らんことにいひならべて、其も苦しからねば、まして是はなど申説事こそ不便の事にて候へ。ふかき御法もあしく心得る人にあひぬれば、返て物ならずきこえ候事こそあましくおぼえ候へ。加様に申候へば餘行の人々は、はら立する事にて候に、御心に心得てひろく知らさせ給ふまじく候。あらぬさとの人の、ともかくも申候はぬ事をば、耳にもきゝ入させ給はで、たゞ一すちに善導の御すゝめに順がひて、いますこしも一定往生する念佛の數返を申そへんと思召べき事にて候也。たとひ往生の障とこそならずとも、不定の業とは聞えて候めれば、一定往生の正業を修すべき行のいとまを入れて、不定の業を加へん事は、且は損にて候はずや。能々心得させ

給ふべきにて候也。但かく申候へば、雜行を加へん人は永く往生すまじなど申事にては候はず。何様にも餘行の人なり共、すべて人をくだし、人をそしる事はゆゑしき過重き事にて候也。能々御愼候て、雜行の人なればとてあなづる御心の候まじき也。よかれあしかれ人の上の善惡を思入れぬがよき事にて候也。又志本より此門に有て信じぬべく候はんをば、こしらへ勸させ給べく候。さとりたがひてあらぬ様ならんなどに、論じ合せ給ふ事は有まじき事にて候。よくく習知たる聖達だにも、さやうの事をばつゝしみておはしましあひて候ぞ。まして殿原などの御身にて、一定僻事にて候はんするに候。たゞ御身ひとつにまづ能々往生をねがひて念佛を勵給て、位高き往生を遂て、いそぎ娑婆に歸りて人をばみちびかせ給へ。加様に委くかき付て申候事も、返々憚思事にて候也。御披露候まじく候。あなかしこく

三月十四日

源空云云

罪惡の凡夫なりとも、専心念佛せば決定して往生すべし。疑なし。これを見これをきかん人、あに疑網をなさんや

### 法然上人傳記卷第六上

#### 上人被下向配所事

愚鈍罪惡の輩偏に上人の化導を憑所に、天魔やきほいけん。南北の碩徳、顯密の法燈、我宗を謗すと號し、或は聖道を妨と稱して、とがを縦横に求むる間、建永二年<sup>丁卯</sup>二月、念佛の行人に下さるゝ宣旨云、顯密兩宗焦丹府而歎息、南北衆徒捧白疏而鬱訟、誠是可謂天魔障遮之結構、寧亦非佛法弘通之怨讎乎云々。遂に上人の門弟等いかなる事かありけん。咎を本師におほせて遠流に處せらる。上人曰、凡往生極樂の一門を開て代に隨ひ機にかうぶらしめて授る中、自邪義をかまへて師説と號する間、せめ一身にかうぶらしめて遙に萬里の波に趣く、但此事をいたむにはあらず。昔教主釋

尊の因行の時、檀施のあまり父の大王にいましめられて、はるか成山にこめられ給ひしか共、其志おこたり給はずして、ますます佛道を修行し給しかば、彼山を釋迦山と名付て終に正覺の庭と成にけり。諸佛菩薩亦復如此、愚老何ぞ衆生をわたさざらんやと。かゝる程に同月廿七日、上人還俗の姓名を給ふ。源元彦云云配所土佐國と定められて、檢非違使小松の御房にむかひて宣下の旨をのべけり。禪定殿下の御計として法性寺の小御堂に逗留、同三月十六日都を出給ふ。信濃國の御家人、角張の成阿みだ佛を棟梁として、惣て我も我もと參勤の人々六十餘人とぞきこえし。此次第を見る人々歎悲みければ、かれをいさめ給ひける詞に云、驛路はこれ大聖の住所也。漢家には一行阿闍梨、日域には役優婆塞、謫所は又權化の栖所也。震旦には白樂天吾朝には菅丞相也。在纏出纏みな火宅也と云云。角張は俗姓もいやしからず。王家をまふり朝敵を平ぐといへ共、本師上人に隨て奴となり僕と成、ちからを盡し

て御興をかく、茶つみ水汲む役をいとはず、身を捨てつかえんとす。爰上人一人の弟子に對して一向專念の義をのべ給に、西阿みだ佛といふ弟子推參して、如此の御義ゆめくあるべからず候。各々御返事を申さるべからずと申ければ、上人曰、汝經釋の文を見ずやと。西阿申さく、經釋の文は然といへども、世間の譏嫌を存する斗也と。上人又云、彌陀の本願は是愚痴暗鈍の輩、罪惡生死の類の出離解脱の直路也。我くびをきらるゝ共、この事をいはずば有べからずとて、御氣色尤至誠也。見奉る人々涙をながして隨喜す。時に信空上人申云、衰邁の御身、遠境の旅にしましゝなば、再會いつをか期せん。音容共に今を限り。所犯なくして流刑の宜をかうぶり給ふ。跡にとゞまる身の爲なこの面かあらんといひて、胸うちて歎息す。上人曰、予齡既に八旬にせまる。たとひ帝京にありとも久しからじ。此時にあたりて邊鄙の群類を化せん事、莫大の利益なるべし。たゞしいたむ所は、源空が興する淨土の

法門は、濁世末代の衆生の決定出離の要道なるが故に守護の天等常隨すらん。我心には遺恨なしといへども彼天等定て冥瞰をいたさんか。若然ば因果のむなしからざる事、いきて世に住せば、思合らるべし。因縁つきずば、何ぞ又今生の再會なからんや。信空上人後に云、先師の詞違はずして其むくひあり。何をもてか知るならば、承久の兵亂に、東夷上都をかるしめ、時の君は西海の島の中にましゝて、多年心をいたましめ臣は東土の道の傍にして、一旦に命を失ふ。先言のしるしある、後生きゝとるべし。凡念佛停廢の沙汰ある毎に凶厲ならずといふ事なし、人みな是をしれり、觀<sup>ク</sup>縷にあたはずと。此事筆端にのせ難しといへども、前事の忘れざる後事の師なりと云をもての故に、世のため人のため憚ながら是を記す

月輪殿被命置光親卿事

月輪禪定殿下と申は、忠仁公十一代の後胤、法性寺殿の御息<sup>號後法性寺殿</sup>、累代の攝録の跡にましますうへ、朝家の

賢政、詩歌の才幹、君是をゆるし給ふに、世これを仰奉る。榮花重職の蒙家にあそび給といへ共、順次往生の眞門に御心をかけて、御出家の後は、數年上人を屈して、淨土の法門を談じ、出離の要道を尋給ふ。上人の頭光をまのあたり拜見し給ひて後は、偏に生身の佛のおもひをなし奉り給ふ。はからざるに勅勘をかうむりて、遙なる西海の波にたゞよひ給ふ。官人小松の御房にまいりて、時日をめぐらさず。いそぎ配所へおもむき給ふべき旨を責申に、禪定殿下此事を聞食より御歡尤ふかし。其故は、去年建永元年三月七日、後京極の攝政殿、俄にさきだゝせ給ひき。本朝にたえて久しく成にける、曲水の宴取行給べき御營み有て、中御門の御亭今更に玉鏡をみがき、風流を盡し、詩歌の題とも諸方へつかはさる。詩人才士の面々に詠吟の外他なし。十日あまりの比、其節を遂行はるべき由聞えけるほどに、七日の夜頓死し給ふ間、くもりなき世の鏡にておはしましつれば、君を初奉りて萬人惜奉らずと云

事なし。禪閣の御歎き申に及ばず。御としわづかに三十八歳にぞ成給ける。此御悲の後は、今生の事は思召捨て、一すちに後生菩提の御いとなみに付ても、上人に常に御對面ありて、生死無常の道理をも具に聞食めされ。往生淨土の行業もいよ／＼功つみて、聊御心も慰み給ふ所に、上人左遷の罪にあたり給事を、いかなる宿業にて、かゝる事を見聞らんと。勅勘蒙り給ふ上人は御歎きなけれ共、只禪閣の御悲み見奉る、餘所までも心のをき所なかりけり。是ほどの御事申もとどめ奉ぬ事、いきて世にあるかひもなけれども、御勘氣の初より左右なく申さんも、そのおそれふかし。連々に御氣色をうかゞひて勅免を申行べし。土佐國迄はあまりに心もとなし。我知行の國なればとて、讃岐の國へうつし奉る。御名殘やとどめがたかりけん禪閣

ふりすてゝ行はわかれのはしなれと

ふみわたすべきことをしぞおもふ

上人御返事には

露の身はこゝかしこにて消ぬとも

こゝろはおなじ花のうてなぞ

後れ前だつならひに候とも、同じ心にこそと懇もしく思ひまいらせ候とぞ申されける。あはれなりし事也。さて其後禪閣日夜朝暮の御歎きの故に、日來の御不食いとゞおもらせ給て、御臨終近づかせ給ける時、藤中納言光親卿をめて仰られけるは、法然上人年來歸依し奉るあり様定て存じすらん。今度の勅勘を申ゆるさずして、遂に謫所へうつし奉る事、生て甲斐なく覺れども、臬惡の輩かやうに申行、逆鱗の誠のがれがたし。事の初に申とても、左右なく御免有がたければ、愼で後日を期する處に、我身早く最後に望めり。今生のうらみ只此事にあり。我他界の後なりと云とも、汝相辯て連々に御氣色をうかゞひて、且はかくとぞ返々申置れて候へと申て勅免を申行べし。其のみぞ心にかゝる事にてあると。能々仰られければ、光親の卿、仰のむね更に如在を存べからず。便宜しかるべく候はん時、

連／＼に天氣を伺候べしとて、涙をおさへて罷出にけり。さて禪定殿下御臨終正念にして、御念佛數十返如入禪定にして同四月五日往生を遂させ給ひぬ。御年五十八、いまだ惜かるべき程の御事也。上人國に下つかせ給て、いくほどもなくて此事をきゝ給て、御念佛日々に廻向し奉り給ふ。一佛淨土誠に憑もしくぞ覺えし

#### 大納言律師配所下向事

上人配所へ趣たまひける同き日に、大納言律師の公全今の二尊院聖僧房湛空也 同く西國へながされ侍りけるが、律師の舟は前に出ければ、上人の下らせ給ふと聞て、暫くおさへて上人の御船にのりうつり、一目見あげ奉りて、上人の御ひさにかしらをかたぶけて、泣哭天をひゞかすといへども、上人は驚給へる氣色おはしませず、念佛してまじ／＼ける。さて律師の舟よりとく／＼と申ければ、本の船に乗うつりけり

#### 被著經島事

攝津國經の島に著し給ければ、村里男女老少まいりあ

つまる事、濱の眞砂の敷をしらず。此島は六波羅の大相國、一千部の法花經を石の面に書寫して、漫々たる波の底にしづむ、鬱々たる魚鱗をすくはんが爲也。安元の寶曆より初て未來際を盡すまで縁をむすぶ人々はいまま石をひろひてぞ向ふなる。鳥羽院の御時の事にや、平等院僧正行尊と申しは、故一條院の御孫、天下無双の有驗高僧にておはしませければ、天王寺の別當に補任せられて、拜堂の爲に下られける時、江口の遊君ども舟を近くよせければ、僧の御船に見ぐるしと申ければ、神歌をうたひ出し侍ける

有漏路より無漏路にかよふ釋迦だにも

羅睺羅が母はありとこそきけ

と、うち出したりければ、さまざまの纏頭し給ひけり。其より後例となりて、天王寺の別當の拜堂には遊君の船をよせて纏頭にぞあづかるなる。又同宿の長者、老病にふして最後の時うたひけるいまやうに、なににして我身の老にけん、思へばいとこそかなしけれ、いまは

西方極樂の、彌陀のちかひを憑べし。と、うたひければ、紫雲蒼海の波にたなびき、蓮花白日の天にふり、音樂近くきこえ、異香ちかくかほりつゝ、往生を遂げるも、此上人の御勸に隨ひ奉るゆへ也ければ、いまま上人に縁をむすび奉らんとて、我おとらじとまゐりあつまりて、おがみ奉けり

被著高砂浦事

播磨國高砂の浦に著給ければ、男女老少群集しける中に、七旬有餘の老翁と、六十有餘の老女と進み出で申けるは、我等は重代この浦の海人なり。幼少より漁を業として、朝夕魚貝の命をたちて渡世の斗とす。まことやらん物の命をころす者は、地獄に落て苦をうくる事隙なきよし傳へ承れば、悲しく侍れ共、此態を離ては身命つき難き故に、敬ながら、此罪業を積事年を経たりし。此罪をのがるゝ計ごと候はゞ、助給へと申て手を合てなきければ、上人あはれみをたれて、極惡最下の人、南無阿彌陀佛と唱て佛の悲願に乗じ、極樂に

往生する趣ねむころにをしへ給て、十念を授られければ、歡喜の涙を流して歸けり、彼二人は年來の夫婦也。上人の仰を承て後は、晝は浦に出て漁をすといへ共、作々の行を事として、口には念佛を唱へ、夜は宅に歸りて二人同く念佛することを隣の人も驚くほどなりけるが、遂に二人共に臨終正念にて、高聲念佛して往生しけるよし、後に人上人に語り申ければ、罪の輕重にはよらず。念佛すれば往生する現證なりとぞ、常には御物語ありけるが、さればとて念佛行者、罪を犯せとにはあらず。所詮、罪は五逆も生るゝと信じて小罪をも恐れよ、念佛は一念に生ると信じて、多念をはげめとぞ仰られける

法然上人傳記卷第六下

被著室津事

同國むろの津に著給ける時、小船一艘近づき來れり。

遊君の船と見ける間、上人の御船より人々しきりに是を制しければ、遊女申云、上人の御船のよし承間、聊申入べき事侍故に推參せるよし、いひもはてず、やがて鼓をならして

くらきよりくらき道にぞ入ぬべき

はるかにてらせ山のはの月

と、兩三度うたひて後、涙にむせびて云事なし。良久く有て申けるは、むかし小松の天皇、八人の姫君を七道に遣して君の名を留め給き。これ遊君の濫觴なり。朝には鏡に向て容顔をかいつくりひ、夕には客に近きて其意をとらかす。念く思ふ所皆是妄念也。歩々に營所、罪業にあらずと云事なし。悲哉渡世の道まぢくなるに、いかなる宿習にてか、此わざをなせる。耻哉、世路の計事品くなるに、いかなる前業にてか此業を積や。今生にはかゝる罪業に深重の身也とも、生をあらため得脱する道あらば助給へと、なくく申ければ。上人哀感して曰、述所、誠に罪障かろからず。

酬報又はかりがたし。過去の宿業によつて、今生の惡身を得たり。現在の惡因にこたへて、當來の惡果を感ぜん事疑なし。若此わざの外に渡世の計略あらば、速に此惡縁を離べし。たとひよの計略なしといふ共、身命を顧みざる志あらば、又此業を捨べし。若又餘の計略もなし、身命を捨る志もなくば、たゞその身ながら、專念佛すべき也。彌陀如來汝がごときの罪人の爲に、弘誓をたて給へる其中に、女人往生の願あり。然則女人はこれ本願の正機也。念佛は是往生の正業也。ふかく信心を發すべし、敢て卑下する事なかれ、罪の輕重をいはず、本願を仰で念佛すれば、いかなる柴の屑、苔の莖なれ共、所をきらはす臨終の夕には、彌陀如來無量の聖衆と共に來りて引攝し給が故に、往生疑ひなきよし仰られければ、遊女歡喜の涙を流し、渴仰の掌を合て歸りける。うしろに發心眞實也、信心堅固也、一定の往生かなとおほせられける。上人歸路の時これを尋られければ、村人等申云、上人御下向の後、則出

家して近き山里に籠居して、他事なく念佛し侍りしがいくほどを經ずして、臨終正念、高聲念佛して往生し侍るよし申ければ、しつらうくとぞ仰られける

塩飽地頭饗應事

三月廿六日、讃岐國塩飽の地頭駿河守高階保遠入道西忍が館に寄宿し給けり。西忍去夜の夢に、満月輪光明赫奕として袂にやどるとみて、不思議のおもひをなす所に、いま上人入御の間、去夜の靈夢しかしながら此事也。かく仰信をいたし、種々にきらめき奉りて、温室をいとのみ、美膳を備へ奉る。志願れてぞ侍める。

上人は念佛往生の理端々授給ひて、自行化他共に一向念佛なるべしとぞ仰られければ、遠近の男女老少に至まで、傳へきく輩皆念佛に歸しけり。誠に世澆季に及で、これほどの上人に生れあひ奉て、化導を傳へ承らんだにも有難かるべきに、可然次に親拜見し奉りて、供養をのぶる事宿縁目出度ぞ侍ける。彼時上人詠じ給ひける

極樂もかくやあるらんあらたのし

はやまいらばや南無みだ佛

善通寺參詣事

讃岐國小松の庄、弘法大師の建立、觀音靈驗の地、生福寺と申寺に付給ぬ。又同じき國、大師父の御爲に、其名をかりて善通寺と云、此寺に詣らん人々は、必ず一佛淨土の友たるべき由侍ければ、今度の悦これにありとて參り給けり

被遣津戸三郎返狀事

上人流刑の事を、津戸三郎ふかく歎存ける餘り、武州より讃岐國へ使者を遣しける時、上人の御返事に云、七月十四日の御消息、八月廿一日に見候ぬ。遙のさかひに、かやうに仰られて候御志申盡すべからず候。誠に然べき事にてかやうに候。とかく申ばかりなく候。但し今生の事は是に付ても、我も人も思知べき事に候。いとひてもいとほんと思召べく候。けふあすとも知り候はぬ身に、かゝる目を見候、心うき事にて候へども

さればこそ穢土のならひにては候へ。只とくく往生をせばやとこそ思ひ候へ。誰も是を遺恨の事などゆめにも不可思召候。然べき身の宿報と申、又穢惡充滿のさかひ、是に初めぬ事にて候へば、何事に付ても只急々往生をせんと思べき事に候。あなかしこく

八月廿四日

源空判云云

後世を思ひ往生を願はん人は、上人の仰のごとく、今生にはたとひいかなるふかき恨あり共、更に其人のとながになし。遺恨を含む事なかれ。只偏に娑婆世界の習ぞと、造付たる穢土のとがに思なして、やがて其を厭離穢土のたよりとして、欣求淨土のおもひをますべきもの也

在國の間念佛弘通事

上人在國の間、無常の理をとき念佛の行を勸給ひければ、當國他國、近里遠村、道俗男女、貴賤上下群參する事盛なる市をなす。法然上人の化導によりて、或は自力難行の執情をすて、或は邪見放逸の振舞をあらた

めて、念佛往生を遂る人多かりければ、洛陽の月卿雲客の歸依は年久敷、邊鄙の田夫野人の化導は日淺し、是則年來の本懐なりしか共、時いまだいたらざれば、思ながら年月を送る所に、此時年來の本意を遂ぬる事併朝恩也とぞ仰られける

一念義停止事

山門の西塔南谷の住侶に、金本坊の少輔とて聰敏の學生也けるが、最愛の兒に送られて交衆倦かりければ、三十六の歳、遁世して上人の弟子となり、念佛門に入て成覺坊と申けるが、天台宗にひきいれて、迹門の彌陀本門の彌陀を立て、十劫正覺といへるは、迹門の彌陀也。本門の彌陀は無始本覺の如來なるが故、彌陀と我等と全く差異なし。此謂をきく一念に事足ぬ。多念の數返甚無益なりといひて、一念義と云事を自立しけるを、上人彌陀の本願は極重最下の惡人を切け、愚癡淺識の諸機を救はんが爲なれば、一形にはげみ念々に捨ざる是正意也。無行の一念義をたて、多念の數返を妨

けん事不可然と仰られけるを承引せず、猶此義を興じければ、我弟子には非ずと棄置せられけり。兵部卿三位基親卿は、ふかく上人勸進の旨を信じて、毎日五萬返の敷返をせられけるを、成覺坊一念義をもて、彼卿の敷返を難じければ重々の問答を致し、存知の旨を記録して上人に尋申されける狀に、念佛の敷返並に本願を信する様、愚案如是候。難者謂なく候へ共、若御存知の旨候はゞ、御自筆をもて書給べく候。別解別學の人にて候はゞ、耳にも聞入べからず候に、御弟子等の説に候へば、不審をなし候也云云。取 事長きによりて問答の記録これを略す。上人の御返事に云、仰の旨謹て承り候畢。御信をとらしむる様折紙に具に拜見候に一分も愚意の所存に違せず候。ふかく隨喜し奉り候也。近來一念の外敷返無益なりと申義出來候。勿論不足言の事候歟。文釋を離て義を申人、若既に證を得候か、尤不審に候。附佛法の外道ほかに求むべからず。天魔競來て如此の狂言出來候歟、猶々左右に能はず候云云。

取 爰上人配國の後、成覺坊の弟子善心坊といへる僧、詮 越後國にして專此一念義を立けるを、光明坊といへるもの不心得事に思て、承元三年夏の比、消息をもて上人に尋申けるに付て、配所にてかゝれたる一念義停止の狀に云、當世念佛門に趣く行人、その中おほく無智誑惑の輩あり。いまだ一宗の廢立をしらず一法の名目に及ばず、心に道心なく身に利益をもとむ。これによりて恣に妄語を構て諸人を迷亂す、偏にこれを渡世の斗として、全く來生の罪をかへり見す。かたましく一念の偽法をひろめて、無行の過を謝し、あまさへ無念の新義を立て、猶一稱の小行を失ふ。微善也といへ共善根において跡をけづり、重罪也といへ共、罪障においていよく勢をます。刹那五欲の樂を受けんが爲に永劫三途の業をおそれず。人を教示しても、彌陀の願を憑むものは五逆を捨る事なし。心に任てこれをつくれ、袈裟を著すべからず。宜しく直垂を着、姪肉を斷べからず、恣に鹿鳥を食べしと云云。弘法大師異生類

羊心を釋して言、たゞ姪食を思ふ事、彼抵羊の如しと云云。彼輩たゞ欲にふけること偏に彼類歟。十住心中の三惡道の心也、誰か是を哀まさらむや。たゞ餘教を妨のみに非ず、返て念佛の行をうしなふ。懈怠無慚の業を勸て、捨戒還俗の義を示す。これ本朝には外道なし、是既に天魔の構へ也。佛法を破滅し世人を惑亂す。此教訓にしたがはん者は、癡鈍のいたす所也。いまだ教文を學せずといふ共、誠あらん人何ぞこれを信すべきや。善導和尚の觀念法門には、唯深持戒念佛すとの給へり。和尚の弟子三昧發得の懷感法師の群疑論には、都率を志求せん者は、西方の行人を毀ことなかれ。西方に生れんと欣はん者は、都率の業を毀ことなかれ。各性欲に隨て、情にまかせて修し學すべしと釋し給へり。安養の行人もし此教に隨はんと思はんものは、祖師の跡を逐て隨分に戒品を守り、衆惡をつくらず、餘教を妨ず、餘行を輕しむる事なかれ。惣じて佛法におひて恭敬心をなし、更に三萬六萬の念佛を修し

て、五門九品の淨土を期すべし。しかるを近日北陸道の中に一の誑法の者あり。妄語を構て云、法然上人の七萬返の念佛は、たゞこれ外の方便なり、内に實義あり、人いまだ是を知らず。所謂心に彌陀の本願をしれば、身かならず極樂に往生す。淨土の業こゝに満足しぬ。此上何ぞ一返也といふ共、重て名號を唱べきや。彼上人の禪坊において、門人等廿人ありて、秘義を談ぜしに、淺智の類は性鈍にしていまださとらず。利根の輩わづかに五人、此深法を得たり、我其一人也。彼上人の己心中の奧義也、容易にこれを授けず、器を擇て傳授せしむべしと云々。風聞の説實ならば皆以虛言也。迷者を哀れまんが爲に誓言をたつ。貧道これを秘して、僞て此旨をのべ不實の事をしるさば、十方の三寶正に知見をたれ、毎日七萬返の念佛むなく其利益を失はん。圓頓行者の初より實相を緣する、猶六度萬行を修して無生忍にいたる、いづれの法か行なくして證をうるや。乞願は、此疑網に墮せん類ひ邪見の稠林

を切て正直の心地をみがき、將來の鐵城を遁て終焉の金盞にのぼれ。胡國程遠し、思を雁札に通す。北陸境遙なり、心を像教にひらけ、山川雲重て、面を千萬里の月にへだつとも、化導縁あつく、ひざを一佛土の風にちかづけん。誑惑の輩いまだ半卷の書をよまず、一句の法をうけず、むなしく弟子と號する甚其謂なし。己が身に智徳かけて、人をして信用せしめんが爲に、恣に外道の法を説て師匠の教として、或は自稱して弘願門と名付、或は心に任て謀書を造て念佛要文集と號す。此書の中に初て僞經を作て、新に證據にそなふ。念佛祕密經是也。花嚴等の大乘の中に、本經になき所の文を作て云、諸善を作べからず、只專修一念を勤むべしと。彼書いま花夷に流布す。智者見ると云とも是嗤なるべし。愚人是を信受する事なかれ、如此の謀書前代にもいまだきかず。猶如來におひて妄語を寄す。況や凡夫において虚言を與へんをや。此猛惡の性、一をもて萬を祭すべき者也。是癡闇の輩也、いまだ邪見

とするに及ばず、誑惑の類也、名利の爲に他をあやまつ。抑貧道山學の昔より、五十年の間廣く諸宗の章疏を披閱して、叡岳になき所をば是を他門に尋て必ず一見を遂ぐ。讚仰年積て聖教殆盡す。加之、或は一夏の間四修を修し、或は九旬の中に六時懺法を行す。年來長齋にして顯密の諸行を修練しき。身既に病老してのち念佛をつとむ。今稱名の一門につゐて易往の淨土を期すといへ共、なを他宗の教文におひて悉く敬重をなす。況や、もとより貴ぶ所の眞言止觀をや。本山黒谷の法藏に傳持する、闕する所の聖教をば書寫してこれを補す。然を新發道意の侶、愚闇後來の客いまだその往昔をみず、此深奥をしらず、僅に念佛の行義をきいて、猥しく偏愚の邪執をなす。嗚呼哀哉、傷べし悲べし、有智の人は是を見て旨を達せよ。其趣粗先年の比記す所の七箇條の教誡の文に載たり。子細端多、毛舉不能而已 承元三年六月十九日 沙門源空云云

安養欣求の行人は、無行の一念義を捨て、多念の數返

をたしなむべき條、上人の制禁既に明也。敢て違犯すべからず。但し歎くらくは、上人の在世猶以邪見の惡義如此。何況や、上人滅後年久し、面受口決の門弟等みなもて往生し給ひぬ。此後の惡義邪義は。恐る所なく憚所なからん歟。今は又誰の人か是をいましめ、是をあらためんや。歎べし悲べし、流を汲て源を尋ぬる謂也。我も人も我執なく偏執なく、只上人勸進の旨を信じて、多念のはげみ畢命を期とすべきもの也

## 法然上人傳記卷第七上

### 上人歸京事

上人下國の後、念佛の弘通隣國に充滿しければ、可然宿善なりと、國中の貴賤悦びあへりける程に、月輪殿最後の時に至るまで、返々仰置し旨をもて光親卿連々に御氣色を伺けるに、諸卿また諫言を奉られければ、彌陀本願のねん佛をすゝむる事尤至要なり。爰に諸宗

の學者、吹毛の咎を求る所に、弟子等があやまりを本師におはせて、邊鄙にくちけん事、冥鑑の憚あるよしを申合れければ、同じき年承元元年の比八月、龍顔事の外にやはらぎて、鳳詔ほどなく下されける。彼勅免の宣下の狀云

右大辨下 土佐國

應阜召還流人源元彦身事

右件元彦、去建永二年二月廿七日、坐喜配流土佐國、而今依有所念行、所被召還也。者、某宣奉勅、件人令召還者、國宣承知依宣行之

承元元年八月日左大史小槻宿禰國宗

國宗宣下の狀、國に到來しければ、門弟は歸洛を悦び士民は餘波を惜む。此時稱名の聲いよ／＼高くして、五須彌山にも至ぬべし。信心の思ひますますいさぎよくして、八功德池にもすまざらんをや。上人やがて國を立て、のぼりたまふ。上人いそぎ都へも入たまはず攝津國勝尾寺勝如上人往生の地、いみじく覺て暫くお

はしければ、花夷の道俗貴賤以下羣集しけり。此寺に恒例の念佛取行ける時、衣装見ぐるしかりければ、弟子信空上人に件の子細を示つかはされて、ほどなく裝束十五具調て持參せられけり。住侶等感に絶ず、臨時に七日の念佛勤行し侍りけり。抑勝尾寺は善仲善算兩上人、如化人行ぜられき。證道上人の弟子として、勝如上人、此所に住して往生を遂られけり。當時開闢のむかし、開成皇子、金字の大般若を書寫し給ひしに、八幡大菩薩夢の中に黄金をあたへて、大願をとげられし。供養の時、山中の草木ことごとくなびきし中に、翠松古木なを西の谷にあり。今彼谷を上人に施入のあいだ、住所と定給へり

## 一切經施入事

當寺に一切經ましまさるよし、きこえければ、上人所持の經論をわたし給ふに、住侶等各悅をなして、花を散じ香をたき、蓋をさして迎奉る

## 聖覺法印一切經讚談事

住僧等隨喜悅豫して、聖覺法印を屈して唱導として開題讚談の其語に云

夫八萬の法藏は八萬の衆類をみちびき、一實眞如は一向專稱をあらはす。彼大聖世尊の自説して南無佛と唱へ給へる、その名をあらわさずといへども、心は彌陀の名號也。又上宮太子の誕生して南無佛と唱へ給へる其體を萌すといへ共、志は極樂の教主也。然るに慈覺大師の念佛傳燈は、經の文を引て寶池の波に和すれども、劣機行するにあたはず。諸師所立の念佛三昧は、佛境を縁として心地の塵をはらへども、下根の勤にあたはず。恵心僧都の要集には、二道を造て一心のものはまよひぬべし。永觀律師の十因には、十門をひらきて一篇につかず。空也上人の高聲念佛は、聞名の益をあまねくすれども、名號の徳をばあらはさず。良忍上人融通念佛は、神祇眞道をば勸給へども、凡夫の望はうとし。爰に我大師法主上人、行年四十三より念佛門に入て普く弘たまふに、天子のいつくしき玉の冠を西

にかたぶけ、月卿のかしこき金笏を東に正しくす。皇后のこびたる草提希夫人の跡をおい、傾城のことなき五百侍女の儀をまなぶ。然る間富るはおごりてあそび、貧はなげきて友とす。農夫の鋤をふむ、念佛をもてたがやすとし、織女が糸をひく、念佛をもて經緯とす。鈴をならす驛路には、念佛を唱へて鳥をとり、船ばたをたく海上には、念佛を唱へて魚をつる。雪月花を見る人は、西樓に目をかけ、琴詩酒を翫ぶ輩は、西の枝の梨をおる。是皆彌陀をあがめざるをば瓊瑾とし、珠敷をくらざるをば恥辱とす。爰をもつて花族英才といへども、念佛せざるをばおとしめ、乞丐非人といへども念佛するをばもてなす。故に八功德池の波の上には、念佛の蓮池にみち、三尊來迎の窓の内には、紫葢をさしおくひまなし。然れば我等が念佛せざるは彼池の荒廢なり、我等が欣求せざるは、其國の衰弊也。國のにぎはひ、佛のたのしみ、念佛をもて本とし、人のねがひ我のぞみ、念佛をもて先とす。仍當座の愚昧

公請につかへてかへる夜は、念佛を唱て枕とし、私慮を出て趣日は極樂を念じて車をはす、これ上人の教誡也、過去の宿善にあらずやとて、鼻をかみ音をむせび舌をまいて、とどこほる間、法主涙をながし、聽衆袖をしぼりて、ことごとく念佛門に入て、併上人の勸に隨ふ。誠に是宿善の至り、愚なる心、短なる舌にて述べきにあらず

#### 宇津宮入道參上事

宇津宮三郎入道は、實信房蓮生と法名をつけ、出家の形也といへども、いまだ念佛往生の道を知らず。熊谷入道の勸によりて、大番役勤仕の時、勝尾寺へまいりて、上人の見參に入れるに、念佛往生の旨を授られて後、上人曰けるは、上來雖說定散兩門之益、望佛本願意在衆生、一向專稱彌陀佛名と判じて、一切善惡の凡夫、口稱念佛によりて無漏の報土に往生する事、善導和尚彌陀の化身として、かやうに釋し給へる上は、此度の往生は入道殿の心なるべしと被仰ければ、ふかく

本願に歸して上人御往生の後、御門弟の中には、誰人にか不審をも尋申べく候らんと申けるに、善惠房といへる僧に相尋べしと仰られければ、やがて見參に入候ばやと申けるに、淨土宗の學者も餘學を知らるはいふかひなき事なれば、太子の御墓に願蓮房といへる天台宗の人に、學問せよとて遣したる也と仰られければ、幸に天王寺參詣の心ざしも候へば、御文を給はり候はんとて、上人の御文をたまはりて、太子の御墓へまいり、善惠上人の見參に入て、上人御往生の後も、二なく憑み申けり。西山吉峯といふ所に、庵堂を結て他事なく念佛しけるに、正元元年十一月十二日臨終の用心たがふ事なく、念佛相續して種々の靈異を施し、耳目をおどろかす程の往生をぞとげき

上人入洛事

勝尾寺の隱居の後、烏頭變毛の宣下をかうぶり、はやく花洛に還歸すべきよし、建曆元年十一月十七日藤中納言光雅卿の奉にて、院宣を下されけるに付て上人歸

洛ありければ、一山徳をしたひ満寺はらはたをたちて萬仞の霞より出で、九重の雲にぞ送りける

上人被著大谷禪房事

同月廿日上人既に入洛ありければ、慈鎮和尚の御沙汰として大谷の禪房に居住せしめ給ふ。昔釋尊上天の雲よりくだり給ひしかば、人天大會まづ拜見し奉らん事をあらそひ、今上人南海をさかのぼりたまへば、道俗男女さきに供養をのべん事をいとなむ。羣參の輩一夜の中に一千餘人と聞えき。幽閑の地を卜給といへども人の集る事盛なる市のごとし

雲客夢の事

上人入洛の後、ある雲客の夢に上人内裏へ參せられけるに、天童四人雲にのぼりて管絃を奏し、天蓋を指覆ひ奉るとみて夢覺て聞に、上人參内し給へりと云、不思議なりし事也

## 法然上人傳記卷第七下

### 老病事

建曆二年<sup>壬申</sup>正月二日より、上人老病のうへに日來の不食殊に増氣あり。凡此兩三年は耳不聞、目不見ましましつるが、更に昔のごとく明かに成て、念佛常よりも増盛也。睡眠の時も念佛の唇舌鎮へに動く、見る人奇特の思ひをなす。同三日戌の時病床の傍なる人々、御往生の實不を問奉りければ、我もと天竺國に在し時は聲聞僧に交て頭陀を行じき。いま日本にしては、天台宗に入て一代の教法を學し、又念佛門に入て衆生を利す。我もと居せし所なれば、さだめて極樂へ歸り行べしと仰られければ、勢觀上人申さく、先年も此仰侍りき。抑聲聞僧とは佛弟子の中には何哉と申し時、舍利弗也と答給ふ。又信空上人云、古來の先德皆遺跡あり而に今一字建立の精舎なし、御入滅の後何の所をもてか御遺跡とすべきと。上人答て、遺跡は一廟を卜れば遺法周ねからず、予が遺跡は諸州にあるべし。其故は

念佛三昧の興行は愚老一期の勸化也、賤男賤女の柴の戸細、海人漁人の葦の苫屋に至るまで、念佛を修せん砌は、皆是我遺跡なるべしとぞ仰られける

### 高聲念佛事

同十一日辰の尅に上人起居たまひて、西にむかひて高聲に念佛し玉ふに、聞人皆涙をながす。門弟等に告て曰、高聲に念佛すべし、此名號を唱るもの、一人もむなしからず皆往生すべき也。高聲念佛を勸て、念佛の功德を種々に讚談し給ひて、觀音勢至等の菩薩聖衆現前し玉へり。各々拜し奉らずやと仰られけるに、弟子等拜せざるよしを申せば、いよいよ念佛を勧め給ふ。其後臨終佛のために、三尺の阿彌陀の像を病床の砌に迎奉りて、此佛を拜し給へと申時、上人指をもて空をさして曰、此佛の外に又佛まします。拜むやいなや。凡十餘年より已來、念佛の功積て、極樂の莊嚴および佛菩薩の眞身拜する事常の事也。然るに年來は祕していはす。今最後に望める故に示所也と。又佛の御手に

五色の糸を付て取給ふべきよし申時、上人曰、如斯の事は大様の事也。但衆生のためには取べし

## 紫雲坊の上に垂布事

同廿日巳の時に、紫雲坊の上に垂布せり。中に圓形の雲有、圓繪の形像の圓光のごとくにして、五色鮮潔也。路次往返の人、所々にして是を見る。此瑞相は御往生の近づき給へるなるべしと人々申けるを上人聞給ひて曰、紫雲は衆生の信をまささんためなり。命終は只今にあらず、善哉々、我往生は唯一切衆生をして、念佛を信ぜしめ、極樂に引接せんがため也と。未の時にいたりて目を開て、西方を見送り給ふ事五六度に及ぶ間佛の來り給ふかと看病の人々問奉れば、然なりと答給ふ。其日より念佛彌々懇なり

## 章提希夫人事

同廿二日、看病の人々或は休息し、或は白地に立出て折節勢觀上人たゞ一人看病し給ふ時に、氣高く氣よげなる女房の、車にのりて來臨して、上人の見參に入べ

きよしを申されける。但僧衆をのけらるべしとあれば勢觀上人は、立のき給ひながら、あたりちかく退けるに、此女房申されけるは、いかにくるしく思召侍るらん、此事をのみ申つる也、この藥を用給べしとて、藥を奉らる。また淨土の法門はいかに御定め侍るぞと申されければ、選擇集といふ文をつくりて候へば、此文に違はず申侍らん。連々源空が義なるべしと返答せられければ、さては目出候とて、數御物語ありてかへられぬ。此時に勢觀上人あやしみて見送り給ふに、川原へ出、上へ向て上られけるが、忽然として見え給はざりければ、歸りて上人に尋申されけるに、其こそ章提希夫人よと仰られけり。いづくにおはしまし候ぞと重て申けるに、賀茂の邊にとぞ答たまひける。賀茂の大明神の本地を知る人なし、而に今の仰のごときは、計知賀茂の大明神は章提希夫人也と云ふ事を。さて勢觀上人いよく信ふかくして、御形見に念佛の安心の肝要を一筆給らんと申されければ、御自筆に注し給せ

ける状にいはく、もろこし我朝に諸の智者達の沙汰し申さるゝ觀念の念にもあらず、また學問をして念の心をさとりて申念佛にもあらず。たゞ往生極樂のために南無阿彌陀佛と申て、疑なく往生するぞと、思ひとりて申外には別の子細候はず。但三心四修など申事の候は、みな決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞとおもふうちにこもりて候也。此ほか奥ふかき事を存せば、二尊の御あはれみにはづれ、本願にもれ候べし。念佛を信ぜん人は、たとひ一代の御法を能々學すとも、一文不知の愚鈍の身にして尼入道の無智の輩に同して、智者の振廻をせずして、たゞ一向に念佛すべしとぞ。勢觀上人敢て披露せず、一期の間、頸にかけて祕藏せられけるを、年來師檀の契淺からざりける、川合の法眼にかたり聞えけるを、懇切に望申ければ、授られてより以來、世間に披露して、上人の一枚消息と云へるもの也

### 上人御往生事

#### 卷 第 七 下

同廿三日紫雲また來現す。廿四日午の尅紫雲又大にたなびく。西山の炭燒十餘人是を見て來て來たる。また廣隆寺より下向の尼、路次にて是をみて來て告ぐ。上人は高聲不退の上、殊に廿四日の酉の刻より廿五日の巳の時に至るまでは、高聲念佛體をせめて無間なり。門弟等五六人づゝ番々に助音するに、助音の人々は自聲をほのかにすといへ共、衰邁病惱の上人の音聲は、虛空法界にもひゞくらんと聞ゆ。誠に熾盛の御ありさま、見る人なみだをながさぬはなし。廿五日の午の刻に至ては、念佛のこゑやうやくかすかにして、高聲は時々相まじはる。既に最後に臨ければ、年來所持の慈覺大師の九條の袈裟を著し、頭北面西にふし給ふ。門弟等申て曰、只今まで端坐念佛し給へるに、命終の時に至りて臥給ふ事いかゞ。上人微笑して曰、我今此故を述と思ふ。汝等よく問へり、われ身を娑婆に宿す事は、淨土の徑路をひらかんがため、今神を極樂にかへす事は、往生の軌心をしめさんがためなり。我もし端

坐せば人定て是を擧げんか。若然ば病の身起居輒からじ、おそらくは正念を失ひてん。此義をもての故に、我今平臥せり。端坐叶はざるにあらず。本師釋尊すでに頭北面西にして滅を唱へ給ふ、是また衆生のため也。我いかでか釋尊にまさるべきと。頭北面西にして、光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨と唱へ、念佛數返の後、眠がごとくして息絶給ひぬ。一の息とゞまるといへども、兩眼まじろぐがごとく、手足ひえたりといへども、唇舌を動かす事十餘返。行年四十三より毎日七萬返の念佛遂に退轉なし。春秋滿八十、夏臘六十六三春いかなる節ぞ、釋尊滅度を唱へ、上人滅度を唱へ給ふ、彼は二月中旬の五日、是は正月下旬の五日なり。八旬いかなる年ぞ、釋尊圓寂に歸し、上人圓寂に歸し給ふ。かれも八十歳也、これも八十歳也。情是を思ふに旬月同く、年齢ひとしきのみにあらず。支干を計ばまた壬申の年に當れり。皆是釋尊の化縁にひとし。定めて自然の事にあらざんものか

## 諸人夢想事

四四〇

參議兼隆卿、今日よりさき七八年の當初、權右辨なりし時、上人往生の時は光明遍照の四句の偈を唱へ給ふべしと、夢に見給ひけるが、上人にも申さず、弟子にも語らず、只注し置て年序を経けるほどに、上人此文を唱て往生し玉へる間、奇特の思ひをなして、注し送られる夢の記に云、人有て大帖の双紙をひろげて見る間、何文ぞと見れば、諸の往生人を記せる書也。次第に是を引見るに、奥に至て記して云、光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨、法然上人臨終に此文を誦して、往生をとげらるべしと記せりと見て覺ぬと云云。昔の夢、今の往生、宛もたがふ事なし。誰か歸信せざらんや。加之上人往生の前後に當りて、諸人靈夢を注し送る事不可勝斗。暫く略して是をいはゞ四條京極の薄師眞晴、同正月十九日の夜の夢に云、東山法然上人の禪房の上に、一片の聚雲聳けり、是は往生の雲也と云て、諸人羣集しておがむと見て覺ぬ。翌日廿日の

巳の時に紫雲彼坊の上に垂布せり、諸人所々にして是をみる。今の夢と符合せり。三條小川の陪臣信賢が後家尼の養女、同き廿四日夜の夢にいはく、上人へ参じたれば、上人の曰、我は明日往生すべきよし、若今夜來らざらましかば、又對面せざらましと仰らると見て覺ぬ。はたして廿五日に往生し給へり。花園准後の女房三河の局、同き廿四日夜の夢に云、上人の住房をみれば、四壁に錦の帳を垂たり。色光甚鮮にして煙また充滿せり。能々是を見れば、煙にはあらず、紫雲也。上人既に往生し給へるかと思ひて覺ぬ。廿五日の早旦に順西法印に語る。即當日午の刻に往生し給へり。仁和寺の尼西妙本關東也同廿四日の夜の夢に云、圓繪の善導の御影のごくなる上人來て、法然上人は明日午の刻に往生し給ふべし、はやく行て是をおがめと告給ふと見て覺ぬ。仍夢の虚實をしらんがために、廿五日の朝上人へまいりて夜の夢を語る。午の刻に至て往生したまへり。八幡の住人馬允源時廣が子息金剛丸、于時十歳也

同廿四日の夜の夢に云、西に渺々たる曠野あり、曠野の西に海あり、海の上空の中に雲あり、皆人これを紫雲といふ。雲の上に阿彌陀の三尊おはします、光明てりかゞやきて音楽妙にして、西より東に來る。墨染の衣を著せる僧ありて、岸の上に立り、觀音蓮臺をさゞげて、此僧をのせて漸々西へさる。人多く群集して、是を法然上人の往生也と云て、おがむと見て覺む。其後朝に此夢をかたる。申の時に至りて、上人往生のよし、八幡へ聞えけり、廿五日上人往生の時、群集せる道俗の中に、ある人語て云、一昨夜廿三夢に上人來りて明後日午の時に往生を遂べしと、告給へる間、此夢に驚きて、實否を決せんがために、まいれる也と。また或人語りて云、昨夜廿四夢に上人來りて、我は明日午の時に往生すべしとつけ給へるあいだ、此夢に驚きて來臨するなりと。東山一切經の谷の住僧、大進房が弟子袈裟王丸十六歳也同廿五日の夜の夢に、東西にわたりて、すぐにとをりたる大路あり。白きすなの清潔なる

上に、新に筵をしけり。見物左右に濟々たり。何事ぞとみれば、天童二人、玉の幡をさして西へ行、其うしろに法服を著たる僧衆千萬ありて、左の手には香爐を持、右の手には袈裟の端を取りて、おなじく行。問云是は誰人のおはずぞと、人答云、往生人也と。又問云往生人とは誰ぞと、答いはく、大谷の法然上人也と、申と見てさめぬ。上人の大谷の禪房の東の崖の上に、一面の平地有、去る建曆元年十二月に、彼領を上人に是を施入す。彼地の北に一の松房有、其房に寄宿せる尼、先年の頃、夢に此南の地に、天童行道すとみる。亦其房主去年十一月十五日の夜の夢に、此南の地に青蓮花開敷して、金光照耀すと見る。また此房の隣家にひとりの女人有、去年十二月の夢に此南地に色々の蓮花開敷せり、花各々光をさして異香甚香ばしとみる。清水寺に一人の僧あり。去年十二月九日の夜の夢に、此地に夜叉等群集して地をひく、礎の下に地神ありて此礎を頂戴すと見る。此輩如斯種々の靈夢を感ずとい

へども、あへて披瀝に及ばず。今年建曆二年二月十日彼地に上人の廟墳を點し穴を掘る時、驚き來て夢を語り、これを記して送る。隆寛律師、上人入滅の後、初七日に當て晝夜の念佛をする夜の夢に僧來てつけて曰上人は往生傳に入給へるをば知るや否と。律師のいはく誰人のいかなる傳ぞと。彼僧指をさして、前にある書をさすとみて覺て後、指所を見れば、善導の觀經の疏也。上人此書に付て、念佛往生をひろめ給へり。而に今此書を上人の往生傳とする事、誠に隨喜極りなし。惟方別當入道の女の禪尼、同二月十三日の夜の夢に云上人の御葬送は清水寺の塔の中に入給ぬと見て後、一兩日を経て、また夢に隣房の人いはく、御葬送に逢ざる遺恨のよし申に、御葬送の所へまいり給へ。同事也と云あいだ、彼所へ参りたれば、八幡宮の御戸ひらくと覺る所に、御正體其内におはします間、是は上人の御葬送にはあらず、八幡宮の御體也と申に、隣人御正體をさして、是こそ上人の御躰よと云、是を聞て身の

毛いよだちて、汗をながして夢覺ぬといふ。神功皇后元年<sup>辛巳</sup>大菩薩御誕生の時、八の幡ふるゆへに八幡大菩薩と號す。今上人御誕生の時、此幡ふれり。彼夢想思合さるゝもの也。抑眞道上人大菩薩の本地を祈請し給ひし時に、昔於靈鷲山說妙法華經、今在正宮中示現大菩薩。行教和尚大菩薩の本地を祈願せし袂のうへには阿彌陀の三尊移り給き。垂迹を申せば、昔は雁とあらはれ、今は鳩と現じ給ふ。雁鳩變じやすし。釋迦彌陀如斯、娑婆にしては釋尊、安養にしては彌陀、只これ一體分身更に疑ふ事なかれ。又上人在世の間、諸人の靈夢是多し。證をとりて是をいはゞ、ある人の夢には上人釋迦如來也と見る。或人の夢には上人と眞如堂の彌陀とは一體分身也とみる。或人の夢には大勢至菩薩也と見る。或人の夢には阿彌陀の右脇に坐し給へる人也とみる。或人の夢には道綽禪師也と見る。或人の夢には善導和尚也とみる。或人の夢には上人大なる赤蓮花に坐して念佛し給ふと見る。或人の夢には武者

洛中に充滿して、鬪諍堅固也といへども、上人住房には此事なし。是則念佛する故也と見る。或人の夢には上人住房を見れば、瑠璃をもてつくりて照耀すきとをりて、即瑠璃の桶をわたせるとみる。凡此夢ども言語の及ぶ所にあらず。此ほか在世といひ滅後といひ、靈夢を感じる人勝計すべからずといへども、しげきによりて具にはのせず。抑夢の境をたづぬれば、虚實に通じて二義あり。凡そ五の因縁ありといへども、いまだ必しも虚無の事にあらず。彼枳里記王の十夢は皆釋尊の遺法を表し、寶海梵士の一夢はまさしく未來の成佛を示す。いはんや誠に一乘を行すれば、夢に八相を唱ふ。先規分明なり。いまの義眞實なるべし、何をもちか知るとならば、諸人の夢たがはずして萬端の瑞を施したまひ、つひに光明遍照の文を誦して、まさしく往生極樂の願をはたし給へる故也。然則後々將來見聞道俗の中に、疑者は疑をたち、信者は信をまして、上人のおしへをたがはず精勤修行せば、順次にかならず極

樂界に生れて上人を奉覲し、彼加被をうけて有縁を救はん事、掌をさして疑ふべからず。我も人も一心一向の思ひに住して、善人も悪人も専修專念の行を立て、唯畢命を期とすべき也。さて門弟等釋尊の遺誡にまかせて、遺骨をおさめ中陰をいとむ

### 法然上人傳記卷第八上

追善事

初七日 不動尊

御導師信蓮房

大宮入道内大臣家實宗御諷誦文云

夫以、先師在世之昔、弟子遁朝之夕、擬一心精誠受十重禁戒、故懇濟度於彼岸、敬修諷誦於此砌、莫嫌小善根必爲大因緣、仍爲飾蓮臺之妙果、早叩鐘鐘之逸韻矣

別當前因幡守源朝臣盛親敬白

二七日 普賢菩薩

御導師求佛房

願主可尋之

三七日 彌勒菩薩

御導師住眞房

末弟湛空法師、捧誦經物、唐朝王羲之摺本、一紙面十二行、八十餘字書之

にしへよし行べきみちのしるべせよ

むかしも鳥のあととありけり

四七日

聖觀音

御導師法蓮房

弟子良清願文云

先師當末法萬年之始、弘彌陀一教之際、智惠提劍、莫耶之鋒非利、戒行瑩珠、摩尼之光比明、抑尊靈先逝川去四七日、遠人望來迎之雲、就新墳來兩三度、遺弟聞酷烈之香、情思誠諦之言、雖請菩提之揭焉、旨意彌以伏膺云云

五七日

地藏菩薩

御導師權律師隆寛

弟子源智願文

彩雲掩軒、近見遠見而來集、異香滿室、我聞人聞而嗟矣

六七日

釋迦如來

御導師法印聖覺

慈鎮和尚御諷誦文云

佛子、上人存日之間、談法文常用唱導結緣之思不淺、濟度之契如深、因茲當六七日忌辰、聊修諷誦、三鳴花鐘、擎法衣送往生家、解脫衣也。設法食至化城之門、禪悅食是也。然則幽靈答彼平生之願、必生上品之蓮臺、佛子因此國實之思、早得最初之引接矣。

別當法印大和尚位慈圓敬白

是草案、清書ともに和尚の御筆也。大師嫡々の正統として山門の眞實の一流、祕業をつたへ奥義を極め給しか共、常に上人に御對面ありて、本願の旨趣をとぶらひ、極樂の往生を願ましゝける。稱名の薰修猶日あさく、光陰の運轉時うつりぬとやおぼしめされけん極樂にまた我こゝろゆきつかず

ひつじのあゆみしばしとゞまれ

とぞ詠じましゝける。又日吉社に百日御參籠の百首の御詠のおくに

人を見るも我身を見るもこはいかに

南無阿彌陀佛

とあそばされけるに、浮世をかくる御志ふかく、淨刹にそめる思食あさからさりし御事、偏に上人の恩徳也ければ、没後の追致に至るまでなをさりならず七々日兩界曼陀羅  
阿彌陀如來御導師三井僧正公胤

法弟子信空願文云

先師廿五歳之昔、十二歳之時、忝結師資之約契、久積五十之年序、一日隔生死、九迴腸欲斷。自宿叡山黒谷之草庵、至移東都白川之禪房、其間云撫育之恩、云提撕之志、報謝之思、昊天罔極。是以顯彌陀迎接一軀之尊像、安胎藏金剛兩部之種子、摺寫妙法花書、寫金光明經各一部開題開眼、一心懇志、三寶知見

公胤僧正、三卷の書を造て上人所造の選擇を破す。是を淨土決疑抄と名付、而に順徳院御處胎の時、僧正は加持の爲に參じ、上人は説戒の爲にめさる。奉行遅參の間、不慮の外に一所に會合して、淨土の法門を談じ又餘宗にわたる。然ば彼僧正ふかく上人に歸して、白川の房に歸りて、即決疑抄を火焰になげて誹謗の語忽

に灰爐となりき。然れ共なを前をかなしむ涙おさへがたく後悔をいたす、腸たちやすし。仍彼の談他の過失をもて、念々の誹謗つもりしかば、其罪障懺悔の爲に種々の達嚙をさくげたまひ、あまさへ中陰の唱導を望み、上品の託生を啓せられけり。凡此間佛事の替み、諷誦を行入々敷を知らず。さて遂に上人の墳墓を大谷の禪房の東に建立しければ、毎月廿五日はかの御報恩の爲に、上下羣集しけり。同三月十四日の夜或獨女人夢に上人の廟墳にまいりたれば、其庭に色々の蓮花生ぜり。僧ありて常の持蓮花のごとくなる、未敷の蓮花一莖を取てこれをたまふ。即僧の云、此地に詣でん者は、皆此蓮華一莖を給べし。是則往生人の類に人べき證也。普く人にして示べしと。仍掌を合せ信を致して命をうくと思ひて夢覺ぬ。彼女房遍くこれを披露するに、聞人隨喜し袖を連て墳墓に詣し、肩を並て廟塔を拜する事、盛なる市をなす。いはんや淨土の行者、念佛の門人においてをや

## 法然上人傳記卷第八下

### 堀川太郎入道往生事

中陰の間、或日午尅斗に、老翁一人、上人の墳墓尋來て云、我は是西山樵夫也。去寅の尅の夢の中に僧來て法然上人の廟塔の柱奉加せるもの、只今極樂へ往生せり。ゆきて結縁すべしと告給へり。而に年來いまだ上人の御事を不承知の旨、今朝早且より洛中に出で、在々所々を尋奉る程に、數刻を經たりと申。彼柱奉加せるものは、上人を奉信ける堀川の太郎入道也。件入道は所勞によりて、東石藏禪林寺の東山寺に住せり。今此老翁の告に驚て、各行てたづぬる處に、老翁も同じく望めり。遺跡の鞞語云、聖人常に我傍にましゝて臨終を示し、念佛を勸給ふよしを語て悅侍つるが、今朝已に往生せりと申。諸僧老翁共隨喜禮拜して歸りにけり。既に廟塔の柱奉加の御功なをむなしきにあらず。況や淨利の寶臺欣慕の一念、豈いたづらにほどこさんや

## 隨蓮往生事

五條萬里小路に侍ける沙彌隨蓮は、配所へも上人の御共にまいりけるが、歸路の後も常に上人へ參て、念佛往生の證を承りけるに、念佛はやうなきをやうとする也。但常に念佛を唱へて功をつむべしと仰られければふかく是を信じて、二心なく念佛しけるが、上人御往生の後はいよ／＼念佛の外にはすこしも餘念なくて、三ヶ年をふる程に、建保二年の比、いかに念佛すとも學問せずして、三心をだにも知らざるものは往生すべからずと、世間の念佛者どもの中に申けれど、隨蓮申さく、故上人はやうなきを以てやうとす。たゞひらに佛語を信じて念佛すれば、必ず往生する也とて、全く三心の事も不被仰と申せば、彼人のいはく其は一切に心得まじきものゝ爲に、方便して被仰ける也。上人御存知のむねとて、經釋の文などゆゝしげに申聞せければ、隨蓮が心中に、誠にさもやあるらんと、いさゝか疑心を發して、誰人にか此事を尋申べからんとおもひ

て、一兩月の間此事をのみ心にかけて、念佛も申さで過る程に、或夜の夢に、法勝寺の西門を指入てみれば池の中に様々の蓮花開てよにめでたかりけり。西の廊のかたへあゆみよりて見あぐれば、僧衆あまたならび居て、淨土の法文談ぜらる。隨蓮きだはしへのぼりて見れば、故上人北の座に南面にまします。隨蓮を御覽じて近くまいれと被召ければ、恐傍にまいりぬ。隨蓮が存するむねいまだ申あげざるさきに、上人被仰けるは汝此ほど心に歎事あり。努々わづらふ事なかれと云々。此事一切人にも申さず。何として被知食たるにと思ながら、上件のやうを申あげれば、上人仰られて云、たとへばひが事いふものありて、あの池の蓮花を、あれは蓮花にあらず、梅ぞ櫻ぞといはんには、汝はその定に蓮花にはあらざりける。誠梅也櫻也と思はんするか。隨蓮申ていふ、現に蓮花にて候はん物をばいかに人申ともいかでか信候べきと申に、上人曰、念佛の義又如此。源空汝に念佛して往生する事は、疑な

しといひしことを信たるは、蓮花を蓮花と思はんがごとし。ふかく信じてとかくの沙汰に不及、只念佛を申べき也。惡義邪見の梅櫻を信すべからずと被仰と見て夢さめぬ。其時隨蓮昔の御訓をふかく信じて、少きの不審なく日來の疑のこりなく散じて、一心をこらし、臨終の用心亂る事なくして、兩眼閉がごとし。遂にやうなきをやうとして、行やすくぞ行ける

民部卿入道往生事

民部卿入道範光は、後鳥羽院の寵臣也。然に最後の時御幸なりて、往生の實否いかゞおもひ定むべきと仰下けるに、御返事に申て云、往生更に疑所侍らず。其故は去夜の夢に、病の床に沙門あり。誰の人ぞと尋ぬるに、僧云、我は是れ源空也。唐土にては善導と名付、此土に來て衆生を利する事、既にもて三ヶ度也。今汝に命終の期を告げん爲に來臨する所也。明後日午の刻は其期なるべしといふとみて夢覺ぬ。已に此告をかうぶる故に往生疑ざる由、其翌日午尅、たがはず正念に

住し念佛して往生を遂しかば、眼前の奇特、實に不思議なりけりとぞ申合ける

公胤僧正往生事

上人往生の後五ヶ年を送りて、建保四年丙子四月廿六日の夜、公胤僧正の夢に上人告曰

往生之業中、一日六時刻、一心不亂心、功驗最第一、六時稱名者、往生必決定。雜善不決定、專修之善業、源空爲孝養公胤能說法、感喜不可盡、臨終先來迎、源空本地身、大勢至菩薩、衆生爲化故、來此界度々、同閏六月廿日、僧正七十二、種々の瑞相を示して、禪林寺の砌にして、往生を遂られし日、仙洞后宮より初率て、槐門棘路に至るまで、紫雲瑞相に驚て、使節ちまたにみち、車馬ちりにはず。洛中洛外の道俗、村南村北の貴賤、結縁のあゆみをはこび、隨喜の心をもよほさすといふ事なし。顯密の碩德、天下の明匠にておはしつる僧正さへ、せめても宿善のいみじくて、上人に歸し念佛を信じて、往生の素懷を遂られぬる事、あ

り難たき事とぞ時の人申ける

靜遍僧都往生事

禪林寺僧都靜遍は、大納言頼盛卿の息、弘法大師の門人として、醍醐の座主勝賢僧正にしたがひて、小野流をうけ、仁和寺の上乗院の仁隆法印を師として、廣澤の流を傳て、兩流を一器にうつせる深奥の眞言師也き。然を世舉て上人所造の選擇集を依用し、念佛に歸する人耳目にあまる。嫉妬の心を發て、選擇を破して念佛往生の道をふさがんとたくみ、破文をかくべき料紙まで用意して、是を披見し給程に、日比の所案にははたと相違して、末代惡世の凡夫の出離生死の道は、早く念佛にありけりと見定て、則念佛に歸して返て選擇を賞飢するあまりに、續選擇を作りて、年來嫉妬の心をもて是を破せんとたくみし事、大なるが也と後悔して、選擇集を頂戴して、大谷の墳墓に参りて、泣々々謝をいたす詞にいはいはく、今日よりは上人を師として念佛を行すべし。聖靈照見を垂れて先非をゆるし給へと。

其後遂に高位の崇班をのがれて心圓房と名を付て、一向專修の行を立て、偈を結て云

一期所案極　永捨世道理

唯稱阿彌陀　語嘿常持念

と。世の道理を捨といへるは、世人念佛に付て無盡に義をいふに、いづれも皆一分の義理なきにあらず。然て我は只常に名を稱して、忘れずとの給へり。又法照禪師の五會法事讚に曰、彼佛因中立弘誓聞名念我愍迎來、此七言八句の文を誦してこそ、淨土宗の肝心、念佛者の目足よと、常には申されける。一期の間退轉なく語嘿常に持念して、貞應三年四月廿日往生を遂られき。宋張丞相いまだ秀才たりし時、ふかく佛法をそねみて、法を破する論を作らん事を吟ぜし時、或人方便を廻してかたる。邪見の説どもよく見えて破すべきなりとて、維摩經三卷を興へしに、此經を披見して歸て後悔の信を發して、專佛教を助けて返て護法論を造き。震旦日域ことなれども、捨邪歸正これおなじき

をや

## 法然上人傳記卷第九上

## 山門公人向御廟堂事

延曆寺の兩門跡と號するは、梨本、青蓮院是也。各々四明三千の貨首にそなはり、一山兩門の棟梁にまします。或は在世の薙に法文を尋て、往生の先達とし、或は没後の庭に諷誦捧て、值遇の後會を契る。遺骸に至りて豈信心おろそかに立給んや。然を上野ノ國より登山したりける並稷つぎの立者定増と云者、ふかく上人の念佛弘通をそねみて、選擇集の破文を作てこれを彈選擇となづく。隆寛律師是を見給て、先師上人の素意をあらはさんが爲に、顯選擇を作て定増が難破をくつがへして汝が僻破のあたらざる事、たとへば暗天の飛礫のごとしと、あざむきかゝれたりけるを定増遺恨をなしけるあまり、上人往生の後十六年を経て後、堀川院の御

宇嘉祿三年丁亥の夏の比、衆徒かたらひ、天下皆一向專修に趣て、顯密の教法すたれなんとす。專修念佛を停廢すべし。就中隆寛律師、我山の學者として、同宗をすて專修をたつること不可然。念佛宗の張本を遠流せらるべし。其根本たるによりて、すべからくまづ源空が大谷の墳墓を破却して、彼骸を賀茂川にほりながすべき由、衆徒嗷々の羣議に及べり。攝政は猪熊殿家實座主は淨土寺の僧正圓基、攝政殿の御兄なり。衆徒の濫訴すでに勅許ありければ、六月廿二日山門の所司專當等を遣して、大谷の廟堂をこぼち捨べきよしきこへしかば、京都の守護修理亮平時氏使者をさしつかはす。頓宮の内藤五郎兵衛尉盛政法師法名西佛子息一人を相具して罷向ふ。頓宮の入道、山門の使者にむかひて申ける。たとひ勅許ありといふ共、武家にふれずして左右なく狼藉を至す條、甚以自由也。しばらくあひしづまりて穩便の沙汰を致べし。若制止にかゝはらずば法に任すべし。是武家の御下知の趣也と云に猶不留

### 頓宮入道追散山門使事

頓宮入道詞を盡して問答すといへ共、謗家の凶徒あだをむすびて承引せしめず。次第に廟墳をやぶり、速疾に房舎をこぼちければ、かねて、子細はふれをはりぬ。醫王山王もきこしめせ、念佛守護の赤山大明神にかはり奉て、魔縁うちはらひ侍らん。いつはりて四明三千の使と號して、こびて四魔三障のむらがり來る駈。もとよりは主君の爲にそのかみ切にき、命は師範の爲に唯今捨べし。たとひ千の軍數の兵向ふとも、いかでか一人當千の手にかゝるべき。豈はかりきや、戰場をもて往生の門出とし、惡徒をもて知識の因縁とすべしとは。各南無阿彌陀佛と稱すべし、只今一々に汝が命をば召取べし。自他もろともに九品蓮臺の同行となり、怨親同じく七重樹下の新實たらん。善惡不二のことはり、邪正一如のおきては、山門の使者ならば定めて聞知らん。顯には東關の御家人、弓箭をたづさへて狼藉をふせぐ、冥には西刹の念佛者、魔軍をしりぞけて凶

徒をしづめんと云て、父子ともに馬の鼻をならべ、法に任せよと下知しければ、山門の使者くもの子をちらすがごとし。或はぼんのくぼに足をつけて命をたすからんとするものもあり、或はひたひの間に、手をあはせて降をこはんとする物もあり。如此するほどに、其日はくれにけり

### 改葬事

堂舎を破損すといへ共、加様に追散されける間、墳墓には手かけず。かくて今夜信空上人、妙香院僧正月輪禪定殿下御息に参りて、今度しばらく相しづまるといふとも、大谷は山門領也。山僧のいきどほり遂にむなしからじ。信空改葬せんと存する由を申ければ、此義尤よろしかるべしと仰られける間、やがて今宵人しづまりて後、改葬し奉る。むかし月氏に教主釋尊の尊容をぬすみ奉し時、専ら警固をいたしき。今日域に本師上人の遺骸をうつさんとする。むしろ災難なからんやとて、宇都宮入道蓮生守護の爲に、遁世の身也といへ共、出にし家

の子息郎徒をまねきて、數多の兵士をもて宿直し奉る。此外頓宮の兵衛入道西佛、千葉の六郎大夫入道法阿、澁谷の七郎入道道阿、塩谷の入道信成等、兵杖を帶し軍兵を率して供奉し奉る。宇都宮入道申けるは、五材四儀はもと百勝の術也。しかれば古は偏に名聞利養の爲にしてなを四儀をえず。今は速に往生極樂の爲にして忽に一心をさとれり。家をわすれ、親をわすれ、生をわすれ、身をわするゝ事、吳起が詞今日既に知れたり。倩往事をおもへば、祖父金吾朝綱の朝臣は、東大寺の脇士觀世音菩薩を造立し奉て、形みを南都にとりめ、孫子沙彌頼繩法師は西方界の教主阿彌陀如來を歸敬し奉て、たましみを上刹にすましむ。祖孫ちぎりふかく前後憑ある者か。さて御棺の蓋をあけたりければ御面像は在世の時にすこしもかはらず、異香は數年の後までとをく薫じけり。誠に貴と申さむも返りておろかなり

## 過洛中事

其曉やがて嵯峨へ遺骸を渡奉る時、御棺をかいて洛中を過るに、催さざれども、先師の遺弟、念佛の行人御供に參る人々一千餘人也。面々になみだをながし、各々に袖をしぼる。恐らくは双樹林の暮の色、跋提河の曉の波も、かくやと哀にぞ見へにける

## 自嵯峨奉渡廣隆寺事

嵯峨に渡置奉りて、在所口外すべからざるむね、各佛前に誓て退散しぬ。しかるを猶山門のいきどをりふかく、搜求べきよし其聞へ有しかば、五ヶ日を経て後同廿八日の夜、忍て廣隆寺の來迎房圓空がもとに移し置奉りて、其年はくれにき

## 隆寛律師往生事

山門訴訟猶こはくして、隆寛律師にも限らず。成覺房空阿彌陀佛等までも、配所定まる由聞えしかば、律師の曰けるは、凶徒等吾心を知ずして、定増が語による歟。但先師上人、已に念佛の事によりて、遷謫に及給し上は、予其跡をおはん事尤本意なりとて、長樂寺の

來迎房にて、最後の別時に七日の如法念佛を勤行せられけるに、結願の日に當りて異香室内に薰じ、蓮花白蓮一莖庭上に生じ、瑞花空よりふりければ、見人は現身に往生せる歎とうたがひ、聞人は律師に奉仕せざることをうらむ。擬律師は森入道西阿承て、嘉祿三年七月五日花浴を出て東關に趣給ふ。配所は奥州と定められしを森入道ふかく律師に歸し奉けるあまり、念佛の先達に近付奉ぬる事、然べき宿善のいたりなりとて、律師の代官に門弟實成房を配所へ遣はし、律師をば西阿が住所相模國飯山へ具し下奉りし時、同八月一日鎌倉を立給ひしに、武州刺史朝直朝臣廿二歳の時、相模四郎と申けるが、末代にこれほどの智者にあひ奉らんことかたかるべしとて、御輿のまへにおいつき奉て、事のよしを申されしかば、こしをかきすへて對面せられにけり。朝直朝臣申されけるは、身こそ武家に生たりといへども、心は佛にかけたり。適人身をうけて、稀に明匠に逢奉れり。是併宿縁のしからしむるなるべし。願

くは家業を不捨して生死を可離道を教へ給へと。律師の曰、年少の御身、武家のつはものとして、此御尋に及こと宿善の内に催すなるべし。凡佛教多門なれども聖道淨土の二門をいせず。しかるに聖道門は有智持戒の人にあらすば、是を修行すべからず。淨土門は極惡最下の機の爲に、極善最上の法を授られたれば、有智無智ををらばす、在家出家をきはらず、彌陀他力の本願を信すれば、往生うたがひなし。就中末法に入て七百餘歲、時機相應の教行はたと念佛の一門にかぎれり。是により飛錫禪師は末法にのぞみて、餘行をもて生死をいとふは、陸地に船を漕がごとし、他力をたのみで往生をねがふは水上に船を浮が如しとの給へり。然れば名就本願の船にのりて、彌陀如來を船師として、釋迦發遣の順風に帆をあげば、罪障の雲もしづまり、妄執の波もたゝずして、一念須臾の間に、極樂世界の七寶の池の汀にとつかん事、百即百生更に疑なし。此安心たがひ給はずば、たとひ戰場に命を捨とも、往生さ

はりあるべからずとのたまひければ、朝直朝臣忽に眞實の信心を發して、毎日六萬遍の念佛は、一期退轉すべからずと誓約せられけるが、卅餘年稱名の薰修をつみて文永元年五十九歳の夏の比、病惱を受られけるが五月一日出家して臨終の儀式にとりむかはれしに、同三日申時、年來所持の彌陀如來まのあたり病者に告て此度穢土を思すつる事は、偏に我力也。往生におきては決定也との給ひけるが、其夜の亥尅に及で高聲念佛四百餘返體をせめつゝ、念佛のいきにておはり給にけり。在俗の身たりながら、嚴重殊勝の往生を遂られし事、しかしながらこれ律師の一言による故也。律師は飯山へ下給ひし後は、森入道の尊崇いよ／＼ふかく、歸敬他事なかりし程に、同年仲冬より風病におかされ老病臥たまひしかば、病床に筆を取て、一期の身の事を記し給へり。これを隣中吟となづく。其中に曰、我きく、達摩和尚は配所の叢に跡をのこし、慈恩大師は穢土のいほりに名をとゞむ。ひとりとは佛心宗の根源、

ひとりは法相宗の高祖也。大國なをしかり、況や邊州をや、上古又如此、況末代をや、苦海安からず浮生夢のごとし、唯聖衆の來迎をのぞむ、更に有爲の遷變をいたまずとて、極樂を賦する詩、光明を詠する歌をかくれ

佛意定知智願明 故關夜月待雲迎

舞姿如鳥去留易 樂韻任風遠近鳴

界道林池交友思 樓臺宮殿禮尊情

智光照攝一無捨 八萬四千三字聲

み名をよぶこゑすむやどに見る月は

雲もかすみもさえばこそあらめ

日に隨て次第によはり給けるが、同十二月十三日廿日改元申時に至て律師のたまひけるは、往生の時既に至れり。予が義の邪正をも、一向專修の往生の根本をも、只今あらはすべき也とぞ。彌陀の三尊にむかひ、五色の糸を手にかけて、端坐合掌して彌陀身色如金山、相好光明照十方、唯有念佛蒙光攝、當知本願最爲強の

文を唱給ければ、傍に侍る正智唯願房も同じく是を唱て、臨終の一念は百年の業にも勝たりと申ければ、すこしおめる氣色にて本尊を瞻仰し、高聲に念佛して禪定に入がごとくして、おはり給にけり。春秋滿八十也。彩雲軒に近づき、異香室にみたり、遠近の縑素市をなく、いよ／＼念佛の信心をましけり。其後實成房なく

／＼奥州より飯山へまかりて、遺骨を頭にかけて上落し、吉水のうへの山に墳墓をつきけり。但馬宮の御夢想に、法然上人、隆寛律師は互に師弟となりて、ともに利他をたすけたまふ。淨土にして律師は師範、上人は弟子。娑婆にして上人は師範、律師は弟子なりとぞ御覽ぜられける。互爲主伴同大權化現ゆへある者歎

#### 於粟生奉茶毗事

上人の御遺骸は、嘉祿三年十二月廿九日正月廿五日  
改元安貞二年に當り 粟是なり生今光明寺に迎入奉て、信空上人、覺阿彌陀佛、此人々を始めとして、門弟等一所に來會して、茶毗し奉るに、種々の奇特どもあり、靈雲

空にみち、異香庭にかほる、彌往生の望をなし、ます／＼欣求の思ふかし。眞影をうつして、遠忌を修する門々戸々に、誰の人か三五夜中の光を惜まざる、禮奠を設て、月忌をいとなむ、在々所々にいづれの族か、六八弘誓の雲をのぞまさらむや

### 法然上人傳記卷第九下

#### 嵯峨釋迦堂上人廟塔事

上人求法の始に、まづ嵯峨の釋迦堂に七日參詣し給ひき、定めて御祈請の旨侍けん。釋迦彌陀契ふかく、此土他土縁淺からずして、遂に遺骨を此靈地小藏山の麓に收む。初從此佛菩薩結緣、還於此佛菩薩成就すといへり、眞なる哉此こと。又上人の在世念佛化導の比或人當迦藍に參て後生を祈請しけるに、釋迦如來夢に告て曰、當時法然房源空と云者あり、往生の道をきりあげたり、此比の人は皆其道より往生する也と云々。

奇特の佛の告、傳へ聞人彌信心をましけり。抑栖霞觀は、嵯峨天皇の別業、即阿彌陀堂を建立して、栖霞寺と名付く、傍に同御廐を食堂になし、鷹屋を鐘樓にし泉殿を阿伽井とす。今の釋迦堂は泉の名をかりて清涼寺と名づく。但釋迦如來は此伽藍にうつり給ひし由來を尋れば、昔釋尊一夏九旬の間、報恩經を説て、生母摩耶夫人の恩を報ぜんが爲に、忉利天上にのぼり給ひし時、優闍大王、如來に離れ奉らん事をかなしみて、毗首羯磨に仰て、赤せんだんをもて尊像をうつし奉る、持地菩薩神通をもて、優闍大王の國より須彌山に、金銀水精の三の橋を渡せり。木像も生身の佛の送りへのぼり給ひしに、生身と木像と道の前後を論じ給ひし時木像の佛は、我は木像也、争生身の佛にはまさるべき、生身の佛先に立給へとの給ふ。生身の佛、我は入滅すべき身也、木像は利益久しかるべき佛なれば、木像先に立給へとのたまひしかば、木像先にたちて渡り給ひき。安居の後忉利天より下て、曲女城に入給ひし時は

木像身を曲て生佛に掛し給ふに、化導を木像にゆづりて、生身の佛先に立て、祇園精舎に入給ひて後に、大唐國を化せんが爲に、震旦に來り給ふ。揚州開元寺の梅檀の像是なり。爰に日本東大寺の求法の沙門裔然法橋、天元二年に官符を給ひて入唐の時、まづ開元寺に至りて尊像を尋。即帝闕に參じて龍顏に謁し、勅免をかうぶりて、彼瑞像をうつして歸朝せんとする處に、本佛を渡し可奉之由、梅檀の像面り裔然に示し給ひければ、其心を歸して新佛の色を本佛に相似せしめて取替へ奉て、晝は佛を荷擔し奉り、夜は佛裔然を荷擔し給ひて、寛和二年七月九日に歸朝す。永延元年二月十一日に入洛す。一堂を建立して此像を奉安置今の清涼寺是也。彼永延より以來嘉祿に至るまで二百四十年斗にや成ぬらん

空阿彌陀佛往生事

上人門弟の中に、法性寺の空阿彌陀佛は、經をもよまず、禮讚に及ばず。只一向專念の行をたて、多念の棟

梁、專修の大將也。行徳人にしられ、名望世にかうぶらしむる。尊貴也といへ共、面をむかふればかならず崇敬し、智者也といへども、口をひらけば悉く伏膺せしむ。四十八人の能聲を調て一日七日の勤行を修する事、所々の道場に至らざる所なし。仍例のごとく年始七日の別時を修しけるが、結願の時今七日修べき由、同行等に命じければ、各命にしたがふ。二七日結願の朝、臨終正念にして眠るが如くして往生し玉へり。春秋七十四、安貞二年正月十五日也。七日已前に死期をしれる故に、後の七日をのぶる所也。種々の靈異一にあらず。就中高野山寶幢院に寛泉房といへる上人あり。彼舍弟天王寺に住しけるが、或時天狗になやまざる事あり。彼天狗は天王寺第一の唱導勸進上人東門阿闍梨也。託云、我は是東門の阿闍梨也。彌陀の本願にほこりてたゞ邪見を起が故に、此異道に墮せり。我在世の時、我は是智者也、空阿彌陀佛は愚人なり、我手の小指をもてなをかの人に比すべからずと。しかるを彼

空阿彌陀佛は、如説に修行して既に輪廻をまぬがれて早く往生を得たり。我は此邪見によりて、惡道に墮し生死に留る。後悔千萬浦山敷事限なしとて、さめくと泣けり。智恵ありがほに慢擧の心高く、邪見のきづなをきらずば、往生の障となるべき事疑なし。上人常の仰には源空は智徳をもて人を化する猶不足也。法性寺の空阿彌陀佛は愚痴なれども、念佛の大先達として返て化導廣し。我もし人身を受ば大愚痴の身受、念佛修行の人たらんところ仰られけれ。念佛を行じ極樂を欣はむ人は、愚痴をかへり見ず、唯語哩作々、行をさきとすべき者也

#### 津戸入道往生事

津戸三郎爲守は、ふかく上人の勸化を信じ、偏に極樂の往生をねがひて、二心なく念佛しけるが、同じくは出家の本意を遂たく思けれど、關東のゆるされなかりける事を歎、在俗の身なりとも法名をつけ、戒並に袈裟をたもつべき由上人に申入けるに付て、彼御返事云

誠さやうにて志ばかりふかきも、出家の定にてこそは候へ。何事も時いたる事にて候へば、強にいそぎ思召すべきことにも候はず。いかに又すまふにもより候はず。期の至る折は程なき事にて候。又戒品書てまいらせ候。假名もて戒品などかきたるは、あしく候へば是は寛印供奉と申候人のせさせ給ひたる十重禁の次第にて候。三聚淨戒はわたくしにかきて候、別々に候也。袈裟まいらせ候。新き候へども、わざと當時かけふるして候をまいらせ候也。なのり房號かきてまいらせ候。男ながらも皆法名をつけ、けさをかくる事にて候也。別紙に書て候也云云。此御返事を給て後は、偏に出家の思をなして念佛しけり。其後又念珠を所望しける時上人御返事云、是ほどに思召事は此世一の事にはあらず。先の世のふかき契とあはれに覺へ候。かまへて極樂に此たびまいらせ給ふべく候。常に持て候、すゞひとつまいらせ候。何事も文にはつくしがたく候云云。又或時上人御文に云、此たびかまへて往生しなんと思

食切べく候。受難き人身已に受たり、逢がたき念佛往生の法門にあひたり、娑婆を厭ふ心あり、極樂を欣心發りたり、彌陀の本願ふかく、往生は御心にあるべき也。ゆめく御念佛おこたらず、決定往生の由と存させ給べく候云云。又上人の御影を所望しけるに付て、或時の御返事云、影の事は、熊谷入道の書て候しか共無下に此姿たがひて候ひしかば、すてくたりて候也。されば此度もゑがきて下し候はぬには、唯口惜候。其かはりには善導和尚の御影をおがませおはしますべく候云云。我影のかはりには善導和尚の御影をおがめと仰られたる事を、ほとんど過分の御詞かなと思けれども、人にも語らざりけるに、善導和尚の御影の御前にて念佛しける時、居ねぶりをしたる夢に、上人に向ひまいらせて物語を申けるに、善導の御影をおがめといふ事を不審する條謂なしと、あしき御氣色なりけるにさはぎて驚たれば、善導の御影に向ひ参らせたる事、夢の中に上人に物語申つるに、少もたがはざりければ

上人はたゞ人にては御坐ざりけりと、彌信心ふかくして、往生の後はかならずおもひ出べき由をのせられ、また極樂にまいりあへとのせられたる、御自筆の御文共をば錦の袋に入れて、身をはなたずして念佛しけるが誠に時いたりけるにや、建保七年正月に、右大臣家薨逝の時、御免を蒙て出家の本意を遂にければ、上人よりしるし給ける法名を付て尊願とぞ申ける。上人御往生の後には日に隨て極樂の戀しく、年を逐て穢土のいとはしく覺へるまゝに、常に此文を取出して拜見してはとく迎へさせ給へと申けれども、むなしく年月を送りける。上人の門弟已下の僧衆を屈して、仁治三年十月廿八日に、三七日の如法念佛を始め、十一月十八日結願の夜半、道場のあかり障子の内にして、高聲念佛數百遍の後、忍びて腹を切て、あらゆるほどの物をば悉く取出して、練大口に裹で、おさなき者をよびて、後の川に捨させにけり。夜陰の事なれば人更に是を知らず。其後僧衆に向て、かやうに出家籠居して、大臣殿

の御菩提を訪奉るに付ても、主君の御餘波も戀しく御坐すうへ、上人の極樂にかならず參合へと仰の有しに今まで不往生して尊願が長命かたゞ無益の事也。釋尊も八十の御入滅、上人も八十の御往生、尊願又満八十也。第十八は念佛往生の願也。今日又十八日也。如法念佛の結願に當て、今日往生したらんは殊勝の事なるべしなど申ければ、かゝる用意とは思もよらず。只あらましの詞と心得て、誠に目出こそ候はめと返答しけるに、その夜もあけ、十九日にも成ぬ。敢て苦痛なし。只今臨終すべき心地もせざりければ、子息民部大夫守朝をよびて、きりたる腹を引あけて、まろきもといふものゝ残て、臨終の延ると覺る也。よりて見よと申ける時ぞ、始めて人知にける。心さきのほどに圓き物の有よし申ければ、手を入れて引切てなげすて、是が残たる故に臨終のぶるなるべしとぞ申ける。人々あつまりて驚申ければ娑婆界のいとはしく、極樂界のねがはしき志、日にしたがひて、いやまさりければ、今

一日もとくまいりたき故に、かくはからひたる次第をかきくとき申ければ、誠に願往生の志の熾盛なるありさま、見る人皆涙をながさぬはなし。少きのいたみもなくて念佛しけるが、七日まで延ける間、うがひの水の通はずなるべしとて、七日以後はうがひをとめて、塗香を用けるが、氣力も更によはらず。程なく疵いゑにけり。後には時々行水を用けるとかや。正月一日にもなりければ、死せずしては往生すべき道なき間、尊願は正月一日の祝には、臨終の儀式をなして、歳久しくなれり、日來のあらましたがはずして、今日往生すべき故に、延引しけりと悦で、しきりに念佛しけれども、其日も過、次日もまたくれぬ。唯今臨終すべき心地もなかりければ、此世の事を申契りたるだにも、眞有人は變ぜず、たがへぬは世のならひ也。まして上人程の人の往生の後は、かならず思出べき也。極樂にまゐりてあへと自筆の御文たびながら、いそぎまいらんと心を盡し侍に、速く迎へさせ給ふ事こそ、心うく侍

れと、かきくどきて連日に敷申けるが、同十三日の夢に、來十五日午尅に迎べき由、上人告給ひければ、十四日に此夢をかたつて歡喜の涙をながし、彌念佛にいさみをなしてけるが、十五日に成ければ、上人より給ける袈裟をかけ、念珠を持って西にむかひ端坐合掌して高聲念佛敷返を唱へ、午の正中に念佛と共に息たへぬ。紫雲空より顯れ、異香室にみつ。茶毘の庭に至るまで異香なを失せず。奇特其敷おほしといへども、しげきによりてのせず。世擧て謳歌の間、將軍家より御尋にあづかりしかば、悉く記し申けり。熊谷入道初めて上人へ参りける時、若命をもすとて、後生たすかれとならば、頓て腹をきらん爲の用意に持たりける刀をば、念佛して往生すべきよしを承定ぬる上はとて、上人にまいらせけるを、上人より津戸入道給て祕藏しける。今自害の時は、件の刀を用けるにや。在家の弟子も其敷ありし中に、自害往生の素懷を逐べき器と御覽られると子細なきにあらねども、腹をきりて後七日はう

がひを用けれ共、其後は塗香ばかりにて、水を口にはよせざりけるに、五十七日の間、氣力もよはらず、聊のいたみもなく、思のごとく念佛相續して、仁治四年二月廿七日改元寛元元年也正月十五日に午の尅八十一にして、耳目を驚かす程の往生を遂ぬる事は、あくまで護念増上縁の益にあづりける事も眼前なれば、彌希代のふしぎなりとぞ申あひける

#### 明惠上人託事

梅尾の明惠上人、さきに摧邪輪を作て選擇集を破し、後に莊嚴記を製し、かさねてこれを破す。しかるを逝去の後、ある月卿の邊に侍る小女に託して云、我は是明惠房高辨也。更に悪心をもて來らず。聊示すべき事有、我日來法然上人を破する故に生死を出でず、剩へ魔道に墮せり、此事を懺悔せんが爲に來れり。若不審を殘さば、是をもて知べしといひて、紙十枚斗を續て花嚴の十玄六相、法界圓融の甚深の法門をかく事滞りなし。法門といひ、手跡といひ、皆是彼上人の平生の

所作也。又小女の聲全くかの上人の音聲に、違せずして早く摧邪輪を焼べしとのたまへり。嚴重の奇特、ほとと言語の及所にあらず

#### 明禪法印往生事

毘沙門堂法印明禪は、參議成頼卿の息、顯宗は檜那の嫡流智海法印の面受、密宗は法曼院の嫡流仙雲法印の弟子として、顯密の棟梁、山門の宗匠也き。然るに初發心の因縁は、最勝講の聽衆に參せられたりける時、緇素貴賤、今日をはれとのみ思あへり。夢幻泡影、片時のさかへをわすれざるものひとりもあらず。俗家には、大將の庭の景氣、大裏の門外のふるまひ、僧中には證義者は上童を具して別座をまうけ、攝籙の息は隨身をしたがへて直廬に參らせらる。かれこれ榮耀を見て、見聞の輩、はしりまはれるありさま、つく／＼とおもへば無常忽に到りなば、餘算いつまでと期すべき。無上菩提を見るに付ては胸中の觀念すまみさるまゝに、籠居の思ひこの時治定せられけり。彼須菩提尊

者は石室の中に入定して定中に佛の一夏九旬説法の後切利天上より來下し給しを見奉て、今日の集會甚未會有也。座中に佛及轉輪聖王、諸天龍神多あつまれり。然といへどもみないきほひ久しく留るべからず。磨滅の法也。ことごとくに無常に歸しなんと。此無常觀を初門として、諸法の畢竟じて皆空成事を悟て、尊者たへに道證を得給へりき。今此法印の發心の義、少も解空第一の羅漢にはちすぞ侍ける。初隱遁の志は思定ぬ。出離の道いまだ一決せず。とかく思惟せられしに、持たる數珠我も思わくかたなくて、自然の手ずさみにくられける時、有縁の法、易行の道、稱名にあるべきにこそと、その座にてもおもひそめられて終に籠居せられにき。或時信空上人に謁して、念佛の物がたり有けるに、聞ざるには信も謗も共に謬あり。これを見て若は信じ若は謗べしとて、上人所造の選擇集を送れる間彼書を披見して後、淨土の宗義を得、稱名の功德をしる。其より以來常の謬は、顯密をたしなみ佛の惠命を

付き、公請にしたがひて、國の安全を祈るとも、傍に淨土の教行を學して、ひそかに樂邦の往詣をとげん事尤至要也。公家の請をものぞまず、官途の計事にもあてがはず、心あらん人誰か稱名を妨げん。懈怠にして既に過去遠々を歷たり、不信ならば定て未來永々を送らん歟。今はたゞ畢命を期とせんばかり也とて、偏に上人勸化の詞を信じて、稱名の行おこたらず、病床にふして後、或時俄に涕泣せらるる事ありけるを、弟子驚て是を尋申ければ、明禪、聖覺とて、つがひてひといはるなる。不足言の對揚かなと、年來思しが、唯今ぞと思いでられたるなり。故郷の妄執をわすれざるは、淨刹の欣求のひまあるにこそ申されけるは、念々不捨者の信力も、此理に顯はれ、順彼佛願の正業も、たゞ一言にしられたり。臨終の時は、聖信上人を知識とせられけり。紫雲たなびきて往生人の相ありとて、人多く羣集するよし、弟子ども申ければ、何條明禪が臨終に紫雲のさたがでに及ばんぞ。たゞ正念亂ずして

稱名をもちて息たえたらんにすぐべからずとて、頭北面西右脇臥にして、極重惡人、無他方便、唯稱彌陀、得生極樂の文を唱へ、念佛相續し、如入禪定して、仁治三月正月二日午尅に往生を遂られき

### 上人德行惣結事

凡智惠深奥の諸宗の賢哲、多く上の勸化に隨て、本宗をさし置いて念佛に歸して、往生を遂る人々、上人在世といひ、かの滅後といひ、觀續にいとまあらず。高貴の智徳なをしかり。況や我等ごときの愚鈍、なにをたのみてか、念佛をゆるかせにすべきや。懈怠にして念佛を行ぜず、不信にして往生を遂ざらむは、あに佛のとがならんや。抑上人の德行、諸宗を訪へば師毎に嗟嘆し、化導を施せば人毎に歸敬す。たれの人か闇夜に灯なくして室の内外を照すや。誰の人か現身の光明放や、是念佛三昧の故なり。誰の人か慈覺大師の袈裟を相傳するや。南岳大師 相承云云誰の人か太上天皇に眞影をうつされ奉るや。誰の人か韋提希夫人と念佛の儀を談する

や。誰の人か諸宮諸院に歸敬せられ給ふや。誰の人か攝政殿に禮拜せられたるや。誰の人か智惠第一の名を得たるや。誰の人か没後に花夷男女、家毎に遠忌、月忌、臨時の孝養をいたすや。誰の人か人毎に影像を留て本尊とするや。此中に一徳備へたる人は餘事のたさざる事をうらむべし。其外百非をはなれたる輩、いかでか甲乙の舌をのべんや。就中上人は王公卿臣の家よりも生ぜず、茅屋茂林の下より出たりといへども、殿上にくされて猶高座にのぼる。公誦學道の業にたづさはる事なけれども、明王に召れて歸敬せらる。是ひとへに慈覺大師の遺風、十重戸羅の戒香、ふかく法衣にそみ、善導和尚の餘流、三昧發得の定力、遠く心緒をつたへ給へるによりて、方に今三國の芳躅をとむらひ吾朝の遺風をかながふるに、神明佛陀の靈瑞より、賢人才士の明徳に至るまで目に見ざる古聖の嚴顔を見、耳にきかざる異域の勝境を知る事、偏に是畫圖のあやつり、筆跡の功に有。但昏朝七賢の形、これを傳てい

まだ其益あらず、穆王八駿の圖、これにむかひて又何にかせむ。或は狂言綺語の繪を見て心をうごかし、或は榮花重職の粧をひらきて、目をおどろかす。更に分離の媒にあらず、併是癡愛の翫たり。然をいま九卷の繪を作して、九品の淨業にあて、一部の功力を終て、一宗の安心を全くせんが爲に、諸傳の中より要をぬき肝をとりて、或は紕繆をたゞし、或は潤色を加えて、後賢におくりて、共に佛國を期せんと也。若祖師の徳

を擧る事、佛陀の誓にそむかずば、當時の弘通をさまたげず、將來の善根を悦ぶべし。或は信或は謗の輩、一見一聞の人、必ず彌陀の名號を唱べし、偏に其最後臨終の引接のみにあらず、刹又現生護念の誓願まします。佛使廿五菩薩一切時來、常に護念、何の疑かあらん。見聞一座の諸人、同音に千返の念佛を申さるべし

願以此功德 平等施一切

同發菩提心 往生安樂國

第二集 傳 法 繪

出 據

- 一、本朝祖師傳記繪詞（傳法繪流通・淨土宗全書卷十七 參照）……………四卷  
原本 【淨土宗寶】 福岡縣 善導寺藏
- 二、法然上人傳法繪流通（國華本）……………殘缺一卷  
原本 細見良、松下健二、幸節辨彦の譜氏藏
- 三、法然上人傳法繪下（高田本）……………殘缺一卷  
原本 三重縣高田 專修寺藏
- 四、法然聖人繪（弘願本）……………殘缺四卷  
原本 神戶市 川崎武之助氏藏  
原本 京都市 知恩院藏
- 五、法然上人傳繪詞（琳阿本・淨土宗全書卷十七 參照）……………九卷  
原本 【淨土宗寶】 東京都芝 妙定院藏
- 六、法然上人傳（增上寺本）……………殘缺二卷  
原本 【重要文化財】 東京都芝 增上寺藏
- 七、拾遺古德傳繪……………九卷  
原本 【重要文化財】 茨城縣瓜連 常福寺藏
- 八、法然上人傳（十卷傳・淨土宗全書卷十七 參照）……………十卷  
原本 愛知縣 法藏寺藏
- 九、知恩傳……………二卷  
原本 東京都 高瀬承蔵氏藏

# 本朝祖師傳記繪詞卷第一

蓋以、三世に多の佛出給、若干の衆生をすくひまします。滅劫の千佛第四番、南州中印土淨飯王の御宇、癸丑歲七月十五日、后の夢に金色天子、白象に乗て右脇に入給と見て、次年<sup>寅</sup>四月八日、佛出胎の時、寶蓮御足を承て七步行給。偈曰、天上天下、唯我獨尊、三界皆若我當安之文是振旦には周昭王、日本には彥波瀲鷲草葺不合尊八十三萬四千三十六年<sup>甲寅</sup>相當。再往事を願ば、悉達太子十九にして踰城、三十にして成道し給て、一代五時の說法しげしといへども聞はきけども達物はすくな<sup>く</sup>、傳ものはあれどもさとれる物はまれなり。此故に末代の我等がために、阿難を唱導として、佛教を復せしむるに、面如淨滿月、眼若青蓮華、佛法大海水、流<sup>り</sup>入阿難心<sup>云々</sup>生身の佛にかはらず、三十二相を具し、四辯八音あざやかにして辯泉露を洩さず、歷河早漲。これを梵王字を製して、一千の羅漢筆をそめて、一點を不落記し給えるを、正法千年は、五天竺にさかりにして、しな國は、漢明帝に、摩騰迦葉、法蘭、優陀王宮に現じ給し白髭の佛像を迎たてまつるに佛像大光明をはなち給永平七年<sup>甲申</sup>也。同十年<sup>丁卯</sup>白馬寺を立。然後四百八十餘年すぎて、欽明天王御時、厩戸王子<sup>壬申</sup>十月、百濟國の聖明王、釋迦金銅像、經卷を奉送之刻、四天王寺を建立す。それより以降、聖武天王東大寺を鑄造して佛法興隆、粗如來在世にことならずして、やゝひさしくなりにける。いま先師上人念

佛すゝめ給える由來を、畫圖にしるす事しかり。于時嘉禎三年丁酉正月廿五日、沙門耽空記之

如來滅後二千八十二年、日本國人皇七十五代崇徳院長承二年癸丑美作國久米押領使漆間朝臣時國一

子生ずるところ

誕生の圖

諸佛の世を利し給、機に隨て益をほどこし、日月の州を照す、時を測て光を廻す。北州に日かくや  
くたれば、南州にかけのちかづくより、須彌の岑、なく鷄の可見路と鳴は、暗きやみ漸くはれて、  
みち見えぬべしと囀也。佛教も又正法千年は印土に盛にして、像法のはじめ漢につたはりてのち、  
用明天王の儲君、舍利をもて生給しを佛の誕生に准ずべき歟。其謂何者、舍利、現身に說法し、神  
變をしめし給事、佛のごとく也。これを以、我國の正法のはじめとすべきか。たとへば、父、宮こ  
にして、よをはやくし、子、他國にまよふて、程をへてをどろく、亡日、年序をへにけれれども、  
禁忌はきくよりをこり、孝養はあらたなれども、中隱はふるき跡也。爰一切衆生のちゝ、十萬餘里  
のにしにかくれ、その子、三箇國の東に忍より、藤衣のたちまちにいろをかへるありさま、たら葉  
の面にかききたまへる遺教ひろしといへども、おほくは西方の寶樹、寶池の水木、宮殿樓閣のあり  
さま、飯食經行ゆたか也。衣は、そめ、すゝぎ、ぬはねども、春夏秋冬身をかざり、薬はのみ、く  
ひ、つけねども、心になやむことなくつゝがなし。かゝる都へさそはんと、金鳥、雲の上よりかけ  
り、銀兔、野外にほとばしる

この息、襠褌のなかよりいでて、竹馬に鞭うちて、あそぶところ

竹馬 嬉戯の圖

保延七年<sup>西</sup>辛はるのころ、時國朝臣、夜打にあへる刻、ふかきぎずをかふむりて、いまはかぎりになりければ、九歳なる子に、われは此きずにて空くみまかりなんとす。しかりと云て、敵人をうらむる事なかれ。是前世のむくひ也。猶此報答を思ならば、轉展無窮にして世々生々にたゝかひ、在々處々にあらそふて輪廻たゆる事なかるべし。凡生ある物はみな、死をいたむ事かぎりなし。我このきずをいたむ、人又いたまざらんや。我此命ををしむ、人あにをしまざらんや。わがみにかへて人の思をしるべき也。むかし、はからざるに、ものゝいのちをころす人ありけり。次生にそのむくひをなす。いま有起の善を修す、彼功德すなはち大善根となる。願は今度妄縁をたちて彼宿意をわすれん。意趣をやすめずば、いづれの世にか生死の繩をたたん。梵網心地戒品に云、みづからもころし、人ををしへてもころし、方便してもころし、ころすをもほめ、ころすをみても隨喜し、乃至呪してもころす。因縁報果、みなころすにおなじ。よの九戒、又く如此。然者一向に往生極樂をいのりて、自他平等利益をおもふべしといひおはりて、心をたゞしくして、西方界にむかひて高聲に念佛して、ねむるがごとくにしておはりぬ

生年九歳なる子息、敵人の頭に少箭をいたてける。葬送中隱の間、念佛報恩をくる刻、雁塔をたて、鳧鐘をならし、烏瑟の妙相をあらはして鷲嶺の眞文を開題し、鶯子が智辯をむかへて鳥方

にをくらん事をのぞむ

時 劇 遺 雜 の 圖

同年のくれ同國のうち、菩提寺の院主觀覺得業の弟子になり給

觀覺得業の許へ入室の圖

一、師匠の命によりて 比叡山にのぼるべきよし侍ける時、乳房のはゝに、いとまを申とて、大師釋尊は、十九の御年、父の大王にしのみ給て、ひそかに王宮をいでたまひ、今小童は、生母にいとまを申て、二親を佛道に入たてまつらん。夫流轉三界中、恩愛不能斷、棄恩入無爲、眞實報恩者文と承ば、今日よりのち、こひしくゆかしく我をすてゝ、うらめしとおほしめさるな。三河守大江定基は、出家して大唐へわたり侍し時は、老母にゆるされをかうむりてこそ、彼國にして圓通大師の號をかうむり、本朝の名をもあげ給しか。ゆめくこの童をこそちゝの形見として、朝に觀へ暮に昵びん事をわすれて、生るゝ覺山にこもりて、ふかくみちびく師とならん事をおほしめせと、かきくどき給しかば、母ことはりにおれて、みどりのかみをかいなでゝ、涙ばかりぞ、いたゞきにそゞぎける。いま思あはずれば、秘密灌頂とかやに、物はいはずしていたゞきにそゞくと申は、かやうの事にや侍らん

かたみとてはかなきおやのとゞめてしこのわかれさへまたいかにせん

三、まことに、うめる子におしへらると、薩婆悉達の、母の御ために耶摩經をとき給けんも、さこそとよろづをしのびて、ちかくは人とならんことをまち、とをくは佛にならんまでをこそ、な

き人のこけのしたまでも申いれ侍らめ。されども、有爲のならひ忍びがたく、昔、迦葉尊者だにも別には、こゑ大千にうごかし、善吉尊者も手に一鉢をすて給ければ、まして女身にてはいかにもなぐさめがたく侍ぞや

母子訣別の圖

二、この事はりをば、觀覺こそ申さまほしく侍つるを、こまぐと、ありくしくおほせ事侍ればそれにつけても、かしこくぞ御學問のよし思より侍ける。むかし晋の叡公、いとけなくして法花經翻譯とき、師匠の人天交接の詞、かきわづらい給ける。さかしうおもひあはせられてあはれにこそ

上洛の圖

夫以、天台山者、桓武先帝、傳教大師起誓於鷲嶺之月、弘法於馬臺之風、先帝關平安城、而固百王之社稷、大師立延曆寺、而布一乘之垂迹、佛法互致衛護、一乘萬乘俱期周遍、古人有言、松茂栢喜芝死、蘭泣、物之相感草木猶爾云々よりて山門にはひとすぢに、君と國とをいのりたてまつり、皇帝はふたごゝろましますさず、法と人とをはぐくみまします。因縁、靈山のむかしよりふかく、ちぎりこと野々いまにひろし

登山の圖

初登山の時、ひさしの得業觀覺の狀云

進上

大聖文殊之像一體

天養二年<sub>乙</sub>五月日

觀覺上

西塔北谷持法房禪下源光

この消息を披閱して、文殊像を相尋の處、生年十三の少人許をさきにたて、登。仍奇異の思に住して後、一文をさづくるに、十文をさとの次第、まことにただ人にあらず

法花修業の候

普賢來現の圖

久安三年<sub>丁卯</sub>仲冬、出家受戒云々。竊以、無明長夜以戒光而爲炬、滅後軌範以木叉而爲師。故受生鼻沈依戒持毀、見佛有無任乘緩急。所以離雲不覓雨、避池不尋蓮。叶佛位計無離道心、取菩提藝有勤善根。其志を以、肥後阿闍梨皇圓に從て天台六十卷讀畢之。件闍梨、彌勒下生の曉をまたんがために、五十六億七千萬歳の間、遠江國笠原池に、大蛇となりてすまふべきよし、彼領家に申請て、誓にまかせて死後即その池にすまふよし、時の人遠近見知するところ也

久安六年<sub>庚午</sub>生年十八はじめて黒谷上人禪室に尋いたる、同上人いでむかうて、發心の由來を問給ふに、親父夜打のために早世せしより、この遺詞にまかせて、遁世のよし思たちける次第つぶさにかきくどき給ければ、さては法然具足の人にこそましますなれと侍しより、法然といふ名は、のたまひける。

出家受戒の圖

寂空上人と對面の圖

花嚴經披覽の時、あやしげなるくちなはいできたるを見て、同信空上人これをおそれ給ひける夜の夢に、我はこれ上人守護爲、青龍現するなり。更におぢられたまふべからずと云々

青龍出現の圖

暗夜に經論を見給に灯明なけれども、屋内をてらすひるのごとし、信空上人、同その光を見る

屋内放光の圖

保元々年<sup>丙子</sup>求法のために、修行すとて先嗟峨に參籠。然後、南都贈僧正藏俊に、法相宗を學し給ふに、其の義甚妙にして、不可思議なりければ、師範かへて、上人に歸して佛陀と稱して、供養をのべ給

中川少將隨て、鑒真和尚の戒をうく。大納言律師寛雅に三論宗を學し給に、その宗のおぎろをさぐり、弟子のふかき心を達するに、かへて涙をながして、奥旨をきはむ

上人行脚の圖

學匠訪問の圖

學匠訪問の圖

學匠訪問の圖

眞言の教文にいりて道場觀を修し給に、五相成身の觀行あらはしたまふ

道場觀成の圖

一代五時の諸經、はじめ花嚴の法界唯心、阿含の四諦緣生、方等彈呵褒貶、般若染淨融通、法花唯一乘、醍醐拈拾妙藥、總て自他諸宗經論章疏、眞言止觀のをぎろ心を三觀の彌陀にあらはして、悉九品の淨界にすまし給。事のはじめは高倉院の御宇安元元年<sup>乙未</sup>齡四十三より、諸教所讚、多在彌

陀の妙偈、ことにらうたく心肝にそみ給ければ、戒品を地體としてそのころに毎日七萬遍の念佛を唱て、おなじく門弟のなかにもをしへはじめ給ける

上來雖説定散兩門之益、望本願意在衆生、一向專稱彌陀佛名、南無阿彌陀佛々々

上人、心閑に淨土を觀じ給ける。はじめの夜は寶樹を現じ、次夜は瑠璃の地をしめし、後には宮殿を拜し給

三昧現前の圖

唐善導和尚、もすそよりしもは、阿彌陀如來の御裝束にて現じて、さまざまの事をときてをしへ給ける

善導來現の圖

南無勢至菩薩云、我本因地にして念佛の心をもて、無生忍に入て法界にして、念佛を攝して人をして淨土に歸せしめ給ける。これすなはち念佛三昧成就獲得の證理なるべし。よりにこの聖容は一丈六尺に示し給ける

勢至出現の圖

無量壽佛化身無數、與觀世音、大勢至、常來至此行人之所

三尊出現の圖

法眼顯良 大原籠居の時、法印永辨 出離解脫のはかりごと、頓證善提のいりかど談じて、永辨 歸山の刻、如此次第、委は法然上人を唄して、御尋あるべきよし申て後、龍禪寺に僧都明遍、已講貞慶 重源和尚、印西上人、凡處々遁世の人々。當所には湛敷、蓮契、師弟の上人等十餘輩招て、淨土の教文沙汰あるべきよしきこえて、山門の久住者、念佛往生の儀をきかんとて智海法印、靜嚴僧都、覺

什僧都、證眞、堯禪等、各あつまりけるに、淨然法眼、仙基律師は、又もとより坐せられける。面々に諸宗に入たちて、深儀論談決擇侍けるに、上人、散心念佛の時にかなひ、をりをえたる事つぶさに解説し給けるに、房主法眼眞雙眼に紅涙をながし、一心丹精をぬきいで、みづから香爐をとりにて、持佛堂に旋遶行道、高聲念佛を唱給に、南北の明匠、西土の教に歸し、上下の諸人、中心の誠をこらして各一口同音に、三日三夜、間斷なし。これを六方恆沙の證誠にたとふ。總て信男信女三百餘人、參禮の聽衆かずをしらず、然間、湛敷上人發起にて來迎院、勝林院等不斷念佛をはじむ。自爾以降、洛中邊土、處々道場、修してつとめざるところなし。如此して後眞召出されて、天台座主に補し僧正に任じ給。末代高僧、本山の賢哲也。諸宗の碩德卒して莫非上人云々一天四海、併念佛を以、口遊とす

(論席列座大師の銘記)

前權少僧都明遍、法眼大和尚顯眞、法印大僧都智海、法印權大僧都靜嚴、權少都覺什、法印權大僧都證眞、法橋上人堯禪、法眼大和尚靜然、權律師仙基、已講貞慶、藏人入道、蓮契上人、念佛房、湛敷上人、印西上人、重源和尚、上人源空

大原論談の圖

## 本朝祖師傳記繪詞卷第二

上西門女院に上人七日説戒し給ける時、前栽の草むらの中に、おほきなるくちなはありけり。夏の

事也ければ、はめをどろかすといへども、日々にかくることなくして、かがま壟おりて頗聽聞の氣色見えければ、人々もあやにみける。第七日結願にあたりて、この蛇からかきのうえにのぼりてやがて死しけるほどに、そのかしら二にわれにけるなかより、蝶のやうなる物いづとみる人もあり、又かしらばかりわれたりとみる人もありけり。又天人ののぼるとみる人もありけり。むかし遠行するひじり、このひ、くれにければ野中つかあなのありけるに、とままりて夜もすがら、無量義經を暗誦しけるほどに、彼つかあなの中に五百蝙蝠ありけり。この經を聽聞しつる功德によりて、このかはほり、五百の天人となりて、忉利天に生ぬと夢につげけり。いま一すぢの蛇あり、七日説戒の功力にこたへて、雲をわけてのぼりぬるにやと人々隨喜をなす。彼は上代なるうへ大國也。これは末代にして又小國也。希代勝事、凡人の所爲にはあらずとぞ時の人々申侍ける

## 上西門院受戒の圖

高倉天皇御得戒侍けり。其相承、釋尊千佛の大戒を持って正覺の曉、陳の南岳大師にさづけ、南岳大師七代をへて道遠和尚、本朝傳教大師にさづけ、傳教大師、慈覺大師にさづけ、慈覺大師、清和天王にさづけたてまつらしめ給し時、男女授者五百餘人、利をえ、益をかふる。今當帝に、十戒をさづけたてまつらしめ給事、陳隋二代の國師天台大師の、大極殿に御に對して、仁王般若を講じ給しに、殿上階下、稱美讚嘆、殿にかまびすしく侍しがごとく、月卿雲客より后妃采女にいたるまで、

巍々たる禁中に、喁喁たるいきさし、堂々たる宮人の、面々たる信敬、もろこしのいにしへにもはぢず、やまとの中ごろをしたふ。故に九帖附屬の袈裟、福田をわが國にひらき、十戒血脈の相承、種子を秋つ洲にまく。抑安然和尚の戒品を傳し、いまだ袈裟の附屬をばうけざりき。相應和尚の念佛をひろめし、又いまだ戒儀をばとかざりき。彼此をかねたる、今の上人也。これによりて、敬て戒品の帝珠をみかきて、いよく無上の位にすゝみ給べし。その榮啓期が歌三樂未至常樂之門、皇甫謐之述百王猶闢法王之道。

一、只今源空上人めされ參られ侍

二、何事に侍やら覽

四、剋限よくなりて侍らば、聽聞に參り侍覽

五、何の殿侍やらん、紫殿

六、清涼殿とこそふれ侍れ

禁裏の圖

治承四年<sup>庚子</sup>十二月十一日、平家亂逆の時、東大寺炎上の庭に、舊跡にまかせて、大佛治鑄し奉るべきよし、右大辨藤原行隆朝臣、奉行にて侍けるに、昔、一天四海の民土にすゝめて御建立侍りける。今度も勸進上人をやつけられ侍べきよし、勅答申ければ先例にまかすべきよし宣くだされける刻、奉行辨、祕に法然上人に御勸進侍なんやと、内議の返答に、源空は勸進のうつは物に非ず、同行修

乗坊に申合べき状はからひて、彼上人に被<sub>レ</sub>召仰侍けるところ

抑この勸進、修乗坊うけとり給てのち、廣十方施主をすゝむるにこのしるし、はかりがたし。いかゞして奉加の得不得を知べきの評定ありけるところに、法眼顯眞云、一乗妙典は八軸の經王、文字のかず、六萬九千三百八十四字也。この文字を阿彌陀佛の上におきて、彼名號を檀那の字として、比丘、比丘尼、優婆塞、うばいの四部の衆にくばりて、猶あまる字あらば法花經何部也ともとてかへして人々に結縁せしめて、九品三輩のともとや侍べきよし、相議して其名字を賦とる重源和尚、唐の善導和尚眞像をわたし給て、上人にたてまつらしめ給に道俗男女、はじめこれを禮し給へる

勸進内藏の圖

眞像禮拜の圖

後鳥羽法王御宇建久元年庚戌秋清水寺にて上人、説戒の座に念佛すゝめ給ければ、寺家大勸進沙彌印藏、瀧山寺を道場にて不斷常行三昧念佛はじめける。開白發願して能信、香爐をとりて行道をはじめむ。願主印藏、僧範義、自餘不<sub>レ</sub>分明比丘、比丘尼、其數をしらず。其間、南都古年童出家して、念佛衆に交て、高聲念佛申て松苑寺邊に、私宅往生をとぐ。能信、如法經の紙苧をうへながら、往生人の縁をむすぶ。入棺前火やくをつとめて還に、異香、衣のうへに薫ず。人々奇異のおもひをなすと云々

仁和寺の入道法親王夢想告云、斯瀧は過去にもこれありき、現在にも是在、未來にもあるべし。

是則大日如來の鏡字の智水也と示して同詠じ給詞。清水の瀧へまいれはおのつから現在安穩後生極樂

清水寺瀧の圖

靈山寺にて、三七日不斷念佛間、燈なくして光明あり。第五夜におのく行道、まじはりて、勢至菩薩、同列にたち給へる事を、ある人如夢拜して、上人にこのよしを申。さる事侍らん、返答。餘人更不能禮之

勢至菩薩行道の列に立ち給ふ圖

弟子能信、吉水の禪房參て天台宗文句第一卷讀書之日、上人、世中のつねならぬ事を、教訓詞云、咄哉諸有苦輪、轉如水月、不堅如芭蕉、亦如幻影響、如來大勇猛、功德超三界、猶爲無常風漂流而不住、凡生死の無常、いはざるにしりぬべし。そのうへ難捨妻子珍寶あるも、勇士の交陣如歸死、丈夫向道有何辭、初入恆難永無易、由難若退何功成云々父母親族、生々の恩所、世々に如何がわすれん。しかれども何功か成ぜんと思べき也。讀書云、至理無名而流四天之下、眞乘不動而出三界之中と承ば、今より心あらば、まことにさとりもひらきつべし

能信讀書の圖

後白川法王にめされて、説戒並往生要集を談ぜしめ給に、往生極樂の教行は濁世末代の目足也。道俗貴賤、誰か不歸之侍けるより、各心肝に銘じて、いまはじめて聞つるやうに、隨喜かむ涙。仍太上法王、院勅をくだして右京權大夫隆信朝臣に、眞影をうつさしめて、將來のかたみにそなへま

します

殿上説戒辨説の圖

依院宣之旨、右京權大夫隆信朝臣、上人の眞影をうつしたてまつりて、遙に蓮花王院の寶藏におさめしめ給べきに侍りけり

隆信眞影の圖

仁和寺の法親王より御師徳のよしにめさるといへども、隱遁の身におそれて祇候にあたはず。雖然、八條女院、懸福門女院、宜陽門女院、七條女院、准后宮、大臣、諸卿、戒文授者、念佛の歸依おほしといへども關東には熊谷入道、鎮西には聖光等、教門に入しより他宗をのぞかざるともから

弟子辨阿者、上人入室後、先遣伊州弘通念佛。還鎮西建立於光明寺。致道一切衆生。遂往生。宛如本望。

聖光及熊谷入道入室の圖

後白川法王の御爲に、建久三年秋、大和入道親盛見佛、八坂の能引導寺に、七日、念佛つとめける。次に禮讚の先達に、心阿彌陀佛、二條院御藏法則次第能侶授之其結願に、種々捧物を取付侍りければ、上人、ことのほかなる景色にて、念佛は自行のつとめ也。法王の御菩提に、廻向したてまつるところに、布施みぐるしき次第也。ゆめ／＼あるべからずといましめ給。これ六時禮讚のはじめ也

南無釋迦牟尼佛等、一切三寶我今稽首禮、廻願往生無量壽國

住蓮、安樂、心阿彌陀佛、沙彌見佛

禮讚修行の圖

大佛殿説法の圖

觀經曼陀羅、唐より奉渡して開題轉場の次に、天台の大乗十戒を解し給に、いさゝかの訛謬侍りけ

れども、當寺の古徳のなかに兼日の夜の夢に、聊靈異しめすことありける間、件の次第、さきだちて披露侍りければ、大衆の中に、おのおのくちをとどて云事なかりけりとぞ、都の人くは巷説し侍ける。無品親王靜忠御惱の時、門徒の高僧等、大般若經奉轉讀、各祈請申ども、猶御平癒の景色ましまさざりければ、上人を招請したてまつり、臨終の次第ども御尋仰らるゝところ

親王上人對座の圖

令旨仰云、いかゞして此たび生死をはなれ候べき。後生たすけさせ給へ。往生極樂の御願、御念佛にはしかず。佛曰、光明徧照、十方世界、念佛衆生、攝取不捨

法然上人、僧正行舜、僧正公胤、僧正覺實、法印顯忠、法印圓豪、石金丸、法印公雅、法印道嚴、法印信觀

この三人の法印は、御障子のうちにて、其形貌みえ給はず。各くの官位は後日の交名をしるす。

土御門  
中院御宇元久元年<sup>甲</sup>十一月七日普告門人七箇條の起請文云、取要略之

一、一句文をうかゞはずして、眞言止觀を破する事

二、無智身をもて物を論ずる事

三、別解人と、本業をすて、強嫌嗤事

四、念佛に戒行なしと號して專姪酒食肉をすゝめて、たましく律儀の人をば雜行と名て、彌陀の本

願には説勿恐造惡事

五、癡人の、聖教をはなれて、師説にあらざる事をもて、智者に咲事。これは無智大天狗來て猥く邪義述て九十五種異道、尤可恐之

六、癡鈍身をもて殊唱導を好て、正法を不知、種々邪法を説て、恣妄説を成て、世間人を誑惑し、過殊重、寧國賊にあらずや

七、右各雖一人説、所積爲予一身衆惡、汚彌陀之教文、揚師匠之惡名、不善之甚、無過之者也

以前起請如此。一文を學する弟子等、年來、念佛を修といへども聖教にしたがふ故に、人の心よの聞をおどろかさず。近來、不善のともから、たゞ彌陀の淨文をうしなふのみにもあらず、兼は釋迦の遺法をけがす。何不加炳誠乎。猶背制法輩は、是非予門人、魔眷屬也。更不可來草庵。自今以後、各隨聞及、必被觸之。餘人勿相伴、若不然者同意人也。彼過如作者、文其略之所詮、大旨如此

座主問狀の圖

天台座主、御問狀付て誓文を進給。其詞云、源空偏勸念佛教、謗餘教法、諸宗依之凌夷、諸行依之滅亡云々。凡彌陀本願云、唯除五逆、誹謗正法、云々勸念佛之徒、爭謗正法、惠心要集云、聞一實道、入普賢願海、云々欣淨土之類、豈捨妙法哉。但老耄遁世之輩、以極樂可爲所期、以念佛可爲所行之

由、時々諷諫。是則齡衰不能練行、性鈍不堪研精之間、暫置難解難入之門、試示易往易行之道。佛智猶設方便、凡慮豈無斟酌哉。敢非存教是非、偏思機堪不也。此條若可爲法滅之緣者、向後宜從停止。云々此則以僻說弘通、以虛誕披露。尤可有糺斷、尤可有炳誠。所望也。所欣也。此等子細、去年沙汰之時、進起請了。其後、于今不變改。不能重陳、嚴誠既重疊之間、誓狀又及再三。上件子細、一事一言、以虛誕設會釋者、每日七萬返念佛、空失其利、墮在三途、現當二世依身、常沈重苦、永受楚毒。伏乞當寺諸尊、滿山護法、證明知見 源空敬白

同三年七月、吉水を出て小松殿に移り給て、明月を詠じ給ける

小松とはたれかいひけんおぼつかを雲をさゝふるたかまつのきを

權律師隆寬 小松殿參向の時、上人御堂の後戸に出對給て一卷の書を持って隆寬律師の胸間に指入、依月輪殿之仰所撰選擇集也

松樹、選擇付周の圖

禪定殿下、上人、法印聖覺、同日同時、瘡心地し給事、おぼろげならずましくけるあひだ、殿下仰に安居院を囑して、淨土の教文を講じて彌陀本誓を解説せしめば、隨喜の心をおこして除病安寧の効驗もありぬべしと御評定ありて、道場を莊嚴して稱揚讚嘆はじまりければ、殿下、至誠心をいたし上人、深心をふかくして、御導師、廻向發願の心をねんごろにし給ければ、

三所に三心を具足して、一座に御歸依あらはれにけりといふ事、末代の奇特、天下にひびくところ如件

癡病祈願の圖

元久二年乙丑四月一日、於月輪殿、淨土の教籍、御談數剋の後、御退出の時、遙に南庭をおはしましける御うしろに頭光を現じ給ければ、禪定殿下くづれおりさせ給て、稽首歸命したてまつりて、悲涙千行萬行

(圖中列僧の銘記)

頭光顯現の圖

沙彌戒心 阿闍梨尋玄

上人は始は戒をときて人に授、後には教を弘てほとけになさしめ給。故に於日域而施無畏、宛如照觀自在王之蒼天、於月輪而示有光明、知可得大勢至之白毫、諸佛菩薩の大悲利生、おほくましませども、安立器世間のはじめより、劫末壞劫のすへまでに、日月のひかりにふれざる情非なかりけり。この故に、いざなぎ、いざなみのみこ、觀音、勢至の垂迹、日月として、世をてらしめます。又二菩薩の化をほどこして、九品蓮臺をひらき給、末代なりといへども誰人か疑をなさん。仰で信べしと思て、心のはやりのまゝに七旬の老眼に悲涙を抑て泣、一人の同法をすゝめて後素をしるす。留贈後見、共期佛惠矣

嘉禎三年丁酉十一月廿五日筆功已畢

此繪披見之人、奉禮三尊之像、其詞説明之輩、讀誦大經之文、願身口意之行、念阿彌陀之名、往生極

樂之志無貳、勿疑之也。爰耽空執筆而草旨趣、觀空和墨摸畫圖、願結一佛淨土之緣、共證九品蓮臺之果、乃至無遮平等 敬白

耽 空 在判

觀 空 在判

おもひ入やすち筆ゆみはりの月のつよくもひくかたそかし

弓はりの月は大地を的としのおもひ入よりはつしけそなき

### 傳法繪流通卷三

上人、入學のはじめ諸一切種諸冥滅拔衆生出生死泥とうけたまひしより、ふかく此理を信じて化度の心ざしあさからずして、諸宗は學するにしたがうて開悟、萬法は行ずるごとに證得し給ありさま、あらゆる後素を東界にとどめて前途を西刹に望あまり、世のそしりをしらず、訛謬あらばかきつくろはせたまへ。人のあざけりをわする、あやまちあらばすて給へ。爰念佛の行人の中に宣下云、顯密兩宗、焦丹府歎息、南北衆徒、捧白疏而辯訟。誠可謂天魔遮障之結構、寧只非佛法弘通之怨讎乎。遂源空門弟等、不思議を示て、仰答於本師、遠流處らる。凡往生極樂のみちまちくなるあひだ、名號の一門を開て、代にしたがふてひろめ、機にかぶらしめてさづくる中に、みづから邪儀

をかまへて、僞て師説と號する刻、予一身につみながれて、遙に萬里のなみにながれにけらし。但この事をいたむにはあらず。むかし教主釋尊は因行のとき、檀施のあまり、父の大王にいましめられて、かすかなる山にこめられ給しかども、其志不懲して、ますく修し給しかば、彼山を釋迦山と號して、つるに正覺のにはとなりけり。愚老一人衆生をわたさず、諸佛菩薩またくかくのごとし。然者更にうらむるところなし。敢てなげくことなかれ。抑結縁は順逆にわたり、引接人をきらはず、來迎に前後あり、遲速は人々の心なるべし

上人つねに人にむかひて唱たまへる文云、佛告阿難、汝好持是語、持是語者、卽是持無量壽佛名云々、以之上人私曰、雖聞名號、不信之、如不聞之、雖信之、不唱之、如不信之。只つねに念佛すべしかゝるほどに小松殿に、鞞かけられ給にけり。建永二年卯二月廿七日、還俗の姓名を給源元彦、配所土佐國。しかは侍けれども、月輪の禪定殿下の御沙汰として法性寺の小御堂に逗留、同三月十六日都を出給、信濃國角張成阿彌陀佛、力者の頭領として、總て我もくくと參勤 六十餘人

力者小松殿へ參勤の圖

この次第をみる人々、なげきかなしみければ、かれらをいさめむがために、驛路は是大聖のゆくところ。漢には一行闍梨、日本には役行者。謫所は又權化のすむ砌也。震旦には白樂天、我朝には菅丞相也。在纏出纏皆火宅也。眞諦俗諦しかしながら水驛也。爰角張者、俗姓は早いでにき。王家を

守多田の苗裔、法家に始て入。朝敵を拉伊州の玄孫なれども、本師上人に従て奴と也、僕となれり。

故盡力輿を昇、同採花汲水の役をいとはず、捨身給仕、兼朝粥非時の膳をいとなむ

同日、大納言律師公全 西國へながされ給けるは、律師の船、さきに出けれども、上人、くだらせ給とき、しばらくおさへて、上人の船にのりうつりて、律師、一目をみあげて、上人の膝に、かしらをかたぶけて、なくこゑ天をひびかすといへども、上人は涙をもたてず、念佛しておはしけるほどに、律師の船より、とくくと申ければ、いよ／＼なごりをおしみながら本船にのりうつり給にけり

遺流の首途の圖

室泊につき給ければ君だちまゐり侍けり。むかし小松天皇、八人の姫宮を七道につかはして、君の名をとゞめ給中に、天王寺別當僧行尊 拜堂のためにくだられける日、江口、神崎の君達、御船ちかくふねをよせける時、僧のふねに、みぐるしくやと申ければ、神歌をうたひいだし侍ける

うろちよりむろぢにかよふ釋迦だにも羅睺らがははゝありとこそきけ  
と打いだし侍ければ、さまざまの纏頭し給ける

又をなじきとまりの長者、老病にふして、最後に今様歌

なにしに我らがおいにけん、思へばいとこそかなしけれ。いまは西方極樂の、みだのちかひをた

## のむべし

とうたひければ、むらさきの雲、青海波にたなびき、音楽、人に聞て、異香、身にかほりつゝ、往生をとげ侍ければ、今、上人をおがみたまつりて、同じく其縁をむすばむと、をのをの申侍ける

## 宰泊遊女結縁の圖

同三月廿六日、讃岐國塩飽地頭駿河權守高階保遠ノ道西仁が館に寄宿。種々にきらめきたたまつりて、温室ユキヤいとなみ、美膳そなへたてまつるこゝろざし、いとあはれにこそ侍めれ。それにつけても念佛に縁なき衆生は、この事となくそしりあざけり難ずるは、天魔波旬のいはするか、外道邪鬼の思はするか。たとへば鸚鵡のよく物をいふ、人の云ざることをばいはず、山母の人の思をしる、おもはざる事をばさとらず。凡大天狗の媚て、よき刻限に生たる衆生を、さまたげとらかして、大善根をうゑさせぬか、不輕大士の罵晉にたえてもすゝむべし。杖木を忍ても、かまえてみちびき侍らばや、いかなるはかりごとをめぐらし侍べき。この心に住してをのくすゑの世までも、人々をこしらえて念佛をすゝめ給へ。あへて人のためにははんべらぬ事ぞと返々補屬し給

## 地頭西仁饗應の圖

讃岐國少松御庄、弘法大師の建立、觀音靈驗の地

生福寺につき給。抑當國に、同大師、父の御ために、其名をかりて、善通寺と云伽藍おはします。

起又云、これに參せん人くは必一佛淨土の友たるべきよし侍ければ、今度のよろこび是にありとて尋まいり給ける

善通寺參詣の圖

左辨官下土佐國

應早召還流入源元彥身事

使 使部

火長一人

右件元彥、去建永二年二月廿七日、坐幸配流土佐國

而今依有所念行所被召還也。者某宣奉勅。件人宜令召還。者國宜承知依宣行之

建永二年八月日 左大夫小槻宿禰國宗

恩 免 の 圖

かくていまだ入洛にはおよばず。勝尾山勝如上人往生の地。いみじくおぼして、しばらくおはしければ、花夷男女道俗貴賤まいりあつまり侍ける

勝尾山降樓の圖

恆例引聲念佛、聽聞のとき衣裳ことやうに侍ければ、弟子の信空上人に件子細をしめして、裝束勸進のよし侍ければ、ほどなく法服一襲十五具すゝめいたして、持て參給ける。感にたえず、住侶等臨時に七日七夜の念佛勤行し侍ける。住僧、各隨喜悅豫して、法印聖覺唱導として開題讚嘆の後、夫八萬法藏は八萬の衆類をみちびき、一實真如は一向專稱をあらはすところ。用明天皇の儲君、御

誕生に南無佛と唱給。其名をあらはさずといへども心は彌陀名號也。慈覺大師念佛傳燈は、經文を引て寶池の波に和し、空也上人念佛は音をばたて、徳をばしらず、惠心僧都の要集には二の道をつくりて、一心のものはまよひ、永觀律師の往生講式には、七門をひらきて一扁にはつかず。良忍上人の融通、神祇冥道にはすゝめ給ども凡夫の望はうとうとし

爱我大師法主上人、行年四十三より、念佛門に入て、あまねく弘給に、天子のいつくしき玉冠を西にかたぶけ、月卿のかしこき、金釵を東にたゞしくす。皇后のこびたる、韋提希のあとををい、傾城のことんなき、五百の侍女をまなぶ間、とめるは、おごりてもてあそび、まづしきはなげきてものうし。農夫が鋤をふむ、念佛もて田歌にし、織女がいとをひく、念佛をもつてたてぬきにし、鈴ならず驛路には、念佛をもつて鳥に擬し、ふなばたをたゞく海上には、念佛をもつて魚をつり、雪月花をみる人は西樓にめをかけ、琴詩酒のともがらは、にしの枝のなしををる。ちなみに彌陀をもてあがめざるをば、瓊瑾とし、珠數をもてくらざるをば恥とす。是以、花族英才といへども、念佛せざるをばおとしめ、乞匈非人といへども念佛するをばもてなす。故に八功德水のこえには、念佛のはちすいけにみち、三尊來迎のいとなみは、紫臺をさしをくひまもなし。しかれば我等が念佛せざるは、かの池の荒廢也。我等が欣求せざるは、其國のうれへなり。國のにぎほい、佛のたのしみ、念佛を以、基とし、人のねがひ、我がのぞみ、念佛をもてさきとし、仍、當座愚昧、公請につ

かへて還る夜は、念佛を唱て枕とし、私宅をいで、わしるひは極樂を念じて車をとばす。これ上人の教戒、過去の宿善にあらずやとて、鼻をかみてこゑむせび、舌をまきてととこほるきざみ、法主なみだをながし、聽衆、袖をしぼりて、悉念佛門になびきて、併上人のすゝめにかなふ、住侶八十四人、面々に上人の興隆をよろこびて、一山のため、萬代のかたみ、如何でか其廣恩を報せん。昔戒成皇子、金泥の大般若供養の砌、山上の草木、ことごとくくなびきて、南なるは北にふし、西なるは東になみよりし。西基の松いまに西谷に侍り。其谷を上人御經迴のあひだ、廻向したてまつりてなつみ、水くむわづらひなく、このみをひろい、つまきをこるたよりとあるべきよし申て、いくほどなくして、歸京のよし聞えければ、一山なごりををしみて、九重の雲におくりたてまつる

龍顔逆鱗のいましめをやめて、烏頭變毛の宣下をかぶり給しより、勝尾に隱居ののち、鳳城に還歸あるべきよし、太上天皇の院勅をうけ給はらしめ給ければ、吉水の前大僧正慈鎮の御沙汰として、大谷の禪房に居住し給

鳳城還歸の圖

權中納言藤原光親 卿奉行にて歸京のよし被仰下侍ける時、もとよりかくこそは侍るべかりける

吉水の庵室の圖

## 本朝祖師傳記繪詞卷第四

此卷原本無題號  
今做他卷加之

或時、宮仕人かとおぼしくて尋常なる尼女房たち、あまた上人へ參て、罪深我等ごときの五障の女人も、念佛申ば、極樂往生すべきよし仰の候なるは、誠に侍やらん、委承たきよし申されければ上人被仰けるは彌陀の本願を憑むより外には、女人更に往生の望をとぐべからず。本願の忝事を能々可令聞給。女人は障重して、罪深故に、一切の處には皆嫌たり。是則、内に五障あり、外に三從ある故也。五障と云は、一者不得作梵天、二者帝釋、三者魔王、四者轉輪聖王、五者佛身とならずと云り。既に大梵高臺閣にも嫌て、梵衆、梵輔の雲を望事なく、帝釋、柔輓の床にも下されて、卅三天の花を翫事なし。六天魔王の位、四種輪王の跡を望に、永絶て影をさざれば、天上天下の賤き果報、無常生滅のつたなき身にだにもならず。況諸佛の淨土に不可思寄。此日本國だにも、貴くやごとなき靈地靈驗の砌には皆悉嫌たり。比叡山は是傳教大師の建立、桓武天皇の御願所也。大師、自結界して谷を堺、峰を限て、女人の形を入られざれば、一乗の峯、高顯て、五障の雲たなびく事なく、一味の谷深して、三從の水流るゝ事なし。藥師醫王の靈像は、耳に聞て目にはみず、大師結界の靈地は、遠見て近く臨まず。高野山は弘法大師結界の峰、眞言上乘繁昌の地也。三密の月輪普雖照、女人非器の暗をばてらさず。五瓶の智水ひさしく雖流、女人垢穢のあるをばすゝがず。聖武天王の御願十六丈金銅の舍那の前には、遙是拜見、扉の内は、不被入。天智天皇の建立五丈石像の彌勒の前は、仰て是禮拜ども壇上には障あり。乃至、金峯の雲上、醍醐の霞の底までも女人

更にかげをささず。悲哉、雖有兩足、上ざる法の峯あり、ふまざる佛の庭あり。恥哉、雖兩眼明、見ざる靈地あり、拜ざる靈像あり。此穢土の瓦礫荆棘の山、泥木素像の佛だにも、猶其障ある程の罪重き身なれば、諸經諸論中に嫌、在々所々に擯出せられて、三途八難にあらずよりは、趣べき無方、非六趣四生よりは受べき形もなし。然者、道逼は經を引て十方世界、女人有處には必地獄有と釋し給り。如此三世の諸佛にも捨終られ、十方淨土にも門をさされたる罪惡の女人をば、只彌陀のみぞ助救はんと云願を發給る可誠憑ある物也。所謂四十八願中の第十八の念佛往生の願には、十方衆生至心信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺と誓給は、一切善惡の男女、皆是に漏たるはなけれども、第卅五の願に、別して女人往生の願を立り。是則女人は、よもと疑をなして、念佛往生の益に可漏故、別して女人往生の願をば立給る也。つたなき穢土の堺だにも、猶嫌たる女人なれども、本願を憑、名號を唱ば、出過三界、萬德究竟の報土に、迎と願じ給へる廣大慈悲の忝さは中々詞を以も難述者也。善導和尚、今の女人往生の願を釋給るに、彌陀の大願力による故、佛の名號を稱れば、命終時、女人を轉じて男子となる事を得て、彌陀、手をさづけ、菩薩、身を助て、寶花の上坐し、佛奉隨て往生し、無生を悟とも釋し、又一切の女人、若彌陀名號願力によらずば、千劫萬劫恆沙劫を經とも、女身轉する事を不可得と釋給へり。此度彌陀の本願に相て、最後臨終に男子の身と作れまいらせて、彌陀如來の御迎に預り、觀音大士の金蓮に乗て奉、無數の化佛、無量の

聖衆に圍遶せられ、須臾の間、無漏の報土往生して、無量の快樂に預らん事は、喜あらずや。ゆめ／＼念佛物うからず、やすき念佛申て可得樂を物也とて、本願の貴、憑しき次第を、かきくどきの給ければ、其座に侍ける女房たち、皆々涙を流して、念佛門に入れり。是を傳聞女房、寧念佛にいさみながらんや

## 女人法談聽聞の圖

次年正月二日より老病のうゑに、日來不食彌增氣。凡此兩三年、耳も不聞、心も毫々として前後不覺にまし／＼けるが、更如昔明々になりて、念佛つねよりも増盛也

仁和寺に侍ける尼、上人往生の夢に驚て、參じ給ける

病床のむしろに、人々問たてまつりける。御往生實否如何。答云、我本、天竺國に在るとき、衆僧に交て、頭陀を行じき。今日本にして天台宗に入て、かゝる事にあへり。抑今度の往生は一切衆生結縁のため也。我本居せしところなれば、たゞ人を引接せんと思

## 病床御物語の圖

十一日、上人、高聲念佛を人にすゝむとて云、此佛を恭敬し、名號を唱人、一人も不空と云て、彌陀功德を種々に讚嘆し給。彌陀常影向し給、弟子等不拜之哉云々 そのうち二十日頃より念佛高聲にねんごろなり。助音の人々は、おのづからこゑをほのかにすといへども、上人の音聲は、ます／＼盡空法界にもひゞくらん。抑けふよりさき、七八年のそのかみ、ある雲客飛陸朝臣夢に、上人往生のゆふべ、光明遍照の偈を唱べしと、つげをかふむりしち、いまこの文をとなへて、廿四日より、廿

五日の午正中にいたるまで、念佛高聲にして、如夢文を誦し給事、時にかなへり。天日光明をほとこす、觀音の照臨もとよりあらたなりといへども、紫雲虛にそびて、勢至の迎接おりをえたり。爰に音樂、窓にひびく。歸佛歸法の耳をそばたて、異香室にみたり。信男信女の袖をふるゝ間、慈覺大師附屬の法衣を著して、頭北面西にして、念佛數遍唱給の後、一息とゞまるといへど、兩眼瞬がごとし。手足ひへたりといへども、唇舌をうごかす事數遍也。行年四十三より、毎日七萬遍にて、無退轉云々

光明遍照十方世界 念佛衆生攝取不捨 南無阿彌陀佛 々々々

兼日に往生の告をかふる人々、前權右辨藤原兼隆朝臣、權律師隆寛、白川准后宮、別當入道、

尼念阿彌陀佛、坂東尼、一切經谷住僧大進公、陪從信賢シフネ、祇陀林經師、薄師眞清マキキヨ、水尾山樵夫、

紫雲見之(以上圖中)  
の詞書

御往生の圖

于時建曆二年壬申正月廿五日午遷化行年滿八十伏以、釋尊圓寂の月にすゝめる事一月、茶毘の煙ことな

りと云ども、彌陀感應の日にしりぞくこと十日、利生の風これ同耶。觀音垂迹の勝地、勢至方便の善巧如此。然後、門弟等、世の傍例にまかせて、遺骨をおさめ、中隱ををくる

初七日 御導師 信蓮房

不動尊

大宮入道内大臣御家之御諷誦文云

夫觀、先師在世之昔、弟子遁朝之夕、凝一心之精誠、受十重之禁戒、故憑濟度於彼岸、敬修諷誦於此砌。莫嫌少善根、必爲大因緣、仍爲飭蓮臺之妙果、早叩霜鐘之逸韻矣

別當前周防守源朝臣盛親敬白

初七日法事の圖

二七日

普賢菩薩

建曆二年二月十三日、別當入道孫不知名、夢想に、上人御葬送、清水寺の塔に入給ぬと見て後、一兩日をへて又夢に、隣房の人云、御葬送に不<sub>レ</sub>會遺恨の由申に同事也。御葬のところへまいり給へ。依之彼所參の處、八幡宮の御戸開とおほゆる所に、八幡宮の御體也と申。隣人答云、此こそ法然上人御體よと申につけて、大菩薩の本地を眞道上人祈請申給しかば、示し給文に、昔於靈鷲山說妙法花經、今在正宮中示現大菩薩と示給しかども、行教和尚のたもとのうゑに、あみだ如來うつり給。また垂迹を申せば、むかしは、鷹とあらはれ、いまは鳩と現じます。鷹鳩易變、釋迦彌陀如此。娑婆にしては釋尊、安養にしては彌陀、只一體分身、更にうたがふことなかれ

三七日 御導師 住信房

彌勒菩薩

末弟耽空法師捧誦經物、唐朝の王義之摺本一紙面十二行八十餘字書之

にしへ義之よやくべきみちのしるべせよむかしもとりのおとはありけり安息園之鳥故云々

四七日 御導師 法蓮房

正觀音

弟子良清願文云、先師、當末萬年之始、弘彌陀一教の勝。智惠提劍、莫耶之鋒非利。戒行瑩珠、摩

尼之光比明云々 三度、遺弟聞酷烈之氣、情思誠諦之言、雖詰菩提之願、揭焉意旨彌以伏膺云々

五七日 御導師 權律師隆寛

地藏菩薩

弟子源智願文云、彩雲掩軒、近見遠見而來集、異香滿室、我聞人而嗟嘆矣

六七日 御導師 法印大僧都聖覺

釋迦如來

無動寺前大僧正慈鎮御諷誦文云、佛子、上人存日之間、時談法文、常用唱道、結緣之思不淺、濟度之願如深。因茲、當七々忌辰、聊修諷誦、三鳴花鐘、擎法衣、送往生之家、解脫之衣是也。設法食、儲化城之門、禪悅之食是也。然則幽靈答彼平生之願、必往生上品之蓮臺、佛子因此圓實之廻願、早得最初引接也 御自筆

七々日 御導師 三井僧正公胤

別當法印大和尚位增圓 奉

兩界曼陀羅阿彌陀如來

七七日法事の圖

僧正公胤念佛破文を作て種々難をもて、上人を非し給に、一々にくつがへして次第をのべ給に、條々會釋に、其罪障懺悔のために、中隱の唱道を望日。信空願文云、先師廿五歳之昔、弟子十二歳之時、恭結師資之約契、久積五十之年序。一旦隔生死、九廻觴欲斷。自宿叡山黑谷之草庵、至移東都白河之禪房、其間云撫育之恩、云提撕之志、報謝之思、昊天罔極。是以顯彌陀迎接一軀之形像、安胎藏金剛兩部種子。又摺寫妙法花經、書寫金光明經各一部、以開眼、以開題。一心之懇志、三寶宜知見云々凡此間、佛事を營、諷誦を行人々、數をしらず。然後、はるかに五箇年をへて、建保四年丙子四月二十六日夜夢に、聖人告云

往生之業中 一日六時刻 一心不亂念 功驗最第一 六時稱名者 往生必決定 雜善不決定 專修定善業 源空爲孝養 公胤能說法 感語不可盡 臨終先迎接 源空本地身 大勢至菩薩 衆生爲化故 來此界度々

公胤感夢の圖

同閏六月廿日、種々の瑞相をしめして、僧正公胤七十二禪林寺の砌にして、往生の儀式、紫雲はるかに孤射山より槐門よりみえて、太上天皇、院使をつかはし、准后宮、土御門の内大臣家より、かたぐ

車馬をとばして、花浴、邊土、人々、耳目を驚し侍りける

崇徳殿の事

元仁元年<sup>甲申</sup>正月、大谷修正に詣、梵唄引之後、念佛に交。同八月三日、定生房往生の跡に、五日、法蓮上人の沙汰として、以定佛爲後房主。四十九日に、法花經、金光明經、淨土三部經開題。導師就空。同九月廿五日、善光寺房生藝居障紙に

世の中になしとてこそはしのばれめありては人にいとはれしはや

大谷本廟の圖

抑延曆寺梨子本は、實相圓融の房、青蓮院は黃門皇胤の跡也。各四明一山の貫首に備て、共兩門三千の頭領とまします賢哲、或は平生の筵に以上人念佛の先達とし、或は存没の庭に諷誦を捧て、往生の後會をちぎる。其間、學侶員數は三千に限と云ども法性制定は萬法につくしがたし。たとへば淨名の室の内に三萬二千の床をたて、螻蟻のつかの間に五智萬徳の體をおさむるに似たり。然者東西楞嚴の衆はたとひ墳墓を傾べくとも彼此憲政の流は、争か遺骸をおろそかにする事を得んや。高巖たかくして、四十五尺の波よりもしろき我山、長安ながくして、百千萬莖の薺よりもあをきみやこに、院宮みはらよりはじめたてまつりて、都鄙貴賤むらがりあつまるるとき、本山のため、いかなるあやまりかきこえけん、後堀川院御宇、金剛壽院の殿座主僧圍基御治山の時、嘉祿三年<sup>亥丁</sup>六月廿一日、山の所司專當つかはして、大谷廟堂こぼちすつべきよし侍りけるに東宮入道、出向て云、汝等何人ぞや、左兵衛尉藤原盛政法しが、近隣に目を驚し、心をさかはしむ。其子細あらはすべから

ず。天廷をおどろかしたてまつり別しては將軍家に誰ても申て後、是非に隨て左右すべきところにみだれがはしき事から、すみやかにとゞむべし。これ關東御下知の趣きなり。若この制法にかゝはられぬならば方にまかすべし。更にうらむるところなかれと云に、猶とゞまらざりければ

## 廟堂破却の圖

兼て其由は申侍ぬ。醫王山王もきこしめせ、念佛守護の鎮守赤山大明神にかはり奉りて、魔縁打はらい侍らん。僞て四明三千の御使と號して、媚て四魔三障のむらがり來か。髻は主君のために、そのかみはやしてき。今は師範のために、忽に思きる。縦萬騎の兵物むかふとも、争か一人當千の手にかゝるべき。思きや、戦場の薙をもて往生淨土の門とせん事は。はからず凶惡のともがらをも、善知識の因縁なるべしと云事は。各南無阿彌陀佛と稱すべし。只今汝等が命は、一々にほろぼしてん。諸共に九品蓮臺の同行。善惡不二のをしへ、邪正一如のをきては、山門のつかいならば、きゝしりぬらん。顯には關東の御家人、弓箭につかへて狼藉をふせぐべき身也。冥には西土の念佛者、魔軍いかでかはらはざらん。抑死人には、たとひ宣命をふくむとも、遺骨に誰か威勢をほどこせるや。そのかたはらに乞匄非人めらみえきたるなんの故ぞや。奇怪也。不敵也。但馬のはな、矢さきには、いぶせく、けがらはしければ、かくべからず。ながく日本國の大地をおいはらふて、他方世界へすつべしと云かけて、子息一人相具してかけいるに、面をむかふるものなし。くものこをちら

して、けらのたけりとぞなりにける

山徒擊退の圖

件夜、改葬、宇都宮の入道守護のために遁世の身也と云ども、いでにし家の古人をまねきて、俄の事なれば、五六百騎の兵士をもよほして、宿直すとて、哀哉、昔は死生不知の譽をほどこさんと思しかども、今は往生極樂の名をとゞめんと願す。宿習のたすくるところ、只ごとにはあらじ

墳塋發掘の圖

情往來を思ば、祖父金吾朝綱朝臣、東大寺の脇土觀世音菩薩造立したてまつりて、かたみを東海に留め、孫子沙門賴綱法師は、西方界の教主彌陀如來に逸歸して、たましひを西刹にまかす。祖孫ちざりふかく、前後たのみあり。しかうしてやうやく洛中をとほらせ給に面々に涙をながし、各々に袖をしぼる、恐は雙樹那含のゆふへのいろ、門々に水をまうけ、戸々に唇をうるほす、拔提河のみぎはをあゆむにいたり。六月廿三日炎天の事なれば、このほか、もよさぬ武士、其かずをしらず。是偏に但念佛行人、一向欣求のともがら、總て千餘騎の勢也。彼月支、梅檀の尊容をぬすみたてまつりし時、若干の群兵をこして、うばゝんとくわだてき。日域、靈骨を改葬せん時、寧災難なからんや。仍かれも矯り、是も手ぐすねをひく

遺形護衛奉送の圖

東行西行、ほどへにければ、火葬したてまつる、やうくの奇瑞どもきこゆ。靈雲そらにみち、異香庭にかほる。然後、模眞影以修月忌、設禮奠以行遠忌。門々戸々誰家にか不<sub>レ</sub>惜三五夜中光を、國々處々何限にか不<sub>レ</sub>望六八弘誓之雲哉。然間、遺弟之誨、一念多念、はるかに續<sub>レ</sub>末法萬年之命、貝葉之種、六特別時、鑿研<sub>レ</sub>本願三輩の心。

## 茶 毘 の 圖

上人、求法修行のはじめ先當伽藍に詣す、定て、御祈請旨侍るか。釋迦彌陀ちぎりふかく、此土、他土、縁あさからずして、遂に遺骨を、件地におさむ。初從<sub>レ</sub>此佛菩薩結緣、還於<sub>レ</sub>此佛菩薩成就、まことなるかなや。抑栖霞館は、嵯峨天皇別業、即阿彌陀堂を建立して、栖霞寺と號するかたはらに、同御厩を食堂にし、鷹屋を鐘堂にし、泉殿を閼伽井にす。今釋迦堂、泉名をかりて、清涼寺と稱するところを、今度、造營に、聖跡をやぶるのみにもあらず、五間の阿彌陀堂を、つゞめて三間にす、如何

承久二年<sup>庚辰</sup>四月八日より、一夏九旬持齋にて參籠、毎日七萬遍念佛

承久三年<sup>辛巳</sup>卯月八日より、至于同七月十五日時まで、毎日念佛十萬遍。其間、佛前異香、甚以薫入

す。仍寺僧語之全不聞之。然て經兩三日又以薫す。語之時、常住云、京極民部卿兼後聞之。自爾

以來未<sub>レ</sub>然<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>十弟子  
建立願主

弟子前權律師公<sub>レ</sub>此聖骨爲<sub>レ</sub>奉納敬建立寶塔一基同念佛三昧を勤修、奉納阿波院之御骨、これ少藏

山のふもと、中院のほとり、大乘善根の堺也

小倉山那塔の圖

凡、上人、德行白地、諸宗ゆゑしき事にこそ。まづ三論權律師寛雅、法相贈僧正藏俊天台惠光房永辨  
蘭城寺長吏僧正公胤はじめは謗じて、のちに歸す。仁和寺法親王、御歸依尤ふかし。誰人か暗夜無  
燈照室乎、誰人か慈覺大師の袈裟相傳之南岳大師誰人奉爲帝皇貴之哉誰人奉爲法皇圖之哉相承云々  
誰人奉爲攝政禮之乎、誰人奉爲諸宮諸院敬乎、誰人奉爲數代座主歸乎、誰人毎師匠還而爲  
弟子乎、誰人爲智惠第一と稱乎、誰人か現身放光乎、誰人早世之後、花夷男女每家報遠忌月忌  
臨時孝養乎、誰人毎人留眞影而持念乎。此中一德備人は、可恨餘事不足、其外離百非之輩、爭舒  
甲乙之舌乎。彼釋尊將調達同姓也、雖爲皇胤惟一也。所行將作法異覺也、姑缺相好其二者也。  
而上人、皇后卿臣之家不生て、苟雖爲遠國之土民、召殿上、猶以登高座、又公請覺道之業、無携之  
而忝傳明王、而剩被顏仰乎。是偏慈覺大師之遺風、戒文につきたる袈裟附屬の故。善導和尚の餘波、  
念佛に具する聖衆擁護の徳也。上件巨細、將來までとゞめんと念佛の處、古廟顛倒の日、無懺の思  
ふかくして、生死をいとひ、新發意の沙門、有縁のもよほすところ、互に言語をまじへ、共に畫圖  
の思案をめぐらして、後見のあざけりをわすれて前途を彼界におくる

嘉禎三年丁酉五月に始之、同十一月廿五日、於相州鎌倉八幡宮本社之邊圖之

鎮西築前國之住人左兵衛尉源光忠法名觀空云々行年卅三々々

願主沙門就空六十九

入ことにおしむけしきやみえぬらん山のころにはれぬ月かけ  
月をなをもとのすみかにやどせかしいでしも山のかげならぬかは  
わきたれも往生際にうせにける阿彌陀佛をとかりやにして

抑この繪は、ふかき心ざしあり。特留此經の傍に爲挿先師之遺德、止任百歲の間、欲備後代之美談者也。然則往日驛路之斗藪、翻爲界道林地之經行。今上子城之宣命者、宜待大閣講堂之法輪矣。者往生極樂之類將得天眼天耳他心智、欣求淨土衆、盍照人界人身願樂思也。知見無誤者、早出有爲之家、本誓有憑速入無爲宮云々

就 空 在 判

永仁二年甲午九月十三日書畢 執筆沙門寬惠滿七十 雖手振目闔爲結緣所之書也。後見念佛申可訪給

南無阿彌陀佛云々

# 法然上人傳法繪流通

〔殘缺一〕法然上人傳法繪流通 下

上人入學の始一切種諸冥滅拔衆生出生死泥と承給しよ  
〔リ〕深く此理を信じて化度の志し不淺ずして、諸宗を  
學〔す〕るに隨て開悟し、萬法は行する事に證得し給あり  
さま、□ら〔あ〕後素を東界にとどめて、前途を西刹に  
望のあまり、世の謗をしらず。訛謬あらば、かきつゝ  
ろはせ給へ。人のあざけりをわする、誤あらば捨給へ。  
爰に念佛の行人の中に宣下して云、顯密有宗焦丹符而  
歎息、南北衆徒捧自疏而贊詔。誠可謂天魔遮障之結穢、  
寧只非佛法弘通之怨讐乎。遂源空門弟等、不思議示て、  
仰答於本師、遠流被處。凡往生極樂之道まぢくなる  
間、名號一門開て代々隨弘、機蒙しめて授中に、自邪  
議を稱、偽師說號する刻、一身に罪ながれて、遙に萬里  
の波にながれをけがし、但此事をいたむは非。昔釋尊  
は因行時、檀施のあまりに、父の大王にいましめられ

下

て幽かなる山に込られ給しかども、其志不懲して、ま  
すく修し給しかば、彼山を釋迦山と號して、遂に正  
覺の庭と成にけり。愚老一人衆生度諸佛菩薩又く〔順〕如  
此。然者更に無恨所る、敢て欺事なかれ。抑結縁は巡  
逆にわたる、引接人をきはらず、來迎に前後あり、遲  
速は人くの心なるべし

上人常に人に向て唱給るる文云、佛告阿難汝好持是  
語、持是語者、卽是持無量壽佛名文。以之上人私云、  
雖聞名號、不信之、如不聞之、雖信之不唱之、如不  
信之、常に可念

かゝる程に小松殿に靱かけられ給にけり。建永二年  
丁卯二月廿七日還俗の姓名給源元彦、配所土佐國。し  
かはあれども月輪禪定殿下の御沙汰として法性寺の小  
御堂に逗留、同三月十六日都を出給。信濃國角張成阿彌  
陀佛、力者の頭領として惣て我も々々參勤六十餘人

〔殘缺二〕 門前に檢非使至るの圖

〔殘缺三〕 此次第を見人々歎き悲みければ、彼等をし

さめんがために、驛路は是大聖の行所。漢には一行阿

闍梨、日本には役行者、謫所は又權化の栖砌也。震旦

には白樂天、吾朝には菅亟相なり。在纏出纏皆火宅也。

眞諦俗諦併水驛也。爰に角張者俗姓は早いでき。王家

を守る多田の苗裔、法家に始めて入る。朝敵を拉に伊州

の玄孫なれども、本師上人に從て奴となり、僕となれ

り。故に盡力を、與昇、同採花汲水の役をいとはず、

捨身欲仕、兼て朝の粥非時の膳をいとなむ

〔殘缺四〕

法然上人配流の門出の圖

〔殘缺五〕 同日大納言律師公全西國えながされ給ける

が、律師の船先に出でけれども、上人下らせ給と聞て

暫くをさえて、上人の船に乘移りて、律師一目を見あ

けて、上人の膝に頭を傾て泣音、天を響すといへども、

上人は涙も立す念佛してをはしける程に、律師の船よ

りとくくと申ければ、彌なごりををしみながら、本

の船にのりうつり給にけり

上人の御船律師の船、諸共に下る。難波浦の水流、

海路往反是也

〔殘缺六〕

配流の海路の途中の圖

(圖中の詞) 攝津國おへしまに、とゞまり給ければ、

村の男女老若參集事、濱の沙の敷を不知。其中に往生

行勸とて、上中下の蓮は念佛の名に顯れ、轉妙法林の

貌は平生にあがむる佛也。心は此界一人念佛名云、現

存に奉行三尺の立像也

〔殘缺七〕

配流の海路の途中の圖

(圖中の詞) 此嶋は六波羅大相國一千部の法華經を石

の面に書て漫々たる波の底に沈て、鬱々たる魚貝を濟

がために、安元寶曆よりはじめて未來際を盡すまで、

結縁を、人々はいまに石をひろふてぞ向うなる

いかなる人に侍けん、汀の船の波にゆられけるを見、

南無阿彌陀佛を上をきて讀る

難波めか もかりにいづる あまをぶね

みぎはの波に たふめきにけり

〔殘缺八〕

配流の途中の圖、圖中に「明石浦」の文字あり

室泊につき給ければ、君達參侍けり。昔小松天皇八人の姫達を七道に遣て君の名を□□□給中に、天王寺(とよめ)の別當僧正行尊拜堂のために被下ける日、江口神崎の君達御船近くよせける時、僧の船に見苦やと申ければ、神歌をうたいゝたし侍ける

う露地より無露地えかよふ釋迦だにも

羅摩羅が母はありとこそ聞け

〔殘缺九〕 泊長者老病に伏して最後に今様を

名にしに我等がをいにけん、思はいとゞこそ  
かなしけれ。いまは西方極樂の彌陀の誓をた  
のむべし

とうたひければ、紫の雲青海波にたなびき、音樂人(天)  
に聞て異香身にかをりて、往生途侍ければ、今聖人拜  
見て同其縁を結と、をのく申侍ける

〔殘缺十〕 室の遊女勸化の圖

〔殘缺十一〕 同三月十六日讚岐國塩飽の地頭駿河權守

高階保遠入道西仁が館に寄宿、種々にきらめき奉りて

温室いとなみ、美膳をそなゑたてまつる志し、いとあ  
はれにこそ

〔殘缺十二〕 侍めれ。其に付けても念佛に縁なき衆生  
はその事となく謗あざけり難ずるは、天魔波旬のいは  
するか、外道邪鬼の思するか。たとゑば鸚鵡のよく物  
言、人のいはざる事をばいはず。山母の人の思をしる、  
思さる事をば覺す。凡大天狗の媚て吉刻限に生る衆生  
を、妨げとらかして大善根の種させぬか、不輕大士の  
罵言にたゑても勸べし。杖木を思てもかまゑて引導侍  
ばや、何なる計事をか廻らし侍べき。此心に住してを  
のく末世までも人々をこしらゑて勸念佛を給へ。敢  
て人のためには侍ぬ事ぞと返々補屬し給ふ

〔西仁の館に於ける饗應の圖〕

〔圖中の詞〕 極樂もかくや有覽あらたのし、とく參ら

ばや南无阿彌陀佛

〔殘缺十二のつゞき〕 讚岐國小松御庄之内弘法大師建

立、觀音靈驗之地有寺、此生福寺に付給。抑當國に同

大師父の御ために其名をかりて善通寺と云伽藍御坐。  
起文云、此に參せむ人々は必一佛淨土の友たるべき由  
侍ければ、今度の喜此にありとて即參給ける

善通寺參詣の圖

〔殘缺十三〕（前缺）而今依有所念、行所被召還也者某  
宣奉勅、件人宣令召還者宜承知、依宣行之  
建永二年丁卯八月 日左大夫小槻宿禰國宗  
弁

赦免の使至るの圖

〔圖中の詞〕 此時稱名の音彌高、山彦五須彌山にも響  
覽、願念いたりて深心池八功德池にも澄さ覽哉。故極  
樂世界に常に菩薩聖衆擡て上人來迎の雲を勸と云とも  
娑婆國土には暫念佛衆生をこしらえて我等が往生を先  
す（以下缺）

（殘缺十二のつゞき） 恒例引聲念佛聽聞の時、衣裳殊や  
うに侍ければ、弟子の信空聖人に伴子細をしめして裝  
束勸進のよし申ければ、無程法服一襲十五具勸め出し

て持て參じ給ける。感にたえず。住侶等臨時に七日七  
夜の念佛動行し侍ける

一切經施入の圖

〔圖中の詞〕 當山に一切經御坐さる由聞ければ、上人  
所持の經論渡給に、寺内の老若上中下七十餘人を遣て  
坂迎、上人御弟子殿法印御房古老住侶等各花散香燒蓋  
をさして向奉る

（殘缺十二のつゞき） 住僧をのく隨喜悅興して法印聖  
覺を唱導して開題讚嘆して後、夫八萬法藏は八萬の衆  
類を引導、一實眞如は一向專稱を顯す所、用明天皇の  
儲君御誕生、南无佛と唱給ふ。其名を顯さずといへど  
も、心は彌陀の名號也。慈覺大師の念佛傳燈は、經文  
を引て寶池の波に和し、空也聖人の念佛は音を立て、  
徳をば不知。惠心僧都の往生要集には二の道をつくり  
て、一心の物は迷、永觀律師の往生講式には、七門を  
開きて一篇にはつかず。良忍聖人の融通神祇冥道には  
すゝめ給とも凡夫の望はうとくし

〔殘缺十四〕 爰に我大師法主上人安元元年行年四十三より

念佛門に入て普弘給ふに天子の嚴しみ玉冠を西に傾、

月卿のかしこき金礪を東に正す。皇后の戀たる章提希

の跡をおい、傾城の事もなき五百の侍女を學問、富る

はをこりて以て遊、貧は欺て友とし、農夫鋤をふむ、

念佛を以て田哥にし、織女が糸を引、念佛を以て經緯

とし、鈴を鳴らす驛路には念佛を以鳥に擬し、舫をた

たく海上には念佛を以魚をつり、雪月花を見る人は西

樓に目をかけ、琴詩酒の輩は西の枝の梨子をおる。ち

なみに彌陀を以あがめざるは瓊瑾とし、珠敷をもてく

らざるを恥とす。是以花族英才といえども不念佛をば

劣しめ、乞匄非人といえども念佛するをばもてなす。

故に八功德水の上には念佛の蓮池に充滿、三尊來迎の

いとなみは紫金盞をさしおく間もなし。然れば我等が

念佛せざるは、かのいけの荒廢也。我等が欣求せざる

は其國の愁え也。國のにぎわい佛の樂み、念佛を以基

し、人の欣び我が念佛をもて先とす。仍當座の愚昧公

請につかえて還る夜は、念佛を唱て枕とし、私宅を出

てわしる日は極樂を念じて車を馳はす。此れ上人の教

戒過去の宿善に非ずやとて、鼻をかみて普むせび、舌

を卷て滯おる刻、法主なみだをながし、聽衆袖をしぼ

りて悉く念佛の門になりにき。併ら上人のすゝめにか

なふ

〔殘缺十五〕 歸 洛 の 圖

（圖中の阿） 昔釋尊の忉利の雲より下給しを、人天大

會喜びをがみ奉りしが如く、今上人南海の波坂登給え

ば、道俗男女面々に供養をのべたてまつる事、一夜の

内に一千餘人とぞ。幽閑の地をしむといへども貴賤尊

卑の集り詣る事、盛なる市のごとし

〔殘缺十六〕

法然上人生前に大谷の墓所の地に蓮華生じ、天童現ずるところの圖

〔殘缺十七〕（前缺）まじくけるが、更に如昔、明々

になりて念佛常よりも増盛也

法然上人病床の圖

（圖中の交名―右上より） 安居院聖覺、沙彌念佛房、權

律師隆寛、熊替入道、信空、（上人）勢觀房、空阿、親守大和守見佛、右京權大夫隆信沙彌戒心

（圖中の詞） 仁和寺に住侍ける尼、上人往生の夢に驚て參じ侍りける

〔病〕  
□床筵に人々問奉ける。御往生の實不如何。答云、我本天竺在時、僧交て頭陀行、今日本國而天台宗入、かゝる事に遇。抑今度往生は一切衆生結縁のため也。我本居住せし所なれば只人を引接せむと思ふ

〔殘缺十八〕 十一日に上人端坐合掌して高聲念佛を、

人々にすゝむとていはく、此佛を恭敬し名號を唱えん人、一人も不空と云て、彌陀の功德を種々に讚嘆し給。

彌陀常に響向し給う、弟子等不拜哉云々其後廿日より念佛高聲ねんごろ也。助音の人々にはをのづから音を肆にすといへども、上人の音聲はます／＼盡虚空法界

にも響覽。抑今日よりさき七八年のそのかみ、ある雲衆徒客朝臣 夢に上人の往生のゆうへ光明遍照の四句の偈を

唱べしと、告を蒙しのち、今この文唱て、廿四日より

廿五日の午の正中にいたるまで念佛高聲にして、如夢文を誦し給事、時に此の夢にかなゑり。天日光明を絶す、觀音の照臨本り新たなりといへども、紫雲空にぞたなびく、勢至の迎接をりをゑたり。爰に音樂窓に（歸佛） 跏法の耳をそばだて、異香室に満てり。信男

信女の袖をふる間に、慈覺大師付屬の法衣着して頭北西面にして念佛數遍唱給て之後、一の息はとゞまるといへども、兩眼瞬か事く、手足ひゑたりといへども、

臂舌を動す事數返也 行年四十三ヨリ毎日十萬返于今無退轉云々

法然上人臨終、三尊來迎、寶炭翁紫雲を見るの圖

（圖中の交名―右上より―と詞） 法印聖覺、熊替、權律師隆寛、兵部卿基親朝臣、證空聖人、前權右大辨藤原兼隆朝臣、定生坊、空阿、（上人）信空聖人、大和守見佛、勢觀房

一一光明遍照十方世界、念佛衆生、攝取不捨唱給。

南无阿彌陀佛

兼日に往生の告を蒙人／＼前權右大辨藤原 兼隆中宮大進云朝臣